人間臨終図巻

上巻

山田風太郎

人間臨終図巻

上巻

山田風太郎

人間臨終図巻

上巻

山田風太郎

徳間書店

ISBN4-19-123320-3 C0095 ¥2400E(0) 定価＝2400円

人間臨終図巻

上巻

山田風太郎

徳間書店

人間臨終図巻〈上巻〉／山田風太郎

この人々は、あなたの年齢で、こんな風に死んだ!

死を怖れ、死に苦しむものは、あなただけではない。この地上に生きた英雄、武将、政治家、作家、芸術家、芸能人、さらに犯罪者たちが示す人間ラストの真の様相!

15歳——64歳で死んだ人々

徳間書店　定価/2400円

山田風太郎

徳間書店

■十代で死んだ人々
大石主税　アンネ　天草四郎　藤村操　山口二矢　ジャンヌ・ダルク　他

■二十代で死んだ人々
沖田総司　ジェームス・ディーン　沢村栄治　石川啄木　高杉晋作　夏目雅子　吉田松陰　他

■三十代で死んだ人々
源義経　キリスト　モーツァルト　芥川龍之介　マリリン・モンロー　太宰治　他

■四十代で死んだ人々
国定忠治　プレスリー　植村直己　三島由紀夫　ケネディ　聖徳太子　夏目漱石　他

■五十代で死んだ人々
西郷隆盛　シェクスピア　向田邦子　魯迅　ヒトラー　大松博文　溝口健二　山本五十六　他

■六十歳から六十四歳で死んだ人々
ジンギスカン　日蓮　森鷗外　空海　川上宗薫　豊臣秀吉　平清盛　尾上菊五郎・六代目　他

〈十五歳から六十四歳まで〉取り上げた人々・四七三名

下巻《六十五歳から百代で死んだ人々》

人間臨終図巻

上巻

山田風太郎

徳間書店

この門を入る者一切の望みを捨てよ

——ダンテ『神曲・地獄篇』——

人間臨終図巻　上巻

人間臨終図巻　上巻――目次

▼十五歳――六十四歳で死んだ人々▲

十代で死んだ人々

八百屋お七　一
大石主税　一
アンネ　二
森　蘭丸　二
天草四郎　三
藤村　操　三
山口二矢　四
ジャンヌ・ダルク　五
中山忠光　六
大山信子　六
愛新覚羅慧生　六

二十代で死んだ人々

田中新兵衛　七
楠木正行　八
豊臣秀頼　八
赤木圭一郎　八
藤田小四郎　九
村山槐多　九
姉小路公知　一〇
沖田総司　一〇
樋口一葉　一一
滝廉太郎　一二
ジェームス・ディーン　一二
橋本左内　一三
難波大助　一四
雲井竜雄　一五
北村透谷　一六
石川啄木　一七
山崎晃嗣　二〇
源　実朝　二〇
大塔宮護良親王　二一
豊臣秀次　二一
沢村栄治　二二
高杉晋作　二三
夜嵐お絹　二四
伊藤野枝　二四
円谷幸吉　二五
夏目雅子　二六
吉田松陰　二七
相楽総三　二八
高橋お伝　二九
青木　繁　三〇
山中貞雄　三一
飯沼正明　三三
森　恒夫　三四

三十歳で死んだ人々

木曾義仲　三五
源　義経　三六
北条高時　三七
天一坊　三七
エミリー・ブロンテ　三八
管野すが　三八
佐伯祐三　三九
小林多喜二　四〇
中原中也　四二

三十一歳で死んだ人々

ネ　ロ　四三
源　為朝　四四
シューベルト　四四
和の宮　四五

高山樗牛　四五
佐久間勉　四六
ヴァレンチノ　四七
園井恵子　四七
三遊亭歌笑　四九
梅川昭美　四九

三十二歳で死んだ人々

キリスト　五二
坂本竜馬　五二
ジプシー・ローズ　五三
若松善紀　五四

三十三歳で死んだ人々

アレキサンダー大王　五五
北条時宗　五六
清河八郎　五七
松井須磨子　五七
永野一男　五八

三十四歳で死んだ人々

浅野内匠頭長矩　六〇
近藤　勇　六〇
土方歳三　六一
織田作之助　六一
山口良忠　六三
ガガーリン　六三

三十五歳で死んだ人々

モーツァルト　六四
ダントン　六五
鼠小僧次郎吉　六五
孝明天皇　六六
佐々木只三郎　六六
正岡子規　六七
芥川龍之介　六八
牧　逸馬　七〇

三十六歳で死んだ人々

お市の方　七一
石川五右衛門　七一
細川ガラシヤ　七二
ロベスピエール　七二
バイロン　七三
尾崎紅葉　七四
広瀬武夫　七五
長塚　節　七六
モディリアニ　七六
マリリン・モンロー　七七

三十七歳で死んだ人々

楊　貴妃　七八
俊　寛　七九
ラファエロ　八〇
荒木又右衛門　八〇
笹川繁蔵　八〇
ビゼー　八一
ゴッホ　八一
ロートレック　八二
斎藤緑雨　八三
国木田独歩　八四
菱田春草　八五
フットレル　八五
高見沢遠治　八六

沢田正二郎　八八
宮沢賢治　八八
関屋敏子　九〇
ジェラール・フィリップ　九一

三十八歳で死んだ人々

マリー・アントアネット　九三
プーシュキン　九四
メンデルスゾーン　九五
島田虎之助　九五
大杉　栄　九六
岸田劉生　九七
市川雷蔵　九七
小原　保　九八
児玉隆也　一〇〇

三十九歳で死んだ人々

クレオパトラ　一〇一
蒲生氏郷　一〇一
パスカル　一〇二
ルイ十六世　一〇二
ショパン　一〇三
シャーロット・ブロンテ　一〇四
横川省三　一〇五
太宰　治　一〇六
力道山　一〇九

四十歳で死んだ人々

石田三成　一一〇
中江藤樹　一一一
ウェーバー　一一一
ポー　一一二
国定忠治　一一三
江藤新平　一一三
幸徳秋水　一一四
山本宣治　一一五
正田　昭　一一六
高橋和巳　一一八
ジョン・レノン　一二〇

四十一歳で死んだ人々

マジェラン　一二二
今川義元　一二三
小栗上野介　一二三
河井継之助　一二四
マタ・ハリ　一二五
カフカ　一二五
尾崎放哉　一二六
九条武子　一二八
葛西善蔵　一二九
速水御舟　一三〇
石田吉蔵　一三一
川島芳子　一三三
アベベ　一三四
大久保清　一三五

四十二歳で死んだ人々

楠木正成　一三七
森　有礼　一三八
上田　敏　一四〇
プレスリー　一四〇

四十三歳で死んだ人々

柳生十兵衛　一四一

ゴーゴリ　一四一
川路利良　一四三
モーパッサン　一四三
桃中軒雲右衛門　一四四
滝田樗陰　一四五
若山牧水　一四五
直木三十五　一四七
塚越賢爾　一四八
西　竹一　一四八
田宮二郎　一四九
植村直己　一五〇

四十四歳で死んだ人々

大石内蔵助　一五二
市川団十郎・初代　一五三
大塩平八郎　一五三
木戸孝允　一五四
スティヴンソン　一五四
ワイルド　一五五
チェホフ　一五六
大石誠之助　一五八
スコット　一五八
サン＝テグジュペリ　一五九
小平義雄　一六〇
坂本　九　一六一

四十五歳で死んだ人々

ヨハン・シュトラウス・父　一六二
井伊直弼　一六三
大村益次郎　一六三
二葉亭四迷　一六四
ラスプーチン　一六五
有島武郎　一六六
ローレンス　一六七
小栗虫太郎　一六八
梅原北明　一六九
三島由紀夫　一六九
梶山季之　一七一
江利チエミ　一七二

四十六歳で死んだ人々

ザヴィエル　一七三
山田長政　一七四
由比正雪　一七四
高山彦九郎　一七五
高野長英　一七五
シューマン　一七六
ボードレール　一七七
伊丹万作　一七八
原　民喜　一七九
ケネディ　一八〇

四十七歳で死んだ人々

ネルソン　一八二
新島　襄　一八三
川上音二郎　一八三
大正天皇　一八四
小山内薫　一八四
アラビアのロレンス　一八五
夢野久作　一八六
コルベ神父　一八七
カミュ　一八八

四十八歳で死んだ人々

聖徳太子　一八九
上杉謙信　一八九
織田信長　一九〇
真田幸村　一九〇
淀　君　一九〇
渡辺崋山　一九一
大久保利通　一九二
三木　清　一九三
カポネ　一九三
下山定則　一九五
林芙美子　一九五
寺山修司　一九六

四十九歳で死んだ人々

秦の始皇帝　一九八
加藤清正　一九八
藤田東湖　一九九
島津斉彬　一九九
唐人お吉　二〇〇
伊藤左千夫　二〇一
夏目漱石　二〇二
ゾルゲ　二〇五
マーガレット・ミッチェル　二〇六
堀　辰雄　二〇七
坂口安吾　二〇八
山下　清　二〇九

五十歳で死んだ人々

足利義満　二一〇
芭　蕉　二一一
マラー　二一二
西郷隆盛　二一三
ニコライ二世　二一四
秋山真之　二一五
島木赤彦　二一六
竹久夢二　二一七
岡本かの子　二一九
梅崎春生　二一九

五十一歳で死んだ人々

後醍醐天皇　二二一
井原西鶴　二二一
キャプテン・キッド　二二二
平賀源内　二二三
バルザック　二二三
マ　ネ　二二四
岩崎弥太郎　二二四
星　亭　二二五
岡倉天心　二二五
プルースト　二二七
宮崎滔天　二二七
リルケ　二二八
マキノ省三　二二八
永田鉄山　二二九

五十二歳で死んだ人々

源　頼朝　二三〇
武田信玄　二三一
シェクスピア　二三二
原田甲斐　二三三
フィヒテ　二三三
ナポレオン　二三三
頼　山陽　二三五

山岡鉄舟　二三六
ヴェルレーヌ　二三六
フーディニ　二三八
野口英世　二三八
蓑田胸喜　二四〇
宮本百合子　二四一
阪東妻三郎　二四二
向田邦子　二四二

五十三歳で死んだ人々

諸葛孔明　二四三
道　元　二四四
足利尊氏　二四五
池　大雅　二四五
喜多川歌麿　二四五
為永春水　二四六
緒方洪庵　二四六
佐久間象山　二四六
チャイコフスキー　二四七
陸奥宗光　二四七
花井お梅　二四八
河合栄治郎　二四九
ロンメル　二五〇
ゲーリング　二五一
ベーブ・ルース　二五三
フェルミ　二五三
火野葦平　二五四
厳本真理　二五五
グレース・ケリー　二五六
有吉佐和子　二五七

五十四歳で死んだ人々

太田道灌　二五八
足利義政　二五九
デカルト　二五九
中江兆民　二六〇
ラフカディオ・ハーン　二六二
児玉源太郎　二六三
吉田東伍　二六三
レーニン　二六四
鈴木三重吉　二六五
北　一輝　二六七
栗林忠道　二六八
大西滝治郎　二六九
甘粕正彦　二七〇
近衛文麿　二七一
ヴィヴィアン・リー　二七三

五十五歳で死んだ人々

林　子平　二七四
山東京伝　二七四
ゴーギャン　二七五
フェノロサ　二七七
明石元二郎　二七八
張　作霖　二七九
魯　迅　二七九
国枝史郎　二八〇
伊藤整一　二八一
久生十蘭　二八二
大川橋蔵　二八三

五十六歳で死んだ人々

ダンテ　二八四
明智光秀　二八四

三浦按針 二八五
柳沢吉保 二八五
リンカーン 二八六
ニーチェ 二八六
小村寿太郎 二八七
ドビュッシー 二八八
マックス・ウェーバー 二八八
萩原朔太郎 二八九
ヒトラー 二九一
アイヒマン 二九二
市川団十郎・十一世 二九三
双葉山 二九四
吉田 満 二九四
越路吹雪 二九五

五十七歳で死んだ人々

ベートーヴェン 二九六
水野忠邦 二九七
パークス 二九八
寺田寅彦 二九八
北原白秋 三〇〇
中野正剛 三〇二
南雲忠一 三〇三
安達二十三 三〇四
大松博文 三〇五

五十八歳で死んだ人々

シーザー 三〇六
杜 甫 三〇七
菅原道真 三〇七
マキャヴェリ 三〇八
黒田如水 三〇九
尾形光琳 三〇九
岩倉具視 三一〇
黒岩涙香 三一二
種田山頭火 三一三
阿南惟幾 三一四
溝口健二 三一五
高見 順 三一七
中川一郎 三一九

五十九歳で死んだ人々

司馬 遷 三二〇
モンテーニュ 三二〇
クロムウエル 三二一
スタンダール 三二二
柳亭種彦 三二三
ハイネ 三二四
コント 三二四
フローベール 三二五
マゾッホ 三二六
孫 文 三二七
徳冨蘆花 三二八
田山花袋 三二九
ジョイス 三三〇
山本五十六 三三〇
中里介山 三三一
本間雅晴 三三二
徳田球一 三三三
辻 政信 三三四
五味康祐 三三五

六十歳で死んだ人々

ジンギスカン 三三六
日蓮 三三七
コロンブス 三三七
水戸斉昭 三三八
横井小楠 三三九
リヴィングストン 三三九
ドストエフスキー 三四一
スメタナ 三四一
クラーク博士 三四二
狩野芳崖 三四三
黒田清隆 三四三
明治天皇 三四四
森鷗外 三四七
辻潤 三五一
木下杢太郎 三五二
菊池寛 三五三
石原莞爾 三五四
ゲーリー・クーパー 三五六
小津安二郎 三五六
谷内六郎 三五八
戸川猪佐武 三五九

六十一歳で死んだ人々

マホメット 三六〇
李白 三六一
空海 三六二
藤原道長 三六二
鴨長明 三六二
柴田勝家 三六三
宮本武蔵 三六四
吉良義央 三六四
ヘーゲル 三六五
千葉周作 三六七
安藤広重 三六七
ミレー 三六八
三遊亭円朝 三六九
内田魯庵 三七〇
浜口雄幸 三七一
トロツキー 三七二
ツヴァイク 三七三
山下奉文 三七四
木村艸太 三七六
溥儀 三七七
柴田錬三郎 三七七
福永武彦 三七八
川上宗薫 三七九

六十二歳で死んだ人々

アリストテレス 三八一
玄奘三蔵 三八二
斎藤道三 三八二
豊臣秀吉 三八三
荻生徂徠 三八五
メンデル 三八五
ゾラ 三八六
ラヴェル 三八七
ムソリーニ 三八八
三浦環 三九〇
宮城道雄 三九一
浅沼稲次郎 三九二
ヘミングウェイ 三九三
西東三鬼 三九三
中谷宇吉郎 三九四

椎名麟三 三九五
森　雅之 三九六
朴　正熙 三九六
有馬頼義 三九七

六十三歳で死んだ人々

平　清盛 三九八
高山右近 三九九
ルーベンス 三九九
レンブラント 四〇〇
徳川綱吉 四〇一
ノーベル 四〇一
ドヴォルザーク 四〇二
ストリンドベリ 四〇三
乃木希典 四〇三
豊田佐吉 四〇四
巌谷小波 四〇五
野口雨情 四〇六
ルーズヴェルト 四〇六
藤原審爾 四〇八

六十四歳で死んだ人々

小林一茶 四〇九
ペルリ 四一一
ブラームス 四一一
ベルツ 四一二
与謝野晶子 四一三
東条英機 四一三
尾上菊五郎・六代目 四一五
岸田国士 四一六
大河内伝次郎 四一七
三好達治 四一七
山本周五郎 四一八
伊藤　整 四二〇
高橋　鉄 四二二
檀　一雄 四二三
武田泰淳 四二四

付・人名索引

装丁　矢島高光

人間臨終図巻　上巻

本書の死亡年齢について

日本では古来〝数え式〟をもってし、西洋では満年齢をもってするが、とりあげた人物中、生歿年月日が不明ないし不正確なものがあり、かつ日本人で明治人の場合、明治五年に陰暦から陽暦に切り換わったこともあり、また外国でも、時代や国によって暦法が違うなどのことがあるので、本書では統一上、一律に西暦歿年次から西暦生年次を引いたものを死亡年齢とした。したがって、表記の年齢は、数え式より一歳少なく、満年齢式より一歳多くなる場合がある。

十代で死んだ人々

知らず、生まれ、死ぬる人、いずかたより来りて、いずかたへか去る。

——鴨長明『方丈記』——

八百屋お七（一六六八——一六八三）十五歳

本郷の八百屋の娘お七は、天和二年の暮に家が類焼して、一家が知り合いの吉祥寺という寺に数日避難している間に、寺小姓の吉三郎と恋をしたが、二人の仲は裂かれた。そこで天和三年の春、お七はもういちど吉三郎に逢いたいために、こんどは自分で放火してつかまり、三月二十九日、鈴ヶ森で火あぶりの刑に処せられた。

徳川時代は数え年十六歳から成年であった。西鶴の『好色五人女』や、紀海音の『八百屋お七歌祭文』では、お七が罪を犯したのが十五歳とし、一歳の差で生死をわけたという趣向にしたが、天和三年お七は数え年十六歳であったから処刑されたのである。ただし、この若さで火あぶりの刑になったのは、徳川時代でも前代未聞のことであった。

大石主税（一六八八——一七〇三）十五歳

『堀内伝右衛門覚書』には、「……なかんずく大石主税殿と申し候は、若年に御座候えども大男大力にて」とある。

討入り後、父と別れて松平隠岐守邸に預けられるとき、父の内蔵助が、「かねがね申し聞かせてあるようにいたせ」といったのに対し、

「父上、御心配なく」と、答えた。

翌元禄十六年二月四日午後四時ごろ、切腹の呼び出しを受けたとき、堀部安兵衛が、「拙者もただいま」と、声をかけた。主税はにっと笑って、死の座へ出ていった。

このとき検使の席にあった松平隠岐守が、万感迫った顔で、

「主税、内蔵助に会いとうはないか」

と、きいたところ、主税は首をかしげ、すずしくほほえ

んで、
「お言葉で思い出しました」
と、いった。
次々に死を待つ同志の中で、ひとり憂わしげな顔をしていた大高源吾は、この年少の副頭領の最期が、「おみごとなものでござった」という報告を受けると、みるみるはれやかな表情になったという。
万人が知っている名のうち、みずから意志して死の道を選んだ最年少の人間はこの大石主税であろう。

アンネ（一九二九——一九四五）十六歳

一九四二年、ナチスのユダヤ人迫害からのがれたアンネ・フランクの一家は、二年間アムステルダムの隠れ家にひそみ、アンネはその間、いたましい『アンネの日記』を書きつづったが、ついに一家は発見され、それぞれ収容所へ送られた。
一九四四年十月三十日、マルゴットとアンネの姉妹は、ベルゲン・ベルゼンの収容所に移された。……一九四五年二月、二人ともチフスにかかった。マルゴットは、アンネの上の段の寝床に寝ていたが、ある日彼女は起き上ろうとして、床に落ちてしまった。すでに衰弱し切っていた彼女は、ショックのために死んだ。
姉の死で、アンネの気力はがっくり挫けた。マルゴットの屍体が運び去られるのを見たアンネは、ベッドの中で顔をあげてつぶやいた。「お父さんもお母さんももう死んでいるにちがいないし、これでわたしは家に帰る目的がなくなったわ」
それから数日後、連合軍の部隊がすでにフランクフルトにはいっていた三月はじめのある日、アンネは蠟燭の灯の消えるように、しずかに息をひきとった。（皆藤幸蔵訳『アンネの日記』より）

森　蘭丸（一五六五——一五八二）十七歳

信長の寵童。
天正十年六月二日未明、明智光秀は本能寺を襲撃した。
「これは謀叛か、いかなる者の企てぞと御諚のところに、森乱申すように、明智が者と見え申し候と言上候えば、是非に及ばずと上意候」（『信長公記』）
蘭丸は弟坊丸らとともにたたかって、炎の中で討死した。巷説によれば、彼を討った者は明智三羽がらすの一人安田

作兵衛という者で、この安田は後年天野源右衛門と改名し、筑後柳川の荒大名立花宗茂に仕え、朝鮮役碧蹄館で明軍を破った豪傑だから、これがほんとうなら森蘭丸もって瞑すべし。

天草四郎（一六二一——一六三八）十七歳

寛永十四年の秋に、虐政によって勃発した島原の百姓一揆は、幕府軍十二万四千をもってしても、一揆軍の立てこもった原城を陥れるのに足かけ五カ月を要し、老中松平伊豆守信綱みずから出動するほどの大乱となったが、痩せ衰えた百姓軍がこれほど驚くべき抵抗を示した原動力の一つは、切支丹信仰と、その首領であり、シンボルである天草四郎時貞という少年への信仰のゆえであった。
しかしその原城もついに翌寛永十五年二月二十八日に陥落し、城兵は文字通り全滅した。四郎はすでに手を負って死んでいたのを、細川家の侍、陣佐左衛門という侍が首をとったといわれる。
四郎の母、教名マルタは前から幕府方に捕えられていたが、このとき城から運ばれてきた四郎と同じ年ごろの少年の首をいくつか見せられても、「四郎は天から遣わされた子です。どうして首をとられることがありましょう。きっと天に昇ってしまったか、南蛮にのがれていったに相違ございません」と首をふっていたが、佐左衛門の持ってきた首を見ると、「やれ、こんなに痩せてしまったか、可哀や、さぞ苦労したことであろう」と、その首を抱きしめて泣いた。それではじめて天草四郎の死が確認されたといわれる。
彼の首は長崎へ送られて、さらし首になった。
幕府が一揆方の記録をすべて抹殺したために、天草四郎の名は伝説の世界の妖星のような印象を残したが、彼が実在してこれほどの大乱の中心人物であったことは事実である。

藤村　操（一八八六——一九〇三）十七歳

明治三十六年五月二十三日、美少年の一高生藤村操は、日光華厳の滝の落口ちかい大樹を削って、
「巌頭の感」
「悠々たる哉天壌、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲学竟に何等のオーソリチーに価するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉す。曰く『不可解』我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至

る。既に巌頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを」

と墨書して、滝壺に投身自殺した。

この報を聞いて、一高の英語講師夏目金之助は、生徒に、「君、藤村はどうして死んだのだい？」と、不安そうに尋ねた。それは、その一週間ほど前、二度も藤村が訳読して来ないことに夏目講師が立腹して、「勉強する気がないなら、もう教室へ出て来なくてもいい」と叱責したことを思い出して狼狽したからであった。

この遺書を読んで、東大哲学教授井上哲次郎は、「ホレーショの哲学などたいしたものではない」といって、笑いものになった。ホレーショとは『ハムレット』中に出て来るハムレットの友人の名だからであった。

しかしこの遺書とその死は、当時のみならずその後数十年にわたって、内省的な青年たちに甚大なる感動を与えた。それは日本ではじめて、人生の意味を求めて自殺した若者に対するショックのゆえであった。一高で一クラス上の岩波茂雄は「青天の霹靂の如く荘厳剴切なる大文字」と評し、この「巌頭の感」を読んでは泣き、読んでは泣き、岩波も自殺するのではないか、と友人の阿部次郎や安倍能成を心配がらせたほどであった。

山口二矢（一九四三――一九六〇）十七歳

小説家村上浪六を母方の祖父に持つ山口二矢は、昭和三十四年十六歳のとき、赤尾敏の大日本愛国党に入党したが、社会党委員長浅沼稲次郎が同年中国を訪問し、「アメリカ帝国主義は日中共同の敵」と演説したのを中国に媚びたものと憤激し、昭和三十五年十月十二日午後三時過ぎ、日比谷公会堂での三党首立会い演説会で演説中の浅沼を、短刀で一閃のもとに刺殺した。

このとき飛び出した丸の内署の一刑事は夢中で二矢の短刀をつかんだ。二矢が引けば、指はみんな落ちてしまう。一瞬眼が合った。そのとき二矢の眼もとが笑い、彼の方から短刀を離したという。「こういうことがなければ、山口はその短刀でその場で自決していたにちがいない」とその刑事は語った。

警視庁に収監された二矢は、取調べに対して、自分一人の考えでやったことだと明言し、その態度のいさぎよさと沈着ぶりに、係官は舌をまいた。

取調べのないときは、雑居房で座禅をくみ、粗末な食事を合掌して食べ、朝はいつも皇居に向って礼拝した。

十一月二日、身柄を練馬の少年鑑別所に移された夜、彼は東寮二階第二号室のシーツを裂いて縄とし、天井の裸電球をつつむ金網にかけ、ベッドの上に寝具を積んで、これを踏台として縊死した。発見されたのは午後八時半であった。

コンクリートの壁に、粉歯磨を水でとき、指を筆にして書いた、

「七生報国
天皇陛下万才」

という文字が残されていた。彼は戦争中の少年が、十五年を経て不死鳥のごとくよみがえったかのような少年であった。

ジャンヌ・ダルク（一四一二――一四三一）十九歳

英仏百年戦争の後半、救国の神託を受けたと信じた十六歳の少女ジャンヌ・ダルクは、白馬にまたがってフランス軍の陣頭に立ち、英軍を撃破し、一四二九年オルレアンを奪還したが、その翌年五月、戦闘中に捕虜となった。

翌一四三一年五月、ルアンの牢獄からひき出されたジャンヌは、サン・トゥァン墓地で魔女狩り裁判にかけられた結果、五月三十日朝、ルアンのヴィユ・マルシェ広場で、群衆の見物する中で火刑にかけられた。

薪や炭を積んだ高い火刑台の上に縛りあげられた彼女の胸には、

「ジャンヌこと自称『乙女』
虚言者、毒婦
世人をまどわせた女、巫女
妄信者、神をけがせし女
驕慢の者、イエス・キリストを誤信せし者
増上慢、偶像崇拝、残虐淫乱の女
悪魔の祈禱師、背教、離教、異端の者
邪宗の女」

と、書いた札がさげられていた。

火刑のあと、灰の中から薔薇色の心臓が一つ出て来て、どうしても焼けず、火刑執行人は持て余してセーヌ川に投げ込んだという伝説がある。

日本では室町時代、足利義教のころ。

中山忠光（一八四五――一八六四）十九歳

文久三年八月から九月にかけてのいわゆる「天誅組」の変に敗れ、大和から長州へ逃亡したその首領、白面の貴公子中山忠光は、長州の「招かれざる客」として、長藩内の西の果ての山間を転々と移動させつつかくまわれていたが、翌元治元年七月、長藩が、外に馬関戦争に敗れ、内に禁門の変に敗れ、攘夷派の潰滅期にはいるや、長藩はこの厄介者を処置せざるを得なくなった。

田耕村の一農家に、妊娠中の侍女恩地登美その他十人ほどの付添いとともに暮していた忠光は、十一月九日夜おびき出され、近くの寺へ向う途中、山中で長藩の五人の刺客に襲われた。提灯を持っていた庄屋の幸八がふいに駆け出したあと、棒で足を払われ、田圃に転落したところを刺客たちに押えつけられ、絞殺された。

あとに残された恩地登美のところへ戻って来た庄屋幸八の顔に血の気はなく、問いかけられても口がきけず、水をやっても手が震えて飲むことが出来なかったという。

長藩は長くこのことを秘した。明治天皇は彼の姉の子である。

大山信子（一八七七――一八九六）十九歳

大山巌の長女。明治二十六年、十七歳で子爵三島通庸の長男弥太郎と結婚したが、肺結核のため、七カ月後に離婚。明治二十九年五月二十一日、実家の大山邸の隔離病棟で薄幸の人生の幕を閉じた。

その前、見舞いに来た客に、「もうもうわたし、二度と女になんぞ生まれて来たくありません」と、つぶやいたという話を、徳富蘆花が明治三十一年夏に耳にし、彼女をモデルにして、三十一年十一月から「国民新聞」に『不如帰』の連載がはじまった。

愛新覚羅慧生（一九三八――一九五七）十九歳

元満州国皇帝の弟愛新覚羅溥傑を父とし、嵯峨侯爵の娘を母とし、学習院大学生であった慧生は、同級の青森県八戸出身の大久保武道と恋愛した。優雅で快活な慧生は、武骨で求道的な大久保を、はじめ、からかい気味であったが、しだいにひきずられ、ついに大久保の、「人生をごまかして生きるより、清らかに死ぬほうが立派だ」という考えに

同意するに至り、昭和三十二年十二月四日家出をした。

二人は貯金をおろし、大久保はエンゲージリングを買い、慧生に与えて伊豆に向った。しかし、四日夜、伊東温泉の福住旅館に泊ったとき、二人の寝所は別々であった。翌五日、二人は天城へ向った。

五日、慧生が事前に投函した手紙が母、浩のもとへとどき、二人が心中の目的で伊豆へ出発したということが判明し、関係者、同級生などの捜索隊が伊豆へ向い、十日、天城山八丁池に近い草むらの中の百日紅の木の下で、二人の死体を発見した。大久保が慧生をピストルで射殺したあと、自分も同じピストルであとを追ったものと思われた。

湯ヶ島に運ばれ荒筵の上に横たえられた大久保は、右のこめかみに弾丸のあとをとどめた精悍な顔で死んでおり、左のこめかみを射たれた慧生は、左の眼だけ半分あけ、その指にはエンゲージリングがひかっていた。

死後、前年からの二人の交わした手紙が発見され、これが世にも純粋な美しい恋愛と心中であることが知らされた。これこそまさに戦後の「天国に結ぶ恋」であった。

二十代で死んだ人々

死をはじめて想う。それを青春という。

――山田風太郎――

田中新兵衛（一八四三――一八六三）二十歳

若年にして、文久年間の京洛のテロの嵐にほとんど関係したといわれる薩摩出身の暗殺者。示現流の名手といわれ、人斬り新兵衛とも呼ばれた。

文久三年五月二十日の姉小路公知暗殺に関し、現場に残された刀が田中のものといわれ、五月二十六日、京都町奉行所に召喚され、訊問中、突如脇差で割腹し、返す刀でのどを突いて自殺した。

しかし、彼は真犯人ではなかったが、数日前、料理屋で刀をすりかえられたのを恥じて右の罪をかぶったものともいわれる。

楠木正行（一三二六―一三四八）二十二歳

「青葉茂れる桜井の
里のわたりの夕まぐれ……」（小学唱歌集）

延元元年、湊川にむかう父正成と桜井の駅で別れたとき、正行は数えで十一歳であった。

成長後正行は父の遺訓を守ってしばしば足利勢と戦ったが、正平三年一月、吉野の後醍醐天皇陵の如意輪堂の板壁に、

「返らじとかねて思へば梓弓亡き数に入る名をぞとどむる」

と書きのこし、死を決して敵の大軍に駈け向った。

「あなものものし八万騎
大将師直いづくにか……」（小学唱歌集）

一月五日、四条畷の戦いで、敵将高師直の本陣まで迫ったが、衆寡敵せず、「正行は左右の膝口三所、右の頬先、左の目尻、篦深に射られて、その矢、冬野の霜に臥したるがごとく折懸けたれば（中略）今はこれまでぞ、敵の手にかかるなとて」（『太平記』）弟の正時と刺しちがえて死んだ。

豊臣秀頼（一五九三―一六一五）二十二歳

慶長十六年、十八歳の秀頼は、二条城で家康と会見した。この会見で家康は、これが徳川家の未来に不安をいだかせるほどの若者であることを確認したものと思われる。

四年後の元和元年五月一日、彼は母淀君とともに大坂城の炎の中に死んだ。あまりにその死を悲劇的なものに感じた民衆の間から、秀頼は薩摩に逃げたという伝説が生じた。

赤木圭一郎（一九三九―一九六一）二十二歳

昭和三十六年二月十四日、日活映画「激流に生きる男」に主演撮影中、セールスマンが持って来たゴーカートに試乗、普通車と逆についていたブレーキを踏みちがえて作業場の鉄扉に激突、一週間昏睡状態の後、二十一日午前七時五十分死亡。

死後あと追い自殺をした少女ファンが出たほど人気が高

まり、それが長くつづいた点で日本のジェームス・ディーンといわれた。

藤田小四郎（一八四二―一八六五）二十三歳

元治元年春、幕府に攘夷を促すためのデモンストレーションとして、水戸天狗党をひきいて筑波山に旗揚げした藤田小四郎は、若年寄田沼玄蕃頭の幕府討伐軍と戦うこと半歳、ついに敗れて、自分たちの素志を訴えんがために、約千人の隊士とともに那珂湊から上洛の途についた。途中戦いつつ、五十日を費して日本中央部の山岳地帯を踏破し、越前新保までたどりついたところを、待ち受けていた田沼にとらえられ、翌年二月四日、主将武田耕雲斎らとともに敦賀で斬首された。

そのとき小四郎は、文天祥の『正気の歌』を吟じて斬られたという。

村山槐多（一八九六―一九一九）二十三歳

いつでも一ぱい汗をかいている肉塊槐多
五臓六腑に脳細胞を遍在させた槐多
強くて悲しい火だるま槐多
――高村光太郎『村山槐多』――

絵と詩に異常に強烈な天才を蔵した村山槐多は、女を見れば恋し、失恋し、酒とデカダンスにおちいり、また貧しさと肺病のためにみじかい一生をのたうちまわった。

死の前年、彼の才能を惜しむ人々のおかげで、やっと代々木村に一軒のあばら屋を与えられ、彼は虫が知らせるかのように絵をかきまくった。

大正八年二月、彼はそのころ日本に大流行していたスペイン風邪にかかり、発熱して寝こんだ。

二月十八日午後、彼を見舞った友人の山本二郎は記す。

「彼の家は火の気がない。粗雑な家の常として、隙間漏る風が室内をも戸外の様に寒むくしている上に、槐多の夜具は上下二枚しかないのである。その一枚の掛蒲団は綿が周囲に塊まって、真中は袷になってしまっている」

山本をこの蒲団の中で迎えた槐多は、「君、この上は松坂屋だろう。さっきから女給連が騒いでしょうがないんだ。ちっと静かにさせてくれないか」と、トタン屋根を雨音が打つ天井をあおいで、こんな妙なことをいった。

その夜九時ごろ、近所の大工が山本の家にやってきて、槐多が外へ飛び出したむね注進した。

外はみぞれまじりの嵐になっていて、一帯停電し、まったくの闇黒であった。探し歩く山本の傘は、風のため骨だけになった。
午前二時ごろになって、畑の中で倒れている槐多がやっと見つかった。
家に運ばれた彼は、意識をとりもどすと、またはね起きて外へ飛び出そうとした。
とりおさえられた彼は、しきりにうわごとをいった。その中に、「お玉さん、美しいお玉さん」という言葉が聞えた。それはかつて彼が恋し、失恋したモデルの娘の名であった。
二十日の午前二時三十分、彼は息をひきとった。死因は流行性感冒による結核性肺炎、ということになったが、これはほとんど自殺にちがいない。

姉小路公知（一八三九――一八六三）二十四歳

公卿にして暗殺された珍しい例。若年ながら攘夷の旗がしらとして活動した彼は、文久三年五月二十日夜半、宮中での会議をおえて帰邸の途、朔平門外で三人の刺客に襲われた。彼は扇を持って闘い、ついには敵の一人の刀を奪って暗殺者たちを逃亡させたが、頭と胸に重傷を受け、帰邸後、翌日未明落命した。
その奪った刀が薩摩作りで、それを見た者が「これは薩摩の田中新兵衛の刀だ」と証言したことから、人斬り新兵衛の自殺に至ることになる。犯人不明、従って動機もまた不明だが、おそらく攘夷のホープたる公知が、勝海舟らによって開国に目覚めかけたのを怖れた向きからの魔手と思われる。

沖田総司（一八四四――一八六八）二十四歳

池田屋斬り込みで、喀血しながら敵を斬ったといわれる新選組一番隊長の沖田は、近藤勇らとともに江戸へ逃げたあと、知り合いの千駄ヶ谷の植木屋平五郎というものの納屋に潜伏していたが、明治元年五月三十日、肺病のためこの納屋の中で死んだ。
子母沢寛の『新選組始末記』には、沖田がこの植木屋の庭に来ていた猫を斬ろうとして、二日つづけて失敗し、三日目、「ばアさん、あの黒い猫は来てるだろうかなア」といって息をひきとったことが記されている。創作としても、この若い病剣士の最期を象徴する実にうまい挿話である。

同じ年の四月二十五日、すでに近藤勇も斬られている。

樋口一葉（一八七二――一八九六）二十四歳

前年「文学界」に連載された『たけくらべ』を、金に困った一葉は、出版社の社長大橋乙羽に頼んで、明治二十九年五月「文芸倶楽部」に一括して再掲載してもらった。連載中はさして評判にもならなかったこの作品は、鷗外から「われは縦令世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人という称をおくることを惜しまざるなり」、露伴から「多くの批評家多くの小説家に、此あたり文字五六字ずつ技倆上達の霊符として呑ませたきものなり」という絶賛を受け、俄然一葉は一朝にして不朽の名を得ることになった。
しかし彼女はすでに胸を病んで、その年のうちにこの世を去る運命にあった。のちに正宗白鳥は書く。「この一篇を残し得ないで死んでいたなら、彼女の名声に大関係を及ぼしたのである。危いところであった」
その年、十一月三日、彦根中学教師馬場勝弥（孤蝶）は、上京のついでに、丸山福山町の樋口一葉を見舞った。
一葉は髪が乱れたままで寝ていた。頬には異様な赤味があった。
馬場は、「冬休みにまた上京しますから、そのときまた参りましょう」といった。すると一葉は、苦しそうな声でうめくように、「その時分には、私は何になっていましょう、石にでもなっていましょうか」と、切れ切れにいった。
二十日後の十一月二十三日、彼女は死んだ。
露伴はいう。「惜しい哉、一葉が卵殻を出て一葉になってから、即ち一葉が一葉になってから生存した歳月は余りに短かった。其の難治の病を得て死に臨んだ時、今死んでは口惜しい、と云ったという彼女の言葉は、真に彼女の胸中の情を語ったものだろう。何という悲痛の叫びであろう、其の一語を伝聞した当時の黙然たる自分の思いは今も猶其人を思うごとに自分の胸中に湧上る」
「読売新聞」は、「女流小説家の巨擘として名を当代にほしいままにし、髯眉の丈夫と並び立ちて遜色なかりし一葉女史樋口夏子は今年秋の初めの方より胸を患って文筆を廃し、静かに医療を加え居りしが、去る二十三日終に隔世の人となれり、春秋僅かに二十有五」と、報じた。一葉がしばしば通っていた近所の質屋伊勢屋の主人は、それではじめて哀れな樋口夏子が有名な一葉であることを知り、香典を持って来てそれまでの無礼をわびた。

通夜に来た斎藤緑雨は、近くの瘋癲病院で夜警のためにたたく太鼓の音を聞いて、

霰ふる田町に太鼓聞く夜かな

というさびしい句を作った。

二十五日の葬式に、鷗外が騎馬で棺側に従いたいという話があったが、妹の邦子が、あまりに貧弱な葬式を恥じてそれをことわった。

一葉の死後、母と妹は文字通り明日の生活にも困るほどの貧窮の中にあった。

一葉は死の一、二年前から貧苦のために未知の高利貸兼占師のところを訪れて借金を申しこみ、その男から妾になれといわれたことがあった。

もし一葉が『たけくらべ』を書けず、しかもなお数年の余命を保ち得たとすれば、彼女はその高利貸の手に落ちていた可能性もある。

死は一葉を汚辱から救ったのである。

滝廉太郎（一八七九——一九〇三）二十四歳

鳩ぽっぽ、雪やこんこ、もういくつ寝るとお正月、「荒城の月」などの作曲で知られた滝は、明治三十四年ドイツに作曲研究のために留学を命じられて、ライプチヒ音楽学校にはいったが、風邪をこじらせて健康もとに返らず、三十五年帰国した。

途中、船がロンドンのテムズ埠頭に立ち寄ったとき、英国留学中の土井晩翠が訪れて見舞った。「荒城の月」の作詞者と作曲者が逢ったのはこのときが最初で最後であった。

帰国後、結核と診断され、大分市の父母のもとで療養していたが、三十六年六月二十九日に息をひきとった。

のちに妹のトミは、兄が結核のため、身のまわりの品ともども、作曲の未発表のものも母が焼いてしまったようだ、といい、

「兄がこのようにみなさまに惜しまれるとは思わず、兄もそう思わずに亡くなりましたものですから、母を恨むわけには参りません」

と、いった。

同年十月には、尾崎紅葉が死んでいる。

ジェームス・ディーン（一九三一——一九五五）二十四歳

サミー・デービス・ジュニアはいう。

「ジミーは妬まれている。なぜあんなに受けるんだろう、とみんないう。死んでから二十年以上もたっているのに、なぜ今でも話題になるのだろう。私が覚えている人間で、そんな人間は二人しかいない。一人はマリリン・モンローで、一人はジミー・ディーンだ」

一九五四年、二十三歳の一年間だけで、「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」と三本の映画に出演し、人々の胸に永遠の青春像を刻みこんだジェームス・ディーンは、一九五五年九月三十日、愛用のポルシェを駈って、カリフォルニア州サリナスの自動車レースに出場するため、パソ・ロブレスの公道を百三十キロの猛スピードで疾走中、横から出て来たセダンに衝突し、病院に運ばれる途中、午後五時五十九分絶命した。

橋本左内（一八三四——一八五九）二十五歳

一橋慶喜を擁立しようとする主君松平慶永の命令に従って各方面に運動した左内は、安政の大獄に連坐する羽目となった。安政六年十月二日、幕府評定所に呼び出された彼は、そのまま伝馬町の牢へ移された。

奉行のいいがかりに近い訊問に対し、いちいち打てばひびくように応答してその罪案をはねのけた若い左内は、かえってそのために反感を買ったことを知らなかった。いや、その頭脳の冴えをそれ以前から井伊大老に危険視されていることを知らなかった。

十月六日、彼は牢内から知人に、入牢以来不眠症にかかっているから催眠剤を差入れてくれるように依頼した手紙を出している。彼はその翌日の運命を知らなかった。

翌七日午前十一時ごろ、彼は呼び出され、牢内の刑場で斬首された。彼の心境やいかん。

無事放免されることと思い、迎えにいった関係者たちは事の意外に驚愕した。遺骸はその翌日に下げ渡されたが、

「頭は生けるが如き面色にて実に寂々たる光景、もっとも裃を着させ早桶へ下帯一つ貰い候おもむき、少々血付きこれあり」

奉行でさえ「遠島」とした擬律をみずから筆をとって「死罪」と改めたのは井伊自身であったといわれる。幕府の能吏であった水野筑後守が「井伊大老が橋本左内を殺したるの一事、以て徳川氏を滅ぼすに足れり」と嘆じたほどの俊秀児の法外な処刑であった。

難波大助（一八九九――一九二四）二十五歳

明治三十二年、山口県熊毛郡周防村の大地主の家に生まれた大助は、優秀な兄二人にくらべ幾分見劣りしていたせいもあってか、子供に厳格な父作之進に、やや差別して育てられ、少年時代はおとなしく、むしろ父におびえているように見えた。

やがて中学を卒業し、何度か受験に失敗し、彼に期待しない父からの送金もしぶりがちな東京での浪人生活中、共産主義の信奉者となり、大正十一年、二十三歳でやっと早稲田大学第一高等学院に入学したが、このときはプロレタリアを収奪する天皇を打倒せねばならぬと信じるテロ思想の持主になっていた。そして、一年ばかりで退学して、プロレタリア運動にはいった。

かつて羊のようだった大助は、いまや虎のごとく変貌し、何をやるかわからぬ人間として父や兄を脅迫し、ふてぶてしく金をせびり、彼らを戦慄させた。

大震災直後の大正十二年秋、故郷に帰っていた大助は、古くから家にあったステッキ銃を持って、また上京した。

それは一見ステッキのごとく見える空気銃の一種で、明治初年伊藤博文がロンドンで買ったものを後に長州出身の部下に与え、それをまた昔難波作之進がもらい受けたものであった。

大正十二年十二月二十七日、摂政宮――後の昭和天皇――は、貴族院開院式に行啓すべく、赤坂離宮から自動車で日比谷の議事堂に向う途中、午前十時四十分、虎ノ門にさしかかったとき、路傍の群衆の中から走り出した難波大助は、車窓十センチのところまでステッキ銃の銃口を近づけて撃ちこんだ。

窓ガラスに穴があいたが、車はそのまま走り過ぎた。なお十メートル追いかけて第二撃を送ろうとした大助は、殺到した憲兵、巡査、群衆によってねじ伏せられ、殴る蹴るの半リンチを受けた。

車に撃ちこまれた弾は、銃口が上向きになっていたせいで、車の天井に散乱しただけで、摂政宮は無事であった。

凶報に全日本は震撼し、山本内閣は総辞職した。関係諸官がそれぞれ処罰された中に、警視庁警務部長正力松太郎があった。彼はこのため官界を断念し、以後、新聞界に身を投じることになる。

故郷の難波家は門に青竹を打ち、すべての戸を針金でくくり、当時県議会議員となっていた父の作之進は三帖の間

に謹慎した。一流企業のエリートコースにあった兄も退職した。それらの家には日夜怒号と石つぶてがふりかかった。

獄中の大助は、その父に手紙を送った。

「……聞けばあなたは食事も碌に取れず、精神に異常を呈するほどやつれて居る由――これを聞いてさえ私は冷然として涙一滴落とさない」

以下彼は、自分を差別し、人間を差別している父を弾劾した。

官選弁護人の今村力三郎は、「大助の印象は、一口にいうと、鉄のように冷たい、ということになる。実にヒヤリとした感じを与える人物であった」と、いっている。

翌大正十三年十一月十三日、死刑の宣告が下されたとき、大助は傍聴席に向ってさけんだ。

「日本無産者・労働者・日本共産党万歳！」

看守たちが駈け寄り、手錠をかけ、編笠をかぶせた。編笠の中から彼はさけんだ。

「ロシア社会主義ソヴィエト共和国万歳！」

ひきずってゆかれながら、さらにさけんだ。

「共産党インターナショナル万歳！」

それからわずか一日おいて、十一月十五日午前九時十二分、市ヶ谷刑務所内で難波大助は絞首刑に処せられた。死刑宣告後、かくも迅速に刑が執行された例は、あとにもさきにもない。明治の大逆事件でさえ、執行は宣告後六日目であった。

難波家と遠縁にあたる河上肇は、その著『思ひ出・断片』中に、後年ある裁判官から聞いた話として、「何十年かの司法官生活中、取扱った被告は無数であるが、その中で難波大助ほどしっかりした人間は見たことがない」という述懐を紹介している。

半年後の大正十四年五月二十五日、数え年六十一歳の父作之進は、餓死に近い状態で死んだ。

雲井竜雄（一八四四――一八七〇）二十六歳

「この身飢ゆれば　この子育たず
　この子棄てざれば　この身飢ゆ
　捨つるが是か　捨てざるが非か
　人間の恩愛　この心に迷う」

という『棄児行』の詩は、戦前雲井竜雄の詩としてよく人々に吟じられた。しかしこれが彼の詩であるかどうか、今では疑問とされている。とにかく雲井竜雄には子がなく（妻がはじめて身籠ったとき彼は叛逆者として獄中にあり、その

子の前途を思って妻は故意に流産したともいわれる）彼に子を棄てた事実はない。

米沢藩士であった雲井は、若き日から熱血の詩人として知られていたが、維新後、新政府に叛逆を企んだとして、明治三年五月米沢に幽閉せられ、八月東京の小伝馬町に檻送され、十二月二十六日処刑され、小塚原に梟首された。

竜雄を斬ったのは八代目山田浅右衛門吉亮で、のちに回想して彼はいう。

「手前が十七歳の時です。明治三年庚午歳、師走の二十六日、江戸市中は節季で賃餅が盛んにつかれ、薬研堀の年の市というに、今日は米沢の藩士雲井竜雄を斬れというので、小伝馬町の囚獄に参りましたが、音に響いた浪士でありますし、斬りそこなったとあっては大変と、尋常の囚徒を斬るのとは覚悟も違ってました。申すまでもありませんが、安井息軒の門下で、一夜に左氏伝を読了したという英雄、時利あらず、囚われの身となって、その春に米沢に押送されまして、八月に江戸へ檻送されました。御取調べも厳重で、同志の面々を白状させようとしましたが、いくら拷問に逢っても白状しない。当時のことですから、芝居でやるような残酷な目に逢わしたでしょうが、連判帳は焼棄してあるから、一死国に殉ずると云って平気でした。雲井氏は至って小柄で、大胆などはどこに宿っているか分らぬ男でした。この人物が雲井竜雄といって天下に名を轟かせた人かと呆れたくらいでありましたが、今や刑場の露と消える刹那に、神色自若として控えていたありさまは、今に敬服のほかありません」

首のない胴体は大学東校（後の東大病院）に送られ、解剖に付された。そのころ大学東校の教職にあった石黒忠悳は語る。

「大学東校では、医学の授業に使うため、刑死者屍体の下付を再三政府に申請していたところ、ようやくにして容れられ、初めて交付されたのが雲井の屍体で、頭首のない胴体だけの屍体であったため、特によく記憶している」

北村透谷（一八六八――一八九四）二十六歳

十六歳で自由党の軍資金獲得のための強盗計画に誘われ、脱落し、十八にして多摩の豪農の娘石坂美那子と烈しい恋愛をしてその許婚者をしりぞけて恋を成就し、二十歳にして日本近代詩の暁鐘ともいうべき『楚囚之詩』を発表した天才北村透谷は、その後、文学的にも生活的にもゆきづまり、肉体的にも衰弱し、明治二十五年ごろから精神分裂の徴候をあらわし、二十六年にはのどをついて自殺を計ったが、未遂に終った。以後彼はのどの傷痕を非常に気にした。

二十七年五月、精神異常がまた再発し、一種の痴呆状態となり、三つになる自分の娘をしきりに拝んだりする挙動があったが、五月十六日、月の明るい夜、芝公園地二十号四番地の自宅から、妻が寝静まるのを待って外へ出て、青い若葉のひろがった庭の木の枝で、首を吊って死んだ。

妻の美那子からの知らせで、友人の島崎春樹（藤村）と戸川明三（秋骨）が駈けつけると、透谷の屍骸は、彼らのよく知っている小さな家の暗い部屋に横たえられ、三つになる女の子がそばで遊んでいて、「お父さん、ねんね」といった。

「やまと新聞」は、彼の死を、「裏口なる桜の木へ兵児帯をかけ、美事にブランコ往生を遂げたる由」と報じた。

のちに正宗白鳥はいう。「一葉の夭逝は惜しむべきであるが、それよりも透谷の早世が一層惜しむべきであったと、私は今になって感じている」

石川啄木（一八八六――一九一二）二十六歳

明治四十四年一月末から啄木は身体の変調をおぼえ、二月一日、大学病院三浦内科で診察を受けた結果、慢性腹膜炎と診断され、青山内科に入院した。

三月に一応退院したが、やがて肺結核の症状が明らかになった。七月に高熱を発し、病床についた。同時に妻の節子も健康を害し、これまた肺結核と診断された。炊事万端は老母の仕事となり、一家の窮状とそれによる不和の果てに、九月老父はいたたまれなくなって家出をした。

明治四十五年元旦、啄木は老母と妻に「元旦だというのに笑い声一つしないのは、おれの家ばかりだろうな」と、いった。

一月二十一日、森田草平が夏目漱石の奥さんからのお見舞いだといって十円を持って来た。啄木は日記に書いた。

「私は全く恐縮した。夏目さんの奥さんにはお目にかかった事もないのである」

その金が一円しか残らなくなった一月二十九日、勤め先の朝日新聞社の同僚たちが集めた三十四円四十銭の見舞金がとどけられた。

その翌日、妻は子供を連れていそいそとおもちゃを買いにゆき、啄木も「非常な冒険を犯すような気で、俥に乗って」町へ出て、クロポトキンの『ロシヤ文学』や原稿用紙やノートを買い、四円五十銭使った。

「いつも金のない日を送っている者がタマに金を得て、なるべくそれを使うまいとする心！　それからまたそれを裏切る心！　私はかなしかった」

二月中旬、こんどは老母が喀血し、この母が実は以前から肺結核の痼疾を持っていたことが明らかになった。小さな陋屋内は三人が咳をし血を吐くというありさまになった。

二月二十日（火）

「日記をつけなかった事十二日に及んだ。その間私は毎日毎日熱のために苦しめられていた。三十九度まで上った事さえあった。そうして薬をのむと汗が出るために、からだはひどく疲れてしまって、立って歩くと膝がフラフラする。

そうしている間にも金はドンドンなくなった。母の薬代や私の薬代が一日約四十銭弱の割合でかかった。質屋から出して仕立直させた袷と下着は、たった一晩家においただけでまた質屋へやられた。その金も尽きて妻の帯も同じ運命に逢った。医者は薬価の月末払を承諾してくれなかった。

母の容態は昨今少し可いように見える。然し食慾は減じた」

啄木の日記はここで永遠に終っている。

老母の病状はしかしそのころから急速に悪化し、三月七日に死亡した。

ついで啄木の病勢も昂進し、前年家出をして北海道の知人の家に寄留していた老父は呼ばれてまた上京した。

そして、三月十三日、「読売新聞」に「石川啄木いよいよ重態」とあるのを見た同郷の友人の金田一京助は、小石川久堅町の啄木の家に駈けつけた。

啄木は衰弱し切って、幽霊さながらの顔になり、京助の眼にも死期の近いことを悟らせた。啄木は、

「いくら生きようたって、こんなですよ／」

と、夜具をあげて見せた。骸骨の骨盤に皮が張っているような腰が見えた。

「金を払わないから、医者も来てくれない」

と、彼はいい、京助がそのひどい栄養不良ぶりに、「医者よりも、何よりも滋養物をとらなくちゃ」とつぶやくと、

「滋養物どころか、米がないの」

と、異様な笑いを浮かべて、頭をかいて見せた。

金田一は、脱稿したばかりの言語学の原稿を持って出版

屋へいって金にかえようとしたが、思うようにゆかず、家に駈けもどって、有金ぜんぶ――翌月分の生活費の十円――をかき集めて、また石川家へ走っていった。

啄木は枕の上で眼をとじて、手を合わせてふし拝んだ。病妻の節子も枕もとに坐って嗚咽していた。

四月十三日朝、金田一は勤め先の国学院へ出勤しようとして、また石川家からの急報に呼ばれた。

玄関に節子が出て来て、啄木が昨夜から昏睡状態におちいっていて、ときどきうわごとのように金田一さんを呼んでくれといっている、といった。

部屋にはいると、しゃれこうべのような啄木の、眼、鼻、口がただの穴のように見え、その穴の一つが、

「たのむ。……」

と、からっ風のような声をもらした。

そこへ若山牧水がやって来た。

啄木夫婦は、京助に学校にゆくことをこもごも勧めた。金田一京助は、二時間の講義ごとに二円もらうことになっていて、その二円が家計の上で重大なものであることを、彼らも知っていたのだ。どこか浮世離れした性格を持つ京助は、それで国学院へいった。

牧水は書いている。

「それから幾分もたたなかったろう。彼の容態はまた一変した。話しかけていた唇をそのままに次第に瞳があやしくなって来た。私は慌てて細君を呼んだ。細君と、その時まで私が来て以来次の部屋に退いて出て来なかった彼の老父が出て来た。私は頼まれて危篤の電報を打ちに郵便局まで走って帰って来てもなおその昏睡は続いていた。細君たちは口うつしに薬を注ぐやら、唇を濡らすやら、名を呼ぶやらしていたが、私はふとその場に彼の長女（六歳だったと思う）のいないのに気がついてそれを探しに外へ出た。そして桜の落花を拾って遊んでいた彼女を抱いて引返した時には、老父と細君が前後から石川君を抱きかかえて、低いながら声をたてて泣いていた。老父は私を見ると、かたちを改めて、『もう駄目です。臨終の様です』と云った。そして側に在った置時計を手にとって『九時半か』と呟く様に云ったが、まさしく九時三十分であった」

そして牧水は、

「よく安らかに眠れるという風のことをいうが、彼の死顔はそんなではなかった」と書き、「蒸暑い日和で、街路には桜の花が汗ばんで咲き垂れていた」と、書いている。

――死後、日本の若者たちが『啄木歌集』に献げた印税の百万分の一でも生前に恵んでくれたら、と啄木の亡魂は

歯がみしているにちがいない。

山崎晃嗣（一九二三——一九四九）二十六歳

　太平洋戦争直後、東大を抜群の成績で卒業しながら、高利貸業「光クラブ」を作って数千万円の金を動かし、月二、三割の高利で中小企業に貸しつけて銀座にまで店を進出させた山崎は、たちまち破産の運命におちいり、

「（契約は）死人という物体には適用されぬ。……貸借法すべて清算カリ自殺」

　というふざけた遺書を残して、昭和二十四年十一月二十四日、服毒自殺した。

源　実朝（一一九二——一二一九）二十七歳

　頼朝死後、その遺児頼家、実朝兄弟は、母の北条政子やその父北条時政、その弟北条義時らの凄じい権力欲の渦の中に翻弄される運命におちいった。

　その結果、頼家が時政によって暗殺されると、弟の実朝は十二歳で将軍となったが、長ずるに従って病気がちで、和歌や蹴鞠などの貴族的趣味のみにふけり、はては母やその一門の、血で血を洗うような権力争いにいや気を起して、宋に逃れようという夢まで描いた。

　そして、それはまた政子を失望させ、時政、義時らの野望をさらにそそり、その陰謀の魔手にあやつられた頼家の遺児公暁により、承久元年一月二十六日、一日に二尺つもった雪の日、鶴岡八幡宮で拝賀の儀をすませ、石段を下りてくる途中、突如刺殺された。

　公暁はその夜のうちに殺されたが、彼が持って逃げたはずの実朝の首は、行方不明になってしまった。

　実朝はこういう異変の起ることを覚悟していたらしく、拝賀の式へ出発する前に、庭前の梅を見て、

「いでいなば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春を忘るな」

　と、詠んだと『吾妻鏡』にある。

　しかし、また一方、

武士の矢並つくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心わがあらめやも

大海のいそもとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

　など、彼の歌集『金槐和歌集』を見て、正岡子規はいう。

「実朝という人は三十にも足らで、いざ是からという処にてあえなき最期を遂げられ誠に残念致し候。（中略）自己の本領屹然として山岳と高きを争い日月と光を競う処、実に畏るべく尊むべく覚えず膝を屈するの思い有之候。古来凡庸の人と評し来りしは必ず誤なるべく、北条氏を憚りて韜晦せし人か、さらずば大器晩成の人なりしかと覚え候」

　歌非凡なら、果して人も非凡であるか。

大塔　宮護良親王（一三〇八——一三三五）二十七歳

　後醍醐天皇の第一皇子大塔宮は、楠木正成とともに赤坂城にたて籠って北条方と戦ったりしてついに北条氏を滅ぼしたが、戦後足利尊氏と対立し、その時点ではなお尊氏にはばかるところのあった後醍醐天皇は、建武元年十一月、尊氏の弟直義の監視の下に、宮を鎌倉薬師堂の谷の東光寺に監禁するに至った。

　翌建武二年七月、高時の遺児時行が蜂起して鎌倉を襲い、足利直義はこれを防ぐことが出来ず逃亡するにあたり、宮を生かしておいては後々まで足利氏のさまたげになると考え、家来の淵辺義博以下七騎をつかわして宮を処理させた。塗籠めの部屋で灯をかかげて読経していた宮は、凶刃をひっさげて闖入して来た淵辺と格闘した。淵辺は、牢にひとしい幽閉生活で足の弱っていた宮を打ち倒し、のしかかって首を斬ろうとしたが、宮は首をふってその刀にかみつき、きっさきが一寸ばかり折れた。淵辺は脇差を抜いて宮の心臓部をつき刺し、ついにその首をかき切るという凄惨な始末であった。

豊臣秀次（一五六八——一五九五）二十七歳

　いちどは秀吉の後継者となりながら、その直後に秀吉に実子秀頼が生まれたために、秀吉にとって無用のみならず有害の存在となった甥、関白秀次は、ときに抵抗し、ときに陳謝したが、どうしても死の運命からのがれることが出来なかった。

　文禄四年七月八日、秀次は秀吉に召喚され、聚楽第から伏見へゆく途中捕えられ、そのまま高野山へゆくことを命

じられた。そして十五日、切腹の指令が来た。秀次は、殉死した侍臣四人のうち三人までみずから介錯したのち腹を切った。

八月二日、秀吉は三条河原で、秀次の妻妾と子、三十余人を大量虐殺した。

沢村栄治（一九一七——一九四四）二十七歳

昭和九年十一月、はじめて来日したベーブ・ルース、ゲーリッグらのアメリカ大リーグを迎え、ゲーリッグのホームランによる一点だけに抑えるという偉業をなしとげたために、後年セ・リーグの最優秀投手に授けられる「沢村賞」を残した沢村栄治は、これを機とする日本のプロ野球創設とともに巨人軍のエースとなったが、昭和十三年日中事変に出征し、左腕に負傷して昭和十五年復員したものの、昭和十六年十月再召集されてフィリピン上陸作戦に上等兵として参加した。昭和十八年一月にまた帰還して巨人軍に復帰したが、相つぐ兵役のため肉体的にも技術的にも彼の投手生命はすでに失われていた。昭和十八年十月二十四日、西宮球場での対阪神戦に、青田昇の代打としてファウル・フライを打ちあげたのが彼の最後のプレイであった。

昭和十九年十月、三度目の召集を受け、十一月二十七日、門司から輸送船で南方へ向う途中、十二月二日午前四時三十分、屋久島西方の東支那海でアメリカ潜水艦のために撃沈され、彼も散華した。

高杉晋作（一八三九——一八六七）二十八歳

「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し」

という松下村塾同門の伊藤博文の讃辞は、ありきたりの顕彰碑の銘文ではない。

慶応二年六月、「奇兵隊」をもって第二次征長の幕軍を撃破した快男児高杉晋作は、なお馬関に参謀として小倉城攻撃を指揮していたが、このころ風邪をこじらせて、以前から患っていた肺患が悪化した。八月下旬に至り大量の喀血を見、ようやく屯所を離れ、下関の酒造家林算九郎方の離れで病を養った。看るのは妾おうのであった。

翌年二月、晋作の妻雅子が伜の東一を連れて萩から出てきた。

雅子はのちに語る。

「私は高杉といっしょにいましたのは、ほんのわずかの間で、その間東行はいつも外にばかり出ていました上に、亡くなりましたのがまだ二十九というほんの書生の時でございましたから、私はなんにも東行についてお話する記憶がございません。

そのうち馬関で東行が病気にかかりまして、だいぶひどいという知らせが参りましたので、私は両親といっしょに馬関に参りました。東行は馬関の新地の林屋という家の奥の座敷に寝ていました。私どもが参りました時は、もうだいぶ悪くなった時で、沢山吐血をいたしました。御飯もおもゆくらいしかいただけませんので、もうすっかり弱ってしまっていました。井上（聞多）さんや福田（侠平——奇兵隊軍監）さんらがよくお訪ね下さって、お話をして下さいました。

東行は自分のからだは悪くなるし、それにひきかえ世間はいよいよ騒々しくなるので日に日に昂奮するばかりで、いつもイライラしていました。井上さんや福田さんに向って、いつも『ここまでやったのだからこれからが大事じゃ。しっかりやってくれろ、しっかりやってくれろ』といい続けて亡くなりました。

いいえ家族のものには別に遺言というものはありませんでした」

彼は妻の雅子より、妾のおうののほうを愛していたようだ。

しかし、妻と愛人について、彼はかつて、

「是より両花艶美を争う
主人は手を拱いて意如何」

という詩を作っている。いい気なものだ。

病状は進み、慶応三年四月十四日最後の日がきた。友人田中光顕の談話によると、その日も晋作はなじみの料理屋にゆくといってきかず、しかたなく駕籠を呼んだ。晋作はそれに乗ったが気力つきて、また病床へ戻ったという。

その病床で、野村望東尼をはじめ多くの知友に見まもられつつ、晋作は筆と紙を所望し、

「おもしろきこともなき世をおもしろく」

と、書いた。

あとをつづける気力もないようなので、望東尼が、「すみなすものは心なりけり」と、まとめると、彼は「面白いのう」と笑って眼をとじた。

維新回天の日のちょうど一年前であった。同年十一月には、やはり天馬のごとき坂本竜馬もこの世から翔び去る。

ところで、芸者のおうのの、晋作の死後の行状を心配した友人の井上と伊藤俊輔が、彼女の頭をツルツルに剃って、墓守りの尼にしてしまったという話がある。両人とも、

自分のことは棚にあげてこれもいい気なものである。

夜嵐お絹（一八四四――一八七二）二十八歳

高利貸小林金平の妾となった元芸者原田絹は、役者の嵐璃鶴と密通し、明治四年一月、鼠取りの薬で旦那の金平を毒殺したが、その風聞を聞きこまれ、七月十日に検挙された。

十一月八日、お絹は伝馬町の牢内で璃鶴の子を分娩し、翌年五月二十日、小塚原で打首獄門になった。刑場にゆくとき、

夜嵐にさめてあとなし花の夢

と詠んだというので、以後毒婦の一典型として「夜嵐お絹」の名を残した。

明治初年ごろまでは、たった一人殺しただけで「毒婦」の烙印を押されたのである。

伊藤野枝（一八九五――一九二三）二十八歳

ダダイスト辻潤と同棲し、平塚らいてうの青鞜社同人となり、神近市子の「日蔭の茶屋」事件などの波瀾を経て、大正六年から無政府主義者大杉栄と結婚していた伊藤野枝は、大震災後の十二年九月十六日夕刻、大杉と七歳の甥橘宗一とともに、新宿柏木の街頭から、憲兵隊の甘粕正彦大尉らに麹町平河町の憲兵隊本部に連行された。

午後八時二十分、別室でまず大杉を絞殺した甘粕は、それから四、五十分後、伊藤野枝と宗一のいる部屋にはいった。

「戒厳令が布かれたが、君らから見ると馬鹿なまねをしているように見えるだろうな」

と、甘粕は野枝にいった。野枝は何もいわずただ笑っていた。

「兵隊など馬鹿に見えるだろう」

と、いうと、野枝は、

「このごろは兵隊さんじゃなければならないようにいうじゃありませんか」

と、笑顔でいって、机に頬杖をついた。甘粕はなおいった。

「お前たちはいまよりもっと帝都が混乱状態になることを望んでいるのだろう。そしてそれを種に原稿を書けば、それがまた売れて結構なことだ」

「もう二、三軒の本屋さんから注文がありましたわ。とにかく私たちは、あなたがたとは立場がちがうんです」

と、野枝はいった。

甘粕大尉は甥の宗一を隣室に連れてゆき、ひき返して来て、向うむきに椅子に坐っていた野枝の首に手をかけ、背に膝をあてて絞めつけた。野枝は二、三回うめき、手で甘粕の手をかきむしった。倒れた野枝を、甘粕はなお十分間くらい麻縄で絞めていた。

ついで殺害された宗一、別室の大杉の屍体とともに、野枝の屍体は、憲兵隊本部の古井戸に投げこまれ、埋められた。

円谷幸吉（一九四〇――一九六八）二十八歳

昭和三十九年の東京オリンピックのマラソンで、一位エチオピアのアベベ、二位イギリスのヒートリーにつづいて、三位にゴールインした直後、精根つきはてたかのように倒れて、その必死の力走を印象させた朴訥律儀な円谷幸吉は、以来日本のマラソンのホープとなってトレーニングに励んでいたが、メキシコ・オリンピックの開催される昭和四十三年の一月九日、東京練馬の朝霞陸上自衛隊体育学校の幹部宿舎二階の個室でカミソリ自殺をとげた。

午前十一時ごろ、隣室のレスリング選手小泉正喜三尉が、円谷が点呼に出ないのを怪しんでノックしたが返事がなく、ドアをこじあけてはいってみると、幸吉はベッドの上で、シャツとズボン姿で仰むけになったまままことときれ、ベッドの下は血の海で、その中に折りたたみ式のカミソリが落ちていた。彼は右の頸動脈を切断していた。

机の上に遺書があった。それには父母や兄姉に、「父上様、母上様、三日とろろ美味しゅうございました。干し柿、モチも美味しゅうございました」にはじまり、すし、ブドウ酒、リンゴ、しそめし、南蛮づけ、ブドウ液、養命酒、モンゴいか、等、各人に、妙に食い物の礼ばかり述べてあったが、最後に、

「父上様、母上様、幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません」

という文章があった。

川端康成はこの遺書を「千万言もつくせぬ哀切」と評し、三島由紀夫は「壮烈な武人の死」と評し、スポーツ評論家川本信正は「円谷は日本人の愛国心に殺された」と評した。

朝日新聞記者中条一雄によれば、幸吉の自殺は、足と腰の故障のほかに、彼には美しい恋人があったが、体育学校の校長が、オリンピックをひかえて恋愛沙汰はまかりなら

ぬと交際を禁じ、二カ月前にその女性がほかの男性のもとに嫁いだことによるという。
東京オリンピックで一位のアベベも、この五年後に死ぬ。

夏目雅子（一九五七—一九八五）二十八歳

「二十代の女優さんではもっとも美しい、日本一きれいな女優さんでした。憂いを持った美貌で、彗星のごとく現われ、流れ尾をひきながら消えていったひとですね」
と、昭和五十九年彼女の最後の出演映画「瀬戸内少年野球団」の監督篠田正浩はのちにいう。彼女はまだ名女優でも大女優でもなかったが、まさにその世界に大輪の花をほころびさせようとする時にあった。
その夏目雅子は昭和六十年二月、渋谷の西武劇場で「愚かな女」公演中に極度の疲労を訴えて倒れ、慶応病院に運びこまれた。彼女は「這ってでも舞台に戻る」と泣きさけんだが、医者は制止した。
夏目雅子は、実はふだんから病身で、それまでも腎臓、甲状腺などを病み、撮影中もいろいろな薬を常用していた。
彼女の美しい身体の内部には早くから死の翳が這いまわっていたのである。そして最後に彼女をとらえたのは急性骨髄性白血病であった。
白血病は血液ガンとも呼ばれ、白血球が増加して高熱を発し、また血漿が減少して貧血を起し、末期には鼻血を出し、歯ぐきからも出血し、皮膚に紫色の出血斑を現わす。原因不明。
ただし、彼女には極度の貧血と告げられた。
夏目雅子はお嬢さん育ちながら仕事へのファイトに燃える女で、NHKの和田勉ディレクターが「亡くなったと聞いたとき、自殺ではないかと思った。それほど突っ張って生きていた」といった気性は病中も衰えず、入院中しきりに聞いたことは、どんな映画や舞台が流行り、女優のだれが人気を集めているかで、「私がいない間の映画はみんなコケればいいんだ」と冗談ながら半分本気でいい、全快後はミュージカルをやりたいと希望に燃えていた。
病状もいちどは回復に向い、一時は病院の廊下や屋上を散歩することもあったが、トクダネ写真をとろうとして白衣を着て医者に化けたカメラマンが潜入してくるに及んで、病室の中にとじこめられ、彼女についてどんなことが報道されるかわからないのでテレビや雑誌も禁じられた。
やがて病状は八月ごろから悪化し、九月九日未明から危篤状態におちいり、十一日肺炎をひき起し、午前十時十六

分に息をひきとった。満でいえば花の二十七歳。
彼女の棺が帰ってきたとき、自宅前におしかけている報道陣に、それまでずっと彼らに悩まされつづけてきた彼女の母親は、「これであんたたちの思い通りになったんでしょう」とさけんだ。

吉田松陰（一八三〇—一八五九）二十九歳

吉田松陰が江戸の獄に投ぜられたのは、幕府が危険人物と認めた梅田雲浜との関係や、あるいは幕府をそしる落し文の書き手を調べるためで、松陰はいずれにしても軽罪と考えていた。
しかるに純情な彼は、法廷で右の小嫌疑を否定したのち、自分の志を述べるつもりで、かつて閣老間部下総の要撃を計ったことを告白した。彼はみずから死を招いたのである。
奉行の罪案に「流罪」とあったのを、井伊大老は、「流」の字を消して「死」と書き直した。
死の前日の黄昏、伝馬町の牢獄内で松陰は、友人と弟子への遺書『留魂録』を書き、その冒頭に、
「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも
とどめおかまし大和魂」
と、しるした。
その翌日、安政六年十月二十七日、同じく志士として入牢していた世古格太郎は、松陰が死刑を宣告されて、お白洲から出て来るところを目撃した。
「……大声にて、公儀を憚らず不届の至りにつき死罪申しつける、と聞ゆるや否や、白洲騒がしく、一人の囚人を下袴ばかりにて腕をとらえ、二三人にして白洲より押出し来たり。誠に囚人気息荒々しき体なりき。直ちに仮牢に押入れ、立ちながら本縄に縛せり。予これを視るに吉田寅次郎なり。……吉田もかく死刑に処せらるべしとは思わざりしにや、彼縛らるる時まことに気息荒く切歯し口角泡を出す如く、実に無念の顔色なりき」
前日覚悟の遺書を書いたはずだが、それでも現実の死刑宣告は彼にとって衝撃だったのであろう。矛盾よりも、人間とはこうもあろうと思わせる。
午前十時、彼は斬首され、屍骸は小塚原に運ばれた。
弟子の桂小五郎、伊藤俊輔（後の博文）らが屍体引取りを交渉し、二十九日小塚原にゆき、回向院西北の藁小屋から出された四斗樽のふたをひらいた。首は胴体の手に抱かされていた。「顔色なお生けるがごとく、髪みだれて面に被り、血流れて淋漓たり。かつ体に寸衣なし。四人、その

惨状を見て憤恨禁ずべからず」

彼らは、師の遺体を、二十日前に処刑され、埋められた橋本左内の右側に葬った。

相楽総三（一八三九——一八六八）二十九歳

幕末江戸の治安を撹乱するための謀略、いわゆる「薩摩御用盗」の中心人物となった志士相楽総三は、慶応三年十二月の幕府方の薩摩屋敷焼討ちからあやうくのがれて西下し、翌四年一月、官軍が東征の準備にとりかかるや、幕府方に抗戦の余裕を与えるべからずとさけんで即刻その先鋒隊となって出撃することを提案し、許されて「赤報隊」と名乗る一軍を編制して中仙道を進撃した。

「赤毛」をかぶった颯爽たる革命児を隊長にいただく赤報隊は、中仙道の諸藩を戦慄させた。

しかるに、やがて中仙道諸藩に抵抗の意志のないことが明らかになって、官軍総督府から赤報隊は有害無益と判断され、処分される運命におちいった。

三月一日、下諏訪まで進駐していた総三以下八人の赤報隊幹部は、総督府本陣に呼び出されて逮捕され、一回の取調べもなく冷雨の庭につながれたまま一椀の食も湯も与えられず、三日目を迎えた。

三月三日、なお寒雨ふりしきる夕刻、彼らは下諏訪はずれの磔田という刑場にひかれ、次々に斬首の刑に処せられた。

埋もれていた彼の名を世に出した長谷川伸の『相楽総三とその同志』にいう。

「相楽がやがて死の座に直った。雨はまだやまない。相楽は皇居を遥拝し、静かに太刀取りを顧みて『しッかりやれよ』といった。太刀取りは荒肝をひしがれたように動揺が出た。再び静かに相楽が、『見事にな』といった。これに災いされたか、太刀取りは相楽のうしろに廻り、気を鎮めて一声とともに斬ったが、仕損じて右の肩先へ斬りこんだ。とっさに相楽が振返り、『代れ』と怒気を含んで叱りつけた。これにたじろいで、その太刀取りは顔が土気色になった。

代って、新しい太刀取りが背後にくるまでに、相楽の襟のあたりに、流れる血が滲み出し、悲痛な光景となった。刑場の内も外も咳一つするものすらない。太刀取りは神気を養っていたが、やがて一声とともに刀をふり下した。今度は見事にいって相楽の首が三尺ばかり飛んで、雨が叩く小さな紋が数限りなく立つ地面へ、音をたてて落ち、泥をがばっと四方に飛ばした。

後になってこのことが誇張され、相楽の首が六尺余り飛びあがり、傍の柳の枝に咬みついて、いくら引っ張ってもとれなかった、とこうなった」

刑場に梟首された総三の首のそばに立てられた高札には、彼を偽官軍ときめつけてあった。

薩長出身でない彼らは官軍に使うだけ使われたあげく、どうも具合が悪い、と見られると、犬のごとく抹殺されたのである。

なお相楽総三の本名は小島四郎左衛門という。

高橋お伝（一八五〇——一八七九）二十九歳

上州利根郡下牧村に生まれたお伝は、夫の波之助がハンセン病にかかったために故郷を捨て、明治初年上京し横浜のヘボン博士の治療を受けたりしたが、やがて夫は死んだ。お伝はその間におぼえた売春を職とするようになったが、明治九年八月、浅草蔵前の商人宿で、客とした古着商後藤吉蔵の枕探しをやり発見されて剃刀で殺害した。八月二十九日逮捕され斬首刑の判決を受けた。市ヶ谷監獄でその刑が執行されたのは明治十二年一月三十一日のことであった。

当時、西南の役に連坐し、同監獄に収容されていた高田露は彼女の最期を目撃した。

「お伝はなるほど美人だった。日の目を見ない永年の獄中生活に、頬にいくらかやつれが見えていたけれど、色がすきとおるほど白く、面長の、いわゆる凄味をおびた美人だった。頭を櫛巻か何かにしていたようだ。気がうわずって震えがあらわれ、もちろん目はつりあがっていたそうだから、よけいに凄く見えたのだろう。

白木綿で目隠しされ、すごすごと引かるるままに、一歩一歩死の影を踏んで、くだんの框の前まで来た」

框とは斬罪場に掘られた穴の縁となる木の枠のことである。斬り手は当時なお代々の職を勤めていた山田浅右衛門であった。

「が、しかし往生際が悪かった。

『申しあげることがございます』

身をもがき、たけり狂うて、男の名を呼びはじめた。

獄卒も浅右衛門もしたたか弱らせられた。が、無理におし倒して、騒ぐなりに一太刀浴びせたが、やりそこねた。

鬼の浅右衛門も気がひけたらしい。エエと一声、また一刀をふりおろす。白電一閃、コツという音がした。お伝が身をもがくので手先乱れて後頭部に当ったらしい。ヒエー

という絹を裂くような、それは聞くに忍びぬ声を出して、お伝はいっそう狂いまわる。そして男の名を呼んではあばれるのだ。血はだらだらと流れて顔いちめん真っ赤だった。おまけに身をもがいたため、目かくしがはずれてしまった。見れば血走った凄い眼光、ちょうど夜叉のように思われたが、おし倒され、ふたたびおし倒された。もう駄目だと観念したのであろう、お伝は大きな声で南無阿弥陀仏と二度となえた。それでもまだ身をもがいていたが、とうとう三度目におし倒されるなり、ねじ斬りにされてしまった」

お伝の屍骸は、浅草茅町の警視庁第五病院で解剖された。執刀者は小山内薫の父、陸軍軍医小山内健であった。そしてお伝の「小陰唇異常肥厚、陰挺異常発達」が知られた。

あとの残骸は、お伝が最後まで呼んだという男、情夫の小川市太郎の手によって小塚原に葬られたが、のちに『高橋阿伝夜叉譚』を書いた戯作者仮名垣魯文の手で谷中天王寺へ改葬された。

青木 繁（一八八二――一九一一）二十九歳

明治四十年の「文展」に出品した青木の「わだつみのいろこの宮」は、のちに「遺作展覧会」でこれを見た漱石を感心させた。漱石は書いている。

「……それを仰ぎ見た時、いくら下から仰ぎ見ても恥ずかしくないという自覚があった。斯んなものを仰ぎ見ては、自分の人格に関わるという気はちっとも起らなかった。自分は其後所謂大家の手になったものでこれと同じ程度の品位を有つべき筈の画題に三四度出会った。けれども自分は決してそれを仰ぎ見る気にならなかった」

しかし、画壇はこの作品を黙殺した。一等賞七人、二等賞六人、三等賞十人で、「わだつみのいろこの宮」は、その三等賞の中の一つに過ぎなかった。

青木は自信があっただけに、怒りかつ絶望した。

最初から貧しい画家であった彼は、この作品を最後の展覧会出品作として故郷の久留米へ帰ったが、待ち受けていたのは窮乏その極にある家族であった。彼は生活のために悪戦苦闘したが、友人坂本繁二郎が評したように、結局彼の一生は「非現実的な芸術の空気をもって現実と戦った悪戦丈であった」。

彼の数々の奇行乱行はこの苦闘の飛沫であった。

すでに肺患のきざしはあったが、明治四十三年に至って大喀血し、福岡の施療病院にはいらざるを得なくなった。

彼は姉妹宛に手紙を書いた。

「……爾来病蓐の上にかつぎ上げられた儘、前後左右の身動きもならず、一両日は付添人も有之候え共其後は参らず、食膳痰壺持つにも息切れ便通にも必死の苦痛。（中略）小生も是迄如何に志望の為とは言い乍ら皆々へ心配をかけ苦労をかけて未だ志成らず業現われずして玆に定命尽くる事、如何許りか口惜しく残念には候なれど、諦めれば是前世よりの因縁にても有之候べく、小生が苦しみ抜きたる十数年の生涯も技能も光輝なく水の泡と消え候も、是不幸なる小生が宿世の為劫にてや候べき。……」

症状はみるみる悪化していったが、彼の生命への執着は鬼気迫るばかりであった。

翌年三月二十二日、弟の義雄が兄にのませようとして粉薬を少しこぼすと、青木は、それはおれの命の薬なのになぜこぼした、と涙を流して怒り、包み紙まで舐めた。

二十五日朝には、生卵五個を一気に飲み、次にまた五個をつぶして丼にいれ、それを飲もうとしてひといきいれた。と、ふいに右手をのばして宙をかきむしり、うう、と叫んで息絶えた。

すなわち三月二十五日午前七時、不世出の天才青木繁は、万斛の恨みをのんで、満二十八歳四カ月で、施療病院で息をひきとったのである。

それは大逆事件の幸徳秋水らが処刑された年であった。

彼の遺児が福田蘭童である。

山中貞雄（一九〇九――一九三八）二十九歳

「最初この男に会うたとき、マキノ正博監督のすいせんやゆうけど、才能あんのかいなと思うた。ぼうようとしとるんだ。スローモーションですねん。不精ひげ生やしてな、ドテラ着て会社にくる。タバコの空缶、チェリーやったかいな、ドテラ着て帯にくくりつけとる。それに灰たたきますねん、ポンポンと。（中略）コジキやでほんまに。シラミ湧いとるやろ、何とかしてやれと、洋服を買うてやったら、たちまち質に入れて、ドテラをまた着てきよる、往生をしたんダ。ところが、シナリオを見てたまげた。二度びっくりや、これ天才やないか」

昭和七年彼の第一回監督「抱寝の長脇差」主演の嵐寛寿郎はこう語る。（竹中労『聞書アラカン一代・鞍馬天狗のおじさんは』）

時に山中貞雄は二十三歳であった。以後「盤嶽の一生」「国定忠治」「丹下左膳、百万両の壺」「街の入墨者」「河内

山宗俊」等、映画史に残る名作を世に送り出した山中は、彼の最後の作品となった「人情紙風船」封切りの日、昭和十二年八月二十五日、召集令状を受けた。その七月七日から日中戦争が始まっていたのである。

嵐寛寿郎は言う。

「京都の桜屋という東山の旅館で壮行会がありまして、もちろん顔を出しました。山中泣きよりました。階段から転げ落ちるほど酔うて、『おれ戦争に行ってどないするんや、要領悪いさかいすぐ死ぬわ』とゆうて泣きよった」（同右書）

うそかほんとか、山本嘉次郎はこんな話を書いている。

召集された山中はいったん即日帰郷になったのだが、同じ帰郷組とひとまず連隊近くの宿屋に泊ったところ、その中の一人がこのことを恥じて自殺を計った。憲兵が取調べに来てこの行為を絶讃したところ、他の連中も口々に同じ心であることを告げた。そこで「それほどまでに入隊を望むなら……」ということで、みんな廻れ右してまた営門をくぐることになってしまった。その中で山中一人「私は帰らせてもらいます」とは言い出しかねて、いっしょにゆかざるを得ない羽目になった、といい、「それを聞いて、私はゾオーッと肌に粟立つ思いがした」と、書いている。

またなみはずれてアゴの長いこの天才を惜しむカツドウ屋の間には、彼のアゴにとどくような長い皮紐のついた軍帽がないので即日帰郷になった、という噂もながれた。

が、山中は陸軍歩兵伍長として、十月八日にはすでに大陸の戦場めざし、神戸を出港する輸送船上にあった。

彼の残したノートには「バンザイを叫ぶ人の悲劇、叫ばれる奴の悲劇。――喜劇かも知れない」と、ある。

戦場における彼の印象を、中隊長白善二男は「軍隊の中にフラリと紛れ込んだ着流しの男」というような形容で表現し、またいう、「しかし時折、戦場の焼野原の片隅に立ってジーッと遠くを眺めるような目付で長時間立ちすくんでいる事があった。殊に薄暮の頃など、次第に深まりゆく暮色の中で長い影を落としながら、両手をズボンの中に入れ前かがみにたたずんでいる彼の後姿には、何か近寄りがたいものを感じさせた」（加藤泰『映画監督山中貞雄』）

おそらく彼の胸中に満ちていたのは、映画への未来の夢ばかりであったろう。

翌昭和十三年四月、徐州大会戦に参加するにあたり、彼は遺書を書いた。

『陸軍歩兵伍長としてはこれ男子の本懐、申し置く事なし。日本映画監督協会の一員として一言、『人情紙風船』が山中貞雄の遺作ではチトサビシイ」

六月、中国軍は黄河決壊作戦に出て、山中は――軍曹に上っていたが――濁水の中を這いまわったためか、劇症の急性腸炎にかかり、七月十九日、野戦病院に入院するのやむなきに至った。

九月、開封野戦病院に転送されてから、いちじ経過良好に見えたが、「同月十七日午前六時三十分突如悪化シ、脈搏欠滞シ顔面蒼白トナリ、虚脱状態ニ陥リ応急処置モ奏効セズ、昭和十三年九月十七日午前七時遂ニ死亡」（陸軍軍医中佐木村安金による「死亡証書」）

戦争が若くして奪い去った最も痛嘆に値する天才の一人。

昭和五十年に京都太秦の映画村に「映画の殿堂」が作られたとき、映画監督として第一回の殿堂入りを果たした五人の中、内田吐夢、溝口健二、伊丹万作、小津安二郎らの巨匠とならんで弱冠山中貞雄の名があった。

飯沼正明（一九一二――一九四一）二十九歳

日中戦争以前、飯沼正明は日本の若き英雄の一人であった。

昭和十二年四月、朝日新聞によって企画された「亜欧連絡記録飛行」において、「神風機」の操縦士として起用された飯沼は、機関士塚越賢爾とペアで、世界ではじめて東京―ロンドン間を、九十四時間十七分五十六秒（実際飛行時間五十一時間十九分二十三秒）で飛ぶという新記録を樹立した。

飯沼は人間としても豪胆でさわやかで、日本の青年として最も良質の快男児で、かつ美青年であった。

四年後の昭和十六年十二月――陸軍の誇る最新鋭偵察機「新司偵」のパイロットとして徴用されていた飯沼は、すでに幾度かマレー半島の敵基地を偵察していたが、開戦三日目の十一日昼ごろ、仏印サイゴンからプノンペン基地に飛来した。

着陸して地上に下りた飯沼は、滑走路を横切って歩き出したが、どうしたのであろうか、いましも出撃しようとしていた陸軍航空隊の飛行機群に気がつかなかった。そして、轟音をあげて滑走して来た一番機のプロペラにひっかけられ、頭部と上半身をひき裂かれて惨死した。

翌年一月三日、陸軍航空隊本部は次のごとく発表した。

「陸軍技師飯沼正明（飛行士）は昭和十六年十二月十一日北部マレー方面の作戦において某重要任務に服務中、敵弾をうけ、なおよく操縦を続行、辛うじて基地に帰還せるも、

遂に壮烈なる戦死を遂げたり」
　太平洋戦争における「大本営発表」のでたらめさについて、責任者は戦後そのやむなきゆえんをあれこれ弁明したが、しかし何も偽る必要も、不明の事情もない緒戦勝利の時期からすでに、国民をいたずらにあざむく愚かしい体質を持っていたのである。
　当時の文部省は、この偽られた美談を、ただちに国定教科書「修身巻三」に使用した。このことに関するかぎり、むろん飯沼に罪はない。

森恒夫（一九四四――一九七三）二十九歳

　昭和四十六年、いわゆる連合赤軍を、「一にも銃、二にも銃、銃で武装した人民の軍だけが革命を起せる」という武闘中心の過激派集団として再編制した森は、警察のアパート・ローラー作戦によって都市を追われ、群馬県を中心に山岳アジトを作って転々としたが、その過程で総括と称して、赤軍派のメンバー十四人を次々にリンチ殺害し、四十七年二月十七日、同志永田洋子とともに妙義山アジトで逮捕された。
　東京小菅拘置所に収容された彼は、昭和四十七年七月二十日付で自己批判書をこう書いた。
「……私自身がどうして、あのときああいう風に行動したんだろう、としばしば思い返さざるを得ない様な一種の〝狂気〟だと思っている。（中略）考えてみれば、革命にとって狂気は多かれ少なかれ必要なことであり、その意味では狂気ではない。しかし、実際には、それらが革命にとって必要な精神の領域を越えて狂気として働いたのである。（中略）私は自分が狂気の世界にいたことは事実だと思う」
「私は革命の利益から考えて、有罪であり、その罪は死刑である、ということである。私が、亡き同志、他のメンバーに対していった『革命家たるものは革命の利益に反することをした場合、自らの死をもって償わなければならない……』ということを文字通り守らなければならないということである」
　昭和四十八年一月一日の昼過ぎ、十分から十五分毎の巡回監視のすきを盗み、彼は独房ののぞき窓の鉄格子にタオルをかけて縊死した。窓の下端は床から九十一センチしかないので、両足くびをメリヤスのシャツでくくって、ドアに背でもたれかかり、下半身を床にずらしていって、身体をくの字なりに曲げて死んでいた。
　同志の永田洋子は同じ拘置所でこの報を聞いて、「森さんはずるい、卑怯だ、自分だけ死んで」と叫んだという。
　三日午後二時、解剖を終えた森の屍体は、黒塗り大型ワゴンで葛飾の四ツ木葬祭場に運ばれたが、森の死因に疑惑を抱いた「日本赤色救援会」のメンバーたちが待ち受けていて、交渉の結果、彼らの「通夜」の要求が通って、屍体は駒込の中央聖書教会に運ばれ、午後六時半、棺がひらかれた。
「日本赤色救援会」のメンバーは記す。
「アゴから両耳まで幅一・五センチメートルの紫斑がくっきりと刺青のようににじみ出ており、ノドの軟骨は折れ、砕けていた。司法解剖の傷跡も胸の中心から下腹部までと、頭頂から両の耳まで、そして右まゆ上にもついていた。しかし運動で鍛え上げられた身体はまさに筋骨隆々として、医師もびっくりする程であった。そして薄化粧された顔はまさに眠っているかの如く穏やかであり、われわれの涙を誘うに十分であった」
　救援会の医師の検屍でも、森の死因は縊死以外の何ものでもないことが確かめられた。

三十歳で死んだ人々

神は人間を、賢愚において不平等に生み、善悪において不公平に殺す。
――山田風太郎――

木曾義仲（一一五四――一一八四）

　寿永二年七月、義仲は平家を追って京にはいり、朝日将軍と称したが、山猿のごとき六万の木曾兵は狼藉をきわめて、京童の総スカンを食い、三年一月、同じ源家の義経の攻撃を迎えるに至った。
　一月二十日、木曾勢は敗れ、義仲は東へ落ちていったが、主従わずかに五騎となった。その五騎の中に、愛妾巴御前がいた。

義仲は巴に、「お前は女だから逃げよ、義仲の最期に女を道連れにしたといわれては名にかかわる」といった。大力無双の美女巴は憤然として、追撃勢の中に一騎駈けいり、敵将を馬上からひきずり寄せ、その首をねじ切ってから東南へ落ちていった。

粟津で義仲は、家来今井四郎兼平と二人になり、今井は自分がふせいでいる間にあの松原で自害したまえと勧め、馬を返して追撃軍と血戦した。

「木曾殿はただ一騎、粟津の松原へかけ給うが、正月廿一日入あい（夕刻）ばかりの事なるに、薄氷は張ったりけり。深田ありとも知らずして、馬をざっとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。煽れども煽れども、打てども打てども働かず。今井がゆくえのおぼつかなさに、ふりあおぎ給える内兜を、三浦の石田次郎為久、追っかかって、よっ引いて、ひょうふっと射る。痛手なれば真っ向を馬の頭にあててうつぶし給えるところに、石田が郎党二人落ち合うて、ついに木曾殿の首をばとってけり」（『平家物語』）

それを知った今井四郎兼平は、太刀の先を口にふくみ、馬からさかさまに落ちて自害した。

源　義経（一一五九――一一八九）

義仲を滅ぼして二年後、義経もまた奥州に落ちてゆく身となっていた。

平泉にのがれた義経を庇護した藤原秀衡が死ぬと、その子泰衡は頼朝を怖れて義経を襲撃した。文治五年四月二十九日午前十時ごろである。

平泉中尊寺東南の丘、高館に義経はたてこもり、弁慶以下の家来は死闘した。

満身血染めになった弁慶が、いちど今生の別れを惜しみに、持仏堂にいた義経のもとに馳せつけると、義経は法華経を読誦していて、「もう少しだから、読み終えるまで頑張れ」と命じた。「さん候」と弁慶はまた駈け出していって、大薙刀で荒れ回った。「強い。強くなければ弁慶になれるものではない」と、大仏次郎は『義経の周囲』でユーモラスに書いている。

「敵も味方も討死すれども、弁慶ばかりはいかに狂えども死なぬは不思議なり。……鎧に矢の立つこと数を知らず、蓑を逆さまに着たるようにぞありける」（『義経記』）

そして彼は、衣川の河原に薙刀を突き立て、敵をにらみつけたまま立往生した。

持仏堂の義経は、鞍馬山からもらった三条小鍛冶の刀で腹を切り、奥方に落去を勧めたが、奥方はきかず、四歳の女児もろとも、堂に火をかけて、炎の中に最期をとげた。

義経が、壇ノ浦で平家を滅ぼしてから四年目のことである。

その首は美酒をいれた黒漆の櫃にひたされて鎌倉へ送られた。しかし、彼の生存を夢みる「義経伝説」はながく奥州に残った。

わずか三カ月後の七月、頼朝は泰衡討伐の大軍を起し、愚かなる泰衡は平泉に火をかけて逃亡したが、九月三日、その家来河田次郎に裏切られて殺された。頼朝は泰衡の首に八寸釘を打ちこんで晒すとともに、河田次郎の首も刎ねた。奥州藤原氏も、その栄華の都もここに秋風の中に煙となった。

北条高時（一三〇三――一三三三）

元弘三年五月二十二日、新田義貞らの叛乱軍に包囲されて、鎌倉の東勝寺で腹を切って死んだ。

古来「朝敵」の標本であるのみならず、田楽、闘犬にうつつをぬかした暗愚の大将といわれているが、この日、

「総じてその門葉たる人二百八十三人、我先にと腹切って屋形に火をかけたれば、猛炎さかんに燃えあがり、黒煙天をかすめたり。庭上門前に並いたるつわものどもこれを見て、あるいはみずから腹かき切って炎の中に飛び入るもあり、あるは父子兄弟さしちがえて重なり臥すもあり、血は流れて大地に溢れ、漫々として洪河の如く、屍は行路に横たわって累々たる郊原の如し。死骸は焼けて見えねども、後に名字を尋ねれば、この一所にて死する者すべて八百七十人なり」（『太平記』）

ここまで一族郎党を死出の供とした彼には、そうさせる何かがあったのではなかろうか。

天一坊（一六九九――一七二九）

天一坊は、八代将軍吉宗の御落胤と称して江戸に現われた。吉宗は若いころ、身分ちがいの女に生ませた子供が存生していれば、まさしく天一坊の申したてる年齢にあたるという心当りはあったが、関東郡代伊奈半左衛門が調べたところ、その子はすでに亡くなっており、天一坊自身はニセモノであるということが判明して逮捕され、享保十四年

四月二十一日、獄門になった。

　この事件そのものは実際にあったことだが、これを大岡政談の一つにしたのは俗説である。

エミリー・ブロンテ（一八一八——一八四八）

『嵐が丘』を書いた翌年の九月、弟が死んでその葬式に墓地にいったエミリー・ブロンテは、そこで風邪をひき、もともと肺結核を患っていたのが悪化した。

　しかし彼女は、医者に診てもらうことも、身のまわりの世話をひとにしてもらうことも拒否した。

　姉のシャーロット・ブロンテが友人に書いている。

「エミリーは急速に衰えてゆきます。私たちから飛び去ろうとしています。しかも、肉体の滅びの中にあっても、彼女は、私たちがかつて知らなかったほど強くなってゆきます。男性より強く、幼児よりも単純に、彼女の性格は毅然としてひとり立っています」

　エミリー・ブロンテは朝の七時に起き、夜の十時まで床につこうとはしなかった。身のまわりのことはむろん、犬の世話までひとにまかせず、シャーロットがロンドンの名医からとりよせた薬も手にとろうとはしなかった。

　十二月十九日の朝、起きるには起きたが、身体がふらつき、眼が異様にひかっていた。櫛を落したが、拾いあげる力もなかった。しかし彼女は、息を切らしながら階下まで下りて来た。まさか死期が迫っているとは思わず、彼女が苦痛をもらさず平然としているので、シャーロットは野に出て、枯れたヘザの束をとって来て見せたが、エミリーはもうそれを見わける視力さえ失っていた。

　正午ごろ、やっと医者に診てもらうことを承知したが、もう手遅れであった。長椅子に横たわって苦しげにあえぎつづけ、午後二時ごろ、日光から眼をそらし、そのまま息をひきとった。

　日本でいえば嘉永元年、滝沢馬琴が死んだ年である。

管野すが（一八八一——一九一一）

「大逆事件」は巨大なる第二の「蛮社の獄」ともいうべき当局のデッチあげであったが、その中で、管野すが（筆名・須賀子）と宮下太吉、古河力作の三人だけは、たしかに明治天皇に爆弾を投げるという計画に参画していた。

　若い荒畑寒村を翻弄し、幸徳秋水の愛人となったすがは、知情意すべて炎の女であった。

　明治四十四年一月十八日、法廷で死刑の宣告を受けたあと、看守の手でまっさきにすがの頭に編笠がのせられた。彼女は弁護人に黙礼したのち、椅子を離れた。腰縄がつけられ、手錠がはめられたとき、彼女はその手錠のまま編笠をとった。最後に同志の人々の顔を見るためであった。

　すがは、このときの心中を、市ヶ谷の東京監獄に帰房後、『死出の道艸』という手記でこう書いている。

「噫、気の毒なる友よ、同志よ。彼らの大半は私共五、六人（註・彼女は真の仲間に、宮下、古河らのほかに幸徳と新村忠雄を加えている）の為めに、此不幸な巻添えにせられたのである。私達と交際して居ったが為めに、此驚くべき犠牲に供されたのである。（中略）

　噫。神聖なる裁判よ、公平なる判決よ。日本政府よ、東洋の文明国よ。

　行れ、縦ままの暴虐を。為せ、無法なる残虐を」

　すがは透きとおった声でさけんだ。

「みなさん、さようなら！」

　その顔はかがやいていた。被告の一人内山愚堂が答えた。

「ごきげんよう！」

　彼女は笠をもとに戻し、小走りに法廷を出ていった。

　彼女は書く。

「檻車は夕日を斜めに受けて永久に踏む事のない都の町を市ヶ谷へ走った。

　終に来ぬ運命の神の黒き征矢

　わが額に立つ日は終に来りぬ」

　一週間後、一月二十五日、男性の同志とは一日遅れて、一人だけ、彼女は絞首台に立った。

佐伯祐三（一八九八——一九二八）

　大正十五年春、パリからいったん帰国したが、佐伯祐三は画業の低迷と近づく死の予感にかられ、翌昭和二年夏、ふたたび妻の米子と娘の弥智子を伴いパリに渡った。そして最後の燃焼を見せる炎のように描きつづけた。嵐のような多産であったが、描き出されるパリの裏町の絵は独特の憂愁に満ちていた。

　翌昭和三年春、彼は喀血した。以前から進行していた結核によるものであった。そのころから精神分裂の徴候も現われ出した。

　六月三十日早朝、彼はブルヴァール・デュ・モンパルナスの住まいの病床からひとりぬけ出し、妻と友人たちは夜まで捜索に駈けまわった。そして、ブーローニュ警察に保

護された祐三を発見したとき、彼は仮面のような顔になり、首から日本のお守り札を下げ、合掌してぶつぶつと何かつぶやいているばかりであった。

すぐに彼はセーヌ県立エヴラール精神病院にいれられた。

八月十五日の夜、夜どおし彼のとじたままの両眼から涙が流れおちていたが、十六日午前十一時半に絶命した。

それより前、父の結核が伝染して重態におちいっていた六歳の娘弥智子も、半月後の八月三十日に死んでいった。

小林多喜二（一九〇三――一九三三）

昭和三年『一九二八年三月十五日』、四年『蟹工船』『不在地主』を書き、六年共産党に入党した小林多喜二は、七年三月、杉並の自宅から地下に潜った。

昭和八年二月二十日、寒い曇天の日、小林多喜二は同志に会うために赤坂福吉町のそばや更科庵にはいろうとして、張りこんでいた刑事たちに追われ、逃げながら足袋はだしとなり、着ていたトンビもぬぎすてたが、溜池の電車通りで格闘の末逮捕され、築地署に連行された。

彼は昭和三年秋に、『一九二八年三月十五日』という作品を発表していた。それはその年の春の、いわゆる三・一五共産党大検挙を題材にした、凄惨きわまる特高の拷問ぶりを描いたものであったが、まさしくこんどは、彼自身がその惨禍を受ける羽目になった。

彼は築地署の水谷特高主任、警視庁から来た中川特高係長、拷問係の須田巡査部長、山口巡査らに、「きさまがあの小説に書いた通りのことを、思う存分思い知らせてやるぞ」と宣告されて、凄じい拷問を受け、途中失神した。

留置場で寒さのために意識を回復し、便所にゆこうとしたが歩行不能で、かつがれていった。出た大便も小便も真っ赤であった。拷問による腸や泌尿器の出血のためであった。それから十分ばかりして、彼は絶命した。

夜の十時ごろ、その遺体は杉並の自宅に帰って来た。壺井栄、山田清三郎、立野信之、千田是也、鹿地亘ら同志や友人たちがこれを迎えた。

橋爪健は書いている。

「硬直して土色に青ざめた顔は、極度の苦痛のため筋肉がよじれきって、まるで別人のような凄じい形相だった。その左のこめかみが直径一寸ぐらいの皮が丸くはぎとられて、肉の露出した傷口にドス黒い血痕がこびりついていた。頬には鋭いキリを突き刺したような傷あとがいくつもあり、顎の下がわは釘ぬきでえぐられたようにささくれだって黒

血がひからびついていた。

着物をぬがせると、ラクダ色のシャツとズボン下をつけていた。買ったばかりの真新しいメリヤスである。それは拷問のあとをかくすために、血だらけの下着にかえて警察で着せたものに違いなかった。首と両の手首、足首には、歯型のように肉にくいこんだ縄目のあとが、暗紫色にくっきりと刻まれている。それは一ト目で、天井の梁につりさげて拷問を加えたあとだと分った。

シャツからズボン下とぬがされた瞬間、老母は『うわっ』と悲鳴をあげ、まわりの人たちも思わずアッと息をのんだ。ちょうどパンツにかくれる部分の下腹部から大腿部にかけて、ベッタリと塗りつぶしたように、なんともいえない陰惨な渋色に変色しているのだ。まるで渋色のパンツをはいているようだった。陰茎も睾丸も同じ色に大きくふくれあがり、皮がむけて黒血がこびりついている。しかも、その渋色の皮膚のあちこちに、顔と同じような鋭利なキリを突き立てた傷あとが二十近くもあって、噴き出した血が点々と青黒くへばりついているではないか。

それは全く正視するにしのびない残忍極まる殺し方で、満座の人々は怒りに五体をふるわせ、婦人たちは顔をおおってむせび泣いた。（中略）

老母は喪心したように多喜二の屍に抱きすがって、

『ああっ、いたましい、いたましい……よくも人の大事な息子を、こんなになぶり殺しにできたもんだ……おおっ、兄ちゃん、どこがせつなかった？　どこが、どこがせつなかった？』

と、体中の傷あとをなでさすりながら、声をあげて泣き出した。しばらくは、部屋じゅうが鳴咽の声にみたされた。

ややあって、上体をしらべていた安田博士が、突然大声をあげた。

『おっ、ここもやられている。どうです、これは！』

そう云って、右手の人さし指を逆にまげてみせた。それはブラブラになって、らくに手の甲へくっつくのだ。完全骨折である。人々は、ハッと息をつめた。全身を冷たいものが走った。〈三・一五〉を書き、〈蟹工船〉を書いたその指は、官憲の手で無惨にねじ折られてしまったのだ。（中略）

やがて後日の証拠にと、あらゆる角度から何枚もの写真がとられ、俳優の千田是也その他がデスマスクを取った。その傷だらけの顔には、しかし、死をもって信念をつらぬいたもののみが持つ崇高な美しさがこもっていた」（橋爪健『多喜二虐殺』）

中原中也（一九〇七——一九三七）

昭和十一年十一月、詩人中原中也は、満二歳になったばかりの長男文也を結核性脳膜炎で失ってから、悲しみのあまり精神の異常を呈すようになった。

葬式のとき彼は、赤ん坊の死体を抱いて離そうとしなかった。それ以後、その葬式についての近所の悪口、巡査の跫音などの幻聴に悩まされたり、ラジオに向ってお辞儀したりした。十二年早々、中也が屋根の上にしゃがみこんでいるのを見た友人は「これは本物だ」と断定し、中原の母や妻と相談して、千葉県にある精神病療養所にだまして連れていった。

二月十五日、彼は病院から勝手に帰宅した。彼にとって精神病院に入院させられたこと自体が打撃であった。彼は、そのまま病院に帰らず、また長男の想い出の残る市ヶ谷の家に住むにたえず、鎌倉扇ヶ谷の寿福寺境内に転居した。

その秋、彼は知らずして、

「おまえはもう静かな部屋に帰るがよい」

にはじまる最後の四行詩を書いた。

十月四日、頭痛と視力障害を訴え、六日に鎌倉養生院に入院した。やがて持病の結核の悪化による急性脳膜炎と診断され、眼球が異様にふくれあがり、うわごとをいうようになった。

かつて中也の愛人を奪った友人小林秀雄（三十五歳）は病院に詰めきりで看病し、また友人河上徹太郎（三十五歳）は毎日東京から見舞いに通った。友人青山次郎は書いている。

「奥さんは胸の辺りをさすり、お母さんは手を取って指を揉んでいた。その母親の指を、煙草を吸うように指で挟んで口に持ってゆく、いまは悲しい中原中也の姿であった」

十月二十三日、午前零時十分、息をひきとった。

臨終に立ち会えなかった友人の大岡昇平（二十八歳）は、棺の前で泣いた。

支那事変の凄じい序曲の中に、国民は、のちに昭和前期の代表的詩人の評価を受けることになる詩人の死を、ほとんど知らなかった。

——彼の母は甚だ長生きし、昭和五十五年、百一歳で死んだ。

三十一歳で死んだ人々

人間は正視することの出来ないものが二つある。太陽と死だ。

——ラ・ロシュフーコー——

ネロ（三七——六八）

母を殺し妻を殺し、ローマ大火の罪をキリスト教徒にかぶせて虐殺し、日夜ひたすら淫楽にふけったこの若いローマ皇帝は、その暴君ぶりがようやく民衆の怨嗟のまととなり、元老院のために追放されて、わずか四人の侍臣とともに、ローマから四マイルの地にある侍臣の一人の別荘に逃亡した。

夜道を色あせた外套を羽織り、ハンケチで顔をかくして馬でゆくネロ一行を、ゆきあった通行人がふり返ってささやいた。

「あれはネロを捜す捜索隊かしら？」

別荘についてから、家来たちは、不名誉から逃れるための自殺をすすめ、ネロも、穴を掘ることと、自分の屍体を洗う水、焼く薪の用意を命じた。しかし彼は死ぬことが出来ず、泣いてくり返した。

「ああ、世界は、なんと惜しい芸術家を殺すことか！」

やがてローマから別の家来がやって来て、ネロを公敵として古式通りの刑罰に処するため、元老院が捜索中であることを伝えた。古式通りの刑罰とはどんな処刑かとたずね、それは裸にしてV字型の首かせをはめ、鞭でたたき殺すのだと聞いて、彼はついに観念した。

二本の刀を抜いて、刃先を眺めたが、それでも自分で刺す勇気がなく、「まだ最後のときは来ていない」と首をふったり、家来に「先に死んで手本を見せてくれ」と頼んだり、また「これ以上生きるのは醜態だ。まったくネロに似つかわしくない。さあ、決断力だ！」と、さけんだりした。

そして、彼を生けどりにするための捜索隊の蹄の音が聞えて来たとき、彼はついに剣をのどにつき刺した。騎兵隊がついたとき、絶え絶えの彼の息はとまった。ひらいた

眼は、ぞっとするほど凄かったという。六八年六月九日の夜明けであった。

源　為朝（一一三九——一一七〇）

身の丈は二メートルを越え、左手は右手より十二センチ以上も長く、ために弓勢人に超えた豪勇無比の為朝は、しかし保元の乱に敗れて逃れたが、近江で潜伏中、入浴しているところを襲われて捕えられ、伊豆の大島に流された。

いること十年、この大島はもとより伊豆七島の王者となり、ために嘉応二年四月、これを危険視した朝廷からの兵船がおしよせた。

為朝は弓をもってその一艘を「撃沈」し、「保元のときは一本の矢で二人の武者を射ころしたが、きょうは一矢で船ごと多くの兵を殺した」と、いばった。が、「ついにかなわぬ身に、無益の罪つくってなにかせん」と館に帰り、柱を背に腹を切った。

上陸した官軍は、怖れて家のまわりにひしめいているばかりであったが、ようやく一人が忍びこみ、為朝が自害しているのを見て、うしろから薙刀で首を打ち落した。

が、彼が逃れて琉球の王になったという伝説が生じ、馬琴はそれによって『椿説弓張月』を書く。

シューベルト（一七九七——一八二八）

生きている間、彼の才能はほとんど認められず、友人と同居して食べさせてもらわなければならないほど彼は貧しかった。

一八二八年十月三十一日、彼はレストランで魚料理を食べようとし、ちょっと手をつけただけでナイフとフォークを投げ出し、中毒にかかったらしい、といった。それ以来シューベルトはほとんど物を食わなくなった。

十一月十七日に見舞いに来た友人は「シューベルトはじっと寝ており、衰弱と発熱を訴えていたが、午後はまったく正気であった」といっているが、夕方になって意識障害が現われた。十八日には、自分が知らない部屋に寝かされている、といって、ベッドから抜け出そうとした。

「いや、それはちがう。ここにはベートーヴェンは寝ていない」と、わけのわからないことをいい、また壁をなでてつぶやいた。「ここが私の最期だ」

十九日午後三時彼は死んだ。

彼の死因については腸チフス説が有力だが、梅毒の末期症状を唱える学者もある。シューベルトは生前だれにも認められず、尊敬するベートーヴェンと会っても、声もかけられないほど内気な性質で、また彼自身窮屈にならないですむので、その生き方を好んでいたふしもある。彼の死は新聞にも報道されなかった。

日本では文政十一年、シーボルト事件が起った年である。

和の宮（一八四六——一八七七）

孝明天皇の妹和の宮は、有栖川宮熾仁親王という許婚者があり、本人もいくどか泣いて抵抗しながら公武合体という政略のいけにえとなって、十四代将軍家茂のもとへ降嫁することを余儀なくされた。文久二年、和の宮十六歳のときである。

しかるにそれからわずか四年余にして家茂は死去し、王政復古の世を迎え、徳川家は滅亡に瀕した。江戸を攻める東征軍大総督は、皮肉にもかつての許婚者有栖川宮熾仁親王であった。当時未亡人として静寛院宮という名に変っていた和の宮は、徳川家救済のために朝廷に嘆願書を出さねばならぬ悲劇的運命に追いこまれる。このとき和の宮二十二歳。

維新後は京に帰り、明治七年から東京麻布の屋敷でひっそりと暮した。明治十年八月七日、脚気療養のため箱根塔ノ沢の環翠楼に赴いたが、九月二日、俄かに衝心の発作を起し、同旅館でこの世を去った。奇しくも夫を死なせた病気と同じ脚気衝心に襲われたのである。よくよく薄命に生まれついた高貴の女人ではあった。

高山樗牛（一八七一——一九〇二）

明治三十五年十月二十五日、樗牛は以前から病んでいた肺結核が悪化し、結核専門の平塚の杏雲堂病院にはいった。その翌日、妻に手紙を書いた。

「……昨夜は咳が出て咳が出て、どうも困りました。夜はうすぐらきあんどんにて、何もすることが出来ず、それに陰気で、いろいろ家の中の事ばかり思いつづけました。(中略) どうか一月位で出たいものだと祈っております」

彼はとうてい「現代を超越」出来なかった。

十二月二十三日危篤におちいり、叔父に「自分は人生の光を見つけたが、これを世に伝えることは嘲風に頼みたい」と、それだけいった。彼の親友姉崎嘲風はそのとき仏教研究のためインドにいた。

樗牛は翌二十四日正午ごろから人事不省となり、午後一時三十分ごろ死んだ。

佐久間勉（一八七九―一九一〇）

明治四十三年四月十五日、日本海軍最初の国産潜水艦の一隻「第六潜水艇」は、広島湾新湊沖合で潜航訓練中沈没し、艇長佐久間大尉以下十四名の乗組員は全員殉職した。

艇は十五日午前十時ごろ沈没したが、以後三十分ちかく、海底で佐久間艇長は、沈没の原因、その後の処置、潜水艦の将来等を、鉛筆で手帳に書きしるした。

最後に、

「謹ンテ
陛下ニ曰ス
我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラン事ヲ
我カ念頭ニ懸ルモノ之アルノミ　左ノ諸君ニ宜敷」

と、先輩諸官の名を挙げて別れを告げ、

「十二時三十分非常ニクルシイ
瓦素林ヲブローアウトセシ積リナレトモガソリンニヨウタ
一、中野大佐
十二時四十分ナリ」

というのが最後の鉛筆の跡であった。中野大佐というのは、右の先輩諸官の名のつづきである。

これについて漱石は、「朝日新聞」に二日間にわたり、軍神広瀬中佐の漢詩を俗悪陳腐と評し、一方この佐久間艇長の遺書を、

「……往事英国の潜航艇に同様不幸の事のあった時、艇員は争って死を免れんとするの一念から、一所にかたまって水明りの洩れる窓の下に折り重なったまま死んでいたという。本能の如何に義務心より強いかを証明するに足るべき有力な出来事である。本能の権威のみを説かんとする自然派の小説家はここに好個の材料を見出すであろう。そして或る手腕家によって、此一事実から傑出した文学を作り上る事が出来るだろう。けれども現実は是丈である、其他は嘘であると主張する自然派の作家は、一方に於て佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。そうして、重荷を担うて遠きを行く獣類と選ぶ所無き現代的の人間にも、亦此種不可思議の行為があると云う事を知る必要がある」

と、述べ、かつ佐久間艇長の最後の苦悶の中に書かれた簡潔な文章を近来の「名文」として賞揚した。

アメリカの有名な軍事評論家ハンソン・ボールドウィンもまたこの艇長及び最後まで艇内のそれぞれ所定の位置についたまま死んでいた乗組員のことを紹介し、サムライの掟の勝利と絶讃した。

この悲劇のヒーローを先人とする日本海軍潜水艦が、三十年後はじめて真価を発揮する時が到来したともいうべき太平洋戦争で、ただレーダーの有無という差のためにアメリカ海軍に手もなく制圧されたことは、さらにこの悲劇を深くする。

ヴァレンチノ（一八九五―一九二六）

一九二二年「血と砂」などで女性ファンの熱狂的憧憬のまととなった彼は、ハリウッドのスターとなってわずか五年、腹膜炎にかかって死んだ。八月二十三日月曜、明るくなって来た病院の一室で、友人のウルマンが日除けを下ろしかけると、

「下ろさないでくれ、いい気持だ。太陽が挨拶に来ている」

と、いった。これが意識ある最後の言葉となった。

結婚初夜で彼のホモを知って逃げ出した元妻のジーン・アッカーも見舞いに来たが、ヴァレンチノは彼女がだれか、もう見分けもつかなかった、という話もある。

葬儀に集まった女性は十万人といわれた。日本でも「この男ほど、女性に騒がれたスターは、私の知る限り、前にも後にもない」と、徳川夢声はいっている。

園井恵子（一九一四―一九四五）

宝塚出身で新劇「苦楽座」にはいった女優園井恵子は、昭和十八年の大映映画「無法松の一生」で阪妻の相手役吉岡夫人として起用され、その凜として優雅な姿は観客をうならせた。

大映はただちに専属契約の話を持ち出したが、園井は「折角ですが、私はまだ当分、苦楽座の人たちと舞台の修業をいたしたいと存じますから」とことわった。苦楽座同人の徳川夢声は書く。「この時、彼女がもし、大映の専属となり、苦楽座から去っていたなら、広島の原爆死はなかったのだ。何を好んで彼女は、ロクに給料も貰えない苦楽座なんかに齧りついていたのであろうか？」

劇作家八田元夫は、彼女のことを「美しい、きまじめな、心がけのよい女優」と書く。

夢声はまた、舞台での園井について記す。「舞台の上で、彼女が息をはずませて相手役である私にすがりついてくる時など、一瞬ではあるが、彼女はほんとに私を恋しているのではないかと錯覚が起るほどだった」

一方、東宝の映画監督山本嘉次郎も「無法松」を見て、「その繊細巧緻な芸風と、清楚でそのくせ、どことなく漂うほのぼのとした色気」に感嘆し、自分の次回作の主演女優を園井恵子にしたいと考えて、彼女のために脚本を書き、その行方を探し求めたが、彼女がすでに移動演劇に属して地方に出ていたため、なかなか所在がわからなかった。ところがある日、東宝撮影所にゆくと、いま園井恵子が来て、映画の仕事を求め、二、三分前に出ていったという話であった。山本はすぐに追ったが、またも彼女の行方は逃げ水のごとくとらえることが出来なかった。

このことを「夏の、ベラボーに暑い日」と、山本は記している。「無法松」の封切は十月であったから、それは翌昭和十九年のことであったろうか。

死神は、ここでも彼女を離さなかったのである。

園井恵子は、苦楽座の移動劇団、俳優丸山定夫のひきいる「桜隊」の一員として、昭和二十年六月末に広島に来て、そこを中心に中国山陰各地を巡演し、たまたま広島に戻っていた八月六日、原爆の閃光下に置かれた。

彼女はその朝、丸山らとともに広島市堀川町の宿舎にいて、爆風で庭に吹き飛ばされて一時失神した。気がついてから、やはり庭に吹き飛ばされていた座員の高山象三とともに、燃える町から広島東方の比治山へ逃げたが、八日、宝塚時代からの彼女の後援者であった神戸六甲山麓の中井家にたどりついた。

そのときは園井は、まだふしぎに無傷に見えたが、次第に発熱と身体の痛みを訴えるようになった。

「十九日の園井の体温は三十九度。体の節々の痛みを訴えました。翌二十日朝の体温は三十九度八分。胸部の苦しさを訴え、左腕に紫色の小豆大の潰瘍が出来、脇や腰に皮下出血があって、そこをしきりに掻ゆがり、脱毛がはじまりました。夜になると額に脂汗をにじませて息遣いもあらく胸の苦しさを訴え、時々幻覚が起り、その夜下血して、内臓が破壊していることを示しました。皮下出血の紫色の点々がどんどん増えてゆき、左腕の小豆大の潰瘍は葡萄大にふくれて壊疽状を呈し、渇を訴え、全身を掻ゆがって、掻いてもおさまらず狂いだしそうで、体温は四十度を越えました。

その時隣室では、象三の通夜がひそかに行われていましたが、その間、園井の苦しみはつのるばかりで、ふと幻覚におそわれて声をあげたりし、それもすでに言語中枢がおかされているのか言葉にはならず、全身を掻ゆがって訴え、左腕の壊疽は杏大となって黒紫色の光を帯び、皮下出血が全身に拡がっていました。

二十一日。（中略）

園井の左腕の杏大の腫物は桃の実ほどにふくれて熟れきっていたのを、薄田のママが注射針の先でちょっと突いただけでぷすと音をたててくずれ、黒紫色の血膿がとくとくとほとばしり出ました。園井はすでに意識は混濁していて、視点のない瞳を空しく動かしながら、何か言いたげに笑いました。

薄田のママがそれにあいづちを打つように、

『ええ、ええ、すぐらくになりますよ、早くよくなってねえ』

などとはげまし、やさしく手を撫でてやる。やがて呼吸がせまってきて、悶絶の形で園井の息が絶えました」（江津萩枝『桜隊全滅』）

三遊亭歌笑（一九一九——一九五〇）

「われたらちねの母の胎内を出でしときは、長谷川一夫とおぼしき容貌なりしが、年とともに一変し……」

というマクラで、敗戦後の日本人を悲しく爆笑させた怪異珍顔の落語家歌笑は、昭和二十五年五月三十日の夜、雑誌「夫婦生活」のために大宅壮一との対談をすませ、寄席にゆくためにホロ酔いきげんで銀座松坂屋の前を通行中、アメリカ軍の憲兵ソックス軍曹のジープに十メートルはね飛ばされて即死した。

梅川昭美（一九四八——一九七九）

幼児時代、貧しさのために別れた両親の間を、キャッチボールのごとく転々として育てられた梅川は、小学校のころは、教師も同級生も、のちになって記憶がないほど影薄い子供であったが、昭和三十八年、当時住んでいた広島県大竹市で、金欲しさに白昼強盗に押し入り、二十三歳の若妻をナイフで殺害した。

このとき彼は満十五歳と八カ月で、逮捕されたあとも平

然として、悲憤した被害者の遺族が警察の玄関に押しかけて、「犯人を出せ」とさけぶ声を聞くと、取調室で猛然と立ちあがって、「呼んで来い、勝負しちゃる」とわめき出すほど凶暴な少年に変っていた。

彼は少年院に送られ、広島家裁技官も、その性格の異常に乾いた非情性を見て、「この少年を今後社会に出せば、同種の犯罪を繰返し、ふたたび犠牲者を作る可能性がある」と診断したが、十六歳未満という年齢のため、一年半の拘束だけで、また野(や)に虎は放たれた。

梅川は大阪に出てバーテンとなり、店を転々とし、二、三人の女と次々にアパートで同棲生活をしていたが、やがてまた一人になった。おそろしく服装や髪型に気を使うのと、変に見栄坊(みえぼう)であるほかは、だれの眼にもとまらぬ陰気な若者であった。バーやアパートの人々も、彼が大藪春彦の小説を愛読し、ニッサン・ミクロ社製上下二連銃を買いこんで、射撃を唯一の趣味としていることを知らなかった。

三十になったとき、彼は友人にいった。「おれは十五で殺しをやった。あれから十五年や。ここらで何かでかいことをやらんといかん」

その年の秋ごろから、彼は銀行強盗の計画をたてた。適当な銀行を物色し、実行後逃走する車の配置や、その中にすぐ変装する洋服の用意まで考える周到さであった。

昭和五十四年一月二十六日午後二時半、彼はパーマをかけたアフロヘアにレジャーハットをかぶり、ミラーグラスをかけ、車で大阪市の三菱銀行北畠支店に乗りつけ、二連銃を持って銀行のフロアにはいっていって、いきなり三発威嚇発射し、

「金を出せ、出さんと殺すぞ。十数えるうちに五千万円出せ」

と、わめきながら、行員の一人に銃をつきつけた。

そして、行員がこの銃を手で払おうとすると、いきなりひきがねをひいて射殺し、ついで眼の合った別の行員も撃ち倒した。さらに逃げ出した客から急報を受けて駈けつけたパトロール中の警官二人も、銀行に突入するやいなや射殺した。

これは梅川にとっても予期せぬ事態の進展であったろうが、彼の残虐性は、その絶望感から炎のように燃えあがった。

殺到するパトカーのサイレンの音を聞くと、彼は行員に銀行のシャッターを下ろさせ、この大密室に行員と客四十数名を人質にして立て籠った。

彼は、「こうなったのはお前の責任や」といって、さら

に支店長を射殺したのみならず、行員全員を裸にして自分の周囲に立たせ、

「わしはどうせ死刑やから、もう何人殺しても同じや」

「お前ら、ソドムの市を知っとるか。これからこの世の生地獄っちゅうもんを見せたる」

「おれは精神病やない。道徳と善悪をわきまえんだけや」

などと、うす笑いしながらいって、撃ち倒してうめいている行員の耳を同僚に切らせたり、裸にした女子行員にその場で排泄行為をさせたり、以後四十数時間にわたってなぶりつくした。包囲した警官隊は、とりはずした自動支払機のキャビネットの間からその光景を見つつ、犯人をかこんで立たされた人質の肉の壁に制せられて、切歯しながら、どうすることも出来なかった。

一月二十八日午前零時、しかし大阪府警のハイジャック用の特殊部隊七人は、ひそかに銀行の廊下にしのびこみ、突入の機会をうかがっていた。

午前八時四十分、支店長席に坐って、これまで眠りを知らないかのごとく暴威をふるっていたタフな梅川も、さすがに銃を机の上において、差入れさせた朝刊を読んでいるうち、ふと睡魔のために首を落しかけた。

四十二分、七人の警官は突入した。はっとして机上の銃をとり、撃鉄を起そうとした梅川の頭部と右頸と右肩に三発の弾丸が食いこんだ。彼は頸から鮮血を噴きながら椅子からころげ落ちた。

梅川はなお生命があり、大阪警察病院に急送されたが、意識不明のまま、午後五時四十三分に絶命した。

おそらく彼自身に死の苦痛はなかったろう。この悪の化(け)身(しん)のような犯罪者は、世の中でいちばん安楽な死を享受(きょうじゅ)したのである。

彼の与えた恐怖は、それ以後おびただしい銀行強盗事件のエピゴーネンを発生させる原動力となり、彼はこの種の犯罪の偉大なるパイオニアとなった。

三十二歳で死んだ人々

同じ夜に何千人死のうと、人はただひとりで死んでゆく。
——山田風太郎——

キリスト（前四頃——二八・推定）

イエス降誕の年を西暦元年としたということになっているのだが、実際にキリストが生まれたのは紀元前四年という。死んだ年も西暦三〇年という説もある。あいまいなること日本の「紀元節」と五十歩百歩である。

とにかく、エルサレムでパリサイ党や祭司階級の宗教を批判し、ユダに密告されて捕えられ、四月七日昼過ぎ、ゴルゴタの丘の上で、十字架にかけられ、午後三時ごろ死んだ。

「昼の十二時より地の上あまねく暗くなって三時に及ぶ。三時ごろイエス大声に叫びて、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言い給えり。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり（中略）イエス再び大声に呼わりて息絶え給う」（『マタイ伝』）

この人物の「臨終」については、「異教徒」にとってまことに書くことが難しい。

坂本竜馬（一八三五——一八六七）

慶応三年十一月十五日の夜、京都河原町三条下ル蛸薬師の醤油屋、近江屋の二階で竜馬は火鉢を中に客の同志中岡慎太郎と話していた。竜馬は風邪気味で厚着をし、その上寒い夜であったので、小僧にしゃもを買って来いと命じた。

それといれちがいに八時ごろ、十津川郷士と名乗る三人の男が訪れた。

竜馬の従者の相撲取り上りの藤吉がその名刺をとりつぎ、部屋を出て来ると、三人の男はもう階段を上ってそこまで来ていて、いきなり藤吉に乱刃を浴びせた。

竜馬が何の騒ぎとも知らず「騒えな！」と土佐弁で叱りつけたとき、二人の刺客が躍りこんで来て、「コナクソ！」と叫びながら、竜馬と中岡の頭部を割りつけた。

竜馬は背後の床の間の刀をとろうとして、また背後から袈裟がけに斬られつつ、刀はとったが抜くいとまもなく、鞘のまま渡り合い、中岡も大刀を入口近くにおいていたので、脇差でこれまた鞘のまま防戦した。しかし、たちまち両人とも乱刃の下に倒された。

刺客たちは仕止めたと思ったのか、「もういい、もういい」といって、謡曲鞍馬天狗を口ずさみつつ悠々と立ち去った。

そのあとで竜馬は息を吹き返し、はじめて刀をぬいて行灯に照らし、残念、残念といいながら、階段のある隣室まで這い出したが、「おれは脳をやられたからもう駄目だ」と微かな声でいって、こと切れた。頭部の傷からは脳味噌が溢れ、血は階段から流れ落ちた。

中岡慎太郎も右手切断に近い重傷をはじめ十一カ所斬られていたが、急を聞いて駈けつけた土佐藩士たちに遭難のようすを詳しく話し、二日後の十七日の夕、絶命した。

この暗殺者は、清河八郎を斬った佐々木只三郎の手の者ではなかったかといわれるが、佐々木只三郎は、それから五十日後の鳥羽伏見の戦いで傷つき、死んだので、この大型暗殺隊長の証言は得られない。

もう少し生かしておきたかった、と思われる人間は史上そう多くないが、坂本竜馬はたしかにその一人である。竜馬は同郷の岩崎弥太郎より一歳若かった。しかも海運商事の面で、彼は弥太郎の兄貴分であった。彼にもう十年、二十年の生命を与えてやったなら、彼が明治大財閥の創始者となったかも知れない。

しかしその代り、決して後代長く小説や映画のヒーローとはならなかったにちがいない。

ジプシー・ローズ（一九三五——一九六七）

戦後の焼跡に続々出現しはじめたストリップ小屋のストリッパーの中で、ドラムに合わせた強烈なグラインドでひときわその名をうたわれたジプシー・ローズ（本名・志水敏子）は、昭和三十年から三十五年にかけて人気絶頂をきわめたが、その後次第にドサ回りの運命を余儀なくされ、酒量がふえ、健康も害した。

彼女のマネージャー兼内縁の夫正邦乙彦は語る。

「なにしろストリッパーになるかパンスケになるかという時代でしたからね。テレやコンプレックスで酒をあおる踊

り子も多かった。彼女も仕事に行き詰り、ドサ回りをはじめるころから酒量がぐっとふえた。
晩年は僕と二人で山口県の防府市でバーをやってたんです。『ジプシー』という名前のバーを。彼女は死ぬとわかっていながら酒を飲んでいた。死ぬ二、三日前から顔がむくんで、シャックリが止まらなくなった。それでも病院にはゆかず、スロージンを飲みつづけ、酒瓶を握りしめたまま死んでいったんです」
彼女が壮烈な生涯をとじたのは昭和四十二年四月二十日であった。

若松善紀（一九四三——一九七五）

昭和四十三年六月十六日午後三時半ごろ、横須賀線東京ゆき電車が大船駅近くを通過中、前から六輛目の車内の網棚の荷物が突然大爆発を起し、乗客一名死亡、十四人が重軽傷を負うという事件が起った。
爆発物の残片中の新聞のきれはしを手がかりに、東京の日野市在住の二十五歳の大工若松善紀が逮捕されたのは、同年の十一月九日のことであった。この捜査は絶讃に値した。彼は恋する娘が結婚し、よく横須賀線を利用するので、この電車を爆破してやろうという奇怪な衝動にとり憑かれたものであった。
翌四十四年三月死刑判決。四十六年四月最高裁で死刑確定。
獄中で彼はキリスト教に回心し、短歌を習った。

死を望む心なけれど独房に虚しきときは詩篇繙く
拇印して処刑の契約済ませしがふと思ひ出で指の朱ぬぐふ

死刑囚には宗教に心を向ける者が多い。が、その多くは表面的に死の不安をまぎらわせるためか、甚だしきは教誨師からの差入れを目当てにしている者もある。深化して真の信仰にはいる者はそう多くない、と、東京拘置所に医官として勤務した作家加賀乙彦は書き、しかし中には驚きと感嘆を与えた真摯な回心者もいる、としてあげた少数の死刑囚の一人がこの若松である。
昭和五十年十二月四日、若松は加賀に最後の手紙を書いた。
「……〈お迎え〉のドアが開いた時私はまったく不安も動揺もありませんでした。平安な気持で面会にでも行く足どりでした。所長さんに、お世話になったお礼を述べ、握手させて頂きました。このゆとりに自分自身が不思議でした。（中略）これまで自分自身との闘いは大変なものでした。しかし、こうして現実に平安なる自分の姿を見れば、やはり、わがキリスト教信仰はつちかわれて来て、いま成就したと思わなければなりません。……」（加賀乙彦『死刑囚の記録』）
翌五日朝、刑が執行された。

三十三歳で死んだ人々

> 人は死んで三日たてば、三百年前に死んだのと同然になる。
> ——山田風太郎——

アレキサンダー大王（前三五六——前三二三）

このヨーロッパのアジア侵略の開祖は、アラビア遠征の準備中、バビロンで熱病にかかり、十日間苦しんだのち、前三二三年六月十三日の夕刻に死んだ。
死ぬ前に将軍たちが、帝国はだれにゆずるべきか、と尋ねたら、アレキサンダーは答えた。
「最もそれに値する者に」
アレキサンダー大王にしては、何だかつまらない遺言で

ある。
　死の二日前、すでに大王死すという風評が伝わって兵士たちが騒いだので、病室の扉をあけ、兵士たちに武器を捨てさせて下着のまま、一人ずつ枕頭を通過させて、彼がまだ生きていることを見せた。

北条時宗（一二五一——一二八四）

　文永五年、蒙古の牒状をもたらした使者を追い返したとき、執権北条時宗は数え年で十八歳であった。以後、蒙古襲来の文永の役が二十四歳の十月、再襲の弘安の役が三十一歳の五月—七月である。
　両役ともに日本軍の必死の防戦に加えて、いわゆる神風が吹いて蒙古軍は覆滅した。特に前者はふつうなら台風の季節ではなかったから（旧暦の十月はいまの十一月）、まさに神風と呼ばれるゆえんだが、もともと玄界灘ではこの季節でも大嵐になることは稀ではない由。
　蒙古襲来前、日本には邪宗はびこるゆえ仏罰として異国の侵略を受ける、と鎌倉で辻説法を雄叫びつづけて罪せられた日蓮は、その邪宗国日本に神風が吹いたことについては、ウンともスンともいわなかった。
　この両役における心労、戦功者への恩賞問題、さらに蒙古の再々襲にそなえる防備などに精根をついやしつくしたのか。——『北条九代記』によれば、
「弘安七年四月四日、北条相模守時宗、病によって剃髪し、法名道果とぞ号しける。
　去年の春の初めより何となく心地煩い、打ち臥したまうほどにはあらで快からずおぼえ、関東の政治も合期しがたく北条重時の五男弾正少弼業時をもって執権の加判せしめらる。
　今年になりて、時宗とりわきて病重くなりければ、内外の上下大いに驚きたてまつり、さまざま医療の術をたのみて耆扁が心をさしまねくといえども、さらにその験もなし。今はひたすら打ち臥したまい、漿水をだに受けたまわねば、諸人足手を空に為し、神社に幣帛をささげ仏寺に護摩を修し、精誠の祈禱を致さるといえども、天理にかぎりあり命葉保ちがたく、漸々に気血衰耗し、この世の頼みもなくなりたまいて、円覚寺仏光禅師祖元を戒師として出家せられしが、同日（四月四日）の暮方についに卒去したまいける」

清河八郎（一八三〇——一八六三）

　出羽庄内出身の浪人ながら、幕府の持て余していた江戸の浪人たちをかき集めて上洛し、京都の治安に当らせると運動して、文久二年浪士組を作り、上洛後は取締るべき志士と結んで攘夷集団に目的変更した怪策士。これで三十を過ぎたばかりとは相当なものである。
　狼狽した幕府は江戸に呼び返したが、清河を持て余して、ひそかに暗殺を命じた。
　文久三年四月十三日、清河は友人の旗本高橋泥舟を訪問したが、高橋が登城の支度をしていたので妻女が玄関で応対した。そのとき彼はふだんに似ず顔色悪く、扇に、
「魁けてまたさきがけん死出の山まよひはせまじすめらぎの道」
と、書いて立ち去った。
　それから彼は、麻布一ノ橋の上山藩邸内の知人金子与三郎を訪ねて酒食の饗応を受け、午後四時過ぎ辞去して一ノ橋に来かかった際、同じ新徴組の佐々木只三郎以下六人の待ち伏せにあって斬殺された。
　その直後の景を見にいった上山藩士によれば、
「今の午後四時ごろに、表門の方で人殺しがあるというから、出て見た。一ノ橋を渡って一間か二間ほど行きますと、立派な侍が倒れて、首が右に落ちかかって転げていました。その様子は、左の方の後ろから横に切られたものと見えて、左の肩先一、二寸ほどかけて右の方、首筋の半ば過ぎまで、みごとに斬られておりました」
　清河は自分の運命を予測していたのか、予測していたとして、なぜその運命を避けようともせず、その直前に高橋に扇の歌を残していったのか、永遠の謎である。

松井須磨子（一八八六——一九一九）

　最初の新劇女優として、かつまた「カチューシャの唄」「ゴンドラの唄」「カルメンの唄」などで一世を風靡した松井須磨子は、大正七年十一月五日、当時はやったインフルエンザで、愛する指導者島村抱月を失った。彼女はその胸に顔をおしあて、「これではあまり残酷です。何とかして下さい、何とかして下さい」と泣き叫んだ。
　翌大正八年、彼女は耐える力を失った。一月一日からはじまった芸術座の「カルメン」に須磨子は三日出演したが、四日の夜、十二時近くに芸術倶楽部に帰って来た彼女は、

坪内逍遥宛に遺書を書き出した。
「……舞台のいろはから教えていただいた先生（筆者註・逍遥）にそむいてまでも縋った人に先き立たれ、どう思っても生きてゆかれません。（中略）申しあげにくいことですが、何卒私の死体はあの方の墓へ埋めるようお取り計らい願います」
そして、抱月の二カ月目の命日たる五日の午前四時ごろ物置にはいって縊死した。
抱月には妻があったから、彼女が抱月の墓にはいることは許されなかった。
雑司ヶ谷にある抱月の墓地は、実は須磨子が買ったものであった。しかし彼女の墓は別に作られ、抱月のそばにはやがて抱月の妻がはいることになった。
同じ墓にこそはいれなかったが、結局須磨子は恋の勝利者となった。その野性的で強烈な自我でうぶな抱月をとらえた反面、周囲のすべてから総スカンをくっていたことも彼女の自殺の一因であろうが、この死によって後世彼女のイメージは浄化され、彼女と対立した連中の影をすべて薄くしてしまったからである。

永野一男（一九五二――一九八五）

岐阜県恵那郡東野村という寒村の極貧の家に生まれ、昭和四十三年中学を卒業しただけで集団就職による工員から出発した永野一男は、その後十年、さまざまな職業のセールスマンを転々とし、その間横領罪やスリ現行犯で検挙されるなどの経歴をはさみつつ、昭和五十三年、銀座に金の先物取引を扱う「豊田商事」なるものを設立した。
のち五十六年大阪に移転し、強引なセールスによって主として老人相手に金を買わせ、現物は渡さず（はじめから無い）預り証だけ渡すというペーパー商法によって二千億円という天文学的な資金を集め、昭和六十年には百社に及ぶ種々のペーパーカンパニー、従業員七千人という一大コンツェルン（?）を築くに至った。時に永野は満でいえば三十二歳。一メートル六十あるかないかの白面の小男であった。
彼は「商売に道徳は不必要」と、うそぶく一方で、コンサルタントとして多数の顧問弁護士を傭い、「法律的にも道義的にもまったく問題はない」と豪語していたが、金だけとられて金を渡されない被害者の訴えが続出するに及んで一大社会問題化し、昭和六十年六月十七日、ついに兵庫県警の事情聴取を受けるに至った。
その翌日六月十八日の午後六時半ごろ、彼がただ一人で住む大阪市北区天神橋の「ストークマンション扇町」五階の部屋の前に、三十人ほどの報道陣がつめかけているところに、鉄工所経営者と名乗る酒気をおびた飯田篤郎と、その元従業員の矢野正計が現われた。パンチパーマに黒ずくめの服、髯モジャの矢野は黒カバンをぶら下げていた。
そして、ドアの横の窓のアルミ桟を蹴破って中に侵入、数分格闘の物音がつづいたあと、二人とも凄じい返り血をあびて現われ、飯田は平然として「殺った。おれが犯人だ。警察を呼べ」といい、矢野は黙々として、しかし誇らしげに血みどろの刀を見せた。それは黒カバンに入れられていた旧陸軍の銃剣であった。カメラマンをふくむ三十余人の報道陣の前で行われた惨劇であり、その光景はまざまざとテレビで茶の間に送りとどけられ、かつまたのちに「フォーカス」に発表された、みずから血しぶきを満面にあび、砕けんばかりに歯をむき出した永野の断末魔の形相は人々を戦慄させた。
サギ的手法で二千億円の金を集め、「香港の銀行を買収しようか」とか「いっそアフリカのどこかの国一つを買おうか」など、誇大妄想的な怪夢をえがいていた永野は、全身十三カ所斬られ、中でも左脇腹から深さ十八センチも銃剣を刺しこまれたのが致命傷であった。そのポケットの黒革の財布には七百十一円はいっているだけであった。
警察に連行された飯田は「法律は手ぬるい。わしらがやらんかったら、ほかにやる者はおらん」と、うそぶいた。

三十四歳で死んだ人々

路傍の石が一つ水に落ちる。
無数の足が忙しげに道を通り過ぎてゆく。
映像にすればただ一秒。
——山田風太郎——

浅野内匠頭長矩（一六六七——一七〇一）

元禄十四年三月十四日午前十時ごろ、江戸城松ノ廊下で高家吉良上野介義央に刃傷を起し、午後六時過ぎ、田村右京大夫の屋敷の庭で切腹を命じられた。

辞世「風さそふ花よりもなほ我はまた春の名残をいかにとかせん」

この内匠頭に限ったことではないが、昔の人は、こういう事態に、よくこんな辞世を残せたものだと感心する。

ともあれ、かくて「忠臣蔵」の幕はあがる。この一大名のアタマにきた行為は、はからずも日本武士道の一大叙事詩を作り出した。もしこの事件がなかったら、いわゆる徳川三百年はただのっぺらぼうの印象を残したろう。

近藤　勇（一八三四——一八六八）

明治元年春、近藤勇は、江戸をはじめ関東各地に起った佐幕派の脱走兵を集め、下総流山に本陣を構えて官軍と対決しようとしたが、まだ態勢が整わないうちに官軍を迎える羽目になった。

四月四日、やむなく近藤は降伏し、かつ大久保大和という偽名でいい逃れようとしたが、たまたま官軍の中にいた元高台寺党（新選組が惨殺した伊東甲子太郎一派）の一人に見破られた。

土佐の軍監としてその場にあった谷守部は嘲笑していう。

「猾賊多年悪をなす。志士を殺害すること無数。天命つきて縛につけば三尺の子供でも看破されることは明らかなのに、愚かしくもぬけぬけと首を出して来る。誠に名高き近藤勇が寸鉄も労せず縛についたのは、古狸がたくみに人を化かし、調子に乗って昼間に出て来て子供に捕ったよう

なものだ」

さすがの近藤勇も、のちの頑固将軍谷干城にかかっては叶わない。

近藤が事態を甘く見ていたことは事実だが、しかし新選組が無実の罪を着ていることもあることを彼は知らなかったのだ。元陸援隊士の谷は、坂本竜馬や中岡慎太郎を殺したのも新選組だと思いこんでいた。そうでないことを谷干城が知っていたら、近藤勇は助かったかも知れない。

近藤はたちまち縛りあげられて、囚人駕籠に乗せられて、官軍本営のある板橋に送られ、四月二十五日、宿はずれの平尾一里塚（今の国電板橋駅東口あたり）で斬首された。

首はここで数日さらされた上、京都に送られ、三条河原でふたたびさらしものになった。

土方歳三（一八三五——一八六九）

土方歳三は、勇が捕えられるとともに、窃かに流山を脱出し、会津に至り、更に箱館へ行って、榎本武揚の幕下に参じ、陸軍奉行並となったが、武揚の人となりを察し、遂には官軍と和することを予知して極度に悲観し、合戦の度に、自ら危地に出動して死を希う風であったが、明治二年五月十一日の激戦で馬上弾丸に当って戦死した。常に同僚に語って、

「ああ、我輩は死に遅れた。若し我軍官兵と和する事あれば、地下に近藤と相見ゆるを得ない」

と、いっていたという。（子母沢寛『新選組始末記』より）

織田作之助（一九一三——一九四七）

昭和十五年、二十七歳で『夫婦善哉』を書いた織田作之助は、雌伏していた戦争期が終って、昭和二十一年が明けるとたちまち大流行児となり、「読売新聞」に『土曜夫人』を連載しはじめた。

十一月大阪から上京して銀座裏佐々木旅館に宿泊、訪客と原稿に忙殺されていたが、十二月五日午前二時ごろ、電気コンロを囲んで編集者たちと雑談中、突如大喀血を起した。（彼は昭和九年三高時代にも喀血したことがあった）

十二月十日の朝、東京病院（後の慈恵医大附属病院）に運ばれたが、それは旧兵舎を移転したぼろぼろの建物で、織田作は、これはまるで施療病院やないか、旅館に戻せ、と、だだをこねてあばれた。

「（二十二年一月）十日の朝、口から回虫が出た。午後から

烈しい喀血が再び始まった。暗くなった。手がばたんとふとんに落ちた。付添い看護婦が作之助の顔をのぞき、ああと声をあげて廊下へ走った。猿田医員がすぐ来た。織田さんしっかり、と言いながら、ビタカンフルを何本も胸に打った。ぱっと目を見開いた。意識ははっきりしていた。かすれた聞き取り難いつぶやきを、昭子は聞いた。思いが残る」（大谷晃一『生きた愛した書いた——織田作之助伝』）

当時二十五歳、作之助が第一回の喀血で窒息しかけたとき、口に口をつけて血を吸ってやったという昭子夫人は、のちに徳川夢声の「問答有用」で語る。

夢声「死ぬとき、最後のことばは？」

織田「それがね、言語道断なんです。酸素吸入をかけられながらいったことばが、お前に思いが残って、死にきれない」

「猿田は脈を取り続けていた。作之助は左向きになって、胸をかきむしろうとする。小さい気管支に血が詰る。目のくぼみが一きわ濃くなった。心音が止まった。猿田は懐中電灯を瞳孔に当てた。反射がない。ご臨終です、と拝んだ。昭子はベッドの端にしがみついていた。部屋には猿田と昭子がいたきりである。薄暗い電灯の下の病室は、灰色だった。まくらもふとんも、血で汚れている。血だらけの作之助の顔は、ねずみ色に変っていった。肺結核による大量出血のための窒息死である。昭和二十二年一月十日午後七時十分」（大谷晃一「同右書」）

織田作之助の死を聞いた太宰治は書いた。

「私は織田君の短篇小説を二つ通読した事があるきりで、また逢ったのも二度、それもつい一箇月ほど前に、はじめて逢ったばかりで、かくべつ深いつき合いであったわけではない。

しかし織田君の哀しさを、私はたいていの人よりもはるかに深く感知しているつもりであった。

はじめて彼と銀座で逢い、『なんてまあ哀しい男だろう』と思い、私もつらくてかなわなかった。彼の行く手には、死の壁以外に何も無いのがありありと見える心地がしたからだ。

こいつは、死ぬ気だ。しかし、おれにはどう仕様もない。先輩らしい忠告なんて、いやらしい偽善だ。ただ、見ているより外はない」

そして、その翌年に太宰もまた死ぬのである。

山口良忠（一九一三——一九四七）

東京地裁判事であった山口は、太平洋戦争敗戦後、裁判官として闇米を買うことを拒否して栄養失調になり、昭和二十二年八月二十七日、東京地裁で倒れた。受診の結果、肺浸潤の宣告を受けた。それでも彼は九月一日まで登庁して担当の事件に判決を下し、九月七日にやっと郷里の佐賀県白石町に療養のために帰郷したが、もう手おくれであった。

与えられた食餌はすべて下痢となって排泄された。

十月十一日午後二時半、夫人が新聞を持って来て、それを受けとろうとした判事の手がふいにぱたりとおちたかと思うと、彼は死んでいた。

残された感想集には、こんな文章が書かれていた。

「善人の社会での落伍者は悪人であるが、悪人の社会での落伍者は善人である」

ガガーリン（一九三四——一九六八）

一九六一年四月十二日、ソ連バイコヌール基地から打ちあげられた一人乗りの宇宙船ヴォストーク一号で、史上はじめて地球を一周し、「地球は青かった」という言葉を残したガガーリンは、一九六八年三月二十七日、航空機による訓練飛行の際、墜落事故を起して死んだ。

三十五歳で死んだ人々

> 死は終りを意味するが、残された者には始まりを意味する。
> ——E・シュナイドマン——

モーツァルト（一七五六——一七九一）

一七八九年以来モーツァルトはウィーンに住んでいたが、収入の少なさと妻のコンスタンツェともども経済観念の欠如のため——さらにそのコンスタンツェも骨膜炎でバーデンに静養にいっているため、貧しい一人暮しをつづけていた。

死の前年、友人のプフベルクに、彼は手紙を書いている。「現在、全く無一文で……そのために『四重奏曲』も脱稿出来ないでいます」

彼の晩年の窮乏の原因については、彼が何か賭事に関係していたのではないかという説もある。

ともあれ一七九一年の春ごろから肉体的精神的な異常を訴えはじめた。腰の痛み、全身の倦怠感があり、彼は、だれかが自分を毒殺しようとしている、といった。

それでも彼は、五月ごろから「魔笛」の作曲にとりかかったが、その間、何度も眩暈、頭痛、胃痙攣、嘔吐、失神をくり返し、体重はへりつづけた。

そして彼は、十一月二十日からベッドを離れることが不可能となった。手足が腫れ、鳥籠のカナリヤの鳴声にさえ生理的な痛みを感じた。

十二月四日の夜明け方、高熱と頭痛のため、ついに「魔笛」は未完のまま、弟子の一人に完結のしかただけを指示して意識を失い、十二月五日午前零時五十分に息をひきとった。

集まったわずか数人の知人と弟子は、おりからの雪まじりの悪天候のために墓地に見送ることも出来ず、屍体はただ墓掘人の一人によって、セント・マルクス墓地の中の共同貧民墓地に葬られ、数十日後にはその正確な場所さえ不明になった。

彼の症状は慢性水銀中毒に適合するといわれ、そのため当時彼と音楽上のライヴァルであった老作曲家アントニオ・サリエリ——シューベルトの師——が嫌疑を受けたが、真相は不明の雲につつまれたままとなった。

同じころ、フランスは大革命のまっただなかにあった。

ダントン（一七五九——一七九四）

フランス革命に際し、ジャコバン党の巨頭でありながら、過激派の内部分裂によりロベスピエールの策謀にかかって、一七九四年四月五日、彼は断頭台に送られた。

処刑台の下で、同志エロード・セシェルが彼に接吻しようとすると、死刑執行人がそれをとめた。ダントンはいった。「馬鹿野郎、きさまは、ギロチンの籠の中でおれたちの首が接吻するのをとめることは出来ないぞ」

断頭台の上に上ったとき、彼はいった。「おお妻よ、最愛の人よ、子供たちよ！　おまえたちとはもう会えなくなるのだなあ」

それから、気をとり直していった。「さあ、ダントン、弱気を吹きとばそう！」

ギロチンに縛りつけられたとき、彼は執行人にいった。

「おれの首を民衆に見せるんだぞ。おれの首はそれだけの値打ちがあるんだぞ」

鼠小僧次郎吉（一七九七——一八三二）

三田村鳶魚の『鼠小僧次郎吉』によれば、彼は、「最後は天保三年四月三十日から、以前の水茶屋半次郎方に同居して居りましたが、五月八日に浜町の松平宮内少輔の屋敷に忍び込み、殿の御寝所近く進み寄った時に、一人の侍婢が目をさまして、ひそかに殿に盗人の忍んで居ることを告げた。近習の侍どもが無造作に取押えてしまって、早速に其筋へ突出しましたから、北町奉行榊原主計頭の手付大谷木七兵衛が門前捕りにしました」

そして取調べの結果、次郎吉が大名屋敷ばかり、思い出したものだけでも百三十九回以上にわたり忍びこみ、一万二千両を盗んだことが判明した。

それは大名屋敷が外見厳重に見えるが、いったん中にはいってしまえば、警戒がきわめて散漫であることを知ってのことであったが、とにかく大名屋敷ばかり狙ったという痛快性が後世に鼠小僧の名を残すもととなり、はては「義賊」とうたわれるまでになった。

「町奉行榊原主計頭は老中月番松平周防守の決裁を受けまして、異名鼠小僧、無宿入墨の次郎吉に、引廻しの上、品川に於て獄門に申し付けると宣告し、天保三年八月十九日、次郎吉は三十七歳を一期として刑戮されました。……『浮世の有様』の記載によりますと、鼠小僧は引廻しの時に、顔に薄化粧をして、上に黒の麻帷子、下に更紗を着用、八端の帯を締めていたそうです」

孝明天皇（一八三一――一八六六）

慶応二年十二月十一日、数日前からの風邪と思われた症状をおして、内侍所臨時神楽に出席したが、翌日から高熱を発し、痘症と診断された。十六日から発疹、以後、丘疹、水疱、膿疱と、天然痘の順当な経過をたどり、二十日過ぎには回復に向うと見られたのに、二十四日に至り、容態悪化、二十五日夜十一時崩御した。皇太子睦仁親王（明治天皇）は未だ十四歳であった。

この天皇の死は、岩倉具視の毒殺によるという執拗な説が当時から現代にいたるまでつづいている。

孝明天皇は天皇でありながら倒幕を好まず、そのために王政復古を志す岩倉に毒を盛られたというのである。天皇が疱瘡にかかったことは事実だが、それを利用して一服盛られたというのである。天皇制を樹立するために天皇をたおすとは、それが事実なら歴史の悪夢だが、岩倉はそれはデマだと訴え、しかもこの風評にはなすすべもなく生涯当惑した。

佐々木只三郎（一八三三――一八六八）

会津藩士の子として生まれ、成長後江戸の幕臣の養子となった佐々木只三郎は、幕府の講武所の剣法師範となるほどの剣の使い手であった。彼は、清河八郎の創始した幕府浪士組にはいって清河と行を共にしたが、清河が反幕の志をいだいていると知るや、文久三年四月、これを麻布一ノ橋で斬殺した。

ついで上洛して京都見廻組の隊長となった。慶応三年十一月十五日、京都河原町の近江屋に、坂本竜馬、中岡慎太郎を襲撃してこれをたおしたのは、佐々木を隊長とする見廻組であったとする説がほぼ確実である。

この凶行後、「そのとき義経少しも騒がず……」と謡曲を口ずさみつつ立ち去ったといわれるこの大型暗殺隊長は、翌年正月早々の鳥羽伏見の戦いで薩軍を相手に四日間にわ

たる悪戦ののち、一月六日、銃丸を腹部に受けてたおれた。

彼は戸板で大坂へ運ばれたものの治療を受けるいとまもなく、さらに長持にひそんで紀州へのがれたが、十二日落命した。このとき従者たちに託して近くの紀三井寺の一宿坊に永代供養料二百両を寄進したが、従者たちはそれを持ち逃げしてしまったという話がある。

坂本竜馬をたおしてから二カ月足らずにして、謎をいだいたまま、この剛腕の暗殺者も勇猛悲惨な最期をとげたことになる。

正岡子規（一八六七――一九〇二）

明治二十一年、二十一歳にして最初の喀血をした子規は、三十歳にして、根岸の子規庵でほとんど病床をはなれ得ない人となっていた。明治三十四年、『墨汁一滴』『仰臥漫録』を書く一方、彼はロンドンの漱石に「僕ハ、モウダメニナッテシマッタ。毎日訳モナク号泣シテ居ルヨウナ次第ダ」という手紙を書いた。

すでに明治二十九年に子規は漱石に「われほど多き野心を抱いて死ぬ者あらじ」と手紙に書いているが、そのうらみは衰えるどころか、いよいよ炎をあげていたであろう。

三十五年五月五日から『病牀六尺』を書きはじめたが、十三日には麻酔剤が利かなくなり、子規は阿鼻叫喚ともいうべき苦患の中にのたうちまわった。

『病牀六尺』の中で彼は書いた。

「誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」

傍点をつけたのも彼自身である。

その後すこし回復したが、もう自分で筆をとることが出来ず、口述筆記が多くなった。激痛のため身体を動かすことも出来ず、全身は脊椎カリエスの膿と、おむつの便でひどい臭気を発していた。最後には、むくみが来て、痩せ細っていた足は、水死人のごとくふくれあがった。

九月十八日、彼は板に貼りつけた紙に、仰向けのまま、

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間に合はず

と、書いた。

九月十九日未明、見舞いに来て泊っていた高浜虚子は、隣室の子規の妹律に起された。虚子は、夜半過ぎまで聞えていた子規の「うーん、うーん」といううなり声が、いつのまにか静かになっているのに気がついた。はいってみると、子規の母八重子が子規のひたいに手をあてて、「升さ

ん、升さん」と、その幼名を呼んでいた。老母は眠らず、蚊帳の外からずっと見ていたのだが、あまり子規が静かなので、手を握ってみて、いつのまにか死んでいるのに気がついたのであった。

老母は、「サア、もいっぺん、痛いというてお見」といって、涙を流した。身体を清めてやろうとすると、子規の腰から背にかけて蛆がはいまわっていた。

芥川龍之介（一八九二――一九二七）

芥川は、大正十一年ごろから目立って健康が衰えはじめた。そのころ彼は、友人への手紙に自分の病気を「神経衰弱、胃痙攣、腸カタル、ピクリン疹、心悸昂進」と、書いている。

大正十四年、興文社で「近代日本文学読本」全五巻の編集を委任された芥川は、彼特有の気づかいから、百二、三十人に上る作家の作品を収録したが、この企画は失敗し、印税はわずかに、この編集を手伝った二、三子に分たれたに過ぎない結果となった。それで収録作家の一部から、印税は芥川が私したなどというあらぬ風評をたてられ、神経質な芥川はひどく苦にし、生来の厭世観を増した。

十五年にはいると、胃腸病、不眠、神経衰弱、痔などの持病はいよいよ昂じ、一月から湯河原に、四月から鵠沼に滞在して静養したが、健康の衰えはやまなかった。

「近頃目のさめかかる時いろいろの友だち皆顔ばかり大きく体は豆ほどにて鎧を着たるもの大抵は笑いながら四方八方より両眼の間へ駈け来るに少々悸え居り候」（六月十一日付・斎藤茂吉宛書簡）

夏、友人の佐佐木茂索が田端の家に見舞いにゆくと、芥川は暑い最中に懐炉を二つもいれて毛布を着て寝ていたが、

「君、こんなに痩せたよ、情けないぜ」

と、いいながら寝巻をまくって見せた。尻から腰、ただもう辛うじて骨に皮がからみついているような肉体であった。

「そこへ誰か梯子段を慌しく昇って来たかと思うと、すぐに又ばたばたと駈け下りて行った。僕はその誰かが妻だったことを知り、驚いて体を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。すると妻は突っ伏したまま、息切れをこらえていたと見え、絶えず肩を震わしていた。

『どうした？』

『いえ、どうもしないのです。……』

妻はやっと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。

『どうもした訳ではないのですけれどもね。唯何だかお父さんが死んでしまいそうな気がしたものですから。……』

それは僕の一生の中でも最も恐ろしい経験だった」

と、彼が『歯車』の中で書いたのは、文夫人によれば、大正十五年初秋の或る日のことであったという。

翌昭和二年一月に、義兄が高利の借金を残して鉄道自殺をとげ、彼の傷ついた神経に追い打ちをかけた。

「この頃又半透明なる歯車あまた右の目の視野に回転する事あり、或は尊台の病院の中に半生を了ることと相成るべき乎」（三月二十八日付・斎藤茂吉宛書簡）

その中で彼は『玄鶴山房』『河童』『蜃気楼』『歯車』など、最後の鬼気迫る作品群を書きつづけていった。

そして、六月二十日に書きあげた『或阿呆の一生』の最後に、

「……彼は唯薄暗い中にその日暮しの生活をしていた。言わば刃のこぼれてしまった細い剣を杖にしながら」

と、凄惨な自画像を描いた。

内田百閒は記す。「……私は芥川君の死ぬ二日前に会っている。その時は麻薬の量が足りなくて、また目をさましたところなのであった。勿論私はそういう事を知らないから、お酒の酔っぱらいの様で、べろべろして、変な芥川だと思った」

この年の夏は例年にない暑さであったが、七月二十三日は、水銀柱が三十五、六度にのぼった。

その夜、二階の書斎で、最後の原稿『続・西方の人』を書きあげた芥川は、つづいて妻や子に遺書を書き、さらに、自分の自殺の動機について「……少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である」と告白した『或旧友へ送る手記』を書き、致死量のヴェロナールとジアールをのみ、午前四時ごろ、聖書を持って階下の寝室へ下りてゆき、眠っている妻と幼い三人の子（長男比呂志七歳、次男多加志五歳、三男也寸志二歳）のそばに横たわった。

そのころから渇いていた大地に雨がふり出した。

やがて苦しみはじめた夫に夫人が気づいて驚愕し、ふだんからかかりつけの下島医師を呼んで手当を加えたが、すでに及ばず午前七時ごろ絶命した。

下島医師が生前もらった「水洟や鼻の先だけ暮れ残る」という短冊の句が彼の辞世となった。

二十七日、谷中斎場で葬式が行われた。

「……谷中の葬場から、ぼんやり起ち上がって、帰って気

がついてみると、細い竹のステッキを忘れて来た。『芥川さんがついて行かれるでしょう』と家の者がいったので、急に気持がはっきりして来て、堪えられなかった」（内田百閒『竹杖記』）

牧　逸馬（一九〇〇——一九三五）

二十五歳にして谷譲次の名で「めりけん・じゃっぷ」ものを、二十七歳にして林不忘の名で丹下左膳の登場する『新版大岡政談』を、三十二歳にして牧逸馬の名で『地上の星座』をと、大衆文学史上、満天下を熱狂させる評判作を書いた牧逸馬は、昭和九年、鎌倉に「からかね御殿」と呼ばれた大豪邸を建て、超人的な小説製造をつづけていたが、その新邸もまだ完成し切らぬ昭和十年六月二十九日の朝十時、『七時〇三分』というミステリーを執筆中急死した。

病名は脳溢血と発表された。

しかし当時の毎日新聞学芸部長新妻莞は記す。

「……結局ことわりきれず執筆させられたのが一時に十四社。それをみごとに書きわけ捌いておる実状を見たわたくしは、当人はしごくほがらか元気だが、若いとはいえ健康持続が案ぜられ、和子夫人と憂いをともにした。万一、万一がおそろしい。

と、その万一が襲うその日が来た。

いつ会っても明朗快活でなかったことのない彼には、持病のゼンソクが隠れていた。

一九三五年六月二十九日、ひどい雨降りだった。突然の発作、たいてい注射でおさまる例だったのに、なんとしてもとまらぬ。見るにたえない呼吸困難、ついにむざんな窒息死である。東京から駆けつけたわたしは、紫斑だらけの遺体に眼を掩った」

三十六歳で死んだ人々

人生の大事は大半必然に来る。しかるに人生の最大事たる死は大半偶然に来る。

——山田風太郎——

お市の方（一五四七——一五八三）

天正元年、二十六歳にして夫浅井長政を秀吉に討たれて未亡人となり、天正十年九月、三十五歳にして柴田勝家に再嫁したお市の方は、一年にも満たぬうちに、またも秀吉のために落城の悲劇を迎える運命におちいった。

天正十一年四月、賤ヶ岳の戦いに敗れ、秀吉に追いつめられた柴田勝家は、北荘の城で、お市に、おん身は信長公のお妹御であるから秀吉も殺すまい、と落去をすすめたが、お市の方は、二度も夫を見殺しにする女にはなりたくない、これも前世の宿縁です、と凜然と答え、四月二十四日午後四時、夫勝家とともに炎の中に消えた。

戦国の世ですら珍しい悲劇を、一代の英雄信長の妹にして絶世の美女たるこの女性は、一身に味わった。

しかし彼女の娘たちのうち、長女おちゃちゃはやがて豊家の淀君となり、三女おたつは後に徳川秀忠の妻となる。

彼女は、秀吉に勝ったのである。

石川五右衛門（一五五八——一五九四）

『言継卿記』文禄三年の項に、

「八月二十四日天晴、盗人スリ十人、又一人者釜にて煎らる。同類十九人八付に懸る、三条橋間の川原にて成敗なり、貴賤群集也」

と、あり、また文禄三年来朝したイスパニアの商人アビラ・ヒロンが書いた『日本王国記』に、当時都に一団の盗賊群が跳梁し、殺人強盗いたらざるなく、ついに捕えられ、三条河原で頭目及びその一族ことごとく油で煮られ、また磔になったことが記されている。

「これは一五九四年（文禄三年）の夏である。油で煮られ

たのは Ixicava goyemon と、その家族九人か十人であった」

細川ガラシャ（一五六四——一六〇〇）

慶長五年、関ヶ原の役に先立ち、石田三成は、東軍に参加した諸将を牽制するために、大坂在住の右諸将の家族を人質にしようと考え、その第一番に、七月十六日、細川忠興の留守邸に一部隊をさしむけた。

ガラシヤは人質の要求をはねのけた。

当時の婢霜女の覚え書き『秀林院様（ガラシヤ夫人）お果てならせられ候次第の事』によれば、敵が乱入をはじめたと知って、

「（家臣の小笠原少斎）もはや成るまじくと思い、長刀を持ち、お上様（ガラシヤ）御座所へ参り、只今が御最期にて候由申され候。内々仰せ合わせられ候事にて御座候ゆえ、与一郎様奥様（前田家から来た長男の嫁）を呼び、一所にてお果て候わんとお部屋へ人をやられ候えば、もはや何方へやらんおのきなされ候につき、力なくお果て成らせられ候。少斎、長刀にて御介錯いたし申され候事」

と、簡潔だが、『日本西教史』によると、

「……かくして夫人は死装を整うべく、みずからしばしいとまを請い、天主を安置する一室に入り、燭を点じ、天主に祈り、侍婢と永別し、相抱いて泣いた。かくて侍女を別室にしりぞけ、いよいよ最期の覚悟をした。

護衛兵が夫人の室に近づくや、夫人は神色自若としてキリスト及びマリアの名号を唱え、衣襟をひらき、首をのべて斬手にまかせた。護衛の長臣は、敬礼ののち刀を抜いて介錯し、絹の褥をもってその亡骸を覆い、その上に火薬をまき散らし、この室で自殺するのは憚りがあるとて別室に退き割腹し、その一人は残って火を放った。かくて高堂大廈、一時間にしてことごとく灰燼となった」

と、描写がだいぶはでになる。しかし、戦国武将の妻としてみごとであることに相違はない。

いずれにしても、信長の妹たるお市の方と、宿命の敵明智光秀の娘たるお玉と、いずれも当代の美女といわれた二人が、同じ年齢で、炎の中に非業の死をとげたことは一奇であるといえないこともない。

ロベスピエール（一七五八——一七九四）

一七九四年七月二十七日、フランス革命政府は崩壊した。

翌二十八日午前五時ごろ、パリ市庁において、ジャコバン党の幹部ロベスピエールは、熱月党から派遣された憲兵メルダに撃たれ、下あごをうち砕かれた。

そして彼は、人定訊問だけで、革命裁判所から死刑の宣告を受け、同じ日の午後七時ごろ、刑場に運ばれた。

「一人の婦人は運搬車に飛びつく。片方の手で車の側面をしっかとつかみ、いま一方の手をシビル巫女のように打ち振りながら、《汝の死は、わたしの心の底までうれしがらせる》と叫ぶ。《悪漢め、フランス中の妻と母の呪いを背負って地獄へゆけ！》

断頭台の下で、彼は自分の順番の来るまで、地面に横たえられた。彼の眼はふたたび見開かれた。そして、血まみれの斧を見た。断頭吏サンソンは、彼から上衣をはぎとった。負傷した顎を覆っていた汚ないリンネルをかなぐり取った。顎は力なく落ちた。彼の口から叫びがほとばしった。《怖ろしいサンソン！ 汝はどれほど迅速にしても迅すぎることはないぞ！》」（カーライル『フランス革命史』より）

ロベスピエールは弁護士時代死刑廃止論者で、ルイ十六世に死刑廃止の嘆願書を出した。しかし彼は、革命の主役となってからは、ギロチンによる死刑執行の主役にもなった。その矛盾に対し「おれは絶対王政下の死刑には反対だが、革命政府の死刑には反対ではない」と答えたという。

いま民衆の前に断頭台下に横たえられたとき彼の感想は果して如何。

バイロン（一七八八——一八二四）

二十四歳にして『チャイルド＝ハロルドの巡礼』を発表し、みずから「一朝めざむれば天下の詩人」と記した、美貌の貴族にしてかつ生まれながらのびっこであったバイロンは、その奔放不羈の行状から英国を追われ、ヨーロッパを放浪しつつ、『マンフレッド』『ドン・ジュアン』等の大詩篇を書き、かつ恋の遍歴を重ねたが、やがて恋にも生にも倦き、また天性の反抗精神から、大作『ドン・ジュアン』を未完のままその筆を投げすてて、当時トルコの圧制下にあったギリシャの革命運動に身を投じた。

死ぬ一年前、彼は、彼の理解者ブレッシントン夫人に告白している。

「私は早く死にたい。私は老人になりたくない」

彼は三十になるかならないかのうちに、髪に霜をいただくようになっていた。

一八二四年、ギリシャ独立軍の司令官となり、ミソロン

ギにおいて、レバント攻撃準備中、四月九日、突如マラリアにかかって高熱を発し、一時小康を得たがまた悪化し、十八日、「おれはあとに可愛い者を残して死ぬ」と、うわごとをいった。それは彼にとってただ一人の女児エーダのことであるらしかった。そして、午後六時ごろ「おれはこれから少し眠るぞ」といって、昏々と眠り、ついに目ざめず、その翌日十九日の夕方息をひきとった。

そのとき大雷雨があたりをつつんだ。

英国の誇る大政治家、名将、大学者、大芸術家をまつるウェストミンスター寺院に、この不世出の大詩人はまだはいることを許されていない。

尾崎紅葉（一八六七――一九〇三）

明治三十五年五月ごろから、紅葉は胃部の右のほうに瘤様のしこりが出来、ときどきみぞおちに痛みを感じ、体調がすぐれなくなった。彼は明治三十年一月から、「読売新聞」に『金色夜叉』を連載していたが、しばしば苦吟して休載した。しかしこのときの休載はあまりに長くつづいたので、読売から苦情が出て、彼は読売を離れた。

三十六年二月に体重を計ると、十二貫（約四十五キロ）もないほど痩せていた。そこで三月はじめ帝大病院に入院した。

入院後一週目に、担当医が、「もしこの病気が重大なものと決定したら、あなたは手術を受けるか」と、訊いた。

紅葉は、自分が胃ガンにかかっていることを察し、その夜病院を出て、酒に弱い体質なのに葡萄酒を買って来て、ひとり病院で飲んだ。万感こもごも至って、彼が眠ったのは午前四時前であった。

三月十四日、入沢達吉博士が彼に、ガンであることを告げ、「私の誤診であることを希望する」といった。五月十一日の「報知新聞」は次のように報じた。「紅葉の才華爛漫たる一流の文章は、文壇に不断の錦を飾らん事を誰しも望み思いしに、このごろ胃癌を病んで文事を廃し静養に力めしも、病は日一日と重患に陥りつつあるに……」云々。

紅葉は、手術を受けず、自宅に帰って寝たり起きたりの生活をしながら、なお弟子たちに絶大の威権をふるっていた。彼は弟子の泉鏡花が芸者桃太郎と同棲しているのを知って叱りつけ、別れることを誓わせた（この体験がのちに鏡花の『婦系図』となる）。そのくせ彼は、愛人の神楽坂の芸者小えんを家にいれて、妻とともに看病させた。

見舞い客は、だれも死の言葉を口にしなかった。しかし

ただ一人、来るたびに、無神経か、いやがらせか、必ずそれをいう男があった。紅葉は癪にさわって、僕はこの病気では決して死なない、といった。するとその男は、「自分で死なないという病人は助からないと申します」と、平気でいった。

十月二十九日、医者から、今夜あたりあぶない、といわれて、鏡花、風葉、秋声らの弟子が集まった。紅葉は彼らを呼び、「まずい面を持って来て見せろ」と、一人一人枕頭に招いた。弟子たちはすすり泣いた。

それから彼は医者に、モルヒネを大量に注射して殺してくれといい、医者がことわると、「どうせ命がないものが、悶え苦しんで二時間や三時間生きながらえて何になるものか。そんなことをいうのは、死んだことがないからだ。嘘だと思うなら死んでみろ」と、昂奮して無茶なことをいった。

その翌日の夜十一時十五分、紅葉は昏睡したまま息をひきとった。

十一月二日、秋晴れの下を、牛込横寺町の家から青山墓地へ向う葬列に加わりつつ、田山花袋は、「こうした大名か華族のような葬式をする文学者は、かれ紅葉をもって終りとするだろう」と、考えていた。

――もっとも紅葉自身は、当時すでに寝棺をかつがれてゆくのがふつうであったのに、死んでからも人より高くかつがれるのは申しわけない、是非ふつうの棺桶にいれて駕籠で運んでもらいたいと望んで、その通りにしてもらったのだが。――

広瀬武夫（一八六八――一九〇四）

広瀬武夫は、明治三十年から三十五年まで、ペテルスブルグに、留学生、さらに駐在海軍武官として滞在し、その間ふとした縁で、ロシア海軍少将コヴァレフスキー一家と親しくなり、その二人の美しい令嬢姉妹に慕われるようになった。女性をいまだ知らぬ純潔武骨な広瀬も、特にその妹のアリアドウナの熱愛にほだされ、いっときは真剣に結婚まで考えたほどであった。しかし、そのとき帰朝命令が下り、「聖都ヨリ無限ノ感慨ヲ乗セテ」（彼自身の言葉）シベリア経由、日本に帰国した。

二年後の明治三十七年三月二十七日、広瀬は、愛する女性の祖国ロシアの東洋艦隊を封じるために、旅順港閉塞の指揮をとり、沈みゆく船中に部下の杉野兵曹長を探したが見当らず、ボートに乗り移ったところ、敵弾

のため、一塊の肉片を残したまま散華した。
旅順港閉塞は、結局作戦としては成功しなかった。

長塚 節（一八七九——一九一五）

明治四十三年、三十一歳で『土』を書いた長塚節は、その翌年八月ごろから咽喉に痛みをおぼえ、十一月に喉頭結核の診断を受け、捨ておけば余命はあと一年という宣告を受け、衝撃を受けた。

「生き死にも天のまにまにと平けくおもひたりしは常の時なりき」

しかし、それ以来彼は、翌四十五年に半年に及ぶ関西九州旅行、翌大正二年も四十日余の関西旅行といった風に旅行しはじめ、三年にもその六月から九州へ旅立った。

すでに彼は死を覚悟し、生あるうちに一日でもと思っての旅であったが、これは最後の旅となった。一方で、同じ六月から、「アララギ」に、最後の短歌群『鍼の如く』を発表しはじめていた。

節は九月から福岡の平野屋旅館に宿泊していたが、臥床する日が多くなり、年を越えて大正四年一月早々、九州大学病院隔離病棟に入院したときは、両肺とも上部は空洞状態になっていた。

二月七日夜から昏睡状態に陥り、八日早暁に死んだ。

モディリアニ（一八八四——一九二〇）

イタリア生まれの美貌のモディリアニは、二十二歳のときから、パリのモンマルトルに住んで絵をかきつづけたが、友人の詩人ズボロウスキー一人を除いては、だれも認める者はなかった。絵は只同然の値にしか売れなかった。貧窮の中に、彼は肺を病んだ。彼の生活はただ酒を飲むことと、血を吐くことと、絵をかくことだけだった。

一九一九年、彼の衰弱が甚だしいのを見て、ズボロウスキーは医者に連れていこうとしたが、モディリアニはことわった。

翌年の一月、彼が火の気のない部屋に横たわっているのを見て、ズボロウスキーは医者を呼んで来た。医者は至急慈善病院に運ぶことを命じた。慈善病院でモディリアニは高熱を発し、大あばれにあばれ、一晩じゅう詩を朗吟し、「なつかしいイタリア」とつぶやきながら、その翌日の夕方に死んだ。

彼の子を懐胎していた愛人は、彼の死を知って、窓から

飛び下りて自殺した。彼女の髪はひとふさ切りとられて、モディリアニの屍体の胸におかれた。

モディリアニは、死んだとたんに、彼が天才であったことを人々に気づかせた。彼の棺には沢山の画家や作家や女たちがつづいた。警官さえも敬礼した。それを見て、三十九歳のピカソはつぶやいた。

「見たまえ、かたきはとれたよ」

マリリン・モンロー（一九二六——一九六二）

アメリカ女性のセックス・シンボル視されたモンローは、一九六二年八月四日夕刻、俳優ピーター・ローフォードが、「なぜ約束の夕食会に来ないか」と、ロサンゼルスの自宅に電話したとき、とても疲れていて、夕食会にはゆかれない、といったあと、聞きとれないような声で、

「パット（ローフォード夫人で、ケネディ大統領の姉）に、さよならと伝えてちょうだい。大統領にも、さよならと伝えて。それから、あなたにもさよならをいうわ」

と、いって、彼をぎょっとさせた。

ローフォードは、マリリンにつきそっている精神病専門の看護婦に電話して、マリリンのようすを見てくれるように依頼した。看護婦はマリリンの部屋にいったが、レコードの音が聞えたので、異常はないものと考えて自分の部屋にひきとった。

八月五日午前三時半に、もういちどたしかめにゆくと、マリリンの部屋にはまだ電灯がついていた。ドアに鍵がかかり、呼んでも返事がなかった。それで庭にまわって窓からのぞいてみると、マリリンはベッドの上で、電話の受話器を握ったまま死んでいた。

マリリンの屍体を解剖したのは、ロサンゼルス監察医務院の日本人監察医野口富恆であった。

その所見。

「身長一六四センチ。体重五三キロ。中肉中背のよく発育した白人女性。

ブロンドの髪は染めたものであった。腹部にかつて胆嚢と虫垂を切除した二カ所の手術の痕があった。死因は全臓器鬱血で、これは睡眠薬による死を物語っていた。毒物検出では、ペントバルビタールが、血液百グラム中四・五ミリグラム発見された。これは明らかに致死量であり、四十ないし五十錠の睡眠薬を飲んだことが考えられる」

マリリンは、その母も、祖父母も叔母も発狂したという家系を持っていた。そして彼女も不眠に悩まされ、睡眠薬

の過度の常用者だった。

しかし、その死が事故死であったか、または自殺であったか、自殺とすれば原因は何か、最後に電話でだれと話していたのか。

さらに後になって、その翌年十一月に暗殺されたケネディ大統領と関係があったことが明らかになったので、そのことによって彼女が知った政府の機密について口を封じるため、CIAの手が動いたのではないかという疑惑が生じた。

三十七歳で死んだ人々

> もし自分の死ぬ年齢を知っていたら、大半の人間の生きようは一変するだろう。従って社会の様相も一変するだろう。そして歴史そのものが一変するだろう。
>
> ——山田風太郎——

楊貴妃（七一九——七五六）

天宝十五年六月、安禄山の叛乱のため、唐の玄宗皇帝は長安から逃れ出したが、馬嵬駅まで進んだとき、従軍の将兵たちが、こんどの乱の原因は寵姫楊貴妃にあるとして、彼女を処分しなければこれ以上進まないといい出した。

そのため楊貴妃は、路傍の一仏堂の中で、宦官高力士の手により、さらしの布で絞殺された。

この惨劇を、白楽天は『長恨歌』で詠じた。

「宛転たる蛾眉馬前に死し
花鈿地に委し人の収むるところなし
翠翹金雀玉搔頭
君王面を掩いて救うことを得ず
回看血涙相和して流る」

俊寛（一一四二——一一七九）

法勝寺執行、俊寛僧都は、治承元年六月、藤原成親、平康頼、僧西光らと、京東山鹿ヶ谷の山荘で平家討滅の陰謀を相談したが、事発覚して捕えられ、成親は出家したが西光は殺され、俊寛は、康頼、成親の子成経とともに三人、薩摩の鬼界島に流された。

いまの鹿児島県硫黄島にあたるというが、島人といえば「色黒うして牛の如し、身にはしきりに毛生いつつ、云詞も聞きしらず」というありさまで、「島のなかにはたかき山あり、とこしなえに火燃ゆ。……いかずちつねに鳴りあがり、鳴りくだり、麓には雨しげし、一日片時、人の命たえてあるべき様もなし」（『平家物語』引用文以下同じ）という絶海の孤島であった。

翌治承二年、平重盛の嘆願によって、康頼と成経は赦免されることになったが、清盛が特に目をかけてひきたててやったつもりなのに、飼犬に手をかまれた思いのする俊寛だけは除かれた。

九月、その使者が島に着いた。俊寛は赦免状に自分の名だけないので驚愕し、最後は舟にまでしがみついて同行を請うたが叶わず、渚で足ずりして「是のせてゆけ、具してゆけ、とおめきさけべども、漕ぎゆく船のならいとて、跡はしら波ばかりなり」

翌治承三年、俊寛の使っていた有王という童が、主の安否を気づかって、三月、鬼界島に渡って、「髪は空さまへ生いあがり、よろずの藻くずとり付いて、おどろをいただいたるが如し、つぎ目あらわれて皮ゆたい、身に着たる物は絹布の別も見えず」というありさまの俊寛とめぐりあう。

主従再会のよろこびもしばし、俊寛は、都で妻も子も歎きのあまり世を去ったときくと、以後食を絶ち、有王が島に渡って二十三日目に衰弱して死んだ。

ラファエロ（一四八三――一五二〇）

ルネッサンス期に、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロとならび称されたラファエロは、それほどの画技のほかに、優美で善良な性質と風姿の持主であった。

それで、当然女性にもてすぎて、この方の道楽だけは度を越して、ついに高熱を発して寝こむに至った。強壮剤が必要なところへ、彼の不節制を知らない医者が瀉血療法をほどこしたので、彼はいよいよ衰弱して、一五二〇年四月六日、ちょうど自分の誕生の日に死んだ。

荒木又右衛門（一六〇一――一六三八）

寛永十一年十一月七日、伊賀上野鍵屋の辻で、妻の弟渡辺数馬の助太刀をして、旗本をバックにした敵河合又五郎に対し大仇討ちをやった又右衛門は、寛永十五年まで四年間、藤堂家があずかっていたが、やがて請願により鳥取の池田相模守に、「英雄」としてひきとられた。伊賀越えの敵討ちは、当時の大名対旗本のメンツ争いの象徴的事件であったのである。

しかるに、八月十一日、鳥取に安着した又右衛門は、わずか十八日目の寛永十五年八月二十九日に頓死した、という届けが公儀に出された。おそらく何か急迫した事情があり、旗本側からの再復讐からかばうためで、又右衛門はその後も安楽に生存したろうといわれている。

笹川繁蔵（一八一〇――一八四七）

天保十四年夏の、いわゆる平手造酒が死んだという「大利根の血戦」後、わらじをはいていた繁蔵は、翌年の弘化元年、ひそかに笹川に舞い戻ったのを、十手捕縄を預る敵方の飯岡助五郎に探知された。

七月四日、むし暑い夜、繁蔵は笹川河岸の賭場で酒を飲んで、妾のお豊のところへゆく途中、十五町ばかりいったところの「びやく橋」のたもとで、飯岡一家の三人のやくざに槍で闇討ちされた。

二、三日たって、銚子の漁師が、首のない屍体のはいったかますが海に漂っているのを発見した。

ビゼー（一八三八――一八七五）

ビゼーは、一年余を費して作曲したオペラ「カルメン」が不評で、それで心臓を悪くして死んだと伝えられる。

実際には、「カルメン」は一八七五年三月にパリのオペラ・コミーク座で初演され、三カ月後の六月三日、彼がパリ郊外ブージヴァルの自宅で死んだときなお続演されていたから、右の話はうそだが、しかし決して好評ではなかった。ふしぎにも名作「カルメン」は、最初パリっ子を当惑させたのである。

それ以外にも「アルルの女」など作曲する天才をいだきながら、ビゼーは不遇で短い生涯を閉じた。

五年後の一八八〇年七月、チャイコフスキーは書いた。

「昨夜、仕事の疲れを休めるためにビゼーの『カルメン』を全曲ひいた。傑作という言葉の意味をいかんなく発揮した傑作だ。……今後十年の間に、『カルメン』は世界で一番人気のあるオペラになるだろう」

チャイコフスキーの予言は当ったが、しかしビゼーが、たとえ直接の死因ではなくても、失意のうちに死んだことはまちがいない。

ゴッホ（一八五三――一八九〇）

ヴァン・ゴッホは、狂気の素質を持っていた――この狂気が精神分裂症的なものか、癲癇症的なものか、まだ結論が出ていない。その上、アルコール中毒であった。

死の二年前住んでいた南仏アルルの市民たちは連名で、市長に請願書を出している。

「オランダ人でラマルチーヌ広場在住のヴィンセント（ゴッホ）は、少し前から何度かにわたって精神的に健全でなく、アルコールを飲み過ぎたあと過度の興奮状態におちいり、その際自分のしていることも言っていることもわからなくなり、市民にとって不安であります。この地区の住民、特に女性と子供にとっては不安の対象であります。われわれは、公共の安全のため、ヴィンセントが自分の家族に引きとられるか、また入院に必要な手続きをとっていただきたい。彼に対して徹底的な処置をとらなければ、いつか確実に不幸が起きることが予想されるからです」

一八八九年十二月、彼がこの町で友人の画家ゴーギャンと喧嘩して、自分の左の耳を剃刀で切り落し、それをなじみの娼婦に送りとどけるという異常な行為をしたのは、そ

れからまもなくであった。
彼はアルルの精神病院に収容されたあと、翌年五月、パリ北方の小さな町オーヴェルにゆき、絵をかきはじめた。七月にはいって彼は、「小麦畑の上を飛ぶ鴉」を描いた。これが彼の最後の怖ろしい絵となった。
七月二十七日の夕刻に、彼はオーヴェル村の郊外、オワーズ川の段丘にひろがる麦畑（ないし雑木林）の中で、ピストルで自分の胸を撃った。このピストルを貧しいゴッホがどこで手にいれたのか不明である。
弾は心臓をはずれたが、重傷なのに彼は歩いて駅近い宿屋に帰った。同じ宿に滞在していたオランダの画家アントン・ヒルシックは、胸から血を流しながら帰ってきたゴッホを見て、驚いてさけんだ。
「君はどこへいってたんだ。どうしたんだ？」
「僕はもう不幸にたえられなかったので、自分を撃ったんだ」
と、ゴッホは答え、凄じいほど暑い、三帖ほどの屋根裏部屋に上っていって、小さなベッドに横たわった。
急報によって、二十八日、四つ年下の彼の最愛の弟テオが駈けつけてきたとき、ゴッホは静かにパイプを吹かしながら、「泣かないでくれ」といった。
「僕はね、みんなが倖せになるようにと思って、こんなことをしたんだ」
自分の生きていることが、みなの不幸になるという意味か？ ——テオは、医者は助かるといっている、と、いった。ゴッホは答えた。
「何にもなりはしない。（僕が生きていれば）悲しみはいつまでもつづくだろう」
二十八日の夜、彼は安らかに、
「僕はこんな風に死んでゆきたいと思ってたんだ」
と、いった。
七月二十九日午前一時半、ゴッホは息をひきとった。弾は摘出されないままだった。
以来、テオは悲しみのあまり錯乱し、精神病院にいれられ、その六カ月後にこれまた死んでしまった。
ゴッホの生前に売れた絵は、ただ一枚だけであった。

ロートレック（一八六四——一九〇一）

伯爵家に生まれたロートレックは、十四歳のとき椅子の下にあった箒の柄に足をひっかけてころび、左足を骨折した。数カ月後、びっこをひきながら散歩中、深い溝に落

ちて、こんどは右足を骨折した。このために彼の下半身の成長はとまり、後年ゴンクールが「笑止にたえない小男、漫画的な不恰好」と評したような肉体の所有者となった。
彼が画家となってからの病的な飲酒癖、娼家への耽溺は、あきらかにこのコンプレックスをまぎらわせるための悲劇的な反応であった。奇怪な肉体に山高帽、鼻眼鏡という姿で、夜毎モンマルトルの娼家で酒をあおりつつ、好んで彼は酒場や芝居小屋や娼婦を描き、またそれらのポスターの石版画を描いた。
しかし強度のアルコール中毒のため、三十代半ばから目立って健康が衰え、母の監視のもとに入院のやむなきに至ったが、病院でも絵を描きつづけ、一方飲酒癖は依然やまず、ステッキにラム酒を仕込んで、散歩中に飲むといったありさまであった。そしてついに足は完全に動かなくなり、やがて手にも痙攣を起すようになった。そして、死の前年、母のいるマルロメの城に帰り、一九〇一年九月九日、母にみとられて死んだ。
彼は「自分の足がふつうだったら、決して画家などにならなかったろう」といい、また、自分が後世に残る大画家だという自覚もついになかったようで、彼がただの世紀末的風俗画家でなく、戯画作者でないことが人々にわかるまで、死後十三年を要した。その年、彼の絵がルーブルにはいったのである。
酒と女郎買いと絵と——それは彼にとって肉体的欠陥を忘れさせるための同列の道具であったが、知らずして最後のものは、芸術の高みにまで昇華されていたのだ。

斎藤緑雨（一八六七——一九〇四）

明治二十年代から三十年代にかけて、「正直正太夫」の筆名で文壇に毒舌をふるった緑雨は、肺結核と貧窮のため本所横網町の陋宅で、弟妹からの仕送りで生活していたが、明治三十七年四月十一日の夕方に、人をやって友人の馬場孤蝶を呼んだ。
孤蝶がゆくと、緑雨は、「いよいよお別れだ。頼みたいことがある」といい、古い手文庫から、預っていた一葉の日記を出して、「何とかこれを出すようにしてやってくれ」といい、また、「君の来るまで何か話もあるように思っていたが、こうなっては何もない」と、いった。
しばらくすると彼は、孤蝶に筆をとらせて、「僕本月本日を以て目出度死去致し候間、此段謹告仕候也、四月日、緑雨斎藤賢」と書かせ、「この広告を幸徳（秋水）

君に頼んで、二六か万朝（註・二六、万朝は新聞名）に出すようにしてくれ」と、いった。
四月十三日の朝、彼は水をのみ、家人を遠ざけ、一人になって死んだ。葬式には、親戚の四人と、友人の幸田露伴、馬場孤蝶、与謝野寛の三人だけが棺桶についていった。

国木田独歩（一八七一――一九〇八）

明治四十一年二月、独歩の肺結核はいよいよ進み、茅ヶ崎の南湖院という療養所にはいることになった。妻の治子と妾の奥井君子が看護婦となった。
四月の末、友人吉江喬松と前田晁が見舞うと、底に黒味を帯びた青い顔をした独歩は、「君らはいいところへ来た。今三十分ばかり前、七転八倒の苦しみをしていたところだ。……しかし君らにも、僕がいかに苦しむかを見せておきたかった」と、いった。
そして、「何だって僕は肺病になんかなったのだろう」と歎き、「今僕が死ぬと、世間では、独歩はいいときに死んだ、などというだろうが、僕は今死にたくない。僕はこれからだとみずから信じるところがあるんだ」と、いった。
二人が帰途につくと、妻の治子が追って来て、昨日病院長から、独歩の左肺はまったく潰れ、右肺の一部だけで生きているから、いつ変が起るかわからないと告げられた、といって泣いた。彼女は大きな腹をしていた。
五月に独歩は、自分がかつて洗礼を受けた日本基督教会の牧師植村正久を呼び、
「あなたは、かつてはじめて私の心を開いて下さった人です。ところがいま、死を前に、私の心はまた閉ざされてしまいました。どうかもういちど、あなたの鍵で私の心を開いて下さい」
といった。植村はいった。
「鍵を持っているのは私ではありません。神です。祈ることです」
「私は祈ることが出来ません。私は祈ることが出来ません」
と、独歩はベッドの上で泣いた。彼は依然として妻の治子とともに愛人の奥井君子に看病させ、病床のそばで二人の女は争いつづけていた。
六月十五日、川上眉山が剃刀で頸動脈を切断して自殺した。その報を知って以来、独歩の衰弱は目に見えて進んだ。
二十一日の夜ふけ、妻の治子は、独歩の泣声に眼をさました。

「急に何だか悲しくなって来たんだ」
と、彼は子供のように肩をふるわせて泣きじゃくった。
六月二十三日の夜八時三十分、独歩は喀血し、血にむせるような咳をしたかと思うと、息絶えた。

菱田春草（一八七四――一九一一）

岡倉天心門下の逸材として「落葉」「黒き猫」など不朽の名作を描きながら、いわゆる朦朧体といわれるその画法が当時の世にいれられず、菱田春草は同志横山大観とともに、その生活は一時は乞食に近い状態までおちいり、貧苦は一生つづいた。
三十三歳になった明治四十年ごろ、彼は眼が霞んだり、ものが歪んで見えたりする症状を発して苦しんだが、このときは一年ばかりで平癒した。
それが四十四年ごろに再発した。眼中に白斑を生じ、視野に閃輝や欠損が生じるようになった。放ってはおけない状態となって医者にかかった結果、腎炎性網膜炎という診断を受けた。眼疾の原因は腎臓病にあったのだ。彼を医者に連れていった横山大観は、医者から梅毒によるものだという診断を受けた、といっている。
八月には完全に失明した。平生から冷徹沈鬱に見える人柄の春草は、画家として死刑宣告にひとしい病態にあってむしろ平静であったが、それは絶望の深さを思わせ、かえって傍人の正視しがたい悲惨な姿であった。そして九月十六日に死亡した。
その直後の十一月、前年に春草の絵を見て感心した明治天皇から特に名ざしで彼の絵を求められ、「樹下苦行の図」が千円で買いあげられたことから、春草の絵が暴騰しはじめた。

フットレル（一八七五――一九一二）

一九〇七年、『十三号独房の問題』という題で、完全脱獄をテーマにし、思考機械ヴァン・ドーゼン博士を登場させ、いまでも世界短篇推理小説史上ベストテンには必ずはいる名作を書いたジャック・フットレルは、五年後の一九一二年四月十日、イギリスのサザンプトン港からアメリカへむけて処女航海する豪華船に乗りこんだ。
四日後の四月十四日、午後十一時四十分、船は、闇夜の北大西洋を音もなく近づいて来た巨大な氷山に接触し、船首から船尾まで、まるでナイフでチーズを切るように切り

裂かれ、二時間四十分後に沈んだ。

総トン数四万六三二八トン、甲板の延長八キロ、貴族、富豪、名士を満載していたこの船の名こそタイタニック号である。

船客二千二百一人。そのうち救助されたもの七百十人。遭難者一千四百九十一人。その中にこのフットレルがいた。

「この運命を静かに受取った人もある。敢然として死に面した者も少くなかった。が、多くは互いに争った。獣類のように争った」と、この遭難についてのおびただしい記録を集め、再構成したであろう『運命のSOS』の中で、牧逸馬は書いているが、このフットレルの存在には気がつかなかったのか、彼の死にざまは記していない。

地上の牢獄から逃れる天来の奇策を案出したフットレルも、大洋に沈没する船から逃れる法を持たなかったことは明らかである。

なおフットレルは正しくはフュートレルだが、慣用に従った。

高見沢遠治（一八九〇——一九二七）

高見沢遠治は、いわゆる「高見沢版画」を創造した人物である。

大正時代、保存の悪い浮世絵の「直し」から発して、その完全複製に名人芸をふるい、東京帝大美術史教授藤懸静也に、「高見沢が入念に作ったものは、真物か贋物か鑑別がつかない」と嘆ぜしめ、岩波書店の小林勇に、「高見沢版画は、その複製の見事さにおいて空前絶後であろう」と絶讃させた天才高見沢遠治は、ふだんは猫のようにおとなしいくせに、一方で、金さえあれば流連荒亡をつづけて、いつも大借金を背負い、酔えば刃物を持ち出し、障子に火をつけ、妻を階段から逆さに吊るすという狂的な人物であった。

大正十五年、岩波書店の「松方コレクション」復刻準備中、身体不調となり、診察の結果、両肺とも結核に冒されていることが判明し、鎌倉で静養したが、友人の岸田劉生らが見舞いにやって来ると、友情と見栄っぱりと病気の恐怖を忘れるためとで、いっしょに大酒を飲み、三味線をひいて遊ぶという生活をやめなかったために、病勢はかえ

って進行するという状態であったので、妻たちは強制的に遠治を湘南サナトリウムに入院させたが、そのときはもう喉頭結核にもかかっていた。

高見沢たか子の『ある浮世絵師の遺産』によれば、

「咳と高熱に苦しむ毎日が続く。まつ（妻）は昼となく夜となく氷を割って、氷のうを作った。癇の強い遠治は、喉の痛みを訴えるかわりに、『病院の食事がまずい、特別食を作れ』といって、怒った。（中略）冬に西瓜が食べたいといい出して、銀座の千疋屋から小さな西瓜を手に入れたこともあった。

遠治のそのわがままは、すでに食物をのみ下すことが出来なくなった病人の、病気に対する必死の抵抗であった。喉の痛みをやわらげるために、まつが薬品を含ませた綿で喉の奥をふかなければ、ものが飲み下せなかった。（中略）看護婦の浣腸のかけ方が乱暴だといって遠治がいやがるので、まつは綿を巻いた杉箸で病人の便をとるようなことまでしなければならなかった。

まつのそうした献身的な看病にもかかわらず、遠治は病院暮しの淋しさから大変な癇癪を起した。まつは何度もげんこつでなぐられるので、そのうち遠治の機嫌の悪いときには、バケツをかぶってベッドに近寄った。（中略）まつはほとんど遠治のベッドの下に置いた籐椅子でやすんだ。遠治は病人らしい目ざとさで、夜中によく目を覚ましたが、まつが寝入っていると、上から吸呑の水をまつの顔の上にかけて起した。そのたびにまつは驚いて飛び起きるのであった」

彼は、見舞い客などが、出された食物にも手をつけないのに自尊心を傷つけられ、妻には自分の食い残しを食べることを強制した。

翌昭和二年五月、死をまだ予期せず、本人のわがままから、一方では、せめて自宅で死なせてやりたいというまつの計らいで、遠治は鎌倉の自宅に戻った。もう耳を近づけなければ声も聞えず、尻の骨など鶏のガラみたいになった状態であった。

それから一カ月後の六月十一日、遠治は急に身体を起してくれといい、起すとまたこんどは寝かせてくれといい、それからまもなく絶命した。

生活の無軌道な高見沢遠治との交際をやめないために、白樺派の志賀直哉らから絶交されたほどの友人岸田劉生が駈けつけた。遠治の幼い姪の文子は、魁偉な劉生が大声をあげて泣くのを異様なものに感じた。

通夜の晩、劉生は、「遠ちゃんのバカヤロー、なぜ早く

死んじまったんだ」と泣き出し、三味線をひいて讃美歌を歌い出した。遠治の従弟の高見沢仲太郎はオランダダンスまで踊った。仲太郎はのちの『のらくろ』の田河水泡である。
　葬式に集まった香典は、すぐに高利貸が持っていってしまった。
　それは、芥川龍之介が死んだ年であった。

沢田正二郎（一八九二――一九二九）

　昭和四年二月、沢田は新橋演舞場出演中、風邪から急性中耳炎、扁桃腺炎を併発し、ついに倒れて、十一日、手術をしたが快癒せず、病状は一進一退した。二十七日、見舞客の日本画家が、病床の枕辺の金屏風に獅子舞いの絵を揮毫してくれた。
　三月一日、沢正を欠いた新国劇が無事初日をひらいたと聞くと、彼は硯を持って来させ、ベッドの上に起き直って、その屏風に画賛を書いた。

　　何処かで囃子の声す耳の患

　弟子たちはささやいた。「はや死の声すとは縁起でもねえ」
　その三日後の三月四日、急性化膿性脳膜炎を併発して午後一時二分、沢田は永眠した。
　遺骸が家に帰ったとき、最後の愛人であった女優久松喜世子は、黒髪を切って棺にいれた。沢正の右手に長くかかったその黒髪は彼が冥土へついてゆく黒い杖のように見えた。

宮沢賢治（一八九六――一九三三）

　大正十五年、三十歳のとき、故郷の花巻の稗貫農学校の教師をやめ、「羅須地人協会」を作り、花巻付近の農民指導をはじめた宮沢賢治は、生来あまり丈夫でなかった体質に加え、この仕事に過労したあげく、昭和三年、三十二歳のとき肋膜炎にかかったのをきっかけに肺結核となり、以後、病気は一進一退し、体調回復したと見えたとき東北砕石工場の技師を勤めたこともあったが、大半は病床にあって、詩や童話の制作にふけった。有名な、

「雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ

欲ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ……」

の詩は、昭和六年十一月三日に、病臥のまま作られたもので、題名すらなく、詩というより、彼の心の底からの悲願の声であった。
　しかし、昭和八年ごろの彼の宛先不明の手紙の下書きに、「いままで三年玄米食をうちじゅうでやりましたが、母の里から宣伝されたので、私はそれがつらくて何べんも下痢しましたが、去年の秋までそれがいい加減の玄米食によることを気がつきませんでした」とある。意味不明な個所もあるが、要するに玄米食は消化が悪く、よくなかったらしい。
　昭和八年九月十七日からの三日間、花巻町の氏神鳥谷ガ崎神社の祭礼で、賢治は家の前の椅子に腰かけて、各町からの山車が往来を練り歩くのを見物し、やや元気をとり戻したかに見えた。
　九月二十日の朝、一人の農夫が訪ねて来て、肥料のことについての相談をした。そのあと賢治は急に呼吸が苦しくなり、医者が呼ばれて急性肺炎との診断を受けた。
　その夕方、またその百姓がやって来た。家人は面会をことわったが、「ちょっとでえがら」と、ねばって帰らないので、やさしい性質の賢治は、「ンだしか」と、病床から出て、着物を着がえて会った。
　一時間ほど話していると、急に賢治の声がかすれ、唇が紫色になって来たので、家人がやっとその男を追い返した。賢治にとって死神となったこの無神経な百姓の名はいまだに知られていない。おそらく純朴な人々の思いやりから不明ということにされたのであろう。
　その男が帰ると、賢治は苦しそうに病床に戻り、
「今夜は電灯が暗いなあ」
と、いった。
　九月二十一日ひる近く、母からもらった土瓶の水をうまそうにのみ、オキシフルにひたした消毒綿で全身をふいてもらい、眠るように眼をとじたが、やがて母が部屋を出ようとして、もういちどのぞきこむと、呼吸がおかしくなっているのに気がついた。しかし意識ははっきりしていて、国訳法華経の印刷や頒布のことについて遺言した（彼は法華経の信者であった）。まもなく午後一時三十分、その呼吸がとまった。

彼の作品は、大正十三年、二十八歳のとき、詩集『春と修羅』第一集一千部を自費出版しただけで、右の『雨ニモマケズ』をはじめ、『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』などほとんどが、死後遺稿として発見された。彼自身は自分の詩や童話の独自性や芸術性をかたく信じていたといわれるが、これはどんな三流詩人も同様に確信しているにちがいないから、特筆するには当るまい。
　この年二月には、小林多喜二が虐殺されている。

関屋敏子（一九〇四――一九四一）

　明治新政府の顧問として来朝したアメリカ南北戦争の勇士ル・ジャンドル将軍を祖父とし、十五世市村羽左衛門を伯父として、昭和初年、日本のプリマ・ドンナとうたわれた声楽家関屋敏子は、昭和十六年十一月二十二日、東大工学部の送別会に招かれ、学生たちを前に、「椿姫」など四曲を歌った。そして、上大崎の自宅に帰った。
　その夜、彼女は父親に、「歌を聞かせてあげる」といって、ピアノに向い「野いばら」を歌った。それから母親に、
「お母さま、いつまでもお化粧して、きれいでいて頂戴ね」
と、いった。それが彼女のさりげない訣別の言葉であった。
　そしてスリッパをひきずって、二階の寝室にあがっていった。夜十時ごろ、母親の愛子（羽左衛門の妹）が、湯タンポのかげんを見るためにいちどそこへはいっていったとき、敏子はスヤスヤ眠っているように見えた。
　朝になって、敏子が死んでいるのが発見された。
　のちに梁に人絹の紐をかけて縊死したと伝えられたが、実際は睡眠薬自殺であった。
　また自殺の原因についても、ゾルゲ事件の尾崎秀実の愛人であったため特高に召喚されたのが原因だなどという噂がたてられたが、事実は、彼女が年齢的に、あるいはのどの酷使により高音の声が出なくなったためと、作曲中のオペラ「巴御前」がうまくゆかない悩みからではなかったかといわれる。
　しかし、「関屋敏子は、三十八歳で今散りましても、桜の花のようにかぐわしい名は永久消える事のない今日只今だとさとりました。……そして敏子の名誉を永久に保管していただき、百万年も万年も世とともに人の心の清さを知らしむる御手本になりますよう、大日本芸術の品格を守らして下さいませ」などという、両親への異様な遺書を見てもわかるように、当時「世界五大歌手」などと呼ばれたレッテルの重みに、ついにたえきれなくなって一種のノイローゼになったのが真の原因であったと思われる。

ジェラール・フィリップ（一九二二――一九五九）

「肉体の悪魔」「パルムの僧院」「悪魔の美しさ」「花咲ける騎士道」「夜ごとの美女」などのフランス映画で、そのデリケートな美貌と演技力で日本にも大人気のあった俳優ジェラール・フィリップは、一九五九年、若くして胃ガンに冒された。
　彼は胃の切除手術を受けたが、病名は知らされなかった。手押車で手術室に向う夫を見送った妻のアンヌは書く。
「あの人は死ぬのだ。あの人は死ぬのだ。
　わたくしは傷だらけになるまで戦った。敵を押し返した。敵はわたくしを踏みにじり、息の根をとめ、打ちのめした。わたくしはなすがままに任せた。あの人が死ぬという想念を、頭の中に、肉の中に叩きこみ、その想念とともに地核にまで沈んでいった。そうだ、あの人は死ぬのだ。あの人は腐ってゆくのだ」（アンヌ・フィリップ『ためいきのとき』角田房子訳　引用文以下同じ）
　手術は終った。それはうまくいった、とジェラールは教えられた。
「わたくしは今まで嘘をついたことのない明るいまなざしで、あなたをあざむいていたのだ。あなたに深淵のふちを歩かせながら、人からは《よかったですね》といわれていたのだ。わたくしは恥じていた」
「わたくしは手術のあとを眺めた。あなたはそれをおもしろがった。
『ぼくの胃が切り開かれたなんてね！』
　わたくしはその傷あとに悪寒をおぼえ、身がすくんだ。すぐそこに、わたくしの唇からほんの二、三センチのところに、あなたを殺す、あなたをたちまち打ち倒す癌、しかもあなたの知らぬ癌が生きていた。どうしてあなたはわたくしの考えていることに気づかなかったのだろうか。わたくしの顔も、いかにも無邪気そうに閉じたあなたの傷あとも、同じように嘘をついていたのだ」
　ジェラールは退院を許され、近づく死を知らぬままに、自邸で妻としばしの静かな生活をすごす。アンヌは書く。
「日が暮れかけていた。わたくしはカーテンをしめた。あなたのそばに横になって、あなたが何かを読んでいるあい

だ、眠っているふりをした。わたくしは怪物とさし向かいで暮していた」
「癌細胞があらゆる戦いに勝つのだ。その戦いがわたくしの目の前で、あなたのなめらかな、何も知らぬ肌の蔭に隠れて行われているのだ。夜の静けさの中で、わたくしはこの白蟻のような活動ぶり、美しく若い肉体を相手にしているだけにいっそう能率をあげて、二十四時間絶え間なくうごめいている卑劣な仕事場の音を、耳に聞く思いがした。あなたの知らぬまに、わたくしが何も手を出せぬままに、わたくしがあなたを見つめている間に、あなたの死は音もなく織りあげられてゆく」
　そして十一月の下旬が来た。
「ある朝——それはあなたの死ぬ三日前の朝だったが、数日間降り続いた雨があがって、太陽が現われた。わたくしがカーテンを開くと、あなたがいった。《顔にお日さまを感じてみたいね》わたくしはベッドを少し押して、あなたを日ざしにさらすようにした。あなたはしばらく目を閉じていたが、やがて目を開くと、つぶやくようにこういった。《なんていい気持だろう！》
「翌日はまた雨が降り、翌々日も雨、その次の朝、あなたは死んだ。あの十一月の日ざしの色、それがどんなふうにあなたの顔や髪を愛撫し、それから逃げるように壁の方へ去っていったか、わたくしは決して忘れないだろう」
　十一月二十五日であった。

三十八歳で死んだ人々

死刑執行人。——もうろくと事故死をふせいでやるために全力をあげる人。
——アンブローズ・ビアス——

マリー・アントアネット

（一七五五——一七九三）

オーストリアの女帝マリア・テレサの娘として十五歳のとき、フランスのルイ十六世の妃となり、やがて皇后となったおてんば娘マリー・アントアネットは、フランス革命が起ると、生来の天真爛漫な言動が、かえって民衆の憎しみの標的となった。
　飢えている民衆があるということを聞いて、「パンがなければお菓子を食べればいいのに」といったというような風評が伝えられたのはその好例である。悪意はないにしろ、彼女はたしかに誤解を受けるような軽佻（けいちょう）な性格の持主であり、かつ遊び好きのぜいたくやであった。
　しかるに革命勃発後の一七九一年、オーストリアに逃れようとして捕えられ、一七九三年夫ルイ十六世が処刑され、自分もまた断頭台の運命が近づくや、彼女はマリア・テレサの娘にふさわしい剛毅な態度を発揮しはじめた。
　一七九三年十月十六日、革命広場（いまのコンコルド広場）の刑場へ向う馬車の上で、悪罵する群衆を、彼女は冷然と見下ろしていた。
　彼女はその前の七十日間のコンシェルジュリイ幽囚の間に、まだ三十八歳であったのに、髪は真っ白になり、子宮出血症のために悩まされて、さながら老婆のように変っていた。
　断頭台に上るとき、偶然処刑人サンソンの足を踏み、サンソンが「痛い」とさけぶと、彼女はふりむいて、「ごめんあそばせ、ムッシュウ、わざとしたわけじゃありません」と、いった。
　シュテファン・ツヴァイクは書く。
「……王者はすべての助けをしりぞけながら、断頭台の木

の階段を上ってゆく。かつてヴェルサイユの大理石の階段を上った時とまったく同じに軽やかに弾みをつけて、黒繻子のハイヒールの靴で、最後の階段を上ってゆく。いとわしい群衆の頭上はるかに、今日彼女の前なる大空にうつろな一瞥を与えるばかりである。……何人も死にゆく人の最後の思いを知らない。刑吏たちは彼女をうしろざまにつかんで、首を刃の下に、身体を板の上にさっと投げる。縄を引く。閃光一閃、刃は落下し、にぶい音をたてる。すでにサンソンは血のしたたる首の髪の毛をひきつかんで、広場の上に高々とさしあげる」（高橋禎二、秋山英夫訳）

プーシュキン（一七九九——一八三七）

賭博好き、酒好き、女好きの上に生来反体制精神の持主であるため、ロシア上流階級の鼻つまみとなりながら、一方で、『エヴゲニー・オネーギン』『大尉の娘』『スペードの女王』などの小説や詩で、民衆から国民詩人視されていたプーシュキン——彼は現代でもソ連ではトルストイ以上に国民作家視されているといわれる——は一八三七年一月、ジョルジュ・ダンテスから決闘状を受けとった。

ダンテスは、元フランス近衛兵でありながら、駐露オランダ公使フォン・ヘッケレン男爵の養子となっているという、現代の常識では律し得ない身分の人物であった。これが、プーシュキンの美しい妻ナターリアと恋愛し、プーシュキンがダンテスをはげしくなじったことから、逆に決闘状をつきつけられる羽目となったのだ。一説にプーシュキンを憎むロシア上流階級の一部の謀略であったともいわれる。

一月二十七日、聖ペテルスブルグ郊外の雪のつもった丘の上で、ピストルの決闘が行われた。

これまで決闘馴れしていたプーシュキンであったが、その日は敗れた。相手の右腕も傷つけたが、彼のほうは下腹部に撃ちこまれた。

彼は馬車で自宅まで連れ戻された。そのときまで彼はなお気力を残していたが、やがて怖ろしい苦しみがはじまった。まるで生皮をはがれる動物のようにさけび出し、正視にたえない猛烈な痙攣を起し、硬直した身体でベッド中をころがりまわり、ついに床の上にころげ落ちた。

この苦しみを一月二十九日まで繰返し、正午ごろ「日除けを下ろしてくれ……眠りたいから」と、つぶやくと彼は息絶えた。

家の外は、彼のことを知った市民で、十重二十重に囲まれていた。民衆はさけんでいた。

「ダンテスを殺せ！　ダンテスを殺せ！」

日本では大塩平八郎の乱の起った年であった。

奇怪なことに、このジョルジュ・ダンテスは、彼の恋愛したナターリアではなく、その妹カテリーナと結婚して、故郷アルザスに帰り、平凡で単調な人生を送った。

メンデルスゾーン（一八〇九——一八四七）

父親の莫大な遺産をうけつぎ、道楽ともいえる音楽で、若くしてヨーロッパの巨匠と目され、健康な身体を持っていたメンデルスゾーンは、一八四七年十月十八日、ライプチヒのある親しい夫人の家で、突然手が冷たくなり、麻痺し、それから烈しい頭痛に襲われた。

この症状はいったん回復したが、二十八日午後、第二回目の軽い発作が起った。

十一月三日、ベルリンから見舞いに来た弟のパウロと、冗談まじりの談話を交しているとき、午後二時ごろ、メンデルスゾーンはまた突如口を大きくひらき、鋭い悲鳴をあげて倒れた。

彼は十時ごろまで凄い悲鳴をあげつづけ、歌をうたったり、太鼓を打つような手つきをした。そして、心のはりさけるような悲鳴を一晩じゅうあげつづけた。

翌日になるとおとなしくなり、医者が、「どんな具合ですか」と訊くと、「疲れた。……とても疲れた」と、いった。

四日の午後二時ごろ彼はまた意識を失い、夜の九時過ぎに眠るように息をひきとった。

彼の死は一応若年性高血圧による脳卒中ということになっているが、疑問の点もあり、決定的な診断はいまだに下されていない。

島田虎之助（一八一四——一八五二）

「本当に修行したのは、剣術ばかりだ。全体、おれの家が剣術の家系だから、おれの親父も、骨折って修行させようと思って、当時剣術の指南をして居た島田虎之助という人に就けた。この人は世間なみの撃剣家とは違うところがあって、始終『今時みながやり居る剣術は、かたばかりだ。せっかくの事に、足下は真正の剣術をやりなさい』といっていた。それからは島田の塾へ寄宿して、自分で薪水の労を取って修行した」

と、海舟が『氷川清話』で語った幕末の剣豪島田虎之助の強さには、種々の逸話があるが、最も人に知られているのは、中里介山の『大菩薩峠』中の、雪の鶯谷で、土方歳三をはじめとする新徴組が、まちがって島田を襲撃し、片っぱしから十三人まで斬って落され、目撃していた机竜之助が、ついに「これは神か！」と嘆ずる場面によってであろう。

ただし、これは文久二年暮の話という設定になっているけれど、実際の島田虎之助は、それより十年前の嘉永五年九月十六日に病死している。平生大酒家で、血を吐いて死んだといわれるから、胃潰瘍などであったかも知れない。――それにしても、死んだ人間を十年後に登場させるとは、中里介山の胆のふとさよ。

この年十月には銭屋五兵衛が死んでいる。

大杉　栄（一八八五――一九二三）

大正十二年大震災後の九月十六日、無政府主義者大杉栄は、妻の伊藤野枝とともに、大森の実弟大杉勇を震災見舞いにゆき、同家にあずけられていた末妹の子で七歳になる橘宗一を連れて、午後六時ごろ新宿柏木の自宅近くまで帰り、ある果物屋で果物を買っているとき、数名の憲兵に拘引された。

その隊長は憲兵大尉甘粕正彦で、彼はかねてから社会主義者を「国賊」としてダカツのごとく憎み、特に大胆不敵で戦闘的な大杉に眼をつけて殺意をいだいていたものであった。

二台の車に分乗させられて、麹町平河町の憲兵隊本部に連行された大杉は、一人だけ一室にいれられ、憲兵曹長森慶次郎に訊問されていた。

午後八時二十分ごろ、そこへ音もなくはいっていった甘粕大尉は、声もかけずにその背後から大杉ののどに右腕をまわして絞めつけた。大杉は両手をあげて苦しんだ。

甘粕は右ひざがしらを大杉の背にあてて、十分ばかり絞めつづけて、こときれた大杉をさらに麻縄で絞めてとどめをさした。ついで甘粕は別室に向い、伊藤野枝、少年宗一も絞殺し、屍体は憲兵隊本部の古井戸に投げこみ、古煉瓦や石やごみで埋めた。

もう少し生かしておきたかった快男児の一人である。

この虐殺をあえてした甘粕は、わずか二年十カ月で釈放され、満州に渡り、やがてそこの実力者となった。

岸田劉生（一八九一――一九二九）

「麗子像」などで大正洋画界に不滅の名を残した岸田劉生は、大正十二年九月の関東大震災で鵠沼の家を失い、京都に移住してから、かつては白樺派に共鳴し、武者小路実篤に私淑した若き日の劉生とは別人のように、とどまるところを知らない遊蕩児と化した。その破滅的な生活は、岸田吟香の子として生まれた十二人の兄弟姉妹中、三人までが精神病であったことによる発狂の恐怖、また天性の傲岸さから招いた木村荘八らの離反による孤独などに原因するといわれる。

晩年金に困り、中国高官の肖像画を描いて金を調達する目的で、昭和四年夏、満州に渡ったが、その目的は果せず、健康も害して、三カ月後帰国したが、その途中同行者田島一郎に誘われて、田島の郷里である山口県徳山に立ち寄り、さらに三週間そこに滞在した。

そして、昭和四年十二月十四日夜、劉生は徳山の料亭栄亭で、友人と美妓十数人との大宴会ののち、午後十一時ごろ、料亭の主人に乞われて、銀屏風に三日月と舞妓をえがき、小唄を書き添えた。これをえがくのに、十五分間一気に筆を走らせつづけたあと、筆を持ったまま倒れるように脇息にもたれて、「気分が悪い」と、いった。顔面は蒼白であった。

発病後二日を経て、岸田は料亭から田島家に移され、十帖の奥座敷に寝かされたが、しきりに眼がよく見えないと訴え、医者から慢性腎臓炎による視力障害と診断された。しかし劉生の身体は、腎臓ばかりでなく、胃、肝臓、心臓すべてメチャメチャの状態になっていた。

十八日朝、彼は「暗い！」「眼が見えない！」とさけび、また、「マチスのバカヤロー！」と、さけんだ。当時の日本画壇を支配していたフランス印象派に対する劉生の最後の抵抗であったか。

以後彼は、昂奮してしきりに、「バカヤロー、バカヤロー」を繰返した。

十二月二十日、多量の吐血とともに死亡した。

彼は若いころからひどく結核を怖れていたが、死因は胃潰瘍と腎臓病に尿毒症を併発したものであった。

市川雷蔵（一九三一――一九六九）

一方で妖気みなぎる眠狂四郎と化し、一方で「炎上」

「破戒」などで近代青年像を演じ切り、死後も長くファンを持つことになる市川雷蔵は、昭和四十三年五月、直腸ガンのために手術を受ける運命を迎えた。

手術後いったん回復したかに見えて、また眠狂四郎映画などの撮影にはいったが、かんじんの立ち回りはすべて吹き替えに頼らなければならない状態であった。そして翌年の七月十七日午前八時二十分にこの世を去った。

彼はメーキャップを落すと、眼鏡をかけた、ただ明朗で平凡なサラリーマン風の青年にしか見えなかったが、やはりスターらしく、病み衰えた顔は見られたくないといって、入院後はすべて面会を謝絶したのみならず、その遺言により、顔に白布をかけたまま火葬場に運ばれたという。

小原 保（一九三三―一九七一）

昭和三十八年三月三十一日夕刻、台東区南入谷公園で、小原保は、遊びに来ていた村越吉展を誘拐した。

小原は、福島県石川郡石川町の貧農出身で、東京に出て時計の修理工などやっていたが、あずかった時計を売り飛ばしたりして、借金だらけになっている三十歳の男であり、吉展は近くの工務店の息子で、あと半月で五歳になる幼児であった。

小原は、たまたま観た映画「天国と地獄」予告篇に触発されて、子供の誘拐を思いたったもので、吉展を三ノ輪橋に近い円通寺の墓地へ連れてゆき、日が暮れて眠りこんだ幼児を自分の皮ベルトで絞殺し、四月二日から村越家に脅迫電話をかけはじめた。

四月八日の午前一時半ごろ、八回目の脅迫電話で、吉展の母豊子は、犯人の指定する通り、五十万円をつつんで、トヨエースに乗って、自宅から三百メートルばかり離れた品川自動車前にならんでいた小型四輪の中の一台の荷台に置いた。

このとき村越家には五人の刑事が泊っていたが、犯人の指定した場所があまり近くであったので、狼狽のあまり、トヨエースで出かける豊子をそのままにし、自分たちは徒歩で追っかけるという、考えられないミスをおかし、彼らが現場に到着したときは、犯人がすでに五十万円を持ち去ったあとであるという、前代未聞のへまをやったのみならず、かえって母親の行動を責めるという愚行を犯した。

しかし、村越家にかけられた犯人の声は録音されており、四月二十五日から、テレビ、ラジオにより全国に流され、小原を知る者からの届け出によって、五月二十一日、小原

は逮捕された。

しかし、小原は知らぬ存ぜぬで押し通し、六月十日釈放になったが、十二月五日、ふたたび窃盗容疑による別件逮捕というかたちで逮捕された。小原はしぶとくなお落ちず、唯一の証拠たる録音された声が、小原の年齢に比して年よりじみていたという錯覚から警察も自信がなく、結局ただの窃盗罪で、懲役六カ月の刑を受け、三十九年二月、前橋刑務所に送られた。

四十年五月、この未解決の事件の見直しとして、三たび小原を取調べることになったのは、平塚八兵衛部長刑事であった。彼は小原の主張するアリバイをつき崩し、東京拘置所に連れ戻された小原を追及し、凄絶な攻防ののち、七月三日午後十一時十三分、ついに小原を落した。事件発生以来約二年三カ月ぶりの解決であった。

四十一年三月、小原は東京地方裁判所で死刑の宣告を受けた。彼はすでに死を覚悟して控訴の意志を放棄していたが、弁護士の勧めで上告した。しかし控訴審は異例のスピードでこれを棄却し、十一月二十九日、死刑が確定した。

死刑囚小原保は、四十四年六月、突然、千葉県東金市の土偶短歌会に投稿の許可を求める手紙を出し、以後、短歌誌「土偶」に彼の歌が掲載されはじめた。ただし名前は、故郷にちなんで福島誠一とした。

「朝あさを籠の小鳥と起き競べ誦経しずかに処刑待つ日日」

「踏みしめて登り行くとき十三のきだはし軋む罪の重きに」

「刑架より堕ちたる我れに息のある不思議さ気づき夢は醒めたり」

昭和四十六年十二月二十二日、すでに宮城刑務所に移されていた彼は、最後の歌を送った。

「明日の死を前にひたすら打ちつづく鼓動を指に聴きつつ眠る」

「おびただしき煙は吐けどわが過去は焼きてはくれぬゴミ焼却炉」

死刑が確定すると、執行の呼び出しは、ある日の午前九時から十時までの間にやって来る。それで死刑囚は、毎朝、この時間、廊下を歩く看守の跫音に全神経を集中し、何事もなく「運動ーッ」という声がかかると、がくりと肩を落して大息をつくという。

右の歌を送った翌朝、十二月二十三日朝、小原の独房の前に靴音がとまり、彼は死刑場に曳かれていった。

この歌がなければ、だれも小原を人間の魂のない野獣だ

としか思わなかったろう。——しかし、歌をよむことを知らなかったころにも、彼に人間の魂があったことは事実なのである。そして、おそらくは大半の死刑囚にも。

児玉隆也（一九三七——一九七五）

ルポライター児玉隆也は、昭和四十九年「文藝春秋」十一月号に『淋しき越山会の女王』を書いて、時の首相田中角栄に痛烈な一撃を加え、その退陣の一因を作った。

しかし彼は、その半年ほど前からひどい肩こりや血痰の症状を訴えていたのだが、診断の結果、肺ガンと判明して十二月十六日、築地のがんセンターに入院し、翌五十年の「文藝春秋」六月号に『ガン病棟の九十九日』を発表する羽目になった。

「入院の日の朝、ランドセルを背負って畑中の一本道を歩いてゆく二人の娘の後ろ姿が、（いつの間にあんなに大きくなったのだろう）と私を驚かせた」

とか、同じ入院患者の老人たちを見て、

「この人たちの十年をこっちへ下さい。私にはまだこれから大きくしなければならない子供がいるのです」

とかいう文章は、幼い子を残して死んでゆかなければならない若い父親の哀切さを訴えて読者を感動させた。

しかし彼は、その雑誌が発売されて間もない五月二十二日に、寝ているのもたえられないような苦しさに起き上り、義弟に背中をさすってくれと頼み、壁に向ったとたん倒れて死んだ。

死ぬ前に「……死ぬのかな」と、心細げにつぶやいたという。

そして「文藝春秋」八月号には、その妻が死んでいった夫について書くことになった。彼女はあっけらかんと書く。

「家の柱がいなくなっても、生活自体はさほど変らないものだということに気がついた。夕方になれば帰宅し、日曜になれば子供と遊ぶという父親ではなかったから、子供たちもさほど寂しくないのかも知れない」

父親とは哀しい存在だ、と、いわざるを得ない。

三十九歳で死んだ人々

> 靴ヲ隔テテ痒キヲ掻ク。
> 生ヲ隔テテ死ヲ描ク。
> ——山田風太郎——

クレオパトラ（前六九——前三〇）

シーザーを悩殺したエジプト女王のクレオパトラは、シーザーの後をついだローマの権力者アントニウスもまた悩殺し、ためにアントニウスは自分の妻を離婚した。その妻の兄アウグスッスは大いに怒り、アントニウスと戦い、これを自殺に追いこんだ。

クレオパトラはアウグスッスに対し三度目の誘惑を試みたが、アウグスッスがローマへの凱旋式に彼女を連れていってさらしものにしようとしていることを知り、自殺した。無花果の籠にひそませてあったアスプ蛇に腕をかませて死んだということになっている。前三〇年八月二十九日のことであった。

蒲生氏郷（一五五六——一五九五）

「氏郷が病死したのは文禄四年二月七日で、齢は四十歳であった」

「太閤が氏郷を忍んで（畏れて）石田三成と直江兼続の言を用い、利休の弟子の瀬田掃部正忠に命じて毒茶を飲ませたなどと云うのは実に忌々しい。正忠の茶に招かれて、帰宅して血を喀いたことはあろうが、それは病気の故であったろう。無い事に証拠は無いものであるから、毒を飼わなかった（毒殺されなかった）という証拠はないが、太閤が毒を飼ったということは信ぜられない」

「氏郷に毒を飼ったのは三成の讒にもとづくと蒲生家の者は記しているが、氏郷は下血を患ったと同じ人が記し、面は黄に黒く、頂頸の傍、肉少く、目の下少し浮腫し、その後腫脹いよいよ甚しかったと記してある」

「一朝一夕の病気ではない。想像するに腎臓などの病で終

ったのだろう」（幸田露伴『蒲生氏郷』）
しかし、ガンか肝硬変の疑いもある。
毒殺か病死かは知らず、

「かぎりあれば
吹かねど花は散るものを
心みじかき春の山風」

という彼の辞世は、戦国武将の歌の中の絶唱である。

パスカル（一六二三——一六六二）

パスカルは考える葦のように心やさしく、身体が弱かった。

有名な「流体の圧力に関するパスカルの原理」を発見した一六六二年、まだ独身の彼は、自分の家に貧しい一家を住まわせていたが、その子供の一人が天然痘にかかったので、彼らを追い出すよりも、と、自分のほうが姉の家に移った。

そこで、以前から患っていた腹痛が重くなった——腸結核ではなかったかと推定されている——そこで医者たちが集まって、十七世紀風の治療をした。両腕から瀉血し、下剤をかけ、油と葡萄酒の浣腸をかけた。

一六六二年八月十七日、医者は彼に脱脂乳を飲ませたが、彼は痙攣を起しはじめた。

かつて『パンセ』で、

「人間は、死と無知について不可抗なので、幸福になるために、それらについては考えないことにした」

「それまでの場面がどんなに美しくても、最後の幕は血にまみれている。最後に、頭上からばらばらと土をかけられて、それで永遠におさらばとなる」

と書いたパスカルだが——。それでも「聖体拝受」のために主任司祭がやって来たとき、彼はさけんだ。

「願わくは、神、永遠にわれを見捨て給わざらんことを！」

それから二十四時間にわたって、一瞬もやまない痙攣の苦痛にさいなまれたのち、八月十九日午前一時に息をひきとった。

日本では松平信綱が死んだ年である。

ルイ十六世（一七五四——一七九三）

一七九三年一月二十一日月曜日午前十時十分、善良暗愚なルイ十六世を乗せた四輪馬車は、革命広場に到着した。

——死の数時間前、タンプル牢の牢獄の一室に運ばれた最後の料理、仔牛のカツレツ六枚、鶏の半身肉のソース煮一皿、パン、サラダとフルーツ、白ワイン二杯、カリカント・ワイン一杯、これだけを一気に食べて、彼はそのあと皿をパンでぬぐったといわれる。

王を迎えたギロチンの断頭職シャルル・アンリ・サンソンは、規則に従って王の上衣をぬがせようとしたが、王はそれをしりぞけてみずから脱衣した。ついでサンソンは、これまた規定通りに王をうしろ手に縛ろうとすると、王ははげしく抵抗した。この抵抗で王のシャツはビリビリに裂けた。

やがて王は、断頭台の狭い急な階段を、エッジウォルト神父に支えられて上った。

王はギロチンを背に、群衆にさけんだ。

「人民よ、余は罪なくして死ぬる。余は、人々の科する罪に当るものではない。しかし、余は余の血がフランス人の幸福の固めとならんことを切望する」

王が断頭台の上にうつぶせになって縄で板にくくりつけられたとき、はげしく身をもがいたので、神父は王をなだめるのに骨を折った。それでも王の首は太くて、断頭台の首穴にしっくりはまらず、位置が少しずれていた。

十一時二十分、断頭刃がすべり落ちた。刃がうなじと下顎を砕いたが、完全に断ち切れず、王は絶叫した。もう一度刃を上から押して、やっと首が落ちた。

規則によってサンソンは、王の髪をつかんで首を群衆に示した。そのときサンソンは涙を浮かべていたので、息子のアンリ・サンソン（父はシャルル・アンリ・サンソン）があわててその前に立って、群衆から父を隠した。その涙を革命党の人間に見られると、自分たちもギロチンにかけられる怖れがあったからである。

広場には数瞬うつろな静けさが満ち、やがてまもなく「共和国万歳」というさけびがまばらに起った。徐々にその声は数を増し、十分もたたぬうちに大群衆の絶叫となっていった。人々は輪を作って、「暴君の首が落ちた」とさけび、声をかぎりに、ラ・マルセイエーズを歌って踊り狂った。処刑台の下では数多くの人々が王の血で手を洗っているのが見られた。

日本では、同じ年に林子平や高山彦九郎が死んでいる。

ショパン（一八一〇——一八四九）

生来虚弱体質であったショパンは、二十五歳のとき喀血

した。その後のジョルジュ・サンドとの愛と別れの間にも、彼の肺結核は徐々に進行した。サンドと別れてからは、彼は無一文になり、病軀をおして各地で演奏会をやらなければならなかった。

一八四九年のはじめから症状が悪化し、六月には新しい喀血がはじまった。十月のはじめには、パリのヴァンドーム広場のみすぼらしいアパートで、彼はもうベッドの上に坐ることも出来なかった。十月十六日、呼吸困難に苦しみながら、紙に書いた。

「土の中では窒息してしまう。生きたまま葬られないように、身体を外に出しっぱなしにしておいて下さい」

そして、十月十七日午前二時、「お母さん……私の気の毒なお母さん」と呼びながら死んだ。彼の母親はまだ故郷ポーランドで生きていた。

……ただし、このお母さん云々はショパンの臨終に立ち合ったファンの一人キャサリン・アースキン夫人の証言によるものだが、一九七八年刊ジョージ・アレックの『ショパン』によると、そういうことはなかったという。

美しく繊細なピアニスト、ショパンには特に女性の崇拝者が多かった。アレックはいう。「ショパンの死に関して、男も女も実に多くの人たちが臨席したことを主張しているのは驚くばかりである。彼らの回想は、数においても多様さにおいても、王の死にまつわる通常の物語をしのいでいる。しかもそのほとんどが信用できない」

アメリカでは同月六日、ポーが死んでいる。

シャーロット・ブロンテ（一八一六――一八五五）

三十一歳のとき『ジェーン・エア』を書いたシャーロット・ブロンテは、二人の姉や二人の妹弟――その妹は、『嵐が丘』を書いたエミリー・ブロンテである――も失い、ただ老いた牧師の父と寂しく暮していたが、貧しく平凡な副牧師のニコルズに求婚された。

しかし父は、断乎としてこれをしりぞけた。表面上の理由は、すぐれた作家であり、ただ一人残った娘を、そんなつまらない男に与えられるものか、というのであった。

ニコルズは追い払われたが、また戻って来て、シャーロットに愛を求めつづけた。シャーロットの心に、次第に愛憐の情が生まれた。

彼女は父に訴えた。

「お父さま、私はもうお嬢さんではありません。若くもなく、美しくもありません。いまではもうみにくいのです。このような私を七年間も待ってくれるような人が、たくさんあるとお思いでしょうか」

シャーロットは、一八五四年六月にニコルズと結婚した。父は結婚式に出席もしなかった。

その年の秋、シャーロットは夫と荒野を散歩していて、豪雨にぬれ、風邪をひいた。ようやく癒りかけたので、翌一八五五年の一月に人を訪問したが、それでまた悪化し、三月三十一日に亡くなった。

最後のお祈りをしている夫のニコルズに彼女はいった。

「ねえ、あたしは死なないわね？　あたしたちは離れやしない。あんなに倖せだったんですもの」

日本では安政の大地震で藤田東湖などの死んだ年であった。

ただ一人残った頑固な父は、なお六年間生きて八十四歳で死んだ。

横川省三（一八六五――一九〇四）

若いころ自由党の壮士として加波山事件に連坐して投獄されたり、郡司大尉の千島探険に参加したり、日清戦争では朝日新聞記者としてみずから水雷艇に乗って海戦の報道をしたりした明治の冒険児横川省三は、日露の風雲急を告げるや、同志沖禎介（三十歳）とともに軍事探偵を志願し、ラマ僧に変装して満州のロシア軍の背後に潜入し、シベリア鉄道の大興安嶺トンネルの爆破その他の秘命を受け、明治三十七年二月十一日、北京を出発した。

しかるに四月十二日朝、チチハル南方の、なお雪原の景を呈する曠野で露営中、ロシア駐屯軍に発見され、日本人であることを看破されてハルビンに連行され、四月二十日、絞首刑を命じられた。

両人は軍事探偵の名誉にかけて銃殺刑を望み、ロシア側は承諾した。

横川の、故郷岩手の二人の娘への遺書。

「拝啓。

父ハ、天皇陛下ノ命ニ依リ、露国ニ来リ、四月十一日露兵ノ為ニ捕ヘラレ、今彼等ノ手ニ依リ銃殺セラル。是天ナリ命ナリ。汝等幸ニ身ヲ壮健ニシ、尚国ノ為ニ尽ス所アレ、我死ニ臨ンデ別ニ言フ処ナシ。

明治三十七年四月二十日」

二人は所持金約一千円をロシア赤十字に寄付することを申し出て、受けいれられた。

翌二十一日午後五時、曠野にひき出された横川らは、銃殺にあたり目隠しと立木に緊縛されることを拒否した。ロシア側は、目隠しは撤回しなかったが、立ったままの処刑は認めた。このころの戦争にはたがいに武士道騎士道の匂いがあった。

地平線を落日が染めた午後五時、横川らは天皇陛下万歳を唱え、二十四人のロシア兵によって銃殺された。

太宰　治（一九〇九――一九四八）

昭和二十二年『斜陽』を発表して一躍文名を高めた太宰治は、「選ばれたものの恍惚と不安」の中に、残る生命を酒と遊蕩に浪費していた。彼はみずからにいいきかせた。

「地獄の思いで遊んでいる。いのちを賭けて遊んでいる」

しかし、昭和二十三年の二月二十九日、毎日新聞経済部長平岡敏夫――太宰と弘前高校時代の友人――とともに、太宰の三鷹の仕事場を訪れた学芸部副部長古谷綱正は書いている。

「やがて平岡氏が彼の健康について尋ねた。

『よくはないんだよ。この間また喀血をやっちゃってね。酒でもっているんだよ。酒飲むと元気が出てくるんだよ』

そういいながら、しかし何かものうげであった。それは精神の倦怠よりも、身体からくるだるさに見えた」

その場で痛飲して、古谷は太宰にからんだが、意外にも太宰は怒らず、おとなしくそれをあしらった。古谷はいう。

「作品の中に出て来る酔態は、いわば太宰の理想像であって、本人はとてもそこまで羽目をはずしそうにない。ハメをはずした無惨な生き方に徹しようとしてそれも出来ず、世間から放蕩無頼と思われ、その世評にこたえようとして成らず、ついにヴィヨンになりそこねたこの作家は、自分で自分の独り相撲に負けて死んで行かねばならなかったのではなかろうか」

「常識人」古谷綱正の解釈である。

そのとき、太宰の愛人山崎富栄も同席していた。山崎富栄は、一年前、太宰と屋台のうどん屋で知り合った、いまは三鷹の美容院に勤めている戦争未亡人で、この昭和二十三年、三十歳であった。

三月に太宰は、『人間失格』を書いた。彼はいう。「ぼくの作品は残り少なくなった絵具のチューブを、無理に絞り出すようなものだ」

五月十五日から、彼は「朝日新聞」に新連載する予定の『グッド・バイ』を書きはじめ、下旬に十回分を渡したが、

このころ不眠症と喀血で、彼の身体はもう生きるにたえられない状態にあった。

「修治さん（太宰の本名）は肺結核で左の胸に二度目の水が溜り、このごろでは痛い痛いと仰言るの。もうだめなのです」

と、富栄は、のちに発見された『愛は死と共に』と名づけられた手記に書いている。

「五月雨が、今日もかなしく、寂びしく降っています。『死のうと思っていた――』とお話したら、ひどく叱られた。『ひとりで死ぬなんて？　一緒にゆくよ』」

太宰は、昭和四年、弘前高校時代、カルモチン自殺を計って未遂に終り、五年、銀座のバーの女給と江の島で心中を計って彼だけ助かり、十年、鎌倉の山中で縊死を企ててまた失敗、さらに当時の内縁の妻と水上温泉でカルモチン自殺を計ったがこれまた未遂に終るという「死に憑かれた男」の前歴があった。

そして山崎富栄は、太宰のどんなわがままにもうなずいて、すぐにその用を足すために駈け出すので「スタコラサッチャン」（当時のある漫画の題名）と呼ばれるような温順な女であった。肉体的にも精神的にも、死へ急ぎつつある太宰に、この女性の母性本能は燃えあがったかに思われる。

太宰の妻美知子は語る。

「何時ものように、『仕事部屋に行ってくるよ』といって、気軽に家を出たのは六月六日の朝でした。それからずっと一週間程かえられませんでしたが、朝日新聞に連載が新しくはじまるので、お仕事もそれだけに捗っていることだろうと思って、私は三人の子供相手に忙しく過しておりました。丁度一週間目の十四日の朝、朝日の学芸部長が宅に見えて、『今日お会いする約束になっていたけれど仕事部屋に見えないから、お宅の方じゃないかと思っておたずねしました』とのこと。私は変な予感にふと胸がさわいで、どうされたのかしらと心配しておりますうち、お向いの山崎さんのお部屋から遺書らしいものが発見されたというしらせでした」

太宰と山崎富栄が失踪したのは、六月十三日のことであった。

富栄の部屋には、本棚に二人の写真と、ワラビかゼンマイの芽のような、また両手を下げて水中に立った男女の姿のような、ぶきみな絵が飾られ、線香に水まで供えてあった。

あとに残された山崎の遺書には「……御家庭を持っていらっしゃるお方で、私も考えましたけれど、女として生き

女として死にとうございました。あの世へ行ったら太宰さんの御両親様にも御あいさつしてきっと信じて頂くつもりです。愛して愛して治さんを幸にしてみせます」とあり、

太宰が友人の伊馬春部に残した遺書には、

「池水は濁りににごり藤波の影もうつらず雨降りしきる」

という伊藤左千夫の歌が記されてあり、また美知子夫人宛の遺書には、

「……永居するだけ、皆をくるしめ、こちらもくるしく、かんにんして被下度。子供は凡人にてもお叱りなさるまじく。(中略) あなたを、きらいになったから、死ぬのでは無いのです。小説を書くのが、いやになったからです。みんな、いやしい、欲張りばかり。井伏さんは悪人です」

とあった。

友人たちは、二人が玉川上水に入水したことを直感し、一帯を捜索したが発見されず、いちじは、以前太宰が、自殺したふりをして、友人や批評家の死後の悪口を聞きたいものだ、と冗談をいったのを実験しているのかも知れない、とさえ考えた。

六月十九日の早朝、玉川上水、明星学園傍の杭に男女の死体があがった。

古谷綱正はいう。

「太宰はワイシャツにズボン、富栄は黒のツーピースで、たがいの脇の下から紐ではなれないように固く結び合っていた。この六月十九日は太宰の誕生日に当っていたのも不思議な因縁であった。引揚げられた太宰の死体には、首を絞めた荒縄が巻きつけたままになっていて、縄の余りをまるめて口の中に押しこんであった。富栄が太宰を殺してから入水したことが確認された。しかし遺書から見ても太宰に死ぬ意志のあったのはたしかだし、太宰は前にも何回も自殺未遂の経歴があるので、こんども万一生き返ってはと富栄に自分の首を絞めさせたのかも知れない。あるいは富栄の方でそれをおそれて、太宰には相談なしで首を絞めたのかもわからない。この謎は解けないが、いずれにしてもこれは合意の心中と見るべきだろう」

太宰の屍体はすぐに出版社の用意した棺で運ばれたが、富栄の屍骸は正午過ぎまで、むしろをかぶせられたまま、玉川上水の堤の上に置かれていた。

夫人は語る。「私たち四人が、こんなに早く見捨てられるとは……私はいま落ちこんでいるこの深淵から、どのようにして躍り上ることが出来るのか、さっぱり自信がありません。三人の子供たちを頼りにここから抜け出さなければならないと、心は必死になりますけれど、私の全

身から生きる力がすっかり抜けた感じです。放心状態というのでしょう。涙も出ない悲しみの深さというものをしみじみ味わいました」

この弱気なエゴイストは、しかし文学の衣裳をまとうことによって、「桜桃忌」に毎年おびただしい若者を集めるという、他の作家には見られない魔力を発揮した。

力道山（一九二四――一九六三）

韓国名金信洛――力道山は、昭和二十年代の終りから三十年代の終りにかけて、リングの上で空手チョップをふるい、日本の子供たちの英雄となったが、ただリング上のプロレスラーとしてだけではなく、興行師としても辣腕をふるい、リキ・スポーツパレス、クラブ・リキ、リキ・アパートメントなどを経営する実業界の英雄ともなった。

しかし性格は凶暴で、少しでも不満があるとリング外でも傍人に空手チョップを見舞い、「力道山またあばれる」と、しばしば新聞にニュースだねを提供した。

昭和三十八年一月、彼は韓国に飛んで「韓国の英雄」として迎えられ、六月にはホテル・オークラで朝野の名士千八百人を迎え、二十一歳の元日航国際線のスチュワーデス、日本娘の田中敬子と豪華な結婚式をあげた。

十二月八日夜、彼は赤坂山王下のナイトクラブ「ニュー・ラテン・クォーター」で飲み、泥酔し、トイレにいってその前で、チンピラやくざに足を踏まれたと因縁をつけ、逆に匕首で左腹部を刺された。興行問題にからんでの争いという説もある。

すぐに山王病院の応急手当室に運ばれたが、手術する外科部長が来るまで、部屋にあった医療器具をつかんでは投げつけるという荒れようであった。

小腸にまで達する負傷の手術は成功したが、その翌日から、お茶を飲ませろ、水を飲ませろと騒ぎたて、まわりの人間がそれを抑え切れず与えたためか腹膜炎をひき起し、十二月十五日夜、急に容態悪化して絶命した。

力道山はプロレス十年で、当時の金で二十億円稼いだといわれるが、彼の死後三年でそのすべては消滅した。

四十歳で死んだ人々

臨終の人間「ああ、神も仏も無いものか?」
神仏「無い」
——山田風太郎——

石田三成（一五六〇——一六〇〇）

慶長五年九月十五日、関ヶ原の戦いに敗れた三成は、従者数名とともに伊吹山に逃れ、さらに一人となって、近江伊香郡古橋村の旧知の百姓を頼って、近くの山中の洞窟にひそんでいたが、そこへ来るまでの間、空腹のあまり稲穂などを食ったので、下痢を起して横たわっていた。

九月二十一日、捜索隊が三成を捕えたとき、彼は動くことも出来ない状態であった。

二十四日、三成は大津にある家康の本陣に連行され、二十六日、すでに捕えられていた小西行長、安国寺恵瓊とともに、首に鉄の枷をはめられたまま京へ送られた。

十月一日、彼らは馬で洛中をひきまわされた。

その途中、三成は渇をおぼえて湯を所望したところ、警護の者が、湯はないが甘柿があるからそれで渇きをとめれよ、といったのに対し、三成は、「甘柿は痰の毒だからやめておこう」と、答えた。そこで、「いま首をはねられる人間が毒断ちするとは笑止千万だ」と笑うと三成は、「お前らのような小者はそう考えるのが当然だ。しかし大将たる者は、本意を達するまで何とかして命を惜しむものだ。よく知っておけ」と答えたという。

それにしては、逃亡の途中、稲の穂などを食って下痢をしたのがおかしい。

彼らは六条河原で斬られた。

三成が最後まで命を惜しんだことについて、三成自身は右のごとき弁明をしているが、ひょっとしたら三成の頭には四年前の伏見大地震のことがあったのではあるまいか。死刑囚の大半は自分の運命を変える驚天動地の異変の起ることを期待するだろう。三成もそれを夢みたのではあるまいか。——

中江藤樹（一六〇八——一六四八）

肖像画を見ると、豊肥の相をしているが、四十歳の若さで死んだ。平生喘息持ちだったというが、死に至る病名不明。とにかくこの年齢で死んで、「近江聖人」の名を残したのはエライ。

死ぬときに、「私のあとをつぐ者はだれもいないのが悲しい」といった。桜美林大学を創立した清水安三によると、藤樹は「隠れ切支丹」であったという。もしそれが事実なら、聖人と呼ばれるようになった行状も、この最後の言葉も異様な意味を持って来るのだが。まあ我田引水の怪説だろう。

ウェーバー（一七八六——一八二六）

音楽家のウェーバーである。

一八二〇年「魔弾の射手」を完成したとき、すでに彼は相当に重い肺結核にかかっていた。

一八二五年、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場から「オベロン」の作曲指揮を依頼されたとき、彼はまだ三十九歳であったのに、髪はもう白くなり、声もかすれ、めっきり老けこんでいた。しかし彼は、自分の死後の家族の生活のためにこの仕事を引受けることを決心した。彼は友人に手紙を書いた。

「イギリスでだいぶ金を儲けられる。これで家族は楽になれる。しかし私にはわかっている、ロンドンへいって、そこで死ぬことがね。ひっそりとね。私にはわかっているよ」

一八二六年二月、彼はドレスデンからパリ経由でロンドンへ向った。四月からはじまったロンドンでの「オベロン」の十二回の公演と、十六回の練習の指揮は、病める彼にとって無謀としかいいようのない重労働であった。

彼はこれをやりぬいたのみならず、五月二十六日の慈善公演会で「魔弾の射手」の指揮もした。しかしこの日はちょうどダービーに当っており、かつひどい雨の日で、ホールの入りは半分しかなかった。終ったのち彼は、休憩室のソファに崩れこみ、「何かいうことがあるかね? これがロンドンのウェーバーさ!」と自嘲の笑いを浮かべた。

六月にはいって、彼は知人たちに、また新しい演奏旅行の計画を打明けた。六月四日の夕方、知人たちは口々に彼に、その計画の中止を説いたが、彼はきかずみなを部屋か

らおし出した。

「さあ、もう私を寝さしてくれ」

翌日、宿泊先の召使いがはいってみると、ウェーバーは掛蒲団をはねのけ、右手の上に頭をのせ、眠りこんでいるように、ひとりで死んでいた。医者が来て、死後五、六時間経過している旨を告げた。

ベートーヴェンの死の一年前。

ポー（一八〇九―一八四九）

二十七歳のとき、十三歳のヴァージニアと結婚したエドガー・アラン・ポーは、ただに探偵小説の鼻祖たるのみならず、近代文学の創造者ともいうべき小説や詩を発表しつつ、貧苦と憂鬱症とアルコール中毒と、そして病妻に苦しんだ。

十一年後、一八四七年、ヴァージニアが死ぬと、彼のアルコール耽溺はいよいよ昂進した。

一八四九年十月、彼は講演旅行に出て、十月六日バルチモアに着き、フィラデルフィアに向うべく発車ホームへ荷物を運ばせ、汽車が出るまで町へ出た。

ポーに心酔したボードレールは書く。「彼は何か刺戟物をとろうと酒場にはいった。そこで運悪く昔馴染に逢い、夜ふけまでつきあった。翌朝、あけがたのうす明りの中に、彼の屍体が路上で発見された。その身許不明の身体には、身分証明書も金もなかった。

このような死は、ほとんど自殺、ずっと以前から準備されてきた自殺ともいうべきものである」

ボードレールはこう書いているが、その後の研究によって、彼の健康状態はそのころ酒も飲めないほど悪化していたのに、バルチモアで大統領選挙の騒ぎにまきこまれ、知人に腕ずくで酒場に連れこまれ、むりやりに酒を飲まされたあげく放り出されたもので、彼の死はむしろ殺人に逢った、というべきものであったことが明らかにされている。

日本では同年四月に葛飾北斎が死んでいる。

ポーは自分の墓を作ってもらうだけの遺産もない始末で、親戚の者がやっと墓石を作ってやったが、完成直前に、脱線した汽車が飛びこんで、その墓石を砕き、それっきりになってしまった。

それ以後二十六年間墓標も立てられず、二十七年目にはじめて墓が作られたが、その建立式に出席したアメリカの作家は、老いたるホイットマンだけであった。

国定忠治（一八一〇―一八五〇）

ポーが死んだ翌年、嘉永三年七月二十一日の夜、忠治は妾のお町と寝て、中風を発した。そこで知り合いの田部井の名主の家の土蔵にかくまってもらった。彼は関所破りのお尋ね者であったのだ。

一ト月後の八月十四日、捕手が踏みこみ、ついに御用弁になり、江戸の小伝馬町の大牢に送られた。

この年十月三十日には、高野長英が捕方に襲われて自殺している。

十二月十六日、江戸から唐丸籠に入れられて、二十日、彼が破った上州大戸の関所に着き、二十一日、吹きさらしの寒風の中で磔になった。十四回目の槍で絶命した。

後年、同じ上州に生まれた詩人萩原朔太郎は、忠治の墓を見て歌った。

「見よ此処に無用の石
路傍の笹の風に吹かれて
無頼の眠りたる墓は立てり」

江藤新平（一八三四―一八七四）

明治七年二月二十三日、「佐賀の乱」に敗れて、江藤新平は、鹿児島に逃れて西郷に救いを求めたがはねつけられ、高知に走って林有造に助けを求めたが敬遠され、やむなく阿波へ越えて大阪に渡ろうとした。

途中、土佐の山中では急流と絶壁の間にはさまれて、竹笠をかぶったまま冬の豪雨の中に一夜立往生し、「余は母の胎を出でしよりかくのごとき苦痛に遭遇せしことあらず」という惨苦をなめた。

三月二十九日、土佐から阿波にはいろうとして、甲の浦で捕吏にとらえられ、偽名をもって逃れようとしたが、手配写真をつきつけられて就縛した。その手配写真は、彼が司法卿時代にとりいれた制度によるものであった。

彼は、四月四日佐賀に護送され、十三日、断罪された。

わざわざそのために佐賀まで出張した大久保内務卿は、法廷の江藤の陳述が曖昧をきわめ、いかにも死刑を逃れるのに汲々としているかのように見えるのをのぞき見て、「江藤醜態笑止なり」と嘲笑した。

江藤は、乱そのものより、それ以前の、司法卿としての

辣腕が明治政府の中枢を震撼させ、ために大久保の凄じい憎悪を買っていることを知らなかった。
　かつて彼の部下であった裁判長河野敏鎌により、斬罪梟首の判決が下った刹那、江藤は顔色を変じ、「裁判長、私は」と絶叫したが、あとをつづける前に廷丁によって廷外へひきずり出された。
　その河野敏鎌は、のちに、その江藤の態度は「生命さえ全うするを得ば、他日君国のため大いに抱負を実行し得る大信念」にもとづいたものであったろう、と悔いた。
　同日刑は執行され、梟首となった写真は、大久保の意志により、全国の役場に配られた。
　人間には、人を断罪することには熱情的だが、自分が断罪される可能性のあることには不感症な傾向があるが、江藤はその象徴的な典型である。彼の最後の狼狽は、そのあらわれである。

幸徳秋水（一八七一――一九一一）

　いわゆる大逆事件の指導者と目された幸徳秋水は、明治四十三年十二月十一日の第一回の公判後、一カ月のちの明治四十四年一月十八日の判決という異常なスピード裁判の結果、「一味」の二十三人とともに死刑を宣告された。
　第一回公判前の十一月末、幸徳の母多治子は、数え年七十歳の身で、土佐から出て来て、東京監獄で面会したのちまた土佐に帰っていったが、十二月二十日過ぎから寝込み、みるみる衰弱し、二十八日に死んだ。
　四十四年元旦に、幸徳は堺利彦宛の手紙の中に、母のことを書いた。
「……最後の別れの折に、モウお目にかからぬかも知れませんと僕が言うと、私もそう思って来たのだよ、と答えた。ドウカおからだを大切に、というと、お前もシッカリしておいで、と言捨てて立去られた音容が、今もアリアリと目に浮かんで来る。考えていると涙がとまらぬ」
　死にゆく大逆の息子を毅然として激励した老いたる母は、ふるさとへ帰って力尽きたのである。
　刑の宣告から六日後の一月二十四日、独房に置かれた朝食に、特別に塩焼きの小鯛が膳にのっていたので、彼はその日が来たことをたちまち悟った。
　幸徳は、鯛の匂いをかいだだけで残し、白湯をすすって、前から書きかけていた感想文をつづけ出した。
「今の私一個としては、その存廃を論ずるほどに死刑を重大視していない。……病死と横死と刑死とを問わず、死す

べきときのひとたび来らば、充分の安心と満足とをもってこれに就きたいと思う。今やすなわちその時である。これ私の運命である」
　そこまで書いたとき、廊下に靴音がして、刑の執行を告げられた。幸徳は、書きかけの原稿にしめくくりをつけたいと願い出たが、拒絶された。
　教誨師が、辞世ならいいでしょう、というと、幸徳は皮肉な微笑を浮かべて、
「爆弾のとぶよと見てし初夢は千代田の松の雪折れの音」
と、書いた。
　そしてその場から、監獄の北隅にある刑場の絞首台へひかれていった。
　絞首台の落し板がひらいたのは、午前八時六分。
　徳冨蘆花はこれを知らず、二十五日の朝、「天皇陛下に願い奉る」と題する助命嘆願状を書いて、朝日新聞社に発送したが、そのあと新聞をひらき、彼らの死刑が前日執行されたことを知って、「今さら何をかいわん」とさけんだ。
　幸徳らを絞首台に送った山県有朋ら権力者たちは、幸徳らを狂人、蘆花を半狂人と確信していたであろう。しかし後になって見れば、その連中こそ実は一種の狂人たちであったのだ。

山本宣治（一八八九――一九二九）

　大料亭を経営する豊かな実家を持ち、東大理学部を卒業しながら、大正時代から社会正義に燃えた山本宣治は、先駆者として、産児制限、性教育の啓蒙、部落解放、労働組合の結成、治安維持法改正（実は改悪）反対などの運動を熱情的に進め、昭和三年二月の普選による第一回総選挙に、日本ではじめての無産政党からの八人の当選者の一人となった。
　昭和四年三月五日、前日に死んだ新国劇の沢田正二郎の華やかな市民葬の記事を新聞で見て、議会で山本は、「僕たちが死んでも、せいぜい五、六行だろうな」と、苦笑した。傍人が、「あなただって誰かに殺されたら大きく出ますさ」というと、「そんなもんかねえ。じゃ、ひとつ殺されてみるか」と、冗談をいった。
　その夜、彼は、東京市会議員に立候補している同志の応援演説をすませたあと、宿としている神田神保町の光栄館という旅館に帰った。入浴して、九時半ごろ、夕食にとりかかろうとしていると、白ジャケツに久留米がすり、鳥打帽の三十半ばの男が訪れて、労働組合の者だといい、執拗

に面会を求めたので、女中にいちど断わらせた山本も、やむなく部屋に通した。

男は、実は自分は組合員ではなく、右翼団体七生義団の黒田保久二という者だと名乗り、ふところから「自決勧告書」を出してつきつけた。それは、赤化、不敬などの山本の罪状をならべたもので、二人の間に口論が起った。そして男は、いきなり刃渡り二十センチの短刀をとり出して、山本の右頸部を突き刺した。

そのまま逃げる犯人を山本は追ったが、階段の上でまた胸を刺され、二人はもつれあいながら階段を転がり落ちるように駆け下りたが、山本はそこで力尽きて玄関の間に倒れ、十時四十分に絶命した。階段の上から血が雨のようにしたたり落ちていた。

四月三十日、予審が終結するとともに、三十円の保釈金で犯人は釈放された。殺された山本は国賊と見なされ、殺した黒田某は愛国者と目されたのである。

正田（しょうだ）昭（あきら）（一九二九――一九六九）

昭和二十八年七月二十七日夜、東京新橋のバー「メッカ」の二階の天井から血がしたたっているのが発見されてから、いわゆる「メッカ殺人事件」が発覚した。

三階のバンド控室で殺されていたのは証券ブローカーの博多周で、加害者は正田昭という、その年四月に慶応大学経済学部を卒業した二十四歳の青年であることが判明し、正田は全国に指名手配された。

正田はある証券会社に勤めていたが、浪費のために客から預かった株券を売り飛ばし、その返済に困って、たまたま知り合った博多を殺害し、四十万円の所持金を奪ったものであった。

手配写真だけでも七万五千枚という大捜査網にもかかわらず、正田は容易に発見されなかった。京都のアパートに潜伏し、ときどき近くのマージャン屋で鬱をはらしていた彼が、そのために足がついて逮捕されたのは、七十八日目のことである。

正田は昭和三十一年、東京地裁で死刑の判決を受け、三十八年一月二十五日、最高裁で死刑が確定した。

その二月五日、獄中で彼は日記に書く。

「僕は今、ひっそりと独房の片隅で静かに微笑み続けている。人々は空想するだろう。大都会の一隅、巨大なコンクリートの城の、とりわけて、頑丈な死刑囚の仄暗い独房で、死刑囚の生は虫ケラの如く醜く死臭にみちたものであろう、と。

たしかに、此の小室はくらい。それに何と寒い事だろう。今朝がた、すこし射しこんでいた日光は、もはや明日まで望むべくもない。成る程、此の光景を他から空想するとすればいかにも圧倒的な死の凶兆しか見出し得ない。

ところが……僕は絶望してはいないし、泣いているわけでもない。恐怖感も抱き得ない程不感症なのだろうか。どういたしまして。僕は唯、さっきのんだサイダーが如何にも旨かったので、絶望しないのだ」

同年に彼は、『サハラの水』という小説を書き、「群像」新人賞佳作となった。

その中で、彼は母との幻の問答を書く。

――ゆうべの月は美しかったよ。お前の部屋から見えるかい。

お母さん、ここは月も星も見えはしません。ここは牢屋なんですよ。

――月を見ていると、ついお前を思い出してね。お前の名を呼ぶんだよ。聞えたでしょう？

ああ聞えましたとも！　お母さん、ちゃんと聞えましたよ。ここは視界が遮られているので、みんな兎のように耳が大きくなるんだもの。

彼は幼時父を失い、以後母の手ひとつで育てられたのであった。母は湘南の辻堂から、毎週一回必ず面会に来て、洗濯した下着を持参し、よごれた下着を持って帰った。それは彼が死刑になるまで、一週の休みもなく十六年以上続いた。

獄中で正田昭は敬虔なクリスチャンとなり、そのやさしく人なつこい人柄は、周囲の雰囲気をなごませた。

昭和四十四年十二月八日、彼の弁護士正木亮のところへ一通の手紙がとどけられた。

「先生、さようなら、いよいよお別れの時が参りました。

（中略）

明日の死を前に、最後の面会に来てくれました母の心を思うと、ふかい悲しみにみたされ、今更のように親不孝なわが身が責められてなりません。しかし、今は母もゆるしてくれているでしょう。母は、『天国にいって待っていてね。そしてお母さんがゆくときは迎えに来てね』と云いました。……」

翌十二月九日、東京拘置所で刑が執行された。

高橋和巳（一九三一——一九七一）

埴谷雄高から「苦悩教の教祖」と評された高橋和巳は、昭和四十四年夏、腹部の痛みをおぼえ、聖路加病院その他で精密検査を受けたが、どこにも異常は発見されなかった。

四十五年四月、また烈しい痛みが起り、腹が膨れたので、四月末、東京女子医大消化器センターに入院した。

「その翌日、レントゲン検査によって結腸に癌が出来ていると判明したことを、私だけが主治医から知らされた」

と、妻のたか子は記す。

「この衝撃的な事実を自分の心にがっちり受けとめるまでは誰にも言うまい、と私は思い、二日間黙りこんだ」

当人の和巳は「炎症性腸狭窄」という病名を告げられ、その実、ガンの手術を受けた。手術は一応成功したが、再発の可能性は半々ということであった。

十二月から、高橋はふたたび身体の変調を訴えた。彼は知らなかったが、ガンの再発であり、かつ肝臓への転移であった。たか子は十二日、ふたたび東京女子医大消化器センターへ入院させた。

翌昭和四十六年一月十八日、両腿の一部を切開して動脈から肝臓へ制ガン剤を注入した。高橋には、肝炎の治療ということにしてあった。

以後、さまざまな手当にもかかわらず、病人は執拗な発熱、頭痛、肩凝り、腹痛に苦しんだ。二月十日には腸閉塞を起し、ガスの膨満と便秘に苦しみ、夜、和巳はたか子に「最悪の状態になったなあ」とぽつりといった。

ようやく彼は、自分が肝炎であるかどうかに疑問をいだくようになり、百科事典で肝炎の項を調べてくれと頼んだりした。また、しきりに釣り、旅、住宅の本を買って来させた。

二月二十六日には、釣りの本を見ながら、「治ったら一年ほど仕事はせんと、釣りにいったり……治ったら……治ったら」と、あえぐようにいった。

三月にはいると、腫脹した肝臓から注射器で液を吸いとる治療を加えはじめたが、和巳は新しい家を買うことを夢想しはじめ、「鎌倉にええ家さがしてな」「芝生で陽なたぼっこしたい」「土いじりするんやで。鉢買うて来て、花つくるんや」と、うわごとのようにいい、自分で新聞の売家の広告を見て、たか子に目ぼしい家にいってみることを命じた。

二十一日には「こんな病気をするということは考えかたや生き方を変えろという警告や」「もうこれからは観念の凝縮に肝臓が耐えられんやろ」と、いった。

三月末、肝臓が破裂しそうで、やっと肋骨でおさえている感じだ、といい、さらに肝臓の膨満感そのものが痛みと感じられるようになった。

四月七日には血便をもらし出し、またトイレに立てなくなった。十五日には、たか子が見て来た鎌倉の売家について、「おなじこと、なんべんでもいいから喋ってくれ」といい、その図面をひろげさせて、ひろびろとした庭、陽あたりのいい縁側、まわりの山肌のなごやかな色、ひっそりなびいている竹藪、誰もいない道などの風景を、繰返し繰返し、話させた。二十日には「もう治らんようになっているのかもしれへん」といって泣いた。しかし二十四日に、小田実や大江健三郎や柴田翔が「最後の別れ」にやって来たとき、「今がいちばんどん底で、すこしずつよくなってきているようです」と、いった。

五月二日、埴谷雄高が来た。和巳が腕がかゆそうなしぐさをするので、埴谷がその腕をさすってやった。もったいないみたいやな、と、たか子がいうと、「もったいない」と、小声でいった。

五月三日。

「早朝、四時前、震えがくる。（中略）腕をさすり、足をもんでやる。注射ですこし楽になる。暗いと不安がるので、電気をつけたまま私は横になり、ここにいるからと安心させ、うつらうつらしていると、主人が大声をたてる。時計を見ると六時前、呼吸困難はなはだしく、『しんどい、しんどい』と言い、顔に血の気がなくなり、両腕であがいて苦しがる。巻いた毛布を膝の下にいれて脚をもちあげてみたり、手をにぎってやったりする。朦朧としながらも意識はかなりはっきりして喋っている。その声が聞きとりにくく、訴えることをかろうじて察し、主人の言うとおりに、身体の位置をかえたり、背中をさすったりする。（中略）

多量のモルヒネで意識がなくなるとともに、主人はやすらかな昏睡状態になった。八時ごろ、湯で顔と手を拭いてやる。毛布の乱れをなおしてやる。右の眼尻に一滴の涙がこぼれていた。泣いているの？　と私は言って、それを指先で拭きとった。（中略）

深夜になって、ふいに呼吸が間のびしてきて、息が薄くなったかと思うと、息絶えた。十時五十五分。病名を知らず、不可能な時間を夢みたまま、主人は命を終えたのであろう。やすらかな顔であった」（高橋たか子『高橋和巳の思い出』より）

「不可能な時間」とは、死の床から逃れられぬ高橋和巳が、それとは知らず夢みた釣りや旅や新しい家での生活のことである。

ジョン・レノン（一九四〇――一九八〇）

一九六〇年代、世界中の若者を熱狂させたロック・グループ「ビートルズ」のリーダーであったジョン・レノンは、一九七〇年「ビートルズ」を解散して以来、日本人の妻小野洋子とひたすら家庭生活に「耽溺」していたが、一九七八年ごろから活動を再開した。

一九八〇年十二月七日、レノン夫妻は英国国営放送のアンディー・ピープルズのインタヴューを受けたが、このとき、「ではお二人に最後の質問ですが、最近のお二人はプライベートな暮しと安全感についてどう思っていらっしゃいますか」という質問に、レノンは答えた。「……彼女が、ここじゃ道を歩けるわよって言うんだ。それで歩いてみたけれど、まだおっかなびっくりでね。いきなり誰か何か言うとか、とびかかってくるんじゃないかとか、びくびくしていて、それがなくなるのに二年かかったよ。今はもうふつうに玄関を出て、レストランにも入れるよ。これがどんなにすばらしいことかわかるかい？」といった。

翌日の八日夜、ニューヨークのスタジオでレコーディングの仕事をし、夜おそく、夫婦で自宅のマンハッタンの高級アパートメント「ザ・ダコタ」に帰っていった。

二人が車から下りてアパートの入口に歩いてゆくと、待っていた若い男が「レノンさんですか」と呼びかけた。レノンが立ちどまると、男は薄笑いしながら、38口径のレボルバーを両掌で握ってつき出し、つづけざまに五発発射した。午後十時五十分であった。

そのうち二発がレノンを貫通し、レノンは「撃たれた」とさけんで、数歩歩いて倒れた。

アパートのガードマンが駈けつけ、茫然と立っている男に、「何をやったかわかっているのか」と訊くと、男は「ジョン・レノンを殺っただけだ」と答え、「精神鑑定のためにおれを精神病院につれてゆけ」と、いった。

彼はニューヨークに来て一週間の、ハワイ生まれの、やはり日本人の妻を持つマーク・チャプマンという二十五歳の大男で、狂的なレノン・ファンで、その日の午後サインをしてもらったときのジョンの態度が気にくわなかったからだ、といった。

レノンはほぼ即死の状態であった。妻のヨーコは狂乱状

態になり、医師がレノンの死を告げても、「死んだなどといわないで」と泣きさけんだ。

事件を聞いて、アパートの前の広場には次第に数百人のファンが集まって来て、だれからともなく歌い出したビートルズのヒット曲「イエスタデイ」「レット・イット・ビー」などの合唱が、夜明けまでつづいた。

――翌一九八一年一月十一日、ヨーコ・オノ・レノンは全世界からの見舞いに対して「感謝をこめて」と題するメッセージを書き、それは日本でも一月十八日の「朝日新聞」朝刊に一面を買い切って発表された。その中でヨーコはいう。

「……ジョンが私のすぐ傍で倒れた時、敵がだれで、どこにいるのかもわからず、ゲリラ戦の真只中にいるような気がしました。私は、かみそりの刃や新聞記事を私から隠そうとする私のスタッフに、どんな電報、手紙、メッセージも残らず見せるように言い続けて来ました。私には何もわかりませんでした。私は知らなければなりませんでした。私は遺体の写真を見ました。ジョンは『イマジン』の裏表紙の写真のようにやすらかに見えました。ジョン、あなたは私に何か言おうとしているの？　私はジョンがサインをしている場面の写真を見ました。その写真はテレビで何度も何度も流されました。なぜか、この写真の方が、遺体の写真より、私には見るのが辛く感じられました。ジョンは、あの午後は急いでいました。彼はサインをしなくてもよかったのです。それなのに、彼を後になって裏切る男が見守る前でサインをしてしまいました。私はその写真を見ました。それはテレビに映された写真でしたが、ジョンは頭を前に垂れていました。もちろんサインをするためですが、しかし、それは、ジョンにしては変わった姿勢でした。そのとき、私は、ジョンが天国の門へ入るための署名をしているのだと気付きました。……」

八月二十四日、マーク・チャプマンに対して検事は論告した。

「犯行の動機が世の注目を浴びるためだったことは明白である。そして事実、彼の望んだ通りになった。彼は社会に危険な存在である。彼はジョン・レノンを殺した。彼は〝人殺し〟である」

これに対してチャプマンは何の弁明も行わず、ただサリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』の一節を読みあげた。それは主人公の十六歳の非行少年が、何になりたいかという希望――岸から落ちそうになる子供をつかまえる役、そんな人間になりたいという希望をのべる一節であっ

た。
裁判長は宣告した。「被告を第二級殺人罪で懲役二十年以上の無期刑に処す」

四十一歳で死んだ人々

> また臨終の人間「いま、神仏が無いといったのはだれだ？」答無し。――暗い虚空に、ただぼうぼうと風の音。
>
> ――山田風太郎――

マジェラン（一四八〇頃――一五二一）

一五一九年九月二十日、二百八十人の乗組員を乗せた五隻の船でイスパニアの港を出たマジェランは、翌年十月二十一日、のちに彼の名にちなんで命名された南米南端のマジェラン海峡を通過し、これも彼が命名した太平洋を渡り、一五二一年三月十六日、フィリピン群島中のセブ島に到達し、これを制圧した。

四月二十六日、彼は隣のマタン島に上陸を試みたが、自分たちの威力を土人に見せつけるために、わざと六十人の部下しか連れてゆかなかった。しかも珊瑚礁のため、船を途中で捨て、彼らは海の中を歩いてゆかなければならなかった。
マタン島の裸の土人たちは矢と投槍で抵抗し、剛胆なマジェランも、ついに退却の羽目に陥った。土人たちは海の中まで追って来た。投槍がマジェランに刺さり、倒れたところに土人が殺到し、めちゃくちゃにつき刺した。
日本でいえば戦国時代――それも武田信玄の生まれた年である。
この史上最大の航海者は、最初の世界一周の道程の三分の二を実現しながら、実につまらない最期をとげた。残りの船員たちは、やがてアフリカの喜望峰を迂回して、その翌年の九月六日、出発以来三年目にして世界一周を完成した。

今川義元（一五一九――一五六〇）

永禄三年五月、二万五千の大軍をひきいて上洛の途についた海道一の大守今川義元は、十九日午前十時ごろ、織田の前哨、丸根砦、鷲津砦を破り、桶狭間の北方田楽狭間で、首実検をしつつあった。
午後二時ごろ大雷雨となった。そのとき、二千の兵とともに信長が突入して来た。今川勢は混乱し、義元は、味方同士の喧嘩かと思っていたところへ、織田の服部小平太が槍で突きかかった。義元はその槍を切り、小平太の脚を斬ったところへ、毛利新助が組みついた。義元はたまたま口にはいった新助の人さし指を食いちぎっただけで、首をねじ斬られた。
これも道程三分の二の途上における不本意な死である。しかし、このとき雷雨が来なかったら、信長の奇襲が成功したかどうか疑問である。その日その時の一朶の黒雲は、義元のみならず日本の運命を変えたといわなければならない。

小栗上野介（一八二七――一八六八）

幕末に横須賀に造船所を建設し、ある人が幕府の命脈のつきんとしていることをいうと、「土蔵つきの売家をあとに残すのも面白いではないか」といい、また「どうにかなろう、幕府を滅ぼしたのはこの一言だ！」ともいった幕府

軍艦奉行小栗上野介忠順は、勝安房とは対照的に、徹底抗戦を主張したが、明治元年、もはや大事は去ったとついにあきらめ、江戸を去って、三月一日から、知行所の上野国権田村の東善寺という寺にひきこもったが、閏四月六日、官軍のために烏川の河原に、家来三人とともにひきずり出され、斬首された。

その直前、食事を与えたが、小栗は箸をとらなかった。いい残すことはないか、と訊いたのに対し、何もない、と答えたが、ただ、母と妻は越後のほうに逃したが、御寛典を願う、といった。

二十二歳の隊長原保太郎は、刀をとって背後に立ったが、どうも斬りにくいので、棒でその腰をついて、「もっと首を下げろ」と、いった。すると上野介は凄じい顔色でふりむいて、「無礼者」とさけんだ。

原の刀はふり下ろされた。一太刀ではうまくゆかず、三太刀目で首を斬り離した。

この処刑は出先の一隊長原保太郎らの独断によるもので、余談だが、この粗暴な隊長原は、のちに内務官僚になり、貴族院議員となり、昭和十一年、八十九歳をもって極楽往生をとげたが、明治四十四年四月、当時府立一中にはいったものの学資がつづかず苦しんでいた谷崎潤一郎父子に助力を頼まれたことがある。谷崎は原家の書生になるものと思いこんでいたが、原はむろんその少年が後年の文豪になるとは知らず、知り合いの築地の精養軒に紹介した。

河井継之助（一八二七――一八六八）

同じ明治元年、越後方面より会津に進攻しようとする官軍に、長岡藩の家老として、河井は、五月二十日、会津説得の陳情をしたが、傲慢な官軍の参謀岩村精一郎にはねつけられ、やむなく抵抗に起ちあがった。

いちど失った長岡城を二カ月後の七月二十五日また奪回するという離れわざを演じて官軍の心胆を寒からしめたが、その日の戦闘で、飛来した弾丸に左膝を撃たれて倒れた。

戸板にのって、官軍の逃亡した城にはいりながら、従者に、「人が聞いても傷は軽いといっておけよ」といい、また「生命には別状なかろうが、もう足は役に立つまいてや」と、いった。

七月二十九日の官軍の反攻に、もはや彼は陣頭に立って指揮することは出来なかった。城はふたたび奪われ、彼は戸板にのせられたまま会津にはいる。八十里峠を越えたが、そのとき、「八十里、腰ぬけ武士の越す峠」と自嘲し、また、「死ぬことは覚悟していたが、こんなに痛いとは思わなかった」と、苦笑した。暑熱の空の下の山越えに、足の傷が化膿し、悪化していたのである。

八月五日、会津領只見まで来たとき、幕医松本良順の治療を受けたが、すでに手遅れであった。八月十三日、南会津の塩沢まで到達し、つきそいの松蔵に、「永々厄介してくりやって、ありがたかったでや」と、礼をいい、八月十六日午後八時ごろ瞑目した。

マタ・ハリ（一八七六――一九一七）

一九〇四年ごろから、全裸に近いジャワ風の官能的な踊りでパリの遊客を悩殺していたマタ・ハリという踊り子が、一九一四年にはじまった第一次欧州大戦中、ロンドン、アントワープ、ブラッセル等を往来し、その行動に不審な点があると見たフランス当局は、一九一七年、ドイツ軍部から彼女の銀行口座に大金がふりこまれていることをついに探知して逮捕した。

マタ・ハリとはマレー語で「暁の目」という意味である。彼女の本名はゲルトルード・ツェレといい、両親ともオランダ人で、彼女は若いころオランダ植民地軍将校と結婚してしばらくジャワに住んだことがあり、マタ・ハリという芸名やジャワ風の踊りはそこでおぼえたものと思われる。

彼女はただ金のためにドイツのスパイとなり、その魅惑的な肉体で連合軍の将校などを誘惑して諜報活動をしていたのである。

マタ・ハリは終始容疑を否認したが、わずか二日間の裁判の結果、七月二十五日死刑を宣告され、十月十五日銃殺刑に処せられた。彼女は目かくしを拒否し、とりみだした風もなく刑場に立って、銃手たちを悩殺した。その妖艶な遺体は「解剖用」という札をつけて病院へ運ばれた。

カフカ（一八八三――一九二四）

チェコのプラハにユダヤ人として生まれ、大学卒業後、労働局災害保険局にまじめに勤務しながら小説を書き出したフランツ・カフカは、三十三歳のとき『変身』を書いたが、その翌年ごろから健康を害しはじめた。それは創作のため昼夜逆転の生活となり、一方、日中の勤めもしなければならないサラリーマン作家としての過労のためであった。

そして、三十四歳のとき、ついに喀血し、結核と診断された。

それまで幾度かの恋愛も、彼の極端に内気な性格のために空しく消えたが、一九二三年、はじめてユダヤ娘ドーラと結婚し、ベルリンに移って結婚生活を送った。しかし、当時ベルリンを襲っていた大インフレは、貧しいカフカを打ちのめし、結核は昂進した。

翌一九二四年四月、ウィーンの病院で喉頭結核の診断が下され、サナトリウムにはいった。

最後の数週間は何ものどを通らなくなった。六月三日の朝四時、妻のドーラは、カフカが呼吸困難におちいっているのを見て、医者にカンフル注射をしてもらった。カフカは看護婦に、これまでにないはげしい口調で、出てゆけといい、心臓にあてがっていた氷嚢を投げとばし、「これ以上苦しめるな、何のために長びかせるのだ」と、さけんだ。

そして彼は医者にモルヒネ注射を請い、医者が偽ってパントポンを注射すると、「よろしい、だが、もっと！　きかないじゃないか」といいながら、寝込んでしまった。しばらくしてから、頭を少し持ちあげて、「そうだ、それでいい」とつぶやき、これが最後の言葉となった。

その死顔を、医師のクロップシュタットは、「彼の精神が純粋できびしかったように、彼の顔もきつく、きびしく、近寄りがたかった。それは古い大理石の彫刻の胸像のように美しかった」と、書いた。

死後、彼の机のひきだしから、唯一の親友ブロートにあてた紙片が発見された。それには、

「僕の最後の願いだ。僕の遺稿の全部、日記、原稿、手紙のたぐいは、一つ残らず、中味を読まずに焼却してくれたまえ」「僕の書いたものの中で、まず一応認めてもいいのは、すでに書物になった『死刑宣告』『火夫』『変身』『流刑地にて』『村医者』『断食行者』だけである。それだけを一応認めるというのは、それが新しく重版され、明日の人々に読まれたいと願うのでは決してない。そんなものがすっかり無くなってしまえばいちばんありがたいのだ。ただ、とにかく一度出版されたものだから、それを持っていたいという人々が所持しているのまで、禁止しようとはしないだけのことだ」

と、書いてあった。

それはレーニンの死んだ年でもあった。

尾崎放哉（おざきほうさい）（一八八五――一九二六）

一高で漱石の講義を聴き、東大法学部を出て、東洋生命保険会社（いまの朝日生命）に就職した尾崎秀雄は、約十年

後退社して、朝鮮火災海上保険会社の支配人となったが、一年で馘首（かくしゅ）されて、妻とともに満州を放浪した。大正十二年、三十八歳のときである。原因は、一応は、酒を飲むと人が変る酒癖の悪さであった。

しかし、ほんとうの原因は、人間界に暮せない、「底のぬけた柄杓（ひしゃく）」のような、彼の異様な性格にあった。彼は帰国し、妻と別れ、京都や須磨や小浜の寺男となってさまよい出した。それらの寺を短時日に追い出されたのち、彼は、大正十四年八月、小豆島の西光寺奥の院の堂守となった。そして、七カ月半後の大正十五年四月七日にひっそりと死んだ。

一流の大学を出ながら、俗界と縁を断ち、ただ短詩の極限ともいうべき句を作り捨てるのみの孤独漂泊の人生にはいったその生き方は、後までふしぎに、ある人々の憧憬のまととなった。

しかし、実際の放哉の生活は、当然苛烈なものであった。彼は孤独を望んだにちがいない。が、人間は孤独に生きるにも、最低限度の収入が必要であった。それがなかった。彼は友人や島の人々に金や食物を乞わねばならなかった。

「入れものが無い両手で受ける」

彼は孤独を愛したにちがいない。しかし彼は、別れた妻を恋した。

「咳をしてもひとり」

放哉は、ほとんどもらいものの焼米と焼豆だけで暮した。満州で病んだ肋膜炎はやがて肺結核となり、さらに喉頭結核に進んだ。怖ろしい栄養不足はその症状を昂進した。

十二月二十五日、『食記』と題する手記に彼は書く。

「銭湯ニ行ク。全ク四ケ月目ナリ。（中略）入浴シテ久シ振リニ姿見（すがたみ）ニ、吾（わ）ガ裸体ヲウツシテ見ル。イヤ痩セタリナ、ヤセタリナ、マルデ骨皮ナリ。（中略）十貫目モアラザルベシ」

彼の身長は五尺三寸三分（約一メートル六十センチ）であったが、それが十貫（三十七・五キロ）ないというのである。

翌年の三月には、体温計を腕と肋骨の間にはさんでも、隙間があいて落ちるようになった。口にくわえてみると、熱は三十八度を越していることが多かった。

三月十五日に彼は書いた。

「スキ焼デ一杯ヤッテ死ニタシ、タノムタノム、扨（さて）、誰ニタノム」

そして彼は、四月七日の午後四時ごろに息をひきとった。彼の最期を看とったのは、親切で朴訥（ぼくとつ）な近くの漁師の家の老婆シゲであった。シゲはいう。

「いよいよこと切れたのが四月の七日の午後四時頃でした。いつにも似ず元気が無うて〈おばさん、私はもう駄目じゃ、どうもそういう気がしてならん〉と、いいなさるので、私が〈それじゃ、どこかへ電報でも打つところがあれば言いなさいませ、知らせてあげますから〉と、いいますと、〈いやいや、私には誰も知らせてやるものはおらんのじゃ。わしはひとりで死ぬるのじゃ〉(中略)そうして、むっくり起き上り、〈おばさん、手紙を書こうかな〉といいますので、〈何を言いなさる。そう弱って手紙なんか書けますかいな〉というと、〈そうだな〉と、うなずかれましたが、そのままがっくりと私の膝の上に頭を仰向けに落して、両側の眼をくうと上に吊りあげました」

この年で大正は終る。

彼は道を求めるというより死を求め、死を求めるより、人間世界から逃避するために、たった一人の生活にはいった。しかし、その孤独の極限ともいうべき生き方は、意外に多くの人々のあこがれるところとなり、彼の死んだ小豆島の西光寺には彼を記念する立札と句碑が建てられた。

しかし、彼よりも哀切なのは、彼に捨てられ、紡績工場の女工の寮母となり、放哉の死後三年十カ月で、チフスで死んでいった美しい妻の薫であったろう。

九条武子(一八八七――一九二八)

京都の西本願寺の法主の姫君に生まれ、九条家に嫁しながら、夫の九条男爵は渡欧して十余年帰らず、僧房に孤閨を守って、

「みわたせば西も東も霞むなり君はかへらずまた春や来し」

などの歌をふくむ歌集『金鈴』は、与謝野晶子に、こんなものは歌ではない、と評されたが、作者九条武子への憂愁の歌人としての民衆の讃歌は、その絶世の美貌への憧憬とともに消えるどころではなかった。彼女は大正年代の代表的麗人と呼ばれた。

昭和二年五月ごろ、銀座の資生堂で逢った吉屋信子は書く。

「――翌年二月の新聞は夫人が壊血病にかかられ、歯ぐきから出血止まらず重体と報じた……去年の初夏あの店舗の灯の下で選んでいられた棒紅――その朱唇から血がもれると思うと哀しかった。

――それからの毎日の新聞もラジオのニュースにも必ず夫人の病状の一進一退がくわしく伝えられた。輸血後も容体思わしからずと、体温やら脈やら呼吸の数から、おも湯八〇〇グラム、スープ五〇〇グラム。うずらの卵九個に鶏卵の黄身二個とそれから牛乳それからと、数々の栄養摂取の種類まで念入りに報道されると、わたくしは御病気でもずいぶん召し上がるような気がして回復も近いと思った。

けれども夫人の癒ゆる望みはついになかった。その病床には主治医のほかに東大の真鍋教授が立ち会って居られた。武子夫人はその医師たちに『絶望ならそう早く告げて欲しい』と言われ、医師が患者への心づかいから真実を告げ得ない態度に、夫人は『ご存じのくせに』とほのかに微笑されたと――伝えられた時――私のバカは恍惚とした……。

発病してからわずかに七日目に世を去られたから、病中はさほどやつれも見せぬその美しい病人が医師の真実を告げぬをうらむがごとき眼差しを向けて『ご存じのくせに』と、たおやかなおんな言葉にかすかな笑みをさえ添えた刹那は、まことに幽艶きわまったと私はわずかに二度見ただけの夫人のおもかげから想像あふれるようだった。

夫人逝去の日は朝から早春の雪がこまかに降っていた……」(吉屋信子『私の見た人』)

昭和三年二月七日午後七時二十五分のことであった。

葛西善蔵(一八八七――一九二八)

「兎に角四十余歳までの生涯を文学に託して呻吟苦悩、こういう作をこれだけしか書きあげられなかったのは悲惨に感ぜられる。これだけのものも、貧乏の鞭が彼を追立てたればこそ書けたのである」

しかし、

「飲んだくれに有勝ちの、飄逸さ、多少身に帯びていた仙骨が、彼の暗鬱鈍昧な作品に芸術の光を差させている」

と正宗白鳥から評された葛西善蔵は、死の前年の昭和二年、最後の作『酔狂者の独白』を「新潮」に発表したが、その口述を筆記した嘉村礒多は、葛西の晩年の姿をこう書いている。

「二軒長屋の西側の、壁は落ち障子は破れた二間きりの家の、四畳半の茶呑台の前に坐って、髪の伸びたロイド眼鏡のZ・K氏(葛西善蔵)は、綿の食み出た褞袍を着て、前踞みにごほんごほん咳きながら……」

「口述が渋って来ると逆上して夫人を打つ蹴るは殆ど毎夜のことで、二枚も稿を継げるとすっかり有頂天になって、狭い室内を真っ裸の四つん這いでワンワン吠えながら駈け

ずり回り、斯うして片脚を上げて小便をするのはおとこ犬、斯うしてお尻を地につけて小便をするのはおんな犬、と犬の小便の真似をする……」

「褌を緊め直して真っ裸のまま一閑張の机に向い、神妙に膝頭に手を置いて苦吟し出した面貌に接すると、やはり羸鶴寒木に翹ち、狂猿古台に嘯く――といった風格」

しかし、その十月には、多年の肺結核が悪化して、片瀬の療養所にはいらなければならないことになった。

翌昭和三年一月には世田谷三宿の自宅に帰ったが、三月からさらに病勢がつのった。しかも四月には、四女が生まれている。

その友人舟木重雄の手記によれば、

「――死去の前日、おりおり意識不明に陥れる病人は、死期の迫れるを自覚し、隣室に集まれる家人、親族、見舞客、十数名に、枕頭に付添の人々に伝えて酒肴を出させ、間じきりのふすまをはずさせ床上に枕せしまま酒席を見やり、病人も看護婦に吸飲で酒を飲ませて貰い頭をわずかに動かし、不明瞭の音ながら、在世中世話になりし謝意を呟く。酒仙としての最後を全うしたるものにして、又、大悟徹底したる臨終というべし」

息をひきとったのは、翌日の七月二十三日夜半であった。

速水御舟（一八九四――一九三五）

日本画家、速水御舟は、昭和十年三月二十日、チフスのために急逝した。

「何と果敢ない命だろう。夫れも、あの芸術制作に人も及ばぬ粘りを持った速水君が、何で又そうあっさりと死を急いだのだ、と喞ちたい程だ。粘ってほしかった。全く、も少し粘ってほしかった」

と、友人の神崎憲一は痛恨して記す。

「処が、聞く処に拠ると、夫れには夫れの因果があったと云う事だ。斯くも恬淡として死んでいったのには理由があった。

一、かねて余りにも頑健であった為めに、かりそめの病気に対して重く見る事が出来なかった事。

一、持病の一に痔出血があって、時々気味の悪い程に多量の出血があっていた事。

一、大好物の一に生貝があって、いつも喰い過ぎては腸をいためたりしていたのだが、罹病直前にも夫れがあって胃痙攣をやったりした後強度の下痢に罹っていた事。

一、下痢を癒すのだと言って、四日間も臥床発熱中断食

したりした事。

一、そうした幾多の原因に拠る衰弱と、其発熱を訳もない風邪と独診して解熱剤を自ら服用したりした為め、窒扶斯らしい経過をとらず随って主治医の診定を遅らせ、対症療法の適応機を逸した事。

――と云う様な事が、あの意力の強い速水君をして、逆比例に生きる力を弱めたものだと思われる」

石田吉蔵（一八九五――一九三六）

昭和十一年二月、二・二六事件のあった月、東京市中野区新井町の割烹料理屋吉田屋の主人、石田吉蔵は、その月のはじめから傭った女中お加代と密通した。

お加代は、少女時代から、芸者、妾、娼妓、高等淫売などをくりかえして来た女で、一夜でも男に抱かれないと肌さみしさをおぼえるセックスのかたまりのような女であった。

二人の密通は石田の妻の知るところとなり、四月二十三日、二人は店を出て、待合を渡り歩きながら、爛れるような情痴の日夜を送った。

お加代は、検事調書でいう。

「石田の何処がよかったといわれても、ここといって答えることは出来ませんが、石田は様子といい態度といい、心持でけなす所一つもなく、あれ程の色男に会ったことはありません。四十二（数え年）とはとても思えず、精々二十七八に見え、皮膚の色は二十代の男のようでありました。（中略）また石田は寝間がとても巧妙な男で、情事の時は女の気持をよく知っており、自分も長く辛抱して、私が充分気持よくなるように努力し、一度情交してもまたすぐ××になるという精力ぶりでした」

その石田も、「お前といっしょになれば、おれはきっと骸骨になる」といったほどお加代の愛欲ぶりは狂熱的であった。

そのうちに石田は、性交中のどをしめてもらうと気持がいいといい出し、お加代はふざけ半分に腰紐などで石田の頸をしめるようになった。

石田にはややマゾヒズムの傾向があり、お加代はそれを看破し、待合から石田が家に帰っている間に、明治座の芝居で出刃庖丁をふるう光景を見て、自分も出刃庖丁で石田を殺す真似をしたら石田がよろこぶだろう、と思い立った

――と、彼女はのちに陳述しているが、それだけではなく、すでに異様な殺意が動きはじめていたものと思われる。

すなわちこの情痴生活の間、何度か石田は自宅に帰ったが、「もうどうしても石田を家に帰したくない」という思いから発した殺意であった。

そして荒川区尾久町の待合「満左喜」で、五月十七日午前二時ごろ、この性の遊戯で、お加代はまた石田の頸を紐でしめ、その日一杯、彼の顔は赤く、頸にしめた痕が消えないほどであった。

その日、石田はまた一応家に帰らなければならない用事があるといい出し、お加代はイヤイヤをくりかえして泣き、石田もまた泣き、そして何度目かの性交にのめりこんでいった。その真夜中を過ぎて――

「そのうち石田が寝た様子ですから、右手を延して枕元にあった私の桃色の腰紐を取りあげて、紐の端を左手で頸の下にさしこみ、頸に二巻き巻いてから紐の両端を握り、少し加減して絞めたところ」

と、お加代はいう。

「石田がパッと眼をあけて『オカヨ』といいながら少し身体をあげ、私に抱きつくようにしましたから、私は石田の胸に自分の顔をすりつけて『かんべんして』と泣き、紐の両端を力一杯ひき絞めました。石田が『ウーン』と一度うなり、両手をぶるぶる震わせて、やがてグッタリしてしまったので、紐を離しました。私はどうにも身体が震えてなりませんから、卓子の上にあった酒の一杯はいっているお銚子をとりあげ、ラッパ飲みにぜんぶ飲んで……（中略）それから様子を見るために下に下りたとき帳場の時計を見ましたが、十八日の午前二時一寸過ぎでした」

石田吉蔵は最後まで、絞められるのも例の遊びだと思っていたかも知れない。しかしまた、ほんとうに殺されてもいいと思っていたかも知れない。いずれにせよ、おそらく死の恐怖も苦悶もない、極限までの燃焼と消耗と、異次元の忘我と恍惚の中に、彼は息をひきとったのであろう。

お加代は朝まで、石田の死体に接吻したり、また自分の局部をあてがったりして悶え狂っていたが、やがて例の出刃庖丁をとり出して、男の陰茎と睾丸を切りとり、また死体の左腿に、「定」という字を刻み、血で敷布に「定吉二人キリ」と書き、切断したものを紙につつみ、さらに石田のふんどしにつつんで自分の腹に巻きつけ、午前八時ごろ待合を逃げ出した。

「それは一番可愛い大事なものだから、そのままにしておけば、湯灌をするとき、お内儀さんが触られるにちがいないから、誰にも触らせたくないのと（中略）石田の××があれば石田と一緒のような気がして、さびしくないと思ったからです」

二十日夕刻、品川駅前の旅館にひそんでいたお加代は逮捕された。

彼女の本名を、阿部定という。

――石田吉蔵は、この『図巻』中、幸福な死をとげた稀有な人間のベスト・テン中の一人である。

川島芳子（一九〇七――一九四八）

本名金璧輝。清朝王族、粛親王の娘として生まれながら、六歳のとき、満蒙独立の陰謀に奔走していた大陸浪人川島浪速の養女となり、日本で育てられた川島芳子は、長じて、奔放無比の行状で有名になる一方、満州事変、上海事変などで日本の参謀本部に協力して活躍し、時に拳銃を腰に下げた騎馬姿で大陸の曠野を疾駆したりしたので、「男装の麗人」「東洋のジャンヌ・ダルク」「大陸のマタ・ハリ」などと呼ばれた。

昭和八年、彼女が作詞した「キャラバンの鈴」は、東海林太郎によって歌われた。

「広い砂漠をはるばると
駱駝に乗ってキャラバンは
雪を踏み踏みやって来る」

そのために、太平洋戦争後の昭和二十年十一月、北平（いまの北京）で「漢奸」として、国民政府の憲兵に逮捕された。

芳子は阿片中毒のため憔悴していたが、法廷では、自分は中国人ではない、すでに日本人である、といい、また日本武士道をたたえ、自分の行為はすべて中国民衆のためを思ってしたことである、中国奥地に逃避していた重慶政府に自分を裁く権利はない、と抗弁したがとりあげられず、昭和二十二年十月二十二日、死刑を宣告された。鼠色のジャケツに濃緑のズボン、黒ラシャのハーフコートを着た芳子は、その宣告を受けても平然と落着きはらっていた。

翌二十三年三月二十五日、午前五時ごろ、北京第一監獄の刑場で銃殺刑に処せられた。

執行官は語る。

「刑場に連れて来た彼女は落着いていた。罪名を読みあげ、処刑の旨を伝達した。遺言はないかと尋ねたが、別に何もいわなかった。常例の死刑囚に与える二つの饅頭は、食べたくないといい、手をふれなかった。前方をむいて歩かせ、数歩のところで、後頭部に弾丸が撃ちこまれた」

昼近く第一監獄の裏門にはすでに新聞記者や弥次馬など

が集まり、警官たちによって規制されていた。正午前、古アンペラで覆われ、それを煉瓦の重しでおさえられた死体が、担架で運び出された。死体は、日本人の僧侶古川大航老師（後に京都妙心寺の管長になる）の願いにより、彼にひき渡された。

アンペラをとりのぞくと、髪は散乱し、血と泥にまみれた顔が現われた。後頭部から撃ち込まれたため、顔面は射出孔にひき裂かれ、人相も判別出来ないほどであった。それで、あとで、あれは別人による身代りで、川島芳子はまだ生きているのではないか、という風評が流れた。

老師は遺骸を白布につつみ、上から五色の花模様を刺繡した布をかぶせてトラックに乗せ、朝陽門外の日本人墓地へ運んで、読経の下に火葬に付した。彼女の獄衣から遺書が出て来た。それには、

「家あれども帰るを得ず
涙あれども泣く所を得ず」

と、書いてあった。

アベベ（一九三二―一九七三）

一九六〇年のローマ・オリンピックのマラソンで優勝し、一九六四年の東京・オリンピックで、その一カ月前盲腸手術を受けながら、またも連続優勝し、「裸足の英雄」とも「走る哲人」とも呼ばれたエチオピアの軍曹ビキラ・アベベは、その後一躍大尉に昇進し、ハイレ・セラシエ皇帝から与えられた家で若い妻と四人の子供と幸福に暮していたが、一九六九年三月、首都アジス・アベバでフォルクス・ワーゲンを運転中、あやまって車ごと転落して重傷を負い、下半身不随となった。

しかし翌一九七〇年夏のロンドンのパラリンピックには、車椅子に乗って卓球とアーチェリーに出場し、ラケットも持てないので包帯でラケットや弓を手にまきつけてたたかう姿は人々を感動させたが、一九七三年十月二十五日、アジス・アベバの陸軍病院で、突如心臓麻痺を起して死亡した。

しかし、その翌年からはじまったエチオピアの果てしない内戦や、さらにそのあとにつづいた大飢餓のエチオピアを見ずに死んだことは、彼にとってせめてもの救いであったろう。

大久保清（一九三五―一九七六）

高崎生まれの大久保清は、二十歳のとき女高生を強姦したのを手はじめに、以後同様の犯罪を繰返し、昭和四十二年また女子短大生を強姦して三年六カ月の刑を受け、府中刑務所に服役した。

服役中も彼は、妖夢ともいうべき凄じい猥談を披露したり、同囚の眼前で自慰行為をしてみせたり、歯ブラシの柄を砕いたものを巨大なペニスに擦りこんでいよいよ怪異な形態のものに変え、将来のために鍛えていたという。

昭和四十六年三月二日、仮釈放になった彼は、三十六歳になっていた。彼は小肥りで、頭は薄くなりかかっていたが、深い胸毛に覆われた男であった。

大久保はただちにマツダ・ロータリー・クーペを買い込み、ルパシカにベレー帽という画家風の姿となり、凶暴無比のガールハントに乗り出した。適当な若い女性にゆき逢うと車をとめ、モデル依頼その他デタラメの甘言で女性を車に誘いこみ、猛烈に車を走らせて、車中ないし山中で強姦し、絞殺し、車のトランクに用意したシャヴェルで地中に埋めた。

実に彼は、出所後五十余日の間に一万キロ走りまくり、八人の女性を殺害し、妙義山や榛名山や、造成中の高崎工業団地などに埋めて何くわぬ顔をしていたのである。しかし警察は、これら行方不明になった女性と大久保清を結びつけることが出来なかった。

その八人目の被害者が乗り捨てた自転車を、処分するためにあとで取りに来た大久保を捕えたのは、警察ではなく、被害者の兄であった。大久保は車で逃走したが、そのナンバーから、ついに彼が前橋市内で逮捕されたのは、昭和四十六年五月十四日であった。

これではじめて彼と行方不明の女性たちが結びつけられ、厳しい取調べがはじまったが、大久保は刑事を愚弄し、時に怒り狂い、時に執拗な黙秘をつづけ、時に口から出まかせの嘘をつき、「夏はがんばり通す。全面自供はまず秋だな」などと、ふてぶてしくうそぶいた。

警察では大久保を前橋署から、ひぐらしと寺の鐘の音が聞える松井田署に移して、彼を孤独な環境におくという作戦をとった。その結果、彼が、八人の殺害とその隠匿場所をすべて白状したのは、逮捕後約八十日を経た、七月二十九日のことであった。

十二月二十四日、第三回公判における大久保の陳述。

「……ですから八日にいったように、（被害者の遺族は）引きずりまわして死刑にしろとか、八人分の苦しみを味わわせろ、とか希望されているようですが、できれば遺族自身がアタシを殺したいでしょう。あるいはみんなの見てる前で、昔の仕置きみたいに首切りたいでしょう。江戸時代、戦国時代なら、こいつは人を殺した、即座にパッと決めて、小塚っ原なら小塚っ原、アタシにとってもその方がラクですよ。そうしてもらいたいもんですね、始めからいっているように、自分のやったことは裁きを受ける、それだけですよ」

四十七年八月には、獄中から叔父に、自分の研究した内燃機関について特許をとりたいからよろしく頼むといった意味の手紙を出している。

四十八年二月二十日、ある週刊誌の記者は、前橋刑務所に収容されている大久保に面会して、いまの心境を訊いた。

「いくつかの思想的な変遷をへて、いまは虚無思想に近くなっていますね。立場でいえば共産主義です」と、彼はいった。彼は湯あがりのような健康そのものの顔色をしていた。

「もし死んで生まれ変るとしたら、何になりたいか」という質問には、「そうね、まったく思いもよらないことだが、しかし考えて見ましょう。そう、考えて見たいな」と彼は答えた。

二日後の二月二十二日、大久保は死刑を宣告された。彼はうす笑いを浮かべて聴き、宣告が終って席からひき下がるとき、ズボンの膝のあたりを、ほこりでも払うような手つきでパンパンとたたいた。それから傍聴席の遺族たちをちらっと見たが、無感動そのものの眼であった。

彼は控訴しなかった。

その年の暮に、彼は獄中から『訣別の章』という本を出版した。彼はかねてから知人に、死後自分の骨と灰は長野県の梓川に流してもらいたいという手紙を書いていたが、その『訣別の章』の中の詩にいわく。

「父母よ！　私の骨と灰は
あなたがたに　お願いしました
その梓川の清き流れに
私の全部を託して、長い旅に出ます
そして何日かかるかわからねど
きっと　ナホトカの港までゆくでしょう」

昭和五十一年一月二十二日午前九時過ぎ、大久保が収容されていた東京拘置所の独房の扉がひらいた。氷点下三・九度というその冬一番の寒さの中を、彼は死刑場にひかれ

ていった。

死刑囚は刑場の建物の「別れの間」にまず入れられる。そこには仏壇があり、教誨師が読経を唱える。またそこには煙草や菓子がおいてある。死刑囚の多くは煙草はのむが、食べ物を口にする者は稀だという。

読経が終ると、所長が「これでお別れです」といい、ついで「ただいまから検察官の指揮により刑の執行を行う」といい、死刑執行命令書を見せるが、これにまともに眼を走らせる囚人はまずいないという。

看守部長が白い布で囚人を目かくしし、うしろ手にして手錠をかけ、隣の執行室へ連れてゆく。

拘置所の総務部長宮本恵生は語る。「死刑囚の中には、このとき腰がぬけて歩けなくなる例が多いんですが、大久保は終始落着いていました」

彼は最後まで悔いず、無明の人生を生きて、無明の世界へ墜ちていった。

……しかし、人間の死に方の中で、あるいは「絞首刑」が、いちばん安楽死かも知れない、と思われるふしもある。

四十二歳で死んだ人々

君の骨も乾かぬうちに
君の名も行為も忘れられた
――ジョージ・オーウェル
『カタロニア讃歌』――

楠木正成（一二九四――一三三六）

「正成は戦死したとき四十三であったということになっている。大抵の本がそういうことにしている。すると尊氏より十一歳の兄ということになる。しかしこの四十三歳説は頼山陽が日本外史でいっていることで、良質の史料には全くないところである。太平記にさえもそれを記していない。従って大日本史もさすがに正成の年齢のことには一言も触れていない。外史が何に拠っていようと、この四十三歳説

は信用できないといってよい」（高柳光寿『足利尊氏』）
しかし、ここに述べられているように、ほかに史料がまったくないので、一応数え年四十三歳とする。すると本『図巻』の計算法によると四十二歳ということになろうか。
延元元年五月二十五日、湊川に足利尊氏の大軍と血戦すること、午前十時ごろから午後四時ごろに及んだ。
『太平記』によれば、
「三時が間に十六度迄闘いけるに、その勢次第次第に減じて、後はわずか七十三騎にぞなりにける。この勢にても打破って落ちば落つべかりけるを、楠、京を出でしより世の中の事今はこれまでなりと思う所存ありければ、一足も引かず戦って、機すでに疲れければ湊川の北に当って在家の一村ありける中へ走り入って、腹を斬らんために鎧をぬいでわが身を見るに、斬疵十一箇所までぞ負うたりける。このほか七十二人の者どもも、みな五箇所三箇所の疵をこうむらぬ者はなかりけり。楠の一族十三人、手の者六十余人、六間の客殿に二行に双居て、念仏十ぺんばかり同音に唱えて、一度に腹をぞ切ったりける。
正成、座上に居つつ、舎弟の正季に向って、『そもそも最後の一念によって善悪の生を引くといえり。九界の間に何か御辺の願いなる』と問いければ、正季からからと打ち笑って、『七生までただ同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候え』と申しければ、正成世にうれしげなる気色にて、『罪業深き悪念なれども我もかように思うなり。いざさらば同じく生を変えてこの本懐を達せん』と契って、兄弟ともにさしちがえて、同じ枕に臥しにけり」
と、ある。
これによれば、「七生報国」という言葉は、正成ではなく、弟の正季の口から出たのである。
『太平記』は史料としては、完全にはあてにならない「歴史文学」だが、しかしこの本が「見て来たように」詩った楠公湊川出陣のくだりや七生報国のスローガンは、後世に――太平洋戦争に至るまで、甚大な影響を及ぼした。

森有礼（一八四七――一八八九）

十八歳のとき薩摩藩留学生としてイギリスで学んだ森有礼は、明治初年から廃刀令を主張したり、日本の蓄妾の風習を弾劾したり、妻と婚姻契約をかわす西洋式結婚式をあげたり、はては日本の国語を英語とせよと提議したりして、当時西洋心酔者と見られた伊藤博文からなお「日本産

の西洋人」と呼ばれたほどだが、この勇敢な開明性がやはり命とりとなった。
明治十八年、三十八歳にして日本最初の文部大臣となった森は、以後明治の教育制度の根幹を作りあげたが、明治二十二年二月十一日、憲法発布の式典に出席するために永田町の官邸を出ようとして、士族西野文太郎に刺された。
以下は、当時在日していたベルツ博士の日記による。
「森文相は、一年前、イセの大神宮に参拝した時、クツのまま最も神聖な場所にはいろうとし、しかも、そこにかかっていた御簾を、ステッキ（?）で持ちあげたという理由で、暗殺されたのであった。もし森氏が真実そういう行為に出たのであれば――それは氏のやりそうなことだが――文相たるものが、国民の宗教的感情をかくも法外に傷つけるという非常な無分別さを、少くとも表明したことになる」
伝えられた森の行為は、まったく無実の罪であった。
「他方、シントー（神道）が、犯人西野のような狂信者を生んだ事実に、何びとも驚いている。十一日の朝、森氏がこれから宮中へ参内しようとした時、西野は秘書官に面会を求め、学生連がタイマツ行列の際、文相に対して遂行しようとしている計画を知っていると告げた。だが、詳細は、直接文相にだけお話したいというのである。森氏が室にはいると、ハカマ姿の西野は氏に近づき、左手で氏の胸を抱きかかえ、右手でデバ・ボーチョーと称する大型の料理ナイフを衣服の中からとり出し、氏の下腹部に柄のところまで突き刺した。常に文相に付添っている私服の警官が、すぐさまはせつけ、仕込杖にした日本刀をひき抜き、一撃のもとに西野の頭蓋骨を割った。不可解な事情により、医者が来るまで三時間以上も経過した。被害者は出血のため、すでに人事不省におちいっていた。傷は型の通り手当された。だが、どうにもならなかった。森氏は十二日払暁、死亡した。
本日（十六日）葬儀――いうまでもなく盛大に行われた。森氏はキリスト教徒であった。しかるに氏は、シントーの儀式、すなわち氏がそれを公然と侮辱したばかりに殺害されるに至った宗教の儀式によって葬むられたのである！」
その葬列を路傍で目送すべく狩り出された第一高等中学本科生の中に、夏目金之助がいた。
生前、森に剣難の相のあることを口にした者があった。森は笑っていった。「殺されたらおれはユーレイになって出るぞ」
ふつう彼は有礼と呼ばれていたからである。剣難の相を持つ一面、彼はこんなダジャレをいう男であったらしい。

上田敏（一八七四——一九一六）

訳詩集『海潮音』によってフランス象徴詩を紹介し、明治詩壇に新風を吹きこんだ上田敏は、明治四十一年、三十四歳で京都帝国大学講師に迎えられ、ついで翌年教授となったが、大正五年三月、萎縮腎の診断を受けた。

七月六日上京し、芝白金三光町の自宅で久しぶりに家族と談笑したが、八日、森鷗外を訪問しようとして外出の支度中、突然尿毒症を発して昏睡状態におちいり、九日午後三時に逝去した。

京大の教え子菊池寛は二十八歳で、ちょうどそのとき東京にいたが、同窓生が割りあてた五円の香典が払えず、そこで、京大時代、自分の小説がのっている同人誌を何度も上田先生宛に送ったにもかかわらず一顧もされなかったことを思い出し、先生は自分にとって路傍の人だ、と考えることにして、葬式にゆかなかった。

夏目漱石は、七月十五日付、在ニューヨーク厨川白村宛の手紙の中で、

「上田敏君が死にました。十三日に葬式がありました。人間は何時死ぬか分りません。人から死ぬ死ぬと思われている私はまだぴんぴんしています」

と書いた。その漱石も同じ年の十二月には死んでゆく。

プレスリー（一九三五——一九七七）

ポピュラー音楽界に新分野をひらいたアメリカのロカビリー歌手エルビス・プレスリーは、一九七七年八月十六日午後二時半、テネシー州グレースランドの一万七千余坪ある自邸の寝室で、急性呼吸器疾患を起し、パジャマ姿のまま倒れているのを発見され、意識不明のまま救急車でメンフィスのバプテスト病院に運ばれたが、そのまま呼吸器疾患に伴う心臓発作で死亡した。

プレスリーは、過労がこうじて、その二年間入院を重ね、また中年肥りを怖れて、食欲減退剤、睡眠剤、覚醒剤と、薬びたりになり、彼に代って新しいスターとなった連中が、自邸のテレビに映るのを、銃で狙い撃ちしたりしたという。あまり恰好のいい死とはいえない。

十七日朝から、カーター大統領に、哀悼の意を表明して欲しいという電話がホワイト・ハウスに殺到し、カーター大統領もこの声に押されて、「アメリカは自らの一部を失った」との大統領声明を発表した。

四十三歳で死んだ人々

> 死は推理小説のラストのように、本人にとって最も意外なかたちでやって来る。
>
> ——山田風太郎——

柳生十兵衛（一六〇七——一六五〇）

「慶安三年三月二十一日、山城国相楽郡北大河原村弓ヶ淵の上の畠に於て鷹狩の時俄かに歿す。因って奈良奉行、中防長兵衛検使の上事済み、柳生下村の墓地へ葬る」（堀正平『大日本剣道史』）

明らかに不慮の死である。しかし詳細は不明。

ゴーゴリ（一八〇九——一八五二）

小ロシアの田舎の小地主の家に生まれたゴーゴリは、首都ペテルスブルグに出て貧しい小官吏をしながら、二十六歳のとき『鼻』以下一連の短篇を書き、ドストエフスキーから「笑いの悪魔」と評された。

しかし彼は生来虚弱な体質で、二十四歳のときに早くも自分の老衰を嘆いたくらいであった。そして肉体は徐々に健康になったが、こんどは強迫観念を伴う精神的な発作に苦しむようになった。彼みずからいう。「ほとんど過度とも思われる健康状態のさなかに、ふとわけのわからない昂奮に襲われる。その後で、雲ひとつない真昼に怖ろしい呼声を聞くように、ふいに恐怖がやって来て、そして説明の出来ない病的な憂鬱に沈んでしまう」

外見の彼は、小柄で、胴体に比して足が短く、体をかがめるような歩き方にもったいぶった感じがあり、また可笑味があった。顔色は蒼ざめて、小さな鬚をはやし、話すときまっすぐに相手を見ないで、横眼をしたり、眼を細めたりしたが、ときどきちらっと相手を見るとき、その眼にはつき刺すような感じがあった。

二十七歳のとき、戯曲『検察官』を書き、上演されたが、自分の書いた醜悪な人間像が具体的に舞台に現わされたのを見て、彼自身がショックを受け、賛否こもごもの評判にも神経を痛めて、そのすぐあとからロシアを逃げ出して、以後十二年間、パリやローマで暮した。

傑作『外套』を書き、一八三九年、三十歳のとき、大作『死せる魂』にとりかかったが、途中で自分の文学的才能を疑うようになり、その上、自分の作品そのものが有害なもののように思われて来た。一八四九年、やっとロシアに帰国した彼は、友人に手紙を書いている。「私の創作力はまったく衰えた。原稿一枚どころか、一行がやっとだ。人は四十歳でこんなに老人になるものだろうか」

彼の苦しみには、彼が小説を書くことを有害とする、単純平凡にして愚昧狂的な老教父コンスタンチイノフスキーの影響もあった。

しかし彼は、骨を刻むような思いで、とにかく『死せる魂』第二部を書きつづけていった。

帰国以来、ロシアのあちこちを彷徨していたゴーゴリは、最後はモスクワの友人アレクセイ・トルストイ（万人に知られているレフ・トルストイではなく、これは『苦悩の中をゆく』の作家）の家に寄留したが、一八五二年二月初旬のある夜、跪いて熱心に祈ったあと、蠟燭を手にして十字を切り、自分の『死せる魂』第二部の原稿を暖炉に投げこみ、その蠟燭で火をつけた。召使いはその重大さに驚き、泣きながらとめたが、ゴーゴリは「お前とは関係ない。お前も神に祈れ」といって、十字を切って召使いに接吻した。そして、長椅子につっ伏して、声をあげて泣き出した。

彼がなぜこういう行為に出たかは、永遠の謎である。

しかし彼は、その翌朝トルストイにいった。「何という悪魔の力強さだろう。僕が死後の記念として残そうと思った原稿を、あいつが焼いてしまったよ」

この日から彼は一切の飲食を拒絶した。終日寝巻を着て、足を机の上にのせて坐ったきり、ほとんど人を近づけなかった。

牧師が来て、食事や薬を勧めてもゴーゴリはとり合わず、ついに医者が呼ばれて、強制的に頭部に氷嚢をつけたまま風呂にいれたり、はては手足をおさえつけて蛭を吸いつかせたり、芥子泥をぬりつけたりした。それは日本では、銭屋五兵衛が死んだ嘉永五年のことであった。

二月十六日の夜十時過ぎに、衰弱し、狂乱状態になったゴーゴリは、「梯子を！　梯子を！」と、意味不明の言葉をさけんだ。それが彼の最後の言葉となった。あくる日の朝八時ごろ、彼は絶命した。

ゴーゴリは生涯独身で、おそらく女性を知らなかったのではないかと推定されている。

川路利良（一八三六——一八七九）

西郷隆盛に抜擢されて初代大警視（警視総監）となりながら、西南の役には警視庁抜刀隊をもって薩軍を破り、ために日本のフーシェと呼ばれた川路利良は、しかしその志すところはひたすら日本の警察制度の確立にあった。

そのため、かつて明治五年フランスの警察制度視察の目的で洋行したとき、ひどい船酔いに苦しんだ体験があるのに、明治十二年ふたたび視察のために渡欧した。しかしパリ到着早々から執拗な咳に苦しみ、次第に結核の症状を現わしはじめた。そして八月二十三日、ついに目的半ばにして帰国のためパリを発したが、日本への船上で昏睡状態におちいり、十月八日日本到着のときも半死のありさまで、十三日、警視庁官舎で絶命した。

渡欧前、いわゆる藤田組贋札事件で長閥を追及していたので、その向きから毒殺されたのではないかという噂がたてられた。

モーパッサン（一八五〇——一八九三）

ギイ・ド・モーパッサンは、三十代のはじめから視力障害や不眠症や偏頭痛や幻覚に襲われていた。それは梅毒によるものであった。

四十二歳の一月一日、ニースにある母親の別荘を訪れて食事中、彼は突如発狂症状を現わした。そして一月七日、パリのパッシー精神病院の、窓が金網でふさがれた別棟十五号に送りこまれた。

ここで彼は、仲間の患者と撞球などしているうち、ときに激昂して球を投げつけるようなこともあったが、ほかのときは概して平静で、庭園を散歩しながら、ひとりでよくしゃべっていた。相手は架空の人物で、金持や株屋らしかった。

七月のある日、花壇の前に立ちどまると、「そこにこれを植えよう。来年になると、モーパッサンの子供が生えてくる」といった。

翌年にはいると、彼は知人を見分ける力も失い、見舞いの葡萄を、「これは銅で出来ている」とつき返したりした。やがて、四つ這いになって、独房の壁をなめたり、さら

に排泄行為をコントロールする力を失い、あらゆる苦痛に無感覚になった。
　三月に第一回の痙攣を起し、六月末に第二回の痙攣を起し、七月六日午後三時ごろ、第三回目の痙攣を起し、二人の看護人にみとられて、薄暗い一室で息をひきとった。明治二十六年、日本では河竹黙阿弥の死んだ年であった。

桃中軒雲右衛門（一八七三——一九一六）

　黒紋付に総髪というスタイル、テーブル掛をかけた卓という舞台を独創し、明治末期を風靡したこの浪曲界の革命児も、大正にはいると落魄し、肺病になり、名古屋で病床についた。
　雲右衛門の肺病は、彼の曲師でもあった女房のお浜からうつったものだった。しかしそのお浜が死んだとき、彼はその屍体に一晩添寝をしてやった。そして彼は自分の肺病をこんどは妾のお玉にうつした。そのお玉が死んだとき、彼は寝棺の中でまたより添って抱きしめて泣いたという。
（正岡容『日本浪曲史』）
　かつて浪花節で彼に師礼をとった宮崎滔天が彼の病気と落魄ぶりを知り「死ぬならこんなわびしいところで死なず、私の家で死になさい。貧乏でも、どこよりましです。必ず死水はとってあげます」といって、東京に運び、目白の宮崎宅へかつぎこんだ。
　滔天はその後上海へいっていたが、その留守中雲右衛門は、「天下の雲右衛門が家無しで死んだといわれちゃ恥だ」といって、死ぬ直前に宮崎家の近くの目白高田村の小さな家を借りた。
　彼はそこで何度か危篤状態におちいったが、大正五年十一月七日午後二時半ごろから痰がのどにからんで苦しみはじめた。そして、火箸のように痩せた手足を動かし、何かいいたげに大きな眼をむいて悶えながら、三時十五分に絶命した。
「全盛の頃には、入るにまかせて華奢風流をこれ事とした一世の驕慢児も」と、「都新聞」の記者は記す。死後病床の下から現われた桐の小箱と紙入れを改めると、「銀鎖付の銀側両蓋懐中時計と五円札が十一枚。これが雲右衛門のこの世に残した全財産です、といって、門下の一人は声をのんで泣いた」

滝田樗陰（一八八二——一九二五）

　大正時代「中央公論」編集長として、幾多の作家を見いだし、あるいは鼓舞し、「中央公論」の名とともに文学界の名伯楽の名を残した樗陰は、——同時に、好ききらいが甚だしく、恨みも多く買ったが——大正十三年十一月から、持病の腎臓病と喘息が悪化して、自宅で静養をつづけたが、天性の活気から、ちょっとよくなると、料理屋で全快祝いをしたり、芝居を見にいったりして、そのたびに悪化し、何度か危篤におちいるといったありさまで、大正十四年十月二十日にはついに退社のやむなきに至った。
　その日、滝田を訪れた部下の木佐木勝は書いている。
「昔日の滝田樗陰の精悍な面影はどこにあるのだ！
　自分がしずかに暇を告げて帰ろうとするとき、樗陰氏はうしろから、『昨日の早慶戦はワセダが勝ったネ』とポツリと言った。野球好きの樗陰氏は昨日の早慶戦をラジオで聞いていたのだ。
　樗陰邸を出るとき、樗陰氏が飼っている山鳩の低い声が淋しく聞えていた。秋のうすれ日が樗陰邸の塀越しに見える竹の葉に淡く射していた。自分は今日の山鳩の声をいつまでも忘れないだろう」
　それから一月後の十一月二十日午前十時、滝田樗陰は永眠した。
　彼の要求により、中央公論社からは五万円の退職金が送られた。なお樗陰は、大学出の初任給が五十円であったこの時代に、月給二千円であった。現代の編集者の感想如何——ただし、これは後世まで名を残した大編集長の話である。

若山牧水（一八八五——一九二八）

　牧水は晩年、詩の雑誌を出して大赤字を作り、それにもかかわらず沼津に家を新築したりしたので、その借金のために日本じゅうを揮毫して歩かなければならなかった。
　幾山河越えさりゆかばさびしさの
　　果てなむ国ぞ今日も旅ゆく
「牧水の晩年は、こういうやむを得ざる重荷のために多くの時間を割かねばならず、ただでさえ積年の酒のために痛めつけられていた肉体は、急速に弱っていった。その疲労を一時的にもやわらげるため、さらに酒を飲むという悪循環がくりかえされ、ついに肝硬変を起し、これが死の直接

の原因となる」（大岡信『若山牧水』）

白玉の歯にしみとほる秋の夜の
　酒はしづかに飲むべかりけり

昭和三年夏、彼は死ぬ二十日前も、沼津の家の裏の千本浜で子供たちといっしょに泳いだ。しかし、さすがにその泳ぎは気息奄々といった状態で、得意の片ぬき手も水際から十メートルでおわり、そのままがっかりしたようすで家にひきあげてしまった。

「三週間の後にはもう自分の命が終ろうという衰えのなかで何でそれ程までにしてわれわれの仲間に入りにやって来たのだろう?」

と、当時十五歳であった子の若山旅人はのちに書いている。

「その時の牧水には何かでふと、こども達の若やいだ中に甘えたくなる意図が働いたに違いない。そう言う甘さのようなものは独特の彼の優しさの原点なのだった」

十日ばかりして、九月七日に、牧水は日光浴をしていて、足の裏を砂で火ぶくれにし、歩けなくなり、妻の喜志子の部屋に床をとらせたが、それがそのまま彼の死床となった。肝臓のみならず、酒に起因する胃炎、腸炎、口内炎、つまりすべての粘膜の急激な荒廃が彼を襲った。

死の四日前、医者が危険を宣告してから見舞い客が集まり、家の中は戦場のようになったが、牧水は泰然と寝たままで、「もっとビールを……」と客に気を使って家人に指図したりした。

しかし、死の三日前になると、子の旅人の前で何かをはらいのけ、「蜘蛛がいっぱいいて、いやだな」と、つぶやいた。アルコール中毒の幻覚症状であった。

死の前日見舞いに訪れた土岐善麿が、その閑静な広い家をほめると、牧水はふるえる手で、まばらなあご鬚をなでながら、

「いや、君、この家を買う人はないかね。借金もあるしなあ」

と、いった。

そうなっても、彼は酒を求めた。しかも寝たままで、吸飲みで飲んでは酒の味がしないといい、そろそろと抱き起してもらって盃で飲み、「ああこれでこそお酒の味がする」と、いった。

そして、九月十七日朝七時過ぎも五合の酒を飲み、さらに筆にふくませられた酒を、口内炎で真っ白に腫れた唇に塗ってもらい、昇天した。妻の喜志子は日記に記した。

「今日は永遠に悲しき日となりぬ。牧水はついに午前七時

五十八分不帰の客となる。静かなる臨終なりし」

暑い朝であったが、高い天にはもう秋が来かかっていた。

主治医稲生信吾は記す。

「九月十九日、御葬儀ノ日、近親ノ方最後ノ告別ニ際シ御柩ノ硝子ノ小窓ヲ開キタルニ、滅後三日ヲ経過シ、而モ当日ノ如キハ強烈ナル残暑ニモ係ラズ、殆ンド何等ノ屍臭ナク、又顔面ノ何処ニモ一ノ死斑サヘ発現シ居ラザリキ。（斯ル現象ハ内部ヨリノアルコホルノ浸潤ニ因ルモノカ）」

直木三十五（一八九一——一九三四）

昭和九年二月、直木は肺結核から進んだ脊椎カリエスのために東京帝大病院に入院した。菊池寛はいう。「入院というときも、直木の財布には二、三百円しかなかった。方々から原稿料を集めて、それで入院したくらいだった」十七日、弟の植村清二が見舞ったとき、「おれの金はこの月末でおしまいだ。あとはもう一文もない」と、いった。

入院前の彼は、流行作家として月に二千円平均という当時としては巨額の収入があったのだが、それをすべて消費しつくしていたのである。

やがて腹膜炎を併発し、その苦痛のために怒号しつづけ、ついには看護婦がみな寄りつかないようになった。

二十三日には半ば無意識状態におちいった。それでも彼の小説の載っている雑誌を与えると頁をめくり、自分の小説を裂きとるような手つきをした。友人の三上於菟吉がそれを見て、「作家は、業だね」といった。

二十四日夜十一時五分、火の消えるように彼は息をひきとった。

直木の病状は時々刻々ラジオで報じられた。

彼が死ぬと、「朝日新聞」は、「武士の斬死」と評した。

「直木三十五の死は、全文壇、全ジャーナリズムをにぎわした点で、まったく空前絶後であるといえるであろう。……漱石や鷗外が死んだ場合だって、とうていこれには及ばなかったようである」

と、当時大宅壮一は書く。

「明らかに彼は、漱石や鷗外に比肩しうるような文豪ではない。……彼の魅力の大半は、彼の人間的なおもしろさ、それも主として、彼の矛盾だらけな性格、途方もない非常識な浪費癖に基づいているのである。……直木の矛盾と浪費癖は、彼の実生活を破綻に導いたと同時に、彼の異常な盛名をもたらすうえに決定的な役割を演じたことがわかる」

塚越賢爾（一九〇〇――一九四三）

昭和十二年四月、「神風機」の機関士として、操縦士飯沼正明とペアで、東京―ロンドン間の亜欧連絡飛行の新記録を樹立して、飯沼とともに英雄となった塚越賢爾は、実はイギリス人女性を母に持つ混血児であった。しかし彼は、ロンドンから日本へむけての放送第一声で「こんどの飛行の成功は二人だけのものでなく、大和魂の結晶であります」と、いった。

昭和十八年七月七日、東条首相の極秘命令によりドイツとの連絡のため、彼は亜成層圏を飛ぶ新鋭長距離機キ77に機関士として搭乗し、シンガポールのカラン飛行場から西へむけて飛び立った。おそらく彼の脳裏には、六年前の「神風」の飛行の記憶が明滅していたであろう。

その「神風」飛行のとき、いったん朝野の大歓送を受けて東京立川飛行場を出発しながら、飯沼操縦士と彼は、気象と機体の調子から判断して立川にひき返し、六日後に仕切直しで再出発するという「快挙」をやってのけた。しかしこの場合は、そういうことが許されない事態であったのだろう。

シンガポールを飛び立ったキ77は、そのままインド洋上で永遠に消息を絶った。

西　竹一（一九〇二――一九四五）

男爵西徳二郎の子として生まれ、陸軍騎兵科にはいり、昭和七年八月のオリンピック・ロサンゼルス大会の馬術競技で金メダルをとり、「バロン西」として勇名をはせた西竹一は、昭和十九年七月、中佐として硫黄島に派遣された。

アメリカ軍来襲にそなえての陣地構築の凄じい苦役の中でも、彼は生来の天衣無縫の明るさと気品を失わなかったといわれる。昭和二十年二月十六日ついにアメリカ艦隊の来攻を受けて死闘一カ月余、彼が戦死したのは三月二十一日であったと推定される。

のちにこのときアメリカ軍が拡声器で、「バロン西、オリンピックの英雄バロン西」と呼びかけて降伏をすすめたが、西は一笑に付して応じなかった、という「伝説」が生じた。しかし彼の最期の様相は明らかでない。

戦後、二十余年たって、硫黄島から、硫黄に風化した英国製の拍車つきの長靴が発見されたというニュースが伝えられたとき、未亡人の西武子は、即座に「それは主人のも

のです」といった。

田宮二郎（一九三五――一九七八）

昭和五十三年十二月二十八日、俳優の田宮二郎は、当時夫人と二人の子供は青山のマンションに別居していたので、午前十一時ごろ、港区元麻布の自邸で、付き人の西村豊に弁当をとってきてくれと頼み、西村が赤坂の仕出し屋から弁当を買って来て、午後一時半ごろ二階に上ってゆくと、十帖の寝室のダブル・ベッドの中で、赤いパジャマを着た田宮は死んでおり、銃身の先が、胸までかかった毛布からのぞいて見えた。

田宮は、趣味のクレー射撃に使うアメリカ製散弾銃をベッドの中にいれ、足の指でひきがねをひいたものらしく、弾は心臓部に直径ほぼ三センチの穴をあけ、即死の状態であった。ベッドの中と右腕は血まみれになっていた。

彼は身長百八十センチ、空手は初段で、英会話も自在で、映画「白い巨塔」などでもその演技は好評を受けていたが、日本のハワード・ヒューズを志して、俳優以外にも映画製作、開発事業など種々事業に手を出し、それがうまくいっていないといわれ、前年の三月ごろから強度の躁鬱病にかかり、しばしば誇大妄想的な異常な言動があった。

最後の出演作品はフジテレビのやはり「白い巨塔」であったが、最終録画は十一月十五日に行われ、彼は自分の死ぬシーンを、「うまく死ねた」と自讃していたという。このシーンは、田宮の死後九日目の翌一月六日に放映された。

生前つきあいのあった代議士佐藤文生は、毎年田宮邸で行われるクリスマス・パーティについて電話すると、田宮は「ことしはやめます。とても出来るような状態ではありませんよ」と涙声で答え、佐藤が何をいっても「どうしてもだめなんです」といったという。

妻幸子（元女優藤由紀子）に残された遺書。

「……十二月一日の夜、青山のマンションから、僕が麻布に戻る時、『ひとり置いてゆかないで!』と幸子はいった。涙をふき乍ら、そう云った幸子の顔はいままでに見せたこともないものだった。『もちろんさ!』と僕は答えた。しかし心の中を見すかされた僕は、あなたの左手をぎゅっと握ることしかできなかった。

もう自分でもとめることはできないところへ来てしまった。

生きることって苦しいことだね。死を覚悟するのはとても怖いことだよ。

四十三歳まで生きて、適当に花も咲いて、これ以上のしあわせはないと自分で思う。
田宮二郎という俳優が少しでも作品の主人公を演じられたことが、僕にとって不思議なことなのだ。そうは思わないか？
病で倒れたと思ってほしい。事実、病なのかも知れない。そう思って、諦めてほしい」
何だか気持の悪い遺書である。
田宮には躁鬱病的気質があって、数年前から躁状態のときに無計算の事業欲に熱中し、それが鬱状態にはいって虚脱的心理におちいり、自殺したものと見られる。
彼は自殺十カ月前に三億円の生命保険にはいっており、生命保険は一年以内に自殺した場合、保険金は支払われないという規約があるが、彼のケースは鬱病という病気と認められて、保険金が支払われた。

植村直己（一九四一――一九八四）

昭和四十一年、二十五歳のときから五大陸の最高峰をそれぞれ単独登頂し、ついでアマゾン六千キロの筏下り、犬ゾリによる一万二千キロの単独北極点到達、グリーンランド三千キロ縦断等の壮挙をなしとげた植村直己は、冒険仲間が「自分の手足を食べてでも生きぬく男」と評したほどの不死身男であった。
しかし、この死を賭けた冒険を職業とする男は、平生きわめて謙虚で、
「僕は別に大そうなことは何もしていません。普通の社会人としてやってゆく自信がないからこんなことをしてるんです。本当は、怖くて怖くて、寒くて寒くて……」
といい、また著書『北極点グリーンランド単独行』の中でも、
「マイナス四〇度を越す厳寒の中、乱氷を砕きつつ死に物狂いで前進しているとき、疲れ果てて泥のような眠りにおちて見る夢は……雪のない暖かい東京の夢だった」
と、書いた。
また同書に、白熊に襲われて間一髪これを撃ち倒したときのことを記述して、
「……獲物が目の前にいた。そして、もう一歩という時に、私のライフルが鳴ったのだ。彼はそういう死に方を考えていたろうか。あまりに突然の死である。自分で撃ち殺しておいてこんなことを言うのはおかしいが、白熊の不測の死が憐れに思えてならない。私にもいつか、このような不測の死が訪れるのだろうか」
と、書いている。
そして、昭和四十六年に彼はいった。
「将来を思うと、わびしく、さびしい。……十年後には、私は山とも冒険とも関係ない、ごく普通の生活をしているだろう」
しかし、十年たっても彼はその「職業」から別れられなかった。十三年後に、彼はアラスカのマッキンリー山で「不測の死」をとげるのである。
彼は昭和五十五年の冬季エベレスト登山に失敗し、五十七年の南極大陸犬ゾリ横断の計画は、おりからのフォークランド戦争の煽りで断念した。彼にとって、はじめての相つぐ挫折であった。
しかし、特にこの後者の計画は彼の最大の悲願で、昭和五十八年、彼はやがてそれを達成するためのトレーニングとして、マッキンリー冬季単独登頂を発起した。マッキンリーは、冬季ではないがすでに登頂者二千人に及び、植村自身いちど登頂したことのある山だったのである。
が、すでに四十を越えた夫を案ずる妻に、彼はリュックにピッケルやアイゼンをつめこむのを隠そうとし、「犬ゾリの研修にアメリカにゆくのだ」と、ごまかそうとした。
そして、アラスカに渡った。
昭和五十九年二月一日、出発直前、彼はテレビ朝日のインタヴューに、「若いころは山で女房の顔が浮かぶようじゃいけないなんてホラを吹いたが、今は帰るところは女房のところしかない。自分は一人じゃない。絶対に帰ります」と、ジャガ芋のような童顔に白い歯を見せて照れながら答えた。
そして、二週間分のカリブーの生肉十八キロ、鯨油とビスケット少々、雪洞掘りのシャヴェルなどを積んだ小さなソリをひき、クレバスに落ちるのをふせぐための長い竹竿二本を腰にさして、ひとり雪と氷の山へ上っていった。
彼はトレーニングのつもりであったかも知れないが、しかしマッキンリー山は、六一九四メートル、その標高はともあれ極寒のアラスカにそびえたつ山で、厳冬には氷点下三、四十度、そして四、五十メートルの風は珍しくない怖ろしい山であった。
十二日午後六時五十分（現地時間）に、史上初のマッキンリー冬季単独登頂に成功したという携帯無線機による連絡があったが、それっきり連絡は絶えた。
この日は、ちょうど植村の四十三歳の誕生日であった。それがもう夜にはいっての時刻だと知って、妻の公子は、

植村がドラマチックに、自分の誕生日のうちに登頂しようとして無理をしたのではないかと心配した。

十六日に捜索機が飛んで、四二〇〇メートル付近で、下山中の植村が手をふっているのを発見したと報告したが、以後ふたたび――そして永遠に植村の消息は絶えた。

「植村さんが登頂してから二、三日後は、長年地元に住んでいる人も驚くほど頂上付近は猛吹雪だった。マッキンリー山のふもとのハイウェーでガソリンスタンドを営むレオン・スミスさん（六三）の話では、『あの当時はふもとでも風速が二十二、三メートルはあった。頂上は風速九十メートル近くあったのではないか』という」（昭和五十九年三月十日付「朝日新聞」）

行方不明のニュースに日本中大騒ぎとなった中に、彼の妻は「私はどんな旅にも、全部反対しました。けれど返事は、おれにはこれしかない、でした。反対してもゆく人でした。……でも、家庭での植村は、可愛い、気の弱い人でした。子供がいたら、山はやらせない、ともいっていました」（同右「朝日新聞」）といい、彼の故郷但馬の八十三歳になる老父は、「倅は、お国にも御近所にも、何の役にも立たんことをして、こんなに心配していただいて申しわけない」と、天を仰いで言った。

四十四歳で死んだ人々

> 自分と他人との差は一歩だ。しかし人は永遠に他人になることは出来ない。
> 自分と死者との差は無限だ。しかし人は今の今死者になることも出来る。
>
> ――山田風太郎――

大石内蔵助（一六五九――一七〇三）

討入り後、細川越中守の屋敷に義士十六名とともに預けられ、翌元禄十六年二月四日、切腹を命じられた。

そもそも、浅野内匠頭は吉良上野介に殺されたものではない。相手を傷害して、政府に罰せられたものである。従って、常識的には成立しない敵討ちという行為を、この分別ある年齢で、二年近い歳月をかけ、五十人近い同志を

結集して成しとげたこの「昼行灯」は、切腹の座に呼び出されたとき、背後から義士の一人潮田又之丞が、「追っつけおあとから」と声をかけると、「お先に」と、笑ってしずかに出ていった。

市川団十郎・初代（一六六〇――一七〇四）

――後年昭和四十年代、日本のいわゆる高度成長時代の世相に対し、「昭和元禄田舎芝居」という、語としては意味をなさぬ流行語が生まれたが、初代団十郎は、まさに元禄江戸芝居の花であった。

いまも残る「鳴神」「暫」「勧進帳」などのいわゆる歌舞伎十八番の原型の大半は彼が創始したものである。のちに代々市川団十郎のお家芸となったその荒事の凄じさは、彼が舞台で踏む足拍子には、六町四方の瀬戸物屋の茶碗がことごとく震動したという話があるくらいである。

しかも彼の最盛期は、実に「忠臣蔵」の史実――赤穂浪士の復讐と相重なる時代であった。彼は大石内蔵助よりただ一歳の年下である。

彼は、義士が討入りした元禄十五年の七月に、中村座で「勧進帳」をやっている。それは「勧進帳」の初演であったが、赤穂浪士の中にはそれを見た者もあったのではないか。後に自分たちの「忠臣蔵」が歌舞伎の「独参湯」となるとは夢にも知らず。――

しかるに団十郎は、義士たちが切腹した年の約一年後、すなわち宝永元年二月九日、市村座に出演中、突如刺殺された。

彼は舞台で鞍馬の僧正坊の役をつとめ終って、幕がひかれはじめたとき、物蔭から俳優の生島半六が走り寄って、脇腹を刀で刺した。団十郎は「卑怯！　卑怯！」と二声さけんだのみで絶命した。

その原因は、女性問題とも、個人的怨恨とも諸説まちまちだが、その半六はただちに捕われ、四月三日には獄中で病死したので、真相は不明のままとざされた。

大塩平八郎（一七九三――一八三七）

天保八年二月十九日、大坂で叛乱を起した平八郎は、事破れていったん大和まで逃亡したが、二十四日ひそかに大坂に帰り、油懸町の手拭地屋美吉屋五郎兵衛方の離れに潜伏していたが、三月にはいって奉行所に探知された。

三月二十七日午前七時ごろ、捕手が美吉屋に殺到した。

「雨戸がこわれると、火の付いた障子が、燃えながら庭に落ちた。死骸らしい物のある奥の壁際に平八郎は鞘を払った脇差を持って立っていたが、踏み込んだ捕手を見て、其刃を横に吭に突き立て、引き抜いた」

と、鷗外は『大塩平八郎』で書く。

火は燃えひろがり、捕手たちも逃げ出したが、八時ごろ何とか消しとめた。

「平八郎らしい死骸が出た。これは吭を突いて俯伏している。平八郎の首は焼けふくらんで、肩に埋まったようになっているのを、頭を抱えて引き上げて、面体を見定めた」

木戸孝允（一八三三――一八七七）

いわゆる維新の三傑の中で、木戸はいちばん「進歩的」で、かつ「文化的」な人間であったが、それだけに神経質で、西郷と大久保のヴァイタリティに押され、かつては後輩たる井上、伊藤の勢いに押されて、新政府となってからは、愚痴ばかりこぼしていたように見える。

明治十年一月、彼は胸背部に痛みをおぼえたが、天皇が京都へ行幸されるのに従っていった。

二月、その地で西南の役勃発の報に接した。彼は「近年多病、いまみずからを陣頭に立て、西郷の弾にあてられれば至快の往生である」といって征討の将たらんことを請うたが、天皇は許さなかった。四月に至って、ようやく肝臓肥大の症状が著明となり、衰弱が甚だしくなった。四月十九日、天皇みずから馬で、上京上土手町の屋敷に孝允を見舞った。

しかし病いよいよ篤く、血便をもらしはじめ、五月二十六日午前六時半、「西郷、もういいかげんにせんか」と、うわごとをもらしながら絶命した。

四カ月後に西郷は死に、さらにその八カ月後に大久保も死んだ。一年のうちに三傑は相ついで地上から消え失せたのである。

スティヴンソン（一八五〇――一八九四）

一八八八年六月、三十八歳のロバート・ルイス・スティヴンソンは、四十九歳の妻ファニーとその連れ子のロイド・オズボーンを伴ってサンフランシスコの金門湾をあとに、南太平洋の島々への旅へ出発した。スティヴンソンはすでに『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などで名声を確立していた。

そして、タヒチやハワイなどに滞在したあと、一八九〇年十一月、サモア群島のウポル島に上陸し、休火山ヴェアの中腹に木造の二階家屋を建てて永住の地と定めた。彼はここで百人以上もの召使いを使う生活をした。「光と風と夢」の生活であった。

しかし、幼年時から虚弱で、三十歳のときに最初の喀血を見て以来、何度も危篤におちいったほどの肉体を持つ彼は、ここでの生活を維持するため烈しい執筆生活をつづけているうちに、次第に衰え、最後には口述筆記の状態となった。

一八九四年十二月三日、彼はいつものように口述したあと、突然昏倒し、意識はついに戻らずに死んだ。翌朝、その遺骸はヴェア山頂に埋められた。死因はしかし肺結核ではなく、脳溢血であった。

墓碑には彼みずから作った「レクイエム」と題する詩が刻まれた。

「ひろい星空のもと
墓を掘りわたしを眠らせよ
わたしはよろこびのうちに生きて死ぬ
一つの言葉を残して、わたしは眠る
わたしのために刻む詩はこれ
あこがれの地に彼は眠る
船人は帰る、海よりわが家へ
猟人は帰る、山よりわが家へ」

ワイルド（一八五六――一九〇〇）

三十五歳のとき、小説『ドリアン・グレイの肖像』、三十七歳で戯曲『サロメ』を書いて一躍欧米の文壇のみならず社交界の寵児となったオスカー・ワイルドは、一八九五年、ある貴族と男色事件をひき起し、ロンドンの重罪裁判所で二年間の懲役刑を受けた。

二年後、刑務所から出て来たとき、ワイルドは痩せ衰え、熱病にかかったような眼差しをして、片方の耳は遠くなっていた。彼は四十を越えていた。

彼はふたたび名声の王座に戻ろうとあがいたが、もはや失墜の運命にうちかつことが出来ず、飲んだくれの放浪をつづけたあげく、パリの安ホテルに転がりこんだ。

彼はたえず耳鳴りと頭痛に悩まされたが、医者の治療を受けようにも、あるのはただ借金だけだった。彼はいった。

「僕は身分不相応な死に方をしなけりゃならないだろう」

それでも、一九〇〇年十月はじめに手術を受けたが、そ

れは彼に衰弱を加えただけだった。

十一月二十九日、医者が臨終を告げたとき、かつて背徳を誇った天才は、友人が終油の秘蹟を授けるカトリックの司祭を連れて来たのを拒まなかった。

死因は、二十歳のころにかかった梅毒による脳髄膜炎と診断されている。

葬式には七人の知人だけがついていったが、棺の上の花束に名札がついていたのはただ一つで、それは安ホテルの亭主の名で「御宿泊人さまへ」と書いてあるだけだった。

同じ年の八月にニーチェが死んでいる。

チエホフ（一八六〇――一九〇四）

アントン・チエホフは、貧しい医学生時代の苦闘がたたったのか、二十代の終りごろからしばしば喀血を見るようになった。しかし彼は、医者でありながら、ほとんど一生、結核であることを、他人のみならず自分にも認めようとはしなかった。それは胃から出る血だと他人にいい、自分でもそう考えていた。

一八九七年三月、彼が三十七歳のとき、また大喀血をやって、モスクワのオストロウーモフ病院に入院したとき、老トルストイが見舞いに来た。面会謝絶ということになっていたが、チエホフは感激してこの大作家を迎えた。

トルストイは、彼の信念たる魂の不死を説いた。黙って聞いていたチエホフは、やがてポツリといった。

「そういう不死でしたら、私には不要です」

哀愁と人間愛にみちた数々の名作を書いた温雅なチエホフは、神を信じていなかった。

一九〇二年、四十二歳で、彼ははじめて結婚した。相手はモスクワ芸術座の女優オリガ・クニッペルであった。それまで何度か結婚の機会がありながら、自分の病身なことや、母や兄妹の扶養責任や、さらに結婚生活というものに期待感の持てない人生観から、すべて斥けて来たチエホフが、この年ではじめて結婚する気になったのは、死を二年後に控えた無意識的な、人生の夕映えのような最後の燃焼であったか。それとも、だれからも愛されながら、一人の親友も持たなかった強い意志を持つ彼も、ついにまぬがれなかった晩年の気の弱りでもあったか。

結婚の二カ月後に、彼は、自分の死後の財産の分配法を指示した遺書を、ひそかに妹マリア宛に書いている。

喀血や発熱や下痢――彼はすでに腸結核にも冒されていた――が次第に頻繁になってゆく身体で、しかし彼は一九〇三年、有名な『桜の園』を書いた。そしてこれは、翌一九〇四年一月十七日（ロシア暦）モスクワ芸術座で初演され、絶讃をあびた。

日露戦争が勃発したのは、それから十日目であった。ニコライ二世の暴政に日本軍が一撃を加えてくれるかも知れない、という期待を持ちつつ、一方では、愛国者たるチエホフは、身体さえ丈夫なら軍医として出征したい、ともらした。

六月のはじめ、南独のバーデンヴァイラーに静養にゆく前日、彼を訪問した旧知のエヌ・デ・テレショフはこう書いている。

「ひどい痩せかたで、アントン・パヴロヴィッチとは判別出来ないくらいだった。こんな変りかたをしていようとはとても信じられないほどだった。が、彼は、見るも怖ろしい、弱々しい蠟のような手をさしのべ、やさしい、しかし、もはや微笑の見えない眼でこういった。――《明日、発ちます。さようなら、死ににゆくのです》」

夏の来ようとしているドイツの保養地、バーデンヴァイラーは、暑くて苦しいほどだった。チエホフの症状はかえって悪くなった。六月二十八日に、彼は妹のマリアに手紙を書いた。

「僕の胃は、何も食べないでいる以外にはとても癒せそうにない。しかし、食べなければ万事休すだ。息切れの方の唯一の策は、動かないことだ」

動かず、食わず、その状態で彼は、保養地に来た人々が、腹をへらすためにハイキングや水浴に精を出し、ホテルに帰ったところ、コックが逃げて夕食の支度がしてない、というユーモア小説のストーリーを考え、妻のオリガにしゃべった。それが、七月一日の夕刻だった。

二日の午前一時、彼は苦しげにうわごとをいった。それは何か、日本軍のことだった。やがて、胸の上におかれた氷嚢にわれに返り、彼は哀しげな微笑を浮かべていった。

「からっぽの心臓の上に氷をおいてはいけない」

医者が呼ばれ、酸素吸入をし、さらに新しい酸素をとりよせようとすると、

「もうよろしい。その前に僕は死ぬよ」

と、いった。そして、

「イッヒ、シュテルベ」

私は死ぬ、ということを彼はドイツ語でいった。それから、妻がシャンペンのグラスをさし出すと、彼特有の静かな、ふしぎな微笑を浮かべて、それを飲みほし、

「ずいぶん長い間、飲まなかったね」

といい、やがてこときれた。七月二日、午前三時であった。

彼の遺骸は、何かの手違いで、牡蠣をのせる貨物列車でモスクワへ運ばれた。

大石誠之助（一八六七——一九一一）

社会主義に対する善意に満ちた共鳴から、社会主義者たちのささやかなシンパとなった、アメリカ帰りの紀州新宮の医者大石誠之助は、社会主義に対する憎悪とみせしめの意図から大逆事件を作りあげた明治政府の罠にかかって連坐し、明治四十四年一月十八日、死刑を宣告された。

彼は、面会に来た堺利彦に、「嘘から出たまことこととはこのことだ」といった。

それは、一種の道楽の精神をふくんだシンパ行為が、裁判の上ではまことの謀議にすり替えられたことへの嘆声と、またそれによる死刑という運命だけは動かすことの出来ない真実となったことへの嘆声であったろう。

約一週間後の一月二十四日、東京監獄東北隅の絞首台で、大石は、幸徳秋水らいわゆる大逆事件の連累者とともに死刑を執行された。絶命時間は午後二時二十三分であった。

その直後、佐藤春夫は、

「千九百十一年一月二十三日（ママ）
大石誠之助は殺されたり
げに厳粛なる多数者の規約を
裏切る者は殺されるべきかな」

と、歌い、与謝野鉄幹は、

「大石誠之助は死にました
いい気味な
機械に挟まれて死にました」

と、歌った。いずれも痛絶な反語である。

スコット（一八六八——一九一二）

探険家のスコットである。

一九一〇年から一九一二年にかけて、イギリス海軍大佐スコットは、ノルウェーのアムンゼンと国家の栄光をかけて、人類最初の南極点到達を争った。

彼と四人の隊員は、当時としては考えられるかぎりの、しかし現代から見れば無謀としかいいようのない装備で、基地から二カ月半の日時をかけ一四八〇キロ、酷寒の中を前進しつづけて、一九一二年（明治四十五年）一月十七日、ついに南極点に達した。しかるに彼らがそこに発見したのは、ちょうどその一ト月前に同地に達したアムンゼン隊が残していったノルウェーの国旗であった。

スコットは手帖に書いた。「ノルウェー隊はわれわれの機先を制して、極点への第一到達者となりたり。そはわれらにとりてすさまじき落胆なりき。……吹き荒るる風、気温マイナス二十九度、寒気は骨に達し、神よ！　ここは恐怖の土地なり」

彼らは、落胆しつつ、全力をあげて基地への帰還を急いだ。「帰還は辛苦そのものとなるべし」としたスコットの予想は的中した。帰還中、三月二十九日。——

「……テントの外にはただ荒れ狂う風雪（ブリザード）あるのみ。今や何ら好転の希望を持ち得ず。われらは最後まで奮闘せざるべからず。されど、身は刻々と弱りゆきて終極は遠からざるべし。遺憾千万のことなれども、もはやこれ以上書きつづくること能わず。神よ、願わくはわれらの家族の上を見まもり給え」

という最後の記録を残して、スコット隊は全滅した。

ついでにいえば、このときスコット隊を敗北させたアムンゼンは、その後、一九二八年（昭和三年）ノビレ少将の北極遭難に際し、その捜索のため飛行機でスピッツベルゲンに向ったままゆくえを絶った。五十六歳であった。

サン＝テグジュペリ（一九〇〇——一九四四）

もともと民間航空の飛行士であったテグジュペリは、第二次欧州大戦とともにフランス空軍にはいって戦ったが、フランス降伏後、アメリカに亡命し、一九四二年、ニューヨークで『星の王子さま』を書いた。

翌一九四三年、彼は連合軍の北アフリカ戦線に参加した。しかし貸与されたアメリカの新鋭機は、四十歳を越えたテグジュペリには負担がかかり過ぎ、また荒々しいアメリカ軍の航空基地は、冒険好きな彼にも幻滅を与えずにはいなかった。またこの巨大な肉体を持った作家航空兵は、繊細な心を持つ反面、意外にもぶきっちょなところがあって、何度か着陸に失敗して貴重な飛行機を壊し、アメリカ軍から厄介視された。

一九四四年七月、テグジュペリの飛行大隊はコルシカ島に進出し、七月三十一日朝、彼は双胴のP38ライトニング機で、高空写真偵察のためにボルゴ基地を発進した。

「裸馬（ドレス・ダウン）よりコルゲートへ、滑走離陸してよろしいか？」

と、管制塔に問い返したのが、テグジュペリの地上に残

した最後の言葉であった。彼はふたたび帰還しなかった。

彼の死については、ドイツ機に撃墜されたという説と、操縦を誤って墜落したという説があって、いまだに明らかでない。

遺稿『X……将軍への手紙』の中で彼は書いている。

「……いまP38に乗って飛行訓練を受けて来たところです。すばらしい飛行機です。二十歳のころこの贈物が自由に使えたら、どんなにうれしかったでしょう。でも、世界の空を六千五百時間あまり飛びまわって来て四十三歳を迎えた今日では、悲しいことですが、この遊びも、もうあまり歓びが見出されなくなったことを認めないわけにはゆきません。これは移動の道具――ここでは戦争の道具にすぎません」（山崎庸一郎『サン＝テグジュペリの生涯』）

小平義雄（一九〇五――一九四九）

実家に逃げ帰った最初の妻を追って、その父以下家族六人を鉄棒で殺傷し、また水兵として中国へ渡って中国女性数人を強姦殺害した経歴を持つ小平義雄は、昭和二十年五月、東京大空襲の翌日の二十五日、当時カマタキとして勤めていた海軍衣糧廠第一女子寮で、二十一歳の寮生を強姦絞殺したのをはじめ、二十一年八月に至るまで、計十人の女を強姦殺害した。その多くは、私鉄の駅などで買い出しの若い女性に眼をつけ、どこに米がある、そこに砂糖があるなど甘言をもって山中へ誘いこみ、そこで強姦し、絞殺したものであった。

昭和二十一年八月十七日、この最後の殺人の被害者の屍体が発見されてその身許が割れ、彼女に就職の世話をするといって近づいた小平義雄という男がはじめて浮かびあがり、彼が逮捕されたのは三日後の二十日で、その取調べによって次々に右の犯罪事実が発覚した。

彼は外見的には肥満、容貌精悍、闘士型の男で、強姦の手口は、まず女を殴りつけ、地面にたたきつけ、いちど失神させてから裸体にして観賞し、その覚醒を待って犯し、事後絞め殺すという凶悪なものであった。

検事の取調べや精神鑑定の過程で、自分の犯罪を語るとき、彼は眼をギラギラと光らせ、よだれをたらさんばかりの表情となり、描写は微にいり細をうがって尽きるところがなかった。

小平は死刑の宣告に対してもサバサバした顔をしていた。それどころか、世のみせしめとするため、自分の絞首刑の光景をニュース映画にとってくれと申し出た。といって、

彼にザンゲの気持が毛ほどもあるとは見えなかった。彼はみずからおれの腰から下は人面獣心だといっていた。

昭和二十四年十月五日午前九時五十分、仙台の宮城刑務所で刑が執行された。

「この朝小平は六時半起床、朝食を食べたあと、そぼふる秋雨をながめ、中川玄昭教誨師に『こういう落着いた日に死ねるのは幸福だ』と語り、マンジュウを『うまいうまい』と食べ『ひかり』をゆっくりふかした後……落着いた態度で同九時五十分死刑台に上った」（昭和二十四年十月六日「読売新聞」）

眼かくしされ、うしろ手に手錠をかけられた死刑囚は、死刑執行室に連れこまれると、両足も縛られ、絞縄を首にかけられる。この間すべて無言である。

検事が眼で「執行」と合図すると、保安課長が手をあげ、執行人のハンドル役がハンドルを回す。そのとたんに囚人の立つ床がはずれて、その踏み板が地下室のコンクリートの壁にパターンと物凄い反響をたてる。囚人は落下し、縄は一瞬にのびて、キリキリと回転する。

地下室に落下し、ぶら下がった死刑囚は、ふつう十二、三分で完全に呼吸が停止するという。

小平義雄は十時〇二分に絶命した。

坂本九（一九四一――一九八五）

日本じゅう平和な夏の行楽にゆれる一日が暮れかかった昭和六十年八月十二日午後六時十二分、乗員乗客五百二十四人を満載して羽田から大阪へ飛び立った日航ジャンボ機は、離陸後まもなく垂直尾翼の一部が相模湾に脱落するという信じられない事故を起し、方向ちがいの中部山岳地帯へ不可抗の迷走を行い、六時五十四分ごろ群馬県多野郡上野村御巣鷹山の山中に墜落した。

奇跡的に四人の女性の生存者を出したほかはすべて凄惨な死をとげたが、その死亡者の中に、昭和三十年代後半、「上を向いて歩こう」や「幸せなら手をたたこう」など、国民的愛唱歌を生んだ歌手坂本九ちゃんがいた。

彼は元マネージャーが大阪の羽曳野市で市議選に立つというので、その選挙応援に西下する途中遭難したもので、お守り用の笠間稲荷のペンダントと歯型だけで遺体が確認された。

四十五歳で死んだ人々

この世で最大の滑稽事は、自分の死ぬことだ。
にもかかわらず、
およそ人間のやることで、自分の死ぬことだけが愚行ではない。
——山田風太郎——

ヨハン・シュトラウス・父（一八〇四——一八四九）

「ラデツキー行進曲」「アンネン・ポルカ」など作曲し、ワルツの父といわれるヨハン・シュトラウスは、ウィーンの宮廷舞踏会の指揮者であり、またヨーロッパ各地を演奏旅行して莫大な収入を得ながら、天性の経済観念欠如から、一生金に追いまくられる生活をした。

もっとも彼は、同名の息子ヨハン以下五人の子供のいる本来の家庭のほかに、愛人との第二の家庭を持っていたせいもある。それどころか、四十歳ごろから、彼は本妻とその子たちを捨てて、愛人のほうの家で暮した。そして、こちらにも五人の子供が生まれた。

やがて、本妻の長男ヨハン・シュトラウス二世が成長して、父をしのぐワルツのライヴァルとなる。

一八四九年九月十六日、彼はウンゲルのカジノでヴァイオリンをとって顎にあてたとき、右手の弓がまっぷたつに折れた。弓をとりかえたが演奏は悪く、やり直しをしている途中、彼は倒れた。

そのころ彼は、第二の家庭の幼い娘が猩紅熱を出して、寝るひまもなく看病に当っていた一方、作曲のほうの仕事もあったので、疲労の極に達していたのである。

それから九日目の九月二十五日の午前二時ごろ、彼が死んだとき、第二夫人と子供たちはどこかへ姿を消していて、だれもみとる人間がいなかった。

本宅のほうも貧しかったが、こちらにも遺産らしい遺産もなかった。合わせて二人の妻と十人の子供があったといっても、「ワルツの父」はいったい何に金を使ったものか。

井伊直弼（一八一五——一八六〇）

万延元年三月三日、午前八時過ぎ、ふりしきる雪の中を登城しようとした井伊家の行列は、桜田門外で、十八人の水戸浪士に襲撃された。

井伊の供侍は六十余人いたが、雪のためみな刀に柄袋をかけており、煙管で煙草二服のむほどの間に、八人殺され、十人が重軽傷を負った。

駕籠かきは逃げ、残された駕籠を、浪士の稲田重蔵、海後嵯磯之介、佐野竹之介らが相ついで刺しつらぬき、有村次左衛門が直弼をひきずり出した。そして、すでに傷ついて気息奄々たる直弼を、有村が首打ち落した。

有村次左衛門は大老の首を刀でつらぬいて、愉快愉快とさけびながら、辰ノ口の若年寄遠藤但馬守の屋敷前の辻番所のところまで歩いていったが、彼自身も重傷を受けていて、そこで倒れ、腹かき切って死んだ。

直弼の首は辻番所に置かれ、さらに遠藤家にとどけられたが、井伊家のほうではそれを知らず、しばらくその首のゆくえがわからなかったので狼狽した。

幕府は三月末日まで大老の死を隠蔽し、その間病気見舞いとして鯛やら朝鮮人参やらを井伊家に下賜したので、「倹約で枕いらずの御病人」とか、「遺言は尻でなさるや御大病」とかいう川柳を落首した者があった。

彦根藩邸と江戸城はほんの一足だが、「事故」は目的地まで百メートルの間にも起る。

大村益次郎（一八二四——一八六九）

明治二年八月、大阪に兵学校を創立するために西下した兵部大輔大村益次郎は、宿を京都三条木屋町の旅宿にとり、以来連日、巡閲や視察に励精した。

しかるに九月四日の夕闇どき、旅館に訪ねて来た二人の男が、大村の若党が取次ぎのため奥にはいったのについて、白刃をふるって突入した。

大村は奥の四帖半の一室で関係役人や軍人三人と要談中であったが、一瞬行灯が消え、薄闇の中で格闘となり、狭い部屋で抜刀も叶わず、たちまち乱刃の下に置かれた。

その中で、裏の東鴨川の河原へ逃げ出した兵学教授安達幸之助は、ここにも待ち受けていた襲撃者の一味に斬殺されたが、これが一見大村に身体つきが似ていたため、暗殺者たちもおたがいに同士討ちするほど昂奮状態にあったこ

ともあって、「しとめた、しとめた」と、さけびながら一同は逃走した。彼らは合計八人であった。
　しかし大村は、乱闘にまぎれて、風呂場へ逃れて、風呂桶にはいり、ふたをしめてひそんでいた。彼は前額部、左こめかみ、腕二カ所、手指、右ひざなどに傷を受けていた。
　犯人たちの動機は、大村が兵制その他に西洋化を推進することに対しての憤激で、彼らはすべてその年のうちに逮捕され、斬刑に処せられた。
　大村は、七日、京の長州屋敷に移され、いったん治癒に向うと見えたが、ときあたかも晩夏の暑熱がなお残る季節でもあり、膝の一傷が化膿を起し、二十日には大阪からポルトガル医のボードウィンが来診し、手術の必要があるから大阪の病院に来たほうがよいと勧めたが、許可がなかなか下りなかった。十月一日、ようやく許可が下り、下阪、大阪病院に入院し、二十七日、ボードウィン執刀の下に右下肢を切断した。
　この手術も、その可否についての役人たちの評議のために遅れに遅れて、ついに手遅れになったのである。十一月五日午後七時、敗血症のためについに大村は絶命した。
　彼は平生使用していた西洋手帳に鉛筆で辞世を書いた。
「君のため捨つる生命は惜しからで　ただ思わるる国の行(ゆく)末(すえ)」
　しかしこれは彼の歌ではなく、前に長州で自刃した長井雅楽(うた)の辞世であった。西郷さえも翻弄(ほんろう)した不敵な大村は、他人の歌をもっておのれの辞世としたのである。
「字は鉛筆薄く細く、しかもみみずの匍行(ほこう)したようで、如何にも手腕に力のない老人の書いたものの如く見える」と、のちに飯島軍医中将は書く。「かような詩歌を病弱の手で、手帳に書きとめる心事には、人知らぬ淋しい感慨が充ち満ちておられたことであろうと同情の哀愁にたえぬ」
　しかし大村は、辞世などどうだっていい、と考えていたのかも知れない。

二葉亭四迷(ふたばていしめい)（一八六四——一九〇九）

　明治四十一年六月、朝日新聞特派員として露都ペテルスブルグにはいった四迷は、寒気のために若いころの肺結核が再発し、翌年四月帰国の途についた。
　これについて、漱石はいう。
「露都在留中ただ一枚の端書(はがき)をくれた事がある。それには、弱い話だが此方(こっち)の寒さには敵(かな)わないとあった。余は其(その)端書を見て気の毒のうちにも一種の可笑味(おかしみ)を覚えた。まさか死

ぬ程寒いとは思わなかったからである。然し死ぬ程寒かったものと見える」
　ベルリンを経由してロンドンに着き、四月十日、日本船賀茂(かも)丸で出航した。船中彼は「体温日記」というものをつけた。
　四月二十八日午前六時半、「三十九・五度」という記録でこの体温日記は終った。船はインド洋にはいっており、暑熱のために彼は重態におちいったのである。
　彼は食物をほとんどとらず、裸で寝台に寝ていた。
　五月十日、船はベンガル湾のまんなかあたりを進んでいた。ボーイが、あと三日でシンガポールに着くことを伝えると、四迷は高熱にもつれる舌で、「シンガポールに着いたら、浴衣(ゆかた)がけで散歩したいものだな」といった。ボーイがそれとなく、家族への遺言はないか、と訊(き)くと、「何もない」と、答えた。
　その日の午後五時十分に、熱い空気の中の蠟燭のように彼は死んだ。
　四迷は、死ぬほど寒い国をのがれて、ゆだるほど暑い海の上で死んだのである。
　しかし、彼の死んだ船室を片づけていると、三月二十二日、ペテルスブルグ出発前に病院で書いた家族宛の遺書が出て来た。
「遺言状。
一、余死せば朝日新聞社より多少の涙金渡さるべし。
二、此金(このかね)を受取りたる時は年齢に拘(かか)わらず平均に六人の家族に頭割にすべし。
三、此分配法に異議ありとも変更を許さず。右の通り」
　屍体は防腐処置を施され、シンガポールに着いてから、数マイル離れた山中のバセバンシャンの丘の上で火葬に付され、遺骨だけが日本に運ばれた。

ラスプーチン（一八七一頃——一九一六）

　帝政ロシアのニコライ二世の皇太子アレキシス大公の病気を平癒させたことによって、ロマノフ宮廷内部にくいこみ、皇帝皇后に魔術的影響力をふるったラスプーチンは、危険な妖僧としてその生命を狙われることになった。
　一九一六年十二月十九日夜、彼はユスポフ公爵邸に招かれた。ユスポフは彼を殺害するつもりであった。
　ユスポフは、青酸カリをいれた葡萄酒を一オンスも飲ませたが、ラスプーチンの身体に何事も起らなかった。それでユスポフは、ピストルをとり出して撃った。陰謀家たち

の仲間の医者が、倒れているラスプーチンを調べて、その死を告げた。

一同は二階にひきあげたが、ユスボフは不安になってまた階下に下り、ラスプーチンの身体をゆすって見た。すると、この屍体は立ちあがり、悲鳴をあげて逃げ出したユスボフを、階段の途中まで、這いながら追って来た。

しかしラスプーチンは、また別のドアにゆき、その錠を手でひきちぎって中庭に出てゆこうとした。ほかの暗殺者が追いかけて、二発命中させて、やっとこれを倒した。

彼らはその屍体を自動車で小ネヴァ河へ運び、念のため屍体の両腕をうしろ手にくくりあげて、氷の穴へ投げこんだ。

二日後、ラスプーチンの屍骸が発見された。濃く密生した頭髪は凝血に覆われ、顔はふくれあがり、両眼はすでにガラス玉のようにどんよりしていた。しかし、何より不思議だったのは、縛ってあった縄がなくなっていて、右手が十字を切るかたちになっていたことであった。

それは同年同月の九日に夏目漱石が死に、十日に大山巌が死んだ月のことであった。

有島武郎（一八七八——一九二三）

大正十二年六月七日、テロの目標を天皇に置く無政府主義者のギロチン社の一人河合康左右は、資金調達のため麹町下三番町の有島武郎邸を訪れ、ゆすり半分で二千円の小切手を書かせた。有島は淡々としてそれに応じた。彼はすでに死を覚悟していた。

その前日有島は、本郷の帝大病院に入院中の友人、出版社叢文閣の経営者足助素一を訪ねて重大な告白をしていた。

それは彼が、「婦人公論」の婦人記者波多野秋子と恋愛におちいったあとで、彼女に波多野春房という夫のあることを知り、かつその春房から、「それほどお前の気にいった女なら進呈しよう。しかし、代償がいる。しかもただ一度ではない。お前を一生苦しめるために、これからも何度ももらうが、とりあえずいま一万円よこせ」と脅迫されたが、「愛する女性を金に換算は出来ない。断る」と拒絶した事件のことであった。当時は「姦通罪」というものが存在した。

波多野秋子は、そのころ作家が原稿を依頼されると、だれでも承諾し、かつ必ず締切りまでに書くといわれたほど、

魅惑的な美貌の持主であった。しかし彼女は肺を病んでいた。

有島は足助にいった。

「秋子は死にたがっている。私も実はその望みがあった。死にたい男と女がめぐり逢って恋愛したのだ。とめてくれるな」

六月八日午前、足助は病院を出て、有島を訪ね、死を思いとどまるように説いたが、有島は聞かず、足助を帰したあと、その午後、風雨はげしい中を、軽井沢三笠山の有島家の別荘浄月庵にいった。

七月六日、隣の三笠ホテルの従業員によって二人の死体が発見され、現場で、足助にあてた遺書が発見された。

「……山荘の夜は一時を過ぎた。（注・六月九日午前一時のこと）雨がひどく降っている。私達は長い道を歩いたので濡れそぼちながら最後のいとなみをしている。森厳だとか悲壮だとか、いえばいえる光景だが、実際、私達はたわむれつつあるふたりの小児にひとしい。愛の前に死がかくばかり無力なものだとは、この瞬間まで思わなかった。恐らく私たちの死体は腐爛して発見されるだろう」

その通り、縊死した二人の死体は、女の赤いしごきで結び合わされ、腐爛して白い蛆が這いまわっていた。

東京の有島の書斎では、最後の歌が発見された。

「世の常のわが恋ならばかくばかりおぞましき火に身はや焼くべき」

かつて彼の信仰上の師であった内村鑑三は、「有島氏が今度なした事を善しと思う余の友人は、この際断然余と絶交して欲しい。また余の弟子と称する人で、この事を善しとする人は、今日直ちに師弟の関係を断ってもらいたい」といった。

ローレンス（一八八五——一九三〇）

作家のD・H・ローレンスである。

大学時代の恩師の妻のフリーダと駈落ちしたローレンスは、しかし生来虚弱体質で、以後は頑健な妻と性の闘争をつづけた。四十三歳で『チャタレイ夫人の恋人』を書いたあと、肺結核が悪化してヴェニスの病院にはいっていたが、一九三〇年春そこから南仏ヴァンスへ逃げ出し、二日後の三月二日に死んだ。

フリーダはいう。

「私たちは彼を葬りました。本当に簡単に、鳥のように埋めてやりました。——彼を愛した数人の者が墓穴に花を投

げましたが、私のいったのはただ一ことだけ――『さよなら、ロレンツオ』そういって友達と私で、棺の上にミモザの花を一杯投げました。それから土をかける間、日がさしてこのヴァンスの小さな墓地の墓を照らしていました。彼があれほど愛した地中海をかなたに望む墓場です」

小栗虫太郎（一九〇一――一九四六）

小栗は、昭和八年、三十二歳で雑誌「新青年」に『完全犯罪』をもって登場し、翌九年『黒死館殺人事件』で読者を驚倒させ、江戸川乱歩をして、「非ユークリッドの世界を、ユークリッドの言葉で描き出そうとする」と嘆賞させた。

この異次元の世界と心理を、中世の蜃気楼のごとく描き出す、文字通りの鬼才も、作品を発表する舞台のない時代にはどうすることもできなかった。

彼は昭和十六年から十七年にかけて、陸軍報道班員としてマレーシアに派遣されたが、これについて乱歩は次のごとくいう。「小栗君はニヒリスト的超然派であり、決して忠勇義烈の士ではなかった。また、からだも弱く、絶えず心悸昂進を起していたし、雷ぎらいで、雷鳴には押入れの中へ隠れるという異常者であった。こういう人物を第一に戦場に送るというのは、実に意地の悪い話で、あるいはこの派遣には懲罰の意味が加わっているのではないかとさえ疑われた」

十七年に帰国した小栗は、戦争が末期に近づくと長野県に疎開し、収入のないままに、菊芋なるものを栽培してそれから黒砂糖のようなものをとる仕事をはじめた。

敗戦直後、昭和二十一年一月九日、上京した小栗は、九日と十日、池袋の江戸川邸に泊った。

「そのとき、小さい瓶に入れた見本をもらったが、非常に有難く思うほど甘いものではなかったことをおぼえている」

と、乱歩は記す。おそらく復員者のようであったろう小栗の哀れな姿が想像される。

「二人は、焼野原の中に辛うじて残った私の家の一室で、夜をふかして探偵小説のことを語った。彼と本格的探偵小説について、あんなに長時間語り合ったのははじめてだったと思う」

この年乱歩は五十二歳であった。五十二歳と四十五歳の作家が、夜を徹して本格探偵小説について論じ合うその純粋さよ！

そのとき小栗は、「江戸川さん、結局ぼくはあなたにかなわなかったですよ」と、つぶやき、小栗ほどの作家が自分に一目おいていると感じて、乱歩をよろこばせた。

しかし、小栗もまた、これから本格探偵小説を書くのだ、と希望に燃えていて、乱歩の眼から見ると、昔より肥って健康そうに見えた。

実際に彼は、新雑誌「ロック」に、『悪霊』なる作品を発表しはじめた。

「それから一ト月余りの二月十日に小栗君は長野県の疎開先で急逝した。原因は村の酒屋で飲んだ焼酎にメチルアルコールが入っていたためであった。あとで奥さんに聞いた話では、ほかに被害者が出ていないので、メチルと断定することもできず、酒屋は罰せられもしなかった様子である。小栗君はもともと心臓が弱かったので、ほかの人にはなんでもなくても、小栗君だけにはこたえたのかもしれない」

戦争は、それが終っても、実に馬鹿らしい後遺症を残して、この鬼才を奪い去った。――これも、もう少し生かしておきたかった一人。

梅原北明（一九〇一――一九四六）

昭和初年、雑誌「グロテスク」をはじめ艶本出版で警察に挑戦した怪男児も、「三十スギレバタダノ人」（子息正紀の評）太平洋戦争中は軍にとりいってアルコールをもらい、インチキウイスキー製造にはげんだのはいいが、敗戦後も友人たちが、「お前の出番だ」と煽ったのに、ただ酒を飲んで花札ばかりやっていた。

昭和二十一年三月の花札で、麻雀の九連宝灯に匹敵する四三（死相）の手役がはいったので、妻に赤飯をたかせて、仲間にふるまった。その十日後に彼は死んだ。汽車の中でうつされたシラミによる発疹チフスのためであった。

小栗虫太郎と同年に生まれて同年に死んだわけだが、これも別の意味で竜頭蛇尾の人生であった。

三島由紀夫（一九二五――一九七〇）

「ある晩、八時半か九時ごろだったが三島さんがやって来た」

と、数寄屋橋のレストラン「四季」の料理長志度藤雄は

いう。

「いつも奥さんや子供さんが一緒のこともあって、来ると決まって『やあ、志度君』と気さくなのだが、そのときは若い男の人と二人連れで、『やあ、今晩は』と、どことなく元気がなくて顔色もさえなかった。

『先生、だいぶ疲れてますね』

と言うと、

『そうかね』

と、小さな声だった。ふだんは明るい人で、よく世間話をしたのに、その晩に限ってむっつりしておった」（志度藤雄『一料理人として』）

その翌日の昭和四十五年十一月二十五日午前十一時ごろ、三島と「楯の会」の青年四人は、東京市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監室にはいり、陸将益田兼利と雑談し、三島は携行した日本刀、関の孫六を見せたりしていたが、突然部下と共に益田に襲いかかって、ロープで椅子にくくりつけ、その物音を聞いて駈けつけた自衛隊の将兵数名に、日本刀をふるって斬りつけ、追い返した。

それから三島は、所在の自衛隊員らを前庭に集めることを命じ、午後零時ごろから、みずからバルコニーに出て檄文をまきちらし、演説をはじめた。

「……自衛隊は魂が腐ったのか。武士の魂はどこへいったのだ。自衛隊は永遠にアメリカの傭兵として終るのか。生命尊重のみで、魂は死んでもよいのか」

しかし、前庭に集められた約八百人の自衛隊員には蛙のつらに水で、彼らはただあっけにとられ、かえって弥次を飛ばす始末であった。十分間ばかりで三島は演説をやめた。

「今こそわれわれは、生命尊重以上の価値の所在を、諸君の眼に見せてやる。天皇陛下万歳」

といいすてて、彼は総監室に戻り、制服の上衣をぬぎ、正座して、短刀を両手に持ち、気合をいれて左脇腹に突き刺した。

隊員の森田必勝が介錯したが、三太刀斬りつけてうまくゆかず、苦痛のために三島は舌を噛み出した。別の隊員古賀正義が、代って三島の頭部を斬り落した。ついで森田が割腹し、古賀がただ一太刀で介錯した。

三島の辞世「散るをいとう世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜嵐」

彼は、彼の美学によって自分の死を創作した。それこそが彼の目的であったと思われる。

「あの自衛隊に乗り込む前の晩で、一緒に来た若い人は、三島さんの首を斬った人だった」

と、志度はつづける。

「三島さんが、どういうつもりであの晩わたしのところに食べに来たのかは、もちろんわたしにはわからない。しかし、あの晩のどこか疲れ果てたような表情は、いまでも強く印象に残っている」

梶山季之（一九三〇——一九七五）

「君は、肺に大きな空洞をあけながらも、朝六時に起きるや、お茶の代りにビールを飲み、飲みつづけながら、午後六時までに五十枚以上の原稿を書き、それを編集者に渡すと銀座にゆき、サントリー・オールドの水割を午前零時まで飲みつづけた。酒場にいる君のまわりには、常に、友人か、若いジャーナリストたちがいた。君の饗応であった。十余年間の、銀座がよいで、君は、いったい、どれだけの友人や後輩やジャーナリストに饗応したのだ？　おそらく、延人数にして二万人以上であろう」（柴田錬三郎）

死の直後、こう書かれた梶山季之は、昭和五十年五月四日、黒いカバンを持って家を出た。夫人が、「伊豆？　それとも？」と訊いたのに対して、

「どこをさまようか、さすらいの旅に。……」

と、おどけていい、六日か七日には帰る、といった。伊豆には別荘があるが、これが梶山が旅行するときのいつもの調子であったので、夫人はさして気にとめなかった。

五日、梶山は何くわぬ顔で同伴者とともに香港の空港におり立ち、ただちに水中翼船でマカオにゆき、遊んで、六日、また香港に戻り、マンダリン・ホテルにはいった。

そして、七日正午ごろ、ホテルで突如大量の吐血をした。救急車でカノッサ病院に運ばれ、輸血を受け、また点滴を受けた。

九日に、急を聞いて夫人と十三歳の娘美季が到着したとき、梶山はもっと設備のよいクイーン・メアリ・ホスピタルに移され、美季に、治療中の歯のことなどを尋ね、意識ははっきりしていた。しかし、十一日朝、急に悪化して息をひきとった。

死因は肝硬変症によって生じた食道静脈瘤の破裂であった。

屍体はフォルマリン処置され、棺にいれられ、飛行機で帰った。

彼は自分の関係者に無際限のサーヴィスをした。その死を、彼ほど編集者から哀悼された作家は古今にない。

江利チエミ（一九三七―一九八二）

戦後昭和二十七年、「テネシー・ワルツ」で売り出し、美空ひばり、雪村いづみと歌の「三人娘」といわれた江利チエミは、昭和四十六年、俳優高倉健と離婚し、四十七年、付人をやっていた異父姉に財産の大部分二億円をだましとられるという災難を受けたころから落ち目になり、キャバレー出演やドサまわりの運命に落ちていった。

昭和五十七年二月十二日、彼女は熊本での地元呉服店主催のキモノ・ショーのアトラクションの出演を終えて昼ごろ帰京し、芝大門のすし屋で食事するとともに酒を飲んだ。彼女は酒好きで、高倉健との離婚の一因もその大酒癖にあるといわれていたが、このときも酔っぱらって、午後三時ごろ自宅のマンション高輪ヒルズ四〇六号室に帰るのも、木村マネージャーの助けをかりなければならないほどであった。帰ったあとも彼女は、ミルク入りウイスキーをしたたか飲んだ。

皮肉なことに、彼女が昭和五十三年に吹きこんだ「酒場にて」という歌が、このころややヒットの徴候を見せていた。

「好きでお酒を飲んじゃいないわ
家にひとりで帰るのがこわい私よ。……」

木村マネージャーは、彼女をふだん着のままベッドに寝させてひきあげた。

翌日午後二時半、木村マネージャーが、次の北海道帯広でのショー出演のため迎えにゆくと、チエミはきのうのパンタロン姿のまま、ベッドにうつぶせになって血まじりの吐物を吐いて死んでいた。

解剖の結果、死亡は同日午前七時ごろ、死因は、吐いたものが、泥酔のため気管につまったためであることが判明した。

彼女がかつて「ダーリン」と呼んだ夫で、このころ最大の人気スターとなっていた高倉健は、その葬儀に姿を見せなかった。

四十六歳で死んだ人々

親も、友達も、みんな死んでゆきました。それくらいのこと、私にだって出来るでしょう。
――田中澄江――

ザヴィエル（一五〇六―一五五二）

一五四九年（天文十八年）来朝し、はじめて日本にキリスト教を伝え、二年後の一五五一年、日本を去って、インドのゴアに帰ったフランシスコ・ザヴィエルは、こんどは中国に布教すべく、翌一五五二年八月末、広東近くの上川島に上陸した。

当時中国は厳重な鎖国政策をとっていたので、ザヴィエルはひそかに広東にはいるべく、中国人の密貿易商人と交渉中、十一月十二日、肺炎にかかって高熱を発し、身を切るような北風が吹きすさび、屋根から凍った月も見えるようなあばら家の中で、十二月三日午前二時に息をひきとった。

彼の死に際しては、期待されたような何の奇蹟も起らなかったが、死後に奇蹟は起った。

彼の屍体は石灰をいれた棺にいれられてゴアに運ばれ、聖ポーロ寺院に祭られたが、いつまでたっても腐らず、生けるがごとくであったので、信者の一女性が、足の小指と薬指をかみちぎって持ち去ったのをはじめ、一六一四年にはローマのイエズス会本部から、この聖者の右腕を切って送れという命令があり、数年後には、さらに内臓も摘出して送れという命令があった。送られた遺骸の一部は断片に分けられて、ヨーロッパの各寺や信者たちに配られた。

いまなおゴアの天主堂に残るザヴィエルの遺骸の、一八五九年（安政六年）当時の調査記録では、「遺骸は収縮して長さはわずか四フィート半（約一メートル三十八センチ）しかない。頭蓋の右側はわずかに毛髪の残った頭皮で覆われ、左側はまったく剝脱している。顔面は暗色の乾いた皮膚で覆われ、前歯のうち下の門歯が一枚欠けている。右腕はない。腹壁は乾いて暗色をおびた皮膚で覆われている。右足

の第四、第五の指はなく、残っている指も、骨までグザグザになっている。信者の接吻のためと思われる」とある。「食人種」に伝道に来たつもりの聖フランシスコ・ザヴィエルは、白人のキリスト教徒によって食べられてしまったのである。

山田長政（一五八四――一六三〇）

素性は沼津藩大久保家の駕籠かきと伝えられる山田仁左衛門長政は、慶長の終りか元和のはじめごろ、シャム（いまのタイ）に渡った。当時はまだ鎖国前で、東南アジア各地には、日本人が集団的に渡航して、日本人町を作っていた。

彼はシャムの日本人を集めて勇猛な傭兵部隊を編制し、国王のために働いて、シャム南方の六昆、すなわちマレー半島のリゴール州の支配者となり、「侯爵・将軍・リゴール」と呼ばれるに至った。元和七年（一六二一年）に幕府に書簡を送って来たので、はじめて日本にもその名と事蹟が知られた。

しかし、その後シャムのアユタヤ王朝の権力闘争に巻きこまれ、一六三〇年、王位簒奪者オークヤ・カラホムから送られた刺客に暗殺された。たまたま戦いで傷ついていた足に、毒を塗った膏薬を貼られて殺されたのである。一六三〇年といえば日本では寛永七年にあたるが、一六三三年説もある。

国連総会議長をやったワン・ワイタヤコーン殿下の『タイ外交史』によれば、「長政自身は王朝に対する忠誠行為と考えてしたことだろうが、外国人でタイの政治に関与することはとるべき道でなく、彼の毒死もその酬いである」とある。

なお長政の死亡年齢も、四十七歳説そのほか異説がある。

由比正雪（一六〇五――一六五一）

家康埋骨の霊地久能山と駿府城を奪うべく、正雪が駿府入りした慶安四年七月二十五日には、すでに江戸に残した一味から訴人者があって、この陰謀は発覚していた。

この陰謀の詳細については、しかし謎が多い。

その夜、正雪が泊っている旅籠屋梅屋は捕手に包囲されたが、駿府町奉行落合小平次は、正雪を生きたまま捕えようとして、何度も別の口実で呼び出しをかけたが、正雪は応じなかった。

二十七日早朝になって、やっと正雪が大戸の外に姿を現わした。羽二重の衣服に籐巻柄の刀をさし、杖をついていた。そして役人たちに、この仰山な騒ぎは何のためかと静かに訊いた。役人が、ともかくも奉行所に出頭するように、というと正雪は、それでは出頭つかまつるから暫時支度の間お待ちを、と、うなずいて奥へ消えた。

大戸の中で、「乗物乗物」など呼ぶ声がし、役人たちが待っていると、突然何か異様な物音が聞えたので、あわてて踏みこんでみると、座敷では正雪たちがいっせいに自害していた。

高山彦九郎（一七四七――一七九三）

天下にさきがけ尊皇を鼓吹して巡遊した高山彦九郎は、筑前久留米のある郷士の家に十日ばかり泊り、三日間外出したのち、また帰って来たが、家人に屏風を貸してくれといい、その中で突如腹十文字にかき切った。

家人が驚いてその理由を訊くと、「おれが日ごろ忠と思い義と思っていたことが、いまみな不忠不義のこととなってしまった。いまにしておれが馬鹿であったことがわかった。それでかように乱心した。どうか天下の人々によろしくいってくれ」といって、死んだ。寛政五年六月二十七日のことであった。

その三日間の外出先はどこであったのか、そこで何が起ったのか、彼の自殺の理由はいまだに不明である。

彦九郎の死の六日前の六月二十一日に、やはり「寛政の三奇人」の一人で、かつて彦九郎のことを、「彼、泣癖あるのみ。泣のほか計の出ずるところなし」と評した林子平が死んでいる。

高野長英（一八〇四――一八五〇）

天保十年、崋山とともに蛮社の獄に連坐し、これで投獄された長英は、入獄七年目の弘化二年三月、小伝馬町の牢の火事を機として逃亡して、奥羽や相模や四国、薩摩など各地に転々と潜伏した。この間に彼をかくまったことが知られた者は、のちに追及されてことごとく惨澹たる目にあった。

逃亡後六年目、嘉永三年三月、ひそかに江戸に帰り、青山百人町に沢三伯という偽名で医者を開業した。彼は薬品で顔を焼いて変貌していた。

彼を追及した鳥居耀蔵はすでに職を追われ、彼をまった

く罪するに当らないことを知った老中阿部正弘や奉行川路聖謨は、彼を捕えても罰しない方針をきめていたといわれる。

しかるに、その方針がまだ徹底しない十月末、かつて牢獄で合牢となった一人の男が往来で彼を発見し、岡っ引に密告した。十月三十日の夕刻、七人の捕吏が長英宅を襲った。

彼は平生から離れのまわりに枯葉を敷いて警戒していたが、その葉を踏む音を聞いて、短刀をつかんで縁に出たとき、捕吏は跳躍して前後から組みついた。長英は一人の腹を刺し、もう一人の顔を斬り、返す刀でみずからののどをつらぬいて凄絶な最期をとげた。

シューマン（一八一〇——一八五六）

堂々とした体格を持ちながら、極度に非社交的で自閉的な一面のあったロベルト・シューマンは、若いころから傷つき易い神経を持ち、何度か精神異常の徴候を自覚していた。

一八五三年ごろから神経衰弱が甚だしくなり、仮面のように表情が乏しくなり、他人との接触を嫌悪し、愛妻クララさえも遠ざけ、降霊術の本など読みふけるようになり、デュッセルドルフ市音楽指揮者を解任された。

一八五四年二月二十七日、彼は家をぬけ出してライン河に投身したが、救いあげられ、馬車でボン近郊の精神病院に運ばれた。

彼は、精神及び肉体の力を急激に破壊され、毎日やっていることは、友人ブラームスから贈られた地図から、国や都市の名を拾い出して、アルファベット順にならべることくらいだった。（この『臨終図巻』の著者の作業もそれに似たところがないでもない）

一八五六年七月二十七日、妻のクララが最後に訪問したとき、シューマンはほとんど身動きせず、またそれまで数カ月、言語にならない声を出すばかりであったが、このときわずかに、「私は知っている」といっただけだった。

二十八日、彼はひどい全身痙攣に何度も襲われたが、クララとブラームスは、病室の小さなのぞき窓からそれを見ているよりほかはなかった。

二十九日、彼が死んだとき、そばにはだれもいなかった。クララが呼ばれて病室にはいっていったときは、すでに死後三十分を経過していると推定された。

シューマンの死因は、動脈硬化症による精神分裂病であ

ったと診断されているが、若年時から異常な徴候があったというところから見て、やはり動脈硬化以外の素質があったのではないか。

同じ年の二月に、同じドイツで詩人ハイネが死んでいる。

ボードレール（一八二一——一八六七）

ボードレールは、二十一歳のとき、元老院事務局長で、退職後絵を画いて余生を過した亡父の遺産七万五千フランを相続したが、二年間の「美的生活」でその大半を蕩尽して準禁治産者となり、以後一生借金だらけの生活を送った。

一八五七年、三十六歳のときに出版した詩集『悪の華』は公序良俗に反するとして罰金刑に処せられたのみならず、極めて少数の識者を除いては、この詩集の価値を認める者もなかった。

一八六四年、借金に追いつめられた彼は、その地獄から逃れるためと、また少しでも収入を得るために、ベルギーのブラッセルに文芸講演旅行に出かけたが、聴衆はほとんどなく、講演料も何分の一かに値切られ、彼はベルギー人が大きらいになった。それでも彼は債鬼の待つパリへ帰るわけにゆかず、依然ベルギーで講演旅行をしてまわらなければならなかった。

翌年七月十四日、友人に語っている。

「ねえ君、僕がものを書き出してから、一体どれだけの金を儲けたか知っていますか。あらゆる評論、詩、翻訳を合わせて、一万五千八百九十二フラン六十サンチームだ」

当時の貨幣価値を今に換算するのは難しいが、同時代日本の幕末期の一両が五フランに当るという。とにかくボードレールは、二十年前の若いころ、二年間で使った金の五分の一しか、自分の力では、一生に得られなかったことになる。

その年の暮ごろから彼の病気の発作は次第に烈しくなった。彼は四十歳のころから健康を害していた。それは梅毒によるものであった。

翌一八六六年、彼は友人に書いている。

「……この二十カ月、僕はほとんど絶えず病気でした。去年の二月には、烈しい頭痛か、刺すような鋭いリューマチが二週間つづき、十二月にはまた同じ症状を起した。この一月のある晩には、僕は酔っぱらいのように転んで、とんぼ返りしはじめ、家具にしがみついた。そして、胆汁や白い泡を吐いた」

一八六六年三月中旬、彼はベルギーのナミュールのサ

ン・ルー教会にゆき、突然また発作を起して石だたみの上に倒れ、それ以来半身不随と失語症の症状を起して、カトリック系の慈善病院にいれられた。

他家に再婚して、また未亡人になっていた母がフランスから駈けつけた。老いたる母は知人に知らせた。

「……舌は痺れていないのに、あの子は音の記憶を失ったのです。ノン、キ、キ、というのがあの子の発音できる言葉で、それを声を限りにさけんでいます。脳が軟化しているのは事実です」

失語症のくせに、神を冒瀆するような言葉をしきりに吐くので修道尼たちのひんしゅくを買い、七月に彼は母に付添われてパリに帰り、シャイヨーの水治療法の病院にいれられたが、病状回復せず、そのまま一年を過した。

翌一八六七年八月十五日には、シャン・ド・マルスで開かれた第二回万国博覧会の花火の音が、病室の窓にもひびいて来た。その万博には、フランス政府から招待された日本の徳川昭武公子らも見物に来ていた。

八月三十一日、彼は七十四歳の老母の手に抱かれて死んだ。

背徳の詩集と呼ばれた『悪の華』の芸術性が認められたのは二十世紀にはいってからで、彼の死後五十年を経てからのことであった。

伊丹万作（一九〇〇――一九四六）

草創期の日本映画界で、清新な名作「赤西蠣太」を作ったり、原節子の第一作「新しき土」をアーノルド・フランクと共同製作したり、太平洋戦争中「無法松の一生」の名脚本をかいたりした伊丹万作は、学歴は松山中学卒業に過ぎなかったが、映画の本質についての批評家としても、あるいはひろく人間、文明についての批評家としても、日本人には珍しいほど柔軟で独創的な、借りものでない思想を持つ、えがたい才人であった。

しかし、すでに昭和十三年三十八歳のころから肺結核のために病床に臥すことが多く、戦中に至って病は篤くなった。

青春時から貧しさを共にしながら、映画への夢と苦闘もまた共にし、そしてその死をみとった盟友伊藤大輔は記す。

「東京で発病して病臥三年、小康を得て京都へ移ることになり、貸家探しを引受けたが、病気が病気なので話が纏まらない。窮余、自分の住んでいた上京区小山北大野町の借家の持主に事情を明かして頼み込み、ある条件で伊丹へ貸

与の承諾を得て、入れかわりに自分の方が引越した。その家で私のただ一人の子供は生まれて死に、伊丹はそこに六年いて、死んだ。

引越した私の家には柿の木が二本あり、大粒の美事なのが枝もたわわに垂れて人目を惹くこと夥しい。物資の乏しい戦中戦後、子供たちにはかえって目の毒で不愍なので、完熟しない先に採りいれ、熟柿にしてから近隣へ配給するのを慣いとした。

長女のゆかりちゃん（当時十歳）が、お父様の様子が変ですから見て下さいと言って来たので、ようやく熟柿になったのを、五、六個選び出して持ってゆくと、常態に復して平静な様子なので、うちの柿の初物だが、どうだと訊くと、一ツ啜ろうかなと言う。それでは喰べいいようにと刃物を入れかけると、後にしよう、しばらくじっとしていたいと、眼を閉じて穏やかな呼吸が続くので、『家内が心配しているから、安心するように言っておいて直ぐ引返して来るから』と門を出て、表の通りへ踏み出した途端に、『小父ちゃん来てッ』と長男の岳彦君（後の俳優伊丹十三・当時十三歳）の追うて出る声。飛んでかえると、呼吸が不調で心配なのでと言う。

手首を執って見ると脈搏が間遠で、微弱で、それが次第にかすかになっていって、私の手の中で消えた」

昭和二十一年九月二十一日午後六時三十分。

この年の彼の句。

つめたさや我が墓にふる雨の音

中野重治はいう。「わたしは、日本の何十万という人々が、少なくとも五万人くらいの人々が、この人の死が大きい失いものをしたことをよく知り感じる必要があると思うものである」

一子の伊丹十三は、昭和五十九年、映画監督として名作「お葬式」を生み出した。

原民喜（一九〇五――一九五一）

昭和二十年一月に故郷広島に疎開した作家原民喜は、八月四日、前年九月に死んだ妻の墓に夏の花をささげた。命日はまだ来ないが、それまでこの広島が無事であるかどうか疑わしい、という漠然とした予感によるものであった。

二日後の八月六日、広島は原爆の閃光につつまれた。ちょうど便所にはいっていた原は、炎に追われて逃げ出した。

「スベテアッタコトカ　アリエタコトカ

パット剝ギトッテシマッタ　アトノセカイ」

彼はこの日、「精密巧緻な方法で実現された新地獄」をまざまざと見た。

二十一年四月上京して、「三田文学」の編集にたずさわったが、彼は幼少時から自閉症的な性格で、長じても社会生活にほとんど適応出来ず、やがてぽつぽつと原稿依頼の編集者が来るようになっても、友人丸岡明に口をきいてもらい、本人はそのうしろに黙って坐っているという状態であった。

ただ、近くのある少女と、本を貸してやったり夜食を恵んでもらったりする美しい交際があった。

人間恐怖症の限界に達したか、昭和二十六年三月十三日午後十一時三十分、彼は、吉祥寺・西荻窪間の線路にみずから身を横たえて生命を絶った。検視官が来て調べたとき、頭部も粉砕され、片足も切断された死体から、まだアルコールの匂いがしたという。

遺書の中に、右の少女にあてたものがあり、自分の荒涼たる人生の終りに奇蹟のようなよろこびを与えてくれたことに謝意を述べ、

「自分は雲雀になって空高く舞いあがってゆく」

と、あった。

ケネディ（一九一七――一九六三）

一九六〇年、四十三歳というアメリカ史上二番目の若さ（一位は日露戦争を調停した第二十六代セオドア・ルーズヴェルトの四十二歳）で、第三十五代大統領となったジョン・フィツジェラルド・ケネディは、一九六三年十一月二十二日、遊説先のテキサス州ダラスで、市内をパレード行進中、午後一時三十分（アメリカ東部標準時、以下同じ）狙撃されて死んだ。

撃たれたとき、オープン・カーには、夫人のジャクリーンと、ジョン・コナリー知事が同乗していた。

六・五ミリの銃弾は首のうしろからはいり、右肺を傷つけ、気管を裂き、のどからネクタイの結び目を切って外へ飛び出し、その弾はまだ飛んで、コナリーの背中、胸、右腕、左腿を貫通した。

「彼（ケネディ）はふざけているような顔をしていた。彼女（ジャクリーン）は、夫が記者会見でむずかしい質問を出されてまごついているときに、こんな表情を何度も見たことがあった。いま彼は、もつれた栗色の髪をかきあげるように、美しいしぐさで右の手を持ちあげた。しかしその動きも途中でとまった。手は弱々しく戻った。彼は頭にさわろうとしたのだった。だが、頭の上部はもはや失われていたのである」

「最後の銃弾はジョン・ケネディの脳の下部にある小脳を貫通した。夫のほうによりかかりながらジャクリーンは、夫の頭蓋骨の一片――白色ではなく肉色の――が飛び散るのを見た。血は出ない。しかし、次の瞬間、血は、ジャクリーン、コナリー夫妻、ケラーマン（護衛官）、グーリア（運転手）、座席の覆い、車に飛びつこうとするヒル（護衛官）そして沿道の歩道にまで飛び散った。うしろの座席の床には、手のひらほどの厚さに血がどくどくたまる。大統領の洋服は血に染まり、バラの花からも血がしたたっている。……」（ウィリアム・マンチェスター『ある大統領の死』宮川毅訳）

ライフルの弾丸は、現場を見下ろすことの出来るテキサス教科書会社の倉庫の六階から発射されたことがすぐに判明し、そこから出ていった犯人オズワルドを目撃した人間からの通報で、付近を捜索中だった警官隊の一人チピットは、午後二時十五分、オズワルドを発見し、連行しようとしてピストルで射殺された。しかし狂奔するパトカーは、二時五十分、オズワルドを再発見し、格闘ののち逮捕した。

ダラス警察署に留置され、訊問を受けた二十四歳の元海兵隊員、自称共産主義者、リー・ハーベイ・オズワルドは、二十四日午後、郡刑務所に身柄を移されるべく、地下の留置場からエレベーターで上ったところ、新聞記者や私服警察官にまじって待ち受けていたダラスのストリップ小屋経営者、ジャック・ルビーによって、「この犬め、大統領を殺しやがって！」というさけびとともに射殺された。

ジャック・ルビーは、翌一九六四年三月十四日、死刑を宣告された。一九六六年、この判決は、手続き上の誤りという理由で無効となった。しかしその翌年のはじめ、ルビーはガンのために死亡した。

ともあれ、犯人オズワルドの急死のために、その動機や背後関係も確定出来ず、またその後の弾丸二発説、三発説、四発説、犯人複数説、マフィア関与説、ＦＢＩないしＣＩＡ関与説、カストロ関与説などの種々の疑惑が生まれ、いまだに完全に払拭されていない。

四十七歳で死んだ人々

> 臨終の人間「神よ、世界の終りの日の最後の審判などいわないで、いま審判して下さい。なぜ、いま、私が……」
> 神「では、いおう、最後の審判がいまだ」
> ——山田風太郎——

ネルソン（一七五八——一八〇五）

一八〇五年十月二十一日正午過ぎ、ネルソンのひきいるイギリス艦隊は、トラファルガー沖において、ナポレオンのフランス艦隊と会戦した。このときに当ってネルソンが発した「英国は各員がその義務を遂行せんことを期待す」という信号は有名である。

海戦がはじまって一時間十五分過ぎ、旗艦の甲板で指揮していたネルソンは、ふいに左手を甲板につき、頽るように左側に倒れ、駈け寄った部下に、「やられた、背骨だ」といった。

夕刻に至って、英国艦隊の完勝であることが判明するまで、ネルソンが苦しみながら最も多く口にしたのは、愛人ハミルトン夫人と彼女に生ませた娘のことであった。

ハミルトン夫人は、元ナポリ駐在のハミルトン公使の妻で、育ちも賤しく、無教養で多情な女であったが、同時に絶世の美女で、うぶなネルソンは彼女を恋し、ついに姦通して子供まで生ませていたのである。

ネルソンは、絶命するに当って、従軍の牧師に、

「私は、ハミルトン夫人と娘のホレーシアを、遺産として祖国に遺します。どうか忘れないで下さい」

と、また繰返して息絶えた。

英国はネルソンの期待に応えなかった。

浪費家のハミルトン夫人がやがて窮迫して政府に願い出た年金下付は拒否され、彼女は牢にまではいる運命におちいり、十年後、彼女がカレーの陋巷で死んだとき、だれもが、それが英雄ネルソンの恋人だった女性だとは知る者もなかった。

新島襄（一八四三——一八九〇）

明治二十一年元旦、新島は同志社にゆく途中、烈しい動悸がして歩行出来なくなるという事件があり、また四月二十二日、井上馨邸での学校資金募集のための集会にも演説中倒れるという事件があった。

ベルツ博士の診察を受けた結果、心臓が悪いという診断を受け、彼は完全な静養生活か、死を覚悟してもなお働くか、その二途のうち後者を選んだ。

それでも、自分の死後の妻の八重子の生活を思い、友人に三百円送って、これでマッチになる樹木を植えつけ、将来そこから上る収益で暮させてやって欲しいと依頼した。

以後彼は、しばしば倒れつつ、大学と教会のことで東奔西走したが、二十三年一月十一日、暮から泊っていた大磯の百足屋という宿屋で腹痛を起し、痛み去らず、十七日に東京から医者を呼んで、腹膜炎と診断された。

それは急速に悪化し、二十日には、夫人と、元弟子でちょうどその日国民新聞創刊の披露宴をひらいていた徳富蘇峰も駈けつけた。

新島は、同志社のことその他についての遺言を、高い声の演説口調で、二時間にわたってしゃべり、徳富が筆記した。

二十二日朝、新島はそばの人に、

「吉野山花咲くころは朝な朝な心にかかる峯の白雲」

という歌を書かせ、しばらくして、

「天を怨みず、人を咎めず」

と、いった。

その日、多数の関係者とともに、小田原から伊藤博文、大磯から渋沢栄一なども見舞いに来た。新島はいちいち握手した。

二十三日午前三時ごろから危篤におちいり、午後二時二十分死去した。

川上音二郎（一八六四——一九一一）

壮士芝居の創始者たる川上音二郎は、最後までオッペケペーの壮士芝居臭から脱却することが出来ず、晩年は興行成績も総じてかんばしくなかった。その原因は脚本にあると考えた彼は、妻の貞奴とともに有馬温泉にこもってみずから新台本の執筆にとりかかったが、ここで腹膜炎を発し、大阪の病院に入院し、四升も腹水をとり出したが、経

過思わしからず、
「せめて自分の劇場で死なせてあげたい」
と発議した貞奴によって、大阪堂島の帝国座に運ばれ、明治四十四年十一月十一日の夜明け方、客のいない舞台の上で死んだ。

その最期は壮烈なもので「川上はパチリと眼を開き、数珠持つ手をあげて二、三度振り、何か指図するかと見えしが、莞爾と笑うて息絶えたり」（明治四十四年十一月十二日「大阪毎日新聞」）

会葬者一万人といわれる盛大な葬儀の途中、貞奴は二度も路上で失神した。

大正天皇（一八七九—一九二六）

「天皇陛下には御降誕後三週目を出ざるに脳膜炎の御疾患に罹らせられ、御幼年時代に重症の百日咳、腸チブス、胸膜炎の御大患を御経過あらせられ、そのために御心身の発達に於て、幾分後れさせらるる所ありしが、内外の政務に日夜、大御心を悩ませられ給いしため、近年に至り、目下の御身体の御模様においては御変りあらせられざるも、御脳力漸次御衰えさせられ、殊に御発語の御障害あらせらるる為、御意志の御表現甚だ御困難に拝し奉るはまことに恐懼に堪えざるところなり」

大正十年十一月、この宮内省発表の「天皇陛下御容態書」とともに、大正天皇は事実上退位し、摂政が置かれた。摂政裕仁は時に二十歳であった。

大正天皇はこの時点においても体重十八貫（六十七・五キロ）あり、外見上はまったく健康体であった。しかし、いつもボンヤリ考えこむような姿勢で、自分から口をきくということがなくなっていた。大正十五年八月、葉山御用邸に転地してからは、自分一人で歩行も出来ず、終日ベッドで暮していた。そしてついに沈下性肺炎を起して、十二月二十五日崩御された。

病気の本態は、いまも明らかでない。おそらく脳の結締組織が肥大し、脳細胞を圧迫するという妖病「アルツハイマー」ではなかったかといわれる。

小山内薫（一八八一—一九二八）

日本の新劇の先駆者となった小山内は、大正九年十二月二十五日、みずから監督した松竹映画「路上の霊魂」の軽井沢ロケ中に、突然倒れた。

その後、大正十三年に築地小劇場を作った彼は、昭和三年の同じく十二月二十五日、日本橋偕楽園における上田文子（円地文子）の処女戯曲『晩春騒夜』上演記念会の招待宴で、突如また倒れ、急死した。長年にわたる演劇運動の過労の結果と見られた。

これについて谷崎潤一郎は、『高血圧症の思い出』の中で、動脈瘤という病気は九分九厘まで梅毒が原因であると聞いている、と述べたあと、次のごとく書いている。

「……小山内薫氏の病気が動脈瘤であった。小山内氏の場合はヨーロッパ仕込みの極めて悪性なものが原因だったに違いなく、宴会の席上俄かに瘤が毀れてしまった。（中略）その時の小山内氏の苦しみ方は相当凄いものであったと云う話も聞いた」

小山内はかつて内村鑑三を「父」と呼んだほどの内村の弟子であったが、のちに信仰を捨て内村のもとを去った。その後、内村がしばしば小山内のことを口にするので、弟子の斎藤金次郎が小山内宛に「先生はいまでも貴方のことを追想し、その幸福を祈っておられます」と手紙を書いた。そのことを聞いた内村は激怒して、「背教者にいらざる手紙を書いたものだ。お前は誤解している。その手紙をとり返して来い」と厳命した。斎藤は驚いて、小山内のところへいって、その手紙をとり返して来た。小山内が急死したのはその翌日のことであった。内村は斎藤に、「君のあの手紙は、小山内にとってよかったか悪かったか、わからんね」と、いった。

アラビアのロレンス（一八八八—一九三五）

本名はトーマス・エドワード・ロレンスだが、世にアラビアのロレンスと呼ばれる彼は、第一次大戦中、当時トルコの支配下にあったアラブの叛乱を指導し、ドイツと同盟を結んだトルコを破って大戦の帰趨に甚大な影響を与えた。砂漠の中の彼の戦いは驚天動地のものであったが、しかしその行為は彼にとって必ずしも祖国イギリスのためばかりではなく、祖国なきアラブ人への愛情のためであった。

赫々たる武勲をたて、風雲児の名声一世を圧しながら、戦い終るや、彼は名をかくし、文字通りの無名の一兵士として英国空軍にはいった。それは、戦争中彼がアラブ人に約束したアラブ独立を、英国政府が履行しないことに対する自責と、彼の不思議な孤独癖と、機械とスピードに対する異様なばかりの嗜好のためであった。

ロレンスは、死を怖れぬ冒険欲と、途方もない自己顕示

欲を持つ反面、人間ぎらいの隠遁性と自己抹殺欲とがうらはらになり、かつそういう自分を冷やかに見まもるもう一つの芸術的な自分を持つという複雑怪奇な人間であった。

一九三五年二月、十年の兵役満期で除隊になったロレンスは、かねてから念願していた通りドウセット州のクラウズ・ヒルのコテイジに隠栖したが、五月六日に彼はこんな心境をみずから記している。

「いま何をしているかって？　僕にもわからないのだ。朝が来て、日が出て、やがて夜が来て、僕も眠るのだが、何をしたか、何をしているか、何をするつもりなのか、僕自身にもわからない。秋が来て、木から落ちる一枚の木の葉、つまりそれだ、いまの僕の気持は」（中野好夫『アラビアのロレンス』より）

ちなみにロレンスは、一生結婚はおろか、女性との性の交渉は一切なかったといわれる。

一週間後の五月十三日、彼は一人の友人から、「いまヒトラーと交渉出来るのは君ひとりだ、そのことについて是非面談したい」という手紙を受けとり、その友人と昼食の約束をする電報を打ちに、オートバイで郵便局へいった。若いころから彼は、時速百五、六十キロで車やオートバイを飛ばすのを無上の快とするスピード狂であった。

その帰途、村道で彼は、自転車に乗った肉屋の小僧を避けようとしてハンドルを切りそこね、オートバイとともに転倒し、頭部を強打して意識を失った。

すぐに彼は近くの陸軍病院に運ばれたが、かつてアラビアの砂漠の戦いや、航空兵時代に、戦傷だけでも九度、航空事故七度、骨折は三十三カ所、肋骨骨折だけでも十一回の経験を超えて生きて来た超人的な肉体は、さすがに、というべきか、それにもかかわらずあっけなく、というべきか、六日後の五月十九日朝、ついに昏睡からさめないまま、肺炎と心臓衰弱をひき起して、絶命した。

夢野久作（一八八九——一九三六）

玄洋社系の政界の大黒幕といわれた杉山茂丸の子として生まれた彼は、家庭の複雑さから、農園の経営、僧侶、謡曲教授、新聞記者など変転の生活を送ったが、大正十五年、『あやかしの鼓』を発表して以来、『押絵の奇蹟』『氷の涯』などを書き、探偵作家として独自の世界を開拓していった。

しかし、彼が十年の歳月をついやし、渾身の力をふるって書きあげた巨篇『ドグラ・マグラ』はまだ出版してくれるところもない作家的地位にあり、ようやく昭和十年一月

に、自費出版にこぎつけた。

その年七月、父茂丸が脳溢血で急死した。

怪物といわれ、九州、東京にわたって混沌たる生活を営んでいた父の死の後始末は、律儀な久作を疲労困憊させた。やっと九州の墓地に父の遺骨を葬り、彼がふたたび上京したのは、昭和十一年二月二十七日、すなわち二・二六事件の翌日のことであった。

三月十日、アサヒ・ビールの重役林博が、父に関する清算書を持って訪れた。同時に、これで久作は、それまでの彼の人生に圧倒的にのしかかっていた父とのかかわりあいも清算されるはずであった。

彼は朝から散髪にゆき、風呂にはいり、紋服に袴をつけて、その客を迎え、挨拶した。

「今日は、良い日で、あは、は、は、は——」

と笑ったとたん、突如彼は両手を高くあげ、うしろへ倒れた。

客の驚愕した声に、隣室の継母や義妹がかけつけ、久作が父と同じ脳溢血の症状を発したことを直感した義妹は、足袋はだしで庭に飛びおり、前日ふった雪を手ですくって来て久作の頭部にのせたが、彼はすでにこときれていた。

政界の怪物たる父に対し、彼は探偵小説界のデーモンといわれていたが、この急死は夢野久作を「未完の大器」の世界へ運び去った。

コルベ神父（一八九四——一九四一）

一九三〇年（昭和五年）長崎に来て布教につとめたポーランドのカトリック神父、マクシミリアン・コルベは、六年後の一九三六年、故国の「聖母の騎士会」修道院長になるために呼び戻されたが、三年後の一九三九年、ポーランドに侵攻を開始したドイツ軍のために捕えられ、アウシュヴィッツ収容所に送りこまれた。

言語に絶する強制労働の苦役の中に、コルベ神父は同囚の人々を励ましつづけたが、一九四一年七月末、一人の脱走囚が出たために、懲罰として何十人かのポーランド人が「飢餓刑室」に送りこまれることになった。

でたらめに選ばれたこの死刑囚たちの一人に代って、コルベ神父が進み出た。収容所長のカール・フリッチが「このポーランドの豚野郎、何のつもりだ。お前は何者だ」といった。

「私はカトリックの司祭で、あの人の代りに死にたいと思います。私はもう若くはありませんが、あの人には奥さん

と子供がいます」

と、神父は答えた。しかし彼が「あの人」と呼んだのは見ず知らずの男であった。

「飢餓刑室」に入れられて、二週間の絶食後、意識を持って生きていたのはコルベ神父だけであった。収容所長はかんしゃくを起して、神父の静脈にフェノールを注射して絶命させた。一九四一年八月十四日午後零時五十分であった。

コルベとともに来日して布教に当ったボアデスワフ・ゼブロウスキー修道士は、日本にとどまってゼノ神父と呼ばれ、孤児貧民の救済に奔走し、『ゼノ死ぬひまない』という伝記まで書かれたが、一九八二年（昭和五十七年）四月、九十二歳で昇天した。

同年十月、コルベ神父はヴァチカンで聖者の列に加えられた。

カミュ（一九一三――一九六〇）

二十九歳のときの作品『異邦人』、三十四歳のときの作品『ペスト』などで、四十四歳にして文学賞としては史上最年少でノーベル賞を受賞したアルベール・カミュは、一九六〇年一月四日、一通の招待状を受けとり、出版業者でもあり友人でもあるミッシェル・ガリマールと同乗して、南フランスからパリへ帰る途中、プチ・ヴィルブルヴァンという小さな町のはずれで、高速で走っていた車がスリップし、樹木に激突し、即死した。運転していたガリマールは重態となり、これも数日後病院で死亡した。

カミュは前年に、「自分の人生は始まったばかりだ」と語った。汽車で帰るつもりもあったらしく、彼のポケットの中には、パリ行きの汽車の切符がはいっていた。

四十八歳で死んだ人々

> 生が終って死がはじまるのではない。生が終れば死もまた終ってしまうのである。
>
> ――寺山修司――

聖徳太子（五七四――六二二）

推古二十九年十二月に、太子の母が死に、翌推古三十年正月、太子も病み、さらにその看病にあたっていた膳妃も病んで、二月十一日その妃のほうが先に死に、翌二十二日に太子も歿した。この相つぐ死は何か急性の伝染病によるものと思われるが、たしかなことは不明である。

不明といえば、太子の行蹟そのものがすべて伝説の煙につつまれていて、例の「十七条の憲法」や「日出づるところの天子」云々の国書をはじめ不確かなことが多い。紙幣の肖像もあてにならないといわれる。しかし、当時一世から讃仰された賢明な太子であったことはまちがいないらしい。

しかし、それにもかかわらず、太子の死から二十一年後、その子山背大兄王とその一族は、蘇我入鹿のためにみな殺しの悲運に逢った。さらに二年後、その入鹿も、中大兄皇子とその懐刀中臣連鎌子すなわちのちの藤原鎌足のクーデターによって倒されるのだが、入鹿による山背大兄王の死そのものも鎌足の陰謀であって、法隆寺は、その陰謀のために滅んだ聖徳太子及びその一族の怨霊のたたりを鎮めるために、藤原氏によって再建された、というのが、梅原猛氏の『隠された十字架』の見解であるが。……

上杉謙信（一五三〇――一五七八）

天正六年春、謙信は関東へ出陣のため動員令を発し、春日山城を出撃しようとする二日前、三月九日正午、厠へいって昏倒し、人事不省におちいった。そして、十三日の午後二時ごろ息をひきとった。脳溢血と思われる。

しかし、晩年よく食べたものを吐いたというから食道ガ

ンという説もある。

織田信長（一五三四——一五八二）

天正十年、中国陣にみずから乗り出すため、五月二十九日、安土から京の本能寺まで出て宿営中、六月二日、明智光秀の謀叛の兵に襲撃され、信長自身弓をはなち槍をとって戦ったが、もはや天運つきたと覚悟し、侍女たちを逃がしたあと、火をかけさせて猛炎のうちに自刃した。

当時日本にいた伴天連ルイス・フロイスは報告する。

「明智の兵は、内部にはいって信長が手と顔を洗い終って、手拭で清めているのを見て、その背に矢を放った。信長はこの矢を抜いて、ナギナタをとってしばらく戦ったが、やがて腕に弾創を受けて、室にはいり戸を閉じた。ある人は彼が切腹したといい、ある人は宮殿に火を放って死んだという」（『イエズス会日本年報』）

「人間五十年、化天の中をくらぶれば夢まぼろしの如くなり」その五十年を待たず、信長数え年四十九歳。

——死は大半の人にとって挫折である。しかし、奇妙なことに、それが挫折の死であればあるほどその人生は完全型をなして見える。

信長こそその大典型。

真田幸村（一五六七——一六一五）

元和元年五月七日、大坂城最後の戦いに、徳川方越前兵と死闘中、討死した。

「真田、思うほど戦い、馬より下り、床机に憩うところに、越前の士西尾仁左衛門馳せかかって突かんとす。真田莞爾として、我は真田幸村なり、御辺の相手に不足なし。いまさら戦うべきにあらずと兜をぬぎて首をのべて討たる」（『鉄醬塵芥抄』）

「真田は、五月七日の合戦にも、家康卿の御旗本さして一文字に討ち込む。家康卿のおん馬印臥さすること、異国は知らず日本にはためし少なき勇士なり。ふしぎなる弓取なり。真田備えおる侍を一人も残らず討死させるなり。合戦終りて後に、真田下知を守りたる者天下にこれなし、いっしょに討死させるなり」（『山下秘録』）

淀　君（一五六七——一六一五）

元和元年五月八日正午ごろ、大坂城山里曲輪の糒蔵で、みずから火をかけて、秀頼らとともに炎の中で死んだ。助命運動があったにもかかわらず、家康側から鉄砲を打ちかけ、自殺に追いこんだという説もある。

何にしても大坂城とともに滅ぶことは、誇り高き淀君の覚悟の前であり、かつは冥界の秀吉も何より望むところであったろう。

それにしても、一世の美姫淀君とその騎士真田幸村は、同年に生まれ同年に、すなわち同じ年齢で死んだのである。

渡辺崋山（一七九三——一八四一）

崋山が「蛮社」（蘭学研究会）に加わったのは、日本の前途を憂える一片の知的良心からだけであったが、そのために「反動」の化身鳥居耀蔵に憎まれて、天保十年いわゆる蛮社の獄に連坐するに至った。からくも死はまぬがれたが、在所の三河の田原に永蟄居を命じられた。

彼の一家の生活は悲惨をきわめた。田原藩士とはいうものの、江戸に生まれて江戸に育った崋山は、なれぬ手に鍬をとってみずから耕作し、母は麻を績み、妻は糸車をまわしたが、体格の大きい彼が短い期間にみるみる憔悴したほどの窮乏ぶりであった。

それを気の毒がった江戸の門人たちが、画会をひらいて、その収益を送って生活の一部にした。ところが、このことがまた悪意ある小人たちの指弾するところとなって、ついに君公にまでお咎めが及ぶであろうという噂を立てさせた。誠実無比の崋山は追いつめられた。

天保十二年十月十一日、彼は物置で腹を真一文字にかっさばき、返す刀でのどをついて、自刃をとげた。遺書には「不忠不孝渡辺登」とあった。この不忠不孝はまさに断腸の文字である。あとには数え年七十の老母以下妻子たちが残された。

十一月五日の検屍書要約。

「同人屍骸は瓶に入れ候上、四尺四方の箱に入れ石灰にて詰めこれあり候。臍下左の方より右の方へ横に六寸ほど引きまわし候切疵一ケ所、咽右の方より左耳の下まで突きつらぬく疵一ケ所。月代髭ともに長くのび、身体腐爛はつかまつらず、もっとも日数を経候につき、面部その他総身一円に黒く色つき候。腹の疵の臓腑出で、衣類へかたく附きおり候」

これほど誠実ですぐれた人間が、これほど悪意にみちた狂信者のために、これほど悲惨な死に追いこまれた例は珍しい。

大久保利通（一八三〇――一八七八）

明治十一年五月十四日朝、福島県令山吉盛典が裏霞ヶ関の内務卿大久保邸を訪れたとき、大久保は昂然として、

「明治第一期の武力統一期はこれで終り、これからは内治興隆の十年にはいる。余の真骨頂はこの第二期にある。第三期はおはんたち後進にまかせよう」と語ったといわれる。

このあと大久保は、午前八時出勤しようとして、いつものように玄関でまだあかん坊の娘芳子を抱きあげた。彼はただ一人の女児である芳子をことさら可愛がっていたのである。ところがこの朝芳子は異常に泣いてしがみつき、父から離れなかった。やむなく大久保は彼女を抱いたまま馬車に乗り、玄関前をひとまわりしてからあかん坊を下ろし、馬車を出させた。（大久保利謙『孫の描いた大久保利通のプロフィル』）

その足で大久保は、過ぐる西南の役における陸海軍の将兵に手ずから勲章を与えるべく、太政官へ向った。朝からドンヨリ曇って、いまにも雨が落ちて来そうな空模様の朝であった。

その馬車が、土牆にはさまれた坂道となっている紀尾井町一番地にさしかかったとき、待ち受けていた六人の刺客が刀を抜いて殺到した。彼らは元加賀藩士島田一郎をはじめとする、西南の役に対する措置その他政治すべてにおいて大久保を非とする男たちであった。

島田一郎の獄中談。

「大久保の馬車の来かかるとたん、長連豪は一刀に馬の前肢を薙ぎたるに、馬はなおも一散に走りて数間をゆき過ぎるにぞ、こは仕損じたりしかと思いし折柄、脇田巧一が馬の前額に二の太刀を斬りつけたれば即座に倒れたり。

ならびし別の一馬も進み得ざりしかば、余は大いに力を得て、ツツと馳せ寄り、右の方より馬車の扉をひらきて二刀まで刺し通せしそのときに、大久保が余を睨みし顔の凄さ、恐ろしさ、苦痛のゆえか無念ゆえか、その面色は今に忘れず。

折しもまた左の方よりもだれなるか、二刀三刀刺しつらぬき、然して馬車よりひき出せしときは、もはや命も絶え絶えなりしが、なお七足八足ヒョロヒョロと歩みゆきしはまったく気のみ残りしなるべく、このときみなみな乱刀にてさんざんに斬りつけ、ついに止めを刺しおえたり」

実にその頸には真横から短刀を突き刺し、そのままにしておいたという。

彼らはズタズタにした大久保の屍体に唾を吐きかけ、返り血に染まったままの姿で宮内省に出頭自首し、七月二十七日、市ヶ谷監獄でみな斬刑を受けた。

大久保は殺されたとき、前年彼が殺したともいうべき畏友西郷の手紙を懐中していたといわれる。

――その数日前、内務少輔前島密は大久保邸を訪れ、雑談中、大久保から「いやな夢を見た。西郷と崖の上で格闘し、いっしょに崖下に落ちたのだが、おれの頭蓋骨が割れているのに、中の脳髄がピクピク動いている夢だ」という話を聞いた。この日、太政官で凶報を聞いて現場に馳せつけた前島は語る。

「……暫くありて漸く気を復し公の遺骸を点検せしに、肉飛び骨砕け又頭蓋裂けて脳の猶微動するを見る。……これ果して真耶夢耶」

なお五月十九日に行われた大久保の葬儀に、儀仗兵の指揮官を勤めたのは、その西南の役で軍旗を奪われたものの、許されてこのとき歩兵第一連隊長となっていた乃木希典中佐であった。

三木清（一八九七――一九四五）

三木清は、昭和二十年三月、警視庁から脱走した共産主義者高倉テルを一晩泊め、洋服と金を与えて送り出した。

三月二十八日午前十時ごろ、三木は岩波書店の二階で小林勇と話していると、うしろから肩をたたかれた。「警視庁から来た」と、二人の戦闘帽をかぶった男が落着いた声でいった。

三木は治安維持法違反の罪で警視庁に留置されたのち、東京中野の豊多摩刑務所に送られた。そして、戦争が終っても、ひどい疥癬と栄養失調と腎臓病のためなお刑務所内に横たわっていて、九月二十六日、だれもみとる者のない独房で、寝台からひとりころげ落ちて死んでいた。

カポネ（一八九九――一九四七）

背はわずか百六十五センチ、体重八十五キロ。

ひらべったい鼻、分厚く垂れた唇、こぶのような首にしゃがんだような大きな頭、つき出したあご、左頬の傷痕、モジャモジャの真っ黒い眉。

ふだんの動作は鈍重に見えるが、いったん戦闘に移ると豹のように素早い。
　これがアル・カポネという男であった。ナポリから来た移民の子としてニューヨークのスラムに生まれたカポネは、やがて一九二〇年からの禁酒時代のアメリカで、闇酒密売の総元締となり、シカゴのギャングの帝王となった。
　彼は同業のギャングのライヴァルをかたっぱしから斃していった。相手と握手してその右手を封じて殺したシェークハンド・マーダー、警官に化けて七人の親分衆をならばせ、いっせいに機関銃でなぎたおしたいわゆる「聖ヴァレンタインの大虐殺」等。――もっとも、これらはほとんど乾分たちにやらせたことで、彼自身はちゃんとアリバイを作っていた。「大虐殺」のときは、フロリダで地方検事と話していたという始末だ。
　それでもカポネは、彼自身の手で二十人ないし六十人を殺し、少くとも四百件の殺人の指揮をとったといわれる。
　暗黒街の凄じい殺人戦で、闇酒密売のみならず、賭博場経営、売春業、ユスリ、タカリ等で巨利を得た彼は、いちじはシカゴの市政、警察までも制圧し、悠々と逮捕をまぬがれて「夜の大統領」とさえ呼ばれた。
　そのくせ彼は、家庭では美しい妻や子供たちを愛し、スポーツファンで音楽を好み、貧しい人々には惜しみなく恵む紳士であった。
　が、そのカポネも、一九三一年、三十二歳のとき、「事業」からの引退を声明したにもかかわらず脱税の罪で検挙され、懲役十一年と巨額の罰金を宣告されて入獄することに至った。
　彼は一日も早く出所したかったので、囚人たちのストライキにも参加せず、そのために怒った囚人仲間から鋏で刺されたほどであった。が、このがまん強い模範囚は、ある日、監獄の食堂で転んでから、意味不明のことを口走るようになった。梅毒が進行し、頭に来たのである。
　一九三九年十一月、四十歳でやっと出所したときは、健康がいくらか回復していた。以後彼はマイアミの別荘でひっそりと暮したが、しばしば言葉と意識が不明瞭になることがあった。
　一九四七年一月二十五日の朝、卒中につづく肺炎で、彼は家族にみとられて死んだ。タタミの上で往生できたのは意外な幸運であったが、死後彼の弁護士は「カポネは無一文で死んだ」と国税庁に申告した。どうやらそれは嘘ではなかったらしい。

下山定則（一九〇一――一九四九）

　昭和二十四年、ＧＨＱから国鉄の人員整理を命じられた国鉄総裁下山定則は、七月四日、その第一次整理三万七百人の通告を出したが、翌五日朝、車で上池上町の自宅を出て本庁に向った。
　途中彼は運転手に、千代田銀行に寄ることを命じ、また三越百貨店に寄ることを命じた。
　九時三十分、三越南の駐車場にはいった車から下りた下山は、五分間ほど待ってくれ、と運転手にいって、百貨店にはいっていった。それが、下山を知る人が下山を見た最後の姿であった。
　翌七月六日午前零時半ごろ、田端発松戸行貨物列車が、雨ふりしきる国鉄常磐線五反野近くのレール上に異常物体を認め、綾瀬駅到着後、西新井署に報告した。
　午前二時ごろ現場に急行した署員たちは、雨の中に五体散乱した下山総裁の屍体を発見した。
　これが自殺か他殺か、いまだに謎となっている。

林芙美子（一九〇三――一九五一）

　林芙美子は戦後の大流行児として執筆に忙殺され、持病の心臓弁膜症が昂進した。
　昭和二十六年六月二十八日、「主婦之友」に連載する『私の食べ歩き』取材のため、同誌の編集者高下益子とカメラマン同伴で銀座の「いわしや」にゆき、そのあと芙美子の発意で、深川の「みやがわ」にゆき鰻を食べ、午後九時半過ぎに高下記者に送られて帰宅した。
　ところが午後十一時過ぎ、書斎兼寝室の中で苦悶しはじめ、胃の中のものを吐き出すとともに呼吸がやんだ。
　「朝日新聞」連載の『めし』をはじめ、「中央公論」、「婦人公論」、「主婦之友」に連載中の作品はことごとく未完となった。
　三年前の六月、太宰治の葬式にいった彼女は、太宰が死んだ玉川上水の現場にいって「あたしなら、こんな濁った川では死なないわ。……あたしなら、海にする」とつぶやいたのだが――人間は、自分の欲するようには死ねない。
　葬儀委員長となった川端康成の挨拶。
　「故人は、自分の文学的生命を保つために、他に対して時

にはひどいこともしたのでありますが、しかしあと二、三時間もたてば、灰となってしまいます。死は一切の罪悪を消滅させますから、どうかこの際、故人をゆるしてもらいたいと思います」

　この「他に対するひどいこと」とは、彼女の猛烈なライヴァル意識から、特に同性の女流作家を傷つける言動の多かったことをさすものであろうが、しかし芙美子は歌う。

――
花のいのちはみじかくて、
苦しきことのみ多かりき。

寺山修司（一九三五――一九八三）

　昭和三、四十年代、歌人、詩人、作家、劇作家、評論家、舞台演出家、映画監督と、あるゆるジャンルで前衛的な活躍をして、それぞれの世界でそれなりの衝撃を与えた寺山修司は、昭和五十七年一月、最後の映画「さらば箱舟」の撮影にはいった。最後の、というのは彼はすでに医者から肝硬変を宣告され、彼自身もスタッフもそれが遺作となることを予知していたからである。

　秘書の田中未知は語る。

「健康なスタッフたちでさえ、順次倒れてゆく強行スケジュールの中、寺山の疲労は全身の浮腫となってあらわれ、顔には肝臓病特有の色素沈着が生じ、どす黒い土気色となっていた。現場には寝椅子を持ち込み、準備待ちの間は少しでも横になるといった状態の中で撮影は続行され、無事終了出来たのである」

　そして十二月、主宰する劇団「天井桟敷」公演も行い、そのあと演劇休止宣言をして自宅療養にはいった。

　が、翌年四月、急性腹膜炎を併発して、危篤状態で入院した。一時容態はもちなおしたが、結局敗血症を起して五月四日午後零時五分に死んだ。

　寺山の肝硬変は、青年時、ネフローゼの治療のための血漿輸血から発した肝炎が、尾をひいた結果であった。

「肝硬変の宣告を受けたとき、何歳まで生きたいか、と先生（医者）から聞かれて、あなたは『六十まで』と答えた」

　と、かつて彼と八年間結婚生活をし、離婚後も「友だち」としてつき合っていた女優の九条映子は語る。

「遺言を残す間もない病状の急変でした。でも、その時間があったとしても、あなたは遺言など残さなかった、そんな気がします。

　学生時代、腎ネフローゼで入院した八人部屋から、生きて出られたのはあなたひとり。それ以来、いつも『死』から逃げてました。『死』とかかわるものすべてを恐れていました。生命保険を忌み嫌っていました。人と会うのは大好きで、たくさんのかたがたに親切にしていただきましたが、たとえそうした人たちが亡くなっても、お葬式には決して行こうとはしませんでした。

　戒名は付けないことにしました。位牌は白木のまま、それがあなたの心に添うものだと思ったからです」

　しかし彼は「遺言」を残していた。そしてその遺言は彼女の考えた通りのものであった。

　死後すぐの「週刊読売」昭和五十八年五月二十二日号に、彼の絶筆となったエッセーが掲載されたが、タイトルは『墓場まで何マイル？』とあり、文章の末尾には、

「私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけは、はっきりしている。だが、だからといって墓は建てて欲しくない。私の墓は、私のことばであれば充分」と、あった。

　寺山は「天才」にちがいなかったが、活動があまり多方面に散乱していたために、死後すぐに、それらの影響力はたちまち消えるだろう、せめて残るのは、彼が十八歳のときに作った、「マッチ擦るつかのま　海に霧ふかし　身捨るほどの祖国はありや」以下一連の『チエホフ祭』と題する短歌だけだろうと評された（ただしこれも、他人の俳句を短歌にアレンジした剽窃歌集であるが）。果して如何。

「人間は中途半端な死体として生まれてきて、一生かかって完全な死体になるのだ」

――寺山修司――

四十九歳で死んだ人々

多病な私は何故生き残っているのだろうかと疑って見る。あの人は何ういう訳で私より先に死んだのだろうかと思う。

——夏目漱石『硝子戸の中』——

秦の始皇帝（前二五九——前二一〇）

はじめて中国を統一し、万里の長城を築き、阿房宮を作り、焚書坑儒という独裁者の先例を生んだ始皇帝は、一方で徐市という道士に不老不死の薬を求めて船出させたが、老と死はついにふせげなかった。いや、老いの来る前に死の運命を迎えなければならなかった。

皇帝の位にあること十年、揚子江沿いの南支一帯を巡遊し、都の咸陽へ帰る途中、山東の平原津で死病にかかった。コレラのような急激な時疫ではなかったかといわれる。

史記に、「始皇は、死を言うを悪んだので群臣あえて死のことを言うものなし」とある。

始皇帝はなお病をおして旅をつづけたが、七月、沙丘の平台で歿した。

天下大乱を怖れた帷幄の臣は、その喪を伏せ、轀輬車と名づける一種の箱馬車に遺骸をのせ、奏事、食事、生けるものに対するようにして旅をつづけたが、九原あたりから屍体の悪臭甚だしく、車に一石の干魚をつんでその匂いをごまかして、やっと咸陽に帰還した。

その埋葬に際しては、彼の愛妾にして子なき者はことごとく墳墓に生き埋めにされ、この秘事を知っている工匠たちもまた生き埋めにされた。

始皇帝の死後四年にして、秦は滅んだ。

近年に至り、始皇帝陵をめぐっておびただしい兵馬俑が発掘され、その数と精巧さは人々を驚倒させた。

加藤清正（一五六二——一六一一）

慶長十六年三月二十八日、二条城で家康と秀頼が会見したとき、伏見から二条城まで清正は、秀頼の乗物のそばに

青竹ついて徒歩でお供をした。この会見が無事に終ったのち、清正は伏見の宿所で、若き日賤ヶ岳の手柄で太閤からもらったという短刀をとり出し、きょうの会見で万一のことがあれば、この刀で働くつもりだったが、つつがなく終って重畳の至り、とつぶやいて落涙したという。

そのあと清正は領国肥後へ帰ったのだが、その船中から「気色例ならずして次第々々に病重り、熊本へ着城の二三日過ぎては舌不自由にして物いうことならず」という状態になり、六月二十四日午前二時ごろ息をひきとった。

二条城の会見に雄姿を見せてから三カ月後のことである。そのため後世はもとより、そのころから変死説すなわち家康による毒饅頭説が伝えられた。

彼は豊臣家存続のために苦心した。

しかし彼の死後四年にして豊臣家は滅び、死後二十年にして何の罪もないのに加藤家も改易となった。清正の苦心は、徳川の意志の前にはなんの効果もなかったのである。

藤田東湖（一八〇六——一八五五）

安政二年十月二日は、細雨がときどきふる天色朦朧たる日であった。午後十時過ぎ突如地震が来た。

マグニチュード六・九、江戸の死者七千、家屋倒壊焼失一万四千三百四十六戸といういわゆる安政の大地震である。

小石川の水戸藩邸にあった藤田東湖は、来客を玄関から送り出し、座敷に戻ったときこの震動にあい、いったん老母を助けて庭に出たが、老母が火鉢に湯をかけずに出た、火の用心が悪い、といってまた屋内にはいっていったのを、母上あぶない、といいながら、彼もまたそれを追ってはいった。そのときまた大震動が来て家が倒壊し、彼は鴨居におしつぶされて死んだ。

このとき彼は老母を庭につき飛ばして助けたとも、あるいは母を抱いたまま自分は鴨居に打たれて死んだともいう。いずれにせよ、母親を助けて死んだことはまちがいない。

島津斉彬（一八〇九——一八五八）

安政五年四月、井伊直弼が大老となり、六月、強引にいわゆる安政の仮条約に調印すると、朝幕間は泥沼のような混乱におちいった。

このときにあたって薩摩の島津斉彬は、事態を収拾すべく、大軍をひきいて上洛しようとした。

彼は、当時の諸大名中もっとも賢明な大名、いや江戸時

代を通じて第一の名君といわれた人物で、西郷を抜擢(ばってき)し、手足のごとく使い、このときも西郷をさきに京へやって、薩軍駐屯の適地を求めさせていた。

彼自身は、鹿児島の天保山で、上洛にそなえ、毎日、兵の訓練にあたっていた。

「七月八日は特に炎暑のひどい日であった。彼は朝から気分がすぐれなかったが、この日は城下諸隊の合同演習のある日だったので、おして天保山に出、終日馬上で兵士の間を馳駆(ちく)したが、演習の終る頃には益々気分が悪くなり、終るとすぐに帰城した。

これが死病の発端であった。翌日から発病し、腹痛と下痢がひどかった」

と、海音寺潮五郎は書く。病気は赤痢であったといわれる。

容態は日を追うて悪化し、十五日、かつていわゆる「島津騒動」のもととなった異母弟の久光を隔意なく呼んで、自分の死後の処置を指図し、翌十六日の暁方、ついにこの世を去った。

海音寺は記す。

「天が彼に十年の余命を貸したなら、維新史はよほど違ったものになったろうとは、歴史家が口をそろえて言うところだ。その斉彬が最も思い切ったことをなそうとした時に急死したのは、天命というよりほかはない。（中略）少くとも、安政の大獄や、その後の血なまぐさい犠牲だけはなくてすんだであろう」

まさにその通りである。かりに彼を明治元年まで生きさせたとしても、彼はまだ五十九歳のはずであった。

斉彬も、もう少し命をやりたかった史上珍しい例の一人。

海音寺は後に、やはりこれはお由羅(ゆら)派による毒殺ではなかったかという。

唐人お吉(とうじんおきち)（一八四一——一八九〇）

安政二年八月、米国最初の駐日総領事として、書記の若いヒュースケンとともに伊豆下田の玉泉寺に着任した五十二歳のタウンゼント・ハリスは、翌年の五月、下田の船大工の娘で十六歳の娘お吉を傭いいれたが、なぜか三日間で解雇した。

ハリスの日記には、お吉のことは一語も出て来ない。当時ハリスは健康を害していたので、看護婦名義で日本女性のメイドを要求したのだが、下田奉行から因果をふくめられたお吉がそれなりの態度を見せたので、潔癖なハリスが当惑してひまを出したともいわれるが、とにかくお吉が玉泉寺に奉公したことも、彼女が三日間ハリスのもとで暮したことも、日本側の記録に残っている。またヒュースケンのほうは明らかに妾(めかけ)としてお稲という娘を傭ったことも事実である。

三日間でも、以来お吉は「唐人お吉」と呼ばれて、好奇と軽蔑の眼をあびなければならない身の上となった。

その後彼女は、横浜に出て鶴松という大工と同棲したり、また下田に戻って女髪結(かみゆい)になったり小料理屋をひらいたりして明治初年を過してゆくが、大酒のため身を持ち崩し、落魄して、かつての相棒お稲の恵みを受けるような境涯におちいった。

そして明治二十年一月ごろから病気にかかり、二十三年三月二十三日、下田のある淵に身を投げて死んだ。その淵はいまでもお吉ヶ淵と呼ばれて存在する。

伊藤左千夫(いとうさちお)（一八六四——一九一三）

大正二年七月二十八日、左千夫は、かつての門下の島木赤彦が長男に眼の手術を受けさせるために信州から上京し、神田和泉町の小川病院に入院したのを見舞いに訪れた。

左千夫は、子供の病気のことについて、二、三尋ねたあと、いきなり、

「君の歌はてんぷらだ。そういえば、啄木の歌なども、てんぷらのてんぷらで読むにたえないじゃないか」

と、いい出した。

てんぷらとは、うまいけれども品格がない、という意味である。

赤彦は、上京、入院手続きの疲れと、暑さまけで胃をこわしていたのとで、反論する元気がなく、

「先生のおっしゃることに、私も言い返すことがあるのですが、いま腹が痛いので、反論はあとでします」

と、やっとのことでいった。すると左千夫は、

「今、私は君に、歌についての本当の精神を語っているのだ。腹痛ぐらいがまんしろ。こっちは本気でいっているのに、腹痛ぐらいががまん出来ないのか」

と、熱っぽくしゃべりつづけた。腹の痛い赤彦は黙って聞いているよりほかはなかった。

このころ左千夫は生活的にもゆきづまり、抵当にはいっている自宅をまた人に売るという状態であった。

それから二日目の七月三十日午後二時、左千夫は突然脳溢血で倒れ、昏睡状態におちいり、午後六時に息をひきと

った。

身長一メートル七十センチ、体重七十五キロという体格の持主で、それまで十二人の子を一人の妻に生ませた左千夫の急死は、知人たちを驚かせた。

上諏訪に避暑にいっていた、これもかつての弟子の斎藤茂吉は、急報により真夜中の道を、まず下諏訪の友人島木赤彦の家まで走った。

ひた走るわが道暗しんしんと堪えかねたるわが道暗し

茂吉『赤光』

そのあと帰京した茂吉は、八月一日、死せる左千夫に対面した。

「寝棺におさめる前に、清い湯で先生を拭いてあげた。先生の男根は僕が想像して居たよりはもっと小さかった」

と、茂吉は書いている。茂吉自身、自分の男根の小さいのを甚だ気にしていたので、このことが特に眼にとまったらしい。

死後、九月十日に、十三人目の子供が生まれた。ただし、この男の子は十八日に夭折した。

夏目漱石（一八六七——一九一六）

明治四十三年、漱石は胃潰瘍のため修善寺に転地療養中、八月二十四日夕刻、突如大吐血をした。

「強いて寝返りを右に打とうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続しているとのみ信じていた。その間には一本の髪毛を挟む余地のない迄に、自覚が働いて来たとのみ心得ていた。程経て妻から、左様じゃありません、あの時三十分許は死んで入らしったのですと聞いた折は全く驚いた」

と、漱石はそのときの「死」の体験について書く。

「其間に入りこんだ三十分の死は、時間から云っても、空間から云っても経験の記憶として全く余に取って存在しなかったと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とは夫程果敢ないものかと思った。そうして余の頭上にしかく卒然と閃いた生死の対照の、如何にも急激で且没交渉なのに深く感じた」（夏目漱石『思ひ出す事など』）

「死」はおそらくかくのごときものであろう。ただ——この病気は六年後、結局漱石の命を真に断つことになるのだが、そのときは漱石はついに真の「体験」を書くことは出

来なかったのである。

漱石は晩年、糖尿病と神経痛と皮膚病とノイローゼと、そして依然として持病の胃潰瘍に悩まされていた。

この肉体的状況のもとに、大正五年五月から「朝日新聞」に『明暗』の連載がはじまった。

八月二十一日付、芥川龍之介、久米正雄宛書簡。

「……僕は不相変『明暗』を午前中書いています。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねています。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いていると大いに俗了された心持になりますので三、四日前から午後の日課として漢詩を作ります」

漱石最後の漢詩は十一月二十日夜に作られたもので、その最終の二行は、

「眼耳雙つながら忘れて身も亦失ひ
空中に独り唱ふ白雲の吟」

という、知らずして二旬後のおのれの運命を予言するかのような二行であった。

その翌日の二十一日、午前中日課通りに『明暗』の百八十八回を書き終り、次の原稿用紙の右肩に189としるしたのち、漱石は胃の調子の悪いのを押して、築地精養軒の辰野隆の結婚披露宴に出席し、夜帰宅してからますます具合が悪くなった。

二十二日昼、女中が薬を持って書斎にはいったところ、机に原稿をひろげたまま一字も書かずに倒れているのを発見した。これから漱石は臥床し、以後衰弱を加え、数度人事不省に陥るに至った。

十二月九日午後五時過ぎ、漱石はひどく苦しみはじめ、自分の胸をあけて、

「早くここへ水をぶっかけてくれ。死ぬと困るから」

というような意味のことをいい、看護婦が水をふくんで吹きかけると、「有難う」といい、そのあと意識を失ってしまった。

——この「死ぬと困るから」という言葉が漱石にあるまじき言葉だとして後に問題になった。しかし、人間が「死ぬと困る」理由はただ自分自身が困るからだけではない。

漱石の場合、これをただ凡人なみに家族を案じてのものであったと解釈しても、充分同情出来る。このとき漱石には三十九歳の妻鏡子と、十七歳の長女筆子を頭に幼い子供が六人もあった。そして彼は死ぬ当時、自分が永遠のベストセラー作家たる存在になろうとは、おそらく予想もしていなかったにちがいない。漱石は大いに心配しつつ死んだのである。

一方、漱石が死のちょうど二年前に、知人への手紙に「……嘘でも冗談でもない死んだら皆に柩の前で万歳を唱えてもらいたいと本当に思っている」と書き、また前年に別の知人への手紙に「……私は死んで始めて絶対の境地に入ると申したいのですそうして其絶対は相対の世界に比べると尊い気がするのです」と書いたのも、これも漱石個人にとっては大真実であったにちがいない。

「私が病室になっている書斎に入ったとき、まず目を打ったものは、病床の周囲に黙って立っている黒い人々の群であった。而して其人々が目を注いでいる中心に、先生の死床が白く横たわっていた」（久米正雄『漱石先生の死』）

「奥さんは（娘たちの）涙が先生の心を激動させるのを慮って、それを静かに禁めた。すると今迄黙って病床に横っていた先生が『泣いてもいいよ』と落着いた声で仰った。而して其泣いている娘が、誰であるかを聞きたがった。奥さんは黙っていた」（久米正雄『臨終記』）

「……今はただ皆黙って、先生の死を見凝めているばかりであった。黒く押し黙った人垣の中に、先生は時々頤を引くようにして、苦しい呼吸をゆるく刻んでいた。時々忘れるように呼吸が止る。其して思い出したように『ぎくり』と喉を動かされる。その喉の中で、微かに二三度痰の鳴る音がした。而して呼吸はだんだん静かになっていった」（久米正雄『漱石先生の死』）

「……今はとて夫人子達一々末期の水を捧げ給う。我等も相次いで捧ぐ。（中略）

其の鬚、其の口、其の歯、筆の穂先の一滴水に、先生、私の総てありと享け給え。私の心、此の時先生も師匠もなく、まして天下の文豪などいかにあるべき、唯、今将た再びその父を亡うの思いに外ならず。嗟。（中略）

飲泣満座、涙声室に溢る。嗚呼先生遂に逝かる。時に午後六時五十分、室外陰曇の日既に暮れて闇中寒風淅瀝たり」（松根東洋城『終焉記』）

「岩波茂雄氏は先生の亡くなられた晩に、憚りにおっこちた。（中略）岩波氏はそこの憚りに足を踏み外し、這い上った所を野上豊一郎氏と森巻吉とに見られたのだそうである。それで後から御馳走するからこの事は秘密と云う事になっていたのが、岩波さんの方で中中奢らないものだから、間もなく知れ渡った」（内田百閒『漱石先生臨終記』）

ああ、それにしてもあと数カ月の生命を与えれば、『明暗』は漱石の最高傑作として完結していたであろう。これこそ、もう少し生命をやりたかった最大の人。

十二月十日午後、東大病理解剖室で、長与又郎の執刀で

解剖された。

十二日、午前十時半から青山斎場で葬儀が行われた。新聞が葬儀の時間をまちがえて報道したにもかかわらず、会葬者は千余人に及んだ。

このとき芥川龍之介は葬式の受付をやっていて、ふと顔をあげた。「霜降の外套に中折帽をかぶりし人、わが前へ名刺をさし出したり。その人の顔の立派なる事、神彩ありと云うべきか、滅多に世の中にある顔ならず。名刺を見れば森林太郎とあり」

当日の鷗外の日記。「泥濘。夏目金之助の葬に青山斎場に会す。大山公邸に往き弔す」（註・十日大山元帥死去）

ゾルゲ（一八九五――一九四四）

ソ連コミンテルンのスパイでありながら、ドイツのフランクフルター・ツアイトンク紙の新聞記者として在日ドイツ大使館や日本政府中枢に近づき、太平洋戦争前、「日本南進す、北進せず」という重大な情報をソ連に送ったリヒアルト・ゾルゲは、昭和十六年十月十八日、スパイ容疑で警視庁に逮捕され、昭和十八年九月二十九日、死刑の判決を受けた。

通訳にあたった東京外語教授植田敏郎は語る。

「高田裁判長がゾルゲを前に呼び出して、

『主文、被告を死刑に処す』

と言った時に、ゾルゲはあの長身を少しわたしの方に曲げて、

『彼は何と言いましたか』

と、小声で訊ねた。わたしがそれをドイツ語に訳して告げると、彼は、

『ふふん』

と、言って、少しも取り乱した様子もなく、むしろ通訳したわたしの方がひどいショックを受けたくらいであった」

昭和十九年十一月七日、すでにB29が偵察の魔影を現わしている東京の空の下、巣鴨刑務所で死刑が執行された。何か言い残すことがあるか、といわれ、彼は「ない。何もない」と答え、それ以外何の言葉も身ぶりもなく、平然と絞首台に進んだ。

彼の死刑に立ち会った特高の湯田多聞は、絞首台の上でゾルゲが、

「赤軍

国際共産党

ソヴィエト共産党」と、日本語でつぶやいたのをきいたといっている。ゾルゲはそれらのために死ぬことを日本人に知らせたかったのだろう。

午前十時二十分、台が跳ね、十六分後、彼の死亡が確認された。

それは第二十七回ロシア革命記念日にあたり、スターリンが「日本は侵略国である」という最初のぶきみな宣言を投げた日と同日のことであった。

二十年後の一九六四年十一月五日、ソ連政府はゾルゲに最高ソ連英雄勲章を与えた。

なぜなら、「日本北進せず」というゾルゲの情報により、時あたかも独ソ死闘をつづける一九四一年のモスクワ攻防戦にソ連極東軍が続々投入されはじめ、ついに独軍総退却の戦勢を作り出したからである。

マーガレット・ミッチェル　（一九〇〇——一九四九）

地方紙の「アトランタ・ジャーナル」の読物記者という履歴はあるが、小説は書いたことのないマーガレット・ミッチェルが、『風と共に去りぬ』という南北戦争を題材とする壮大な物語を書きはじめたのは一九二七年、二十七歳のときであった。彼女はこの大長篇を、なんとラストの部分から書き出した。

それ以来、病気や怪我や自信喪失や、ジョージア電力会社に勤める夫との家庭生活の雑用に追われて、一九三五年に至ってもまだ未完成であったが、出来上った分を読んだ出版社マクミラン社が出版を申し込み、彼女はあわてて冒頭部分の最終稿を書きあげた。

彼女は五千部も売れてくれればありがたいと考えていたが、一九三六年六月『風と共に去りぬ』が発売されるや記録的なベストセラーとなり、その年の中にアメリカだけで百万部を超え、以後も全世界で無限と思えるほど売れつづけた。

それ以来彼女と夫ジョンは、映画化権や無断上演、海賊版などのトラブル、ピューリッツア賞受賞の騒ぎ、殺到するインタービューや講演の依頼、ファンとの応対、さらにはあらぬ中傷や裁判沙汰などに忙殺され、マーガレット自身の言葉によれば「気苦労の多い悪夢のような生活」におちいってしまった。

しかし彼女は、むろんただ歎いていたのではなく、自分

の権利を守るために悪戦苦闘し、かつその名声に満足し、愉しんでいた。

マーガレット・ミッチェルは二度と小説を書く意志を持たず、また書ける状態ではなかったが、なだれこむ巨額の収入は、彼女を『風と共に去りぬ』の上に安楽にあぐらをかかせる結果となった。マーガレットは自分の「版権保護者兼印税取立て主任」としての余生を過した。

一九四九年八月十一日の夜、マーガレットは夫のジョンとともに、『風と共に去りぬ』執筆時代から住みつづけているアトランタ市の映画館にイギリス映画「カンタベリー物語」を観にゆくために出かけ、八時半ごろ映画館近くの信号機のない交叉点を渡ろうとした。マーガレットは心臓を病む夫に腕をかしていたが、そこへ酔っぱらい運転のタクシーが走って来た。マーガレットは反射的に夫から離れて歩道のほうへ逃げ戻ろうとしたが、車は夫を避けようとして、逃げたマーガレットを轢いてしまい、七フィートも引きずった。

マーガレット・ミッチェルはすぐに救急車で病院に運ばれたが、五日後の八月十六日午前十一時五十分に息をひきとった。

堀辰雄　（一九〇四——一九五三）

すでに一高、東大時代から結核を病んでいた堀辰雄は、いくどか喀血しながら、抒情的な『聖家族』『美しい村』『風立ちぬ』などの作品を発表したが、昭和十九年、烈しい喀血のため、信濃追分に居を求めて病を養った。

「喀血というのは直前までわからないものですが、主人は永年の経験で、喀血しそうな気がすると、耳をあててごらん、と云います。私は胸に耳をあてて、胸がポコンポコンと鳴ってると、大急ぎで洗面器やら含嗽水やらチリ紙やらの七つ道具をそろえ、女中にも待機させます。……何しろ昭和二十一年以後は毎春喀血していたのです。今年に入ってからは血痰がとまらず、たびたび、小さな喀血をしておりましたが、五月二十七日の夜の『また出そうだ』が最後の言葉になってしまいました」（堀多恵子『堀辰雄看病記』）

昭和二十八年五月二十八日午前一時四十分、多恵子夫人にみとられて死去した。

坂口安吾（一九〇六―一九五五）

先天的な八方破れの性格と、それとうらはらな極度なはにかみのアンバランスから、酒乱あるいはアドルム中毒の狂態をくり返し、ついに税金を払わないと頑張って、坂口は伊東の自宅を税務署に差押えられ、昭和二十七年早々に群馬県桐生に移った。

その翌年の八月、妻の三千代が男の子を生んだときも、安吾は信州に取材旅行にいっていて、浅間温泉の旅館に呼んだ芸者を全身に痣が出来るくらい殴りつけて、愛児誕生の知らせを受けたのは、土地の警察の留置場の中であった。

子供が生まれてから、坂口はやや変った。家を建てようかとか、少し貯金をしようとかいい出し、これは結局口約束に終ったが、旅先からは必ず電話をかけて、子供の声を聞かずにはいられないようになった。

彼は以前から高血圧による肩凝りや足のだるさをしばしば訴え、よくアンマを呼んだが、体重八十キロに近く、肩の肉も厚くて、肩をもむにも大変な力を要し、坂口はすぐにカンシャクを起してアンマをどなりつけるので、そのうち桐生じゅうのアンマが、呼んでも容易に来なくなってしまったほどであったが、それだけに本人は体力に自信を持ち、三千代もその頑健さを信じていた。

昭和三十年二月、彼は「中央公論」の『安吾新日本風土記』執筆のため、高知に取材旅行に出かけ、二月十五日、桐生の家に帰って来た。

三千代は記す。

「いま考えれば貴方は死ぬためにもどられたようなものですね。十五日の晩おそくお勝手口の方からもどられて、『オーイ』と云ったのであわてて私はとび出して行きました。そしておどろいたのは、顔がちいさく茶いろく見えたことでした。つかれているなと思いました。鞄をあわてて受取ると、『坊やは』とお聞きになった。『ええ起きておりますよ、待たせておいたのよ』と答えると、よほど嬉しかったらしく、何遍も坊やを抱きあげながら、『よかったよかった』と、くりかえしおっしゃった」

十六日には朝から坊やを風呂にいれてやったりしたが、疲れがひどいらしく、アンマを呼んで床についたが、夜中には妻と子供にふとんをかけに起きて来た。

十七日の朝、自分でストーヴをつけたのを、三千代はうつらうつら知っていた。

「みちよみちよ、と二度ほど呼ばれて、声が少し変な感じ

だなと思いながら行ってみると、『舌がもつれる』といって、手まねで窓を開けることとストーヴに石炭を入れることを云われ、『いったいどうなさったの』といいながら、（中略）抱きかかえるようにしてその場に横にさせると、私の顔を見て何か云いたいように見えたのでしたが、言葉にはならなくて両腕をちぢめ、全身が痙攣しておりました」

安吾は脳溢血を起したのであった。

「それからお医者様が見えたときにはとうに意識は失っておられました。舌がもつれるとおっしゃった以外は私が何をいっても御返事もないし、いつから意識を失われたのかもわからない。お医者が二人で必死になってあらゆることをして下すったようですが、刻々に心臓は弱まり意識は再び戻りませんでした。

舌がもつれるとおっしゃってから一時間半ぐらいしかたっておりません。御臨終といわれても心臓がとまってしまっても、貴方の場合に限り死ぬなんてことが考えられるだろうか。死ぬなんて、こんなことで死ぬなんて。（中略）

それにしても貴方が亡くなる前日の二日間私たちにありったけのサービスをして下すったのは、もうお別れであったからでしょうか」（坂口三千代『クラクラ日記』）

山下清（一九二二―一九七一）

精薄児に生まれながら、長ずるに従って貼絵によって異常な美の世界を作り出して「日本のゴッホ」と呼ばれ、好んで裸に白い越中ふんどし、ぺしゃんこのリュック、ちびた下駄で各地を放浪し、その天真流露の発言に「裸の大将」と愛された山下清は、昭和四十五年四月、千葉の館山に旅行中、ホコリが眼にはいってこすったとき異常に出血し、ひどい高血圧であることが判明した。

「人間、死んだら何もできなくなるもんな、やっぱり」と、素直に考えた彼は、唯一のたのしみであった食事も、命じられるままに制限し、もう一つのたのしみであったプラモデルづくりもやめ、いちじは七十二キロあった体重も五十六キロまで減量したが、昭和四十六年七月十一日夜九時ごろ、練馬区谷原の自宅で、弟の妻の礼子がふと二階のアトリエをのぞくと、彼はじゅうたんの上に食べたものを吐いて、その中に倒れていた。

まだ意識があり、何時かと腕時計を見るようなしぐさをした。

医者を呼んだが、十二日の朝十時三十五分、息をひきと

った。脳溢血であった。

五十歳で死んだ人々

「あの連中も待っていることを承知の上で、それでも君は『死後の世界』があることを望むのか？」
——山田風太郎——

足利義満（一三五八——一四〇八）

足利三代将軍として、祖父尊氏にも成らなかった南朝の吸収合併をやってのけ、いわゆる足利時代を確立し、北山第——金閣寺はその中の一建築である——を作り、日本ではじめて巨大な七重の塔を建立し、晩年明帝から「日本国王」と呼ばれて大満悦した義満は、およそ日本の権力者として望み得るかぎりの栄華をつくした。

応永十五年三月には、北山第に後小松天皇を招いて二十

日にある歓待にあけくれた。四月二十七日には、天皇臨席のもとに御所で次男義嗣の元服式を行った。彼は将軍の名こそすでに長男義持にゆずっていたが、義持とは腹ちがいのこの次男義嗣を偏愛した。

この元服式の二日後に彼は発病した。咳が甚だしかったともいわれ、いろいろの行事が重なって疲労の余りともいわれる。

五月にはいると病勢悪化し、大々的に加持祈禱が行われたが、六日にこの気力精力ともに常人を絶した権力者はあっけなく死んだ。

朝廷では彼に太上天皇の尊号を贈った。生前なら義満はよろこんで受けたにちがいないが、義持はこれを拝辞した。父義満が犯した未亡人の娘を妻におしつけられた過去を持つ義持は、やがて父が夢中になった対明外交を断ち、父が偏愛した弟の義嗣を殺すに至る。

芭蕉（一六四四——一六九四）

元禄七年九月九日から芭蕉は大坂に来ていたが、何度かの句会の間、しばしば頭痛や腹痛に悩まされ、十月にはいると、一日二十回におよぶ下痢症状まで起すようになったので、五日、南久太郎町御堂前の花屋仁右衛門方の離れ座敷を借りて病床についた。赤痢であったといわれる。

度重なる下痢のため、十月八日も朦朧として床上に身を横たえていた芭蕉は、九日午前二時ごろ、隣りに寝ていた弟子の呑舟を起して、いま出来たという発句を書きとらせた。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

十日の朝、彼は行水して身体を清めたいといい出した。みなは懸命にとめたがきかず、やむを得ず三人の弟子が湯で身体をふいてやった。そのとき蒲団も寝巻も新しいものととりかえた。

「一生旅で過し、かねては草をしき土を枕にして死ぬ自分と覚悟していたのに、こんな立派な褥の上で、大勢の人々につきそわれて死ぬとは冥加につきる」

と、彼は涙を浮かべていった。

しばらくして、口が乾くと見えて、「梨を食べてみたい」といったので、ひときれを勧めたが、一口食べただけでやめてしまった。

夕方から熱が出、苦しいらしく、ときどきうわごとをいうようになった。

その夜彼は三通の遺言状を弟子にしたためさせた。自分

の草稿や書籍についての始末や、知人たちへの別れの挨拶などであった。

去来がおそるおそる辞世の句を問うと、芭蕉は、

「旅に病んでの句は、辞世のつもりではないが、辞世でないこともない。昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世だ。近ごろよみすてた句は、どれも辞世だと思ってもらいたい」

と、いった。

十一日に、前日から絶食していた芭蕉は、ふいに粥が食べたい、といった。

しかし十二日になると、もう下痢をするものがないくらい彼は涸れはててしまった。それでも、日のあたった障子に蠅のむれがとまっているのを、弟子たちがとろうとしている光景を見て、ある可笑し味を感じたらしく、

「何ごとにも上手下手はあるものだな」

と、いって、弱々しく笑った。

それから眠りにはいり、午後四時ごろ、「埋火のあたたまりの冷むるがごとく」息をひきとった。

『枯野抄』という作品で、漱石の死床の光景を頭に浮かべながら芭蕉の死を書いた芥川龍之介は、「……こうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵桃青は『悲嘆かぎりなき』門弟たちに囲まれた儘、溘然として屬纊に就いたのである」と、筆を閉じる。

弟子たちのまことの心は知らず、芭蕉自身は静かな死であった。

マラー（一七四三――一七九三）

ジャン・ポール・マラー。フランス革命モンターニュ派の、最も果断残酷なる指導者。

一七九三年七月十三日夕、短軀にして風貌醜怪な彼は、持病の湿疹治療のため、自宅の――「民衆の友」の名にふさわしい貧寒なアパルトマンであったが――薬品をいれた湯槽に入浴中、客の女性シャルロット・コルデーを引見した。シャルロット・コルデーは二十五歳の美しい女性で、あらかじめマラーに、カーン市におけるジロンド党の動静を報告するという手紙を送っていたので、彼もこれを引見したのである。

彼はシャルロットから、カーンのジロンド党の代議士の名を聞き、

「よし、いずれきゃつらをことごとくギロチンにかけてやろう」

と、つぶやき、湯槽の上に渡した板にのせた紙片に、その名を書きつけはじめた。

その刹那、シャルロットの手から黒檀の柄のついた匕首がひらめき、マラーは心臓から背へつきぬける一撃を受けていた。

西郷隆盛（一八二七――一八七七）

明治十年九月二十四日午前四時、夜明け前から城山に対して官軍の総攻撃が始まった。

午前七時ごろ、西郷は、幹部の桐野利秋、村田新八、別府晋介らとともに洞窟を出て、雨飛する弾丸の中を岩崎谷へ向った。

倒れ伏す味方を見て、辺見十郎太が、

「もう、ゆは、ごわんすめいか」（もういいのじゃありませんか）

といったが、西郷は「まだまだ」と首をふって歩きつづけた。しかし、百メートルばかり歩いたところで、弾丸飛びきたって西郷の股部と腹部に命中し、彼は倒れた。そこで、はじめて、

「晋どん、晋どん、もうここらでよかろう」

と声をかけ、地上に座し、東天を拝んだ。負傷のため輿に乗っていた別府晋介は輿から下り、

「そうじごわんすかい」（そうでありますか）

と、うなずき、白刃を抜き払って、

「ごめんなったもんし」（お許し下され）

と、さけんで、西郷の首をはねた。

それから、西郷の従僕にその首を埋めることを命じ、生き残った連中は岩崎谷に達し、官軍の集中射撃の中に全滅した。そのあと、豪雨が一洗した。

しかし、西郷の首は間もなく発見され、兵士の飲料用の桶の水で洗って、参軍の山県有朋のもとへとどけると、山県はそこに直立したまま、何とも名状しがたい表情で見つめていたが、「この鬚は二日前に剃ったくらいだろう」と、その鬚をなでて落涙した。山県は歌った。

「山もさけ海もあせんとみし空の
なごりやいずら秋の夜の月」

西郷の埋められた浄光明寺の墓はたちまち市民の運ぶ花で埋まり、そのころ夜な夜な空にかかっていた赤い火星は西郷星と呼ばれた。

そしてその後も、西郷が生きていてフィリピン独立運動に加わっているとか、ロシアに逃れて日本政府討伐の機を

待っているとかいう「英雄伝説」は長く執拗に民衆の間に残った。

ところで、この最後の日の二日前に、薩軍は西郷了解の下に、官軍に降伏打診の使者を送り、官軍から一蹴されたという奇怪な事実がある。徳富蘇峰も「此の最後に際して、此の如き使者を発遣したることは、返すがえすも遺憾であった」といっている。

人は最後の関頭に当って、突如として敵が寛大であり得るような妄想を抱くことがある。大西郷にしてなおこのような妄想にとらえられたのであろうか。――

なお、西南の役のころ、西郷は陰嚢水腫を病んで大きんたまであったという。

ニコライ二世（一八六八――一九一八）

このロシア最後の皇帝は、まったくついていない皇帝であった。

一八九一年（明治二十四年）日本に来遊して大津で津田三蔵に斬りつけられ、のち日露戦争に敗れ、さらに第一次大戦でも敗れて、一九一七年退位し、クリミヤに逃れたが、まもなくボルシェビキ一派に捕えられた。そして、ウラル山中の鉱山町エカテリンブルグへ移送され、イパチェフ館という建物に皇帝とその一家は追いこまれた。

一九一八年七月十七日の夜、彼らは地下室へ呼びこまれた。ユダヤ人の警備隊長ユロフスキーが宣言した。

「ニコライ・アレクサンドロヴィチ、お前を脱出させようとする者の陰謀は失敗した。それでお前はいまここで銃殺される」

「なんだって？」

と、皇帝がいったとたん、その胸にピストルが撃ちこまれた。

皇后は十字を切り、血友病の皇太子、四人の皇女たちはひざまずいたが、そのままことごとく虐殺された。

――以上が一応の定説になっているが、これが真実であったか否かについては、いまでも疑惑が持たれている。

後にその皇女の一人アナスタシアと称する女性が瀕死の世界から甦ったといって出現し、それがほんものか偽者か、長い間論議のまととなった。偽者であったら別だが、もしほんものであったとしたら、そして「自分は自分である」ということを他のだれも認めないとしたら、これほど悩ましい悲劇は人間界にちょっとあるまい。――彼女は、ついに認知されないまま、一九八四年二月、アメリカで八

十二歳で死亡した。

秋山真之（一八六八――一九一八）

日露戦争で東郷平八郎の名参謀とうたわれ、また「敵艦見ユトノ警報ニ接シ連合艦隊ハ直チニ出動之ヲ撃滅セントス、本日天気晴朗ナレドモ波高シ」という電文を起草した秋山真之は、晩年海軍大学長になったが、狷介鋭利の性格から、秋山は少し精神異常ではないか、と同僚から見られるような言動があった。

第一次大戦に際し、ヨーロッパ戦線を視察、帰朝後、第二水雷戦隊司令官として艦隊勤務についたが、大正六年冬、突然腹痛を訴えて帰宅した。ふだん子供たちにも「男は炬燵などにはいるものではない」と許さなかったのが、自分で炬燵にはいってあぶら汗を流した。盲腸炎であった。

秋山は部下の軍令部参謀清河純一大佐を呼んであぶら汗を流しながら、自分の考えた「日本が九州を失っても勝つ」兵略について語った。

そのあと彼は入院したが、手術せずに冷やして散らした。これがあとでいのちとりになった。

翌年の一月、箱根に滞在中、盲腸炎が再発した。一月下旬、小田原まで下りて知人山下亀三郎家の別荘にはいったが、当時小田原に盲腸の手術の出来る病院がなく、とかくするうちに腹膜炎を併発した。

遺児中は語る。

「山下邸に着いたときは、もう日が暮れかかっていた。二階の病室の次の間に入ると、母と健子（真之の兄好古の次女）が『間に合ってよかった』と父の枕元に案内した。

父は『よく来た』とふだんと変らぬ声で迎えたが、顔はやつれ、腹部が異様に腫れあがっているのが子供の目にもわかった。枕元には海軍士官二十名ほどが座しており、母や私たちが枕の横に坐ったとき、父の遺言が始まった。

十歳になったばかりの私には、海軍の方々への遺言はよく理解できなかったが、殆どが国防に関することのようだった。辛うじて理解できたのは『これからは飛行機と潜水艦の時代が来る。諸子はその研究に全力を注げ』という意味のことばで、苦しい息をつぎながらほとんど叫ぶようにいい残した姿は、今も目に灼きついている」

二月三日深更、彼はおはぐろどぶのような黒い血をかっと吐き、長男の少年大に、「お父さんは死ぬるんですよ」と、いった。

四日午前三時ごろ、枕頭に集まった見舞客たちに「みな

さん、いろいろお世話になりました。これからひとりでゆきますから」と、挨拶した。

それからしばらくして、「これは辞世というほどのものじゃないが」と、つぶやいて、

「不生不滅明けて鴉の三羽かな」

と、口ずさんだ。そして、太陽がようやく相模灘に上ろうとして水平線が紅に染まり出したころに息をひきとった。

島木赤彦（一八七六——一九二六）

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

諏訪に生まれたアララギ派の歌人島木赤彦は、大正十三年四十八歳のころから神経痛や胃痛に悩みはじめた。彼は知らなかったが、それは胃ガンに原因するものであった。

大正十五年一月帰郷して病を養ったが、三月に入って黄疸を併発した。彼は余病だと思っていたが、ガンが肝臓にも転移した結果の症状であった。

三月二十一日に、彼は前に「改造」に出した数首の歌を、「アララギ」のために改稿した。そのとき、

信濃路に帰り来りてうれしけれ黄に透りたる茎漬のいろ

という歌は、後年よく知られた、

信濃路に帰り来りてうれしけれ黄に透りたる漬菜のいろ

は

という歌に改められた。

またこの日、

わがいへの犬はいづこにゆきぬらむこよひもおもひいでてねむれる

という数日前に作った歌を長女の初瀬に書かせ、これが最後の歌となった。

東京から来た斎藤茂吉は、二十二日、二十三日の両日見舞いに訪れた。赤彦は炬燵につっ伏していたが、茂吉が「だいぶ痩せたなあ」というと、「冷静だ、極めて冷静だ」と答えたが、その顔面は純黄色で、縦横無数の深い皺を刻んでいた。

この二日、茂吉はほかの見舞客とともに、諏訪湖の寒鮒や鯉やしじみで接待されたが、それはすべて赤彦自身の心づくしから出たものであった。

茂吉はいちど帰京したが、今井邦子ら赤彦を尊敬する女流歌人らを連れて、二十五日、ふたたび諏訪へいった。

その間、二十三日、いちどラクそうに見えたので、娘の初瀬がそういうと「大敵が退散したから」と赤彦は笑った。

それは茂吉ほかの友人たちが去ったことをいったのだが、また彼は「来る人も遠いところをラクではないよ。感謝しなければならない」といった。またその夜、家族を枕頭に呼んで茶を飲ませ、「今晩おれはまいるかも知れない。これで解散だ」といった。

さて、二十六日の朝が来た。主治医に終焉が近いといわれて、茂吉ほか親戚知人ら四十余人が病床のまわりに集った。

茂吉は記す。

「赤彦君は稀に歯ぎしりをし、唸った。その唸が十ばかり続くと、息が段々幽かになって行った。そして消えるようになるかとおもうと、また唸がつづいた。それがまた十ばかりつづいてまた息が幽かになった。そのうち八時になったので、みんなが暫く休んで朝食をした。その間に赤彦君を看護っていたが、平安な顔貌に幾らか苦しみの表情が出て来た。それを僕が凝視していると、幾ばくもなくその表情が取れて行って、もとの平安な顔になった。ときどき唸があって、それが矢張り十ばかり続いた。九時に脈搏が触れなくなったので、居合せた人々が尽く枕頭に集った」

「赤彦君の安らかな顔貌は一瞬何か笑うに似た表情を口脣のところにあらわしたが、また元の顔貌に帰った。その時不二子さん（夫人）以下の血縁者がかわるがわる立って赤彦君の口脣を霑した。それから主治医伴さんの静粛な診査があり、赤彦君の息は全く絶えた。時に、大正十五年三月廿七日午前九時四十五分である」

「きょうは天が好く晴れて、雪がどんどん解けはじめている。友島木赤彦君はついに歿した。痩せて黄色になった顔には、もとの面影はもはや無いと謂っても、白きを交えて疎らに延びた鬚髯のあたりを見ていると、柿の村人時代の顔容をおもい起させるものがあった」（斎藤茂吉『島木赤彦臨終記』）

竹久夢二（一八八四——一九三四）

明治末から大正にかけて、いわゆる夢二式美人画で多くの青年子女を魅了した竹久夢二は、昭和にはいると、あまりにも多い恋の遍歴がスキャンダルとして世の指弾を受けたこともあって、急速に人気を失い、また商業美術の営業化にも失敗してゆきづまった。

昭和七年、新しい刺戟を求めて外国旅行へ旅立った彼は、あてにしていたアメリカで絵は一枚も売れず、つぎに渡っ

たヨーロッパでも失意の日を送り、あまつさえ、ここで結核を発病した。

一九三三年（昭和八年）三月十日、ベルリンでの日記。

「春めきて、外套の重さを感じる。舗道ではあるがせきやまず。煙草うまからず食事すすまず。……一日人を見ずもの言わず、このまま死ぬとも人知らず」

帰国後、彼が肺病でただ一人アトリエで寝ているということを聞いた正木不如丘（ふじょきゅう）博士が、自分の富士見高原療養所にはいることを勧めたが、夢二がためらっているのを見て、「金の心配なら無用だよ、癒ってから絵をかいてくればいい」というと、「それはありがとう。そうしてもらえるとありがたい」と、涙をこぼしながらうなずいた。

富士見高原療養所はそのころ実は火の車であったのだが、正木博士は夢二を施療患者扱いにすることはむろん、その気配も感じさせてはいけない、と看護婦たちに命じた。

夢二がそこにはいったのは昭和九年一月であったが、訪ねる人はほとんどなく、たまに見舞客があっても、彼のほうでことわった。そのくせ肉親の者がひとりも来ないのを、彼はひどく気にした。正木の見るところでは、肉親のだれかに逢いたいというより、ほかの患者にくらべ、見舞客のないことを、療養所の人々に恥じているように見えた。

「待てど暮せど来ぬ人を
宵待草のやるせなさ」

しかし、そう歌った若い日はすでに遠く、人生の寂寥（じゃくりょう）の時ばかりが彼を訪れていた。

当時の看護婦長遠藤ミサオはいう。

「身体の調子がいいと、カステラの箱などに絵をかいていました。でも、ずいぶん貧乏していたようで、だれひとりお見舞いに来ない、寂しい人でした。でも『ぼくはずいぶん身勝手な生き方をして来たから、こうして死ぬのが運命なんだよ』といって、お葉さん（最後の恋人）が結婚したという話にも、素直によろこんでいました」

夢二は生来無口な男であった。それがいよいよ無口になって、回診に来る正木不如丘にさえほとんど口をきかなくなった。気にいらない看護婦には横をむいて、食事の箸もとらなかった。

春の末から右手に帯状包疹（ヘルペス）を発した。これは激烈な痛みを伴う皮膚病だが、訊（き）かなければ本人は痛みを訴えなかった。これが治癒してから、正木が「手は大丈夫使えるよ」というと、無口な夢二が、「それはありがたい」と、眼をかがやかしてさけんだ。彼は絵がかけなくなることを何よりも怖れていたのだ。

しかし肺病はしだいに進み、彼はときどき看護婦に「死」の話をした。しかし、正木には話さなかった。

末期には物凄い悪臭を発する肺壊疽（えそ）を起し、黒い葡萄色の痰を半日でコップ一杯分も吐くようになった。

死ぬ前夜、夢二は涙を流して泣いた。それは肉親の者のついに来ないことをくやしがってであった。しかしそれは彼みずからまいたたねのせいであったのだ。

そして九月一日午後五時四十分、看護婦たちに手足を撫でてもらいながら、眠るように息をひきとった。（主として正木不如丘『夢二の死に方』による）

岡本かの子（おかもとかのこ）（一八八九——一九三九）

岡本かの子は三十代の終りごろから肥満しはじめ、それ以後軽度ながら二度脳溢血を起して卒倒した。しかも晩年の数年は公私多忙をきわめ、特に超人的な執筆で心身ともに疲労の極に達した。

昭和十四年一月末日、銀座に出たが気分悪く早々に帰宅しようとし、青山高樹町のバス停留所に下りたとたん、三度目の強い脳溢血に襲われて卒倒し、以後臥床をつづけた。二月十七日容態急変し、ただちに東大病院小石川分院に入院したが時すでにおそく、翌十八日午後一時半永眠した。夫一平（いっぺい）が一週間ほど喪を秘したため、さまざまの流説がながれた。

パリにいた息子の太郎は、二月二十四日夜モンパルナスのカフェから帰って、アトリエの扉からさしいれられた父一平からの電報を発見した。「カノコ、ビョウキ、カイフクノミコミ」

二十六日、また電報が来た。「カノコ、キトク、キボウヲステズ」

二十八日、三度目の電報が来た。「カノコ、ヤスラカニネムル。キヲオトスナ、アトフミ」

すでに第一の電報以前にかの子は死亡していたのに、太郎の衝撃を馴らすための、父一平の配慮であった。それでも太郎は数日間、打ちのめされたように寝込んでしまった。

梅崎春生（うめざきはるお）（一九一五——一九六五）

「結婚当時四、五年間を除いて、後年肝硬変と診断されるまで、ほとんど毎晩飲むことが多かった」（夫人、梅崎恵津『幻化の人』）

梅崎春生は、昭和三十三年ごろから、いくどか鬱状態を

伴う心身不調におちいったが、三十八年に吐血、入院して、初期肝硬変という診断の言葉を受けた。

彼はかつて、「いま文壇でガンをわずらっているのは、某氏と某氏と、ほか三人いるが、その人たちは自分がガンであるということにまだ気づいていません。そこでぼくのところにガン発見機をそなえつけたから、心当りの人はうちへ来れば見てあげます」といい、友人を呼んで、四角な箱の上に手をおかせ、手が赤くなるとガンだとおどした。実は箱の中に電球がしこんであり、梅崎が足でスイッチをおしたり消したりしているいたずらであった。

彼は肝硬変といわれたが、実はガン性のものであった。

「肝硬変で東大病院に入院し、以後お酒を呑んだら命の保証はいたしません、と医師にいわれて退院した。初めの中は歩くときも弱法師の如く、食事中箸をポロリと落すほどであったが、次第に元気を回復してくると、家人にかくれて酒を呑みはじめた。家人が警戒すればするほど、それを出し抜いて呑むことに生き甲斐を覚えるかの如くであった。その頃書いたのが『幻化』である」（兄、梅崎光生『春生追懐』）

『幻化』を書きはじめる半年くらい前から、彼は、家のベルが鳴っていないのに鳴っているというような幻聴に悩まされはじめた。

さて彼は、「新潮」昭和四十年六月号と八月号に、最後の作品となった『幻化』を発表した。それは、戦争末期、死と対決した青春の想い出の土地を、二十年後に再訪する物語であった。

その直後の七月半ば、梅崎はまた吐血し、東大病院にかつぎこまれた。

「途中、担架の上から泳ぐように逃げ出そうとした。『死』から逃れ去ろうとするかのように。病室に横になっても、やはりベッドから逃げ出そうとした。みんなでそれを押えつけなければならなかった」（『春生追懐』）

入院後数日。

「昭和四十年七月十九日の夏、暑い、蟬が天地いっぱいに啼きさわいでいるさなかに梅崎はみまかりました」（恵津夫人）

「……凝縮した時間が過ぎた。ニイチェのデスマスクには虚無の深淵を見詰める恐怖の表情がある。それと似ていた。やがて医師が来て、御臨終だと言い、去った。眼をとじさせ、頤を引き上げて口をとじさせると仏様の顔になった」（『春生追懐』）

五十一歳で死んだ人々

果実に芯があるように、人はだれでも自分の死を自分の中に持っている。
——リルケ——

後醍醐天皇（一二八八——一三三九）

延元元年、湊川の戦いのあと、天皇は叡山に逃れ、さらに吉野に逃れたが、以来南風競わず、延元四年八月九日より病み、次第に重くなった。

八月十六日、天皇は吉野行宮で、

「生々世々の妄念たるべきは、朝敵をことごとく滅ぼして四海を泰平ならしめんと思うばかりなり」

と、みずからも「妄念」と認める言葉を残し、その午前二時ごろ、左手に法華経を持ち、右手に剣を握り、朝敵尊氏らに万斛の恨みをのんで崩御した。

井原西鶴（一六四二——一六九三）

西鶴の父母はいかなる名であったか、西鶴がいかなる素性の人であったかわからない。

そして西鶴の歿した年月日と年齢はわかっているが、臨終のようすはどうであったか、葬儀はいかに営まれたのか、三人の子供があったのだが、それはどうしたか、一切わからない。

とにかく、芭蕉、近松門左衛門とならぶ江戸の文学の三巨人の一人たる井原西鶴は、元禄六年八月十日、大坂鑓屋町の家で死んだということが判明しているだけである。どうやら結核であったらしい。

実に彼は、その本名さえも明らかでないのである。のみならず、彼の作は『好色一代男』だけで、世にいわゆる西鶴作と伝えられるおびただしい作品はすべて彼の作ではないという説すらある。

それにしても、彼の死から約一年後の元禄七年十月、同じ大坂で芭蕉がほぼ同年齢で死んでいるのは一奇といって

よさそうである。しかし当時の大坂市民で、「巨星相ついで落つ」という感慨を持った人間は一人もなかったろう。

キャプテン・キッド（一六五〇頃―一七〇一）

ポーの『黄金虫』は、暗号を解いて、大海賊キャプテン・キッドの埋蔵した財宝を探し出す物語である。

十七世紀末、インド洋を荒らすフランス海賊船に手をやいた東インド会社の請願により、イギリス国王ウイリアム三世は、当時の植民地アメリカのカリブ海で、フランス海賊船に痛撃を加えた船長ウイリアム・キッドに、インド洋における敵性海賊船の掃蕩を命じた。一六九六年のことである。

ところがインド洋に遠征したキッドは、かえってミイラとりがミイラとなって自分が海賊となり、数年にわたって敵味方を問わず襲い、また島々で掠奪をほしいままにし、海賊キッドの雷名をとどろかせた。

そして一六九九年、北米ニューイングランドに上陸したところを捕えられ、イギリスに護送され、裁判にかけられた。

キッドは自分の行為の正当性、裁判の不当性をさけびつづけ、教誨師の悔悟のすすめにも耳をかさず自分の無実を訴えつづけた。

が、与えられたのは死刑の宣告であり、テムズ河畔ワッピングの海賊処刑台にひき出された。一七〇一年五月二十三日のことである。彼はテムズ河を見わたして、「ここを上下する船長は、みんなおれの運命から教訓を受けるといい」と呪いの言葉を吐いた。

彼の身体が絞首台で宙に吊るされたとたん、縄が切れて地上に落ちた。教誨師は彼に、この一刻の猶予を与え給うた神の慈悲に感謝せよ、といった。半分意識を失ったキッドはやっとうなずいたが、その身体はまた吊りあげられて絶命した。

日本でいえば元禄十四年四月十六日、忠臣蔵の幕があがり、赤穂城明け渡しのために幕府の大目付が赤穂に到着した日である。

キャプテン・キッドの屍体はタールを塗られ、鎖に吊るされてテムズ河の上にさらしものになり、本人が遺言した通り、その後数年、そこを上下する船乗りたちへの警告となった。

平賀源内（一七二八―一七七九）

日本の超ミニ・レオナルド・ダ・ヴィンチともいうべき平賀源内は、安永八年十一月二十一日、馬鹿馬鹿しい錯覚から殺人を犯した。

田沼意次が別荘を作るにあたって、ある請負業者に見積りを出させ、それを源内に見せた。源内が、自分ならその二、三割引きで作って見せるといったので、田沼は工事を彼にまかせようとした。最初の請負業者が抗議に来、源内は自分の設計書を見せて説明した。相手は納得し、和解の酒盛りをして、その業者は源内宅に泊った。翌朝、酒からさめた源内は自分の設計書が紛失していることに気づき、その町人のしわざにちがいないと思いこんで口論となり、昂奮のあまりついに相手を斬った。そのあとで設計書はちゃんとあることが判明したのである。

なお、この凶変のあった家は、以前から幽霊が出るという噂のため、源内が安く手にいれた家であった。

別説もあるが、源内が突発的に殺人をやったことは事実である。そして彼は小伝馬町の牢にはいる羽目になり、一ト月もたたない十二月十八日、破傷風にかかって牢死した。

バルザック（一七九九―一八五〇）

富と名声へのあこがれを原動力に、壮大なる『人間喜劇』以下おびただしい小説を、輪転機のごとく書きまくった巨人バルザックは、四十過ぎてから、富豪の貴族未亡人ハンスカ夫人と結婚する見込みがつくと、急速に創作力を失った。一八四五年、彼は手紙に書く。「僕の脳は疲れ切った馬のように横倒しになってしまいました。鞭で打っても拍車をかけても感じないのです」

この結婚は、しかしバルザックが期待したように容易には叶えられなかった。それで、それまでのめちゃくちゃな浪費による借金に追われ、彼は最後の傑作『従妹ベット』（一八四六）『従兄ポンス』（一八四七）を書いたが、あとは小説家バルザックのぬけがらが残っているばかりであった。

一八五〇年三月、やっと金持のハンスカ未亡人と結婚したが、彼の肉体は、立っていることがやっと、というありさまで、そのうえ失明に近い状態であった。糖尿病の末期ではなかったかと思われる。六月二十日の手紙に、「僕はもう読むことも書くことも出来ない」と書いたのが最後の文字であった。

八月十八日に、ヴィクトル・ユゴーは、意識不明のまま死の床にあるバルザックを見舞った。

「……枕を重ねた上に、部屋の長椅子の赤い綾織りのクッションを加え、そこに頭をもたせかけて、バルザック君はベッドにいた。顔は紫色というより黒ずんで、髯はのびたままだった。……横顔はナポレオンに似ていた」と、ユゴーは書いている。

そのとき、隣室では、夫人は三文画家のジャン・ジグーと姦通していたというゴシップもある。

その夜十一時半ごろ、バルザックは死んだ。葬儀の棺の房を握って歩いたのは、ユゴーと大デュマであった。

マネ（一八三二――一八八三）

一八六三年の「草上の食事」、翌々年の「オランピア」などで、風俗上のスキャンダラスな衝撃を世上に与えたエドワード・マネは、しかし別に反逆的な心情の持主ではなく、それどころかただ名声と勲章にあこがれる世俗的な社交家であった。マネはのちに「印象派の父」と呼ばれるが、それは彼にとって予想外の位置づけであったろう。

ひたすら世俗的な成功を追求した彼は、しかし一八七七年、四十五歳ごろから足の痛みに悩まされるようになり、ついで運動失調症におちいった。

彼はこれに苦しみつつ、それでも絵を描きつづけたが、一八八三年、ついに左足が黒ずみ、爪まではがれおちる状態になった。壊疽（えそ）の診断を受け、四月十九日に左足をひざから切断した。この手術はパリの自邸の応接室のテーブルの上で行われた。

しかし病状は軽快せず、二十九日から最後の苦しみがはじまった。「驚くべき断末魔の苦しみ……この上なく怖ろしい様相の死」と、弟の妻のベルトは記している。一本足のマネは二日間喘（あえ）ぎ、痙攣（けいれん）しつづけ、三十日の午後七時に絶命した。

同じ年にワーグナー、日本では岩倉具視（いわくらともみ）が死んでいる。

岩崎弥太郎（いわさきやたろう）（一八三四――一八八五）

土佐の郷士（ごうし）の子として生まれ、一代にして大三菱の基礎を築いた岩崎弥太郎は、三菱の海運独占をにくんだ政府筋が作らせた共同運輸会社との間の死闘に最後の二年間を捧げた。

若いころ一日六十キロ走ったこともあるというほど、弥

太郎は生来頑健な体格の持主であったが、一方で斗酒なお辞せぬ大酒豪であった。晩年はウイスキーに替えたらしい。

右の三菱郵便汽船と共同運輸の、両者共倒れになりかねぬ激烈な競争中の明治十七年夏ごろから、彼は食欲不振におちいり、秋には何度か昏倒し、しばしば胃から一升、二升の胃液を吐くようになった。

しかも彼は病床で会社の要務を聞き、指令したが、胃中にゴム管を入れて胃液を吸い出されるときは、「若いころ台風の海で船酔いしたことがあるが、あれにまさる苦しみだ」と悲鳴をあげた。

病名は胃ガンで、彼は「おれは男だ。いかなる病名を聞かされても驚きはしない。ただ治る病気か治らん病気か、それだけ教えてくれ」と医者の池田謙斉に訴えたが、当時名医として知られた池田は、最後まで病名を打ち明けなかった。

十八年元旦には、病床で正装し、社の幹部三十余名の年賀に応えたが、病状次第に悪化し、二月四日には百回も吐瀉（としゃ）し、発声も困難となった。

そして七日、長男久弥、弟弥之助に三菱の将来について毛利元就の故事をひいてからくも遺言を述べ、「腹の中が裂けるようだ。もう何もいわん」と口をとじ、午後六時三十分絶命した。息が絶えたあと、死んだ口からまた三、四升の吐物が流れ出した。

星亨（ほしとおる）（一八五〇――一九〇一）

明治三十四年、代議士にして東京市会議員もかねていた星亨は、六月二十一日午後三時、市参事会が終ったあと、雑談中、三時半ごろ面会者がある旨（むね）告げられた。彼はことわったが、面会者は無断ではいって来て、「逆賊星亨」と絶叫して、短刀で星の右肋部を二刀刺し、さらに腹部をえぐり即死させた。

この刺客は、伊庭想太郎（いばそうたろう）という元剣客で、星を「公盗の巨魁」としてこの凶行に出たものであった。

しかし、死後星亨の資産を調査したら、書物と借金のほかは何もなかった、といわれる。彼はよく集めたが、よく散じたのである。

岡倉天心（おかくらてんしん）（一八六二――一九一三）

天心は三十一歳のとき、ひそかに「生涯の予定」なるものを書いた。

「第一、四十歳にして文部大臣となる。第二、五十にして貨殖に志す。五十五歳にして寂す」

神がかりの天心も、しかしおのれの寿命が五十五までも持たないことを見通すことが出来なかった。――

彼は晩年糖尿病と痔を病んだ。

大正二年八月七日、文部省でひらかれた古社寺保存会の会議中、大量の下血を見たが、苦痛を抑えて法隆寺壁画保存についての建議書草案をかき、帰途、本郷竜岡町の故橋本雅邦宅にころがりこむと、そのまましばらく身動き出来ない状態になった。

二、三日、そこで静養したのち田端の別邸に帰ったが、しきりに新潟県赤倉の山荘にゆきたがるので、十六日、家族につき添われて同地に赴いた。

八月二十四日、突如心臓発作を起し、視力が急速に衰えた。これは糖尿病によるものと思われる。東京からは妻子、弟の岡倉由三郎、弟子の横山大観、下村観山、川合玉堂ら、そして医者数人が駈けつけたが、二十九日、腎臓炎から尿毒症を併発した。

危篤が迫っても、頭だけはたしかで、

「これが人間の最期かな」

とか、

「神様、あなたのなさることには感心出来ないことがある」

などつぶやき、また辞世の歌をみなに聞かせた。

「我逝かば花な手向けそ浜千鳥
呼びかふ声を印にて
落葉に深く埋めてよ
十二万年明月の夜
弔ひ来ん人を松の影」

天心節ともいうべき彼独特の歌である。

九月二日午前七時三十分、絶命した。

遺骸は白樺で作った寝棺にいれられ、桔梗、女郎花、萩などの秋草で覆って、東京に運ばれた。葬儀には大観ら門下生が、白木綿の衣服に白地の雲斎袴、藁草履という、当時としても他に見られない異装で、粛々と棺に従った。

天心の骨壺を墓所に埋めるとき、妻の元子は一枚の写真をとり出して、「あなたも不幸な人でしたね。いま、ここにいっしょに葬ってあげましょう」といって、いっしょに埋めた。

それこそは十五年ばかり前、天心と道ならぬ恋に落ちて、天心はもとより元子をも苦しめた美貌の九鬼男爵夫人波津子――名著『「いき」の構造』を著わした哲学者九鬼周造の母――の写真であった。

元子は、世の噂通り波津子はすでにこの世を去っていたものと思っていたかも知れない。しかるに波津子は、この時点においてはまだ生きていた。が、苦悩のあまり狂気して、巣鴨精神病院の鉄窓の中にとじこめられていたから、やはりこの世にない人と同様であったといえる。

プルースト（一八七一――一九二二）

マルセル・プルーストは、九歳のころから猛烈な神経性喘息に悩まされ、それはアンドレ・モーロアが書いたように「病気のため、プルーストはその生涯の大部分をとじこもって過さねばならず、のちには友人とも、夜を除いては、あるいは夜昼ともに全然会うことが出来ず、花ざかりの林檎の木も、部屋や馬車の閉ざされたガラス窓越しにしか眺めることが許されなくなった」ほどの烈しい持病となった。

三十五歳のときから彼は、パリのオスマン通りの、コルク張りの防音装置がほどこされ、発作をふせぐために窓は常に閉ざされ、燻蒸装置から息づまるような薬の匂いが発散している隠遁所で、大作『失われた時を求めて』を書き出した。

晩年の彼は、髪は櫛をいれたこともなく、髯もほったらかしで、十年以前に流行したようなダブダブのズボンをはき、顔は、一度しぼんでから、ふたたび不完全な滑稽なかたちにふくらんだような、若くて、老人で、病人で、女のような、まことに奇妙な風貌の人間になっていた。そして、持病の喘息の悪化で五十一歳で死ぬ直前まで、『失われた時を求めて』に手をいれつづけていた。

宮崎滔天（一八七一――一九二二）

あるいは孫文の革命運動に呼応し、あるいは桃中軒雲右衛門の弟子となって浪花節の巡業をし、いわゆる「大陸浪人」の一典型として奔馬のごとく生きた滔天は、晩年すべてに失意、みずからを泥土にまみれた落花と称して、書斎の人となった。

半生の不羈奔放の生活がたたったか、かつての関羽のごとき風貌が、四十半ばにして六十を越えて見えるほど老衰が甚だしかった。大正六年ごろから腎臓を病み、しかもなお大酒して、全身風船のような水腫を起し、これに懲りてようやく禁酒したが、すでに遅かった。

若い日、白衣白馬の客将として大陸を馳駆し、中国革命

のために戦死することを夢とした彼は、大正十一年十二月六日、腎臓炎による尿毒症のため、東京目白の陋屋でこの世を去った。

リルケ（一八七五――一九二六）

一九二六年の秋、この詩人は、ある美しいエジプト女性に贈る薔薇の花を切っているとき、ふと指さきを薔薇のトゲで傷つけた。

何でもないこの傷が悪化した。彼はすでに白血病にかかっていたのだ。

三年ばかり前から彼は健康状態のよくないことを自覚していたが、これがきっかけとなって苦しみの日々がはじまった。

十二月五日に彼は友人に手紙を書いている。

「血液細胞のほとんど知られていないある変化が、この全身的な、この上なく残忍な病状の出発点となっているのだ。この名も知れない、はかり知ることの出来ない苦痛に、僕はいまや順応することを学んでいる」

また別の女友達に書いている。

「昼となく、夜となく、夜となく、昼となく、地獄です！」

しかし彼は、自分の理性を低下させる鎮痛剤を拒否した。そして女友達に書いた。

「僕が、僕の死を死ねるように助けて下さい」

十二月二十九日の朝五時、リルケに死が訪れた。

マキノ省三（一八七八――一九二九）

チャンバラ映画の創始者マキノ省三は、昭和三年春ごろから、京都北野天満宮の傍にある家の病床にあったが、どういうわけか、おれは天神様のお祭りの日、七月二十五日に死ぬ、といってきかなかった。

昭和四年七月二十四日夜、彼は息子の正博に話しかけた。

「マサ公、明日二十五日やなあ」

「うん、あんた死ぬいうて、死ねへんがな」

「いや、わからんぞ」

と、彼は首をふり、

「わしが映画やって十八年、正博、辞世がある。おぼえとけ。……活界に、黒く、暗く、十八年」

「それが辞世か」

「うん。……ちょっと寝るわ」

といったが、省三はしばらくして新聞記事を沢正ばりに読み出した。そのうちに柱時計が十二時を打った。

「マサ公、マキノ省三は死ぬんやぞ」

「何いうてんねん」

それから省三は床上で、黒い糞を脱糞し、これをカニババという、など冗談めかしていった。正博は、明日の仕事があるから、お父っつぁんももう寝てくれ、といった。

「お前はおれのいうこと、とうとう最後まで聞いてくれんだな。親不孝なやっちゃ。ほな、さいなら」

といって省三は眼をふさぎ、しばらくすると、頭がころんと枕からはずれて落ちた。正博はその頭を枕にあげてやろうとして、父の顔色が変っているのに気がついた。

医者や家族が駈けつけた。省三は死んでいた。正博はさけんだ。

「今までわしと話してたんや、死んでへん！」

あとマキノ・プロダクションは潰滅し、借財の山が残された。

病名について正博は「体は丈夫だったのに肺炎で死んだのは、おふくろの病気が移ったのかもしれない。おふくろはワシが三十一歳のとき、肺ガンで死んでいるんです。あの当時、肺が悪くなったらダメだったからね」と、わけのわからないことをいっている。どうも結核のようだ。

永田鉄山（一八八四――一九三五）

昭和十年八月十二日朝、陸軍軍務局長室で、軍務局長永田鉄山中将は、東京憲兵隊長新見英夫大佐から、在京皇道派青年将校らの動向について報告を聞いていた。

九時四十五分ごろ、ドアをあけて、頬骨の張った屈強な一人の将校がはいって来て、いきなり軍刀をぬくと突進して来た。

永田は逃げようとして、背後から二太刀斬りつけられ、ドアの把手をつかんだまま開けることが出来なくなった。襲撃者は刀を両手に持ち替えると、永田の背から刺し通した。そして廊下へ出ていった。

永田局長は、十時三十分に絶命した。

襲撃者は陸軍皇道派に属する相沢三郎中佐で、統制派の実力者永田が皇道派を排除しようとしていると思い、憤激してこの凶行に出たものであった。

彼は血まみれになって、整備局長室に戻り、山岡整備局長が動顛して、「これからどうするのか」と訊いたのに対して、「これから買物をして、台湾に赴任します」と、答

えた。
相沢は狂人ではなかったが、狂気のごとき陸軍内部の派閥抗争の申し子であった。
永田は陸軍で「永田の前に永田なく、永田の後に永田なし」といわれた逸材であった。当時日本に君臨していた軍部の、その最大の実力者が突如横死したのだから、ふつうなら「もし彼生きてありせば」という声がのちに出るはずなのだが、これが全然出ない。統制派も皇道派も、国民からすれば同じ穴の「虎」で、そんな空想の働く余地はなかったのである。

五十二歳で死んだ人々

> 死んでどこかわからんところへゆくということ……見えない風の中に囚われ、宙に漂う地球のまわりを、烈しい力でとめどなく吹き飛ばされてゆくということ……ああ、考えただけで身の毛がよだつ。
> ——シェクスピア『尺には尺を』——

源　頼朝（一一四七——一一九九）

建久九年十二月二十七日、頼朝は、相模川に新しくかけた橋の橋供養に臨んだ帰途、落馬し、そのときの傷が悪化して、翌建久十年一月十三日死んだ、という。
しかし医史学者富士川游博士は、「落馬による負傷のため死亡したもの（外傷性肋膜炎）とも推定せられるが、しかし、その死亡の状況から推して卒中風（脳出血）にて死亡したものと診断するのが事実に近いものであろう」という。
しかしまた彼の死が、患っているという噂もない中の突然のものであったこと、彼が晩年、弟の義経、範頼を殺すなど非情の行為があったこと、さらには幕府の正史ともいうべき『吾妻鏡』にどういうわけか死亡時の記録が脱落していること、などから、当時も後世も、彼が妻の政子の貞操を疑い、政子が想っているらしい畠山重忠に化けて寝所にはいり、政子に殺されたとか、逆に、彼がある女に懸想して、衣かずきの女に化けて忍ぼうとしているところを番人に殺された、とか、さまざま妖しい臆測がめぐらされた。

武田信玄（一五二一——一五七三）

元亀三年十月、二万七千の精兵をひきいて上洛の途についた信玄は、十二月二十二日、三方ヶ原で徳川家康を撃破したあと、都田川に進んだが、そのほとりの刑部に滞陣して越年した。
一月七日、ようやく陣を払って三河にはいり、野田城を囲んだが、その攻撃ぶりは緩慢であった。信玄は、かねてから病んでいた肺結核が悪化していたのであった。
そして、野田城は攻略したが、三月、みずから陣をひき、鳳来寺山に移った。この行動が一見不可解に見えたため、野田城で吹く笛に誘われて城下に馬を進め、城頭から狙撃された傷が重くなった、という噂を後までたてられた。
四月にはいり、ついに起つあたわざることを知ると、帰国に決し、信州駒場までひきあげたが、そこの長岳寺という古寺で最期のときを迎えた。
「四月十一日、未の刻（午後二時ごろ）より、信玄公、御気あしく御座候て、おん脈ことのほかはやく候。また十二日の夜、亥の刻（午後十時ごろ）口中にはくさ出来、おん歯五ッ六ッぬけ、それよりしだいに弱り給う」（『甲陽軍鑑』）
はくさとはよくわからない。舌苔のことでもあろうか。『甲陽軍鑑』は俗書だが、このあたりの記述は大体信じていいのではないか。
彼は、前線の一子勝頼を呼び寄せ、遺言した。それはいつの日か瀬田に風林火山の旗を立てよ、そのためにはなお三年わが喪を秘せよ、信玄ありと見るかぎり甲州の地に手をかける敵は一人もない、信玄ありと見せかけるため、影

武者を使い、書状をもって下知するときは、かねて用意してあるわが花押ある紙を使え、等々であった。

また、信長、家康両人かかっても余の相手にはなりがたいゆえ、天道、果報を秤って先に信玄を殺されるものと見える、ともいった。

そして、四月十二日、陣歿した。

それより三年たたぬ二年後の天正三年五月、勝頼はタブーを破り兵を出して長篠に大敗した。信玄の死が公表されたのは、それから一年後、すなわち遺言通り三年目の天正四年四月十六日のことであった。

シェクスピア（一五六四―一六一六）

シェクスピアは、四十八歳にして筆を絶った。

彼が晩年なんらかの病気にかかったとか、事故にあって不具廃疾になったというようなことは、同時代の記録にも、地方のいい伝えにも少しも見出されない。それどころか、集められるかぎりの資料は、すべて彼の健康と幸福を示している。

最初の伝記作者ロリは、一七〇九年に書いた著書の中で、「彼の生涯の後期は、良識ある人々がすべてそうあれかしと願うように、安楽な隠居生活、友人との談笑のうちに日を送った」と断言している。

彼は死の三年前、投資のための邸宅などを買っている。こういう大文豪もあるのである。

そして一六一六年四月二十三日、彼は妻や娘に財産分配についての詳細な遺言状を残して死んだ。死因は、当時流行した熱病によるものとも、何かの持病が急に悪化したもののともいわれ、明らかでない。

日本では元和二年、徳川家康が死んだ年であった。

彼の遺体はストラドフォード教会内に葬られ、その墓石にはシェクスピア自身が選んだ次の四行が刻まれている。

「よき友よ、イエスのために、ここに葬られし
わが遺骸を掘り返すことなかれ
この石に触れぬ者に祝福
わが骨を動かす者に呪いあれ」

この墓碑銘は、彼が遺言の遺産の分配で、妻には「二番目のよき寝台」しか与えていない事実とともに、彼がのちに妻が同じ場所に葬られることを防禦したしるしとも考えられ、彼が妻のアンと不和であったという説を生んでいる。

原田甲斐（一六一九―一六七一）

伊達藩の江戸家老原田甲斐は、幼君亀千代の後見役伊達兵部と組んで、国政を私にする悪政をほしいままにしたので、忠臣伊達安芸が幕府に訴え、ために原田甲斐と伊達安芸は、寛文十一年三月二十七日、下馬将軍と呼ばれた時の大老酒井雅楽頭の屋敷で対決するに至った。

このとき甲斐は、論につまって乱心し、突如「安芸、おのれゆえ」とさけんで安芸を二太刀で斬殺し、自分も幕府方の役人たちに斬殺された。

――というのが巷説で、「伽羅先代萩」等の芝居もこれによっているが、この刃傷の背景には複雑な事情がからんでいて、むしろ伊達安芸のほうがお家をあやうくする無分別漢で、この甲斐の凶行は、これに乗じて伊達六十二万石をとりつぶそうとする幕府の下心を未然にふせぐためであったとする原田甲斐忠臣説は、さきに真山青果が『原田甲斐の最期』で描き、のちに山本周五郎が『樅ノ木は残った』で描いた。

ともあれ、この場所柄をわきまえぬ刃傷は、原田甲斐を一挙に犯罪者と決定づけ、国元の甲斐の男子四人、孫二人も処刑され、甲斐の母も食を絶って自殺するという惨烈な運命を招いた。

フィヒテ（一七六二―一八一四）

ナポレオン占領下にあるベルリンで、身の危険をもかえりみず有名な「ドイツ国民に告ぐ」の愛国的演説をやった哲学者フィヒテは、やがて解放戦争がはじまるや、妻ラーンは特志看護婦として従軍したがチフスに冒され、彼にも伝染した。妻は回復したが、彼のほうは回復せず、一八一四年一月二十九日、ドイツ軍の捷報を聞きながら死んだ。

ナポレオン（一七六九―一八二一）

「余が死んだら人は何というかね」

と、かつてナポレオンは部下に訊いたことがある。部下が返事に窮していると、彼はいった。

「何ともいわないさ。ただ、ふん、というだけだよ」

一八一五年六月、ナポレオンはワーテルローの戦いに敗れた。英国はフランス側による死刑を望んだが、ルイ十八世は国民的英雄を処刑する責任を負うことを拒否し、結局

大西洋上の孤島セント・ヘレナに流刑となった。それは岩だらけで、肝臓病の風土病のある島であった。

彼はイギリスの軍司令官ハドソン・ローの監視下に置かれた。幽閉されている館のまわりは深い濠にかこまれ、二連隊の英兵によって監視され、島の周囲もたえず英艦によって哨戒されていた。

ナポレオン一行は計五十一人、その費用は年に一万八千ポンドということになっていたが、ロー司令官はこれを勝手に削って、自分の年俸と同額の一万二千ポンドとし、さらに八千ポンドとした。そのためにナポレオンは、ついには自分の銀の食器まで売らなければならなかった。

彼は、いつも昼近くに起き、午後も寝衣を着たままでいることが多かった。彼は無為であるよりほかはない生活に追いこまれた。

数年にしてナポレオンは、食欲不振と足のむくみを訴えるようになった。

やがて侍医として派遣されて来たフランソワ・アントマルシーというコルシカ生まれの二十九歳の医者は、フィレンツェで解剖を学び、大学で解剖助手をやっていただけの、臨床には素人に近い医者であった。しかも、怠け者で軽はずみで無責任なこの若い医者は、次第に健康の悪化してゆくナポレオンに、ほとんどまともな治療を行わなかった。

ついにナポレオンは悲鳴をあげた。

「私ほどひどく扱われた病人がいたろうか。あの馬鹿にはもう相手にならぬ」

一八二一年三月から、彼は病床についたままになった。彼は「ナイフをつき刺して、えぐりまわすような痛み」に苦しんだ。

四月に「私はイギリスの暗殺者に殺されるのだ。……私の骨はセーヌ川のほとりに埋めてくれ」と遺言した。

五月五日午後五時、「神よ、フランス国民、私の息子、軍隊の先頭……」と、とぎれとぎれにつぶやきながらナポレオンは死んだ。そのとき左の眼から涙がこぼれ、しずかに頬をぬらしたという。

翌日、アントマルシーはほんとに解剖してみて、死体の胃壁の八分の七までがひどい病変に冒されているのを見て眼をまるくした。

「ボナパルトの遺体は島を離るべからず」というハドソン・ローの命令のために、その遺体がセント・ヘレナからパリに帰ることが出来たのは十九年後のことだった。

このときナポレオンの遺骸の発掘に立ちあった移送隊付司祭フェリックス・コクロー神父は記す。

「わたしは告白する。……柩も墓も見ない人が、ある光の中で、ガーゼ越しにベッドの上のナポレオンの遺骸をみたなら、彼はまちがいなくこう思うだろう。皇帝は静かに休息されていると。わたしたちの最初の印象がそうだった。

（中略）

遺骸全体がうすい苔に覆われているように見えた。半透明の雲を通して見ているかのようでもあった。そこに見えるのはまさしく彼の顔であった。

その顔を枕がいくらか持ちあげていた。広い額、瞼の下に鮮やかにその眼球の形をみせ、数本の睫毛を残している両眼。両頬は鼻の下の方だけが損なわれていた。口は半ば開かれており、非常に白い三本の歯がのぞいていた。顎にはあきらかに髭のあとがあった。両手はとくに、まるで生ける人のようであった。それほど外形も色調も生き生きしていた。（中略）両手の爪は死後のびたものであった。長くて白い爪だった。長靴はいずれも紐が切れ、くすんだ白い四本の足指をのぞかせていた。

服装は護衛隊の猟歩兵の制服である。（中略）大きな金の肩章は黒ずんでいた。服の上の一つの大きな勲章と数個の徽章もそうだった。レジオン・ドヌールの大綬章は、その赤い色で白いチョッキを切っていた。カシミヤのズボンの上に帽子が置かれていた。両脚の間に、彼の心臓と内臓をおさめた二つの容器がはさんであった。容器の上にはそれぞれ一羽の鷲が飾られてあった」（コクロー『ナポレオン発掘記』酒井伝六訳）

彼の死因については、胃ガン説のほかにさまざまの臆測があり、一九六四年にイギリスの薬学者ハミルトン・スミス博士が、ナポレオンの遺髪（散髪するとき側近がひそかに集めて保存していたもの）を検査し、分析した結果、ナポレオンは毒殺を警戒し、セント・ヘレナでは一切薬を飲まなかったというにもかかわらず、彼は死亡前約四カ月にわたって砒素系の毒物を飲まされていたという推定を発表した。

頼山陽（一七八〇——一八三二）

天保三年六月十二日、頼山陽は京都の客舎で突如喀血した。以前からの肺結核が進行していたのである。

ついで腸結核も併発し、烈しい咳と下痢を繰返した。その間にも彼は、死力をつくして『日本政記』を書きあげ、九月二十三日、息をひきとった。実に彼が筆を離したのは死の数分前であり、死顔には老眼鏡がかかったままであったという。

しかし、若き日天衣無縫の遊蕩に明けくれた山陽は、その妻かえに対し、以後の生活をたてゆくための法、三種に分けてある貯金の使用法など、痒いところに手のとどくような遺言状を残し、彼女をして「……十九年の間に候えども、あのくらいな人を夫にもち、ありがたく存じ候。……」と感激させた。

ところが山陽には、このときなお妻よりも大事な愛人江馬細香があったのである。——

山岡鉄舟（一八三六——一八八八）

ふだんから晩酌一升を欠かさなかった鉄舟は、明治十九年ごろからついに胃病になり、二十年夏には左脇腹に大きなしこりを生じ、胃ガンと診断された。翌年二月からまったく流動食となり、七月にはいって病勢とみにあらたまった。

七月十八日の夜、ひとりで厠から戻って来た鉄舟は、「今夜の痛みは少しちがっている」といった。主治医の往診により、胃穿孔のため急性腹膜炎を起していることが明らかとなった。惨烈きわまる痛みがあるはずなのに、鉄舟は横臥せず、ふとんにもたれて座禅をくんでいた。

十九日の払暁になって、やっと「腹いたや苦しき中に明けがらす」と辞世の句を詠んだ。そして午前九時十五分、門人たちの歔欷の中に、手に団扇を握り、座禅を組んだ姿のまま大往生をとげた。

二十二日の葬儀は篠つくばかりの大雨の中で行われたが、会葬者は五千人に及んだ。かつてのボロ鉄も最後は子爵であった。

ヴェルレーヌ（一八四四——一八九六）

ヴェルレーヌは、大事に使えば一生困らぬだけの財産を親から残され、自分はパリ市役所に勤め、それで満足しているなら、平凡で安楽な一生を送れるはずだった。

しかし彼は、オランウータンと呼ばれた醜貌を持ち、怒り易く、また誘惑に負け易く、多情なくせに女に内気で、コンプレックスから来るアルコール中毒で、そして何より多感な詩魂の持主であるという複雑な人間であった。

奇蹟のごとき美少女マッティルド・フルールヴィルという妻を得ながら、やがて彼は家庭を捨て、彼が「わが悪霊」と呼んだ背徳の美少年アルチュール・ランボーと、手に手をとってイギリスやベルギーを放浪し、果ては、彼か

ら去ろうとするランボーをピストルで撃って負傷させ、刑務所にはいる羽目になった。獄中で書いた『無言の恋歌』の中に、のちに日本で愛称された、

「巷に雨の降るごとく
　わが心にも涙ふる。……」

の詩があった。（堀口大学訳。これを「わが心にも雨がふる……」と勝手に変えたのは宇野浩二である）

その後も、田舎高校の教師になったり、農業をはじめてみたりしたが、魔酒アブサンへの惑溺と自己破滅的な性格はついに彼を立ち直らせず、四十歳を過ぎてからは、左膝の関節水腫で働くことも出来ず、杖をつきながら各地の施療病院を経めぐるようになり、「ひとは死ぬために施療病院にはいるが、ヴェルレーヌは生きるために施療病院を利用する」と悪口をいわれるようになった。彼は晩年実に通算四年間も施療病院の世話になった。

そして、たまに詩集のわずかな印税がはいると、夏冬通しの半外套を着て、杖をついて、カルチエ・ラタンの安カフェにかよい、うら枯れた売春婦たちを相手にアブサンを飲んだ。

「寒くさびしい古庭に、ふたりの恋人通りけり、
　まなこおとろえ、口ゆるみ
　ささやく話もとぎれとぎれ。
　お前はたのしい昔のことをおぼえておいでか
　なぜおぼえていろとおっしゃるのです
　ああ、ふたり唇をあわせた昔
　あやうい幸福の美しいその日
　そうでしたねえ
　昔の空は青かった、昔の望みは大きかった
　けれど、その望みは破れて、暗い空にと消えました。
　からす麦、しげった中の立ちばなし
　夜よりほかにきくものもなし」
（ヴェルレーヌ『わびしい対話』永井荷風訳）

ヴェルレーヌにもそんな日があったのか？　あったとしても、その日は遠く消え去った。晩年には詩想も衰えはてた。

彼が死んだのは、しかし施療病院ではなく、デカルト街の、暗い湿っぽい貸間で、ベッド一つの寒々とした部屋で、肺炎のために高熱を発し、一八九六年一月七日の夜ふけ、ベッドから這い出そうとしてころげ落ち、同棲していた老売春婦ユージェニーが、ベッドに戻そうとしたが力及ばず、床に横たわったままのヴェルレーヌにありったけの毛布をかけた。ヴェルレーヌは昏睡状態のまま、八日に死んだ。

日本では明治二十九年、樋口一葉の死んだ年。

フーディニ（一八七四――一九二六）

裸でいれられた二重鍵の牢獄から脱出してみせたり、水中に沈められた青銅の棺桶から脱出してみせたりして、二十世紀最大の魔術師とうたわれたハリー・フーディニは、モントリオールのプリンセス劇場の舞台で、飛び入りの大学生に思い切り腹をたたいてくれと頼み、大学生がそうしたところ、盲腸が破れて、それが原因で一九二六年十月三十一日あっけない死をとげた。

彼の遺体は、彼が興行に使った青銅のがんじょうな棺にいれられて埋葬されたが、彼はもはや永遠にそこからぬけ出すことは出来なかった。ほかの魔術師にはまねの出来ないフーディニ独特の「脱出魔術」の秘密は、永遠に彼とともに墓に葬られた。

野口英世（一八七六――一九二八）

一九一三年（大正二年）三十七歳で梅毒スピロヘータを麻痺性痴呆患者の脳内から発見し、世界細菌学界に不滅の業績を残した野口は、所員として籍を置くロックフェラー医学研究所のホープとしてさらに研究にいそしんだが、そのころ、メキシコ大西洋岸、アフリカ西海岸などに発生して「西半球の恐怖」と呼ばれた黄熱病の病原体をつきとめるべく、一九一八年、エクアドルのグアヤキルに赴き、たちまちその病原体と目されるスピロヘータを発見した（と彼は信じた）。

野口はそれにもとづいて、そのワクチンを大々的に作り、それはアメリカ、南米諸国にひろく採用された。

しかるにその後、野口の発見したのはワイル氏病の病原体ではないか、という疑問が出され、彼はそれに反論した。たまたま、一九二四年ごろから、アフリカ西南部にまた黄熱病が発生し、さらに野口説への疑惑が濃化したために、一九二七年秋、彼は現地のアクラに向った。彼の説がまちがいなら、それまでの莫大な研究費、ワクチン製造費がすべて無駄になるので、彼も安閑としていられなかった。

十一月十七日、アフリカアクラに到着した野口は、ただちに、五、六百匹の実験用サルを買い入れるというような、彼独特の大がかりな病原体追究の実験を開始したが、翌年一月一日から悪寒と嘔吐の症状を訴えた。

彼はこれを黄熱病に感染したのだと信じ、かつそれが軽

症にとどまったのは、自分が野口ワクチンを注射していたからだ、と信じた。そしてまた、黄熱病は、黄疸をひき起し、黒い血を吐いて死ぬ怖るべき伝染病だが、治癒した場合は免疫になるので、自分は今後二度と黄熱病にかかることはない、と信じた。

彼は一月九日にはベッドから下りて、ふたたび研究にとりかかった。

三月十九日の夜、野口は、ついにアフリカ黄熱病の真の新病原体を発見し（したと信じ）、ちょうど梅毒スピロヘータを脳内から発見したときと同じように、アクラ研究所の所長ウイリアム・A・ヤング博士をたたき起して、それを顕微鏡で見せて驚喜した。

彼は、発見したその菌を培養し、さらにニューヨークの研究所で再調査すべく、帰米の準備にとりかかったが、五月十日ごろからひどい疲労を訴えるようになり、十三日、高熱、頭痛、嘔吐、身体の痛みを発した。あきらかに黄熱病の症状であった。

その日、見舞いに来たヤング博士に、野口は、自分の黄熱病症状について、「どうも僕にはわからない」と、つぶやいた。それは一月に黄熱病にかかって免疫になったはずなのに、なぜふたたびかかったのかわからない、という意味で、これが彼の最後の言葉となった。

以後、彼の病状はときに軽くなったものの、次第に悪化し、五月十九日にはてんかん症状を起し、二十日には意識不明となり、二十一日正午ごろ、ひとことの遺言もなくひきとった。

その日のうちにヤングの手で遺体は解剖され、まさしく黄熱病であったことが確認されたが、そのヤングもまた、二十七日黄熱病の症状を起し、二十九日死亡した。昭和三年のことである。

いちど黄熱病に軽く感染した野口が、なぜ二度かかったのか。

それは、最初の黄熱病症状は、そのとき野口の血液をサルに注射して、サルが黄熱病にかかったので、野口はそう信じたのだが、実は、サルの世話をしていたアフリカの少年が、健康なサルと、すでに黄熱病にかかっていたサルの名札が落ちていたのを、とりちがえてつけたためのミスではなかったか、といわれる。そのために、再感染はしないと信じた野口の不注意から、こんどはほんとうに感染してしまったのではないか、といわれる。

そしてまた、その後、野口が発見したと信じた病原体がただの細菌であったことが明らかとなった。真の病原体は、

当時の光学顕微鏡では見ることの出来ないウイルスであった。

しかし、このために野口は、自分の失敗を恥じて、みずから感染させて自殺したのではないか、という噂が立った。

野口英世は、決して修身教科書に書かれているような模範的人物ではなかった。異常な浪費家で、強烈な自己顕示欲の持主であった。しかし、日本の東北の極貧の家に生まれ、左手が不具であるという文字通りのハンディキャップを克服して、刻苦勉励、世界のノグチとうたわれる存在となったのは、やはり尊敬に値するものといわなければならない。

また彼は、世界の医学界が、パストゥール、コッホ、エールリッヒなどに象徴される、いわゆる「細菌の猟人」時代の末期に生まれ、ただ、他の追随を許さない彼独特の名人芸で、辛うじて梅毒スピロヘータの脳内発見などという業績をあげたものの、主な細菌はほとんど渉猟されつくし、対象はウイルス時代にはいっていて、その名人芸が通じにくくなっていたところに彼の焦燥があり、結果として悲劇があった。

しかし、その研究にいくつかのミスやかんちがいがあったとしても、その業績は依然かがやかしいものであり、さらにその死は、学者として脱帽すべき壮烈な殉職であったと認めてやってよかろう。

蓑田胸喜（一八九四――一九四六）

東大を出て、一時は慶応大学予科の倫理学教授にまでなりながら、狂信的日本主義にとり憑かれた蓑田は、昭和初年から、彼が自由主義者と認めた学者たち――津田左右吉、矢内原忠雄、宮沢俊義、美濃部達吉らを、片っぱしから槍玉にあげ、民間側からの思想検察官として戦慄の的となった。

彼は、それら学者の著書を自分の欲するままに前後つなぎ合わせて弾劾のいけにえに作りあげ、「国体変革の凶賊」というような凄じい言葉を羅列して告発し、その攻撃は狂的で執拗をきわめた。

しかし、一方で彼は金銭的には清潔で、異様にまじめで、むしろ小心な人物であったという。

戦争中の昭和十九年六月ごろ、彼は神経衰弱になって、故郷の熊本に帰り、夫人の里、八代郡吉野村の二階に、家族十人とともに間借りして暮していたが、敗戦後の昭和二十一年一月三十一日の早朝、小さな薪小屋の中で、丹前姿のまま縊死しているのが発見された。遺書は何もなかった。

宮本百合子（一八九九――一九五一）

太平洋戦争後、『播州平野』『風知草』『二つの庭』『道標』等、堰を切ったように作品を発表する一方、宮本顕治の妻として、党会議、講演等にも精力的な活動をつづけた宮本百合子は、昭和二十五年十一月下旬ごろから肝臓部の張るような痛みを訴え、仕事が一区切りついたら綜合的な健康診断を受けたいという希望をもらした。

「それほど長生きしたいとは思わないけれど、まだやらなくちゃならない仕事があるから、もう十年はね」

と彼女はいっていた。次にかくべき『春のある冬』『十二年』の構想も胸に組みこまれていた。

あけて昭和二十六年一月はじめから風邪気味であったが、おして仕事をつづけた。十九日には深夜十二時まで『道標』の校正をしたが、その後悪寒が甚だしくなり、二十日の朝がきたときは三十九度八分の高熱となっていた。

午後からは脇腹の苦痛を訴え、四時ごろには身体のあちこちに紫斑が現われた。午後六時主治医が呼ばれたときは、がまん強い百合子がうなり声をあげて、右へ左へと身体のおきどころもないように、輾転とのたうちまわっている状態であった。そして、肝臓部の張り裂けるような痛みを訴えた。

数人の医者が相ついで呼ばれ、強心剤その他種々の手当を加えたが、効果なく、脈は次第に細くなり、頬から耳にかけての紫斑、四肢の紫斑はいよいよひろがり、二十一日午前零時ごろから下顎呼吸がはじまり、午前一時四十分ごろからのどに痰のからまる喘鳴を発しはじめ、一時五十五分、顎ががっくり落ちてこときれた。

二十二日、伝染病研究室で解剖の結果、肝臓部の痛みは胆石によるものと判明したが、これは死因ではなく、脳脊髄膜炎菌による敗血症であったことが明らかとなった。一月五日以来の咽喉頭炎がそのはじまりであったのだ。ふつうなら、悪くてももう少しゆっくりした経過で脳膜炎に移行するこの細菌がこのように急激に敗血症をひき起したのは、彼女の極度の過労のゆえであったと診断された。

その他、はちきれるほど肥った全身の内臓は、脂肪の中に埋まるようで、大脳の目方は一三三〇グラムで、成人女子の平均よりも重いことも確かめられた。

阪東妻三郎（一九〇一――一九五三）

昭和十七年「無法松の一生」で、奇蹟的な名演技を見せた阪東妻三郎は、昭和二十八年七月一日午後、松竹京都撮影所で「あばれ獅子」撮影中、付人がうちわで煽いでいると、寒い、といった。その日帰宅してから不快感を訴え、床についたきり、ふたたび起たなかった。持病の高血圧の悪化によるものであった。

そして七夕の午後、しずかに息をひきとった。

日本映画史上、指おりの大スター・バンツマの死にしてはあっけなく、いましばらくの生命をかしてやりたかった俳優であったが、いまだ老衰の徴の現われないうちにこの世を去ったのは、彼の幸福であったかも知れない。

映画監督のマキノ雅裕は語る。

「高血圧というけれど、病気するほどの大酒飲みじゃなかったよ。もう少し休ませてやれば治ったんじゃないかな。しかし契約の問題もあるし、家庭の事情もある。死んだとき、彼の家には金らしい金がなかった。あれだけ稼いでいた阪妻がどうして松竹に借金したか、よく知らない」

その墓は、彼が晩年に住んだ京の嵯峨野の二尊院にあるが、その墓地の片隅に、さして目立たぬふぜいに建てられ、その墓石には「田村家累代之墓」とあり、横に「昭和十九年十月建田村伝吉」とあるのみで、田村伝吉は彼の本名だが、不世出のチャンバラ王阪東妻三郎の名はどこにもない。昭和十九年には妻三郎はまだ在世中だから、これは彼の意志である。

向田邦子（一九二九――一九八一）

エッセーの名人山本夏彦からエッセーの名人と嘆賞された向田邦子は、そのエッセーの中で書いた。

「私はいつでも（飛行機の）離着陸のときは平静でいられない。……このところ出たり入ったりが多く、一週間に一度は飛行機のお世話になっていながら、まだ気を許してはいない。散らかった部屋や抽斗の中を片づけてから乗ろうかと思うのだが、万一のことがあったとき『やっぱりムシが知らせたんだね』など言われそうで、ここは縁起をかついでそのままにしておこうと、わざと汚ないままで旅行に出たりしている」

向田邦子は昭和五十五年『花の名前』『かわうそ』『犬小屋』で直木賞を受け、多忙をきわめた。仕事には脂が乗り切っていた。昭和五十六年八月二十日、彼女は「充電のため」といい、台湾旅行に出かけた。

妹の和子は語る。

「整理整頓の悪い人で、部屋中新聞や雑誌で足の踏み場もないほどだったのが、一カ月前にいったら、それこそ何年ぶりどころではないきれいさでした。全部ダンボールに詰めてキチンとしてました。寂しいくらいでしたよ。虫の知らせでもあったのかしら。

そういえば最近こんなことを話しあったことがありました。どうせ死ぬなら、働いてお金をためて外国旅行に出かけ、お金のなくなったところで飛行機が空中爆発という死に方をしたいわ、と私がいったら、あの人は、それができたら最高ねって」

八月二十二日午前十時、向田は蝶採集のため、台北から高雄へむけて、台湾の旅客機ボーイング737で飛び立った直後、午前十時九分、飛行機が墜落して、百十人全員死亡の中の犠牲者の一人となった。

その飛行機は一九六九年に製造されたもので、機体腹部に使用されていたアルミ合金の腐食により、空中分解を起したものと見られている。

五十三歳で死んだ人々

最愛の人が死んだ日にも、人間は晩飯を食う。
――山田風太郎――

諸葛孔明（一八一――二三四）

「祁山悲愁の風更けて
陣雲暗し五丈原
零露の文は繁くして
草枯れ馬は肥ゆれども
蜀軍の旗光無く
鼓角の音も今しづか
＊

丞相病あつかりき」（土井晩翠『星落秋風五丈原』）

蜀軍をひきいて魏の大軍と対陣すること百余日、孔明は病を得て、八月末五丈原に歿した。その夜、色赤く芒角のある星が、東北から西南へ流れ落ちたという。占星術によれば、これは敗軍の徴であるという。

『魏書』には血を吐いたとあるが、肺を病んだのか胃を病んだのかは不明である。

魏軍の大将司馬懿仲達は、この対陣中、孔明が早朝より深夜にいたるまで、いかなる小事でも人まかせにせず軍務に精励しているが、食事は小食だ、という情報を聞いて、

「それでは孔明はもう久しくあるまい」

と予言した。

しかし、その司馬懿も、孔明を喪って退軍にかかった蜀軍を追撃しようとしたが、蜀軍が鼓を鳴らして反撃の姿を示すと、まだ孔明が生きているのではないかと怖れて、追撃をやめた。そこで「死セル孔明、生ケル仲達ヲ走ラス」という言葉が生じた。

いわゆる『三国志』の時代で、このころ魏は日本の耶馬台国に使者を送った。すなわち、ほぼ卑弥呼の時代。──

道元（一二〇〇──一二五三）

鎌倉時代、越前に永平寺を建て、『正法眼蔵』などを著わした道元禅師は、永平寺に住んでから十年目の建長五年の夏から衰えが甚だしくなった。もっともその一年くらい前から身体の異常を訴えていた。

その病状ただごとならずと見た弟子たちの請いにより、京で病を養うべく、八月五日、道元は永平寺を出て、やがて京の西ノ洞院の弟子覚念の邸にはいった。

後嵯峨上皇は官医をつかわして日々診察させた。それでも参集する道俗に、道元は説法することをやめなかったが、八月二十八日午前四時ごろ、死の迫ったことを知って、沐浴して衣をあらため、偈を残して死んだ。

病名については「腫物」という記録があるが、ともかくも旅行の出来る状態から死までの期間がきわめて短かった点から見て、おそらくガンのように悪性のものであったろう。

時は執権北条時頼の時代、同じころ京では親鸞が、鎌倉では日蓮がそれぞれの信者を集めていた。

「徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり」

──道元──

足利尊氏（一三〇五──一三五八）

楠木正成、後醍醐天皇、新田義貞などを一掃し、足利幕府を作っても、尊氏は身も心も休まるときがなかった。南朝の残党や、味方の重臣、弟、さらにはみずからの子の叛乱と戦いつづけなければならなかった。

そして、延文三年四月、ほっと一息つける状態になったとき、背中に癰瘡が生じ、あらゆる医術、祈禱、修法を試みたが、発病後十日目の四月三十日午前四時ごろ、京都で死んだ。

「哀れなるかな、武将に備ってより廿五年、向うところ必ず順うといえども、無常の敵の来るをば防ぐにその兵なし。身はたちまちに化して暮天数片の煙と立ち上り、骨は空しくとどまって卵塔一掬の塵となりにけり」（『太平記』）

そして彼の死後も、権力闘争の修羅の世界はつづいてゆく。

池大雅（一七二三──一七七六）

安永四年（十代将軍家治の時代）の春から大雅は病み、死を悟った彼は薬を飲まなかった。翌五年四月十三日、京の真葛ヶ原の堂でみまかった、という以外にはその死について何も知られていない。

大雅は無欲の人で、死んだとき米銭の貯えもなかったが、愛妻玉瀾のために数百点の作品を残していった。しかし玉瀾はみずから絵をかいて余生の生計をたて、亡夫の作品を守りつづけたという。

喜多川歌麿（一七五三──一八〇六）

この偉大なる浮世絵師も、その死亡状態のみならず、出生地、生涯すら明確でない。

ただ文化元年に、『絵本太閤記』に題材をとった絵で入牢及び手鎖五十日の刑を受け、以後画境いちじるしく衰退して別人のような劣作多く、文化三年九月二十日に死んだことが明らかなばかりである。

同時代の馬琴は、「歌麿には妻もなし子もなし、歿後無

祀の鬼となりたるべし」と、冷淡に書いている。
明治三十五年、浅草北松山町の専光寺で無縁仏となっていたその墓の台石が偶然発見され、それによってはじめて歌麿の歿年が判明したような始末であった。

為永春水（一七九〇——一八四三）

『春色梅児誉美』『春色辰巳園』など書いて、風俗壊乱の罪で、これまた天保十三年手鎖の刑に処せられた春水は、その翌年から急に修身的な著述に切りかえたが、その年の十二月二十二日に死んだ。
ここでも馬琴が、日記に「病は内損（胃腸病）」と記しているが、やはり処罰のショックで胃腸が変になったのであろう。道徳の権化馬琴は、同業のくせになお「性酒を貪り飽くこと知らず。……実に憎むべきものなり」と死者に鞭をあてている。
昭和後期のポルノ作家は幸福である。もっとも彼らは手鎖くらいかけられても食欲は衰えそうにない。

緒方洪庵（一八一〇——一八六三）

大坂に蘭学の「適塾」をひらき、大村益次郎、福沢諭吉、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎など、無数の英才を育てた洪庵は、江戸城奥医師を命じられ、文久二年八月出府した。それから十カ月目の文久三年六月十日、下谷御徒町の医学頭取屋敷で昼寝からさめたとき、突如大喀血を起し、その血のために窒息死した。
福沢諭吉はいう。
「急使いに私は実に胆をつぶした。その二三日前に先生の所に行って、チャンと様子を知っているのに、急病とは何事であろうと、取るものも取りあえず即刻うちを駈け出して、その時分には人力車もなにもありはしないから、新銭座から下谷まで駈けづめで緒方のうちに飛び込んだところが、もうこときれてしまったあと、これはマアどうしたらよかろうかと、まるで夢をみたようなわけ」

佐久間象山（一八一一——一八六四）

元治元年七月十一日、黒もじの肩衣、もえぎ御せん平、

馬乗袴に騎射笠をかぶり、西洋鞍をおいた馬で従者四人をつれ、幕末の大スタイリスト佐久間象山は、みずから書いた開国の勅諭草案をふところにしのばせて、山階宮邸からの帰途、午後四時ごろ、京三条上ル木屋町通りにさしかかったとき、突如現われた二人の刺客に襲われ、馬から斬り落され、乱撃されて殺された。
その日のうちに、三条大橋に斬奸状の立札が立てられた。
「……大逆無道天地に容るべからざる国賊につき、すなわち今日三条木屋町にて天誅を加えおわんぬ。ただし斬首梟木にかくべきのところ、白昼、その儀能わざるもの也。
元治元年七月十一日　　皇国忠義士」
下手人の中に人斬り彦斎がいたという風評もあったがはっきりせず、象山の妾の子、格二郎は新選組にまではいって犯人を捜索したが、ついに空しかった。

チャイコフスキー（一八四〇——一八九三）

チャイコフスキーは、全ヨーロッパの名声と賞讃が最高潮に達していた一八九三年、彼が自己の最高傑作と自負する交響曲第六番を完成し、十月二十八日、ペテルスブルグで彼自身の指揮で初公演した。
それから四日目の十一月一日の夕方、彼はライナー・ホテルでネヴァ河の生水を飲んだ。
当時ペテルスブルグではコレラが大流行していた。二日には、もう胃痙攣、下痢、嘔吐、発熱がはじまり、コレラの診断が下された。
五日には、全身汗にまみれ、かつて彼の大パトロンであったナデジダ夫人の名を呼びつづけていたが、六日午前三時ごろに息をひきとった。彼の唇は黒くなり、指はミイラのように乾燥していた。
同じ年に、フランスではモーパッサン、日本では河竹黙阿弥が死んでいる。

陸奥宗光（一八四四——一八九七）

若いころから肺結核を抱いていた陸奥は、日清戦争と三国干渉に、外相として心身を消磨しつくし、明治二十八年四月、三国干渉に屈服後、ついに斃れて、五月から大磯に病を養う身となった。
その療養中『蹇蹇録』を著わし、またハワイに静養し、いくどか快方に向ったが、たちまち悪化し、ついに明治三十年八月危篤におちいった。

その最後の枕頭を見舞った親友中島信行に、彼は、

「僕は妻子に別るるもあえて悲しまず、家事また念頭になし。ただ政治より脱することを遺憾とす」

と、いった。しんそこから政治好きだったのである。そして八月二十四日午後三時四十五分、息をひきとった。

　彼は権謀のかたまりのような人物で、それが戦時の外相として最も有効な適材適所となったのだが、なお生きて政治に関係したなら、案外ボロを出して名声を落し、いまなお外務省に銅像を建てられるような栄光を失ったかも知れない。その危険性は充分あった男で、戦後三年目に死んだのは、むしろ死時を得たというべきである。

花井お梅（一八六三――一九一六）

　明治二十年六月九日夜、浜町の待合の女将お梅は、彼女とは不仲の父と組んで待合を乗っ取ろうとする無頼の箱屋八杉峯吉を浜町河岸で出刃庖丁で殺害し、無期の判決を受けた。彼女は二十四歳であった。

　しかし、特赦をもって明治三十六年四月に出獄し、以後小間物屋や汁粉屋などをやってみたがうまくゆかず、ついには田舎芝居にはいって峯吉殺しを実演してまわったりしたが。――

　大正四年『道草』の中で、彼女について漱石は書く。

「彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。其女は昔し芸者をしていた頃人を殺した罪で、二十（ママ）年余も牢屋の中で暗い月日を送った後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るようになったのである。

『嘸辛いだろう』

容色を生命とする女の身になったら、殆ど堪えられない淋しみが其所にあるに違ないと健三は考えた」

　大正五年十二月十五日、「朝日新聞」は三面の片隅に次のごとく報じた。

「箱屋殺しの花井お梅、それは彼女が二十三（ママ）の時、社会から貰うた深酷なる名である。彼女は十七年の長い歳月を冷たい市谷の獄舎に送っていたが、色香もおとろう四十の年に出獄して、憂き身をやつしたその中に、いまわしき肺病に呪われて、浅草北元町二、薄井方から日に日に蔵前の精研堂病院に通っていたが、とうとういけなくなって、去る十一日同病院の二階八号病室に入院した。入院後三日目、一昨日の午後十一時半遂に彼女は死の手にさらわれた。五十四歳」

　お梅の死んだ大正五年十二月十三日は、一年前彼女に同情した漱石が九日に死に、そのお骨あげの日であった。

「都新聞」によれば、お梅は死の前日、医師に、

「私は何事も覚悟しました。罪も悔い改めました」

と、いったという。しかし、彼女は犯した罪以上に、酷薄な世間によって罰せられた一生を持ったのではあるまいか。

　陰惨きわまる彼女の生涯も、新派の芝居と浮いた浮いたの流行歌に洗われれば、後代まで「明治一代女」のあで姿を残すだけとなる。

河合栄治郎（一八九一――一九四四）

　二・二六事件に際し、東京大学経済学部教授河合栄治郎は、「暴力は一時世を支配しようとも、暴力自体の自壊作用によって瓦解する。真理は一度地に塗れようとも、神の永遠の時は真理のものである」と批判した。当時においては真に大勇の人でなければはけない批判であった。

「河合栄治郎は、ファシズム批判において思想家としての真骨頂を発揮した。それは一九三五年（昭和十年）前後の数年間のことである。（中略）多くの思想家、学者、ジャーナリストが、あるいは曖昧に、あるいは懐疑的に、あるいは沈黙してゆくなかで、独り毅然たる態度で、自らの主張を明確に宣明した点で、深い感動を呼んだのであった。

　河合栄治郎が、人間として矛盾に満ちた存在であり、独善的、英雄的、貴族的であったとしても、この決定的瞬間における断乎たる態度、そしてその後の裁判闘争を通して、世間から置き去りにされた孤独な戦いにおいて、自らの思想を操守し、唯一筋の道を歩みつづけた点において、河合栄治郎は不滅の歴史的存在となった」（粕谷一希『河合栄治郎』）

　昭和十三年から河合の諸著書は発禁になり、十四年には東大を追われ、十五年には彼の社会主義を叛逆思想として起訴されるに至った。彼は裁判にかけられることで自分の思想を披瀝できるとして、「天われを見捨てず」と、むしろ勇躍して法廷に立った。

　その結果、第一審では無罪となったが、結局大審院で罰金刑に処せられた。このとき彼は、「むしろ自分は禁錮刑を望む。その方が、戦後外国に対する自分の発言に重みがつくだろう」といったという。

　彼は数年後の日本を明確に予想していたのである。裁判後、彼が予言した通り、日本は破滅的大戦争へ突入した。その中で、大学を追われ、出版を禁じられた河合は、黙々

として自宅で読書と研究をつづけた。
しかし、彼の身体はその数年の間にむしばまれていた。はじめ糖尿病の診断を受けたが、武見太郎医博の診察の結果、バセドー氏病であることが判明した。
昭和十九年二月十五日夜、元門下生の吉田省吾が身の上相談のために訪問すると、河合はいちじるしくやつれていて、どうも脚気らしい、といった。戦況や食糧の話などしているうち、突然河合は身体を左右にふり、「気分が悪くなった。ちょっと失礼」と座をはずした。
すぐに奥でただならぬ声がして、河合が倒れたことが明らかになった。夫人の請いに、吉田は医者に走った。が、彼が医者をつれて帰ったときは、すでに夫人が、子供を抱いたまま、河合の死顔をなでているところであった。午後九時十五分。
風が吹き荒れ、樹々がざわめく、敗戦前年の暗い夜のことであった。

ロンメル（一八九一――一九四四）

チャーチルをして、「ロンメル……ロンメル……」と悪夢のうわごとまでいわせ、第二次大戦の敵味方を通して最大の名将の名を残したロンメルは、一九四四年六月六日、連合軍がノルマンジーに上陸した後、七月十七日、車で前線視察中、イギリス機の銃撃を受けて頭部に重傷を受けた。
三日後の七月二十日、ヒトラー暗殺未遂事件が起った。
右の負傷がほぼ治癒した十月十五日の正午、ヘルリンゲンの自邸にいたロンメルを、陸軍人事部長のブルグドルフ将軍一行が訪れた。
密談の後、ブルグドルフ将軍が別室に去ったあと、ロンメルは沈んだ顔で夫人にいった。
「ヒトラー暗殺計画に私が加担しているという嫌疑をかけられた。私のあずかり知らないことだ。しかしヒトラーは、私に、毒を飲むか、法廷に立つか、どちらかを選べといって、いまブルグドルフが毒を持って来た。三秒で効くそうだ」
夫人は蒼ざめ、夫に法廷に立つように頼んだ。
「だめだ。生きてベルリンに着けないことはわかっている」
ロンメルは首をふった。
「私がここで死ねば国葬になるそうだ。いまとなっては、それ以外になすべき道はない。私は彼らとともに出かける。半時間以内に私が事故に逢って死んだという電話があるだ

ろう」
やがて彼は、ブルグドルフたちといっしょに車で出かけていった。二十五分後、電話が鳴った。
「悲しいことが起りました。元帥が車上で吐血され、亡くなられました」
夫人と子息マンフレートは、告げられたウルムの病院へいって、ロンメルの屍体を見た。主任軍医が、元帥が病院に運ばれて来たときはすでに死亡しており、それは午後一時二十五分だった、といった。
夫人はのちに語る。
「夫の顔にはさげすみの色が深くたたえられていました。生前、一度も見たことのない表情でした」
十七日にヒトラーから電報が来た。
「元帥の御逝去に深甚なる哀悼の意を表する。ロンメル元帥の名は、北アフリカの英雄的戦闘とともに、ドイツ国民に永遠に記憶されるであろう」
十八日、ワーグナーの「神々の黄昏」の奏楽の中に、最高の儀礼をもって国葬が行われた。

ゲーリング（一八九三――一九四六）

ナチス副総統、空軍元帥ヘルマン・ゲーリングは、よかれあしかれ典型的なドイツの「豪傑」であった。体格の点でも百二十七キロあった。
彼の豪傑ぶりは、戦争中のあてにならぬ大言壮語、手段をえらばぬ美術品蒐集癖などのマイナス面もあったが、しかしそのますらおぶりは、敗戦後、一九四五年十月ニュルンベルグ裁判がはじまってから、法廷での傲然たる態度となって現われて、連合国側の裁判官たちを圧倒した。
彼は戦争犯罪裁判というものの合法性を認めず、いわんや連合国側に裁く権利はないと主張して、同じ被告席にすえられた仲間のナチ指導者たちを叱咤鼓舞した。また戦争中、ドイツ空軍の劣勢についてしばしばヒトラーから罵倒され、面目を失うことが多かったにもかかわらず、ヒトラーへの忠誠心を失わず、彼をかばった。
ヒトラーの自殺は一種の臆病ではないか、という問いに対して彼は答えた。
「彼はドイツの総統だ。ドイツの総統が敵の法廷で、犯罪者として私のように被告席に坐っているなど考えられない

ことだ。彼は最後に私を憎んだが、しかし結局ヒトラーはドイツの象徴だった。日本人でさえ、天皇を裁判にかけないように主張しているではないか！」
　連合国側はゲーリングを、極上の軍服を勲章と香水で飾った喜劇的なデブの、ナチの邪悪の代表に仕立てあげようとしたが、必ずしもそれは成功しなかった。それはとくに彼の鮮やかな死によってだしぬかれた。
　一九四六年九月下旬、判決を前にして夫に面会にいった妻のエミーに、金網越しにゲーリングはいった。「私たちの運命はまもなく決まるだろう。しかし、たとえどんなことがあっても、私は首を絞められたりはしないよ」
　十月一日、ニュルンベルグ裁判は宣告を下した。ゲーリングは絞首刑だった。
　彼らを検査していた連合国側の医師ギルバート博士は、独房に帰ったあとのゲーリングについて記す。「彼は蒼ざめ、眼は飛び出さんばかりだった。死刑か！　彼は寝台に腰を下ろしていい、本に手をさしのばした。平気をよそおうつもりだったらしいが、その手は震えていた。彼の眼は濡れて、感情の発露を抑えようと必死になり、あえいでいた。彼は不確かな声で、しばらく一人にしておいてくれと頼んだ」
　絞首刑の執行は、十月十六日午前二時と決定された。
　十月十五日午後十時四十五分ごろ、独房からひき出されるのを待ってベッドに横たわっていたゲーリングのようすに異常を認め、監視していたアメリカ兵が駈けこんでのぞきこむと、ゲーリングは死んでいた。
　収監時、ゲーリングは徹底的に取調べられて、所持していた青酸カプセルをとりあげられたことがあったが、それは囮であった。収監後も毎日厳重な検査が行われたことはいうまでもないが、何も発見されなかった。にもかかわらず、ゲーリングはなお二つのカプセルを持っていた。
　彼は刑務所長に遺書を残していた。
「――私の身体検査を行なう任に当った者を非難しないでもらいたい。なぜなら、カプセルを発見することは、事実上不可能だったのである。もし発見されるにしても、純粋に偶然の機会がなければだめだったろう」
　彼は皮膚を切開して、青酸カリのカプセルを埋めこんでいたといわれるが、さてそれをどうしてとり出したものか？
　ゲーリングの死のとばっちりは、当時開かれていた東京裁判に及んだ。すなわち東京裁判の東条以下の全被告は、これ以降法廷から巣鴨プリズンに帰るたびに、全裸にされ、

口腔をのぞかれ、入歯を調べられ、四つん這いになって肛門の検査まで受ける始末になった。

ベーブ・ルース（一八九五――一九四八）

　一九一四年ホームラン第一号を打ち、一九三五年第七一四号のホームランを打って引退したベーブ・ルースは、以後監督の夢を抱きつつ、ついに果せなかった。
　一九四六年の末、ルースは左の眼に激痛をおぼえた。左の眼から喉頭にかけてガンが発生していたのだ。
　それでもルースは、一九四八年六月十三日、ヤンキー・スタジアムの創立二十五年祭に出席したが、一週間後、メモリアル病院に入院した。トルーマン大統領も見舞いの電話をかけて来た。
　見舞いにきた友人に「どうやらおれの身体は白蟻に食われているようだ」と彼はいった。
　七月二十八日、ルースは、映画「ベーブ・ルース物語」の試写会に出席したが、途中で気分が悪くなって病院に戻った。「ゆっくり休みたい。もう無理はしない」と、彼はいった。しかし八月十六日に彼は死んだ。

フェルミ（一九〇一――一九五四）

　原爆が発明されるまでに関与した物理学者は数多いが、その中で最大の原動力がこのイタリア生まれのエンリーコ・フェルミである。彼こそは三十三歳のとき、原子核に中性子を打ちつけて、それによって人工的に放射線を出す能力を原子核に持たせる可能性を知った最初の人であった。
　フェルミは、一九三八年ノーベル物理学賞を受賞したが、妻がユダヤ系のためファシズムの迫害を怖れて、翌一九三九年アメリカへ渡り、やがて帰化した。
　彼とその研究グループが、シカゴ大学でウラニウムの連鎖反応の実験に成功したのは、一九四二年十二月二日の午後三時半だった。
　実験が成功した直後、参加者の一人コンプトン博士は、政府のウラン計画の責任者コナン博士に暗号で電話した。
「イタリアの航海者は新世界に到着しました！」
　当時、日米両軍はガダルカナルをめぐって死闘をつづけていたが、この刹那に三年後のヒロシマ、ナガサキの運命は決定された。
　フェルミは、一九四五年七月十六日の、ニューメキシコ

州アラモゴルド砂漠における最初の原爆実験にも、鉛に包まれたシャーマン戦車の中で立ち会った。

彼は、一九五四年ヨーロッパにゆき、いくつかの学会に出席したが、シカゴに帰って来たときは異常に痩せ細っていた。診断の結果、消化器系統のガンに冒されており、もう手術しても追いつかない状態になっていることが判明した。

あまり逸話のないこの物理学の天才は、その身辺にいた人の表現によれば、「ソクラテス的平静さ」をもって、十一月二十八日にこの世を去った。最後の論文は「銀河系磁場と宇宙線の起源」であった。——それは同時にアメリカがビキニ環礁で水爆の実験を行った年でもあった。

彼の手によってとき放たれた怪獣は、さらに悪夢のような大怪獣に成長していたのである。

火野葦平（一九〇七——一九六〇）

昭和三十四年六月、高血圧による眼底出血のため右眼が失明状態になった火野は、その年の十二月七日朝、ヘルス・メモと題したノートの見開きの二頁に、「遺言」を書いた。「高血圧症状が起ってから、まったく健康に自信がなくなった。いつ倒れるかわからない」云々。

しかし彼は、この二頁を糊づけにし、あと日々の健康状態を記して翌昭和三十五年一月二十四日に至り、その夜また遺言を書いた。「死にます。芥川龍之介とはちがうかも知れないが、或る漠然とした不安のために」云々。

そしてアドルムを飲んで自殺した。

これが昭和十三年『麦と兵隊』で英雄となった作家の二十二年後に迎えた運命であった。高血圧もさることながら、彼は「戦後」の日本についに違和感を断ち切れなかったのであろう。

その翌朝、自宅のある九州若松を寒冷前線が通って雪模様となり、冷え切った書斎で葦平が死んでいるのを家族が発見したが、それまでの彼の決意を夢にも知らなかったので、だれもが心筋梗塞による病死だ、と考えた。ノートには特に気づく者もなかった。彼の愛した母親のマンは、片時もそばを離れず、蒲団の中に手をさしいれ、足首を撫でさすり、息子の死を信じられぬ母の祈りをこめて、「まだ、ぬくい」とつぶやきつづけた。

のちにこのノートは発見されたが、母と妻にはなお知らされず、その三回忌の読経中にマンが、また十三回忌の未明に妻が、それぞれ葦平に呼ばれたかのごとく死去して

から、すなわち葦平の死後十二年目に、はじめてこの秘密が世に公表された。

巌本真理（一九二六——一九七九）

巌本真理が左胸の小さなシコリに気づいたのは、昭和五十一年、五十歳の春で、梅雨時分にはそれがピンポン玉くらいになり、彼女自身これはガンよと友達にいっていたが、病院へゆかず、予定通りに「巌本真理弦楽四重奏団」の地方公演をつづけ、十二月の定期演奏会をすませて慶応病院に入院したのは、暮の二十五日のことだった。やはり乳ガンであった。

翌年一月下旬、左乳房の切除手術が行われたが、このとき彼女は執刀の阿部令彦教授に訴えた。

「先生、ヴァイオリンがひけなくなってしまうなら、救っていただいても生きる意味はないのですが。……」

手術後真理は、三日目から手をあげる練習をはじめた。手を一センチ動かしても激痛が走る状態で、凄じい努力で機能回復に挑み、二週間目にはヴァイオリンの試奏をした。そして四十日後には演奏活動に復帰した。

が、ガンは二年後、こんどは右乳房に転移して現われた。彼女は病院で抗ガン剤を注射してもらいながら定期演奏会をつづけたが、昭和五十三年十一月十五日に再入院し、翌年一月末ふたたび手術を受けた。

二月半ば彼女は退院し、また演奏活動を再開したが、四月十二日の「東京定期演奏会」が最後のものとなった。それを聴いた一女性は語る。

「いつでもスッとお辞儀してニコリともしないで引っ込む人だったのに。あのときはしみ入るような美しい笑顔で何回も深々とお辞儀をくりかえされたので変だなと感じたんですよ。あのとき死を覚悟していたんでしょうね。……」

（『週刊新潮』五十四年五月二十四日号『墓碑銘』）

五月はじめから階段も上れぬ状態になり、流動食も受けつけなくなり、五月六日午後救急車で慶応病院に入院した。すでに乳ガンは肝臓、腹膜、骨髄に転移しており、やがて尿毒症を併発した。

付添婦が身体にさわってもイヤがるので、親友の女性が看護にあたった。十一日午前三時ごろひどい寝汗のため寝衣を着かえたが、しばらくしてうーんとうなり声をたてた。口のはしから細い血が流れ出していた。肺鬱血水腫をひき起したためであった。

そして午前三時半にこときれた。急報をきいて知人たち

が集ってきたころ、空は赤い朝焼けに染められていた。
あとには八十三歳の母親マーグリットと、ヴァイオリンの名器「ラウワッツァ」だけがとり残された。
なお彼女の父方の祖母は、明治期『小公子』を訳した若松賤子である。（主として山口玲子『巌本真理生きる意味』による）

グレース・ケリー（一九二九―一九八二）

「真昼の決闘」「裏窓」「喝采」等に主演、その典雅な美貌でイングリッド・バーグマンの再来といわれ、ハリウッドのスターとなったグレース・ケリーは、一九五六年、二十七歳のとき、一・五平方キロ、人口三万の小国ながらモナコ公国の王妃となって一男二女をもうけ、一九八一年四月、夫君のレーニエ大公とともに訪日したこともあるが、翌一九八二年九月十三日の朝、南仏コートダジュールの別荘から、十七歳のステファニー王女と同乗してモナコへ帰る途中、王宮へ車であと十五分か二十分という場所の急な曲り角で運転をあやまり、車ごと四十メートルの崖下へ転落した。
すぐうしろにつづいていたトラックの運転手は、その車が千鳥足になったとたん、ブレーキもかけずに崖から飛び出すのを目撃した。
グレースは危篤状態で病院に運びこまれたが、十四日午後十時半に死亡した。
検屍の医師は、グレース王妃が運転中、脳溢血を起したのが事故の原因だと発表したが、運転していたのが未成年の十七歳のステファニーであったとか、夫のレーニエ大公との不和による自殺だとか、イギリス製の車のブレーキに欠陥があったとか、さまざまな臆説がながれた。この騒ぎをにがにがしく思ったフランス国営放送のテレビ解説者が、「彼女の死は人類の運命になんの影響もない。同様な死に方はどこにでもあるふつうの事故死だ」と「解説」して、非難が殺到し、即日番組をクビになった。
富豪の令嬢からハリウッドのスターへ、さらに王妃へと、お伽噺さながらの華麗な運命に祝福された女性をも、死神はかくのごとく無造作に襲う。
イングリッド・バーグマンは、その半月前の八月二十九日に乳ガンで死んでいた。

有吉佐和子（一九三一―一九八四）

近年まれな酷熱のつづいた昭和五十九年の夏、八月二十九日、有吉佐和子は母とお手伝いの娘とともに夕食に出前の鮨を食べ、テレビの巨人―大洋戦を見たが、中継が九時で終ったので、あとはラジオで聴くといって、二階の書斎兼寝室に上っていった。このときは平生と何の変るところもなかったという。
その後八十歳の母親が十二時と午前三時、寝室をのぞいたときにも別に異常はなかったという。
翌三十日の朝九時半ごろ、ベッドにうつぶせに伏している佐和子のようすのただごとでないことに気づいた母が、すぐにかかりつけの村島医師を呼んだ。
村島医師談。
「私が有吉家に着いたときは、有吉さんはベッドの上に仰向けに寝かされていましたが、顔面が紫色に鬱血し、死後二、三時間たっていたようでした。外傷や嘔吐のあとが見られなかったので自殺や他殺は考えられません。睡眠薬を多量に飲んだときは必ず吐くものなんです。私の考えでは、睡眠中に急性心不全でも起したのではないかと思います」
しかし、文学座の戌井市郎代表はいう。
「五月の『華岡青洲の妻』上演のとき、舞台稽古に立ちあった有吉さんは舌がもつれ、役者に掛声をかけるのもしつこく、言動がオーバーで常規を逸した感じがありました」
また六月二十二日のテレビ番組「笑っていいとも！」に出演したが、十五分前後の自分の分担時間が終っても委細かまわず一人でしゃべりまくり、司会のタモリが伝言メモをわたして注意してもそれを破りすて、いいたい放題やりたい放題の独演ぶりを発揮してみなを啞然とさせた。
ただ彼女はもともと躁鬱症の気味があり、たいていは躁状態でそれによる奇行めいたふるまいは以前から珍しくなかった。
それがときに突然鬱の状態におちいることがあり、その四年前「毎日新聞」の連載小説を六十回で打ち切ってしまったことがあったが、それも鬱状態におちいってしまったからであった。それ以後彼女は小説らしい小説は発表しなくなった。
かつて彼女と二年間結婚したプロモーターの神彰はいう。
「有吉はよく言っていたが、彼女にとって、生きるということは書くことなのである。書くことにのみ生きる。すな

わち書くことは彼女の人生の第一義であって、しかも第二、第三は存在しないのである。この有吉が、もし書けなくなったとしたら。……」

しかも『華岡青洲の妻』『恍惚の人』『複合汚染』などを書き、相ついでベストセラーを出した有吉は、書くものはすべて読者をあっといわせ、ベストセラーになるものでなければならなかった。

死の少し前に、有吉は書き下ろしの作品をA社に渡したが書き直しを請われ、憤然としてB社に見せたがこれまた難色を示されたことに、ショックを受けた。その作品はSF的なもので、すでにアメリカに同アイデアの作品があったという。

屍体は、東京都監察医務院に運ばれて解剖に付され、精密な検査を受けたが、その結果「死因は不詳」と発表された。ふしぎなことである。

それにしても前夜、八十歳の老母はなぜ二度も娘の寝室をのぞきにいったのか？

五十四歳で死んだ人々

> 死の一秒前の生者「おれを忘れるな、忘れてくれるな！」
> 死の一秒後の死者「おれを忘れろ、忘れてくれ！」
> ——山田風太郎——

太田道灌（一四三二——一四八六）

「露おかぬかたもありけり夕立の空より広き武蔵野の原」
「わが庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」

長禄元年、こういう景観の武蔵野にはじめて江戸城を築いた太田道灌は、歌のみならず関東管領扇谷定正の参謀としていくさにもたけた名将であった。

そのため、定正と覇を争う上杉顕定は道灌を目の上の瘤とし、その権謀によって定正は道灌を好ましからぬ者と思いはじめ、ついに文明十八年、道灌を自邸に招いて浴室で刺殺した。

数人の槍手により刺されて絶命する前、道灌はこんな歌を口ずさんだといわれる。

「きのうまで、まくめうしうを、いれおきし、へなむしぶくろ、いまやぶれけむ」

まくめうしうは「莫妄想」、へなむしぶくろは「へまむしぶくろ」、この場合、煩悩をつつんだ肉体、という意味であろう。

足利義政（一四三六——一四九〇）

相つぐ天災、飢饉をかえりみず豪奢な趣味生活にあけくれて、ついに応仁の大乱をひき起した足利八代将軍義政は、大乱が起ってもこれに傍観者の立場をとり、権謀好きで驕慢な妻日野富子とも断絶し、晩年にはいわゆる室町芸術の枠をつくした東山山荘の建築に没頭した。

実に、この無責任な将軍は、しかし、建築、庭園はもとより、能、茶、花道、絵画、連歌など、およそ時代の名を冠するあらゆる日本文化の中で最高峰ともいうべき、いぶし銀のごとく幽玄な室町文化の完成者でもあったのである。果てしない大乱を見つつ、彼はニヒルの極北とも、禅的な悟りとも、芸術の法悦ともつかぬ心理状態にあったであろう。

そのころの彼の歌。

「何ごとも夢まぼろしと思ひ知る身にはうれひもよろこびもなし」

その東山山荘の全容がまだ完成しないうち、彼はそこに移って工事のさしずをしていたが、文明十八年五十歳のとき軽い中風症状を起し、また小便が近くなった。

そして、山荘の一部としての銀閣寺の建築にとりかかった延徳元年の四月十二日、脳溢血が再発して半身不随になった。その年の暮には言語障害が甚だしくなり、翌延徳二年一月五日から危篤状態におちいり、七日午後四時ごろに死んだ。

関東で太田道灌が殺された四年後のことである。

デカルト（一五九六——一六五〇）

「我思うゆえに我在り」という有名な哲学的命題を発見したデカルトは、二十歳前後まで虚弱であったが、それ以後

次第に健康になった。彼の健康法は、食養生と適度の運動と、そして心の平静さを保つことで、彼は意識して、これらを成り立たせる生活の環境とリズムを維持することを何より大事に考えていた。

それで、一六四九年、学者好きのスウェーデンのクリスチーネ女王に、ストックホルムに移住して仕えるように招かれたとき、その北国の都の寒気がいままでの生活の環境とリズムを狂わせはしないかとためらった。しかし女王の懇望もだしがたく、ついにストックホルムに赴いたが、やはりこれが命とりになった。

翌一六五〇年二月一日、宮殿から帰って来た彼は、全身に悪寒をおぼえたが、翌日も教会の儀式に参列した。しかしそのおつとめの終りまで、彼は立っていることが出来なかった。

その日から彼は肺炎の症状を呈し、高熱を発した。医者は刺絡の手術（静脈から悪血をとるという当時の医術）を施そうとしたが、自分はリューマチと信じていたデカルトは、なかばうわごとのごとく「フランスの血を採ってはならぬ」といいつづけて、これを拒否した。

死の前々日、自分がリューマチでなくほかの病気だと知った彼は、はじめて二回にわたり大量の瀉血手術に応じたが、もう手おくれだった。（リューマチは刺絡無効、肺炎なら刺絡有効ということになっていたのか？）

二月十一日午前四時、彼は息をひきとった。

日本では由比正雪が死んだ前年のことである。

中江兆民（一八四七――一九〇一）

明治三十三年の十一月から、兆民はしきりに咳が出てとまらなかった。彼は喉頭カタルだと考えていた。

翌三十四年三月下旬、関西に旅行したが、のどの痛みがいよいよ烈しくなったので、四月、医者の診察を受け、自分が喉頭ガンにかかっていることを知った。

彼は医者に、あとどれくらい生きられるか、正直に教えてくれ、といった。医者はいいにくそうに、「一年半くらい」と、いった。

宿に帰って彼は書いた。「一年半、若し短といわんとせば、十年も短なり、百年も短なり。……もし為すありてかつ楽しむに於ては一年半是れ優に利用するに足らずや。嗚呼いわゆる一年半も無なり、五十年百年も無なり、すなわちわれらは、虚無海上の一虚舟」

五月にのどの切開手術を受けたあと、寝たきりで、枕を

抱いてうつぶせになった姿勢のまま、豆腐だけの食事で、彼は随筆評論『一年有半』を書き出した。

そして、九月に発行された『一年有半』と、ついで十月に出た『続一年有半』は大ベストセラーとなった。

「居士は咽喉に穴一ツあき候由、吾等は腹背中臀ともいわず蜂の巣の如く穴あき申し候」という状態で同じく病床にあった子規は、十月二十五日、これを読んで『仰臥漫録』の中で冷評した。「一年有半ハ浅薄ナコトヲ書キ並ベタリ、死に瀕シタル人ノ著ナレバトテ新聞ニテホメチギリシタメ忽チ際物トシテ流行シ六版七版ニ及ブ。……生命ヲ売物ニシタルハ卑シ」子規にも羨望が過ぎてヤキモチの心理があったかも知れない。

兆民は十一月から症状が重くなり、十二月十三日に死んだ。医者から一年半と宣告されたが、彼の余命は八カ月しかなかったのである。

兆民の長女の思い出によると、

「父が亡くなりましたとき、門弟の幸徳さんが男泣きに慟哭していたことを私は今でもあざやかに憶えております。弟の丑吉が、幸徳さんのありさまがあまりすさまじいので、近くで不思議そうに眺めておりました」

その幸徳秋水の記録。

「……十月『続一年有半』刻なるの後、先生苦痛ますますはげし。しばしば石盤に書きて曰く、我今や一の欲望なし、一の執着なし、ただ死の速かならんことを欲するのみと。十一月下旬に至りて病ますますあつく頭脳昏々として、時として夢と現とを弁ずる能わず、筆談の文字おうおう顚倒し、或は画を成さざるに至る。

十二月初旬、病とみに革まり、この月十三日午後、溘焉としてついに起たず。

翌十四日、先生の遺骸を大学病院に送って解剖に附す。山極博士刀をとりて喉頭より一気に割きて臍下に至る。予いまだ人体解剖の状を知らず、一見して竦然面を掩わざるを得ざりき。しばらくして肋骨を剪り、肺胃を出し、咽喉を検す。包丁の牛を割くに似たり」

十七日の葬式は、彼の遺言により、「告別式」という形で行われた。これが日本における「告別式」の始まりである。然るに、すべてをあいまい化してしまう日本人は、やがて「告別式」のほかにも依然二重の手間をかけて「葬式」は行い、兆民の考えた「告別式」と別の形態のものにしてしまった。

兆民は墓さえ作らせなかった。

「霊魂なるものは火なり。肉体は薪なり。薪尽きて火滅す。

かくのごときのみ」

――中江兆民――

ラフカディオ・ハーン（一八五〇――一九〇四）

明治三十六年春、ハーンは東大当局と衝突して講座を失った（後任には英国留学から帰朝した夏目金之助があてられた）。そして翌三十七年春から早稲田大学に出講することになった。彼は日本人の妻節子との間に、十歳、六歳、四歳の三人の男の子と、前年生まれたばかりの女の子があった。

九月十九日に、彼は突然狭心症の発作を起こした。彼は胸をおさえて節子にいった。

「私、新しい病気、得ました。……この痛み、もう大きいの、参りますならば、多分私、死にましょう。私、死にますとも、泣く、決していけません。小さい瓶、買いましょう。三銭、あるいは、四銭くらいの、です。私の骨いれて、田舎の寂しい小さな寺に、埋めて下さい。私死にましたの、知らせ、いりません。もし人が尋ねましたならば、はあ、あれは先ごろ亡くなりました。それでよいです。あなた、子供とカルタして遊んで下さい」

節子は医者を呼びにやった。そのあとで痛みは消えた。やって来た医者に、ハーンは笑っていった。

「ごめんなさい、病、いってしまいました」

ハーンは、妻が煙草を好まないので、遠慮して、食後はいつも庭に下りて煙草をのむのを習いとしていた。二十六日夕方、庭で煙草をのんでいたハーンは、薄闇の中から座敷に上がって来て、蒼ざめた顔色で、

「ママさん、先日の病気、また参りました」

と、いい、

「人の苦しがるのを見るの、不愉快でしょう。あなた、あっちへいって、なさい」

と、いったが、節子はびっくりして、彼をベッドに寝かせた。

寝てしばらくすると、もうハーンの息は絶えていた。その顔には苦痛の色はなく、微笑の影が残っていた。

旅順では日露両軍が死闘をつづけているころであった。

当時早稲田大学英文科の学生であった生方敏郎は記す。

「夏期休暇が終り授業が開始されて間もない頃のことだった。土曜に私たちのために古代英文学を講じた時には、何の変った様子もなかったのに、日曜をおいて月曜の受持時間には姿が見えなかった。その朝（?）心臓麻痺で死んだのだ。

越えて、一、二日してから、牛込富久町のこぶ寺に彼の葬式があった。仏式でやった。法学博士梅謙次郎氏がハーン先生の遺族の世話をして親族席にいた。五十歳前後に見える白無垢を着た日本婦人、それはハーン先生の夫人であろう。十二、三歳位とそれよりも小さい二人の男児は坊ちゃんであろう。

遺族の焼香がすむと、さっきからしびれを切らして座っていた学生たちが、起っていって焼香した。学生の数は三、四十名くらいだったろう。

世界的文豪の葬式は四、五十分で滞りなくすんだ。

歩くとだくだく汗が止めどなく流れる暑い日だった」

（生方敏郎『明治大正見聞史』）

児玉源太郎（一八五二――一九〇六）

明治三十九年七月二十一日、参謀総長児玉は微熱をおぼえ、牛込薬王寺町の自邸にひきこもって来客をことわっていたが、翌二十二日、彼が南満州鉄道総裁に適任と認めた後藤新平が来訪したので、これと面会した。

後藤が辞去したあと、児玉は家族と愉快に談笑し、やがて寝室にひきとった。午後十時、三男の常雄が大連から発した電報を召使いがとどけたときも、児玉は異常なく、これをひらいて読んだあと傍の小机におき、安らかな眠りにおちた。

七月二十三日朝、彼が起きて来ないので、家族が寝室をのぞいて見ると、児玉は何の苦悶の影もなく、蒲団の中で死んでいた。

死因は脳溢血と認められた。日露戦役から凱旋してからわずか八カ月の後であった。

吉田東伍（一八六四――一九一八）

新潟の中学を出ただけで、あとは独学で歴史学者となった吉田東伍は、明治二十八年、三十一歳のときに、日本最初の全国的地誌の著述を思い立った。それは国家的事業として行うべき性質の書物であったが、彼は独力でこれにとりかかったのである。

生活は貧しく、実生活上家族を捨てて下宿を転々としながら、彼は机一つに向いつづけた。朝六時に起きると、歯をみがく時間も惜しみ、申しわけ程度に顔を洗い、食事は朝も昼もパンだけ、夜は雑炊を食べて十時就寝という苦行僧のような日々を重ねた。終日笑うことなく、話すことな

く、運動もせず栄養は悪く、痩せて青ざめた顔色をして、いちじ結核と疑われたこともあった。

十三年を費して『大日本地名辞書』が完成したとき、彼は「悪戦僅に生還するの想あり」と記した。字数にして千二百万字、紀田順一郎は、「おそらく個人の著述としては最大規模であろう」といい、谷川健一は「ひとりの人間の志と気迫と執念がかくも見事に業績として結晶した例を私は知らない。光栄ある辞書よ」と讃える。

彼はそのとき四十四歳になっていたが、以後も『倒叙日本史』十一巻を完成し、さらに『国史大事典』の編纂に着手した。しかしこの仕事半ばの大正六年、五十三歳のころから健康すぐれず、起居振舞いにも異常が見られるようになったが、彼は医者の診察を受けるのをきらった。

翌七年一月十九日、転地療養のため銚子に赴き、旅館吉野屋に泊った。翌朝ふとんに寝小便をした形跡があったが、お客が五十代半ばの大学者なので、女中は遠慮して知らない顔をした。それがかえってアダとなったのである。

さらに一泊したあと、夜があけても彼はこんこんと眠りつづけ、夜九時になって女中が灯をつけにきたとき、彼はすでに手足にけいれんを起していた。はじめて医者が呼ばれ、重度の尿毒症という診断を下した。

一月二十二日午後七時十五分、この独学の大碩学は、老いるにはまだ間のある年齢でこの世を去った。（紀田順一郎『知の職人』より）

レーニン（一八七〇——一九二四）

一九二二年五月末、脳溢血の発作で倒れたレーニンは、右手足が麻痺状態になり、一時モスクワ郊外の保養地ゴルキで静養し、小康を得たので、モスクワに戻って党務に励んだが、十二月十六日また発作を起し、以後病床から離れられなくなった。

スターリンは彼を外部から隔離した。

「ベッドに縛りつけられ、外界から隔離されたレーニンは、警戒心と怒りで燃えあがらんばかりであった。彼の懸念の源泉はスターリンであった。スターリンのふるまいは、レーニンの健康についての医師たちの報告が、思わしいものでなくなってゆくにつれて、ますます大胆なものになっていった」（『レオン・トロツキー回想録』）

スターリンはレーニン夫人を怒鳴りつけて、レーニンを激怒させた。しかし半身不随の彼は、どうすることも出来なかった。

翌一九二三年三月六日に、レーニンは三度目の発作で言語障害を来した。ある日見舞いにいったスターリンは、帰ってから政治局員にいった。

「オヤジは永遠に苦痛から解放されるための毒薬をくれと私にいったよ」

そのとき、胸の悪くなるような微笑が彼の顔に刻みこまれていた、と、トロツキーは記している。

その翌年、一九二四年一月二十一日の夕刻、夫人が電報のためにわずかの間病室を離れて、帰ってみると、「植物人間」レーニンは何度目かの発作のために死んでいた。

しかし、トロツキーの記するところによると、そのとき傍のテーブルに空のアンプルが数個転がっており、レーニンは彼の悲劇的な要求（アンプルの供給）をかなえてくれる人物を、スターリンだけに見出したのである、ということになる。

さらにまた、レーニンが後事を託そうとしたトロツキーはそのとき旅行中であったが、スターリンにだまされて葬儀に参列することが出来なかったが、「それはレーニンを解剖させせないためであった」と、彼はいう。

レーニンの屍骸はミイラにされて、赤の広場にあるレーニン廟にいまもガラスの棺にいれられて横たわり、左右に二人の衛兵が着剣した銃で二十四時間立哨し、それに参拝するロシア人が毎日長い長い行列を作っている。

三十年後に死んだスターリンも、またミイラにされて、一時レーニンと並んで安置されたが、のちスターリンの遺骸のみはとりのけられ、廟とクレムリンの城壁の間に埋葬された。

鈴木三重吉（一八八二——一九三六）

明治三十九年、二十四歳のときに『千鳥』を書き、師漱石の「僕名作を得たり。之をホトトギスに献上せんとす」という讃辞とともに文壇に華々しく躍り出た鈴木三重吉は、しかしその後小説のほうではすぐにゆきづまったが、大正七年、童話童謡雑誌「赤い鳥」を発刊して、日本の児童文学に大きな影響を与えた。芥川の『蜘蛛の糸』や『杜子春』、白秋の『からたちの花』、八十の『かなりや』などはこの雑誌に掲載されたのである。

しかし「赤い鳥」は、やがて「少年倶楽部」などに圧倒されて、次第に不振におちいった。

彼自身は自分の雑誌に、創作童話を一篇も書いていない。「三重吉の詞藻はすでに涸れていたのである。三重吉は初

め自分の才が涸れるはずはない。いずれ回復するだろうとあてにして、ついに回復しなかったのである。十なん年間に一篇の創作もなかったのがその証拠である。三重吉にとってそれはどんなにつらいことだったろう。
　そのせいか三重吉はかえって自分を日本一の文章家だと思うようになって、だれの文章にも手をいれた。芥川の作にも手をいれたという」
　と、山本夏彦はいう。
「鈴木三重吉は失敗した芸術家で、それゆえ私を動かすのである。惻隠の情に耐えないのである。三重吉は自分を天才だと思いたがった。すぐ人をバカにした。酒乱で酔うと目の前にいる客、たとえば坪田譲治を面罵した。破裂せんばかりの自尊心をいだいて、誰も傷つけないのに、ひとり自分で傷ついていた」
　三重吉は、昭和十一年七月号の「赤い鳥」の最後の編集後記に書いた。
「私は今月（五月）のはじめごろから、両肩、背筋、腰、前胸にわたり、不意に神経痛の通り病状が来て微動をしても大声を上げたいほど痛くて、物によりかかったきり、ろくに横臥も出来ず、苦しみとおしました。（中略）冷えから来たものとも診断されています。今年は寒い期間が殊に長く、その間咳のひどいときには例により、夜中もすわったきりなので、よけい冷えたものとおもいます。これきりで痼疾にならないようにと祈っております」
　息子の珊吉は記す。
「父は、晩年、特に持病のぜんそくに悩まされた。父の死因は肺臓がんであったことが、東大外科の真鍋博士の解剖によって解った。父はぜんそくのあの苦しい発作をとめるために、アドレナリンを噴霧状にしてのどの奥に吹きつける医療器具を常に手許から離すことがなかった。外出のときでも、それを皮の小袋に入れてさげて行った。それが永年の間続いた。あるいはそれが肺がんの一原因かもしれないとわたくしは思っているが、医学上の見地から保証はできない。その死後にして肺がんと解った。からだの激痛がひどくなったのは父の死んだ月の四、五か月前ごろからであった。そのうえ『赤い鳥』に燃やした情熱と執念は、また大変なものであった。
　死ぬ近くになって、ようやく入院したが、それまで、肺がんが全身へと回ってきた激痛をこらえて、ふとんの上に二月堂の机を置いて腹ばいになって、『赤い鳥』に掲載する自分の原稿を、あるいは綴方の選と選評を、歯をくいしばって書き続けた。……」

彼が死去したのは、昭和十一年六月二十七日であった。

北一輝（一八八三——一九三七）

　昭和十一年、二・二六事件の首謀者として二月二十八日憲兵に逮捕され、死刑を宣告された北一輝は、刑死の二日前、面会にいった弟の北玲吉に、「私はこの事件になんら関係はない。しかし私の書物を愛読していた連中がやったので、責任を問われれば責任は負う」と、いった。
　しかし北は、そういうまっとうな責任感からの覚悟ばかりではなく、テロをほのめかして三井など財閥から巨額の金をゆすりとって豪奢な生活をいとなむといった自分の生涯をかえりみて、自嘲とともにそんな殊勝な言葉を吐いたのかも知れない。
　昭和十二年八月十九日、処刑のため所長が迎えにゆくと、独房で彼はまだいびきをかいて眠っていた。ゆり起すと、
「寝過ぎましたかな」
　と、いった。
「いえ、いつもより三十分早いのです」
　と、所長はいった。
　同じく処刑される西田税と、代々木の陸軍衛戍刑務所の刑場で逢ったとき、西田が、「天皇陛下万歳を唱えましょうか」といったところ、北は首をふって、
「いや、私はやめておきましょう」
　と、答えた。
　刑場は、長さ三メートル、幅二メートル、深さ一メートルの濠を掘り、そのうしろに一メートルの土砂と土嚢を積みあげたもので、濠の中央部に刑架が立てられていた。その刑架の前に坐らせられたとき、
「坐るのですか、これは結構ですね。ヤソや佐倉宗五郎のように立ってやられるのはいけませんね」
　と、北はいった。
　射距離十メートルで、大川周明が「仏魔一如」と評した北一輝は銃殺された。
　その七月七日に勃発した盧溝橋事件は、ついで八月十五日の海軍航空隊の渡洋爆撃によって、全面戦争となってひろがりつつあった。
　屍体を受けとりに来た妻のすず子は、自分の髪の毛を所長の手で棺の中にいれてくれるように頼んだ。なぜ自分でいれないのか、と訊くと、すず子は、「夫は棺の蓋をあけて死顔を見てはいけない、と申しておりましたから」と、いった。

栗林忠道（一八九一——一九四五）

昭和十九年六月、栗林中将は飛行機で硫黄島に着任した。一ト月後の七月、栗林は、十歳の女児もある東京の家族に、「この世乍らの地獄のような生活を送っている」という手紙を書いている。

硫黄島は約二十平方キロ、半日も歩けば一周出来る小島であった。着任以来、栗林はみずから陣頭に立ち、兵を督励して全島に蜘蛛の巣のように坑道を掘らせはじめた。しかしこの島は、掘ればたちまち亜硫酸ガスが噴出し、地下十メートルで摂氏四十九度に達する地熱の島であった。兵たちはフンドシ一本で、ツルハシ、スコップをふるったが、作業は三分か五分しか耐えられなかった。しかもすでに内地からの補給は思うにまかせず、鉄やセメントなどの補強材はもとより、食糧も欠乏して栄養失調で倒れる兵が続出した。

しかしこの島はサイパンと東京の中間地点にあたり、米軍にとっては、戦闘機の基地として、また日本空襲のB29の不時着用基地として、何としても手にいれたい島であり、それが明白なだけに、日本軍としては絶対に敵に渡してはならない島であった。

とはいえ、米軍が来攻すれば全滅は必至であり、この地獄のような苦役の果てに待つものはただ死の運命しかないことは、栗林以下二万九百三十三人の将兵みな承知していた。生きるために、ではなく、死ぬために悪戦苦闘しなければならぬ、ということが戦争にはあるのである。

半歳にわたって硫黄島は爆撃されつづけた。そして、ついに昭和二十年二月十六日、戦艦七、空母十一、重巡四、駆逐艦十五の米大艦隊が来攻し、三日間にわたる砲爆撃ののち——このときアメリカ軍が撃ちこんだ鉄量は、全島を厚さ一メートルの鉄で覆うに足るものであったといわれる——十八日未明から、海兵隊は水陸両用の装甲車五百隻をもって上陸を開始した。

米軍の攻略予定期間は五日間で、事実、島南端の摺鉢山に星条旗が押し立てられたのは二月二十四日であったが、地下壕を利用する日本軍は容易に屈せず、戦闘はそれ以後のほうが惨烈をきわめ、実に三月半ば過ぎまでつづいた。

三月十六日、栗林は最後の訣別電報を東京の参謀長に送った。

「戦局最後ノ関頭ニ直面セリ。敵来攻以来、麾下将兵ノ敢闘ハ真ニ鬼神ヲ哭カシムルモノアリ。……今ヤ弾丸尽キ水

涸レ全員反撃シ最後ノ敢闘ヲ行ハントスルニ方リ……只管皇国ノ必勝ト安泰トヲ祈念シツツ永ヘニオ別レ申上グ。……」

死闘はなお十日間つづき、三月二十六日午前二時ごろ、栗林以下生き残りの将兵約百四十数名は、白だすきをかけて地下壕から出撃し、玉砕した。

戦闘中、栗林は右大腿部に負傷し、兵に背負われて指揮したが、出血多量のため行動不能となり、中根参謀に拳銃で頭部を撃つことを命じた。最後の言葉は「屍体を敵に渡すな」であった。中根参謀は栗林の屍体を埋めたのち、自決した。

日本軍二万九百三十三人中、一万九千九百人が戦死し、生き残った千人余も大半傷ついていた。アメリカ軍の死傷者は二万八千六百八十六人であった。

栗林はスラリとして端麗な体軀と容貌の持主であったが、一方的な戦闘となった太平洋戦争後半において、日本の指揮官中、最も効率のいい戦さをした名将であり勇将であったといえる。

大西滝治郎（一八九一——一九四五）

特攻作戦の生みの親といわれ、昭和十九年十月から二十年一月にかけ、フィリピンで、飛び立ってゆく特攻機に、

「われら全軍体当り捨身の悔いなき戦争をしよう。われらの子孫が後世において、祖先はかく戦えりということを記憶する限り、大和民族は断じて滅亡しない。アメリカ兵を殺せ、一人でも多く殺せ、彼らの血と肉をもって戦争の悲惨さを思い知らせよ」

と訓示した第一航空艦隊長官大西滝治郎は、凄じい闘魂の鬼であった。

二十年四月、軍令部次長として台湾から東京に帰った彼は、やがて日本最後の日を迎えた。しかし、あくまで戦争継続をめざす彼の死闘はつづく。

八月九日、ソ連が参戦し、長崎に二発目の原爆が投下され、日本の首脳の大動揺が起ったのに際し、大西は海軍の作戦部の職員に対し、「もし、お上が戦争をやめると仰せられたなら、われわれはたとえ逆賊の汚名を受けても戦争を続けねばならぬ」と演説した。そして宮中へおしかけ、短剣などはずすべきところでわざと吊って徘徊し、米内海

相を牽制しようとして米内から叱りつけられた。
十日、御前会議で天皇がついにポツダム宣言受諾の意を示したと聞いて彼は、「天皇といえども時に暗愚の場合なきにしもあらず」とさけんだ。
十三日、万障を排し、これは終戦へ向って死闘する東郷外相のところへおしかけて彼はいった。
「これから二千万人の日本の男を特攻で殺す覚悟をすれば、この戦争に負けはしませんぞ」
そのあとで、彼は迫水内閣書記官長の手をとって慟哭した。
「私はいままで真剣に戦争に勝つために努力したつもりであったが、この最後の段階で考えて見ると、まだ真剣味が足りなかったと思う。いまの真剣さで考えていたら、この戦争に勝っていたと思うし、またこれからも勝てると思う。……それにしても迫水君、何とか戦争をつづけるいい考えはないか?」
しかし、十五日、日本はついに降伏した。その夕方六時ごろ、渋谷南平台の海軍軍令部次長官舎で、従兵が次長の軍服を持って二階へ上ってゆくと、腸をしぼるような嗚咽が聞えた。従兵がそっとのぞいて見ると、大西滝治郎次長は、部屋の隅で直立不動のまま、ひとりで慟哭していた。
翌十六日未明、彼は官舎で一人軍刀で腹を切った。急を聞いて、当時海軍航空本部嘱託であった児玉誉士夫が駈けつけると、おれは特攻で死んだ連中にわびるために苦しんで死ぬ必要があるのだから、介錯は要らぬ、といい、明け方まで苦しんで死んだ。
遺書「特攻隊の英霊に曰す。よく戦いたり、深謝す。
これでよし百万年の仮寝かな」
しかし彼は特攻作戦指揮中から、「わが声価は棺を覆うて定まらず、百年ののちも知己またなからん」といっていた。
——この大西に愛された児玉誉士夫が、後年アメリカのロッキード社のコンサルタントとなり、いわゆるロッキード事件に連座しようとは。……児玉はみずから「日本海軍の敵であったロッキードのコンサルタントとなった天罰だ」と悔いた。山本五十六の搭乗機を撃墜したのはロッキードP38であったからである。

甘粕正彦（一八九一——一九四五）

関東大震災直後の大正十二年九月十六日、陸軍憲兵大尉として、かねてから狙っていた無政府主義者大杉栄とその

愛人伊藤野枝と、大杉の甥橘宗一（七歳）を麹町憲兵隊本部に連行し、「国家にとって獅子身中の虫」として絞殺した甘粕正彦は、懲役十年の刑に処せられたが、わずか二年十カ月で仮出所し、昭和二年にはフランスへ旅立った。
四年に帰国し、ただちに満州へ渡ったが、一般人には甘粕の消息は絶えたままであった。
十年後、彼は満映理事長として人々の前に再登場した。
彼は、満州へ渡る日本の文化人の眼には、満州における「文化」の帝王か魔王のような存在に見えた。
昭和二十年八月、満州帝国が崩壊する日が来た。
八月十六日、彼は日本人全社員を満映会議室に集めて、
「私は軍人ですから本来なら日本刀で切腹すべきですが、御承知のような不忠不仁の者ですから、そういう死に方に値しないのです。……ほかの方法で死にます。長い間お世話になりました。心からお礼を申します」
と、挨拶した。
九日にソ連軍が侵入して以来、彼のそれまでの魔王的な印象は憑きものが落ちたように消えて、おだやかな、また沈鬱な相貌に変っていた。
二十日の早朝、理事長室で、彼は隠し持っていた青酸カリをのんだ。
かねてから警戒していた映画監督の内田吐夢が、異様なうめき声を聞いて飛びこむと、甘粕はソファの前で、両肘を横に張るようにして前かがみになっていた。
内田は瓶の食塩と水を甘粕の口へ流しこみ、あおむけになった甘粕の身体に馬乗りになり、腹部から胸へ力まかせに撫でつづけて吐かせようとしたが、口からは泡が出るばかりであった。
が、上気したように赤らんでいた甘粕の顔が次第に蒼白になり、安らかになっていって彼の息は絶えた。

近衛文麿（一八九一——一九四五）

昭和二十年十月四日、近衛はマッカーサー元帥を訪問し、マッカーサーから、これからの日本の指導の陣頭に立たれよという激励を受けて、戦犯容疑から解放されたものと早合点して愁眉をひらき、元気づけられた。
彼は早速新憲法制定のために働き出した。
しかるに十一月一日になって、突如GHQは「近衛は何か誤解している。総司令部は近衛に憲法改正を勧めたおぼえはない」という声明を発した。このマッカーサーの豹変は、近衛は戦争責任を免れない、とするアメリカと日本の

新聞の論調によるものであった。
　茫然たる近衛に第二の打撃が加えられた。十一月九日、東京湾のアメリカ砲艦に連行されて、「合衆国戦略爆撃調査団」によって峻烈きわまる訊問を受けたことであった。
　近衛は公爵を拝辞し、十一月二十七日、軽井沢の別荘にいった。十二月六日、GHQから彼に逮捕指令が発せられた。十二月十六日に巣鴨拘置所へ出頭せよ、というのであった。
　十二月十一日、近衛は軽井沢から東京世田谷の知人長尾欽弥邸に入り、側近に、「国際法から見て勝利国が敗戦国の個人を裁判にかけることの是非の調査」を命じたり、また出頭延期の可能性を打診させたりしたが、いずれにしてもこの期に及んで抵抗は不可能との報告を受けた。元官房長官の富田健治は「あんなに悄然とした近衛公を見たことがない」と、いった。
　十四日夕、近衛は自邸の荻外荘に帰った。
　出頭指令を明日にひかえた十五日夜、彼は居間で友人山本有三と後藤隆之助と話し合った。彼は、裁判は拒否するつもりだといい、山本が「あなたは最悪のことを考えていられるのではないか」と訊いたのに対し、「いいえ」と首を横にふった。
　客が去った十一時ごろ、近衛は寝室に、次男通隆に紙と鉛筆を持って来させ、いまの心境を書き出した。それは戦争犯罪人として裁判を受けることは無念である、と述べ、かつまた、自分の真の志は時を経た後、神の法廷によって判決が下されよう、というものであった。
　午前二時ごろ、通隆は、用があったら呼んで下さい、といって隣室にしりぞいた。
　通隆は、十六日の午前六時ごろ、父が床中で息絶えているのを発見した。枕もとに青酸カリの小瓶がころがっていた。
　が、東京裁判で弁護人をやった島内竜起は、「近衛の一高時代以来の友人で、前夜東条の自殺失敗のような見苦しいまねはしてくれるなといい、死の隣室から一時間毎に声をかけて、彼の応答を確かめていた者がいたとも伝えられる」という。
　――それから数十年を経たが、近衛の期待に反し、彼に対してなお消極的戦犯の――しかしA級戦犯よりもっと重い戦争責任の容疑を、日本人は心から解いてはいない。

ヴィヴィアン・リー（一九一三――一九六七）

「風と共に去りぬ」のスカーレット・オハラ役で売り出したとき、二十六歳のヴィヴィアン・リーは、善良な弁護士の夫と幼い一人娘を捨てて、ローレンス・オリヴィエと同棲中であった。その後正式にオリヴィエと結婚し、映画、芝居で共演することが多かったが、俳優としてあまりに偉大なオリヴィエと比較して批評され、少女時代からひたすら大女優になりたいという野心に生きつづけて来た彼女は、しばしばヒステリー状態になった。
　その精神異常は次第に躁鬱病となって現われるようになり、戦争中から発病した肺結核とともに彼女を苦しめた。
　抑鬱状態にはいると、だらしなくなり、物を食べなくなり、睡眠薬を飲みふけり、自殺をはかる。突然狂躁状態にはいると、心に浮かんだことを、汚ないわいせつな言葉でさけび、物を投げつけ、衣服をひき裂いて裸になり、乗っている車や飛行機から飛び出そうとする。……それがさめると彼女は、以前の通りの優等生にしてかつ絶世の美女ヴィヴィアン・リーに戻るのだが、この発作が次第に頻繁になり、オリヴィエも持て余すようになり、一九六〇年、二人はついに離婚するに至った。
　ヴィヴィアンはその後俳優ジャック・メリヴェールといっしょになったが、一九六七年六月、彼女のあまりのやつれように医者に連れていったところ、結核は両肺にひろがっていて重態であることを告げられ、彼女が入院をいやがったので、自宅で絶対安静を命じられた。
　七月七日、ジャックが、出演している劇場から夜十一時過ぎに帰ったとき、ヴィヴィアンはベッドの中で眠っていた。ジャックは台所で夜食を作り、十五分後ひき返して見ると、ヴィヴィアンはベッドから床の上に転がり落ちて死んでいた。彼女は喀血し、その血で窒息したのであった。

五十五歳で死んだ人々

> 性の快楽と死の苦痛は万人平等である。しからば、なぜそれ以上の平等を求める必要があるのだろうか。
>
> ——山田風太郎——

林子平（一七三八——一七九三）

「思えば人間一生六十年なり。わが一代さえ無事なれば、あとは唐となるとも天竺となるとも天にまかすべしといえり。悟り抜きたる言のようなれども、この言や惰弱の遁辞にして不忠不義の日本一なるべし」

おれは黙ってはいられない、と林子平は、寛政三年四月に、海外に対する国防の急務を唱える『海国兵談』を著し、

「返す返すも見人、熟読翫味せよ」

と大見得を切ったが、本は三十冊しか売れなかった。しかもこの大言壮語が幕府ににらまれて、予約出版のかたちで必死に金を集めて作ったその板木は没収され、翌四年五月、彼は仙台の兄の家に永蟄居を命じられた。

人生唯一の望みを絶たれた子平は落胆し、

「親もなし妻なし子なし板木なし金もなければ死にたくもなし」

と詠んだが、一年後の寛政五年六月二十一日に寂しく死んだ。

山東京伝（一七六一——一八一六）

文化十三年九月六日、京橋一丁目に住む山東京山は書斎を新築し、銀座一丁目に住む兄の山東京伝を一夕招待した。

——「天ぷら」という言葉を発明したのは京伝だ、という説をとなえたのは弟のこの京山である。

京伝は草双紙の執筆に熱中していて、日が暮れてから京山の使いが迎えに来たのでやっと腰をあげて出かけた。

そして、集まった客とともに歓をつくし、夜半十二時、相客の狂歌師北静盧と連れ立って帰路についたが、一町ばかり歩いたところで、突然「胸が痛い」といって倒れかかった。静盧はびっくりして抱きかかえ、背負って京伝の家へ送りとどけた。

遊女あがりの妻の百合は驚愕して医者を呼んだ。医者は乾脚気だと診断し、薬を与えて去った。

そのあと京伝は厠へいったが、戻って寝室にはいったとき、急にまた息がつまり、午前二時ごろに死んだ。

京伝は夏ごろから脚気気味のところへ、右の次第でいそいで京山宅へゆき、遅れたためにすでに酩酊していた一同にすすめられ、下戸なのに彼の適量以上の酒を飲ませられたのが、この脚気衝心の原因であったと思われる。

ゴーギャン（一八四八——一九〇三）

株式仲買人として一応安定した生活をし、ただ日曜画家的に絵を趣味としているかに見えたポール・ゴーギャンは、三十五歳のとき、突如それまでの生活を捨てて、画家として第二の——彼にしてみれば本来の人生に歩み出した。

彼の計算では、そうしてもそれまでの生活が維持出来るはずであったが、そうは問屋が卸さず、結果的には、妻と五人の子供を捨てる羽目になった。あまりにも家庭的な妻メットは、彼を「怖ろしいエゴイスト」と呼び、生涯彼を許さなかった。

彼の絵は認められず、従って売れず、赤貧洗うがごとき生活ののち、四十三歳のとき、彼は南太平洋のフランス領タヒチ島へ旅立った。それは生活に悩まされずに絵をかくためと、彼の内部からの「野性への憧れ」によるものであった。

ゴーギャンは、そこで現地人の女ヴァヒネと小屋に住み、後に有名になる数々の傑作をかいてパリに送ったが、依然それを認める者は少なかった。

「私はあなたの芸術を理解することが出来ないし、それを好きになることも出来ない」

と、文豪ストリンドベリは書き、彼を定義した。

「それでは彼は何者だろう。彼はゴーギャンである。窮屈な文明を憎み嫌った野蛮人、創造主を嫉妬するあまり、暇つぶしに彼のささやかな創造を行う一種の巨人族、自分の玩具を壊して別のものを作ろうとする一種の巨人族、大衆とともに空を青いと見るよりも赤いと見ることを好んで、すべてを否認し、すべてに挑戦する者」

タヒチにおけるゴーギャンの生活の窮乏と孤独は年と

もに深まった。自分の芸術について――かつて交際したゴッホと喧嘩して、ゴッホにみずから耳を切らせるという事件を起したほどの――傲慢なばかりの自信を持っていた彼も、次第に悲鳴をあげるようになった。四十八歳のとき、彼は手紙を書いている。

「決定的に私は悲運の星の下に生まれた」

「なるようになるがいい。――私は今やすっかり気力を失い、勇気も失った。これ以上の不幸がこの先起るとは思わないくらいだ」

しかし、それ以上の不幸が来た。その翌年、別れてはいるものの最も愛していた、二十歳になる娘のアリーヌが、肺炎のため死んだという知らせだった。その打撃と悲しみは日とともに深まり、その翌年一月、彼は山中にはいって砒素を飲んで自殺を計ったが、吐いて成功しなかった。しかし、それ以後の彼の生活は、「死後の生活」というにひとしかった。

自殺失敗後、ゴーギャンは一年ばかり、タヒチの公共事業局に書記として勤めたが、そのときの同僚はいう。

「あの可哀そうなゴーギャンという男はアルコール中毒でな。まるで起き上り小法師みたいにフラフラとして描いていましたよ。……」

そして彼は、脚の湿疹が悪化して（それはフランスから持って来た梅毒の潰瘍ではなかったか。砒素はその治療のために持っていたものであった）歩行も困難になり、視力も衰え、心臓も弱まって来た。

五十一歳のときの彼の手紙。

「今や私はまた闇黒の未来を見るだけだ。……どうして私は先年死ななかったろう。私はもうじき五十一だ。どの点から見ても消耗し、疲れ切っている。視力も日に日に悪くなる一方だ。その上、こうした絶え間のない闘いに必要なエネルギーが今や不足しているのだ。……」

しかし、彼の原始的な生命力はなお最後の燃焼を見せる。

五十三歳のとき、彼はタヒチよりなお未開のヒヴァ・オア島に渡り、依然現地人のヴァヒネと同棲し、最後の傑作群を描く。そればかりではなく、どこへ行っても争いを起さずにはおかない彼の性格は、島民に、通学、納税反対運動をたきつけ、島のカトリックの司教や憲兵と悶着を起す。

一方で彼はまた、フランスへ帰りたいという希望を故国の友人へ送ったが、君は大洋州の遠くから作品を送って来る伝説的な芸術家ということで値打ちがあるのだから、絶対に帰って来るべきではない、という反対の手紙をもらっただけであった。

一九〇三年三月末に、彼は現地当局から「憲兵隊の名誉毀損の罪」で三カ月の禁錮と五百フランの罰金を命じられた。ゴーギャンは、罰金はおろか、タヒチの弁護士のところに相談にゆく旅費もなかった。

彼は書いた。

「私の一生は、倒れたり、また立ち上ったり、また倒れたりするように運命づけられていたということが出来る。昔の私の気力も、今日一日一日と尽きてゆく」

四月のはじめに、ただ一人親しく交際していたプロテスタントの牧師ヴェルニエは、ゴーギャンから、もう歩くことも出来ないし、眼も見えなくなったという連絡を受けて、小屋にいってみると、彼はひどく苦しんでいた。しかしそのときはまだゴーギャンは、芸術について語ることが出来た。

ヴェルニエは記す。

「五月八日の朝早く、テイオカ（ゴーギャンがやとっていた現地人のコック）が私を呼びに来ました。ゴーギャンは内臓の激しい痛みを訴え、今は朝か夕方か、昼か夜かと訊きました。二度も気を失ったといって、そのことをひどく心配していました。……話をしたあとは落ちついて来たようすなので、安静にさせておいて帰りました。

十一時ごろ、召使いの若いカフィが大急ぎで私を呼びに来ました。『早く来て！　白人が死んだ！』

ゴーギャンは片脚を寝台から垂らして死んでいました」

フェノロサ（一八五三――一九〇八）

明治十一年、二十五歳で東京大学の経済学、哲学教授として招聘されたアメリカ人、アーネスト・フランシスコ・フェノロサは、本職よりも日本画に傾倒し、岡倉天心を助手に、当時沈滞の淵に沈み切っていた日本画の復興に力をそそいだ。その熱情の一例が、狩野芳崖の発見と育成である。

一方で彼は、そのころ二束三文で売り出されていた、国宝級をふくむ日本の美術品を、心の痛みをおぼえながら買い蒐めて故国に送った。

明治二十三年、彼はボストン美術館の東洋部長として帰国したが、四年後、その離婚と再婚がスキャンダル視されてこの職を失った。以後、晩年は不遇であった。

明治三十年、彼は永住をさえ夢みて日本に再来朝したが、彼の期待に反して日本美術界は冷淡であった。彼が好み、鼓舞したのは主として狩野派の日本画であって、文人画や

浮世絵などは強烈に斥けたために、その反撥も大きかったのである。のみならず、狩野派をふくめて日本画の新しい指導者の地位には、かつて彼の弟子であった岡倉天心がついており、天心はすでに国粋主義者としての立場を確立していた。

しかもその天心が、明治三十七年、かつてフェノロサが追われたボストン美術館東洋部長として招聘されるに至って、両者の関係はますます冷たくなった。

明治四十一年、フェノロサはヨーロッパを旅行中、九月、ロンドンのホテルで心臓発作を起した。いちどは回復したが、病床で義理の娘アーウィンにロゼッティの詩を読ませているうちに、再度の発作を起して死去した。

遺骨はいったんロンドンのハイゲート墓地に葬られたが、彼の生前の希望によって、翌年日本人の知人友人の手で、日本へ送られて大津の法明院に改葬された。

明石元二郎（一八六四——一九一九）

日露戦争当時、ヨーロッパ駐在武官として諜報謀略活動を行い、ロシアをして敗北のまま講和のやむなきに追いこんだ働きで、あるいは乃木よりも功績のあった明石元二郎は、その後朝鮮における憲兵司令官として魔王のごとき辣腕をふるい、大正七年、大将となるとともに台湾総督に任ぜられた。

在任一年、大正八年七月一日、台北における観兵式を閲兵後、インフルエンザによる発熱で倒れ、ついで肺炎を起し、二度ばかり重態におちいったが、その後快方に向った。しかし体力衰え、静養のため、十月十三日、内地の別府に転地保養するために日本に向い、十月十六日朝、門司港に到着したとき、船中の食堂で食事中、こんどは脳溢血を起してまた倒れた。

担架に乗せられて、そのまま故郷の福岡へ運ばれたが、十九日朝、医者の武谷博士に、

「武谷さん、人間というものはモロイもんだなあ」

と、いったきり昏睡状態におちいり、二十四日午前六時半に死んだ。

しかし、かつてヨーロッパ駐在武官当時、あるいは朝鮮憲兵司令官当時の精力絶倫ぶりとは打って変り、台湾総督時代、年齢に比して老化いちじるしく、同僚が「明石はどうしてあんなに老衰したんだ？」と眼を疑ってささやいたほど彼は精気を失っていた。

張作霖（一八七三——一九二八）

馬賊から身を起して満州の帝王と呼ばれるほどの実力者となり、一時は北京政府の大元帥として中国本土に君臨した張作霖は、国民党北伐軍の圧迫で満州へひきあげる途中、昭和三年六月四日午前五時半、奉天へ一キロの地点で、列車もろとも爆破された。彼は重傷を負ってトラックで奉天の殯宮に運ばれたが、出血多量のため午前十時に絶命した。

これは満州征服を狙う関東軍の河本大作大佐らの陰謀によるものであった。その目的のためには張作霖の帰還は障害になったからである。

この事件は日本でも「満州某重大事件」と報道され、天皇から叱られた田中義一首相は内閣総辞職をしたが、関東軍の狙いは三年後の満州事変によって一応実を結んだかに見えた。

しかし、その成功は、めぐる因果の小車によって歴史の審判を受けることになる。張作霖の子、張学良は日本に対して復讐を誓い、昭和十一年十二月、いわゆる「西安事件」を起して、当時敵対関係にあった国民党と中共との間に統一抗日戦線を結成させたからである。

この馬賊上りの満州の将軍一人の死は、日本にとって非常に高いものについたといわなければならない。

魯迅（一八八一——一九三六）

魯迅は、日露戦争のころ日本の仙台医専に学んでいたが、たまたま戦争実写映画で、ロシア軍のスパイとなった中国人が、日本軍に銃殺され、それを見物している中国人たちが喝采している光景を見、「愚弱な国民は、医学によって救うに値しない。それより精神の改造が先決だ」と悟って医学を捨て、中国に帰った。

その後彼は、『狂人日記』『阿Q正伝』などを書いて中国の近代文学の創始者となり、さらにマルクス主義の信奉者となった。

一九二七年から上海に定住し、ソ連文学の紹介や評論に専心した。彼は以前から結核をやみ、かつ心臓喘息の持病を持っていたのに、大変なヘビイスモーカーで、煙草から煙草へ火を移して、マッチを使わなかったほどであった。

ノーベル賞も辞退し、また自叙伝を書くことを勧められたとき「私は自叙伝を書くつもりはないし、誰かに書いて

もらいたくもない。私の生涯にはとりたてるようなことは何もない。私の伝記程度のものなら、中国では四億も集まり、図書館を一杯にしてしまうだろう」といって取り合わなかったほど謙虚な魯迅は、一方で、いちど遺言を書いたとき、「キリスト教徒は臨終ですべてを許すそうだが、私には敵が多い。恨むなら勝手に恨め。こちらも誰ひとり許しはせぬ」と書いたほどの強い人でもあった。

一九三六年（昭和十一年）十月十七日午後、彼は上海新公園へ散歩にいったが、途中急に気温が下り、風邪をひいた。以前からの持病もあってこれが悪化し、親友の書店主内山完造に電話してかかりつけの日本人医須藤五百二の来診を受けたが、激しい咳はやまなかった。

そして十九日午前五時二十五分、激しい咳のために苦しんで身体を反転させたとたんに息をひきとった。

持病の肺結核が進行し、これに胸膜炎が合併し、気腫性嚢胞が生じ、これが破裂して致命的な結果を呼んだものと思われる。

須藤医師は元日本軍医であったために、周囲の中国人は他の医師と代えるように進言したが、魯迅は須藤を親愛することふかく、ついにこれを代えなかった。

彼はかねてから家族に、「葬式には人から金銭を受けるな。記念事業などは無用である。私のことは早く忘れて、それぞれ自分の生活の道を歩め」と遺言していたが、葬式には六千人の学生や労働者が参集した。

国枝史郎（一八八八——一九四三）

大正の末から昭和にかけて、『蔦葛木曾棧』『神州纐纈城』などの荒唐無稽な伝奇小説を書いた国枝史郎は、白井喬二から「緋縅の鎧をまとった病紳士」と評されたようにおしゃれで、ダンス教師の免状をとったりする一面のある一方、甚だいんぎんであるかと思うとたちまち威張りちらすといった風な人柄の人物であった。彼自身「僕はバセドー氏病で、意志と感情の平衡がとれないのですよ」といっていた。

彼は、昭和十八年四月八日、喉頭ガンで死んだ。

「それまで永らく疎遠になっていたわたしは、聖路加病院の地下の屍体安置室へおりていった。冷蔵庫から引き出された国枝さんの苦患そのものの死顔を、今でもまざまざと見る心地がする」

と、作家土師清二は記す。

「集まった人も少人数で、作家がいたかどうか覚えていない。回向して地下室から表へ出ると、築地の通りは、死んだ街のように静かであった。警戒警報に入ったばかりの街であった」

伊藤整一（一八九〇——一九四五）

太平洋戦争開戦にあたり、日本側がアメリカに最後通牒を手交する時間は、最初、真珠湾攻撃の一時間前という計画であった。これを外務省に、三十分にくり下げさせたのは海軍の軍令部次長伊藤整一中将であった。

実際は駐米日本大使館の不手際のために、最後通牒が手交されたのは真珠湾攻撃後となり、ために野村大使はハルから面罵される結果となったが、このことについて伊藤はあとあとまでひどく野村にすまながっていたという。

昭和二十年四月五日、呉にあった連合艦隊残存部隊たる第二艦隊に沖縄特攻の命令が下った。伊藤は第二艦隊司令長官として戦艦「大和」に坐乗していた。

しかし伊藤はこの特攻には反対した。まったく航空機の援護のない艦隊が、空に敵機の充満する海上を沖縄まで到達できるわけはなく、それを承知で麾下七千の将兵を犬死させるわけにはゆかない、といった。

説得に来た草鹿参謀長と三上参謀は、「要するに海軍としては、この際貴公らにみな死んでもらいたいのだ」といった。それをきいた伊藤は、「それならば何をかいわんやだ。了解した」と、うなずいた。

彼は妻に遺言をしたためた。

「——此の度は光栄ある任務を与えられ、勇躍出撃、必成を期し致死奮戦、皇恩の万分の一に報いる覚悟に御座候。この期に臨み、顧みればわれら二人の過去は幸福に満てるものにして、また私は武人として重大なる覚悟をなさんとする時、親愛なるお前様に後事を託して何ら憂いなきは、此の上もなき仕合せと衷心より感謝致しおり候。（中略）

心からお前様の幸福を祈りつつ」

また十五歳と十三歳の娘に書いた。

「——私は、今、可愛い貴女たちのことを想っております。そうして貴女たちのお父さんは、お国の為に立派な働きをしたといわれるようになりたいと考えております。もう手紙も書けないかも知れませんが、大きくなったらお母さんのような婦人になりなさいというのが、私の最後の教訓です」

沖縄への片道だけの燃料をつんで、四月六日夕刻豊後水道を抜けた「大和」以下十隻の日本艦隊は、七日昼過ぎは

やくもアメリカ空軍にキャッチされ、数波合計五百機を越えるその猛襲の下におかれ、二時間にしてその半数は沈没した。

午後二時半、これまた沈没寸前の「大和」の艦橋で、伊藤は作戦中止を命じ、部下たちに、お前たちはなお生き残ってたたかってくれ、私は艦とともに沈む、といいおいて、轟音と火炎の中をひとり長官室へ向った。

「徳之島ノ西方二十浬ノ洋上、『大和』轟沈シテ巨体四裂ス、水深四百三十米。

今ナホ埋没スル三千ノ骸、

彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」（吉田満『戦艦大和ノ最期』）

久生十蘭（一九〇二——一九五七）

友人の土岐雄三の談話の要約（昭和三十五年七月「別冊宝石＝久生十蘭・夢野久作読本」より）

「私はね、死ぬ一週間前に会ったんです。彼は癌研へ入院して、お見舞いにいったら、彼は胃袋に穴あけて、そこから滋養物を入れて、これでもう虫歯になる心配はないといって……こんないやな病院へ入って、たった一ついいことがあったっていうんですよ。何だといったら、俺が癌じゃないことがわかったからよかったっていうんだ」

久生十蘭は食道ガンにかかっていたが、すでに手遅れで開腹手術も出来ず、本人はそれを知らされていなかった。

「あんな叡智のかたまりのような小説を書く人がね、自分の病気のことに関しちゃ田舎の百姓と同じなんですよ。もう食道に大きな癌が出来ちゃって、水も通らないんでしょう。それなのに彼は、食道の脇に変なものがよっかかっているんだ、癌ではないけれども変なものが出来たっていってたけれども。奥さんもいってましたよ、あれだけ利口な人が自分のことになると、とね。だけど最後まで仕事はわりあいちゃんとしていて、ちっともおかしくなかったでしょう」

鬼才久生十蘭の最後の作品は「婦人公論」連載中の『肌色の月』で、主人公の自殺の動機はガンであったというストーリーであった。この作品は、昭和三十二年十月六日の彼の死によって中絶したが、死後夫人の手によって完成した。土岐はいう。「彼は死ぬまで凝ったね」水谷準はいう。

「どうも凝り死だったな」

大川橋蔵（一九二九——一九八四）

大川橋蔵は昭和五十八年九月ごろから体調悪く、入退院を繰返しながら、テレビの「銭形平次」をつとめた。

この銭形平次は、昭和四十一年五月から五十九年四月まで十七年十一カ月、八百八十八回にわたるもので、ギネス・ブックで「テレビの一時間番組世界最長主演」と認められた。

その第一作から十一年間撮影をつづけた佐々木康監督は語る。

「最後まで平均五日に一本という重労働の上に、年三回、東京と大阪で舞台公演をつづけてきたから、ほとんど休みがない。それでよく撮影の間にはセットの一隅で、椅子に腰かけ、顔に布をかぶって眠っていました。しかし出番がくるとパッと起きて、長いセリフの芝居をやっていました」

番組が終った昭和五十九年の十一月二十五日に入院した。この最後の入院のために家を出るとき、玄関先に椅子を出させ、家じゅうの電灯をみなつけさせて、それを眺めてから車に乗った。

病名は結腸ガンで、すでに肝臓に転移していた。

彼には直接知らせなかったが、しかし彼は「おれは自分の病気を知ってるんだ」といい、また医者に、「大酒も飲まず煙草も喫まず、食事にも気を使い、いつも腹に健康帯を巻いてきた私が、なぜこんな病気になったんです」といった。もっとも橋蔵は妙に凝り性のところがあって、天井が気にいったら天井ばかり、一年以上、昼飯に天丼を食いつづけたことがあったという。

十二月四日、突然橋蔵は、「おれの命はあと三日だ」といった。そして七日午前一時二十九分に死んだ。

棺には平次用の十手と投げ銭がいれられた。

葬儀で、未亡人となった妻の真理子は、「主人はたった一つの宝はお前だといってくれました。主人の楽しみは、女房をきれいにして連れて歩くことだ、と常にいってくれました。ほんとうに倖せでした。日本一の主人でした」と、芝居がかった挨拶をしたが、それは烈しい恋愛合戦の末に祇園の芸妓から橋蔵の妻となった彼女が、かつてのライヴァルたちに対する勝利宣言であったろう。

五十六歳で死んだ人々

みんないう。――いつか死ぬことはわかっている。しかし、「今」死にたくないのだ。
――山田風太郎――

ダンテ（一二六五――一三二一）

ダンテはフィレンツェに生まれ、三十五歳のとき市の行政官に選ばれたが、皇帝党と法王党の政争にまきこまれ、翌年市を永久追放され、二度と故郷に帰ることはなかった。

後にみずから述べているように、イタリア中を「物乞いしつつ」漂泊し、四十二歳のときから『神曲』を書きはじめた。

一三一七年、五十二歳のとき、ラヴェンナの領主に招かれ、以後同市に滞在、一三二一年、五十六歳のとき、同市の使者としてヴェネツィア共和国に赴き、帰途マラリアにかかり、ラヴェンナに運ばれてそこで死んだ。同時代の知人さえ地獄に堕した怖るべき『神曲』は死の直前に完成していた。

日本でいえば北条高時の時代である。

明智光秀（一五二六――一五八二）

天正十年六月十三日、山崎の戦いに敗れた光秀は、居城坂本へ逃れるべく、わずか数名の家来とともに、伏見の北方、大亀谷を通り、山中で鎧をぬぎすて、馬で小栗栖にさしかかったとき、落武者を狙う土民の襲うところとなった。

「水無月十三日、月は昇りぬれどいと曇りて暗かりけり。里の中道の細きを歩みゆくに、垣根越しに突きける槍、明智光秀が脇にあたりぬ。されど、さらぬ体にてかけ通りて三町ばかりゆき、里のはずれにて馬よりころび落ちけり」（『豊鑑』）

光秀は死を覚悟し、かねてから書いてあった紙片をとり出した。それには、

「逆順二門無シ
大道心源ニ徹ス
五十五年ノ夢
覚メ来リテ一元ニ帰ス」

と、あった。

家来の溝尾庄兵衛が介錯し、その首を近くの地中に埋めて落ちていった。本能寺以来、十一日間の明智光秀の天下であった。

十四日、小栗栖の百姓がその首を掘り出して、三井寺に陣した秀吉のもとへ持参したとき、秀吉は、「明智よ、酬いは早かったの」といって、それを杖で打ち、あとは粟田口に晒した。

三浦按針（一五六四――一六二〇）

慶長五年――秋には関ヶ原役の起った年――三月十六日、豊後海岸に漂着したオランダ船リーフデ号に乗っていた三十六歳のイギリス人の水先案内人ウイリアム・アダムスは、家康の外交顧問として召抱えられ、三浦按針という名と日本人の妻を与えられ、ジョセフという男の子とスザンナという女の子も生まれた。

その後平戸にひらかれたイギリス商館にあって、元和五年春には安南などへ航海したのに、その秋ごろから病床につき、翌年四月二十四日に平戸で死んだ。病名や病状などは不明。

ともあれこのイギリス人は約二十年日本に滞在した間に、関ヶ原の役、大坂の役、家康の死などを目か耳にしたことになる。

彼の残した財産――当時の英貨に換算して約二百ポンド余り――は、遺言により等分されて、イギリスに残した妻子と、日本にいる妻子に贈られた。

柳沢吉保（一六五八――一七一四）

犬公方のお側御用人として一代の権臣となった吉保は、宝永六年綱吉が歿すると、お役御免を申し出て、許されると、剃髪して保山と号し、駒込村にある四万六千坪の別邸六義園にひき籠り、五年ばかり優雅な生活をして、正徳四年十一月二日にこの世を去った。

自分の妻を将軍に献じて、百六十石の小姓から二十数万石の大名になったと見られ、奸臣視された吉保だが、その名のごとく保身の道には甚だたけていた。死するにあた

って、「元禄時代を作ったのはおれだ」という自負さえいだいていたかも知れない。

リンカーン（一八〇九——一八六五）

一八六五年四月十四日の閣議で、リンカーンは、「降伏した南軍のどんな悪質の者でも、絞首刑にしたり銃殺したりすることには、私は最後まで反対する」といった。
　このアメリカの伝統は、八十年後第二次大戦で、アメリカ自身によって破られた。
　その午後リンカーン夫妻は馬車でドライヴを愉しんだが、そのときリンカーンは妻に、大統領の任務から解放されたあとの楽しい余生の計画について語った。
　それからワシントン市内のフォード劇場の観劇に向った。劇場は、南北戦争から帰還した将校たちでいっぱいであった。
　十時を過ぎたころ、突然一発の銃声がとどろき、人々はリンカーンがボックスから崩れ落ちるのを見た。
　ボックス席に忍びこんでいた犯人は、捕えようとする将校をナイフで突き刺し、ステージに飛び下りた。彼は垂れ幕に靴の拍車をひっかけていちど倒れたが、たちまちはね起きて、
「暴君の運命は常にこの通りだ」
　とさけんで舞台裏に姿を消し、外に待たせてあった馬に飛び乗って逃走した。
　リンカーンはすぐ劇場近くの家に運ばれたが、ついに意識を回復することがなかった。人々は、そのやつれた顔に何ともいえない平和の表情が浮かんでいるのを見た。翌日朝七時二十二分、彼は永遠の眠りについた。
　犯人は南部出身のブースという俳優で、そのときブランデーをひっかけていた。彼はさんざん逃げまわったあと、兵士たちに、ある納屋に追いつめられ、射殺された。
　日本では水戸の天狗党が処刑された年である。

ニーチェ（一八四四——一九〇〇）

一八八九年の終り、彼はイタリアのトリノの新聞販売店の小部屋を借りていたが、クリスマスの日から正気を失った。遠い昔にかかった梅毒が進行して来て、その結果による麻痺性痴呆が彼を襲ったのである。
　翌年の一月、トリノの街上で鞭打たれる荷馬車の馬を見て、かつては憐愍こそあらゆる精神的な悪の根源だと考えたこの哲学者は、馬に飛びつき、抱きしめた。そして失神した。
　二日間の昏睡の後、彼は目ざめたが、以後完全に発狂した。
　ニーチェは、イエナの精神病院にいれられ、母と妹がそこに住み込んで世話をした。
　ところが、彼が正気のうちは家具つきの部屋しか借りることが出来なかったのに、発狂後、彼の著書が売れるようになり、ワイマールに家を作ることが出来た。
　母の死後は、妹のエリザベートが彼の世話をした。彼と妹エリザベートの間には相姦関係があったといわれる。
　ときどき彼の狂った脳髄を、一条の細い光が照らすように見えることもあった。
「僕は立派な本を書かなかったかね」
　と、彼は妹に尋ねるのだった。
　ただ食って寝るだけの動物のような十年間の生活の後、一九〇〇年八月二十五日午後五時ごろ、おりからの夕立の雷鳴とどろく中に彼は卒中発作を起して死んだ。
　日本では同年同月三遊亭円朝がやはり脳梅毒で死んでいる。

小村寿太郎（一八五五——一九一一）

明治三十八年九月、外相として日露戦争を終結させるポーツマス会議を終えた小村は、その苦心と疲労のために、ニューヨークのホテルで高熱を出して倒れてしまったほどであった。
　それでもこの講和条約に不満な日本人は、東京で焼打ちなどの暴動を起し、小村の留守家族の住む外相官邸も暴徒に襲われた。十月帰国した小村は、横浜に出迎えた息子の欣一に、「お前まだ生きておれたのか」と、いった。
　その後駐英大使を経て、明治四十一年第二次桂内閣で二度目の外相に就任した。四十三年、日韓併合のころは、すでに肺患が進んでいて、その衰えが人の眼にも明らかになったが、彼を知る青山胤通博士は、
「小村さんは意志力だけで生きているのだ。ふつうならもう冥土へいっている身体だ。いま仕事をやめろということは、小村さんに死ねということだ」
　と、いった。
　果せるかな、明治四十四年八月、桂内閣とともに外相をやめると、彼の健康は急速に衰え、葉山の別荘に隠栖した

ままになった。葉山の別荘といっても、極めて清廉な彼は生涯官舎に住み、東京に本邸を建てたことがなかったから、そこが唯一の家であった。

外相辞任後二カ月、十一月にはいると病あらたまって病床につき、二十三日から頭部強勁症状に苦しみ、翌日から脳膜炎初期の徴を呈するに至った。

二十五日、寺内正毅が見舞いに来たとき、寺内が泣きながら抱きつくと、小村は大声で「明日」とさけんだ。

その翌日の二十六日夜明けのころ、彼は死んだ。臨終のとき息子の欣一に長い遺言をしたが、欣一には何といわれたか、全然わからなかったという。

ドビュッシー（一八六二――一九一八）

「牧神の午後への前奏曲」などで知られるドビュッシーは直腸ガンのため、一九一五年以来何度もラジウム療法を受けた。しかし経過ははかばかしくなく、徐々に病み衰えた。

そのころ彼は友人に手紙を書いた。「もし、クロード・ドビュッシーが音楽を作れないとすれば、もはや生きている理由はない」

一九一八年三月、パリはドイツ軍の爆撃と砲火の下にあった（第一次世界大戦）。瀕死のドビュッシーは何度も地下室を変えなければならなかった。

三月二十五日午後、彼はついに昏睡状態におちいった。

ジャン・レピーヌの言葉をかりれば「あのように多くの和音を溶かした手、あのように多くのとらえがたい美を創り出した長い美しい彼の手は、無限の深淵の端に、なおも幾時間か身を支えようとするかのように、力なく敷布を握りしめていた」

やがて夜が来た。そして物凄い爆撃のひびきにパリ全市が覆われている午後十時、フランス近代音楽の巨星クロード・ドビュッシーの脈搏は絶えた。

葬式には約二十人の人々が棺についていっただけで、彼らは燃えているパリの町をかなりの距離にわたって、西から東へ通過しなければならなかった。

マックス・ウェーバー（一八六四――一九二〇）

二十世紀最大の社会科学者といわれるマックス・ウェーバーは、第一次大戦でドイツが敗北した翌年の一九一九年六月、ウィーンからミュンヘンに移住した。

彼はここで知人の家の二階を借りたが、彼は音に対して病的な神経症で、部屋を借りているくせによその電話ベルはむろん、家主が出入りするにも文句をいい、彼に反対する右翼の学生が階下に乗りこんで、彼を悩ますために故意に雑多な楽器で騒音をたてると、壁をたたいてくやしがった。

翌一九二〇年夏、ミュンヘン大学のゼミで、彼は学生たちと熱心に討論したが、夏というのにここで風邪をひき、肺炎になり、十日ばかり寝たのち、六月十四日に死んだ。

意識の混濁がはじまる前に、彼は母へレーネに『社会学範疇論』を、妻マリアンヌに『宗教社会学論文集』を献呈する、といった。母や妻に対しても、やはり献げるものがちがう。

萩原朔太郎（一八八六――一九四二）

『月に吠える』『青猫』など、日本の詩壇に不滅の詩集を出しながら、萩原朔太郎は四十歳になるまで、妻子をかかえて、上州前橋の開業医たる父の家に居候をしていた。

「われはもと無用の人
これはもと無用の書
一銭にて人に売るべし」

勤勉な生活人である父は、この不肖の息子に一生嘆息し、故郷の人々はこの不出来な坊っちゃんをかげで笑った。

大正十四年、彼はようやく上京したものの、暮しはもとより困窮をきわめ、妻は若い男と駈け落ちし、その生活がからくも安定したのは五十歳近くになってからであった。

昭和九年、四十八歳で明治大学文科の講師という職も得た。彼が晩年奇術を愛したというのも一種の安定の現われであった。

娘萩原葉子は記す。

「昭和十五年ごろから、父は痔がひどくなり、そのためか夜など同じ電車に乗り合わせたりするとき、座席の向うに意外に老いた父を見て、ことばもかけられないほど寂しく思うことがあった」

彼は家族にかくして床屋で髪を染め、また老眼鏡もかくして使った。

昭和十六年秋ごろから身体不調となり、好きな酒も飲めなくなった。そして、十六年早々、気分をひきたてるためにいった伊香保温泉から風邪をひいて帰って以来、その風邪がこじれて病床から離れられなくなった。

しかも太平洋戦争は進行し、少食の彼が栄養もとれないほど食糧は手にはいらなかった。

「五月に入ると、急に七月のような異常な暑さがやって来て、呼吸苦しくむし暑い日が続いた。暑さに弱い父は急激に弱り、二階から階下の座敷に寝室を移した時には、一人でお手洗に立つのがやっとのほど、両の足はまるで枯木のようになっていた」

　と、当時二十二歳の葉子は書く。

　五月十日の朝から急に高熱を出し、呼ばれた医者は急性肺炎だといった。しかし適当な薬も注射薬もなく、ただ酸素吸入器だけが療法であった。

「目を覚ますと声にもならない声で父は苦しそうに顔をしかめて、便意を告げた。シーツには布を置いてあり、そこへするようにと祖母や看護婦はいうのだが、お手洗に行かせてくれと口の動きで伝える。しかたなく二人がかりで両側から枯木よりも細い父の身体を抱きかかえ、やっとのことで連れて行っても、神経質な父は用を足さないで帰り、またすぐ便意を告げるのである。

　ここへしなくてはだめですと何度も叱るようにいうと、父は力なく首を振り宙をまさぐるような手つきをして、最後の願いだという気持を現わす。そして続けて三度目の時は、両側からささえられた足は宙に浮き、まったく力を失い、遂に用を足さずにがっくりと蒲団に寝かされ、呼吸は早く乱れあえいでいた」

「その夜は祖母と私と妹の三人が附添っていたが、十二時を過ぎたころまではいくらか呼吸も楽に落着いたように思われたが、急に荒いいきづかいになってきて大きく胸を不規則に波立たせ、顔は透きとおるように白く、手足のむくみは激しくなっていた。Y医に急いで電話をかけようとした時だった。ふいに瞳孔の定まらないおそろしいほど大きな眼を一瞬見開いてあたりを見たと思うと、次の瞬間に深く眼を閉じ、同時に大きく深い呼吸を一つつき、ふいにそれきり呼吸が止まったのである。

　そのとき私と妹は同時に『お父さま！』と大きな声をあげて呼んだ。しかし父はもう何も答えてはくれなかった。

　昭和十七年五月十一日、数え年で五十七歳だった」（萩原葉子『父・萩原朔太郎』）

　正確には午前三時四十分であった。

「わが草木とならん日に
たれかは知らん敗亡の
歴史を墓に刻むべき。
われは飢えたりとこしえに
過失を人も許せかし
過失を父も許せかし」

　彼は自分の一生を「敗亡の歴史」と思っていた。

　しかし、同じころ、みずからは有用有能と信じる一大集団であった帝国海軍の将官や参謀たちは、やがて日本に運命の敗亡を呼ぶミッドウェー作戦を準備しつつあった。

　朔太郎の書斎の鍵のかかった引出しという引出しは、ぜんぶ手品の小道具で満たされており、机の上に、「手をふれるべからず」と書いた分厚い紙が重ねられてあったが、それは詩稿ではなくて、「手品のタネ明かし」であった。

ヒトラー（一八八九——一九四五）

　一九四五年四月二十七日、ベルリンはソ連軍に完全包囲された。

　二十八日、遠雷のような市街戦の音がひびいて来る総統官邸地下壕で、ヒトラーは愛人エヴァ・ブラウンと結婚式をあげた。そして、部下のゲッベルスとボルマンにいった。

「妻と私は降伏の恥辱を避けるために死を選ぶ」

　二十九日、彼は盟友ムソリーニがパルチザンにつかまり、処刑され、逆さ吊りになったというニュースを聞いた。

　四月三十日、ヒトラーは昼食に軽いソースをかけたスパゲティをとった。

　午後三時三十分、ヒトラーはワルサー拳銃をとって自室にはいっていった。そこには、その直前毒をのんだ「妻」のエヴァ・ブラウンが、すでに長椅子の肘によりかかるようにして、横になって死んでいた。

　ヒトラーはテーブルに向った椅子に坐り、銃口を口にあててひきがねをひいた。身体は前のめりになり、そのときテーブルの花瓶が倒れて、飛び散った水がエヴァの屍体をぬらした。

　側近のオットー・ギュンシェ大佐はいう。

「ボルマンが真っ先にはいってゆきました。それから、私は執事のリンゲのあとからはいりました。ヒトラーは椅子に坐っていました。エヴァは寝椅子に横たわっていました。彼女は靴をぬぎ、それを寝椅子の端にキチンと揃えていました。ヒトラーの顔は血に覆われていました。エヴァは白い襟と袖口のついた青いドレスを着ていました。彼女の眼は大きく見ひらかれていました。青酸物の強い匂いがしました」

　しばらくして、二人の屍体は毛布につつまれ、掩蔽壕の入口の前の窪地に置かれ、自動車からぬきとったガソリンがそそがれた。この間にもソ連軍の砲弾はあちこち落下して、処理人たちは何度も避難しなければならなかった。し

かし、二つの屍体に火はつけられた。

ベルリンの大火の前ではくらべものにならないほど小さな炎でしかなかったが、何物にも劣らないほどの怖ろしい眺めであった。ヒトラーの運転手ケンプはいう。「それはベーコンの焼けているような匂いでした」

東条英機がいなくても太平洋戦争は起ったろう。しかしヒトラーという存在がなかったら、太平洋戦争は起らなかったにちがいない。これほど全日本人の運命に――子々孫々にわたって――激甚な影響を与えた異国人はほかにない。いや、日本人にもいない。

アイヒマン（一九〇六――一九六二）

第二次大戦中、ナチスのユダヤ人粛清部隊の指揮官として、おびただしいユダヤ人を強制収容所に送りこんだカール・アドルフ・アイヒマンは、ドイツの敗北後いちど逮捕されたが、一九四六年に脱走逃亡し、アルゼンチンのブエノスアイレスに潜伏して暮していたところを、十五年後の一九六〇年五月十一日、イスラエルの秘密警察に探知逮捕され、空路イスラエルに送られた。

そして、裁判の結果、死刑が宣告された。

一九六二年五月三十日深夜、アイヒマンは絞首台に上った。その前に彼は、一本の赤のワインを半分飲んだ。いっしょに聖書を読もうといった牧師に、もうそんな無駄なことをしている時間はない、といった。そして、両腕を背中に縛られたまま、監房から処刑室まで五十メートルほどの距離を、身体をまっすぐにのばして歩いていった。

絞首台の下で、彼は係官たちにいった。

「私は、戦争の掟とドイツの国旗に従わなければならなかったのだ」

また、いった。

「もう少ししたら、みなさん、どっちみちわれわれは再会するでしょう。私は生きているとき gottgläubig だった。だから gottgläubig のまま死にます」

それは「ナチ的な表現では」キリスト教を否定し、死後の生を信じない人間という意味であった。一方で死後の再会をいう彼は、自分の矛盾に気がつかないようだった。

彼は絞首台に従容と上った。看守が足首と膝を縛ったとき、まっすぐに立てるように縄をゆるめてくれといい、黒い頭巾をかぶせようとすると、そんなものは必要ない、といった。彼は完全に冷静だった。

「ドイツ万歳、アルゼンチン万歳、オーストリア万歳！」

と、彼はさけんで絞架にぶら下がった。

屍体は焼却され、その灰はイスラエル領海外の地中海にまきちらされた。

市川団十郎・十一世（一九〇九――一九六五）

憂愁の花のような美しさで戦後の歌舞伎で「海老さま」時代を作ったこの役者は、昭和三十七年、十一世市川団十郎を襲名すると、やたらに「天下人」の威厳をふりまわして、ほかの俳優や芝居関係者を怖らしくなやませた。傲慢になった、というよりその偉大な名跡をついだことへの責任感かららしかった。

昭和四十年二月から四月にわたる「七世松本幸四郎追善興行」（彼の父で十七回忌にあたった）も彼の発案を強引に実現したもので、弟の八世幸四郎、松緑とともにならんだ「口上」では、地は口下手のはにかみやの団十郎が、毎日ちがう漫談調の長広舌をふるってみなを驚かせた。

そのあと五月に歌舞伎座で「保名」をやったのが最後の舞台となった。

「癌を病む人は、あれを癌面とでもいうのか、黄黒色の独特の濁った顔色となる。

団十郎にいつ癌が住みついたのかは知らないが、ふり返ってみると、その素顔には、ずうっと前から、色素が皮膚の内がわに沈澱しているような特別の色黒さがあった。化粧焼けとも違う、それは黒さだった。おなじ兄弟の幸四郎や松緑には見られない、不吉とも思える色具合であった。人知れず、癌はとっくの昔から、もうこの人の体内に巣くっていたのだったか。

そういう顔に白い顔料を塗りこめ、あの助六や与三郎や光源氏などの、まばゆい光芒を放っていたことを思うと、それだけでも、団十郎のもっていた悲劇性が胸にこみあげてくる」

と、利根川裕は『十一世市川団十郎』で書く。

「この年の五月ごろから、胃に故障を感じていたのだった、とか。六月には、東大病院で精密検査を受けた。九月二日には、慈恵医大病院で開腹手術したが、そのときはもう無数の転移がみられ、ほどこす術もなくそのまま縫いあわせた、という。むろん、本人はそうとは知らなかったろうが。

十月二十三日の夕刊は、それが最後となる記者会見の模様を載せているが、本人は、

『年内の舞台出演は少し無理のようですねえ。いま、ここで身体の調子をととのえているところなんです。来年正月

の歌舞伎座には、軽い役で出演したいと思います』

と、語っている。死を承知のうえで生について演技をしてみせたわけではない。記者たちにしてみても、死の予感があっての記事ではなかったろう。ただ、そのときの写真はすっかり痩せ細っていて、笑っている頬に、生きるに必要な肉の厚みはすでにそぎ落とされているか、と見えた」

十一世市川団十郎は、それから二十日もたたぬ十一月十日午後五時二十三分、赤坂の山王病院で生涯を閉じた。

「知らせを聞いて南平台の家へかけつけた時、遺骸は新築したばかりの奥の八畳に白布を被って寝ていた。枕頭の幸四郎がおどけた声で、

『御開帳……』

といい、白布を取った」

と、千谷道雄は『幸四郎三国志』で書く。

「半年ぶりに見る顔はこの人とは思えぬ程に相が変り、普段から浅黒い皮膚の色はまるで黒人のように暗紫色になっていた。大きな眼窩はけずり落したように深く落ち込んで、この人の病気との闘いの凄じさを物語っていた」

双葉山（一九一二――一九六八）

六十九連勝の偉業をなしとげた大横綱双葉山定次は肝炎を病み、絶対安静を命じられながら、昭和四十三年十一月二十四日、九州場所の千秋楽に、羽織袴で優勝力士大鵬に賜杯を授与した。

それから一週後の十二月二日、東大病院に入院したが、ベッドから身を起すときは「一二の三」というかけ声をかけた。それは横綱が綱をしめるときのかけ声であった。

彼のかかった激症肝炎は非常な痛みを伴うものだが、彼はいちども痛いという声をもらさなかった。が、全身黄疸で黄色くなり、痒みだけは訴えたので、弟子の豊山たちが掻いてやったが、鋼鉄のように張った腰に舌をまいた。

さらに二週後の十二月十六日、眠るがごとき大往生をとげた。本人は死ぬとは考えていなかったらしく、遺言はなかった。

吉田満（一九二三――一九七九）

昭和二十年四月、徳之島北西で撃沈された戦艦大和に副

電測士として乗組んでいた吉田満少尉は、頭部に裂傷を負い、重油の海に漂うこと三時間、奇跡的に救助された。

復員後、昭和二十年十二月、日銀に入ったが、昭和二十七年、太平洋戦争最高の戦記文学『戦艦大和ノ最期』を発表した。

吉田はその後日銀一筋の勤務をつづけ、昭和五十年監事にまで昇進したが、それまで頑健を自負していたのに、昭和五十四年七月末、突然食道静脈瘤出血を起して入院した。

九月十四日、ベッドの上で『戦中派の死生観』という文章を書く。

「初めの数日は、幻覚と妄想の世界で、血を失う恐しさを思い知らされた。炎暑のなか、絶食の飢えや渇きよりも辛かったのは、今取りかかっている公務の長い仕事への気懸りと、家族の行末を案ずる不安が胸をしめつけたことであった。

その後、連日の注射、採血、検査、深夜までの点滴など、内科の病気で寝込んだことのない私にはすべてが初体験で、時には脂汗をしぼることもあった」

しかし、人間の苦痛の経験としては、かつての特攻体験のそれにははるかに及ばない、と彼は書く。

「戦中派は、自分の一身を鳥の羽か虫けらのように扱うことを長年教えこまれ、戦中から敗戦まで徹底的に肉体を酷使され、戦後の混乱期からようやく立ち直ると、ただがむしゃらに、戦争協力者の汚名をそそぐには身を粉にして働くほかはないようにして働き、妻子の愛し方も人生の楽しみ方もろくに知らず、肉体酷使の習性を身につけたまま、五十を幾つも過ぎないのに、ぽっくり逝ってしまう奴が実に多い。腹立たしいほど不器用な、馬鹿な男たちである」

そして、

「戦中派生き残りはすでに定年年齢を過ぎた。第二の人生の荒波はいかに厳しくとも、残された余生を充実して生きようではないか」

と、彼は書いた。

その三日後の九月十七日午前一時三十分、彼は肝不全症状を発して、ぽっくり逝ってしまった。

越路吹雪（一九二四――一九八〇）

戦後シャンソンの女王といわれ、コーちゃんと愛称された越路吹雪は、彼女の両親も兄もガンで死んでいたので、よくそれらの遺影を見て、「あんたがた、ガンで死んだけど、あたしをガンにしたら承知しないからね」といっていたが、それは冗談でなく本気のつぶやきに聞こえた。

彼女は昭和五十五年六月、東京のパルコ西武劇場の「古風なコメディ」出演中から胃痛を訴え、一カ月の公演後、目黒の東京共済病院に入院し、七月八日に手術を受け、胃の三分の二を切除したが、そのときはすでにガンはレモン大となっており、かつ腹膜までひろがっていた。

八月にいったん退院し、六時間以上も車にゆられて信州大町の山荘へいった。それは妻をガンと知りつつ最後の想い出を作るための夫内藤法美の心づくしであった。

やがて帰京したが、九月下旬からまた容態が悪くなって共済病院に入院した。入院するとき彼女はマネージャーの岩谷時子に、「いっぱい恋をしたし、おいしいものも食べたし、歌もうたったし、もういいわ」と、いった。彼女には終始胃潰瘍といってあったが、うすうす気がついていたらしかった。

しかし十一月六日には、ベッドの上で両手をひろげ、指を一本一本曲げたりのばしたりして、「これをやらないとステージに出てもマイクが持てないでしょう」といった。

その翌日の午後三時二分に彼女は死んだ。手術を受けてから、わずか四カ月後であった。

最後の言葉は夫に「ブラックコーヒーとミルクを……」といったようだが、よく聞きとれない言葉だった。

五十七歳で死んだ人々

> 人は生まれ、苦しんで死ぬ。人生の要点はそれでつきている。
>
> ——正宗白鳥——

ベートーヴェン（一七七〇——一八二七）

ベートーヴェンは一七九六年耳を患い、一八〇〇年ごろから急速に悪化し、一八一五年、四十五歳にして完全に聴覚を失った。

彼の晩年の作品は、同年代の人間にはまったく理解不可能で、二十世紀の人間をも戸惑わせるものがある。ドビュッシーすらもいう。「ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第十四番は、まちがいなく最初から最後まで悪ふざけ以外の何

物でもない」

彼は晩年も、長年にわたる自分の病気や家族についての心配、根拠のない貧乏に対する呪いをつぶやきつづけていた。

一八二六年秋ごろから腹水がたまりはじめ、十二月二十日に最初の腹水穿刺が行われ、翌一八二七年二月十七日に四回目の穿刺が行われた。

いちじは効果があったように見え、三月八日には出版社から送られて来たモーゼルワインを一息に飲んだが、すぐにその場で吐き出してしまわなければならなかった。

三月二十三日に、医者のヴァヴルッヒは、死の迫っていることを彼に告げた。彼の顔色は変り、口をとじ、もの思いに沈み、やがて周囲の友人たちにいった。

「友よ、拍手を——喜劇は終りぬ！」

彼は自分を嘲笑したのであろうか。自分の偉大な人生を喜劇と判断したのであろうか。

二十四日に終焉の聖晩餐式を受けたが、彼はひたいに汗をにじませて、うつらうつらと眠っているばかりだった。

三月二十六日の午後、ベートーヴェンを春の雷雨が襲った。雷鳴がとどろいたとき、ベートーヴェンは半身を起し、おどすように右手をふりあげたが、やがて倒れた。息が絶えていた。

死後、彼は解剖された。その剖検記録。

「四肢は極度に痩せ衰え、黒い溢血点が散在している。腹部は膨隆いちじるしく、腹水が多量に充満している。

肝臓実質は正常の約半分程度に萎縮し、なめし皮のように硬く、青緑色を呈し、表面に凹凸が存在し、実質にもソラ豆大の結節が散在している。

胆管内には結石ようの沈渣を大量に認め、脾臓、膵臓も正常よりかなり大きく硬化している」

ベートーヴェンの死因は、アルコール嗜好による肝硬変と診断される。

生涯彼を悩ませた難聴の原因は、聴神経炎があげられているが、梅毒による症状の疑いもある。

彼の葬式で、その棺をかついだ者の一人にシューベルトがいた。

日本では同じ年に小林一茶が死んでいる。

水野忠邦（一七九四——一八五一）

「天保の改革」は彼が四十七歳から四十九歳にかけてやったものである。幕府体制に大手術を加えようとした彼の志

は諒とするものがあるが、いかんせん、それに使用したメスが、鳥居耀蔵という妖刀であった。かつ、そもそもだれの力をもってしても逆流することは不可能な時の流れであった。

天保十四年彼は罷免され、江戸屋敷も、国元の浜松も民衆の打壊しを受けた。その翌年彼はわけのわからぬ復活をしてふたたび老中首座に返り咲いたが、八カ月でまた辞職のやむなきに至り、二万石と上屋敷を没収され、謹慎を命じられた。

以後六年にわたり、五十代の彼は影のように、渋谷の下屋敷の長屋で過し、嘉永四年二月十六日、ひっそりと死んだ。

彼は持病の「癪」（胸腹に起る激痛の総称）を持っていたが、肺も患っていたともいわれ、正確な病名不明。要するに挫折と失意のうちに身心衰えて死んだのであろう。死後になって「謹慎」が解かれた。

パークス（一八二八――一八八五）

一八六五年（慶応元年）英国駐日全権公使として来日し、幕府と明治新政府の高官に対し、怒号怒罵、内政干渉にちかい威嚇外交をして、木戸、大隈らをもふるえあがらせたハリー・パークスは、一八八三年（明治十六年）ようやく駐清全権公使として日本を去った。

彼は大英帝国にとって一介の辺地外交官に過ぎなかったが、傲慢無礼を極める一面、伊藤博文が評したように、「彼の吾輩らに対する態度は、まるで教師が生徒に対する態度じゃった。文明の政治というものはこういうものじゃぞと言いたげな風で、すっかりその指南役になりすましておった」趣きがあった。

しかし、北京にあることわずかに二年、一八八五年（明治十八年）心臓リューマチのために突然死去した。

寺田寅彦（一八七八――一九三五）

昭和九年秋のころから寅彦は身体不調であった。「今日はからだと足重く歩行大儀なり」（昭和十年二月十日の日記）「夜来不快、朝下痢」（三月九日の日記）

彼の身体の内部でガンはすでに進行していたのである。しかも最愛の末娘雪子と雑誌「セルパン」の記者青木滋（のちのペンネーム青地晨）の結婚問題で、彼自身「こんな思いをするくらいなら死んだ方がましだ」と小宮豊隆にも

らしたほど悩むことが多かった。

しかし、八月にはいると意外に元気になり、雪子ら二人の娘を連れて軽井沢にゆき、自転車の曲乗りをしてふざけて見せたり、小浅間と離山に登ったりしたほどであった。ただし「それでも中腹までひといきに登ったら呼吸が苦しくなり、妙に下腹が引きつって、おまけに前頭部が時々ずきずき痛むような気がした」（寅彦『小浅間』）

九月に帰京すると彼は病臥し、みるみる悪化した。彼は神経痛だと思いこんでいた。しかし病気は脊椎の骨腫瘍であった。つきそいの看護婦はいう。「こんなに痛ければ死ぬ方がましだ、とたびたびいいましたが、本気では決してそんなお心持になったわけではないと存じます」（小林勇『回想の寺田寅彦』）

十一月十九日の晴れた日、寅彦は、文金高島田に花嫁衣裳の雪子の姿を、本郷曙町の二階十帖の、二度と起きることのなかった病床の上で見た。

十一月二十一日、幸田露伴は、岩波の小林勇とともに寅彦を見舞った。寅彦の妻紳子が、「ちょっとお待ち下さい」といって二階へ上ってゆく跫音があまり無神経で乱暴なので、露伴は眉をひそめていた。

病床で、やつれた寅彦が、「身体じゅうに痛みが移ってゆくのを、じっと見つめています」というと、露伴は、「上の方から谷を見るように、気持を静かに下げてゆきなさい」と、いった。寅彦は露伴の見舞いに驚き、かつ感謝していた。

帰りの車中で、露伴はつぶやいた。「寺田君よりおれの方がまだ倖せかも知れない」それは悪妻で有名な夫人を持つ露伴が、同じく悪妻で有名な紳子夫人のようすを見ての感慨であった。

――紳子夫人は、二人の妻に死別した寅彦の三番目の妻で、寅彦の晩年十七年五カ月を共にしたが、寅彦は、母のちがう子供たちがふえてはあとあと悶着のもとになるといって、ついに紳子とはいちども夫婦生活をしたことがなかったという。小林はのちにそのことを小宮豊隆から聞かされて驚いたが、この時点においてはまだ紳子の悲劇を知らなかった。

十二月二十七日、見舞った友人松根東洋城に、寅彦はとぎれとぎれに何かいった。その中に、「……先生のところへいった……そしたら先生がこっちへ来い……」という言葉が聞えた。漱石先生が迎えに来たのではないか、と東洋城はいう。

十二月三十一日午後零時二十八分、寅彦は息をひきとっ

た。

「……寺田さんは初めの内は医者の診療を拒まれた様であり、病勢が進んでからも入院する事を肯じられなかったそうである。寺田さんの様な科学者が何故そうなのかとも思うし、又あれ程の科学者であればそう云う気持を懐かれるのが当然である様にも思われる。（中略）寺田さんが医者も病院もどうでもいい様な気持で死んで行かれたのは、御自分の寿命と云う事をどう云う風に考えていられたか、それが気にかかってならないのである」（内田百閒『寺田寅彦博士』）

北原白秋（一八八五――一九四二）

白秋は昭和十二年九月、五十二歳のときに視力に異常をおぼえて原稿が読めなくなった。診察の結果、糖尿病と腎臓病による眼底出血のためと判明した。以後彼は薄明の世界に住むことになる。

十六年三月、故郷柳川に帰郷して彼は歌った。

「盲うるに、早やもこの眼
見ざらむ、また葦かび
籠飼や水かげらふ」（『帰去来』）

葦の芽、魚とる籠、水の反射、それら水郷柳川の風物はすでに薄明の中にあった。

彼はなお詩作をつづけたが、昭和十六年の年末、歩行困難、呼吸困難におちいり、翌十七年二月慶応病院に入院したが、三月八日の夜、具合が悪くなり、しかも宿直医がおらず、看護婦が強心剤を注射したところ、薬量をまちがえて人事不省となるという騒ぎなどがあったため、三月十八日、杏雲堂病院に移った。

ところが留守宅で母が脳軟化症で倒れたため、その病状を案じて、四月八日から彼も杉並区阿佐ヶ谷の自宅で静養することになった。

しかし、帰宅すれば静養は思うにまかせず、彼はまた多忙な生活に戻った。

いっとき彼は逆療法として、腎臓病には禁物の塩を摂取しはじめた。その結果、狂喜して彼はいう。

「まさしく奇蹟が私の肉体上に起って来た」「寧ろ一切の薬物を排し、塩を嘗め、水を喫し、五味を摂取して大に活力を盛りかえした」「私は五年間の薄明生活から煌々たる白日のもとに眼を見張っている。見えて来たのだ。尠くとも拡大鏡を使用しないですむ程度にはなりつつある」

しかし、逆療法は当然逆効果をきたし、十月にはいって

病状はまた以前より悪化した。嘔吐が頻発し、臥床していることさえ耐えられないという状態になった。

そして十一月二日の午前四時ごろ、呼吸困難とチアノーゼが甚だしくなった。苦痛が極限に達したとき、白秋はあぶら汗を流しながら、「なに、負けるものか、負けないぞ」と、うめき、家族たちは「兄さんがんばれ」「お父さんしっかり」と、さけびつづけた。

弟子の医師米川稔は記す。

「発作は名状し難い苦痛という外に形容のしようはない。（中略）一人が先生のお頭を吊り上げるようにして後から抱える。一人がお背中を両の手で力一杯に押す。前からは洗面器を捧げる。（中略）

猛烈な発作が痰が一つ切れただけで一時一寸おさまることもある。そんな時だと思うが、『ああ、よかったねえ。これで落ちついた……。あんなことで死ぬものか。あれで死ねたら死ぬなんて楽なものだよ』と仰言ったことがある」

白秋は突然「何か食べよう」といい出し、二片の林檎を一気に食べた。

「隆太郎君（長男）が新鮮な空気を導こうとして、東の窓を少し開かれる。先生のおちついた、然し深い感動のこもったお声が、

『ああ、蘇えった。隆太郎、今日は何日か。十一月二日か。新生だ、新生だ。この日をお前たちよく覚えておおき。わたしの輝かしい記念日だ。新しい出発だ。窓をも少しお開け……。ああ、素晴しい』

外は朝霧が流れて、全く素晴しく清々しい黎明であった。皆がほんとに奇蹟でもまのあたり見るような気持に、この時、なったとしても不思議も誇張もない」

しかし、それからまもなく、最後の発作が来た。苦悶の中で白秋は、さっきまでの気力も失って、

「一度安心したせいか、もう打ち勝つ気力がない。駄目だ、駄目だよ」

と、あえぐようにつぶやいた。

そして、午前七時五十分過ぎ、右の眼のまなじりから一すじの涙をひきながら息絶えた。

秋の蚊の耳もとちかくつぶやくにまたとりいでて幮を吊らしむ

九月に作ったこの平淡な歌が、絢爛妖異の『邪宗門』の詩人として登場した彼の最後の歌となった。

南の方ガダルカナルでは死闘がつづけられていた。

中野正剛（一八八六――一九四三）

昭和十八年十月二十一日早暁、中野は行政検束され、警視庁に連行された。これを命じた首相東条英機は、検事局を督励し、陸軍刑法による「造言蜚語」容疑をもって、東京地裁に起訴前の強制処分を請求させた。しかし予審判事の小林健二は、すでに議会は会期にはいっており、議会の許可なくして衆議院議員たる中野の逮捕は出来ない、との理由でこれを拒否した。

かくて正式には中野は釈放されるはずであったが、理由不明のまま警視庁はなお十月二十六日まで留置し、この朝午前六時、こんどは九段下の憲兵隊にひき渡した。

中野を取調べたのは、東京憲兵隊長四方諒二と憲兵中尉大西和男であった。

午後二時に至り、やっと中野は監視の憲兵につきそわれたまま帰宅した。帰ると彼は、すぐ欄間にかかげてあった、ヒトラー、ムソリーニ、チアノの写真をとりはずし、納戸に片づけさせた。

彼は入浴し、髪を黒く染め、故郷黒田藩の士族が好んでいた郡山の紋付羽織を着たが、それが死装束であるとは家族のだれも気づかなかった。

その夕方、母や弟や妹、十二月には学徒出陣することになっている四男らと、平常と変らぬ談笑のうちに夕食を終え、二階の書斎に上った。十時ごろ、居間に下りて来て、隣室に泊っている二人の憲兵に、「もう寝ろよ」と声をかけた。

翌十月二十七日早朝、居間にはいった女中が、中野の死んでいるのを発見した。

少年時かかった左足のカリエスで義足をつけていた中野正剛は、椅子を東向きにして腰をかけ、向い合せにおいた肘掛椅子に前のめりに頭と右肩をもたせかけていた。

それまで何も気づかなかった二人の憲兵が駈けつけて調べると、作法通り腹を十文字にうすく切り、左頸動脈を切断していた。

机上の名刺の裏に「断十二時」とあったから、自決したのは深夜十二時であったろう。

その他、「刀の先が丸くて切れそうにない。時計の側でネタ刃を合せたが駄目。そこで腹の方は軽く、まねかたにして仕損じぬようにやる。東方九拝、平静にして余裕綽々、自笑。儂は日本を見ながら成仏する。悲しんで

下さるな」等、最後の感慨を書いた遺書類があったが、なぜ自決するか、という理由を書いたものは一通もなかった。

中野はこの年の一月一日の「朝日新聞」に、『戦時宰相論』と題し、「日本の非常時宰相は仮令英雄の本質を有するも、英雄の盛名を恣にしてはならないのである」と東条を諷する論文を発表した。のみならず、ついで、東条を打倒するために重臣たちの間を斡旋奔走していた。

東条がこの中野の論文や行動に怒っていたことは事実である。中野の検束がその現われであったこともたしかである。

しかし中野が憲兵隊でいかなる訊問を受け、いかなる事情で自決するに至ったかは、彼を取調べた四方大佐、大西中尉が、戦後も墓のごとく黙して語ろうとしないので、ついに謎のままになった。

そして一般国民の間にも、中野がかつて右翼の巨頭として、黒シャツ党員などひきいてファシズムを鼓吹し、太平洋戦争を煽動した事実を知っているだけに、彼を単なる和平論者と見ることが出来ず、釈然としない印象が残された。

南雲忠一（一八八七――一九四四）

南雲は悲劇の提督であった。

昭和十六年十二月八日、第一航空艦隊司令長官として真珠湾を奇襲し、米太平洋艦隊の主力撃滅という所期の目的を果しながら、反転を急いで、所在の工廠や石油タンクを手つかずのままにし、敵の反攻を早めたことで批判を受けた。

ついで、昭和十七年六月五日、同じ南雲機動部隊をもってしたミッドウェー攻略作戦において、索敵の不充分からかえって敵空母群の奇襲を受け、このときわが戦闘機、雷撃機の発進の順序をあやまったために、味方の全空母を喪失するという、太平洋戦争の運命を決する敗軍の将となった。

彼は自決を計ったが部下に制止され、惨憺たる姿で引揚げて来て、待ち受けていた「大和」の山本連合艦隊司令長官に、

「おめおめ生きて帰れる身ではありませんが、ただ復讐の一念にすがって生還して参りました。なにとぞいまいちど陣頭に指揮させていただきとうございます」

と、切願した。

二年後の昭和十九年四月中旬、南雲は中部太平洋方面司令長官としてサイパンに赴任したが、乗るべき艦もすでになく、陸上の司令部にいるほかはなかった。

そのころ南興水産の事務員をしていた十八歳の菅野静子は、自分たち少女といっしょにテニスをして遊んでくれた南雲長官が、六月十日、司令部を出てむずかしい顔でどこかへ急ぎ足で歩いてゆくのを見た。それが、生き残った者が伝えた南雲の最後の姿であった。

米機動部隊がサイパンに上陸したのは六月十五日のことである。死闘二十余日、サイパン北部に追いつめられた日本軍の残存部隊は、七月六日夜、最後のバンザイ突撃をして全滅した。「無念、七生報国ヲ誓ウ」と最後の訓示をした南雲が戦死ないし自刃したのは、七日未明と推定される。彼はアメリカ軍のほうから「復讐」されたのである。

安達二十三（一八九〇——一九四七）

陸軍中将安達二十三は、昭和十七年十一月、第十八軍司令官としてニューギニアに派遣されてから約三年、懸絶する敵の物量もさることながら、饑餓とマラリアのため、ニューギニア作戦に従った日本軍十二万のうち、生還したもの一万（それも大半病人）という悪戦苦闘の末、終戦を迎えた。

昭和二十年九月十三日、彼はウエワクでオーストラリア軍に対し降伏調印を行い、麾下の将兵に対し「軍は大命に基き濠州第六師団に降伏せんとす」と命令した。日本軍の降伏にあたって、これほどいさぎよい言葉を用いたのはほかに例がない。

昭和二十一年二月以来、安達は、第十八軍関係の戦犯容疑者百四十名とともにラバウル収容所にいれられたが、かつて八十キロあった肉体は別人のごとく痩せ衰え、しかも持病の脱腸の悪化にたえながら、部下とひとしく炎熱の下に天秤棒をかついで水を運び、野菜作りに励んだ。

この間彼は、部下戦犯のために幾度も濠軍法廷の証言台に立って弁明したが、彼自身も部下将兵をして戦争犯罪を行わしめたという責任を問われ、二十二年四月、無期禁錮の判決を受けた。

九月八日、ラバウルにおける戦犯裁判はすべて終了した。

彼はかねてから軍司令官としての任務が終り次第自決の覚悟をしていて、短刀と毒薬を用意していたが、短刀は発見されて没収され、毒薬はある機会から効目がなくなって

いることを知った。それを知ったとき彼は少し当惑した顔をしたが、すぐに、「なに、人間、死のうと決めたら、どんな法でも死ねると思うよ」といっていた。

果せるかな、彼はどこで手にいれたか錆びたナイフを一挺隠し持っていて、裁判が完結し、最後の容疑者八人が釈放帰還を許されるという通知を受けたあと、九月十日早朝、収容所で軍服姿で北方の日本に向って端座し、錆びたナイフでみごとに割腹した上、みずからの手で頸動脈を圧迫するという異常な精神力をふるって死の目的を達した。

遺書。

「……小官は、皇国興廃の関頭に立ちて、（中略）人として堪え得る限度を遥かに超越せる克難敢闘を要求致候。之に対し、黙々之を遂行し力竭きて花吹雪の如く散り行く若き将兵を眺むるとき、君国の為とは申しながら、其断腸の思いは、唯神のみぞ知ると存候。当時、小官の心中、堅く誓いし処は、必ず之等若き将兵と運命を共にし、南海の土となるべく、縦令、凱陣と雖も渝らじとのことに有之候」

終戦直後の昂奮時ならともかく、二年を経て、おのれの責任を全うしたと見きわめてから自決したのはみごというべきである。太平洋戦争敗戦にあたって、かかるみごとな進退を見せた日本軍の将官はきわめて稀であった。

大松博文（一九二一——一九七八）

日紡貝塚女子バレーボール監督として、回転レシーブなどを考案し、その猛烈な訓練で「鬼の大松」と呼ばれながら、昭和三十九年の東京オリンピックで優勝させ、チームの女子選手たちを「東洋の魔女」と呼ばせるに至った大松は、その名声をかって昭和四十三年参議院議員に当選したが、効目は一期かぎりで四十九年には落選した。

以後、いわゆるママさんバレーなどを指導していたが、昭和五十三年十一月二十日から、岡山県井原市のママさんバレーをコーチするため、井原市の旅館「一新」に投宿中、十一月二十三日午後十一時半ごろ、突如心筋梗塞の発作に襲われて、井原病院にかつぎこまれた。彼はそれまで強健を誇り、心臓など循環器に故障はなかった。

井原病院長談。

「担ぎ込まれたときは呼吸困難で脈搏も乱れ、口もきけない状態で、しきりに青い泡状のタンを吐いていました。明らかな心不全で、酸素吸入はもちろん可能なかぎりの手をつくしましたが、ダメでした」

二十四日午前二時に他界した。「おれについて来い！」といういとまもなかった。
男一生いちどの花火。それを打揚げた上は、鬼の大松もって瞑すべし。

五十八歳で死んだ人々

> ……いろいろあったが、死んでみりゃあ、なんてこった、はじめから居なかったのとおんなじじゃないか、みなの衆。
>
> ——山田風太郎——

シーザー（前一〇二——前四四）

ジュリアス・シーザー（ユリウス・カエサル）は死の前夜、友人と雑談中、はからずも死の問題が出て来たとき、「どんな種類の死をよいと思うか」と訊（き）かれ、「突然の死だ」と、答えた。

その翌日の三月十五日、「ローマの独裁者（ディクタツーラ）」を斃（たお）そうとする陰謀者たちに元老院におびき出された彼は、刺客たちに囲まれて乱刃を浴びた。

彼は手にしていた鉄筆をふるってたたかい、いちじは血路をひらいたが、ブルータスが短剣を握って襲って来たのを見て、

「ブルータス、お前もか！　わが息子よ！」

と、さけんで、床に崩れて死んでいった。

ブルータスの母と、彼は昔関係があって、ブルータスは自分の子かも知れない、と彼は考えていたのである。

杜甫（とほ）（七一二——七七〇）

夏草やつはものどもが夢のあと

有名な芭蕉のこの句は、杜甫の詩『春望』を踏んだものである。いわく、

「国破れて山河あり
城春にして草木深し。……」

唐の玄宗皇帝時代に生きた杜甫は、その生涯において、仕官しているより放浪している時期のほうが長かった。それも仕官の機会がなかったり、仕官してもくびになったり、あるいは内乱のため地方に難を避けたりという受身の放浪であった。

晩年の二年間ほど、杜甫は、四川省のある峡谷の町に住んでいたが、大暦三年（七六八）舟を揚子江に出して、湖北から故郷長安に帰ろうとしたが、当時長安は乱世の混乱の渦中にあり、やむなくさらに二年ばかり、湖北、湖南の水の上で漂泊生活をつづけ、大暦五年冬、湖南の湘江を漂う舟の中で死んだ。

同年四月、在唐五十三年の日本人の阿部仲麻呂が死んだ。

杜甫の沈痛悲壮の詩は、しかし当時一般には知られず、彼の詩が李太白にもまさり、中国第一の詩人であることが認識されたのは、死後四十年を経た唐中期になってからであった。

菅原道真（すがわらのみちざね）（八四五——九〇三）

藤原氏以外の出身でありながら、いちどは右大臣として、左大臣藤原時平とともに最高の顕栄の座にあった道真は、延喜元年、突如九州太宰府に権帥（ごんのそち）として流された。

その官舎は床も朽ち、屋根は漏（も）るといった惨めなもので、もともと丈夫でなかった彼はたちまち、胃病、脚気（かっけ）、皮膚病などを患いはじめ、二年目の延喜三年二月二十日に死んだ。

この悲劇前後に彼が詠じた「こち吹かば」の歌や、「去

年の今夜清涼に侍す」などの詩はのちに人口に膾炙したが、それより、その死後、藤原時平ほか彼を追放する陰謀に関係した人々に、相ついで死や不幸が訪れたことから、その怨念を怖れて天満宮が作られ、彼は神様に――ついには受験の神様にまで祭りあげられた。

マキャヴェリ（一四六九――一五二七）

レオナルド・ダ・ヴィンチが死んだとき、マキャヴェリは五十歳であり、同時にミケランジェロは四十四歳であった。

　マキャヴェリは、才智にかがやく眼を印象させる以外は、風采のあがらぬ、ひ弱げな人物で、生涯ほとんどフィレンツェ国の書記官というとるに足りぬ地位に甘んじた。

　しかし極めて有能な外交官で、当時それぞれ独立国にひとしかったローマ、ミラノ、ヴェネツィア、さらにはフランスなどとの戦争や外交のかけひきに従事したが、その当面の任務以外に、冷徹無比の彼の眼は、絶大の興味をもって、一国の政治や国家間の権謀術数の真髄を見透すことに捧げられた。レオナルドやミケランジェロの芸術は、彼の眼中にはなかったように見える。

　晩年彼は、まったく無実の嫌疑で叛逆罪の一味として投獄され、追放されたが、その不遇な生活の間に、彼の洞察した政治眼や史眼による『君主論』を書いた。

　支配者たる者は、獅子の強さと狐の狡智を持たなければならぬ。目的のためには手段をえらぶなかれ、というテーマにつらぬかれたその「帝王学」は、のちにナポレオンの座右の書となり、かつまた世にいわゆるマキャヴェリズムの名を残すもととなったが、マキャヴェリその人は、イタリア統一の悲願に燃えた誠実な愛国者であった。

　彼にとって最後の年も、彼は、ドイツ侵入軍の前に風前の灯の運命にあったフィレンツェの防衛のために知力をしぼったが、臆病風にさそわれた政府自体から解任され、任地から帰って蟄居した。

　ある夜、彼は夢を見、家族に話した。それは、歩行中、間のぬけた、貧しげな連中とゆき逢い、次に厳粛な顔つきをした一団とゆき逢ったが、あれはだれかと人に訊くと、前者は天国へゆく人々で、後者は神の怒りにふれて地獄へゆくギリシャやローマの哲人たちだ、ということであった。

　そしてお前はどちらへゆきたいかと尋ねられ、私はあの馬鹿どもと天国へゆくより、後の人々とともに地獄へゆきたい、と答えたという夢であった。

　数日後、彼は激しい腹部の痛みを訴えた。彼は以前から胆石があり、しばしば腹痛を病んだので、このときもふだんの薬をやや多量に服用したが、痛みはいよいよ激しくなり、二日目、一五二七年六月二十二日、未来永劫にわたって共にありたいと願う古代の学者たちの仲間入りするために、明瞭な意識のまま、地獄へ旅立った。

黒田如水（一五四六――一六〇四）

　マキャヴェリが死んで約二十年後、日本には日本のマキャヴェリスト黒田如水が誕生する。

　さて彼は、晩年病が重くなってから、平生の寛大さを失い、少しでも気にいらぬことがあると左右を怒罵し、一同を悩ませた。

　一日、子の長政が見かねて父に注意すると、如水は、「長政、耳を寄せよ」といい、「心配すな、このままおれが死ねば家来どもはおれを懐しがり、お前に心服せぬ。おれが死んでみながほっとするようになることがお前のためになるのだ。これはそのための狂言だ」と、ささやいた。

　最後までこんな権謀をめぐらして、慶長九年三月二十日に彼は死んだ。

　しかし、これについて正岡子規は、自身と思いくらべていう。「病勢が段々進むに従って何とも言われぬ苦痛を感ずる。それは一度死んだ人か若しくは死際にある人でなければわからぬ。しかもこの苦痛は誰も同じことと思えて、黒田如水などという豪傑さえも、矢張死ぬる前にはひどく家来を叱りつけたということがある。この家来を叱ることについて如水自身の言いわけがあるが、その言いわけはもとより当になったものではない。畢竟は苦しまぎれの小言と見るが穏当であろう」

尾形光琳（一六五八――一七一六）

　絵に、蒔絵に、焼物の絵付に豊饒絢爛たる才能を見せた光琳の独自の芸術は、京の「銀座」の年寄中村内蔵助というパトロンのうしろ盾によって咲いた花であった。芸術の世界のみならず、彼は内蔵助とともに快楽の人生を送った。

　京の銀座は、幕府勘定奉行荻原重秀の、元禄期からの相つぐ貨幣改悪によって巨利を得、その年寄（幹部）たちの儲けも莫大なものに上っていたのである。幕府の政策による儲けだから、その豪奢な日々は永遠に安泰なものと思わ

れた。
　しかるに、正徳二年、幕府に新井白石起ってこれまでの貨幣改鋳政策を弾劾し、荻原重秀は倒され、四年にはパトロンの中村内蔵助も全財産没収、本人は遠島の刑に処せられた。
　その二年後の享保元年四月六日、光琳は満五十八で病死した。病名は不明。
　新井白石はすでに斥けられていた。それにしても徳川期第一の知識人政治家が、徳川期最大の芸術家を葬る結果となったのは歴史の皮肉である。
　一見庇護者消滅による打撃のためと見え、事実晩年の彼は経済的に窮迫していたという説もあるが、それにもかかわらず、その大難が起った後にも、彼は京の新町二条下ルに好みの「光琳屋敷」を新築している。一見窮乏したと見せかけて、現実の生活にもしたたかな彼はみごとに隠し財産を保ちつづけたらしい。
　しかも、その翌年には何人目かの妾に男の子を生ませているところを見ると、天才の天衣無縫ぶりは憂き世の習いとは最後まで別乾坤のものであったか。

岩倉具視（一八二五―一八八三）

『ベルツの日記』（岩波文庫、菅沼竜太郎訳）より。
「――それは明治十六年の初めのことだったが、ある晩、ドイツ公使館で、一人の貴公子然たる青年にあった。あとで判ったが、それは岩倉公の令息だった。青年はわたしの方へ歩みよって尋ねた。『お伺いいたしますが、先生、ひどい嚥下困難を呈する場合は、危険な徴候でしょうか？』――『その方はお幾つです？』――『五十二歳ですが』（注・実は数え年五十九歳）――『それじゃあ、まあただ事ではありませんね』――『実はわたしの父なのですが』――青年がなお二、三の症状を述べたとき、食道癌の疑いがあると、わたしは告げておいた。
　それから半年あまりは、別に何事も耳にしなかった。するとある日、宮内省と文部省の役人から、至急面談したいとの知らせを受けた。二人の役人は勅命によりわたしに、次の船便で神戸へ立ち、京都で重い病気にかかっている日本の最も重要な政治家の岩倉右大臣を見舞い、出来れば東京へ連れ帰ってほしいと依頼した。すぐさまわたしは、助手を一人伴って神戸へ出発したが、神戸ではもう、わたし

を迎える手まわしがすっかり出来ていた。
　公はひどく衰弱し、やっとの思いで少量の栄養をとり得るにすぎないような有様だった。六月の末、わたしたちは東京にもどった（注・六月二十八日）。――その時、公はわたしから包み隠さず本当のことを聞きたいと要求した。
『お気の毒ですが、御容態は今のところ絶望です。こう申しあげるのも、実は公爵、あなたがそれをはっきり望んでおられるからであり、また、あなたには確実なことを知りたいわけがお有りのことと存じていますし、あなたが死ぬことを気にされるようなお方でないことも承知しているからです』
『ありがとう。では、そのつもりで手配しよう。――ところで、今一つあなたにお願いがある。ご存じの通り、伊藤参議がベルリンにいます。新憲法をもって帰朝するはずだが、死ぬ前に是非とも遺言を伊藤に伝えておかねばならない。それで、出来れば、すぐさま伊藤を召還し、次の汽船に乗りこむように指令を出そう。しかし、その帰朝までには、まだ何週間もかかる。それまで、わたしをもたさねばならないのだが、それが出来るでしょうね？』そして公は低い声でつけ加えた。『これは、決して自分一身の事柄ではないのだ』
『全力を尽しましょう』
　だが、もうそれは不可能だった。病勢悪化の徴候は見るまに増大した。公はほとんど、飢え衰えるがままに任された形だった。永い、不安のいく週間かがすぎた。その時わたしは、臨終が間近なことを知った。わたしは公に、最後の時間が迫ったことを告げた。すると公は、井上参議を呼び寄せるように命じた。公は参議に、声がかれているから、側近くひざまずくように促した。その間わたしは反対側に、公から数歩はなれてうずくまり、いつでも注射のできる用意をしていた。そして終始、寸刻を死と争いながら、公は信ずるものの耳にその遺言を一語一語、ささやきつ、あえぎつ、伝えるのであった。
　こうして疑いもなく維新日本の最も重要な人物の一人であった岩倉公は死んだ。鋭くて線の強いその顔立ちにもはっきり現われていた通り、公の全身はただこれ鉄の意志であった」
　明治天皇は、七月五日、十九日の両日にわたって岩倉邸に臨幸した。――岩倉は以前から孝明天皇毒殺の風評に悩まされていたが、天皇はいかなる心境で見舞ったのであろうか。
　もっとも、岩倉が伊藤博文に何をいおうとしたか、井上

馨に何をいったかは、浩瀚な『岩倉公実記』にも『世外井上公伝』にも書いてない。それは当然過ぎる遺言だから書かれなかっただけで、岩倉が最後まで念を押しておきたかったのは、やがて作られる帝国憲法に天皇制の刻印を打つことであったに相違ない。

　絶命したのは、七月二十日午前七時四十五分。

黒岩涙香（一八六二――一九二〇）

　日本における翻案探偵小説の始祖であり、かつは赤新聞「万朝報」の社長であった黒岩涙香は、その後創作力も衰え、明治中期いちどは日本一の発行部数を誇った万朝報も大正期にはいってからは急速に昔日の勢いを失った。しかし彼の意気は毫も衰えず、大正七年十二月に、「今回の行により更に一回転をなさん」と期して、ヴェルサイユ会議報道のため渡欧した。そして大正八年七月に帰国したが、このころから身体不調を訴えはじめた。

　彼の持病は気管支炎であった。

　彼はみずから「わが鼻は煙突の如し、終日煙を吐く」といったほどの愛煙家であったが、そのため咳甚だしく晩年は禁煙して「人の煙草嗜む傍にゆけば咽せ返りて苦しむこと甚だし」というまでになった。しかし、時すでにおそく、彼は肺ガンにかかっていた。

　十二月十七日大磯へ転地して静養したが、経過思わしからず、翌大正九年五月二十四日、東大病院入沢内科に入院した。

　六月末見舞った社員は、以前は明晰であった涙香の談話がとぎれとぎれの低声となり、いくども痰壺を口に運ぶのを見、一方こちらからの話にも、「もっと低い声で話しなさい。耳にひびくから」という注意を受けた。

　八月八日、彼は病床で、「磯の鮑に望みを問えば、わたしゃ真珠を孕みたい」と、書いた。これが絶筆となった。彼自身はまだ回復するものと信じているらしく、退院後の計画について種々語った。

　しかしその後彼は、ふたたび起つあたわざることを知ったらしく、墓の手配までし、自分の戒名を「黒岩院周六涙香忠天居士」とみずからつけた。

　十月五日夕刻、どういうわけか「おれが死んだらすぐ時計を見てくれ」と、いった。そして十月六日午前二時十三分息をひきとった。

　黒岩涙香なくんば江戸川乱歩なく、江戸川乱歩なくんば日本の推理小説はなかった。涙香の存在はやはり偉大であった。

種田山頭火（一八八二――一九四〇）

　明治二十五年、十歳のとき、母親が井戸へ身を投げて死んだ。山口県防府の大地主であった夫の政治狂いと家庭乱脈のためであった。

　それは少年種田正一にとって運命的な衝撃で、人生後半の彼の放浪は、一面、母の霊を追う旅ともいうべきものであった。

　大正五年、当時運送業を営んでいた家が破産し、父は行方不明になった。彼は熊本に逃げ出して額縁店をひらいたが、彼みずから「なまけもの也、わがままもの也、きまぐれもの也、虫に似たり」と自嘲したように、通常の生活をいとなむ能力も意欲もない男であった。

　大正八年、彼は妻子を捨てて上京し、転々と職を変えて空しい独身生活を送ったり、また熊本に帰ったりしたが、大正十四年に熊本で、泥酔して電車を停める事件を起し、これを機に僧となり、一寺の堂守となった。

　そして、大正十五年四月、四十四歳で一鉢一笠の乞食僧として放浪の旅に出た。それは尾崎放哉がやはり放浪の果てに小豆島で餓死に近い死をとげた同年同月のことであった。

　種田はすでに山頭火という俳号を持ち、放哉同様、自由律の句誌「層雲」の同人であったが、終世二人は相逢うことはなかった。

　分け入っても分け入っても青い山
　うしろ姿のしぐれてゆくか
　何を求めて風の中をゆく
　鉄鉢の中へも霰
　この旅、果てしもない旅のつくつくぼうし

しかし、この旅の間も彼はカルモチン（催眠剤）自殺をはかったり、しばしば泥酔して留置場にいれられたり、女を買ったりした。

　昭和七年十二月三十一日、五十歳の彼の日記「昭和七年度の性欲整理は六回だった。内二回不能、外に夢精二回、呵、呵、呵、呵」

　昭和八年四月二十一日、五十一歳の彼の日記「性欲をなくしたノンキなおじいさん！　私もどうやらそこまで来たようだ」

山頭火は放哉と異り、完全に人の世や、なまなましいおのれの欲望を断ち切れないで苦しんだ。

昭和十四年十二月十五日、ついに旅に疲れた彼は、俳句の知友の世話で、最後のすみかを松山御幸山のふもとの「一草庵」に得た。

その翌年の彼の句。

おちついて死ねさうな草萌ゆる

その年の十月二日、彼は日記に書いた。

「この夜どこからともなくついて来た犬、その犬が大きい餅をくわえておった。犬からすなおに受けて餅の御馳走になった」

十月十日、一草庵で句会があった。俳人たちが集まると、山頭火は高いびきをかいて寝ていた。酔っぱらって、昼間でも寝ていることはしょっちゅうあるので、俳人たちは彼にはかまわず隣室で句会をひらき、十一時ごろ、わざと起さず散会した。翌日になって、彼が死んでいるのが発見された。死因は心臓麻痺で、午前四時ごろ死亡したものと推定された。

彼はかねてから、「ころり往生」を願っていたが、死にかただけは彼の望みのままになった。

山頭火は、「無駄に無駄を重ねたような一生だった。それに湯を注いで、そこから句が生まれたような一生だった」と自嘲したが、このすべてを捨てたアウトサイダーは、後年の何もかも管理された時代に生きる人々の中にファンを生んだ。

阿南惟幾（一八八七――一九四五）

昭和二十年八月十四日、最後の御前会議を終ったあと、陸軍大臣阿南惟幾は、午後陸軍省に、なお抗戦をさけぶ将校たちを集め、「聖断下る。不服のものはまずこの阿南を斬れ」と、いった。

午後十一時、彼は首相鈴木貫太郎を訪ね、終戦の議がはじまって以来、頑強に戦争継続を唱えた自分の無礼をわび、それはただ国体護持の念によるものであったからお許しを請う、と挨拶した。

彼が去ったあと、鈴木は迫水書記官長に、「阿南君はいとまごいに来たのだ」といった。

時計が十五日に回ったころ、義弟竹下正彦中佐が陸相官邸を訪れると、阿南は十二帖の日本間で机に向って遺書を書いていたが、竹下を見ると、「ちょうどよいところへ来てくれた」とよろこんで、二人で酒を飲みながらいろいろ

話し合った。その中で阿南は、

「腹を切ったあともしバタバタしたときは、君が始末してくれ。しかし、まあそんな心配はあるまい」

といって、短刀を二振出し、一本をかたみだといって竹下に渡した。

午前三時ごろ、「あまり飲まれ過ぎては仕損じはしませんか」と竹下が心配して注意すると、「いや、血行がよくなると血がよく出て、かえって好都合だろう」と阿南は笑い、着換えをはじめた。いちど勲章を全部佩用した軍服を着てみたあとで、上衣をぬいで床の間におき、戦死した二男惟晟の写真をその上においた。

雨戸のすきまから、夏の夜が白みかけているのがわかった。八月十五日の朝が来ようとしていた。

そこへ大城戸憲兵隊司令官が、近衛師団の将校が叛乱を起した事件を報告に来た。

「君が逢ってくれ」と、阿南は竹下にいい、「夜が明けて来たから、そろそろはじめる」と、彼を応接室に去らせた。

しばらくして、竹下が戻って見ると、阿南は縁側で皇居のほうを向いて坐って、割腹を終ったところであった。それから右頸部を左手でさぐったのち、短刀でのどを切った。

竹下がうしろで、「介錯しましょうか」というと、阿南は、「無用、あっちにゆけ」といった。

そこに陸軍省から電話があり、竹下がこれに出て、ふたたびひき返すと、阿南は右前につっ伏していたが、まだ呼吸音が聞えていた。「苦しくはありませんか」と声をかけたが、返事はなく、もう意識もないようであった。しかし手足がヒクヒク動くので、竹下は短刀をとり、右頸部を深く切ってとどめをさした。

机の上の遺書には、

「一死以て大罪を謝し奉る」

と、あった。

十五日夜、陸相官邸から運ばれた阿南の屍体は、最後まで阿南と争い、戦争継続のクーデターを計って失敗し、宮城前で自決した彼の幕僚椎崎中佐、畑中少佐の屍体とともに、市ヶ谷台上の砲座で焼かれた。

溝口健二（一八九八――一九五六）

溝口健二は、昭和三十一年「赤線地帯」を発表後、次回作「大阪物語」を準備中、急速に肉体が衰弱し、足が紫色に腫れあがるという異常を示し、五月に京都府立医大病院に入院した。

溝口には知らされなかったが、病名は骨髄単核細胞白血病、いわゆる血液ガンであった。

「これは大映の一専属監督じゃない。日本の国宝です」と、大映社長永田雅一は病院長にいった。「もし溝口の病気を癒せる薬が日本にないというなら、私が世界のどこからでも手にいれます」

溝口はしかし、自分が回復不能の病気にかかったことをまだ知らなかった。

八月半ば、「西鶴一代女」「雨月物語」「山椒太夫」など、戦後のほとんどの溝口の名作に主演した女優田中絹代が見舞った。この日本の「国宝的」大監督と、「国宝的」大女優は、おたがいに愛情をいだき、現実に何度か結ばれながら、三年前田中が監督をやることについて溝口が、心配のあまり反対し、「田中のアタマでは監督はやれません」などいったという話を聞いて、田中が意地とプライドから反撥し、以来絶交状態になっていたのだが、溝口が死床にあることを知って、田中が見舞ったものであり、これが二人の最後の別れとなった。

二人の話は淡々たるものであったが、溝口の顔はかがやいていた。

この日から一週間ばかりで溝口は死ぬのである。

死ぬ前日の午後、彼はベッドに起きあがって、鉛筆で判読しがたい文字を紙に書いた。

「もう新涼だ。
早く撮影所の諸君と
楽しく仕事がしたい」

最後の助監督をつとめた安東元は語る。「それを書かれるときにですね、急に、せきを切ったように泣き出されましてね」

しかしその翌日は、じっと横たわってはいられないほどの苦痛と、しかも身体を動かす力もない臨終を迎えなければならなかった。

それでも彼は、自分が死んだらすぐに眼をクリぬいて、片眼の視力を失っている養女に移植してくれ、と妻のふじにいった。

ただしふじは実質上は妻であったが、法律上の妻千恵子の弟の未亡人で、千恵子は十五年前発狂し、このときもまだ精神病院に入院していた。

八月二十四日午前一時五十五分、彼は永眠した。

その日の通夜に集まった撮影所の「溝口組」の人々は、屏風、刀、蠟燭の種類、配置に至るまで、撮影中の溝口のことを思い浮かべながら用意した。「お通夜や臨終のうまい人やったが」と、だれかいうと、居合わせた男たちはいっせいに泣き出した。（津村秀夫『溝口健二というおのこ』、新藤兼人『小説田中絹代』等より要約）

高見順（一九〇七―一九六五）

昭和三十八年六月十八日の日記中に、五十六歳の高見順はこんなことを書いた。

「仕事はかどる。
ただし胃に変調。十六日からである。（中略）
胃の左側に鈍痛。なんだろう。
十一時、外に出てスシを食べたが、なまぐさい臭いが鼻について、いつものように食えぬ」

九月十六日の日記。

「食事のとき、何か食道につっかえる感じがする。この夏からのことである。
食道ガンの初期の徴候として、本に書いてあった感じとよく似ている」

彼がすでに異様な自覚症状をおぼえ、ひそかに本を調べたことを示している。

――高見順は、戦後早々の昭和二十一年、約半年胃潰瘍で病臥したり、二十三年から二十七年にかけて強度のノイローゼに悩まされたりしたが、最後に彼をとらえた死神の名は食道ガンであった。

そして、肉体も精神もいかにも文士らしい繊細さを持っていると見られていた高見は、この最後の死床に投ぜられて、別人のように剛毅な戦いぶりを示しはじめた。

昭和三十八年十月一日、そばを食べたところ、のどにつかえて吐き出したことから、三日、千葉医大附属病院で検診の結果、ついに食道ガンの診断を受けた。

しかし彼は、翌四日には新宿伊勢丹でひらかれていた日本近代文学館創立記念の「近代文学史展」を皇太子夫妻が参観されたのを、何くわぬ顔で案内している。彼はその四月から近代文学館の理事長を勤めていたのである。

十月九日中山恒明博士によって第一回手術。翌三十九年七月に第二回手術。

八月に、戦慄すべき詩の傑作『死の淵より』を書いた。

死の扉

いつ見てもしまっていた枝折戸が草ぼうぼうのなかに開かれている。屍臭がする。

すでにガンは食道から胃に転移していて、十二月に第三回手術。麻酔からさめたとき、高見は「まだ生きていたんだね」といった。

この間彼は、五億円の基金を要する「日本近代文学館」設立のために奔走した。

昭和四十年三月、千葉県稲毛の放射線医学綜合研究所附属病院で第四回目の手術を受けた。

七月十三日の日記。

「……眼がさめて時計を見ると三時十分。ええと、いつの三時？　部屋がうすぐらくしてあるので、昼か夜か分らぬ。それにこの頃よく夜中の三時に眼がさめる。時計がとまっていて一昨日は錯覚した。そんなこんなで、一瞬、三時がいつの三時か分らなかった。妻に聞くと、午後の三時だという」

この日が日記を書いた最後の日であった。

八月十日ごろには、医者から「もうエンジンのないグライダーが風に舞っているようなものです」と宣告された。

目黒の駒場で近代文学館の建物の起工式が行われたのは、八月十六日であった。この日彼は夫人に鉛筆を握らせてもらい、メモ用紙にメッセージを書いたが、わずかに「文学と政治と」という文字が判読出来るありさまであったので口述した。

そのメッセージは起工式に代読された。「はじめも終りもありがとうございました、としかいえません。一世一代の大ぶろしきを広げっ放しで病に倒れましたが、どうか末長く頼みます」

翌十七日午前三時、意識不明になり、七時ごろから手足が冷たくなり出した。それでも高見の生命力はガンと闘いつづけていた。

午後二時半ごろ、三島の龍沢寺の中川宗淵師が病室にはいってきた。彼は高見の一高時代の同級生であった。彼は巻紙に書いた訣別の辞を病人の枕頭におき、しばらく高見の顔を見つめていたが、やがて「こんなものは取りましょう」と酸素吸入のパイプをはずしてしまった。

あっけにとられた医師に会釈して、宗淵師は読経を始めた。それは二時間もつづいた。

秋子夫人は記す。

「朗々とした、身にしみわたるお声だった。最後に『喝！』と大きな声で叫ばれたとき、高見は私のほうをみて、息をひきとったのです。閉じられた双のまぶたからは、はらはらと涙があふれ両方の痩せた頬に流れ落ちました。

五時三十二分のことでした」

解剖の結果、鎖骨上窩、肋膜、肝臓、腹膜、腰椎などに転移が見られ、死因は全身ガンによる心臓衰弱であった。

中川一郎（一九二五——一九八三）

北海道のヒグマと呼ばれた政治家中川一郎は、昭和五十七年十一月の自民党総裁予備選に、わずか十四人の中川派をひきいて立候補したが、立候補者四人のうちの第四位に終った。

このあと中川は別人のごとく元気を失い、あぶら汗を流していることが多かった。人々はこれを、予備選に必要な推薦議員五十人を確保するための過労、とくにそのための大借金の苦しみではないかと見ていた。

それから二カ月後の昭和五十八年一月八日、札幌パークホテルでひらかれた後援者らとの新年交礼会に出席したあと、翌九日早朝、宿泊していた同ホテルの浴室で、タオルかけのフックに寝衣の紐をかけて、物凄い形相で首を吊って死んでいるのが発見された。

彼が予備選に立候補しただけで政治的には上出来と思われていたが、結果として最下位となったことは意外に彼にショックを与えたらしい。それにヒグマと呼ばれる外貌に似ず、きわめて繊細な神経も持ち合わせていた彼は、極度の躁状態から極度の鬱状態におちいる初老期精神障害にとりつかれたものと思われる。

しかし彼が縊死したことを、遺族、秘書、おまけに警察、病院まで総ぐるみでかくそうとしたために、あとになって自殺の理由はおろか、死因そのものまで種々取沙汰された。

戦後、大臣まで経験した政治家の自殺第一号、といわれたが、それから二十日目、こんどは社会党の代議士松本幸男がやはり鬱病のためにこれも首吊り自殺の第二号となった。

五十九歳で死んだ人々

> 幸福な人々の死だけを悼もう。つまり極く少数の人々だけを。
>
> ——フローベール——

司馬遷（前一四五——前八六頃）

中国の黄帝時代から前漢の武帝までの通史を、竹簡木簡による百三十巻の大著『史記』としてはじめて書いた漢帝室の御用記録官司馬遷は、この仕事にとりかかってから五年目に運命の大悲劇を迎えた。

彼の仕える武帝は、ときあたかも北方匈奴を討伐すべく将軍李広利の大軍をさしむけていたが、その一将、勇猛無比の李陵は、突出してはるか敵の本拠をつこうとして逆に全滅状態となり、李陵もまた捕虜となった。この敗報に漢廷あげて李陵の失敗を責める中に、司馬遷はあえて李陵を弁護した。李陵は彼の親友だったのである。

それは同時に大将李広利を非難することになり、李広利は武帝の寵姫の兄であったから武帝の怒りを買い、彼は宮刑（男根切断）を受ける羽目になった。彼が四十六歳のときである。

司馬遷は、この死以上の屈辱に耐えて生きぬいた。その目的はただ一つ、彼がとりかかって、いまなお未完の『史記』を書きつづけるためであった。

男根を失った彼は、五十五歳のころ、ついに『史記』を完成し、宦官としての余生を五十九歳で閉じた。（司馬遷の生歿年については『広辞苑』による）

モンテーニュ（一五三三——一五九二）

モンテーニュは三十八歳のとき、自分のモンテーニュ城の塔の三階にある書斎の壁に、次の意味の引退の辞を刻んだ。

「……満三十八歳に達したミシェル・ド・モンテーニュは、すでに久しく公務の重責に倦み疲れたので、まだ血気盛ん

であるが、余生を安楽のうちに送らんとするものである」

そして、有名なエッセーを書きはじめた。

途中、四十八歳から四年間、ボルドー市長となり、その間宗教戦争やペスト発生のため多忙多難な生活にひき戻されたが、やがてまた城の塔にこもって、エッセーを死ぬまで書きつづけた。

しかしその間彼は、四十五歳のとき尿道結石の発作を起した。

「みなの前であぶら汗を流し、蒼くなり、赤くなり、震え、血まで吐き、奇妙な痙攣に苦しみ、ときには大粒の涙をこぼし、濃い黒色の怖ろしい小便を出し、あるいは、尖って逆立った結石で小便をせきとめられ、陰茎に刺すような、かきむしるようなひどい痛みを感じながら。……」

彼のこの苦しみは死の時に至るまでつづき、一五九二年九月十三日に死んだ。

日本ではこの年文禄元年、秀吉が朝鮮を侵略した年で、秀吉の母大政所、楽焼の始祖初代長次郎などが死んでいる。

「死は、戦場よりもベッドの中のほうが、いっそう卑しく、長く、つらい」

「あなた方は死に方など知らなくても少しも案ずることはない。自然がその場で、あますところなく充分に教えてくれるだろう」

——モンテーニュ『随想録』——

クロムウエル（一五九九——一六五八）

一六四九年チャールズ一世を処刑したあと、清教主義と武断主義をもってイギリスに独裁政治をしいたのみならず、アイルランド、スコットランドを征服し、オランダ海軍、スペイン海軍を破ってイギリスの世界の海上制覇のいとぐちを作った鉄人クロムウエルは、一六五八年九月三日、インフルエンザで死んだ。

直接の死因はインフルエンザだが、しかし、

「クロムウエルは、彼の尿管にもし小さな砂粒がなければ、全キリスト教国を荒らすところであった。……結石が出来たため彼は死に、すべては平和に戻り、王も復位したのである」

とパスカルが『パンセ』に書いているように、彼の晩年を苦しめ、その力を弱めたのは尿道結石であった。

彼の尿道の一つぶの砂粒が、ヨーロッパのカトリック教国をその鉄腕から救ったのである。

クロムウエルは死後国葬となり、ウエストミンスター寺院に葬られたが、フランスに亡命していたチャールズ二世がイギリスに戻って王位につくと、一六六一年一月三十日、クロムウエルの棺はウエストミンスターから掘り出され、遺体は一日吊るされたのち、頸骨を切られ、その首は長くさらしものにされた。

スタンダール（一七八三―一八四二）

「一八四二年。パリ。三月二十二日。
一人の肥った重い体つきの男がよちよちと引きずるような足どりで、愛するブールヴァールを通り過ぎてゆく。だが、この彼がここでまだ伊達男よろしく細身のステッキを粋（いき）にもてあそびながら女たちを張っていた、あのよき時代はどこに行ったのであろう。今ではひと足運ぶたびに、ふるえる腕を太い杖にささえなければならぬのだ。スタンダール、この最後の年に彼は何と老い込んでしまったのだろう。以前のきらきら光る目は、重そうな、青黒いくまの出来たまぶたの奥に力なくひそみ、神経の痙攣が口もとをひきつらせている」（シュテファン・ツヴァイク『スタンダール』中田美喜訳）

スタンダールは、最後の十年ばかりは、ローマ法王領のチヴィタ・ヴェッキア領事の職にあったが、前年の一八四一年脳溢血の発作を起こし、暇を得てパリに帰省中であった。

「疲れてとぼとぼと、この物悲しい影は彼のすまいへ歩を運び、輝きながらかけ抜ける馬車にも、ひまなおしゃべりを交わす散策者にも、すれちがうあだ女たちにも、ほとんど目をあげようともしない――夕暮のにぎわいを見せる町のまばゆいあかりのたわむれのなかを、のろのろとすべってゆく物悲しさの黒いかたまりである。

突如人だかりがしてくる。物見高い人々がひしめく。あの肥った人物が取引所のすぐ前のところで倒れたのであり、飛び出した目を据えたまま、顔を紫色に変じていまそこに横たわっているのだ。二度目の致命的な卒中が襲ったのだった。弱々しくのどを鳴らしている男は、締めつけていたカラーをむしりとられ、一旦薬局に運ばれたあとで彼の小さなホテルの部屋へとかつぎあげられる。そこはメモやら書きかけの著作やら日記帳といった数知れぬ紙で埋まっている。そしてそれらの日記帳の一冊には、ふしぎにも未来を予知した次のような言葉が書かれていたのである。

〝わざとそうするのでないかぎり、路傍で死ぬということを私は何ら笑うべきものとは思わない〟」（同右書）

翌日の午前二時に彼は死んだ。

「実をいうと私は自分に人から読んでもらう才能があるなどとは少しも思っていない。時おり、書くことがひどく面白いと思うことがある。それだけだ」と、かつて彼はバルザックへの手紙に書いたことがある。

彼の部屋に残されていた書きものは箱につめられ、彼が生涯独身であったため、一、二の知人の間を転々としたあと、持て余されて彼の故郷の田舎町グルノーブルの図書館に運ばれた。

自己韜晦（とうかい）の名人スタンダールは、モンマルトルの自分の墓石にさえ、「ミラノ人、アルゴ・ベール。生きた、書いた、愛した」と書くことを遺言していた。

友人メリメの言葉によると「彼はいつも恋していた」というが、一方彼自身は「私の一生はいつも酬いられざる恋人の状態にあった」ともいっている。

四十六年後の一八八八年、パリに新しい道をつける必要上、墓を移動する作業中この墓の碑名と埋葬者の素姓が話題になった。

ちょうど同じころ偶然グルノーブル図書館にほこりまみれになっていた彼の原稿が探しあてられ、はじめて彼の自叙伝『アンリ・ブリュラール』が人々の眼にふれるに至った。そして生前に出版されたもののさして評判にもならなかった『赤と黒』『パルムの僧院』などが不滅の光の中に再浮上した。

柳亭種彦（りゅうていたねひこ）（一七八三―一八四二）

『修紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）』で田舎源氏ブームを作りあげた戯作（げさく）者柳亭種彦は、天保の改革にぶつかって、そのモデルが十一代将軍家斉（いえなり）ではないかという嫌疑で小普請組組頭（こぶしんぐみくみがしら）に招喚された。種彦は本名を高屋彦四郎という二百俵取りの御家人だったのである。しかし組頭は、「そのほう方（かた）に柳亭種彦という者が食客をしており、ふとどきな戯作をいたしおるとのことだが、甚だよろしくない。早々追い出してしまえ」というイキな計らいを命じただけであった。

しかるに種彦には、別にまた『水揚帳（みずあげちょう）』というポルノ作品があって、その件につき再招喚のことが伝えられた。

喚問に応ずれば服罪のほかはない。服罪すれば二百俵の高屋家は断絶する。かくて進退きわまった柳亭種彦は天保十三年七月十九日、

ちるものと定（さだま）る秋の柳かな

という辞世を残して割腹自殺した、というのが三田村鳶（みたむらえん）

魚の説で、元来小心であった種彦は再喚問に懊悩し、そのために卒中で急死した、というのが永井荷風の説である。

ハイネ（一七九七——一八五六）

ハイネは一八四八年、五十一歳のとき、梅毒に因する脊髄の病気になり、全身の麻痺と痙攣発作にさいなまれ、間断なく襲う激痛に加うるにほとんど盲目となり、顎の硬直のため口述筆記にも苦痛が伴うようになった。彼は骨と皮ばかりになり、最後の八年間は一歩も戸外を歩くことが出来なかった。彼は自分の部屋を「しとねの墓場」と呼んでいた。

この苛烈な運命とたたかいながら、彼は『ロマンツェロ』『最後の詩集』『告白』などを書き、一八五六年二月十七日午後四時、「書くんだ。紙……鉛筆！」とさけびながら死んだ。

同じ年シューマンが死に、日本では二宮尊徳が死んでいる。

コント（一七九八——一八五七）

はじめて「社会学」を打ちたてた哲学の天才オーギュスト・コントは、背ひくく足短く、その醜さの自覚から、二十七歳のとき売春婦と結婚した。彼は『実証哲学講義』の大著にとりかかりながら、貧しさのため妻が昔の商売で金を稼いで来るのをとめることが出来ず、その矛盾した生活の苦悶から精神異常を呈して、いちどセーヌ川に投身したほどであった。

四十四歳のとき、この妻とやっと離婚した彼は、四十七歳で、退役将軍の娘で二十九歳になるクロティルド・ド・ヴォーに逢い、その美しさに「めまい」を起した。彼女はギャンブル好きのために公金を使いこみ国外に逃亡した夫に捨てられ、しかも結核を病む女性であった。

すでに頭は禿げかかり、腹の出たコントは彼女に夢中になり、はじめはおずおずと、次第に烈しく求愛したが、クロティルドは、それに応ずるような、応じないような反応を見せるばかりで、二年ほどのちにこの世を去ってしまった。

クロティルドの死後、コントは十一年間、毎週水曜日、

必ずその墓に詣でるのを習いとしたが、一八五七年六月十七日の水曜日、はじめて墓詣りを休んだ。それは友人の葬式にいって風邪をひいたせいであったが、同時に彼が胃ガンにかかっていたからでもあった。

そのまま彼は起たず、何回も吐血したのち、九月四日午前六時半にこの世を去った。そして九月八日、彼にとっての「聖女」クロティルドと同じペール・ラシェーズの墓地に葬られた。

フローベール（一八二一——一八八〇）

『ボヴァリー夫人』『感情教育』など写実主義小説の妙をきわめたギュスターヴ・フローベールは五十四歳のとき、愛する姪のカロリーヌ・グルーの破産を救うために全財産をほとんど投げ出し、経済的には苦境におちいったが、

「創作の生涯……広い書斎……快い安楽椅子……円い卓……削りたての鵞ペン二百本とそれを使う術……而して独立不羈……余みずから同胞に拘わらざるごとく、同胞をして余に拘わらしむなかれ……」

と、みずから書いたような、彼の信ずる文学のみに献身する生活は変らなかった。

「死は、完全に健康であった彼を襲いました。死の前日に彼の書いた手紙は、ほんとうにはれやかな文章で、ある植物についての自分の推定に確信を得たよろこびにあふれていました」

と、姪のカロリーヌは書く。フローベールは最後の作品となった『ブゥヴァールとペキュシェ』中に使うある植物についての知識を得たことをよろこんだのである。

彼は生地ルーアン近くのクロワッセ村の家から、一生ほとんど離れなかった。

「彼はパリに出て来るつもりでした。出発しようという前日のことです。彼は入浴をすませて書斎にはいりました。料理女は食事を運ぼうとしていました。そのとき彼女を呼ぶ声が聞えました。走っていってみると、すでに彼の指さきは痙攣して、何かわけのわからない言葉を口からとぎれとぎれに出しました。やっと聞き分けられたのは《エロー……いってくれ……連れてこい……通りは分っている》という言葉でした」

彼は、その五月八日の朝、ヴィクトル・ユゴーがエローに住まうことを知った。その知らせのことが彼の頭に浮かんだらしい。

カロリーヌは書く。

「彼の思考の最後のほのかなかがやきは、彼の個性をあんなにも強くゆり動かしていた偉大な詩人（ユゴー）の姿を呼び起こしたのです。そののち、すぐに意識を失って倒れました。それから数分ののちには、もうこときれていました」

死因は脳溢血であった。『ブゥヴァールとペキュシェ』は未完に終った。

「死はおそらく、生よりも私たちにあかすべき秘密を持たないのではあるまいか」

――フローベール――

マゾッホ（一八三六――一八九五）

オーストリアに生まれたザッヘル・マゾッホは、精神的にも事実上も、女性からの被虐の快感に陶酔する人物であったが、彼はその体験を文学化して、『毛皮を着たヴィーナス』その他一連の作品によってヨーロッパの有名作家となった。

一八八三年、彼の文学生活二十五周年の祝賀記念には、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章が贈られ、ヴィクトル・ユゴーから祝電が来、記念アルバムには、ゾラ、デュマ、イプセン、サン・サーンス、グノーらの有名人が名をつらねて彼にお祝いの言葉を捧げたほどであった。

このお祝いの翌々日、彼は妻のワンダと別れた。ワンダは姦通していた。マゾッホは、ワンダと相手の男にすべての財産を持ち去られた。彼が四十七歳のときであった。

やがて彼は第二の妻フルダ――ただしワンダはどうしても離婚の証明書にサインしなかったが――と、フランクフルト・アム・マイン郊外の寒村リントハイムの小さな家に隠棲した。

それ以後の彼の作品は、エロチシズムとは縁の遠い、むしろ宗教的色彩をおびたものとなった。

一八九五年三月九日に彼が病死したとき、彼の一家に財政的援助をしようというにせの申し込み――前妻ワンダの悪意にみちたいたずらと推定されている――に、フルダがあやうくひっかかりかけたほど、窮乏の中にあった。――彼の妻への最後の言葉は「私を愛して」であったといわれる。

マゾッホの名は、しかしウィーンに住む同時代のドイツの性心理学者クラフト・エビング博士によって、性倒錯の症例として「マゾヒズム」と造語されてから、いかがわしい印象を世に与えるようになり、この方面から彼の作家的

名声そのものも殺されてしまった。

孫文（一八六六――一九二五）

広東省中山県に生まれ、若い時から清朝打倒を志し、ついで国内の軍閥と外国の帝国主義と悪戦苦闘をつづけて来た孫文は、一九二四年（大正十三年）十一月二十五日、神戸に来た。彼は革命運動の志士として何度も日本に来たが、これが最後の来日であった。

医者である彼も知らなかったが彼はすでに肝臓ガンに犯されていた。ホテルではほとんど野菜スープしか食べなかったという。

孫文は、十一月二十八日、神戸第一高女の講堂で、「大アジア主義」と題する講演を行い、超満員の聴衆にさけんだ。

「あなた方日本国民が、ヨーロッパの武力文化の犬となるか、アジアの正義文化の牙城となるか、それはあなた方日本国民が慎重に考えて選ぶべきところである」

孫文はいくたびも日本に裏切られつつ、みずから中山樵と名乗ったほど日本に愛情を持ち、最後まで心のどこかで日本への信頼を失わなかった。しかし、以後の日本は完全に彼の期待に反した。

神戸を出港した孫文は大しけの玄界灘を渡って、十二月四日天津に到着した。二万人の歓迎陣にこたえて寒風の中を立ちつづけた孫文は風邪をひき、肝臓の痛みが烈しくなった。

十二月三十一日、十万人の歓迎を受けて北京にはいった彼は、目的は国民党会議に出席するためであったが、ただちにロックフェラー病院に入院のやむなきに至り、開腹手術を受けた結果、肝臓ガンと診断された。

翌一九二五年三月十一日、彼は国民党へ、「革命はまだ成功していない。同志諸者、奮闘努力せよ」という遺言にサインし、意識を失った。うわごとの中に、「平和を！」「奮闘せよ！」「中国を救え！」という言葉がいくどか繰返された。そして十二日午後八時過ぎに息をひきとった。

死の十日ほど前、彼は自分の遺骸をレーニンのような棺にいれてほしいといったので、遺体にはレーニンと同じように防腐剤をほどこし、ソ連からとりよせた水晶製の棺に納められ、北京郊外の西山に埋葬されたが、のち、南京に国民政府をたてた蒋介石は、自分を孫文の正統な後継者だと権威づけるため、一九二九年六月、遺骸を南京郊外の紫金山に移し、中山陵と呼ぶ壮大な墓所を作った。

徳冨蘆花（一八六八―一九二七）

大正十三年一月、蘆花は最後の長篇『富士』にとりかかったが、書くにつれて徐々に健康を悪くし、疲労を訴えること甚だしく、伊香保、湯河原、小湊などに何度も保養したが、はかばかしい効果はなかった。

十五年一月七日、彼は日記に、「着物が重い。タンゼンが重い。夕方少し熱あり。体だるく、生きて居たくなくなる。六十の瀬越しは骨だ」と書いた。これが彼の絶筆となった。

一月二十一日、はじめて慶大医学部助教授の正木不如丘の往診を受けた。正木が粕谷の蘆花邸に到着してみると、重態のはずの蘆花は、達磨然と大椅子に腰かけていた。「お休みになっては」と正木がいうと、彼は、「いや、国手を迎える礼です」と、きまじめに答えた。診断は慢性腎臓炎、しかも相当重症で、心臓衰弱を起しているということであった。

爾来、何度かの往診で、正木が廊下や玄関で、蘆花の妻愛子に病状についての立ち話をしていると、奥で蘆花はきまって手を打ち、大声で呼んだ。五十九歳の蘆花は五十三歳の妻が他の男性と話をすることについてさえ異常な嫉妬を禁じることが出来なかったのである。

五月にはいって、腹部は甚だしく腫脹し、いくどか穿刺して腹水を排除するほどになった。このときに至って蘆花は、俄かに伊香保にゆきたいといい出した。正木たちは驚いてとめたがきかず、ついに七月六日、雨の悪路を難航九時間、伊香保温泉の千明仁泉亭旅館へたどりついた。

蘆花はここで、重態の身にもかかわらず、日覆いつきの輿を籐で作らせて、医者、看護婦、番頭、カゴカキら三十余人の大名行列で榛名湖見物をやったりした。発病から死までの八カ月間に、つきそいの看護婦を八十余人とりかえた。正木は「まるで年をとったやんちゃ坊主だ」と呆れた。

病状はいよいよ悪化し、下痢はつづき、腹水排除の穿刺による針の跡がふさがらず、ジメジメと腹水はもれつづけた。

そして、九月十七日、愛子が看護の女性を介して、兄の蘇峰に逢う気はないか、と、うかがわせた。蘆花は蘇峰と大正二年以来十三年間、絶交状態にあったのである。

兄を呼ぶ電報を打たせてから、蘆花は「しまった。負けた！」と、さけんだ。その絶交事件もふくめて彼の一生は、強力偉大なる兄への異様な抵抗につらぬかれていた。それ

がここに至ってついに崩れたのである。

十八日午前十一時、雨の中を蘇峰は、一家をあげて、東京の大森山王草堂から急行して来た。

蘆花は周囲の制止にもかかわらず、牀上に起座して迎えた。おたがいに手を握って、兄弟は涙を流した。「日本一の兄貴だ」と蘆花がいうと、「なに、お前こそ日本一の弟だ」と蘇峰がいった。

蘇峰の末娘で、幼女時代蘆花の養女となっていたこともある鶴子もこのとき同行していたが、この光景を「芝居の一場面の感じでもあった」と述べている。

瀕死の蘆花は半ばうわごとのようにしゃべりつづけたが、この期に及んでもなお妻の愛子が医者に通じたという妄想による言葉を吐き、それというのも自分が「男性的に弱かったから……この人は男性に不足しているのだから……」と、いった。

そのくせ彼は、健康時は大兵肥満、むしろ常人以上に性欲は旺盛であったのである。彼はコンプレックスの大塊であった。

伊香保はすでに寒いので、二十日に下山、熱海に移ることにし、蘇峰も同行を約した。

夜にはいって蘇峰らが別の旅館に去ったあと、愛子は夫の妄想による昼間の失言を責め、蘆花はわびた。激しい咳がつづいたのち、蘆花は眠り出した。

午後十時ごろ愛子も仮眠におちいり、ふと気づくと、蘆花は両手で頭をおさえ、髪の毛をかきむしっていた。あわててそばに寄ってみると、息づかいがただごとでなかった。冷しタオルを頭にのせようとすると、病人は払いのけ、「痛い、痛い」とうめき、「はばかり、はばかり」といった。彼はすでに大便をもらしていた。

蘇峰や医者が駈けつけたが、もう脈搏はなかった。しかも彼は妻の肩をたたき、別れの接吻を求めるような唇の動かし方をした。愛子は全身でしがみついた。十時五十分、蘆花は絶命した。

田山花袋（一八七一―一九三〇）

花袋は昭和三年十二月、脳出血でいちど倒れ、翌年五月、喉頭ガンと診断された。秋になって小康を得たが、翌昭和五年五月十二日、重態におちいった。

その前日、代々木山谷の病床を見舞った、花袋より一歳年下の島崎藤村は、まじめな顔で、

「花袋君、この世を辞してゆくとなると、どんな気持がす

るものかね」
と、尋ねた。
「何しろ、だれも知らない暗いところへゆくんだから、なかなか単純な気持のものじゃない」
と、花袋は怒りもせず、もつれる舌でまじめに答えた。
「苦しいかね」
と訊くと、
「苦しい」
と、答えた。
藤村は語る。「つくづく見ると、毛深い手もやせ、頭も銀髪となって、六十年の生涯を働きつづけて来たことを物語り、特に白く長い眉毛が二本眼につきました。田山のところを辞してから、友人ではあるがいかにも大きな人がこの世を辞していくという感じがしました」（昭和五年五月十四日付「朝日新聞」藤村談）
最後に彼は、水も薬も一切受けつけない状態になり、十三日午後四時過ぎに死んだ。
なお花袋の『田舎教師』の主人公林清三のモデル小林秀三の教え子で、作中人物田原ひでのモデルといわれた大越もんは、九十一歳まで生きて、昭和五十四年一月十一日老衰で死んだ。

ジョイス（一八八二――一九四一）

ジェームス・ジョイスは、『ユリシーズ』を書きはじめた三十二、三のころから虹彩炎を病んで視力衰え、かつひどい貧乏に苦しみつづけた。その状態で、七年かかって彼は『ユリシーズ』を完成した。
第二次大戦勃発とともに、彼はそれまで住んでいたパリからスイスに逃れたが、一九四一年一月十三日、ガンのためチューリッヒで亡くなった。

山本五十六（一八八四――一九四三）

昭和十八年四月三日、トラック島泊地の戦艦「武蔵」から、みずから最前線の指揮をとるため、山本はラバウル基地に赴いた。そして四月十八日朝六時、バラレ、ショートランド、ブイン各基地を視察激励のため、一式陸攻二機、護衛戦闘機六機をもってラバウルを飛び立った。
一時間半後の七時四十分ごろ、高度約三千で、ブーゲンビル島西海岸沿いに飛行中、突如出現したアメリカ空軍ロッキードP38十数機の攻撃を受けた。

二番機に搭乗していた宇垣纏参謀長の手記を要約すれば、
「――しまった！　の考の外なく室井航空参謀の肩を引き寄せて、長官機を見よ、と指示せり。敵の来襲に機はまた急転して長官機を見失う。水平に帰るももどかしく、次の一瞥に機影すでになく、ジャングル中より黒煙の天に沖するのを認むるのみ。噫万事休す！」
この二番機もまた撃墜された。ただし、それは海上であったので、宇垣参謀長は重傷ながら九死に一生を得た。
双胴のP38機群は、日本軍の暗号解読により、山本司令長官機そのものを狙ってここに待ち受けていたものであった。
この悲報に、ただちにブーゲンビル駐屯の日本軍部隊から捜索隊が出され、十九日の夕刻、その一隊が現場を発見した。
ジャングルの中に墜落した一式陸攻は焼けただれ、まわりに死体が散乱していたが、林の中に一個飛び出している飛行機の座席に坐っている一人の将官があった。彼は草色の略服をつけ、白手袋をはめた手で軍刀を握って坐っていたが、近づいてみると下顎部からこめかみへかけて撃ちぬかれて死んでおり、腕時計は七時四十五分でとまっていた。
それが山本五十六であった。
ほかの屍体にはすでにおびただしい蛆が発生していたが、山本のみは比較的きれいであり――ということは彼の死がおそく訪れたということを物語るが、しかし頭部は撃ちぬかれている――かつ、どうして彼だけが椅子にこんな姿勢で坐っていたかは、いまだに謎となっている。
日本人はこれを壮烈な「機上戦死」として山本を英雄化したが、暗号を解読されて待ち伏せ攻撃を受けて司令長官が戦死するとは、海軍をふくめて日本軍の恥辱でなければならない。

中里介山（一八八五――一九四四）

昭和十九年四月、当時住んでいた都下西多摩郡西多摩村羽村の西隣塾の中の耕書堂で介山は発病した。西隣塾は、一千坪の土地に森や林があり、江戸時代の大きな赤門をはじめ、草庵や道場などさまざまの建物のある介山の住まいであった。
急をきいて弟の中里耕作が駈けつけると、介山の顔にはもう死相が現われていた。医者が来て、腸チフスだと診断し、すぐに西秋留の伝染病病院に隔離させた。

一週後の四月二十八日午前八時十五分、八十キロちかくあった介山は、あっけなく息をひきとった。臨終の床を見まもった者は耕作たち数人に過ぎなかった。
　大正二年から始まって、三十年近く書きつがれて来た『大菩薩峠』は、大衆文学の巨大なる未完成交響楽として終った。
　この作者が好んで作中に使った、

「花はちりても、春は咲く
　鳥は古巣にかえれども
　行きて帰らぬ死出の旅……」

という歌の通り、西多摩の里に終戦前年の春は逝こうとしていたが、しかしこの歌にふさわしからぬ殺風景な病気であり、かつ最期であった。

　机竜之助「歌う者は勝手に歌い、死ぬ者は勝手に死ぬ」
　　――『大菩薩峠』――

本間雅晴（一八八七――一九四六）

　太平洋戦争初期、フィリピン派遣軍総司令官であった本間雅晴中将は、そのときの「バターン死の行進」の責任者として、終戦直後九月十五日米軍に逮捕され、十二月十二日マニラに連行されて軍事裁判にかけられた。
　昭和二十一年二月七日、彼の妻富士子は証人として出廷し、「あなたの目にうつる本間中将はどのような男性か、それを述べて下さい」という質問に、
「わたくしは今もなお本間雅晴の妻であることを誇りに思っております」
と、毅然として答え、さらに、
「わたくしには娘が一人ございますが、いつか娘が結婚するときは、本間のような男性に嫁がせたいと心から願っております」
と、いった。
　被告席の本間は、ハンケチを眼にあてて嗚咽していた。
　二月十一日、本間は銃殺の宣告を受けた。
　死の獄中から本間が家族に送った手紙は、日本の軍人としては余りも人間味をあらわにし過ぎた、みれん、愚痴めいた表白が多い。マニラに連行されて以来三カ月の間に、待遇のせいもあろうが、彼は別人のように痩せ衰え、やつれ果てた。
　しかし、四月二日の日没時、カンルバンの収容所から、米軍飛行士処刑の罪で同じく死刑を宣告された独立混成第六十一旅団長田島彦太郎中将とともに、刑場ロス・バニョ

スに運ばれたときの本間は、日本の将軍としての威厳をとりもどしていた。
　彼はそこで、ビールと、ビフテキとサンドイッチを要求し、さらにコーヒーを注文した。そして小便して、「ビールとコーヒーだけはアメリカに返した」と笑った。
　午後十一時、MPが、「時刻が来た」と、いった。本間は「レッツ・ゴー」と答えて立ちあがった。
　やがて連行された刑場のアカシアの樹には、真昼のように照明灯が向けられていた。
　二人は二メートルばかりの柱を背にして立たされ、ベルトのスナップで縛りつけられた。黒い頭巾をかぶせようとする米兵に、「目隠しはいらない」と彼はいったが、強引にかぶせられた。
　彼らは黒い袋をかぶせられたまま、「天皇陛下万歳、大日本帝国万歳」と三唱し、日本の方角へ向って最敬礼した。
　本間たちの心臓部には四インチの白い標的がつけられた。
　このとき米軍の軍医は、本間の心臓が平常通りの速度で鼓動していることを知った。
　二人から十五歩離れて、銃を持った米兵十二人がならんだ。
「さあ、来い！」
と、本間はさけんだ。
　十二の銃口が火を噴いたのは四月三日午前零時五十分三十秒であった。十二発のうち四発は空砲で、二発は外れ、六発が命中していた。
　それはバターンの米軍を降伏させたバターン第二次攻撃が開始された日から四年目にあたる日であった。

徳田球一（一八九四――一九五三）

　昭和二十五年六月六日、マッカーサーの日本共産党中央委員二十四名の公職追放の発表とともに、徳田球一・野坂参三ら九人の中央委員は姿を消し、警視庁の大々的捜査にもかかわらず、そのゆくえは杳として絶えた。
　実は徳田は、逗子、名古屋などのシンパの家を転々とした後、九月二十日ごろ、四日市のアジトから小さな漁船に乗って、中国へ逃れていたのである。
　以来彼は、側近ナンバーワン伊藤律らとともに、北京に滞在していた。
「徳田は糖尿や高血圧で、すでに北京で臥床していることが多く、半療養生活をしていたのだが、その年（昭和二十七年）の十月、最初の発作にみまわれて倒れた。

寒気がつよまり、風もでていたある日、徳田は伊藤と清(しん)朝の故宮の散策にでかけていた。そして、風をよけた、故宮の庭の日なたで休憩しているとき、かれは卒倒した。

伊藤が手配して、徳田は病院にはこばれた。それからしばらくして、機関の自室にいったんもどって、温暖な土地へ転地療養することになり、北京から姿を消した」（西野辰吉『首領(ドン)』）

翌二十八年九月二十一日、「アカハタ」は伊藤律の除名を発表した。

その三カ月前の六月、徳田はふたたび北京病院に戻っていた。病気は、高血圧、動脈硬化、心筋硬化、糖尿病等による各症状であった。

それは一時好転していたが、彼の最も寵愛していた伊藤律の除名後、急速に悪化した。

「……九月二十五日午後、口が左へゆがんでいる症状が現われ、治療を行ったが、病状は悪化した。十月十日には精神が不安となり、呼吸が早くなり、翌日には言語機能を失い、血圧は高くなり、左眼の外斜視と瞳孔散大という症状が現われ、全身の知覚は遅鈍となり、チェーンストーク氏呼吸を呈し、小便の失禁となり……（中略）十月十二日には昏睡状態となり、左の瞳孔は散大し、対光反応は消失し、大小便を失禁し、体温は三十八度一分にのぼり、呼吸は一層不規則となった。そして一九五三年（昭和二十八年）十月十四日午後五時二十一分、ついに死去した」（徳田球一担当のソ中医師団の報告）

彼の死は二年近く秘されていて、昭和三十年八月一日に至ってはじめて発表された。

辻(つじ) 政信(まさのぶ)（一九〇二――一九六一）

ノモンハン、マレー、ガダルカナル、ビルマ各作戦を指揮した陸軍の大参謀にして怪参謀。

彼は、太平洋戦争後、戦犯に指定されたが、「潜行三千里」によってついに逃れ切り、昭和二十七年以降国会議員になったが、昭和三十六年四月、「東南アジア各国の視察と戦歿者の供養」という名目でラオスに飛んだ。

そして四月二十一日朝、黄色いラオスの僧衣に身をつつんだ辻は、ラオスの若い僧二人を案内にして、朝の太陽を浴びながらビエンチャンからハノイに向けて出発した。彼は、インドシナ戦争の収拾についてホー・チ・ミン北ベトナム大統領と話すのが目的だ、といったという。――しかし、それっきり彼の消息は絶えた。

当時ラオスの日本大使館に勤務していた赤坂勝美が知合いのラオス軍将校から聞いた証言として、辻政信は翌昭和三十七年一、二月ごろ、スパイとしてラオス解放軍（パテト・ラオ）に捕えられ、ある朝ジャール平原のカンカイという町の広場にひき出され、頭巾も目隠しも断わり、黙々として三人の兵士に銃殺されたという。しかし、この情報はいまだに確認されていない。

もしこれが事実なら、辻政信は五十九歳で死んだということになる。いずれにせよ自信過剰のあまりの無謀な冒険であったといわざるを得ない。しかし、しょせんは、たたみの上で死んではおかしい人物ではあった。

五味(ごみ)康祐(やすすけ)（一九二一――一九八〇）

『柳生武芸帳』という剣豪小説を書き、その映画化作品を見て、「フーム、柳生武芸帳とはこういうストーリーであったか」と、つぶやいたという五味康祐は、昭和五十一年、「数え年で、昔ふうにいえばこの正月（一九七六年）私は五十六になった。私は観相をするが、多分じぶんは五十八で死ぬだろうと思う。あと二年。その為かちかごろレコードをかけていても、死んだ時のことを考える。死後のさきはわからない。息をひきとったあと、通夜から葬式まで、枕もとに坐った家内や娘の光景を想う。それと臨終にかけつけてくれた知人のことを」

と、書いた。（「芸術新潮」掲載『西方の音』）

昭和五十三年春、夫人とともにヨーロッパ旅行中、五味は血のまじる痰を吐きはじめた。帰国後東京逓信(ていしん)病院で診察を受け、夫人は医師から肺ガンであることを告げられた。

当人には、肺にカビの生える病気――肺真菌症と告げたが、しかし手相の術をよくする五味は自分の手相を見て、「ガンの相」が出ている、といった。

とはいえ一方で、「ガンらしいとは思うがな」といいつつ、相手の顔をうかがい、さぐりをいれているところもあった。

五十四年の春から背中に激痛が走るようになり、十一月入院。このときはすでに背骨、副腎にガンは転移し、以後五カ月間苦しみぬいて、五十五年四月一日午後六時五分に息をひきとった。満で数えれば五十八歳であった。

彼は生前妻の千鶴子に「死後絶対におれのことを他人にしゃべってはいかん」といっていた。しかし、それは破られた。

五味は死ぬ前、自分の蒐集したレコードを病室に持って

来させたが、最後に聴いたのはベートーヴェンのピアノソナタ作品一一一であった。「父は一一一を聴きながら泣いていた。父の涙を、私はそのとき、はじめて見た」と娘の由玞子は書いている。

「彼は芥川賞受賞前後、洗うがごとき赤貧に苦しんだが、流行作家となってからも蓄財の興味はなく、死んだときの預金通帳には、（当時の）『日本国民の平均貯蓄額には、はるかに及ばぬ金額』が記入されているだけであった」（「週刊新潮」五十五年四月十七日号）

六十歳で死んだ人々

> 死が生にいう。「おれはお前がわかっている。しかし、お前にはおれがわかっていない」
> ——山田風太郎——

ジンギスカン（一一六七——一二二七）

一二二六年秋、ジンギスカンは西夏国を征服するために軍を発したが、翌年甘粛省清水県で狩猟中落馬し、そのときの負傷が悪化して陣歿した。一二二七年八月十八日という。遺骸は蒙古本土に運ばれた。

彼はかつて蒙古のオノン河畔のブルハン山中に狩りをして、うっそうと茂る大樹の下で休んだとき、「われ死せばこの樹の下に埋めよ」と遺言したので、その地に葬られたが、元来蒙古族は遊牧民の慣習として墓は作らないので、まもなく彼の埋葬場所もわからなくなってしまったという。

ジンギスカンの生年には諸説があるが、ここでは『広辞苑』による。

日蓮（一二二二——一二八二）

文永十一年蒙古襲来の年（ジンギスカン死後四十七年目）から日蓮は甲州身延山にはいり、以来七年目の弘安四年夏、ふたたび蒙古襲来した年もまだ身延にいたが、このころから身体の不調をおぼえはじめた。

その年の十二月の手紙に、春ごろからやせ病が起り、秋が過ぎ冬になるにつれて日一日と衰弱をまし、この十余日は食事もとまり、身体は石のごとく胸は氷のように冷たい、と訴えている。

下痢が慢性になっていたというから、消化器系統の潰瘍かガンではなかったかと思われる。

翌年の九月、ついに身延山の寒気を避けて、常陸へ湯治にゆくべく、八日下山し、十八日武蔵国荏原郡池上にある弟子、池上右衛門の家に泊り、ここでふたたび起つ能わざることを覚悟した。

そして、十月十三日午前八時ごろ、枕頭につめかけた弟子たちとともに法華経を読誦しながら、入寂した。

「竜ノ口の法難」をはじめ、いくたびも襲う迫害の嵐の中に南無妙法蓮華経を雄叫びつづけた戦闘的な彼にしては、意外に静かな死であった。

コロンブス（一四四六——一五〇六）

四十代半ば過ぎから四回の大冒険によってついにアメリカを発見したコロンブスは、しかし計画時におけるイスパニア宮廷への貪欲な売込みや、航海中の船員への冷酷さによって、次第に反感と敵意につつまれるようになり、一五〇四年十一月、五十八歳で最後の航海から帰ったときは出迎える者もなく、彼自身の肉体も精神も廃人同様になっていた。

コロンブスは、最初の航海にあたりイスパニアのフェルナンド王とイサベル女王との間に、自分が新大陸を発見したときは、自分がその地の副王たる称号を得ること、一切の富の十分の一は自分の所有となること等の契約書をとり交わしていた。彼はセビリアの船員宿泊所で、毎日宮廷へ、自分の権利を主張する手紙を書きつづけたが、何の返事も

なかった。不幸なことに、そのころイサベル女王が亡くなった。

一五〇六年二月に至って、フェルナンド王はやっと謁見の許しを与えたが、謁見の結果、何ひとつ具体的な処置をとらず、契約書には頬かぶりしていた。

コロンブスは烈しい痛風に悩みながら、自分の主張を誇大妄想的な嘆願書にして王族の間を奔走していたが、ついにゆき倒れのごとく倒れ、五月二十日に息をひきとった。日本ではいわゆる応仁の乱が始まってから四十年目、いまだ混沌たる戦国のまっただ中で、雪舟の死んだ年である。

アメリカは、彼より後に航海したアメリゴ・ヴェスプッチの名によってアメリカと名づけられ、コロンブスの遺骨はあちこちに埋葬し直され、死後も彼の魂は安住することが出来なかった。

水戸斉昭（一八〇〇——一八六〇）

彼の絶倫の精力と執拗な熱狂性は、その人物の真価以上に幕府を震撼させた。大名にして彼以上に幕末の歴史に致命的な影響を与えた者はない。

安政五年八月のいわゆる安政の大獄に連座し、八月、斉昭は水戸に蟄居を命じられたが、もはや彼の意志とは無関係に、彼の巻き起した攘夷論による波紋は、半年後、水戸浪士による桜田門外の変を呼んだ。かくてライヴァル井伊大老は消滅したが、しかし彼もまた狐憑きが落ちたように、おとなしく蟄居の罪に服しているばかりであった。

しかし、しばしば胸痛を訴えたというから、心筋梗塞などの病気が発していたのかも知れない。

井伊の死後さらに五カ月、すなわち万延元年八月十五日、水戸城内で仲秋の名月の観月の宴をもよおし、そのときは異常なく見えたのに、宴後、午後十一時ごろ突如死んだ。

おそらく心臓発作のためと思われるが、この急死のため、井伊の復讐として植木屋に化けて城内に潜入していた彦根藩士の刺客に、厠の中で竹槍で刺し殺されたなどという風評が生じた。

ともあれ、これ以来水戸城では観月の宴が行われなくなったという。——ちょうど彦根城で、桜田門外の変以来三月三日の節句の宴がひらかれなくなったのと同様に。

しかしその死の影響はこんなことにはとどまらず、やがて収拾のつかない水戸の内戦を呼ぶことになる。彼の思想の是非は別として、のちに水戸人士全滅の運命を招いた天狗党対諸生党の争いの根源はすべて彼にあるといってよい。

一個の権力者が一つのイデオロギーを強烈に鼓吹した結果の怖ろしさを歴史に見る好例である。

横井小楠（一八〇九——一八六九）

勝海舟が人に語ったことがある。「おれは今迄に天下に恐ろしい人間を二人見た。それは横井小楠と西郷南洲だ。横井は西洋の事も別に沢山は知らずおれが教えてやった位だが、その思想の高調子なことは、おれなどはとても梯子を掛けても及ばぬと思ったことがしばしばあった。おれはひそかに思った。横井は自分で仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用いる人が世の中にあったら、それこそゆゆしき大事だと」

「世間では横井の論策の内容を錯り伝えて、廃帝を議したなどと云ったり、又洋夷と密約して、基督教を公許しようとしているなどと云ったりした」と、鷗外は書く。

文久三年、江戸で熊本藩の留守居役をやっているとき、料理屋で酒をのんでいて、小楠、横井平四郎は刺客に襲われた。友人は斬り殺されたのに、彼は逃げおおせた。それが卑怯と見られて、彼は禄を奪われた。

六年後、明治二年正月、小楠は新政府の参与として京にいた。しかもこのところ、京都には暗殺などの沙汰はなくなった、と、暮に彼は故郷に報じたくらいであった。ところが彼は狙われていた。

一月五日午後二時、その日の寒さは骨に徹するばかりで、雲陰鬱にして黄昏のような京の町を、御所の太政官から出た横井の駕籠は、丸太町で六人の刺客に襲撃された。供侍とともに、六十歳の小楠までが駕籠から出て、短刀を抜いて刺客たちと渡り合ったのは、やむを得ぬ防衛行為ではあったが、六年前の恥を雪ごう、二度とは逃げられないという気持だったのではあるまいか。しかし、数分後彼はついに斬り倒され、髻をつかんで首を切断された。

落首にいわく「まっすぐにゆけばええのに平四郎、横井ゆくから首がごろりと」

リヴィングストン（一八一三——一八七三）

ウエストミンスター寺院に埋葬された彼の墓碑銘には、次のごとく刻まれている。

「忠実な手で、海と陸を越えて来た、宣教師、旅行家、博愛の人、デイヴィッド・リヴィングストン、ここに眠る。一八一三年、ラナークシャーのブランタイアに生まれ、一八

七三年六月一日、イララ地方チタンボ村で死す。三十年間、彼の生命は中央アフリカにおいて、原住民の教化と、未発見の秘境の踏査と、いまわしい奴隷売買の廃止のため、あくことなく費(つい)やされた」

　リヴィングストンは三十歳のとき結婚したが、爾来アフリカの奥地の探険と伝道に明け暮れ、家庭生活を営むことも出来なかった。息子のロバートはアメリカの南北戦争に参加して北軍にはいり、十八歳で死んだが、リヴィングストンはこの息子とほとんど逢ったこともないという始末であった。

　息子の死の知らせを聞いた一八六五年、彼は王立地理学会の会長ロデリック・マースチンに、ナイル河の水源を明らかにするように依嘱され、またアフリカに渡った。これが彼にとって最後の探険旅行となった。

　アフリカ東海岸ザンジバルからルヴマ河に沿って、リヴィングストンの探険隊はアフリカ中央部へ進んだ。

　五年後、(飛行機はむろん車も補給もない当時の探険はそれだけの歳月を必要としたのである) タンガニーカ湖のウジジに着いたリヴィングストンは、何度かの赤痢と持病のリューマチのために骸骨のように痩せていた。

　それでも彼は、一八七二年八月から、パングウェウールー湖の探険に向った。そこから流れ出すルアプラ河がナイルの源流だと彼は想定したのである。(これはまちがいであった)

「私たちの進み具合の遅さは惨澹たるものである。雨、雨、雨！」と、彼は日記の諸所に書き、また蟻の大群の襲撃によって、全身がたちまち天然痘患者の痘瘡(とうそう)のようなものにびっしり覆われてしまったことも記している。

　そして翌年三月三十一日以来、赤痢による彼の血便はきわめて烈しいものになった。四月二十九日、部下に背負われてチタンボという部落に着いたときは、彼はすでに人事不省の状態にあった。しかし小屋に横たわると眼をあけて、「ここはルアプラ河か」と弱々しく聞き、部下のアフリカ人がちがうと答えると、「ではルアプラ河までもう何日かかるか」と訊いた。「三日はかかるでしょう」と、アフリカ人は答えた。

　六月一日、夜明けにあと一時間という時刻、リヴィングストンは小屋の中のベッドの下で、白髪(しらが)まじりの頭を両手でかかえて死んでいるのが発見された。

　主人を尊敬するアフリカ人の部下たちは、彼の内臓を全部とり出して大きなムヴラ樹の下に埋め、あとの遺体は十四日間日光にあててミイラにした。彼らはこれを木の皮でつつみ、交替でかついで、十人の仲間の生命を犠牲にしながら、また数百キロの旅をつづけてザンジバルへ向った。

　そしてリヴィングストンの遺骸はイギリスへ送られ、ウエストミンスターに葬られたのである。

ドストエフスキー (一八二一――一八八一)

　持病の癲癇(てんかん)と病的な賭博癖と無恥な係累者のたかりに苦しみながら、二十五歳のときの処女作『貧しき人々』以来、猛烈に書きつづけて来たドストエフスキーは、五十歳にして、やっと比較的平穏な生活を迎えることが出来た。

　一八八一年一月二十五日の夜、彼は執筆中ペンを落し、それを拾うために本棚を動かしたとたん喀血した。二十六日にも血を吐いた。

　二月九日朝、二十五歳年下の妻のアンナが七時ごろ眼をさますと、ドストエフスキーはじっと彼女をみつめていた。

「アーニア、僕はもう三時間もずっと考えていたんだが、きょう僕は死ぬよ」

と、いった。そして福音書を読んでくれといった。彼女はマタイ伝第三章を読んだ。

　九時ごろ、彼は妻の手をにぎったまま眠りにおちいり、十一時ごろ目ざめた。同時にまた喀血がはじまった。

　彼の家にあるのは五千ルーブルだけであった。彼はいった。

「アーニア、君を残してゆくのがとても心配だ。これから生きてゆくのが、どんなに苦しいだろう。……」

　夜八時過ぎ、ドストエフスキーはびくっとしてベッドの上に起き上った。血の細糸が彼のあごひげを伝わっていた。アンナは氷のかけらをふくませたが、血はとまらなかった。

　医者が呼ばれた。アンナと子供たちはベッドのそばにひざまずいて、涙を流した。

　八時三十八分、ドストエフスキーは息をひきとった。

　世界文学史上の最高傑作ともいうべき『カラマーゾフの兄弟』は、その三カ月前に完成していた。

スメタナ (一八二四――一八八四)

　一八七四年八月、五十歳になっていたスメタナは森の中で異常にきれいなフルートの音を聞いたが、それは幻聴であった。

　九月にはいると右耳が聞こえなくなり、十月にはまったくの聾者になった。そして聾者のスメタナは、その十一月

に名曲「わが祖国」の「モルダウ」に着手し、完成した。つまり彼自身はこの曲を自分の耳で聴くことは出来なかったのである。

以来彼は種々耳の治療法を試みたがいずれも成功せず、一八八二年には、「まるで復讐の女神その他もろもろの悪魔が突進して来るような」音響の幻聴に悩まされはじめ、ついで声が出なくなり、歩行障害が起り、さらに閉め切ったドアから着飾った女たちがはいって来る幻覚にも悩まされ出した。

一八八三年にはいると、彼は自分宛のハガキを書くようになり、またはるか昔に死んだベートーヴェンやモーツァルト宛の手紙を書くようになった。四月二十日、ほんとうの狂躁発作が起ったので、プラハの精神病院に収容された。

彼は一七二号室の中で、骨と皮だけになり、終日グルグルと歩きつづけ、不潔のかたまりとなり、知人も判別出来ず、食物も強制的に食わせなければ受けつけず、時々口から調子はずれのトルコ太鼓のような音を出したりした。

五月十二日の午後四時半ごろ彼は死んだ。

彼の死因については、脳動脈硬化症と、梅毒による進行麻痺の両説が唱えられ、チェコスロバキアの国民的大作曲家として長らく後の説は斥けられていたが、現代はやはり梅毒説が有力になっている。

クラーク博士（一八二六——一八八六）

ウイリアム・スミス・クラーク。アメリカ、マサチューセッツ州立農科大学の学長。明治九年五十歳のとき日本政府の招聘によって来日、札幌農学校で八カ月教え、「ボーイズ・ビイ・アンビシャス」の一言を残して去った。

ただし、この言葉は後年に至って誤解的に聖化され過ぎたきらいがある。

帰国後彼は海上大学設立に失敗し、資金調達のため鉱山に手を出して破産し、その心労は心臓を痛めつけ、明治十九年三月九日、貧窮のどん底で世を去った。臨終をみとった牧師に向い、彼は「わが生涯での慰めは日本のサッポロにいた八カ月だけです」といったといわれる。

山師という悪評のため、葬儀もひそかに行われた。ただ一人、当時アメリカに留学していた札幌農学校出身の内村鑑三が——彼が農学校に入ったのはクラークの去ったあとであったが——土地の新聞にクラーク弁護の一文を投書したところ、クラークのためにひどい迷惑をこうむった人々から非難が集中して、内村は四苦八苦した。

狩野芳崖（一八二八——一八八八）

天才的な画技を持ちながら、その狂的な熱血のために、幕末には筆を投じて志士として国事に奔走したり、維新後は故郷長州で実業を志したりした狩野芳崖が、ようやく、青年時代から修業した絵で生きることを決心して上京したのは明治十年のことで、彼は五十歳に手がとどこうとしていた。

が、当時の世相からして絵は一枚も売れず、芳崖は粥もすすれないほどの惨澹たる貧苦の生活におちいり、ついには肺病になった。彼は輸出用の安物の陶器や漆器の下絵職人までしなければならなかった。

それでも、あるいは全然未知の人のところへおしかけて画論を吹きかけたり、あるいは身のまわりの品はぜんぶ紐で結びつけておかないと紛失してしまう、というような彼の天衣無縫の行状と、不遜なほどの自信は変らなかった。

彼が認められたのは、アーネスト・フェノロサによってで、明治十七年になってからのことで、そのころから生活がやや楽になった。

明治十九年から、彼は大作「悲母観音図」を描きはじめたが、これに精魂をついやしつくし、制作中にひいた風邪で結核も悪化して、明治二十一年秋ようやくそれが完成したのは死の四日前で、心身ともに消耗して落款も出来ないほどであった。

十一月三日午後、はげしい驟雨が来た。それが急にあがったあと、往来をだれか高い調子で歌を唄って通っていった者があった。病床にこんこんと眠っていた芳崖は、ふいに眼をあけて、

「あれだ、配合の妙はあれにある」

と、さけんだ。

「あのはげしい雨のあとに、あの高い歌声」

彼は絵のことを考えていたのである。

それから二日後の十一月五日午後に彼は息をひきとった。

黒田清隆（一八四〇——一九〇〇）

一方では、箱館戦争で敵将榎本武揚を惜しんで、官軍の参謀でありながらみずから頭を剃って、政府にその助命を乞うたといわれ、また岩倉使節団に五人の少女を留学生として加えるというアイデアを実現させ、またロシアに樺太を与えて日本は千島をとるという決断を下し——これは当

時の国力から見て、放っておけば樺太千島ともどもロシアのものになるおそれがあったから、一文惜しみの百失いの愚をふせぐ勇断であった——一方では、いわゆる開拓使官有物払下げ事件という大汚職をやり、乱酔しては伊藤、井上をもぶんなぐり、北海道の漁民の娘を面白半分に撃ち殺し、はては泥酔して妻も斬殺するという、ジキルとハイドさながらのこの人物が、明治二十一年から二十二年まで首相となった。明治ならではの総理大臣である。（と、いいたいところだが。……）

彼は明治三十年ごろから座骨神経痛や高血圧などの老人病にかかり、その言動から、黒田は呆けた、とささやかれるようになった。

しかし清隆は、平生は酒乱時とは別人のように、小心とも見える温厚な人物で、好んで市井のそばやにはいって、腹掛股引の連中にまじり、自分の書生や俥夫には天ぷらそばをとってやり、自分はモリを食べる、というようなところもあった。

晩年は政界でも影が薄くなり、家庭も、二度目にもらった夫人が姦通し、かけおちするというような荒涼としたものであった。

三宅雪嶺は、黒田の後半生は「無用」であったと喝破する。

明治三十三年八月二十三日朝、突然倒れ、まもなく絶命した。脳溢血であった。天皇のお見舞いなどの形をととのえるため、二十五日に歿したということにとりつくろわれた。

かつて厖大な樺太を断乎として捨てた彼は、墓地がいたずらに広い土地を占有するのをきらい、一家は一壺に納めよという持論の持主で、その通りに当時の大官としては珍しい火葬に付されて、青山墓地に葬られた。

明治天皇（一八五二——一九一二）

明治四十五年七月十五日、枢密院の会議に親臨した明治天皇は、平素とはちがって議事の途中居眠りをした。そのとき議長席にあった山県有朋は、軍刀を床に突いてそのひびきで天皇を目覚めさせた。天皇の病のすでに進んでいることを山県は知らなかったのである。

四日後の七月十九日午後、天皇は夕食の卓につき、酒をのんだが、甚だ疲倦の色があり、左右に「どうも眼がかすむようだ」といった。しばらくの後椅子を立ったが、よろめき、御格子の間に倒れた。侍臣は驚愕し、仮床を御座の

間に設けて寝させたのち、侍医に急報した。侍医が来て診察したところ、体温四十度五分、脈搏百四、呼吸三十八を数え、すでに昏睡状態であった。

二十日早暁、侍医頭岡玄卿、東京大学教授青山胤通博士、同三浦謹之助博士が召され、拝診し、その結果を発表した。

「聖上陛下には去る三十七年糖尿病に罹らせられ、ついで三十九年一月末より慢性腎臓炎御併発あらせられ、爾来御病勢多少御増減ありたるも、御療養の結果近来は別にお悩みなかりしが、去る十四日胃腸に軽度の故障を起させられ、御下痢、二、三回あらせられたるがゆえに、これが御手当を施したるも御食事進ませられず、平素御厳格なる御気性にも似させられず御座睡の傾あり。しかも別に御異状ありとも認めざりしが、昨十九日午後八時俄かに御発熱四十度五分に昇り、ただちに御手当を施し、今朝特に青山、三浦両博士を御召しあり、拝診の結果尿毒症と決定したり。

本日御体温三十九度六分、御脈搏百四、御呼吸三十二回にして、御精神恍惚として御意識明確ならず、時々囈語をおもらしあり、これを察するに目下のところ御容態は御危篤にあらざるも、御大患なりと認む」

挙国驚駭した。

二十二日、天皇はなお嗜眠囈語し、さめるとしばしば手をかざして眺めた。俗にこれを手鏡を見ると称し、病者これを行えばほとんど回復せずとの説あり、左右みなもって不祥となし、顔色蒼ざめた。

この夕、便意あり。天皇は厠に立とうとし、典侍柳原愛子ら驚いてこれをとめようとした。天皇は便器を使うのを厭って争った。主馬頭子爵藤波言忠の苦諫ほとんど臣従の道を忘れるもののごとく、天皇は抵抗の力を失い、やむなく褥中で排便した。

二十四日、参集の諸臣より、三十七年御発病の徴があったというのに、これほどの御大患をいままで気がつかなかった侍医の怠慢について弾劾の声が湧いたのに対し、侍医らは「毎朝拝診に候したが、それには及ばずとの御沙汰あり、重ねて請いたてまつることが出来なかった」と弁解した。

不予の報あって以来、東京では演劇以下の興行を中止し、高歌会飲巷に絶えた。

七月二十日の日記に、夏目漱石は記した。

「晩天子重患の号外を手にす。尿毒症の由にて昏睡状態の旨報ぜらる。川開きの催し差留められたり。天子未だ崩ぜず川開きを禁ずるの必要なし。細民是が為に困るもの多からん。当局者の没常識驚くべし。演劇其他の興行もの停止と

か停止せぬとかにて騒ぐ有様也。天子の病は万民の同情に値す。然れども万民の営業直接天子の病気に害を与えざる限りは進行して然るべし。当局之に対して干渉がましき事をなすべきにあらず。（中略）新聞紙を見れば彼ら異口同音に曰く都下闃寂火の消えたる如しと。妄に狼狽して無理に火を消して置きながら自然の勢で火の消えたる如しと吹聴す。天子の徳を頌する所以にあらず。却って其徳を傷くる仕業也」

それはそれとして老幼男女は、宮城門外に雲集し、昼夜その影を絶たず、二十七日、二十八日に至って無慮幾万、みな俯伏して泣禱した。

『夢声自伝』にいう。

「七月二十八日の朝日新聞には〝行け二重橋へ〟と題する名文がのっていた。

――苟くも日本に生れて、都近う住めらん限りのものは、何事をさしおいても請う行け！

行って二重橋の畔、皇上いたつきに悩ませ給う辺に至れ。己が形の己が居る所に従いて移行く様を、ひしひしと思い当るべし。（夢声注・ココノトコロハ難シクテ、実ハ私ニモ分ラナイ）

――行きて何のせんあらんやと謂うこと勿れ、多摩川砂利美わしう敷き列べたる御濠の岸についいて、千年の翠を静めたる大内山の松ヶ枝を打見上ぐるのみにてだに、何事のおわしますとしもなく、只とうとさに先涙さしぐまるるなり、あわれ青葉めでたく繁れるが中に、わがすめら大君は今や生死の境ぞさまよい給うなる。

――此所に打集う老若男女の、或は天を仰ぎて神明に祈り、或は地にぬかずきて悲涙にくるる様を見るにつけても、上下挙げて大君を思いまつる我が国ぶりを目のあたりに縮め見る心地して、人をして覚えず襟を正さしむ。幼きがささやかなる手を合せて只管に拝める、身なり賤しきが地の上に土下座とやらんして鼻打すすりたる、親子兄弟一家を挙げて来れるが、声を呑みて只柏手のみ打合せたる。（以下略）

――行け！　行け！　二重橋の辺に！　人の心のかくばかり美わしく尊とく表われたる様を、事なからん日見ばやとて見らるるものならんや。げにも是れ末代迄の語り草なり。（略）

おそらく現代の若人たちは、この一文を読んで失笑するであろう。だが、当時十九歳の私はこの記事文を涙なしには読むことができなかった。これはいささかの誇張もない。その時そのままの報道文なのである」

しかし天皇の病状は次第に重く、三十日午前零時四十三分、ついに心臓麻痺によって崩御した。

死後天皇の身長をはじめて計ったところ、五尺五寸四分（約一メートル六十八センチ）あった。当時としてはまあ長身のほうだろう。

三十一日、皇后、皇太子、皇族、諸臣以下に「御拝親訣ノ儀」が行われた。

宮中顧問官尾崎三良は記す。

「……平素御肥胖に渡らせられ、龍顔もまた御豊肥に拝せられたるに、崩御前、旬余の御悩苦のゆえにや痛く御憔悴遊ばされ、龍顔はまったく蒼白にして著しく御面長にならせられたるやに覚えたり。

御褥のお裾の辺には、四方の内親王喪服にて侍座あらせられたり。そのうちの御一方は団扇を以て玉体を扇ぎ参らせいられたり。数十分前までは皇后もこの一列中に御侍座あらせられたるも、今朝来の御疲労御休息のため暫時御退座あらせられたりと聞く。

かく后宮、内親王の親しく父帝の御寝褥近く侍し給い、団扇を以て炎熱を扇ぎ去り、昇天後の玉体をしてなお清涼を感ぜしめられんと思召さるる光景は、我ら臣下の家において父母死去の際、その子女が父母の枕辺において死者に対する情態と少しも異ならず、感慨胸に迫り、歔欷流涕禁ずる能わず、心神ために恍惚として身慄い体痿れて容易に動く能わず」

九月十三日、御大葬の日、霊轜まさに宮城を発した時刻、乃木希典夫妻は赤坂新坂町の自邸で殉死した。

漱石は『こゝろ』で、「先生」に託して、大帝崩御に対する明治人の感慨をのべる。

「……夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。（中略）御大葬の夜私は何時もの通り書斎に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知の如く聞こえました」

森　鷗外（一八六二――一九二二）

「死の恐怖が無いと同時にマインレンデルの『死の憧憬』も無い。死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、自分は人生の下り坂を下って行く」と、鷗外は四十九歳のとき『妄想』で書いた。

彼は死の前年からときどき下肢に浮腫が生ずるのを知った。やがて彼は自分が、亡父と同じく萎縮腎に冒されていることと結核が進行していることに気がついた。しかしこのことをだれにももらさず、また医者にもかからず、何事も起ってはいないかのように、帝室博物館長兼図書頭としての仕事に勤めた。

「お通夜の晩、図書寮の方が、こんな話をした。或朝、図書寮の坂に掛ると、自分よりも十歩ばかり前を、ノロノロとまるで這うようにして坂を登ってゆく老人がある。見ると、右の足を引き摩るように前に出し、次に左の足を同じように引き摩るようにして前へ出す。気息奄々と云う言葉を絵にしたら、こんなだろうと思いながら、忽ちその老人を追い抜こうとしてフト見ると、何とそれが先生だったと云うのである。足に浮腫が来たのだ」（小島政二郎『森鷗外先生』）

それ以前に、小島政二郎は鷗外と次のような問答をかわしている。

「先生の顔色が益々よくなくなられた。コメカミのところに薇のように縮れた血管が怒張しているのが目に付いた。その日、突然先生が、総長室（注・帝室博物館総長）のいつものデスクに向われたまま、

『僕の余命は幾干もない』

と、静かな口調で言い出された。

私は息を呑んだ。五体が縛られたようになり、口が利けなかった。

『萎縮腎だ。これは死病で治療の方法がない』

そう言われてから、自分の指先でコメカミの血管をさされて、

『こうなったら、人間もおしまいだ』

そう言って、先生は例の目尻に皺を寄せて笑われた。

『医者には掛かっていない。掛かっても無駄なのだ』

そうも言われた。前にもいつか病気の話が出た時、先生は薬には病気を直す力はない。病気を直すものは人間のヴァイタル・フォースだと言われたことがあった。薬は多少その補助をする程度に過ぎない。しかも、薬には副作用がある。だから、先生は曾つて薬を服用したことがないと言われた。

『風邪など、じっと寝ていれば直る。アスピリンなんか飲む必要はない』（中略）

『先生の説に従うと、今度の場合も、出勤なんかなさらずに、お宅で安静にしていらっしゃらなければならない筈じゃありませんか』

『死病だから、それも無駄だ』

萎縮腎に掛かると、尿意を催すことが頻繁で、寝たら最後、朝まで熟睡していた先生も、病いには勝てず、この頃は夜中に目が醒める。

『目の醒めたのを幸い、そのまま起きて「元号考」の稿を次ぐことにしている』

先生はそう言われた。鬼気人に迫るものがあった。

『この上、病いが進むと、足に浮腫が来る。それが最後だ』」

死の年の五月に、はじめて鷗外は親友の賀古鶴所に病気のことを打ちあけた。

しかし「コレ（最後の著『元号考』）ヲヤメテ一年長ク呼吸シテイルト、ヤメズニ一年早ク此世ヲオイトマ申ストドッチガイイカ考物デアル」といって、「ドンナ名医ニモ見テモラハナイト云結論ガ生ズル」と、いった。彼は後者の道をとることを決心したのである。

大正十一年六月五日、やっと鷗外は帝室博物館長兼図書頭としての登庁をやめた。六月二十九日額田晋の診察をうけ、萎縮腎及び肺結核であったことを確認した。

「いつか父は病気で寝るようになった。寝たのはもう余程悪くなってからの話だ。私が病室――これは書斎の隣の洋室だった――へ這入って行くと、父は寝たままはかなげな笑いかたをした」

と、鷗外の次女で当時十三歳であった杏奴は書く。

「父は一生、病気らしい病気もせずに過したので、殊更病気そのものに付いてまわる、あらゆる物を厭がっていたらしい。

便器を見る事を嫌って、いつも使っていた八丈の海老茶の風呂敷で便器を隠している父の神経を感じた私は、可哀想でたまらなかった。私は黙って父の傍に坐った。父は白い手を伸ばした。私はその手を取って青い静脈の透いて見える父の腕を静かに撫でていた。（中略）

その中に、手を取られたまま父は寝てしまった。苦しそうな息使いをしながら。

私は急に悲しくなった。

強くて強くて父は本当に優しいのに強かった。子供の前で寝てしまうなんて事はなかった事だ。いつだって私たちを守っていた。父がいるという安心で、私たちは遊びながらでもよく、寝てしまったものだ。それが今は子供のように私に手を取られながら、父は眠ってしまった。

私は傍にある団扇を取って静かに父を扇いだ。その団扇に白松葉の模様が描いてあったのを覚えている。扇いでい

る中に、私は涙が後から後から流れて、団扇の上にぽとぽとと音を立てて涙が落ちた」（小堀杏奴『晩年の父』）

七月六日、遺言を賀古に託した。

「……死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官憲威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得ズト信ズ余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」

しかし彼が故郷の石見に特別の愛着を持ったような事実は、実生活上にも文学上にも見られない。

この呪詛と悲哀に満ちたふしぎな遺言について、高橋義孝は、それは鷗外の自負に相当する地位、名誉を与えられなかったことに対する悲しみの表白であるとし、中野重治は、この遺書の対象は強大なる「官憲威力」そのものであって、それに対する反噬であるとし、松本清張は、鷗外をしてついに疎外者の運命を感ぜしめずにおかなかった「長州閥」への復讐の語であるとする。

七月八日、四十三歳の永井荷風は鷗外を見舞った。

「早朝団子坂森先生の邸に至る。（中略）見舞の客には先生が竹馬の友賀古翁応接せらる。翁窃に余を招ぎ病室に入ることを許されたり。恐る恐る襖を開きて入るに、先生は仰臥して腰より下の方に夜具をかけ昏々として眠りたまえり。鼾声唯雷の如し」（荷風『断腸亭日乗』）

妹の小金井喜美子は記す。

「前夜から案じられたままに昏睡状態がつづいて居て、ひどく蒸し暑い九日の朝、陛下から下されたお見舞品の置いてあるあちらの間には人影も見えますが、お枕元には賀古さんとお医者、看護婦は脱脂綿を巻いた棒で折折咽喉へからむ痰を取って居りました。お兄い様は目をつぶってただ息をなすって居らっしゃるだけ。お姉え様始め近親の者が少しあたりに控え、私はお床の裾の方に坐って居りました。窗掛を下した硝子戸を通す朝日の影は薄暗く、天井へ届くまで段を造って積み上げた本棚へ引いた黒いほど濃いカアテンの色、部屋の中は穴の底のようで、皆息を呑んで居りますので、とぎれとぎれのお兄い様の息が間遠に聞えるばかりでした。そしていく時過ぎたでしょう、つと賀古さんは顔を寄せて礼をなすって、

『では安らかに行きたまえ』

立って部屋をお出になります。はっとした時、お医者は厳かに、

『御臨終でございます』

謹んで申し渡されました。皆一様に礼をして言葉もなく、暫くして顔をあげた時は誰の目からも留度なく涙が流れて居りました」（小金井喜美子『兄君の最後』）

鷗外が最後の昏睡に陥る前の最後の言葉は、「馬鹿馬鹿しい」という呟きであったといわれる。

辻　潤（一八八四―一九四四）

大正五年、三十二歳のとき、それまで彼自身の表現によれば「昼夜の別なく情炎の中に浸った」妻伊藤野枝を友人の無政府主義者大杉栄に奪われたのち、辻潤はダダイズムの旗手として、その主義に従って評論を発表し、生活上にも実行した。

その無為浮遊、虚無、エゴイズム、破倫、酒乱、性格破産者ぶり、いいたい放題、迷惑のかけ放題の行状にもかかわらず、またその表白の真実性、生活の天衣無縫ぶりは、熱烈な一群の信仰者と彼を愛する女たちを生んだ。

萩原朔太郎は彼に手紙を送った。「大兄に対しては特別の尊敬と友愛を感じております。日本の現存する文学者で、僕の敬意を表する人物は、漸く四、五人にしかすぎませんが、大兄もその一人で、日本に於ける稀なる存在として、特別の敬愛を持つものです」

しかし辻は、昭和七年精神異常をきたして、しばらく斎藤茂吉の青山病院に入院することになる。以後間歇的に錯乱状態をくりかえしつつ、尺八を吹いて全国を放浪してまわり、やがて太平洋戦争期にはいっても、その生活は変らなかった。まず、ていのいい乞食だが、戦争下の乞食は惨澹たるものであったろう。

これを「好きなように生きる」ダダイストのなれの果てと見る者もあったが、辻は「白痴浄土」ととなえ、彼なりの求道の精神を失わなかった。

が、昭和十九年一月末、彼はかつての愛人松尾とし子に近況を報じている。

「――大ていどこにいるかと云われると困る。毎日殆ど一定のネドコと云うものがなく屢々野宿をしているが、さすがにこの寒さでは野宿はたまらない。とまるカネがないと云うのではないが、あってもトメテくれるヤドを探すのが実に骨が折れる。しかし幸いこの一週間ばかり若い浪花節語りのトマル浅草の木賃ホテルにとまっているが、実に地獄相のようなところでお話にはならんが、しかし人間的なアタタカ味はある。たいてい宿泊人は（中略）この世の敗残者ばかりで、自分もそのひとりなのだが、やはり仲間にはなれない。やっと昨日から此処にネトマリ出来ることになったが、ヤグがなく、毛布一枚にくるまってネテると云う始末だ」

その浅草は、六十年前彼が、栄華をきわめた江戸蔵前の札差しの孫として生まれた土地なのである。

その後彼は友人の持つ東京上落合のアパートに一室を与えられたが、十一月二十四日、B29による最初の東京爆撃のあった日の夜十一時ごろ、右友人の細君が声をかけたが返事がなく、扉をあけてはいったところ、辻は虱だらけの蒲団の中で死んでいた。医者が呼ばれて一応狭心症の診断を下したが、餓死であった。

かつて友人であり、『鮫人』という作品で辻潤をモデルに使った谷崎潤一郎は、戦後「辻潤碑」を建てるため寄付を頼まれて、「生きているときも大迷惑をかけられた。死んでからまでも知るものか」と、はねつけた。

木下杢太郎（一八八五――一九四五）

明治四十一年「パンの会」を創め、颯爽と近代耽美派の誕生を告げた若き詩人木下杢太郎は、しかし東京大学医学部を卒業すると、皮膚科の医学者太田正雄としての生涯に転身した。

昭和十三年には母校の教授となった。彼は気むずかしい、孤独な学究に変っていた。

「木下杢太郎の晩年の姿は殊の外印象的であった。すべてが大造りな感じで、歳と共にめっきり多くなった銀白の髪を無造作に梳って、皮膚科の奥の陰気な研究室で、窓に面した机に向って何時も一人ぽつんと調べものをしている後姿を見た。淋し相な後姿だった」と、後に文学上師事していた野田宇太郎は『木下杢太郎の生涯』に書く。

戦争も末期、空襲警報の出ているある日、杢太郎は野田に、「君、死ぬことは恐いだろう?」と尋ね、「死ぬことが恐くない方法を教えてやろうか」といい、「それはねえ、突貫！　と云って敵陣に突入することだね」と、声のない笑い顔でいった。

それから間もない昭和二十年六月ごろから、彼はただならぬ身体の不調を訴えて病床につき、帝大の柿沼内科に入院した。七月に一応退院したが、八月終戦直後に再入院した。杢太郎は、「はじめ癌かも知れぬと思ったので……」云々といった。つまり彼はその後そうではないと思い、入院時は自分で、入院後に読む本をえらんでボストンバッグにいれたりした。しかし事実は胃ガンにかかっていたのであり、鶴のように痩せ衰えていた。

入院後も彼は、回復後は文学に戻りたい希望をもらし、『木下杢太郎』という題の、ゲーテの『ウイルヘルム・マ

イステル』のような長篇の構想も出来たといった。――医者も医者にあざむかれることがあるらしい。

しかし十月十五日午前四時半、焦土と化した東京の帝大病院で息をひきとった。

当時東大医学部学生であった萬年甫は後に記す。

「私が最後に先生にお目にかかったのは、すでに亡き先生が解剖台に横たわっておられた時である。戦争もすんで、学園にも静かな日々がもどった昭和二十年秋、先生の御逝去が終戦から丁度二カ月目の十月十五日であるから、その日かその翌日の午後だったと思う。当時の医学部の病理解剖室は一階と二階が吹き抜けで、二階の片すみに見学者席があった。その前を通りかかった時、戸が一寸あいていたのでのぞくと、解剖の最中であった。解剖台のまわりに普段よりも人が多いので、見学室に足を踏み入れて上からのぞくと、なんと太田正雄先生の御遺体であった。今しも頭蓋骨をきって脳を取り出すところで、筆者が初めて先生のお姿を遠くから見た時の頭の大きい人だとの印象が一層強められた。かたずをのむうちに脳が取り出されたが、頭も大きければ内身も実に大きいなと思わず嘆息が出たのをありありと覚えている」（萬年甫『太田正雄先生に学びて』岩波「図書」一九八〇年十一月号）

彼の尊敬する最大の人物は森鷗外で、鷗外もまた若き日の杢太郎を愛した。文名をうたわれつつ、ついに医学から離れることの出来なかった生涯も似た点があるが、その寿命もまた同じ六十年であった。

菊池　寛（一八八八――一九四八）

菊池寛は、昭和二十三年三月はじめから胃腸を害し、数日の間絶食して面会をことわっていたが、平癒したので、三月六日、主治医や近親の者と全快祝いの小宴を催した。自分もダンスのステップを踏み、好物の鮨など食べて、九時ごろ二階の一室に上ったとたん、狭心症を起して倒れ、十分後に急死した。

同席した社員の池島信平は書く。

「わたくしは茶の間に行き、そこでお鮨をつまんで一杯やっていると、二階で、ただならぬ音がした。急いで先生の寝室へ駈けつけると、寝台の脇に菊池さんは、うずくまるようにして、奥様の肩へ両手をかけ、もう死んでいた。心臓の発作が起きてから、十分ぐらいだったと思う。家族の人々の手を借りて、わたくしは重い先生の遺骸をかたわらの寝台に横たえたが、まだからだ中あたたかく、先生はち

ょっと一眠りしているといったような姿だった」

いつ書いたものか、遺書があとで発見された。

「私はさせる才分無くして文名を成し、一生を大過なく暮らしました。多幸だったと思います。

死去に際し、知友及び多年の読者各位に厚く御礼申します。ただ皇国の隆昌を祈るのみ。吉月吉日」

永井竜男はいう。

「戦後、菊池さんは文藝春秋社長として戦争協力をしたということで、米国軍政下にパージ（公職追放）にひっかかって、戦犯ということになりました。菊池さんは家にこもるような生活に入ったのですが、これは菊池さんとしては、実に無念だったに相違ない。自分は日本の最も正しい自由主義者の一人であると確信しておりましたので、このパージは、菊池さんの心身に強くこたえたらしい。（中略）狭心症を起こさせたのは、パージであったと、私は思っております。パージが菊池さんに非常な打撃を与えたと思っております」

ともあれ彼の人生は多幸であったかも知れない。しかし死後、この「文壇の大御所」の作品は不当なまでに不遇である。

ただし、彼自身いう。

「自分は思う。後世というものは、我々が思うほど親切ではあるまいと。否可なり不親切な冷淡なものではあるまいかと」

石原莞爾（一八八九——一九四九）

「満州事変」を計画し、成功させ、「支那事変」には反対し、東条と衝突して太平洋戦争直前、予備役に編入された石原莞爾は、それ以来、故郷山形県鶴岡で百姓をしていたが、敗戦後の昭和二十二年五月一日、二日の両日、酒田市商工会議所でひらかれた極東国際軍事裁判の臨時法廷に証人として喚問された。

石原は着物に戦闘帽をかぶり、青年のひくリヤカーに乗せられて来た。彼は昭和五年関東軍参謀のころ、馬から下りる際、軍刀の柄の先で会陰部を突いて尿道を傷つけ、満州事変中も血尿で苦しんだが、それがもとでウイルスが膀胱に侵入し、すでにガン化していたのであった。

この法廷で石原は、「なぜ自分を証人ではなく戦犯として出廷させないのか」と訊き——この石原の疑問は、客観的にみても至当である——裁判長が「貴君はこちらの訊問にイエスかノーかを答えればいいのだ」と注意して、さて、

「満州事変における日本軍の被害はどの程度であったか」

と質問したのに対して、

「被害の程度をいうのに、あいにく日本語では、イエス、ノーだけでは表現出来ない」

とか、「ジェネラルは東条と対立していたというがほんとうか」と質問されたのに対して、

「私には若干の思想があるが、東条にはない。思想のある者とない者との間に、意見の対立などあり得ない」

など、人をくった返事をした。石原最後の檜舞台であった。しかしこの法廷の問答中にも、彼は血尿を出しつづけていた。

以来病状は一進一退したが、二十四年晩春、風邪から肺炎となり、ついで肺水腫を起したが、病をおして、八月八日、『日蓮教教義入門』を脱稿した。弟子が原稿を読みあげるときは、彼は必ず上半身を起したが、眼はとじて半ば眠っているように見えた。しかし、あるとき眼をあけて、

「これが発行されるときおれは死んでいるだろうが、遺骨箱の前で報告される光景が眼に見えるようだ」と、冗談をいった。

八月十三日、かつて東京裁判に曳かれながら、精神病を発して釈放された大川周明が見舞いに来た。数分間話すと昏倒するようになっていた石原は、このとき大川に、日本の将来について、法華経について、四十分も明晰に説き去り、説き来った。そしていった。

「あの八月十五日で、私のこの世の務めは終りました。私の生命は生理的にはとうに尽き果てて、生きていても苦しいだけですが、周囲の者が騒ぐので、それにまかせておくのですよ」

その夜半に至り、尿閉症を起した。

彼はふだんから、「死ぬときはばあさんと小野さん（夫人と看護婦）だけにしてもらって、静かに死にたいね」といっていたが、信奉者たちが集まって来るのをどうしようもなかった。

看護の人たちがその手を握ると、夏というのにもう氷のように冷たかった。

十四日午後、彼は一人一人に「お世話になりました」と挨拶し、「せっかくみなさんおいで下さったのだから、みなさんでお題目を唱えて下さい。それを聞きながら死にますから……」といって、お題目を唱えさせ、「まだ長びくなら、お題目を唱えた甲斐がない」と冗談をいい、さらに「まだ死にそうにないから、みなさんひきとって休んで下さい」と夜半に人々を解散させた。

八月十五日未明から、五分おきくらいに時間をきいたが、最後の質問は四時三十五分であった。静かに眼をとじていたのが、急に痙攣してのけぞり、息が絶えた。午前四時五十五分であった。

ゲーリー・クーパー（一九〇一——一九六一）

一九六一年一月八日、ハリウッドでクーパーの映画生活三十五年の功績を讃える晩餐会が催され、オードリー・ヘプバーンらから讃辞を受けたクーパーは、「私は今夜世界一の倖せな男です」と挨拶した。彼はこの三十五年の間に八十九本の映画に出演した。

しかし、その前年の十二月、夫人のロッキーは医者から、クーパーが前立腺ガンに冒され、すでに転移して手遅れの身体になっていることを知らされていた。

クーパー自身もそれ以前から排尿の異常を自覚していたにちがいない。小便に苦しむクーパーはいたましい。

それから間もなく病床についた彼は、三月のある日、医者に自分の病名を聞き、医者がそれを告げると、黙ってうなずいたが、やがて医者が家に帰ったころ電話をかけた。

「先生は私に真実を知らせて下さったことで憂鬱になられたのではありませんか。しかし私は感謝していることを知って下さい。教えて下さってどうもありがとう」その声は落ちついており、思いやりとユーモアのひびきがあった。

彼はそれから、静かに明るく、日中はプールのそばで、夜は妻と娘とともにテレビを愉しんだ。

彼が重態におちいると、ケネディ大統領、エリザベス女王をはじめ、全世界から見舞いの電話や電報が殺到した。

五月四日、彼は新聞を通して感謝の言葉を返した。

「私はすべてが神の御意志であると信じております。未来についておそれを感じておりません。みなさんからのお便りのおかげで、心の安らぎを得ております」

十日間の昏睡ののち、五月十三日の真夜中に彼は息をひきとった。

世紀のスターは死まで飾られる。——

小津安二郎（おづやすじろう）（一九〇三——一九六三）

「おれは豆腐屋だ。がんもどきや油揚げは作るが、西洋料理は作らないよ」

といって、ひとすじに純日本映画を作りつづけて来た小津安二郎は、昭和三十八年正月から、彼が作品を作る場合いつもそうしていたように、シナリオ作家の野田高梧と蓼科（たてしな）の山荘にこもり、次回作の想を練っていた。その作品は「大根と人参」という題で、ガンにかかった男が主人公で、その男にそのことを知らすべきか、知らすまいかと家族が悩むストーリーであった。

ところが三月になって、頸にぐみのような腫物が出来て痛むので、三月二十七日帰京、それでも医者にゆくのをいやがる彼を、俳優の佐田啓二らが説得し、四月十一日、がんセンターに入院させ、十七日手術を受けさせた。

小津は大男であったが、手術中あばれるので、だれか押えていてくれという看護婦の悲鳴に、佐田らが飛んでゆくと、小津は「ナンマイダ、ナンマイダ」と唱えていた。念仏など縁起でもないからよしなさい、というと小津は、「痛くて痛くて、何かいってないとたまらないんだ。ナンマイダ」といった。

以後、彼は手術の痕にコバルトやラジウムの針を刺す、いわゆるコバルト・ラジウム療法を受けた。そのあとで彼はいった。

「六十年生きて来て、いちども長いと思ったことはなかったが、針をいれられた一週間の長さときたら、どう説明していいかわからないよ。そのへんに斧（おの）か何かあったら、自殺したいくらいだったよ。お医者というものは、病気の治療はするかも知れないが、痛みの治療はしないんだね。〝痛いですか〟〝痛いですよ〟〝そうですか〟ってんだからね」

しかしまた冗談好きな彼はいった。

「これでおれも一人前の豆腐屋になれたよ。ガンもどきを作ったんだからね」

そしてまた見舞いにくる客にはだれにも「なおったら、一本とろうね」「なおったら」「なおったら」と繰返した。

七月一日、小津は一応がんセンターを退院し、その日鎌倉の自邸で祝杯をあげたが、以前酒を飲んでも全然赤い顔をしなかった彼が、海老（えび）をゆでたような顔色になった。

祝杯をあげたが、無事であったのは一週間ばかりで、右手がしびれ出し、やがて痛みに変り、食欲をまったく失い、八月はただ寝たきりの生活になった。佐田らが、がんセンターから、小津がガンだと聞かされたのは九月五日のことであった。

「痛みというものは、一〇〇とか一一二とかいいあらわせないね。ただ痛いというしか言葉がないね」

といい、苦痛のうなり声が玄関まで聞える状態になりながら、なお入院をいやがる小津をふたたび無理に入院させ

たのは十月十二日のことであった。小津の家の前は坂道になっていた。そこを担架で下りながら、「この道をよく酔っぱらって上って来たもんだが……」と、彼はいった。
「何も悪いことをしたおぼえはないのに、どうしてこんな病気にかかったんだろう」
と、十月十九日に彼は病院の天井を眺めていった。（いかに多くの病人がこの言葉を吐いたことだろう！）
「右足がどこかにいっちゃったのかね。ベッドの下に落っこちてるんじゃないかね」
十一月二十二日には呼吸困難に陥り、気管支切開手術が行われた。以後、声が出ないので、壁にイロハの紙を貼り、その字をさして小津がうなずくことで、わずかに意志が通じる状態になった。
十二月十一日、見舞いに来た野田高梧は、小津の顔を見た印象を「おぼえていたくない顔だ」と表現して眼をとじた。
小津安二郎は十二月十二日の午後零時四十分に死んだ。それは彼の還暦の誕生日であった。
「午後八時、柩にはいって、おやじさんは鎌倉に帰って来た。紅葉がちり敷く山道を、柩をかついで来ると、純白のかけ布の上に、おやじさんの好きだった赤い紅葉が、二ひら、三ひら散りかかった」
と書いた俳優佐田啓二も、それから約八カ月後の昭和三十九年八月十七日、やはり蓼科から帰る途中、車が橋の欄干に衝突して死んだ。
彼によって真の名女優たり得た名花原節子は、彼の死とともにしずかに消えた。
小津の墓碑銘はただ「無」の一字である。

谷内六郎（一九二一——一九八一）

幼時ひどい喘息に悩まされ、成年に達してからも神経障害、不眠症などの症状に苦しんで、谷内六郎の腕は注射のためにケロイド状になっているほどであった。達子夫人はいう。「主人の人生は一日としてお医者さんにかからない日はありませんでした」
昭和三十年、文藝春秋の第一回漫画賞を受賞した谷内は、この光栄に仰天してナイフで自分の左腕をメチャメチャに傷つけて自殺を計るという事件を起したが、しかし翌三十一年に創刊された「週刊新潮」の表紙絵に起用され、この病める身心をもって、以来二十五年間にわたり、同誌に郷愁にみちた童画風の表紙を描きつづけた。

多くのファンを持ちながらその間彼は、間歇的に何度か自信喪失におちいり、強度のノイローゼ症状を起したが、昭和五十五年暮からまたひどい不眠症におちいり、順天堂精神医学研究所附属越ヶ谷病院に入院した。しかし翌年一月十四日に退院した。
二十二日にまた病院を訪れ「まだ十分だとは思わないが、ぼちぼち体をならしながらやってゆきます」といい、二週間分の睡眠薬をもらって帰った。その夜谷内は午後八時ごろ床についた。二十三日の夜明け前、起きて出ていった谷内はやがて寝室に戻って来て、「ちょっと一服して来たよ」と夫人にいって、また蒲団にもぐりこんだ。
午前七時ごろ目覚めた夫人は、隣の夫の異変に気づき、救急車と医者を呼んだが、それらが到着したとき谷内はすでに息をひきとっていた。
死因は急性心不全ということになったが、台所のテーブルの上には、数日分の睡眠薬の包みがからになって残っていた。（「週刊新潮」昭和五十六年二月五日号より要約）

戸川猪佐武（一九二三——一九八三）

田中角栄のスポークスマンといわれた政治評論家戸川猪佐武は、昭和五十八年三月十八日、人生の絶頂期を迎えた。
彼はいちじホテル・ニュージャパンに広いオフィスを持ち、十人近い秘書を使っていたほどはぶりがよかった。その上彼の政治小説『吉田学校』がベストセラーとなり、この三月映画化が完成して、十八日その試写を見ることになったのである。
この日彼は上きげんでこれを見たあと、夕方東京プリンスホテルの「竹下蔵相の国会活動二十五周年を祝う会」に出席し、そのあとふたたび映画の製作スタッフと赤坂の肉料理屋「ざくろ」で会食した。彼はアルコールには弱い体質なのに、この夜はビールをコップ二杯ものみ、しゃぶしゃぶを何人前か食べた。そして、午後十時ごろ、定宿にしているホテル・ニューオータニに、車で一人で帰っていった。
戸川はスポーツに関心がなく、甘党の美食家で、ヘビイスモーカーで、そのため血圧が一八〇まで上ることもあった。それでとうとう禁煙したが、それは死ぬ一カ月前のことだった。
十九日午前一時五十分、フロントに若い女のうわずった声の電話がかかった。「一二六七号室ですけど、戸川先生のようすが変なんです。すぐ医者を呼んで下さい」

ホテルでは、同室に女性も宿泊しているなどまったく知らなかった。支配人がかけつけてみると、戸川はベッドで全裸の下半身にシーツをかけただけの姿で横たわっていた。医者がきて、戸川がすでに絶命していることを告げると、女性は「いやだあ！」といって、ヘナヘナと頽れた。

彼女は二十一の銀座のホステスで、戸川は浮気の噂もたてさせなかったが、二年ほど前から彼の愛人となっていた。当夜も戸川から五十万円をもらっている。彼女の証言。

「私がホテル・ニューオータニの先生の部屋に入ったのは午前一時でした。先生の疲れた顔はいつものこと、ただアクビを連発してた。あのときのことはいいたくありません。ただ突然、ウーッと唸って白眼を剝かれて……」

戸川は脳溢血、この場合は俗にいう「腹上死」をとげたのである。週刊誌は「男子の本懐」と評した。

六十一歳で死んだ人々

> 雪はげし書き遺すこと何ぞ多き
> ——橋本多佳子遺句集『命終』——

マホメット（五七一頃——六三二）

四十歳でアッラーの神の最初の啓示に接したといわれるマホメット（ムハンマド）は、以後片手にコーラン、片手に剣をふりかざしてイスラム教を流布し、アラビア半島をはじめて統一し、六三二年メッカへの最後の巡礼を終えてからサウジアラビアのメディナの回教寺院で病床についた。

彼は苦痛のため病床をころげまわった。妻の一人アイーシャ（マホメットには十二人の妻があった）は、お護りの呪文をとなえながら、彼の顔に唾を吐きかけ、彼の身体に革袋の水をそそぎかけ、彼をたしなめた。「もし私たちがそんなにあばれたら、あなたはひどくお叱りになるでしょうに」

死の日、マホメットは寺院の中庭に面する帳をかかげさせて立った。その顔色は羊皮紙のようであったが、信者たちは彼がよくなりつつあるものと信じた。

しかし、ふたたびベッドに戻ると、最後の苦悶がはじまった。彼は突然起きあがって、手をあげて、

「アッラーよ、然り、最も崇高な友とともに……」

といったが、そこでアイーシャの肩にもたれて息絶えた。

病名不明。

二十世紀後半に至り、コーラン、剣に石油が加わることにより、イスラムは世界を震撼させた。

李白（七〇一——七六二）

いわゆる「白髪三千丈」は李白（李太白ともいう）の『秋浦の歌』よりとったものである。その華麗奔放さにおいて唐詩人中、最も人気ある大詩人。

若いころから酒を愛し、遊俠の徒を愛して天下を放浪して歩いた李白は、四十二歳にしてやっと長安に出て玄宗皇帝に召し出されたが、その行状は、

「李白は一斗　詩百篇
長安市上　酒家に眠る
天子呼び来れども　船に上らず
みずから称す　臣はこれ酒中の仙と」

と、親友の杜甫にうたわれたような豪放ぶりは変らなかった。

宮廷の沈香亭で宴がひらかれたとき、おりから満開の牡丹の花と楊貴妃の美しさを詩に歌うように、玄宗皇帝が寵臣の高力士に命じて李白を呼びにやると、李白は酔って寝ていてかつがれてゆき、高力士に靴をぬがせたなどという事件があって、彼は長安を追放された。時に李白四十三歳であった。宮仕えはわずか一年だったのである。

以後彼はまた天下漂泊の生活をつづけ、五十六歳のとき叛乱軍に幕僚として加わったという罪で投獄され、あやうく死罪になるところをやっとまぬがれて流罪に処せられたが、それを許されたときはすでに晩年であった。そして六十一歳のとき、南京に近い采石磯というところで死んだ。揚子江上で舟を浮かべて遊び、酒狂のあまり水にうつる

月をとらえようとして誤って溺死したというのは伝説だが、結局酒による病で死んだのは事実らしい。

空海（七七四——八三五）

天長八年（八三一年）五月末から彼は癰を病み、それが原因となって腎臓炎を患ったのではないかと推定されている。

翌年の十一月十二日から断穀（五穀を口にしない修行）にはいり、承和二年（八三五年）三月二十一日高野山に入寂した。

生れ生れ生れて生の始めに暗く
死に死に死んで死の終に冥し

——空海——

藤原道長（九六六——一〇二七）

「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることのなしと思へば」と詠んだ五十二歳のころから、しかし道長はひどい糖尿病にかかっていたが、やがて年とともに昂進し、ついには、おそらく同病による視力障害を起し、最後には背中に乳房ほどの癰が出来た。医師が針を刺して膿を出すと彼は悲鳴をあげ、二日目の万寿四年十二月四日午前十時ごろに死んだ。『栄華物語』にいう。「されどお胸より上はまだ同じように温かにおわします。……夜半過ぎてぞ冷えはてさせ給いける」

癰とは化膿菌による皮膚ないし皮下組織の化膿性炎症だが、化学療法や外科手術の未開な昔には、意外にこれで死に至る人間が多かった。糖尿病患者がかかり易く、かつ悪性のものになり易いが、道長などはその典型的症例であったといえる。

鴨長明（一一五五——一二一六）

鴨長明は、鴨神社系の河合神社の禰宜の子に生まれたが、若くして父を失ったためにその職をつぐ望みがうすくなった。そこで彼は管弦の修行にはげみ、その才能を認められたが、五十近くなってある席で、禁断の琵琶の秘曲をひいたため後鳥羽上皇のおとがめを受けた。ついではからずも、かつて亡父が禰宜をつとめた河合神社の禰宜をつぐ機会がめぐって来たというのに、反対が出て、そのことは沙汰止

みになった。

彼がこの世に望みを絶って大原の山中に身をかくしたのは、五十一、二歳のころといわれる。そこに棲むこと五年、さらに伏見の日野山の奥に、方丈（約三メートル四方、四帖半くらい）の庵を編み、そこに棲んだ。

ここで彼が『方丈記』という不滅のエッセーを書いたのは、五十七歳のときであった。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある、人と栖と、またかくのごとし」

それは源氏がゆらいでいる実朝の時代であった。

これを書いて四年目に長明は死んだ。詳しい状態はわからない。

『方丈記』のラストで長明は怖ろしいことを書く。

「さて、私も月が傾いて山の端にかかったように終りに近づき、闇黒の世界に向おうとしている。

静寂な夜明け方、みずから心に問う。お前が世を逃れて山林にかくれたのは、仏道の修行のためではなかったのか。それなのにお前は、姿は聖に似ているが、いまも心は煩悩に濁ったままだ。それはこの貧寒な日々に悩んでいるのか、それともまだ妄念のため心が狂わされているのか。

こう問うて、しかし心はまったく答えない。答えるものが何もないのだ。出来るのは、心にもない念仏を三度唱えるだけだ」

彼は虚無の深淵をのぞきこんだまま死んだのではあるまいか。

柴田勝家（一五二二——一五八三）

天正十一年四月二十一日、賤ヶ岳の戦いに敗れた柴田修理勝家は北ノ庄の城に逃げ戻ったが、それから二日目の二十三日にははやくも秀吉の大軍に包囲された。

「城中、天守を九重に上げ候ところへ、柴田二百ばかりにて相抱え候」

と、のちに秀吉自身、小早川隆景宛の書状に書く。

「修理も日ごろ武辺をしつけたる武士にて候条、七度までは斬って出で候といえども相ふせぐことかなわず、天守の九重目の上にまかり上り、修理の腹の切りよう見申して後学に仕り候えと申すについて、東西ひっそりとしずまり候えば、修理、その妻を刺し殺し、おのれは左の脇に刺し立て右に背骨にひきつけ、返す刀に胸の下より臍まで裂いて、

五臓六腑をかき出し、申の下刻（午後五時ごろ）に相果て候事」
しかし勝家は、秀吉に敗れた無念さより、半歳前に妻としたお市とともに死ねることに満足していたにちがいない。

宮本武蔵（一五八四——一六四五）

晩年、細川家の客分となっていた武蔵は、正保二年六十一歳になったが、この年の春のころから病を得、四月にはいってふたたび起つあたわざるを悟り、それまでいくどか赴いて坐禅し、『五輪書』を著したことのある熊本西郊の岩戸山の霊巌洞にいって端座し、しずかに死を待った。
五月十二日、彼はここでさらに『独行道十九個条』を書いた。そして十九日に瞑目した。遺言によって、弟子たちが遺骸に甲冑を着せて棺に入れ、葬った。
この霊巌洞の近くに霊巌寺という禅寺があって、これが後年の漱石の『草枕』の中の観海寺のモデルといわれる。また霊巌洞から一里ばかり離れたところにある小天温泉の名家の令嬢前田つな子が『草枕』における那古井温泉のお那美さんのモデルであったといわれるが、そのつな子が、『五輪書』は代々前田家の秘蔵していたものであったが、父の歿後細川家に買いあげてもらったむねを述べている。
——漱石は一切そんなことは知らなかったろう。漱石が『草枕』を書いたころ、「宮本武蔵」はそれほど有名ではなかったのである。

吉良義央（一六四一——一七〇二）

赤穂浪士以外に、その日の吉良上野介の死を、事前に知っていたと思われる人間がただ一人ある。
この元禄十五年十二月十四日、吉良邸でひらかれた茶会の宗匠、表千家山田宗徧である。
彼の弟子に脇屋新兵衛という上方から来た男がいて、この十日に偶然宗徧が十四日の吉良邸の茶会の予定を口にしたら、その顔色が変った。そしてその朝またやって来て、きょうは吉良さまのところへお出かけでござりますかと念を押した。——宗徧は、その脇屋新兵衛が赤穂の浪人らしい、と、うすうす感づいていた。
神も御照覧、彼らは今夜が明けぬうち、この吉良邸に推参する！
そう直感しながら、赤穂の浪士たちに同情をいだいている山田宗徧はそのことを口にせず、黙々と吉良上野介の前

で茶をたてていた。数時間後に死ぬ人間をじっと見ている男——七十九になる老宗匠は、この日一個の魔神であった。
……果せるかな、十五日午前二時、浅野の浪人たちは吉良邸に殺到して来た。その中の一人大高源吾こそ脇屋新兵衛と名乗った男であった。
夜明け前、狂気のように自分を捜索する怖ろしい物音を聞きながら、炭小屋の中で吉良は考えつづけていた。
——なぜ、わしがこんな目に合わなければならんのだ？
そもそも、松ノ廊下でわしに斬りかかったのは浅野内匠頭のほうではないか。物を教えてもらって礼をせぬということがあるものではない。その非常識を多少たしなめてやったからといって、逆上して殿中で刃傷し、そのため公儀から切腹申しつけられたとしても、それは当然の法だ。少なくとも内匠頭を罰したのは御公儀であって、わしの知ったことではない。
それなのに、そのあげく浅野の家来どもが執念ぶかくつけ狙って、いい若い者が何十人も徒党を組んで、老人のわしを殺しに来るとは、これまさに外道の逆恨みではないか。何が敵討ちだ。わしは徹頭徹尾、無抵抗の被害者だ。わしの言い分も聞いてくれ。しかし、彼らのみならず天下のだれも聞いてはくれまいなあ。何もかも、世の中がまちがっとる！
ああ、跫音が近づいて来る。この世には、神も仏もないものか！

ヘーゲル（一七七〇——一八三一）

ヘーゲルは三十半ば過ぎ、イエナ大学助教授時代、下宿先の未亡人と密通して、不義の子ルートヴィヒを生ませたが、この母子を捨ててイエナを逃げ出した。
その後彼はニュルンベルグで名門の令嬢と結婚し、優秀な男の子を二人生み、健全で幸福な家庭を築いた。少年となったルートヴィヒはこの家庭にひきとられたが、やがて家出し、職を転々としたのち、オランダ植民軍にはいってバタヴィアまで流れる運命を辿った。彼は知人への手紙にいう。「ヘーゲル氏は私と手を切り、直接に手紙をくれたことは一度もありません」
さてヘーゲルは、一八一八年、四十八歳でベルリン大学に教授として招かれた。
のちに日本の漱石が『三四郎』の中で、図書館の本の落書きに託して、ヘーゲルの伯林大学に哲学を講じた時、四方から集まった学生はただ純粋に哲人ヘーゲルの講義を聴

いて真理を知りたいという望みをいだいて集まって来たと書いたのは、このときのことである。

一八二〇年、ベルリン大学講師の地位を得たショーペンハウエルは、ヘーゲルに対抗して、故意に自分の講義時間をヘーゲルの講義時間に合せたが、学生はみなヘーゲルの方に集まってショーペンハウエルに大ショックを与えた。この時においてはヘーゲルはショーペンハウエルを一蹴したのである。

ヘーゲルはヨーロッパ哲学界の総帥的存在となったのである。

そして現実にも、一八二九年、ベルリン大学の総長となった。

二年後の一八三一年八月二十八日、薄幸の子ルートヴィヒはバタヴィアで熱病にかかり、二十四歳の哀れな生涯を終えた。

その前日八月二十七日が、ヘーゲル六十一歳の誕生日であった。

その夏、ベルリンにもコレラがはやり、ヘーゲル一家もこの難を避けて郊外の寓居で誕生日を迎えたが、やがてコレラ騒ぎもおさまったようなのでベルリンに帰り、まったく健康で新学期の講義をはじめた。

十一月十三日の日曜日、ふつう通り朝食をとったが、昼前に胃痛と吐気を訴えた。医者を呼び、手当をした。しかし特別に危険な徴候は見られなかった。

その夜ヘーゲルはベッドの上で悶々と寝返りして過したが、夜っぴてかたわらに坐っている夫人マリーを気づかって、「お前は寝てもいいよ、私のことは放っておいておくれ」といったくらいの容態であった。

翌日午前中、痛みも吐気もなくなっていたのに、排尿困難としゃっくりがはじまった。しかしヘーゲルはしずかに横たわっており、意識もはっきりしていた。しかるに。

——

マリー夫人はあとでヘーゲルの妹宛に書く。

「三時に喘鳴が始まりました。それが終るとまた安らかな眠りが来ました。けれど顔の左側を、氷のような冷たさが覆って来ました。両手が蒼く冷たくなりました。私たちはベッドに跪いて、主人の呼吸に耳を澄ませました。こうして故人は永眠したのです」（中埜肇『ヘーゲル』）

一八三一年十一月十四日午後五時十五分。日本では天保二年、良寛や十返舎一九が死んだ年である。

葬儀は多数の官民が参列し、フィヒテの墓とならんで葬られた。同年に死んだ不幸な一人の息子にくらべ、偉大な

父の、栄光につつまれた大往生であった。

で、ヘーゲルは、下火のコレラの最後の犠牲者になったとふつうには信じられているが、しかし右の症状は何一つコレラであることを物語っていないという説もあり、なるほどその通りである。

千葉周作（一七九四——一八五五）

のちに桜田門外で井伊大老の首をあげた有村次左衛門が少年血気のころ、夜中通行中の老いたる周作に斬りかかってみたが、たちまちねじ伏せられ、睾丸をつかまれ、それがダラリとしているので褒められたという伝説がある。しかし、妙な検査をしたものだ。

幕末、神田お玉ヶ池に江戸第一の大道場、北辰一刀流の玄武館をかまえ、三千と称する弟子の中には、右の有村をはじめ、坂本竜馬、山岡鉄舟、清河八郎、さらに後の新選組の山南敬助、藤堂平助などがいたといわれるが、千葉の道場が繁栄したのは、その指導が理論的でかつ懇切であったせいともいわれる。

周作は、安政二年十月二日の大地震の余燼まだ失せぬ十二月十日、病んで死んだ。病名不明。

彼自身は、当時もっとも幸福な剣法指導者といえる一生を送ったが、彼よりも実力はすぐれていたといわれる息子たち——長男奇蘇太郎は、彼より十カ月前、三十一歳で早世し、これは彼の死後だが、次男栄太郎も三十歳で、三男道太郎も三十八歳で若死している。剣はともあれいずれも身持がよくなかったというから、周作も死に臨んで思いわずらうところ多かったかも知れない。

安藤広重（一七九七——一八五八）

安政五年夏から秋へかけて江戸にコレラが流行し、府内の死者二万八千人に及んだ。「東海道五十三次」の広重もこれにかかって死んだ、といわれるが、偶然コレラ流行期に死んだだけでコレラではなかったという説もある。

とにかく彼はもはや再起不能だと知って、家族に遺言を書いた。

「……何を申すも金次第、その金というものがないゆえ、われら存じ寄りなんにもいわず、どうとも勝手次第身の納り、よろしく勘考いたさるべく候。

死んでゆく地獄の沙汰はともかくも
あとの始末が金次第なれ」

お金を残してやれないから自分には何をいう資格もない。あと家族は何とかして生きていってくれという、無責任といえば無責任だが、哀切といえばこれほど哀切な遺書もない。いかに多くの人間が、同様の思いをいだいて死んでゆくことか。――客観的に見れば、遺言書の傑作の一つであろう。

翌三日、まだ死なないので、また遺言を書いた。

「古歌。

我死なば焼くなうめるな野に捨てて
飢えたる犬の腹をこやせよ

この心持にて手軽く野辺送りいたし申すべし。江戸市中の住居ゆえ近傍に捨てるような野もなきゆえ寺へやり埋めてもらうばかり、必ずみえや飾りは無用なり。

湯灌もいらぬことなれども真似事ばかりさっと水をかけおくべし。手数をかけるはまことに無駄な骨折りゆえ決して御無用なり。

吝嗇は悪し、無駄ははぶくべし。通夜のお人には御馳走いたすべし。

東路の筆を残して旅の空
西のお国の名どころを見ん」

こんなにいろいろと気をつかいながら、広重はまだ三日間生きていて、九月六日の朝に死んだ。なるほど、これもどうもコレラらしくない。

ミレー（一八一四――一八七五）

画家になって以来死ぬときまでフランスの寒村バルビゾンに住んで、「種子まく人」をはじめとし、困苦に満ちた農民の労働生活ばかり描いたフランソワーズ・ミレーは、その絵の価値を認める人は数少なく、従って絵は安い値段にしか売れず、妻と九人の子供をかかえ、晩年に至るまでひどい貧乏に苦しみつづけた。

ロマン・ロランは書いている。「『落穂拾い』の年である一八五七年には、ただ彼の良心さえその考えに怖れてしりごみしなかったら、貧困が彼を自殺にまで追いやったかも知れないのである」

「晩鐘」の年である一八五九年には、ミレーは冬のさなかに次のように書いている。「私たちはもうわずか二、三日間の薪しかなく、それ以上を手にいれるあてが何もありません。妻は来月に分娩しますから、私は無一物になってしまうでしょう」しかもこの年にはあやうく盲目になりかかり、血を吐いた。その上なおしばしば、時には幾週間もつづいて怖ろしい頭痛や眼の痛みに苦しんだ。

ミレーは、後に一部の批評家から誤解されたような新しいデモクラシー鼓吹者でもなければ、感傷的な社会主義者でもなく、先天的な性格として、自分の人生にもこの世界にも、よろこびのかけらも見出すことの出来ない人間であった。人生も世界も、それらはただ悲哀に満ちたものとしか感じられなかった。しかし彼は、それらに対して不平も怒りもおぼえることなく、それを平静に受けいれ、その心情をそのまま、柔和で憂鬱な、素朴で荘重な絵として描きつづけたのである。

彼の絵がややいい値で売れはじめ、ようやく生活に多少の余裕が出て来たのは四十代半ばを過ぎてからであった。

彼は大柄でがっちりした体格をし、牛のような肩と農夫のような手を持っていたにもかかわらず、五十代半ばから急激に健康が衰え、一八七二年――五十八歳のときにはまたも頭痛と眼の痛み、神経の錯乱とで、いく度も病床につき、翌年にははげしい喀血をした。

一八七四年十二月には本格的に床につき、こんな厭世主義者でありながら「自然や芸術がやっとわかりかけて来たのにこの世を去らなければならぬとは、死ぬのが早過ぎる」といった。そして翌年一月二十日に死んだ。

同年にデンマークではアンデルセンが死んでいる。

三遊亭円朝（一八三九――一九〇〇）

円朝は還暦を迎えた明治三十二年十月「牡丹燈籠」の高座を最後に、以後梅毒による進行性麻痺のため、下谷車坂の自宅で文字通り寝てばかりいるようになった。

弟子は語る。

「涎のたれそうな声で、『父子つんぼの話をしてあげよう。今そこを通ったのは横町の源兵衛さんじゃないか』グーグーと眠りこんでしまう。『師匠それから』はっと眼をさまして、『なんだっけ、そうそう、今そこを通ったのは横町の源兵衛さんじゃないか』グーグーとまた眠りこんでしまうという風でした」

明治三十三年八月十一日午前二時三分、弟子たちに見まもられて息をひきとった。遺言には「われら死しての後には熱くもなければ冷たくもないから、火葬でもよし土葬でもよし」とあったという。

前から、辞世は作ってあった。

聾ひて聞きさだめけり露の音

進行性麻痺の症状として難聴にもかかっていたらしい。

円朝晩年の最大の悩み一子朝太郎は、放蕩のためすでに廃嫡(はいちゃく)されていたが、葬式のときは姿を現わしたもののまた行方不明となり、ただ三回忌のあと墓所に供えられた花に、鉛筆で「円朝倅(せがれ)」と書いた紙片がつけられてあったという。その後大正年間、チンドン屋の旗持ちをして歩いている朝太郎を見た者があり、また墓掘り人夫になったともいわれるが、その末路はさだかではない。

内田魯庵(うちだろあん)（一八六八——一九二九）

明治二十五年はじめて『罪と罰』を翻訳発表したほか、数々の外国文学の紹介者、辛辣皮肉な批評家として知られた内田魯庵の一生について、その子、巌はいう。

「余りに子供が多かった為、そしてその子供が誰も病身であった為、父はこれと云う贅沢(ぜいたく)もしなかった癖に、貧乏と生活のやりくりで一生を終ってしまった」

彼はその一生、無理をすれば、家を建てる機会もあったのに、ついに生涯借家住まいで終った。それは、いま住んでいるような安普請の家程度のものなら建てるに値しないという一種のぜいたくさからであった。同様の性情から入歯も入れず、一方で高価なロイドのべっこうぶちの眼鏡をかけ、上等な破れシャツを着用して平然としていた。

七人の子を持った魯庵は、五十二歳のとき、十三歳になる器量よしの長女百合子をバセドー氏病で失い、五十五歳のとき、一番出来のいい次男健を腸結核で失って以来、めっきり老いて、物を書く気力をみるみるなくしたようであった。

そして昭和四年六十一歳の二月七日、おそらく脳溢血に原因すると思われる失語症に陥った。医者のすすめで六月に代々木に転居したとき、彼は妻のよしに、「こんな汚ない家に越して来てすまないねえ」といった。失語症はやや軽快していたと見える。よしが、決してそんなことはないというと、あの天井をごらんといって、安物の天井板を指さして泣いた。

柳田泉は『内田魯庵氏のこと』という文章で書いている。

「臨終前の四五日、もうとても駄目だとなってからは、食物も薬も一切とらなかった。口に両掌で蓋(ふた)をして、誰にも入れさせなかった。そして奥さんが言葉をつくしてすすめると、薬を少しばかりとるが、すぐプッと吐いてしまわれたという。こんな役にたたない身になって長く生きるのは気の毒だというので、覚悟をされたものらしい」

彼は六月二十九日午前四時に死んだ。

七月一日、青山斎場で「友人葬」が行われ、柳田国男、長谷川如是閑、徳富蘇峰、北原白秋、吉井勇ら多くの知人が参列したが、柳田泉は記す。

「友人葬という名はいかにも清新で、何か賑やかな親しみ深いような印象を与えるが、列席した私にとっては、何だかお茶番じみた、あっけない、その癖何処からともなく淋しさのこみあげてくるようなものであった」

子の巌は洋画家となり、太平洋戦争後共産党にはいり、戦争画をかいた藤田嗣治を戦犯として追及して、藤田がフランスに逃げ出す原因を作った。

浜口雄幸(はまぐちおさち)（一八七〇——一九三一）

昭和四年七月、天皇から組閣の大命を受けた浜口雄幸は妻の夏子に、「途中、何事が起って中道で斃(たお)れるようなことがあっても、もとより男子の本懐である」と、いいきかせた。

当時日本は通貨不安定国として経済が低迷し、これを打破するために金解禁、きびしい緊縮財政の政策をとる必要があり、これには軍部と国民の猛反撥が予想されたからである。

さて、その風貌からライオン首相と呼ばれた浜口は、昭和五年十一月十四日、岡山県で行われていた陸軍特別大演習陪観(ばいかん)のため、午前九時十五分東京駅発特急「つばめ」に乗車しようとして、駅長の先導で中央階段からプラットフォームに出た。そして列車に近づいたとき、二メートルばかり離れた群衆の中から一発の銃声があがり、浜口は腹部をおさえてうずくまった。

駅の騒音のため銃声を聞かなかったつきそいの者が、「どうされましたか」と訊くと、浜口は「下腹にステッキのようなものがはいったような気がする」と、うめいた。その顔はみるみる蒼白になり、ひたいにあぶら汗がにじみ出した。

このときたまたま同じ特急「つばめ」の一等車には、真珠王御木本幸吉(みきもとこうきち)がすでに乗りこんでいて、この惨劇を目撃していたが、彼は口をへの字に結んだきり口をきかず、やがて見送りの人に手をふって発車していった。

浜口はすぐに駅長室にかつぎこまれた。応急手当ののち、東大病院へ運ばれて調べた結果、銃弾はへその右下から入り、小腸を傷つけて骨盤でとまっていることが判明した。

夫人が駈けつけ、つきそいの者がそのことを告げて「奥様に何かおっしゃることはありませんか」と、さけぶと浜

口は、「私事を先にすることがあるか。関係者を呼べ」といって昏睡に陥った。

手術後、東大病院の塩田広重博士は、「手術は成功した。ガスが一発出てくれれば退院の日も遠くない」と発表して、人々にその一発を期待させた。その一発の放屁にそなえて、塩田外科のまわりには新聞社のテント村が出来、記者たちは初冬の夜を立ちつくして、ひたすらライオン首相の屁を待ち受けた。

翌年一月浜口は退院し、静養にはいったが、政界は彼を強引に登院させた。

浜口は痛み止めの注射を打ちながら議会に出、官邸に帰ると床の中に倒れるという状態をくり返していたが、次第に病状悪化し、傷口に繁殖したアクチノミコーゼ（放射状球菌）により左上腹部に膿がたまって肺を破り、八月二十六日午後三時に死んだ。

犯人は右翼の愛国社の一員佐郷屋留雄（二十三）で、動機は金解禁による経済政策の失敗、ロンドン条約に関する統帥権干犯に対する憤激のためであった。佐郷屋は死刑を宣告されたが、恩赦で無期となり、十年後の昭和十五年仮出獄した。

トロツキー（一八七九――一九四〇）

レーニンとともにロシア革命をなしとげたレオン・トロツキーは、一九二九年スターリンと争って追放され、外国各地を転々としていたが、一九三七年以来ようやくメキシコに安住の隠れ家を得ていた。

しかし彼に対して憎悪の執念を捨てなかったスターリンは、ソ連秘密警察ゲー・ペー・ウーによって訓練した暗殺者ラモン・メルカデルを送った。

メルカデルは、トロツキーの秘書の妹でシルヴィア・アゲロフというアメリカ美人と結婚し、トロツキーに近づいた。

一九四〇年八月二十一日夕刻、彼はトロツキー邸を訪れ、書斎で自分の論文を読んでもらうと見せかけて、暗殺の目的を達した。

犯行直後の彼の供述。

「私はわざとレインコートを机の上に置いた。ポケットにかくした氷斧（氷塊を砕く登山用具）をすぐにとり出すためである。そしてトロツキーが私の論文を読みはじめたその瞬間、ピオレをつかんで渾身の力をこめて彼の頭にふり下

ろした。

トロツキーは悲鳴をあげた。長い、長い、怖ろしく長い悲鳴だった。あのアアアアという絶叫はいまでも私の鼓膜をひき裂くようだ。私はこの悲鳴だけは一生忘れないだろう。

トロツキーは、立ちあがると、狂気のように私に組みつき、必死に私の手を噛んだ。私は彼をつき倒した」

護衛が殺到し、メルカデルは捕えられた。トロツキーは救急車で病院に運ばれ、手術を受けた。ピオレは頭蓋骨を砕いて、三寸も脳に食いこんでいた。それでも彼はなお二十六時間生命を保ったのち、六十一歳の生をとじた。

メルカデルは二十年の刑でメキシコの刑務所に服役したのち、モスクワに帰り、国民英雄の表彰を受けた。

ツヴァイク（一八八一――一九四二）

一九四二年二月十六日、十七日の両日は、リオの名物カーニヴァルの日であった。リオデジャネイロの近郊ペトロポリスという町に亡命していたシュテファン・ツヴァイクも見物に来た。

そして十七日朝刊を見ると、昨日の祭のにぎやかな写真とともに、日本軍が二月十五日シンガポールを陥落させたという大きな記事が出ていた。ツヴァイクは大きな衝撃を受けたようであった。それでその日も祭を見物する予定であったのに、すぐそのままペトロポリスに帰って行った。

二十一日、ツヴァイク夫人ロッテが、同じペトロポリスに住む知人エルンスト・フェーダー夫妻に電話をかけ、きょうは早目に夜八時ごろおいで下さいませんか、といった。毎土曜日、チェスをする仲だったのだ。

それで八時ごろフェーダーが訪れると、ツヴァイクは机に向って、何か書きものをしていた。「早く来すぎましたかね。お邪魔でしょうか」というと、ツヴァイクは「いや、全然そんなことはありませんよ」と答えたが、何かソワソワしていた。

フェーダー夫妻はその晩四時間も話しこんだあげく、チェスを挑戦した。承知したツヴァイクを、夫人ロッテは呆れたようにしげしげと眺めていた。

別れるときツヴァイクは、「私が無愛想にしていてすみませんでしたね」と、いった。

翌二十二日。

「すべての友人に挨拶を送ります。私の友人たちが長い夜ののちになお曙光を見ることが出来ますように！　あまり

にも性急な私は、今、先にゆきます」
という遺言を残して、ツヴァイクは妻のロッテとともに服毒自殺をとげた。
彼はシンガポール陥落に、彼の精神的故郷たるヨーロッパの滅亡を予感して、そのショックで自殺したものと見られている。

山下奉文（やましたともゆき）（一八八五―一九四六）

シンガポールを攻略した山下奉文は、同時に自分が、『マリー・アントアネット』や『ジョゼフ・フーシェ』などを書いた大伝記作家も殺したことを知らない。――
昭和二十一年二月二十二日午後十一時、山下はマニラ北部の捕虜収容所から、南郊のロス・バニョスの処刑場に送られた。
彼はそこで立会いの森田教誨師に遺言はと訊かれて、戦死した兵士らの遺族への謝罪の言葉を告げた。
「私の天性が暗愚であったため全軍の指揮を誤まり、なにものにもかえ難い御子息あるいは夢にも忘れ得ぬ御夫君を多数殺しましたことは、まことに申しわけない次第であります。……」
――一方、陸軍航空隊特別操縦見習士官で二十七歳の片山弘二は、ルソン北部の山中で終戦を迎え、マニラ西北五十キロのカンルバンにあるアメリカ軍の収容所にいれられたが、入隊以前からクリスチャンであったため聖書を所持していたのと、英語がしゃべれるところから、アメリカ軍の教会の手伝いを命じられた。
二月二十二日の夕方、彼は突然、同じチャペルに勤務している浄土宗の元住職森田正覚とともに連れ出され、ジープで山中の牢獄に運ばれ、独房に待たされたあと、一室に導かれた。
すると、写真で知っている山下将軍が、米軍のダブダブの作業服を着せられて坐っており、前に立った米軍将校が、書類を通訳して山下に聞かせろ、といった。それは山下の絞首刑執行命令書で、その将校は死刑執行官のチャールズ・ラシード中尉であった。
山下は彼らを見て、
「お前たちは何者だ。二世か」
と、訊いた。
片山はたどたどしく、山下の百二十三項目に及ぶ罪状を書きつらねた書類を読んだ。
長い息苦しい朗読が終ったあと山下は、「これらの罪状

は私に直接関係のないものばかりだから、その判決は承服しがたい」といったが、ラシード中尉は、「これは命令だ。私にはどうすることも出来ない」といい、執行まで一時間の余裕を与える、といって室外に出ていった。
二人は自分たちの立場を説明し、「何か御遺言はございませんか」というと、山下は、「今となっては何もない」といったが、やがて気をとり直して、右の遺言を述べた。
それから、二人に対して次第に打ちとけて、日本に帰ったら、日本人に、義務の履行、科学教育、幼児教育の必要を訴えて欲しい、といい、また敗戦直後自決を考えたが、司令官としての事後処理のため機会を逸し、ために屈辱的な裁判を受け、軍人としての名誉を傷つけることになった、と残念そうにいった。
また、シンガポールの勝利のとき、敵将パーシバルに「イエスか、ノーか」と大喝したという話はまちがっている。あれは困惑しているパーシバルに助け舟を出してやったつもりであったのだ、ともいい、さらに「おれは東条のやつに売り飛ばされたのだ」ともいった、というがどうであろうか？
――ただし、シンガポールを攻略しながら、ついにいちども内地に帰還して栄光の軍状奏上をする機会を与えられず、そのまま関東軍総司令官として満州に飛ばされ、やがてフィリピン方面軍司令官として彼がマニラに着任したのは、実に米軍がレイテに上陸する二週間前であったといえば、彼としても釈然としないものがあったろう。
それに山下奉文は、その西郷的風貌にも似ず、実は極めて神経質な将軍であった。
やがて、その時が来た。ＭＰ（アメリカ軍の憲兵）が来て山下を立たせ、皮のバンドで手を固定し、両側から山下の腕をかかえて、怖ろしい早さで刑場へ連れ出した。
夜空には月と星がかがやいていた。刑場はアメリカ兵たちが銃をかまえて幾列にもならんだ中庭らしいところで、二本のマンゴーの大木が両側から覆いかぶさった間に、木製の絞首台と十三階段が作ってあった。
ＭＰは山下の腕をかかえたまま、その階段を上っていった。山下は、
「北はどちらか」
と、尋ね、それを教えられると、両腕を縛られたまま、
「皇室のいやさかを祈る」
と、うめくようにいった。
すぐに山下の頭に黒い頭巾がかぶせられ、首にロープが巻かれた。そして、まるでトラックの側板をはねたような

音が、ガチャン！　と鳴って、山下の姿は絞首台から消えた。午前三時二分。
　約十分後、死体はぞんざいにブランケットにつつまれて、黒人兵の手でどこかへ運ばれていった。
　山下の首を絞めたロープは、いまも「バターン戦争博物館」に飾られている。
　山下奉文や本間雅晴の処刑は、日本空襲のアメリカ兵を日本が初期に処刑したのと同様、結局、緒戦に敗れたアメリカとイギリスの腹癒せに過ぎない。

木村艸太（一八八九——一九五〇）

　明治のころ、牛鍋屋チェーン「いろは」で知られた木村荘平が作った三十人の子供のうち四男として生まれた荘太は、艸太という筆名で、翻訳、評論、「新しき村」への参加など、生活上思想上の遍歴の後、大正大震災を機会に千葉県下総の遠山村で農耕生活にはいったが、太平洋戦争後、文学に回帰して、自分の前半生の恥部をえぐり出すような回想記『魔の宴』を書き、朝日新聞社から出版されることになった。
　そのあとがきに彼は書いた。
「ルソーはコンフェッション（『懺悔録』）を携えて、最後の審判の前に立つといった。私はこのメモワルを持って、同時代者の審判の前に立とうとしている」
　しかし、その出版が近づくにつれて、「いろは大王」と呼ばれた豪傑の父とはうらはらに、デリケートな神経の持主であった艸太は烈しい自己嫌悪にかられ、その本が世に出ることに恐怖し、苦悩しはじめた。そして昭和二十五年四月十五日の夜、成田公園の隅で、酒が全然飲めないたちなのに、竹の徳利で一合ほど飲んで、その酔いを利用して、椿の木の枝に黒い兵児帯をかけて、首を吊って死んだ。
　家族への遺書には「清く明るく美しく生きてくれ。父より」とあり、長男の令男はのちに、「まるで自民党のスローガンみたいだ」と苦っぽく笑った。
『魔の宴』は、その死後一カ月ほどたって出版されたが、朝日新聞出版局の担当者の家に、その出版を怖れる艸太の幽霊が出たという噂が立った。
　なんら政治的な圧迫はない著書なのに、自分で書いて、それが世に出ることを恐怖して自殺したのは艸太だけだろう。

溥儀（一九〇六——一九六七）

　清朝最後の皇帝として生まれた愛新覚羅溥儀は、昭和七年満州国成立とともに日本にかつぎ出され、満州国皇帝に祭りあげられたが、昭和二十年八月、太平洋戦争終結直後、「日本の皇太后のところへゆきたい」といって、東京へ飛ぼうとして、十九日、奉天飛行場でソ連軍に捕えられた。
　以後ソ連に抑留されていたが、翌年八月、東京の極東国際軍事裁判に連合国側証人として送られて来、法廷で身をふるわせて日本側の陰謀をあばいた。
「日本人は満州を奴隷化した。東京の天皇から満州国の三種の神器なるものを受けとって帰ったとき、家族はみんな泣いた。これは私一代の恥辱であった」
　以後、この溥儀の一連の証言が法廷で引用されるたびに、満州国製造の責任者A級戦犯板垣征四郎大将は、「またフギさんですか。……」と、ウンザリした顔をした。
　昭和二十五年、ソ連から中国へ帰され、戦犯として撫順で収容所生活を送っていたが、昭和三十四年釈放され、以来北京の植物園で労働に従った。
「私は共産主義によって改造されはじめて真人間になった」
　と、彼は声明したが、どこまで主体性があったかわからない。
　昭和三十七年、五十六歳の彼は四十歳の看護婦と四度目の結婚をしたが、それから半年もたたないうちに尿に血が混るようになった。膀胱ガンの前兆であった。
　一九六五年（昭和四十年）から始まったいわゆる文化大革命当時には、旧満州国時代の罪をいいたてられて多少の迫害を受けたこともあった。
　一九六七年（昭和四十二年）「人民日報」は次のごとく報じた。「中国人民政治協商委員愛新覚羅・溥儀先生は、腎癌、尿毒性、貧血性心臓病を患い、長期治療せるも薬石効なく、十月十七日（午前）二時三十分北京で逝去した。卒年六十歳」

柴田錬三郎（一九一七——一九七八）

　柴田錬三郎は昭和五十二年「読売新聞」に『曲者時代』という作品を連載中、あと、二十日分で終ろうとする九月、過労のため体重三十八キロほどになり、慶応病院に入院した。その日は二十四時間昏睡状態がつづいたが、翌日から

の点滴で熱が下がっている間、一日分ずつベッドの上で書きつづけ、それを完結させた。見ていても命をけずっているような姿であった。

それ以来入院生活をつづけたが、毎日ひげをそり、朝は洋服に着がえて新聞を読み、月に何回かは美容師を呼んでシャンプーするというダンディズムは崩さなかった。

やがて体重は四十八キロに回復し、週刊誌に連載中断していた『復讐四十七士』の連載を再開した。

昭和五十三年六月十日、彼は前年まで担当医であった慶応の若い医師の結婚式に出席し、このときに風邪をひき、それがひきがねとなって肋膜炎を起し、また体重が四十一キロになった。

娘の美夏江は語る。「父はこれでガッカリしたんだと思います。何もかも面倒になったみたいで、横になったまま口もきかなくなりました。何か虚無的になって、回復する意欲もなくなったようでした」

六月二十九日の午後十時半ごろ、突然息づかいが荒くなり、それが四時間ほどつづき、意識が次第にうすれていった。主治医が駆けつけて、酸素テントをかぶせたとき、発病以来いちども苦痛を訴えたことのなかった柴田が、はじめて「苦しい」と二度訴えた。それが最後の言葉となり、三十日未明に「眠狂四郎」は永遠の眠りに落ちた。

死因は、肺炎と肋膜炎による肺機能の低下が心臓にとどめをさした「肺性心」であったとされているが、前年来彼を憔悴させていた病気は血液ガンと呼ばれる白血病であったといわれる。

その朝急報を聞いて駆けつけた吉行淳之介は書く。

「相変らず渋い表情だったが、いつも気むずかしく口をへの字に結んでいるために顎のところに盛りあがっていたもの（われわれはそれをウメボシと呼んでいたが）が消え、閉じた眼尻のあたりにやさしさが浮かんで、安らいだ顔だった。（中略）もともと長生きするタイプの人物ではなかった。人生のあらゆる面を、思い残すことなく生きることが出来た。そういうもろもろのことが、あの死に顔の安らぎにつながる、と私は感無量に眺めた」

柴田錬三郎は、柴田勝家と同じ齢で死んだのである。

福永武彦（一九一八――一九七九）

「私の病歴を簡単に述べれば、若い頃は結核で前後十年もサナトリウムで呻吟したし、それが癒ってやれやれと思ったら今度は胃が悪くなって今まで六回も入院した。これは

どの場合も、出血して病院に担ぎ込まれ、絶対安静の絶食を十日も続けていると、いつのまにか回復して来て、そこでレントゲン検査をしてももう患部がみつからないという、不思議な胃病なのである」

と、昭和四十八年にみずから記したように、作家福永武彦は、ベッドから離れている期間が珍しい病身の持主であった。両肺結核、喉頭結核、腸結核、副睾丸結核、気管支拡張症、心臓神経症、胃潰瘍、血清肝炎、痔、そして執拗な湿疹――彼はそれらをみな「僕の財産」だといっていた。

ふつうの食事――果物をふくめて――をとると必ず下血するので、妻の貞子は彼女が工夫した特別の食事を与えた。それは玄米の粉、梅干の裏ごし、ゴマをすったもの、蓮根をすったもの、豆乳、シジミの粉、朝鮮人参の粉、胚芽と屑真珠の粉、といったたぐいのものであった。

その貞子もまた結核と筋肉リューマチに悩まされる身体で、彼女は「鳥は空をはばたき梢をねぐらとし、魚は水の中でその生を営む。私たち夫婦は結婚のはじめから終りまでを病の中ですごした」といっている。

その生活の中で福永は、音楽を愉しみ、草花を愉しみ、文房具を愉しみ、小説の世界の中でも推理小説を書いて愉しむという、貞子の言葉によれば、「あらゆることを楽しみに変えてゆける技術を身につけていた武彦の生活の一つ一つは、今想い起すと不思議なほど暗い影がない」生活であった。

入院しているとき、見舞客に対し、武彦は眼鏡や入歯をはずした姿で接することは決してしなかったし、妻に看護される姿を見られることさえ極端にいやがった。

人間、コナばかり食っていても、入歯の必要が生じると見える。

昭和五十四年七月、追分の家でまた下血し、入院する羽目になったが、八月十三日午後四時、三人の見舞客が帰ったあと、

「テーコ、ボク、アタマガイタクナッテキタヨ」

というと顔が紅潮し、この病人のどこからこんな力が出たかと思うほどの強さで妻の手を握りしめると、息絶えた。最後の死因は、おびただしい彼の病歴とは無関係な脳溢血であった。

川上宗薫（一九二四――一九八五）

ポルノ小説の大々的フロンティア川上宗薫は、元来健康で性格も楽天的で、「年をとったら谷崎の『瘋癲老人日記』

みたいなものを書くよ」と、長生きすることを確信していた。

　ところが昭和五十七年春、食道潰瘍にかかって手術を受け、一応治癒したと思っていたのが、昭和五十九年秋、執拗な左肩の肩コリに悩まされるようになり、初冬散歩中、鎖骨上部の筋肉にグリグリが出来ているのに気がついて診察を受けたところ、リンパ腺ガンと診断され、十二月二十四日、手術を受けた。

　彼は、もしガンならガンと率直にいってくれと医者に伝えていたが、ガンと知らされたとき、前の手術で一応治癒状態になったことを思い出し、その心境を「せっかく戦場から生きながらえて帰還し、ひと休みしている処に思いがけず召集令状が来てまた弾丸の下を潜らなければならなくなった辛さ」と、戦中派らしい表現をした。

が、手術後、暮から正月にかけて外泊を許されると、彼は帰宅して元日の朝にはもう若い妻と「姫始め」をした。

　ひらき直った心境の一方、以後コバルト照射などの治療中、医者が、「四、五年後コバルトで脊髄に副作用が出ないように処置する」といった。その「四、五年」を耳にとめ、まだ四、五年は生きる可能性があるのか、と天来の福音をきいたような思いがした、と述べている。しかし医者は、さりげない一言にも計略をめぐらしているのである。

　一月十一日に見舞いに訪れた菊村到らに、ベッドの上で胸をかきむしって苦悶する演戯を見せる茶目ッ気がまだあった。のみならず、六月から自宅療養しつつ、口述筆記するそののどがかれても、かすれ声でなお月産三百枚という精力を保っていた。

　彼は正規の医者のほかに、鍼灸医や整体師や神霊治療にも頼ったが、さすがに次第に痩せ衰え、十月にはいって、三十七・五キロの体重になった。

　十月六日に彼は書く。「この原稿が活字になる日までが、さしあたり私の人生である。だんだん生命への執着が薄れてきて、達観とまではいわないが、これ以上痛くなければ、このまま自然と眠るがごとく死んでもよいではないか、という考えに変りつつある」しかしまた「ここで花と散れば、作家魂とかなんとかいわれることを期待してるんじゃないの」

　彼は、死の二日前まで口述筆記をつづけた。女陰についてのみならず、迫りくる死について彼ほど饒舌に感想を語った人間は稀有である。が、しゃべる人間も、沈黙する人間も、死神は一切合切区別なく、巨大なシャヴェルですくいあげてゆく。

　十三日、「もう薬も点滴もいらない。ムダなことをするな」といい、枕頭の夫人にかすかに手をふったあと昏睡状態に落ち、午後十時十分、永遠に「失神」した。烈しい南風が吹きたけり、東京は真夏のように暑い日であった。

　彼の最後の大作「淫霊」が雑誌に発表されたのは死後十日目であった。ガンによる死を、壮絶なたたかいと形容するのは、第三者による観念的な感情移入だが、この巨大な淫霊のごとき作家の場合は本『図巻』にも稀な、まさしく壮絶なたたかいであった。

　火葬に立ち合った友人の作家青柳友子は記す。「お骨はとても小さかった。こどもの骨みたいだった」

　葬式の喪主は、三十歳の妻と四十歳の娘の二人が勤めた。

六十二歳で死んだ人々

> 死の瞬間に、何びとも悟るだろう。――人生の目的なるものが、いかにばかばかしいものであったかを。
>
> ――山田風太郎――

アリストテレス（前三八四――前三二二）

　プラトンの弟子にしてアレキサンダー大王の師、万学の祖といわれるアリストテレスは、晩年アテナイを追われ、エウリポス海峡にゆき、海峡の潮流のふしぎな動きが不可解で、

「エウリポスよ、わたしをのみこめ。わたしはお前を理解することが出来ないから」

　といって、海峡に投身して死んだといわれる。

潮流よりこの心理のほうが常人には不可解である。

玄奘三蔵（六〇二——六六四）

唐の貞観三年（六二九年）の秋八月、遠くインドへ仏教の原典を求めて長安を出発した二十七歳の青年僧玄奘は、いわゆるシルクロードを通って、翌年の冬ようやくインドにはいり、巡礼、修行の日々を過すこと十二年（この間にアラビアではマホメットが死ぬ）、貞観十五年帰国の途につき、また四年歳月をついやして貞観十九年一月六日に長安に帰った。ときに彼は四十三歳になっていた。この「大冒険旅行」が後年小説『西遊記』のタネとなる。

以来彼は、インドから持ち帰ったおびただしい仏典の翻訳に生涯をついやした。

その晩年は、怖るべき則天武后の時代となっていたが、武后は玄奘を信寵し、玄奘も武后のために加持祈禱など行った。孫悟空がいたらどうしたろう。

彼は若いときの刻苦の旅のせいか、呼吸器の持病があった。老年にはいるとこれが高じたが、竜朔元年（六六一年）には、インドから持ち帰った仏典はすべて翻訳し終った。

麟徳元年（六六四年）一月八日、弟子の一人が、昨夜高い塔が崩れるという不吉な夢を見たことをしゃべると、玄奘は、それはお前の身の上のことではない、私が世を去る前兆だ、といった。

その日の夕刻、彼の住む玉華寺の後庭の溝を越えようとして転び、十三日から床につき昏睡するようになった。

二月四日の夜半から、彼は右を下にし、右手であごをささえ、左手を胸においた姿勢のまま動かなかったが、五日の夜半、愛弟子が「和尚さま、和尚さまは来世はきっと弥勒菩薩のもとにお生まれになるでしょう」というと、「生まれよう」と答えた。それから呼吸がかすかになり、やがて眠るように息をひきとった。

そのころ唐は新羅を助けて百済を攻め、百済から救援を求められた日本は、阿倍比羅夫を将として援軍を送ったが、いわゆる白村江の戦いに敗れたのが、この前年のことである。

斎藤道三（一四九四——一五五六）

一介の油売行商人から美濃の土岐家の奉公人となり、主君土岐頼芸から愛妾の一人まで頂戴する寵遇を受けながら、やがてこの頼芸を追い出してみずから美濃の大守となった斎藤道三は、目的のためには手段を選ばない戦国の世にも、ひときわぬきん出た梟雄であった。

それだけに、人を見る眼も常人ではなく、当時たわけと呼ばれた隣国の若き織田信長に娘をめあわせ、最初の会見のあと、「おれの伜どもがやがてあのうつけの門前に馬をつなぐことは目に見えておるわ」と歎息したという話は有名だ。

それほど炯眼な彼も、それから三年後、その伜の一人に殺されることになろうとは予想もしなかったにちがいない。

長子の義竜は、実は主君土岐頼芸がくれた女が、そのときすでに懐胎していたものが生まれたもので、頼芸の子であった。

道三はこの義竜と不仲になり、弘治元年から両者内戦の状態となり、翌弘治二年四月二十日の夕、ついに道三は長良川の戦いに敗れて逃走中、義竜方の武者に追いつかれ、薙刀で両足払われ、首を討ちとられた。

豊臣秀吉（一五三六——一五九八）

秀吉は文禄四年ごろから咳気をわずらい、神経痛の気味もあり、その秋には小便の垂れ流しなどやることがあった。そのころ彼は六十歳にもなっていないから、その肉体の老廃ぶりがわかる。

本格的に発病したのは、慶長三年五月五日、端午の節句の祝宴のあとであった。

『日本西教史』によれば、「太閤は一種の痢病にかかり、諸医官もはじめは軽症として深く心を労しなかったが、六月下旬からようやく病加わり、八月五日に至ってほとんど二時間気絶して人事不省の状態におちいり、諸人はじめて大いに驚き、心痛した」とある。

これは太陽暦だから、八月五日は日本の暦では七月二日にあたる。

「太閤はとうてい薬石の力の及ぶところではないことを悟り、閑静にして看護に力をつくさしめるために、伏見の城の中で、最も高く最も浄らかな楼閣に臥床を移させた」

この伏見城は、地震でいちど倒潰したあと、また十万人の人夫を動員して修築したものであった。

しかし彼は次第に食欲を失い、全身の肉もみるみる落ちて来た。直接の発病原因は下痢であるが、咳も甚だしかったというから、肺結核か肺ガンであったかも知れない。腎虚という説もあるが、そういう非医学的な症状を呈して見えるほど、彼の憔悴ぶりは異常であった。

七月十五日、彼は諸大名を集め、起請文をとりかわさせた。

「秀頼さまに対したてまつり御奉公の儀、太閤さま御同然、疎略に存ずべからざること。表裏別心、毛頭あるまじきこと」

それでも不安であったか、八月五日にはさらに五大老五奉行を集め、再度、ほぼ同文の起請文を交換させた。

同時に、家康に遺言した。秀頼の妻に、家康の孫娘を娶すようにというのだ。――あらゆる起請文、遺言の眼目は家康にあった。

一方で、大坂城の護りをさらに巨大なものとするために、外廓拡張の命令を石田三成に下した。その結果、即日立ち退きを命じられた周辺の商家は、一万七千戸に及んだといわれる。あらゆる起請文、遺言も空しいと知るところもあったのだ。凄じい最後のあがきであった。

八月はじめ、伴天連ロドリゲは秀吉を見舞った。

「太閤は絹枕をかさね、これに寄りかかって病床にあった。その衰弱枯痩の姿は、ほとんど人間ではなかった。ロドリゲ師は天国と地獄について説きはじめたが、太閤は毫もよろこばず、まったく顧るところがなかった」

八月九日、家康らは秀吉から、朝鮮撤兵の許可を得た。

その直後から秀吉は悩乱状態におちいり、五大老らは、「以後秀吉が何をいおうと一切無視黙殺すること」という申し合せをした。

このころ秀吉は、信長の亡霊に襲われ、信長の亡霊は、おれの子たちを無惨な目にあわせおった藤吉郎め、早く地獄へ来い、といったらしく、秀吉がそれについて許しを乞い、まるでひきずり出されるように夜具から這い出すのを目撃した、という前田利家の話がある。

八月十八日――陽暦九月十五日――午前二時、彼は死んだ。

辞世「露と落ち露と消えぬるわが身かな浪花のことは夢のまた夢」

これはおそらく他人の代作であろう。秀吉には、これだけの歌も作れそうにない。またこんな歌を作れる心理状態ではなかった。彼は生きながら地獄に堕ちていたのだ。

なお秀吉は天文五年（一五三六年）生まれというのが通説だが、天文六年生まれという有力な説もあり、そうだとするともう一歳若く死んだことになる。

荻生徂徠（一六六六――一七二八）

「先生は御学問以外、何が御趣味ですか」と訊かれて、「何の趣味もない。ただ炒豆をかじりながら古今の人物をコキ下ろすのが何よりの快事だナ」と答えた徂徠は、別号物茂卿と称し、江戸中期一世を風靡したいわゆる徂徠学派の総帥であり、かつ大変な豪傑であり自信家であった。

享保十三年一月、病んでふたたび起つあたわざることを聞くや、将軍吉宗は特に下熱剤のウニコールを見舞いとして下賜した。

十九日、大雪となった。臨終の徂徠は、「海内一流の人たる物茂卿、将に終らんとす。天もためにこの世界をして銀ならしむるか」といって死んだ。

あんまりショッテルので、これはあとで炒豆をかじりながらの笑い話のたねになった。

メンデル（一八二二――一八八四）

メンデルは二十五歳のとき、当時オーストリア領であったチェコスロバキアのモラヴィアの修道院にはいり、そこで生涯を過した。しかし彼は司教の仕事より自然科学に興味を持ち、僧院の中で種々の動植物を飼育栽培して研究した。もっともこの地方は古来牧畜と農業の中心地で、それに益する研究はモラヴィアの修道院でも重んじられていたのである。

ここでメンデルは、エンドウの交配試験をして、一八六五年四十三歳のとき、遺伝学上有名な「メンデルの法則」を発表した。

しかしこれは当時ほとんど他の学者に知られず、埋もれたままになったが、彼は知人に「見ていてごらん、きっと私の説の正しさが知られる時が来るよ」といっていたといわれる。

一八六八年に彼は修道院長となった。それから間もなく、時の政府は僧院に特別な税金を課して来た。メンデルは院長として烈しくこれに抵抗し、やがて政府の強圧に次第に屈してゆく他の教会関係者からも孤立するに至った。

彼の晩年は遺伝学の研究どころではなく、ただこの税金闘争に費された。

彼は金髪で、明るい灰色の眼に金ぶちの眼鏡をかけ、背はあまり高くはないが、ふとりぎみで、どっしりとして、袖のひろい司祭服にシルクハット、長靴で歩く姿には、だ

れもが好感をいだく気品があった。性格も明るく、友情に篤（あつ）かった。しかし、右の闘争と孤立の間、苦悩と失望の中に、次第に疑い深い人間嫌いの性質に変っていった。

　五十を過ぎたころから彼は手紙に「私は万有引力に敏感すぎるほど体重が多くなり、もう植物採集にもゆけません」と書くほど肥満した。その体重をへらすために、一日に葉巻を二十本も吹かしたが追いつかなかった。

　一八八三年の春ごろから、彼はいつも寝台に横たわり、公務もしたがらなくなった。足に水腫が出来て、たえず水液がにじみ出すので、毎日ベッドの上で包帯をとりかえた。彼は腎臓炎と心臓病に冒（おか）されていたのである。

　一八八四年一月六日の午前一時半、その包帯をとりかえに修道女が部屋にはいってみると、メンデルはソファに坐ったままひとりで死んでいた。最後に彼は尿毒症にかかっていた。

　彼の死後十六年後の一九〇〇年、メンデルの法則は再評価され、その名は遺伝学上不滅の栄光をもって刻まれることになった。

　同じ年に、同じチェコで、作曲家スメタナが死んでいる。

ゾラ（一八四〇——一九〇二）

　いわゆる「ドレフュス事件」で、ドイツ軍スパイの嫌疑を受けたユダヤ人、ドレフュス大尉を無実であると弁護し、有名な「余は弾劾（だんがい）す！」との声明を出してフランス軍部と戦った文豪エミール・ゾラが、ついにその正しさを認められ、亡命先のイギリスから意気揚々と帰って来たのは一八九九年のことであった。

　三年後、彼はこの事件をテーマにした小説『真理』を新聞に連載しはじめた。彼は二十五年前からセーヌ河畔の美しい村メダンに別荘を持っていて、この一九〇二年の夏もこの別荘で執筆した。そして九月二十八日、夫人とともにパリのド・ブリュッセル街二十一番地の自宅に帰った。

　ゾラはそのアパルトマンの一階、二階を借りていて、それより上階には、ほかの人々が住んでいた。地下室にボイラーがあって、そこから送られるスチームで全館暖房出来るようになっていた。しかし各戸に暖炉もあって、火を燃やすことも出来た。

　ちょうどパリはうすら寒くなって来た季節で、上階の人々は数日前、煙突を掃除させたが、このとき砂やセメン

トが、ゾラの居室を通る煙突に落ちた。

　ゾラ夫妻はそのことを知らず、帰った晩、暖炉に火をつけたが、煙突がつまっているのでよく燃えなかった。ゾラ夫人はアパルトマンの門番に、明日煙突掃除人を呼んでくれと頼んだあと、夫に暖炉の火を消してしまいましょうか、といったが、ゾラは気にせず、何、そのうち消えてしまうさ、と、うっちゃり、田舎から帰って来た疲れもあって、二人とも早目にベッドにはいった。

　午前三時ごろ、夫人は頭痛と吐気をおぼえて目ざめ、ベッドから出て隣りの浴室にゆき、そこで吐いた。しかし何の原因でそうなったかわからなかった。十五分ほどして、彼女はベッドに戻った。そのときゾラがかすかにうなり声をあげたので、「あなたも気分が悪いのですか」と夫人は訊（き）いた。

「ふしぎだ。おれも変だ」と、ゾラはいい、「なに、胃のもたれだろう。明日になればなおってしまうよ」と答えたが、しばらくして彼もベッドから出て、洗面所のほうへ歩き出し、突然床に倒れた。夫人は驚いてそのほうへゆきかけたが、彼女もめまいを起して倒れ、これまた失神してしまった。

　朝の八時、煙突掃除人が二人やってきたが、ゾラ夫妻が起きてこないので、門番と無駄話をしていた。九時ごろふたたびノックし、なお返事がないのでようやく不審に思い、門番を呼びドアを破ってはいって、ゾラ夫妻が倒れているのを発見した。

　医者が到着したとき、ゾラの身体はまだ暖かく、絶命後一時間ほどしかたっていないことが確かめられた。ゾラ夫人のほうはまだかすかに息があったので、人工呼吸で甦（よみがえ）らせたのち、病院へ運ばれた。

　夫人はゾラもまた病院に運ばれたものと思っていたが、数日後ゾラの死を告げられ、まだ完全に回復していない身体で自宅に帰った。そして、そこにまだ横たえられていて、すでに腐敗の兆（きざし）を示している夫の身体を見た。

　ゾラの死因は不完全燃焼による一酸化炭素中毒であった。実験のため、一夜鼠をその部屋におき、例の暖炉に火をつけたままにしておいたところ、翌朝鼠は死んでいた。

　同じ年、日本では子規が死んでいる。

ラヴェル（一八七五——一九三七）

　人をくっていて、しかも華麗な「ボレロ」を作曲したモーリス・ラヴェルは、小柄でやせてはいるが、おしゃれで、

おすましやで、ストラヴィンスキーから、「申し分のない優秀な時計職人」と評されたことがある。これは彼の冷徹な人柄と明晰な音楽を評した言葉である。

一九三二年十月、ラヴェルはパリでタクシーに乗っていて、その車が他の車と衝突した。彼は脳震盪を起し、歯も二、三本欠けた。この事故以来、彼には完成した作品が一つもない。

翌三十三年夏、故郷の幼な友達の女性とともに海辺にゆき、石を海に投げようとして彼女に石をぶつけてしまう。彼は手足をコントロールすることができないことを知った。

この失行症は一時軽快したように見え、また発現し、徐々に悪化していった。次第に彼は、友人のだれかのことを話すのに、「彼は……作曲家で……奥さんが車を運転している……」というような表現しかできないようになり、はては文字さえ忘れてしまった。

音楽会へいって、聴衆が彼を見つけて拍手してもキョトンとしていることがあり、また友人が訪ねて「どうですか」と訊いてもただ肩をすくめ、「仕事はしているのですか」と訊くと、黙って涙をながすありさまになった。

それでも彼は事故以来五年の余命を持った。一九三七年、彼を診察した脳外科医は診断した。「幼時からの頭蓋骨の拡張が年齢とともに増大している。これは脳水腫であることを意味している」

そこで、十二月十九日に手術が行われた。頭蓋骨が切開されたが、脳に異常は見られなかった。

しかし手術後二、三時間して、彼はいちど目覚めたが、また眠りこみ、彼はふたたび目覚めず、十二月二十八日の早朝に息をひきとった。

死後改めて、彼の病気は脳髄が萎縮するピック氏病であると診断された。自動車事故が原因かどうかはさだかでない。

ムソリーニ（一八八三――一九四五）

ファッショの「独裁者」として、はじめヒトラーの師であったイタリアのムソリーニは、いざ戦争がはじまるとイタリア軍の弱さのためにヒトラーの厄介者になり果てた。

一九四五年四月二十七日午後三時ごろ、イタリア戦線で敗走するドイツ軍の小部隊と行を共にしていたムソリーニは、北イタリアのドンゴで、イタリアのパルチザン部隊に制止された。

車の中でムソリーニは帽子をまぶかにかぶって眠ったふ

りをしていたが、それも及ばず看破され、逮捕された。パルチザンの一人は、そのときのムソリーニを、「眼つきはうつろで、顔色は蠟のようだった。ひげが生えているので、あごはいっそう黒ずんで見えた。眼の角膜は黄ばんでいた。彼は精神的にはすでに死んでいた」と述べている。

ドンゴから彼だけ別の場所へ移送されることになったが、途中一台の車とゆきあい、そこから彼の愛人クラレッタ・ペタッチが下りて来た。彼女もまた捕えられていたが、ムソリーニ逮捕の報を聞き、彼と行を共にしたいと哀願して許されたのである。

四月二十八日の夜明け前、彼らはコモ湖近くの農家にとめられ、眠り、十一時ごろ目ざめた。

午後四時ごろ二人はパルチザンの将校に呼び出され、ジワリーノ・デ・メッツェグラという土地の、木立にかこまれた山荘の門のそばで、低い壁を背にしてならんで立たされた。

ペタッチが、ムソリーニにいった。

「おしまいまでついて来たでしょう。うれしくはなくって？」

そのとき、パルチザンの銃口が火を噴いた。

彼らの屍体は、ドンゴで処刑されたファシストたちの屍体とともに運ばれて、翌日ミラノの広場でさらしものになった。これを目撃したＡＰ記者のスタンレー・スイントンは書く。

「ガソリン・スタンドに構築したヤグラに、ずらりと七つの屍体、どれも逆さ吊りであった。

ムソリーニの顔は無表情で、固めかけたこぶしは、ダラリとたれ下がっていた。乗馬ズボンのような緑青色のズボンをはいて、上衣はひんむくれて、白いウールのアンダーシャツがまる見えだった。身体は弾痕だらけで、頭を撃ちぬいた弾の痕は後頭部を大きく裂いていた。

となりがペタッチだった。美女は死顔も美しかった。茶色のブラウスがはだけて垂れ、青いスリップが見えていた。ウールのスカートも胸のほうへ垂れ、絹の靴下に包まれた両脚はあらわになって、人々の視線を浴びていた。

無帽のゲリラ隊員たちが自動小銃をかまえて、黒山のような群衆を制していた。群衆は十万はいたろう。いや二十万くらいはいたかも知れない。それがみな息をのんで、静まり返ってこれを眺めていた」

――一年数カ月前、バドリオのためにアペニン山脈の最高峰グラン・サッソの牢獄に幽閉されていたムソリーニは、ドイツのスコルツェニー大尉の特別攻撃隊の手によって冒

険小説さながらの離れわざで救出されたのだが、そのとき彼は救出されなかったほうが幸福であったかも知れない。

三浦　環（一八八四——一九四六）

明治半ば、前髪を赤いリボンで結び、紫の矢がすりの着物に海老茶の袴、それに靴をはき、イギリス製の赤い自転車に乗って、芝の自宅から上野の音楽学校へ通う姿で、満都の青年を悩殺した三浦環も、昭和十年代には、白粉を塗りたくった醜悪なデブの婆さんと化していた。

しかし、自分の変貌をまったく意識せず、全世界を舞台にマダム・バタフライを上演すること二千回、日本が生んだ最初の国際的プリマ・ドンナという誇りにみちて歌う蝶々夫人の歌声は、やがて聴衆にその姿を美しいと感じさせずにはおかない力があった。

しかし、官能とナルシシズムの権化のような彼女は、私生活では、乱脈、無軌道、天衣無縫をきわめ、五十を過ぎても弟子に「お嬢さま」と呼ばせ、そのスキャンダルは生涯絶えることがなく、六十を過ぎてもなお何人目かの若い愛人を持っている始末であった。

太平洋戦争がはじまると、彼女は「アメリカが降伏するまで、もう蝶々夫人は歌わない」と声明した。もっとも、そう声明しないわけにはゆかない雰囲気でもあった。

その太平洋戦争が終ったころ、彼女は下腹部に腫瘍を生じ、悪化し、二十一年三月、入院した。腫瘍がひろがるとともに、いちじは七十キロ近くあった体重が、半分の三十五キロになってしまった。

それでも環は、四月十三日、病室にNHKのマイクをいれ、医師と看護婦に身体を支えられてベッドに坐って蝶々夫人を歌った。録音中、彼女は、オシッコ、といい、マネージャーがおんぶして部屋の片隅の屏風のかげの便器に運んだという。そのあとで環は、自分の歌唱が不満だった、といって泣いた。

彼女は五月二十六日に息をひきとった。窓外には、オペラの世界とはあまりに遠い、餓民がデモ行進している風景があった。

遺体は東大病理学教室で解剖されたが、その声帯は二十二、三歳の若い女性のものと変らなかったという。その咽喉部は今も東大医学部耳鼻科教室に保存されている。

宮城道雄（一八九四——一九五六）

昭和三十一年六月二十四日、箏曲家宮城道雄は関西で予定されている「越天楽による笙変奏曲」の演奏会に出演するため、雨の東京駅から、午後八時半発「銀河」の寝台車に、門下の牧瀬喜代子といっしょに乗りこんだ。

午前三時前。——宮城は尿意をおぼえ、トイレにゆこうとして寝台を出た。ところがその夜、その寝台車の出入口のドアは、どういうわけか開いたままになっていた。

「深夜の寝台客が、手洗いの帰りにでも閉め忘れたのかも知れない」と宮城の友人内田百閒はいう。「しかしただ閉め忘れただけなら、扉の握りをよく引いてなかったと云うだけなら、その内に列車の動揺で大概はひとりでに閉まる。それでも開いていたとすれば、閉まらない様に死神が押さえていて宮城を通したのだろう」

盲目の宮城はそれを知らず、トイレの前をゆき過ぎて、デッキに出るドアをあけた。そして、トイレにはいるつもりでデッキのドアをあけ、風にさらわれて外へまろび出した。——

ただし、これはあとになっての推定である。その時刻は二十五日午前二時五十三分、というのも彼の落ちた場所からの推定である。門弟の牧瀬喜代子は何も知らずに眠っていた。

午前三時半、東海道線刈谷駅を通過した下り貨物列車の機関士が、「刈谷駅東ガードのところに轢死体らしいものを見た」と、大府駅に通告票を投下した。ただちに四人の駅員が線路づたいに歩いて、線路わきに白いものがうごめいているのを発見した。

宮城道雄は頭部その他に重傷を受けていたが、まだ生きていた。駅員たちは担架で刈谷駅近くの病院に運んだ。

処置が終り、ベッドに寝かされていた宮城は、午前七時ごろ、突然「起こして下さい」といったが、次第に呼吸が浅くなり、午前七時十五分に絶命した。

その日、宮城家に一通のお悔み状がとどいた。

「今朝先生お亡くなり遊ばした報道に接し、驚きの言葉さえ出ませんでした。

昨夜、銀河で御元気に御出発、お見送り申しあげたのにと一同御話申し上げて居ります。

誠に御痛わしい限りであります。

御生前中は私共色々と御厚情賜り感謝して居ります。右不敢取御悔み申上げます。

六月二十五日
宮城様　　　　東京駅赤帽一同」

これをみごとな悔み状だと作家中野重治は嘆賞した。

浅沼稲次郎（一八九八――一九六〇）

「その日、昭和三十五年十月十二日、日比谷公会堂の演壇に立った浅沼には、機関車になぞらえられるいつもの覇気がなかった。右翼の野次を圧する声量がなかった。右翼の妨害に立往生する浅沼の顔からは、深い疲労だけが滲み出ていた。委員長になって以来、さらに激しくなった政治行脚を、もうその肉体は支え切れなくなっているのかもしれなかった。しばらくの中断の後、浅沼は再び演説を始めた。

『……選挙のさいは国民に評判の悪いものは全部捨てておいて、選挙で多数を占むると』

そこで声を励まし、さらに、

『どんな無茶なことでも……』

と語りかけようとした時、右側通路から一人の少年が駆け上がった。

両手に短刀を握り、激しい足音を響かせながら、そのまま浅沼に向って体当りを喰らわせた。

浅沼の動きは緩慢だった。ほんの僅かすら体をかわすこともせず、少し顔を向け、訝し気な表情を浮かべたまま、右脇腹でその短刀を受けてしまった。短刀は浅沼の厚い脂肪を突き破り、背骨前の大動脈まで達した。

少年はさらに第二撃を加えたが、切っ先が狂い左胸に浅く刺さったにすぎないと察知すると、第三の攻撃を加えるべく短刀を水平に構えた。

浅沼は驚きだけを表わした顔を少年に向け、両手を前に泳がせた。そして、四歩、五歩よろめくと、舞台に倒れた。

少年は、一瞬の空白の後で懸命に飛び出してきた十数人の私服刑事と係員に、凄じい勢いで取り押えられた。

浅沼はすでに意識がなく、間もなく絶命した。血はあまり流れなかった。それは脂肪が傷口を塞いだだけのことで、死因は出血多量だった。流れ出なかった血は体内で凝固し、その重さは千五百グラムもあった」（沢木耕太郎『テロルの決算』）

東京日比谷公会堂におけるＮＨＫ、公明選挙連盟、都選管共催の「三党首立会演説会」、池田首相と、二千人の聴衆と、百五十三人の警官と、テレビカメラの前のテロ。しかも、一見陽性の好人物で、いちばん暗殺されそうもないタイプの人物が。――時に午後三時七分。

犯人の右翼の少年山口二矢は、未成年の十七歳であったため練馬の少年鑑別所に移されたが、二十日後の十一月二日独房内で縊死をとげた。

ヘミングウエイ（一八九九――一九六一）

一九五四年一月、五十五歳のヘミングウエイは、アフリカで飛行機事故を起して重傷を負ったが、同年ノーベル文学賞を受賞した。受賞のとき彼は新聞記者に、「もう五年以上は生きられない。急がなければならない」と、語った。

この年から彼の体力は衰えはじめ、高血圧と肝炎に苦しみ、夢遊病さえ起すようになった。

六〇年春、妻のメアリーとともにアイダホ州ケチャムの山荘にいったが、かつて九十四キロあった体重が七十八キロとなり、人と話すのにどもりがちになるという状態になった。この年の秋、彼を訪れた二人の大学教授は、顔色悪く、舌はもつれ、足どりもおぼつかない、自作にも自信を失い、世評ばかり気にしている、かつての鋼鉄の巨人のようなイメージとは別人のヘミングウエイを見た。

十一月末、彼はミソネタ州ロチェスターのメイヨー病院に入院し、高血圧と糖尿病の診断を受けた。

それから退院また入院をくりかえした後、翌一九六一年、彼は妻とともにまたケチャムの山荘にいった。七月一日到着し、その夜なじみのレストランで夕食を食べた。ヘミングウエイは終始なにかに憑かれたような半喪神状態であったという。

七月二日朝七時半ごろ、山荘の二階に寝ていたメアリーは一発の銃声に目ざめ、階段を駈け下りた。そこにはサンタクロースに似た白髪のヘミングウエイが、口とあごと頬の一部を残して、頭部を粉砕して倒れていた。そばには愛用の二連発リチャードソン猟銃がころがっていた。

なお、彼の父クレアレンスも一九二八年鬱病でピストル自殺をし、彼の弟レスターも一九八二年同病で猟銃自殺をした。

西東三鬼（一九〇〇――一九六二）

水枕ガバリと寒い海がある

昭和七年、三十二歳ではじめて俳句を作りはじめた西東三鬼は、たちまち無季の新興俳句の旗手となったが、彼の拠る「京大俳句」は共産主義の嫌疑を受け、昭和十五年いわゆる俳句弾圧事件によって彼も検挙された。これは当局

のでっちあげであったが、そのときのいろいろの状況から彼は当局のスパイではなかったかというあらぬかんぐりさえ受けた。ともあれ彼は敗戦まで俳句から遠ざかることを余儀なくされた。

三鬼が共産主義者であったかどうかは別として、彼自身はメチャクチャの遊び好き、浪費好きの一種のコスモポリタンの性格を持ち、なかんずく異常なばかりの女好きで、これは中年を過ぎてもやまなかった。

　　中年や遠くみのれる夜の桃

戦後また俳句に戻ってからのこの句は、女を想う中年男の心理を表現したものとして評判になった。

三鬼は昭和三十六年ごろから食欲不振におちいり、九月胃ガンを宣告され、十月九日手術を受けたが、その前夜つきそいの夫人に、「おかあちゃん、（手術で）生きるかどうかわからん。抱いてくれ」といった。「死をかけた大手術の前に、生きてるあかしを味わっておきたいんだ」と、いった。胃ガンの彼は、六十一歳で夫人に性交を要求したのであった。

手術のために陰毛を剃ったザラザラの皮膚の感触を夫人が記しているところを見ると、夫人はこれに応じたものであろう。

十一月退院して葉山の自宅に帰ったが、年を越えると病状次第に悪化し、看病する夫人が居眠りすると、眠いなどはゼイタクだと怒り、「早く楽にしてあげたい」というと、それは早く死ねということか、と当たりちらしたりした。

そして昭和三十七年四月一日十二時四十分、「ああ、もうあかんわ」といって息をひきとった。

最後の句。

　　春を病み松の根っ子も見あきたり

中谷宇吉郎（一九〇〇——一九六二）

「こんな雪の研究が一体何の役に立つのかといわれれば、まだ自分にも何ら確信はない。しかし面白いことは随分面白いと自分では思っている。世の中には面白くさえもないものも沢山あるのだから、こんな研究も一つくらいはあっても良いだろう」

——中谷宇吉郎——

はじめて人工の雪の結晶を作ることに成功し、「雪と氷の博士」で知られた物理学者中谷宇吉郎は、昭和三十二年から「氷冠」の研究のために何度かグリーンランドに渡ったが、昭和三十五年の最後のグリーンランド行きも、身体

の変調を知りながら、やはり出かけていったものであった。

その旅行から帰ったとき、彼は異常に痩せ、好物の酒も飲めなくなっていた。東大で診断の結果、前立腺ガンに冒されていることが判明し、手術を受けた。しかしガン細胞はすでに骨髄に転移していた。

友人の茅誠司は書く。

「それから一年有余の中に、この骨髄を侵した癌の細胞は、次々と身体中の骨髄の中へと拡がってこれを蝕んでゆき、造血機能を衰えさせて行ったのである。そして事実彼の身体を解剖した結果、その骨髄は殆ど無くなっていたとのことである。

自宅で輸血を続けながら、病床に横たわっていた彼を診た武見（太郎）博士に『君の身体は、もう血が作れなくなっているんだよ』と言われた時、彼は愕然として死の近いことを知った。

そして再度東大病院に入る為に家を去る時は、庭の一木一草をも喰入るように眺めていったとのことだった」

中谷が息をひきとったのは、昭和三十七年四月十一日のことである。茅はいう。

「その死の直前に何かもの言いたげに口を動かしているので、静子夫人がその口もとに耳をよせて『何ですか』ときくと、彼は小さな声で『誰にもよくしてあげるんだよ』と言ったという」（茅誠司『忘れ得ぬ雪の科学者・生涯の友、中谷宇吉郎のこと』）

椎名麟三（一九一一——一九七三）

母の自殺、父の自殺、そして本人も、コック、出前持ち、工員、さらに共産党入党と検挙……という暗澹たる青春を過して来た椎名麟三は、戦後突如華々しい作家として登場した。

寿美子夫人は語る。

「昭和二十二年、『群像』や『人間』に持ちこんで断わられた『深夜の酒宴』が『展望』に載り、椎名が作家としてデビューしたときは、実はわたしたちの暮しは、限界ギリギリの瀬戸際だったのです。もしこのときデビューできなかったら、わたしたちの生活は完全にドン底を突き破って壊滅していたに違いありません」

椎名がはじめて心筋梗塞の発作を起したのは、昭和三十一年のことであった。それから十七年間にわたって、彼はこの病気とたたかわねばならなかった。

彼は精神安定剤セルシンや心臓薬ニトログリセリンをウ

イスキーで流しこんでは、発作をねじ伏せた。
昭和四十八年三月二十八日午前二時半ごろ、彼は世田谷区松原町の自宅の二階の書斎から下りて来た。物音に気づいた夫人が起きていってみると、椎名は玄関のあがりがまちに腰を下ろして牛乳をのんでいた。「どうしたの」と訊くと、「気分が悪い」といい、『家庭の医学』という本を持って来させた。そのうちますます息づかいがおかしくなったので、夫人と娘の真美子はあわてて救急車を呼んだが、それがなかなか来ないので、二人は椎名を抱きかかえ、甲州街道まで七百メートルも運んだ。
蒼白だった椎名の顔が赤くなり、早かった呼吸が大きなゆっくりとしたものに変り、そしてその呼吸が停止したあとで救急車がやって来た。

森　雅之（一九一一——一九七三）

作家有島武郎の長男に生まれ、長じて文学座に加わり、映画では黒沢明の「羅生門」「白痴」、成瀬巳喜男の「あにいもうと」「浮雲」など、それぞれまったく別世界の役柄をみごとに演じわけた森雅之は、昭和四十八年六月、自宅で倒れた。彼は直腸ガンに冒されていたのである。
すでに昭和二十八年、溝口健二の「雨月物語」で、あるシーンの撮影が終ったとき、彼がタバコをくわえると溝口は思わずライターで火をつけてやった。俳優には苛烈な溝口がそんなことをしたのはあとにも先にもこのときかぎりであったが、当時からそれほどの演技力の持主だったのである。共演した名女優田中絹代はいう。
「わたくし、森さんは怖ろしい俳優だと思いました。すばらしい俳優はいろいろありますけど、この俳優は怖ろしいと思いました」
しかも、病院で彼は、何度も、「やっと芝居がわかってきたというのに、ここで死ななければならないとはなあ」と痛嘆した。
十月七日午前七時二十分に死んだ。遺言は「死顔をひとに見せてはいけない」であった。

朴　正熙（一九一七——一九七九）

一九六一年、クーデターによって李承晩政府を倒し、やがて韓国大統領として約十八年間にわたり絶対的独裁の権力をふるった朴正熙は、一九七九年十月二十六日夕刻、ＫＣＩＡ（韓国中央情報部）の部長金載圭、警護室長車知澈

とともに、宮井洞の中央情報部の食堂で会食していたが、当時起っていた釜山、馬山の騒乱に対する処置について、車と金の口論となり、朴大統領もまた金を非難した。金載圭はいちど室外に出て、三八口径リボルバー拳銃を持って来て、七時三十五分、いきなり大統領と車警護室長を射殺した。
金載圭は、ついで一九八〇年に起った光州叛乱の最中の五月二十四日絞首刑に処せられた。金の動機、射殺の状況などいろいろ取沙汰されたが、政府について報道の自由のない国のこととて、正確な真相はよくわからない。

有馬頼義（一九一八——一九八〇）

「温厚で、優しくて、才能が充ち溢れていて、仕事はいっぱいあって、美しい夫人と可愛い坊やが二人いて、殿様で、と、実に私のかいま見た有馬家は幸福の絵そのものであった」
と有馬家に出入りしていた作家中山あい子はいう。
その有馬頼義は、昭和四十七年五月、川端康成の自殺にショックを受けて同様にガス自殺を計った。昏睡中を発見されて助けられ、入院したが、やがてその病院で知り合った若い女を連れて家に帰って来た。退院はしたけれど、彼はガス中毒後遺症から全快したわけではなかった。
以来「夫人と子供さんは屋敷を出て別居し」と中山は記す。「当の有馬さんはすっかり人が変って、あの広い屋敷の中を、若い女とふたりきりの隔絶した世界にして、じっとこもっていたのである。よく整理された応接間から食堂から、美しく色とりどりのパンティを並べ、ソファの上もテーブルも花が咲いたようだと……（中略）……そんな中に座りつづける彼のかたわらで、その若い恋人は、訪問客をもてなすわけでもなく、じっと座って、彼の顔を見あげていたという」
それから八年後の昭和五十五年四月十四日未明、有馬は自邸で脳溢血を起して意識不明になっているところを発見され、近くの病院に運ばれたが、ついに意識を回復せず、十五日午後九時十五分に死去した。

六十三歳で死んだ人々

> 自分の死は地球より重い。他人の死は犬の死より軽い。
>
> ——山田風太郎——

平清盛（一一一八——一一八一）

治承五年二月二十七日、清盛は発病した。

その病状について、『平家物語』の描写はオーバーである。

「入道相国、病いつき給いし日よりして、水をだにのどへもいれ給わず。身の内の熱きこと火をたくがごとし。臥し給えるところ四五間が内へ入る者は熱さたえがたし。ただのたまうこととては『熱、熱』とばかりなり。比叡山より千手井の水を汲みくだし、石の船にたたえて、それに下りて冷え給えば、水おびただしく湧きあがって、ほどなく湯にぞなりにける。もしや助かり給うと、筧の水をまかせたれば、石や鉄などの焼けたるように、水ほとばしって寄りつかず、おのずからあたる水は炎となって燃えければ、黒煙殿中にみちみちて、炎うずまいてあがりけり」

これではまるで新エネルギー源だが、マラリアではなかったかといわれる。

五日後の閏二月二日、妻の二位の局が遺言はないかと訊いたのに対して、清盛は「ただ思いおくこととては、伊豆の流人、頼朝が首を見ざりつるこそ安からね。頼朝が首をはねてわが墓の前に懸くべし」といった。

——二十年前、平治の乱でうかうかと助命した源頼朝は、この前年八月伊豆に旗揚げし、十月、平家は富士川で水鳥の羽音に驚いて逃げ帰ったばかりであった。

閏二月四日、「せめてのことに板に水を注てそれに伏しまろび給えども助かる心地もし給わず、ついに悶死ぞしたまいける」

六波羅は弔問の馬車の馳せちがう音で、天もひびき大地もゆらぐばかりであった。

高山右近（一五五二——一六一五）

山崎の戦い、賤ヶ岳の戦いに秀吉方として戦ったキリシタン大名高山右近は、のち明石六万石に封ぜられたが、天正十五年秀吉が禁教令を発するに及んでもキリシタンを棄てず、大名の地位を追われた。その後前田家の客分となって暮していたが、慶長十九年こんどは家康の禁教令のために、当時イスパニア領であったルソンに追放されるに至った。

日本を去るに当って、彼が友人細川忠興に残した最後の手紙が、昭和五十六年九月に発見された。

「近日出舟 仕 候仍此呈一軸進上致 候誠ニ誰ニカト存候 志 耳帰ラシト思ヘハ兼テ梓弓ナキ数ニイル名ヲソ留ル彼ハ戦場向 命 堕名ヲ天下ニ挙是ハ南海ニ 赴 命天懸名ヲ 流 如何六十年之 苦 忽 別 申候此中之御礼ハ中々不申上候々々 恐惶敬白

九月十日　南坊等白

羽越中様 参 人々御中」

南坊等白は右近の茶道の雅号である。

現代訳「近日船出いたします。そこでここに掛軸一本を進上します。どなたに差しあげるべきかと考えましたが、あなたが適当と思いました。ほんの気持だけです。帰らじと思えばかねて梓弓亡き数に入る名をぞ留むる、と詠んだ彼、楠木正行は戦場に赴いて命を落し、私は南海に赴いて命を天主にかけて名を波に流すだけです。六十年の苦しみもたちまち消える思いです。この間いろいろお世話になった御礼はなかなか申しあげかねるほどでございます」

この手紙を書いて一ト月後、慶長十九年十月七日、妻子、バテレンらとともに右近を乗せた船は長崎を出帆し、途中難破しかけたこともあったが、一ト月ちかくかかって無事マニラに到着した。

彼はフィリピン総督ドン・シルースに歓迎され大邸宅を与えられたが、気候と食物の激変のゆえかみるみる弱り、おまけに熱病にかかって、マニラ到着後四十日ほどで、翌元和元年一月七日（陽暦二月四日）の夜にこの世を去った。

ルーベンス（一五七七——一六四〇）

「彼の裡にはあまりに多くの才能がかがやいているので、画家としての資質などは、その天分のうちで最も恵まれていないものの一つだ」と、いわれるほどさまざまな豊かな

才能を持ち——彼は歴史、文芸にも卓越した知識を持ち、外交官までやった——「また、彼はいうことなすこと、すべてだれにもよろこばれるように生まれついていた」と評されるほど好ましい性格を持つルーベンスは、しかしその絵でもバロック絵画の巨匠として不滅の名を残した。

量産に悠々としてたえぬく豊饒さは生涯衰えを見せず、美しい最初の妻イザベラが——彼は彼女をモデルにして数々の傑作をかいた——二人の子供を残してこの世を去ると、五十三歳で、十六歳の魅惑的な美少女ヘレナを妻とし、彼女に五人も子を生ませ、故国フランドールのマントウエルベンの豪奢な城館で幸福な生を終えた。晩年痛風をわずらったが、長い病床につくこともなく、数日神経痛と発熱に苦しんだだけで、心臓発作でこの世を去った。

死の数日前に、彼を尊敬する人々が、彼のために礼拝堂を建ててよいか、と尋ねると、彼は天性のつつましい口調で、「妻と子供たちが、そうした記念物を建てる価値があると考えるなら、そうしたらいいだろう。私は別に要求しないが、もし作るなら、聖母マリアの絵と大理石の像を一つおいたらいいと思う」と答えた。礼拝堂はその通りに建てられ、彼が最後まで手を加えていた「聖母と賢人たち」の絵で飾られた。

ただ奇妙なことは、彼の臨終に立ち会った二人の医者には、それぞれ三フローリンの謝礼しか支払わなかったのに、知り合いの理髪師には六十フローリンの謝礼が支払われたことである。

レンブラント（一六〇六——一六六九）

肖像画家の第一人者としての名声と富と、そしてそのために富豪の娘サスキアを妻として得ながら、レンブラントは三十代の半ばごろから、肖像画家たることをみずから捨て——たとえ描いても、「夜警」のごとく、モデルとは似ても似つかぬ、自分の芸術世界の中の人物像として描き——それより聖書の物語の銅版画を描くことに熱中したために、彼は次第に絵の注文者を失い、晩年は破産状態になり、ユダヤ人地区の貧しい家で、一六六九年十月三日ないし四日にみとる人もなく一人で死んだ。

しかし死後、彼が十七世紀オランダ最大の画家であったことが認められた。

徳川綱吉（一六四六——一七〇九）

オランダでレンブラントが死んだとき、綱吉は二十三歳で、まだ館林藩の藩主であったが、その後五代将軍となったのは世の知る通りである。

宝永五年十二月二十五日に将軍綱吉は、護持院隆光らの僧を召しよせて歳暮の祝宴を張り、みずから仕舞まで舞ったのに、その翌日から風邪気味となり、あけて宝永六年一月三日から麻疹を発疹しはじめた。当時江戸には麻疹がはやっていた。

綱吉みずから調剤の指図をした結果、八日には病勢が回復に向ったように見え、九日には快気祝いをする運びにまでなった。

しかるに十日午前六時ごろから下痢腹痛を訴えはじめ、厠へいって戻り衣服を改めているうちに、彼はフラフラと倒れかかった。お伝の方など愛妾たちがうしろから抱きかかえ、あわてて寵臣柳沢吉保を呼んだ。吉保が駈けつけ、二、三語交わす間もなく、綱吉は息をひきとった。

彼は小児時代の免疫をまだ得ていなかったのであろうか。それにしても大人で麻疹で死ぬとは珍しい症例だ。

一ト月たたぬ二月九日、綱吉の正夫人もまた急死した。そこで太宰春台の書くところと伝えられる『三王外記』は、綱吉が柳沢吉保の子、吉里——実は綱吉が、吉保の愛妾お染の方に生ませたものという——に、百万石のお墨付を与えようとし、それをとめようとした正夫人が綱吉を殺害し、また自分もあとを追って死んだのだ、という推理を持ち出した。

ノーベル（一八三三——一八九六）

ニトログリセリン爆薬を皮きりに、ついにダイナマイトを発明し、工業化し、大富豪となったスウェーデンのノーベルは、その莫大な富による幸福を——慈善事業をもふくめて——いかんなく満喫する晩年を過したが、一方でリューマチの持病をどうすることもできなかった。

そして六十歳のころからリューマチはいよいよ高じて、心臓に障害を起しはじめた。

一八九六年十月、彼はパリを訪れたが、そこで友人に手紙を書いた。

「私の心臓病に対する適当な治療法が見つかるまで、私はパリに滞在していなければなりません。皮肉なことに、医

師は私の内服薬としてニトログリセリンを処方に使っています。けれども彼らは、世間を驚かせないためにそれをトリクチンと呼んでいます」

ダイナマイトの原料であるニトログリセリンは、血管をひろげる作用もあって、現代でも狭心症や心筋梗塞の妙薬である。

十二月七日には、彼の研究所所員ソールマンに励ましの手紙を書いたが、これが化学者として最後の手紙になった。

「あなたの送ってくれた見本はなかなかよろしい。この純粋なニトロセルローズ火薬の出来ばえを見て、私はまったく満足しました。運悪くただいま身体の調子が非常に悪いので、この二、三行の手紙さえうまく書けませんが、出来るだけ早く健康をとりもどして、また私たちの興味ある研究にとりかかりたいものです」

それから三日目、彼はまたはげしい心臓発作を起して、十二月十日に死んだ。

日本では明治二十九年、樋口一葉が死んだ年である。

死の数年前、彼の兄が死んだとき新聞に「死の商人、火薬王ノーベル死す」と誤報された。ノーベルはこれにショックを受け、自分の財産の利子を「人類最大の幸福に貢献した人に贈る」ノーベル賞制定を発起したといわれる。

彼の死後五年目の一九〇一年に第一回の受賞者が発表されたが、その物理学賞はレントゲンに与えられた。

ドヴォルザーク（一八四一――一九〇四）

「新世界から」「ユモレスク」その他によってチェコの国民的作曲家となったドヴォルザークは、一九〇一年プラハ音楽院長に任ぜられたとき、祝福の声をあげて集まった市民に、はじめは感激の涙をながして窓際で手をふっていたが、いつまでも歓呼の声がやまないので、とうとう「もうヤメロ！」とどなったくらいのカンシャクもちであった。

血圧の高い人物であったのかも知れない。

それから三年後の一九〇四年五月一日、かなり長い風邪がやや回復したので、彼はベッドから起き上って部屋を一周し、やがて昼食をとりはじめたが、異常に食欲がすすみ、たちまちスープ一皿を平げた。その直後彼は、「頭がグルグルまわる！」とさけんで、椅子の中に落ちこんだ。

顔が蒼白となり、次に真っ赤になり、妻と息子に何か話しかけたいようであったが、理解出来ない声がのどからほとばしるだけであった。

脳出血であった。昼過ぎに彼は死んだ。

ストリンドベリ（一八四九――一九一二）

ストリンドベリは先天的に精神分裂病の素質を持ち、生涯それが時には平静になり、時には昂進しつつ、断続して経過した。彼の傑作といわれる『女中の子』『痴人の告白』『死の舞踏』をはじめ数々の作品は、精神分裂病特有の嫉妬妄想、追跡妄想の産物であるといわれる。

それゆえに、驚嘆すべき文豪としてスウェーデン国民の尊敬を受けながら、彼は三たび結婚して三たび別れ、晩年にはほとんどの友人と絶交し、孤独の氷の中に自分を閉じこめた。

一九一一年雑誌記者のネクセーは彼を訪問しようとした。

「私はストリンドベリに会うのは難しいことを知っていた。彼は独りで生活し、二、三人の親友としか交際しない。ほとんどだれもが彼の住所を知らない」

彼は苦労して住所を探しあてた。「私は彼を訪ねた。標札はなく、呼鈴の紐ははずしてあった。私はドアを三度ノックして待った。少したって、地上一メートルの高さにある郵便函のふたがあけられ、眉の白くなった眼が見えた。これでこの偉大なスウェーデン人に腰をかがめさせたわけだ、と思い、名刺をさし出して見せた。

ついで、長い時間がすぎた。孤独な詩人が扉の向う側でいろいろ考えて、迷っているのがわかった。……ついに扉をひらき、ストリンドベリが現われた。彼は鋭い眼で私を見て、低い声で、『私は病気だ。いまのところ、何も仕事はしていない』といい、私が内へはいれないように戸口に立ち、深い猜疑にみちた顔つきで私を凝視した」

こういう状態で、その翌年の五月十四日に彼は死んだ。しかし死因は胃ガンであった。

乃木希典（一八四九――一九一二）

明治四十五年九月十三日午後八時、明治天皇の霊柩は二重橋を出て、青山練兵場内の葬場に向った。品川湾に碇泊する第一艦隊の撃ち出した弔砲は、遠雷のごとくひびいていた。その弔砲を聞きつつ、赤坂新坂町の自邸で、乃木大将とその妻静子（五十六歳）は自刃した。

遺書。

「自分此度御跡を追い奉り自殺候段恐入候儀其罪は不軽存候。然る処明治十年役に於いて軍旗を失い其後死処を得度心掛候も其機を得ず……折柄此度の御大変何共恐入

候次第茲に覚悟相定め候事に候」

『乃木大将夫妻死体検案始末書』より。

「将軍ノ遺骸ハ（中略）稍斜ニ東方即チ御真影ノ方ニ向ケ、左顳顬部ヲ敷物ニ接シ、軀幹ヲ右側半俯臥ノ位置ニシ、右脚ヲ展べ、左脚ヲ屈シテ俯臥セラル。

夫人ハ之ト相対シテ頭部ヲ正シク西方即チ次間ノ方ニ向ケ、両膝ヲ屈シテ坐シ、前頭部ヲ敷物ニ接シ、俯伏セラル。

将軍ノ足部ニ近ク軍刀ノ鞘アリ。夫人ノ左側ニ白鞘アリ。両遺骸ノ間及ビ将軍ノ右方一帯ハ鮮紅色ノ凝血ニ浸染セラルルコト約二尺四方、飛沫ノ散点スルコト更ニ右方即チ南方一尺余ニ及ベリ」

ただこの静子夫人の死については、自害ではなく乃木による無理心中ではなかったか、という重大な疑惑が残されている。そのいずれにせよ、結婚生活前半の姑寿子による異常な嫁いびりといい、夫の人間離れしたストイシズムといい、旅順戦における二人の息子の戦死といい、この凄惨な最期といい、近代において彼女ほど哀切な生涯を持った女性はまれである。

乃木大将殉死の報が全世界に伝えられたとき、「モスクワ郊外のモンクより」という名で香典が送られて来た。それはかつて旅順で戦ったステッセル将軍からであった。

森鷗外はただちに創作『興津弥五右衛門の遺書』の筆をとり「此再造の大恩ある主君御卒去被遊候に、某争か存命いたさるべきと決心いたし候」と、殉死する武士を描いて、乃木葬送の日に「中央公論」に送り、大正三年、夏目漱石は『こゝろ』で「乃木さんは此三十五年の間死のう死のうと思って、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人に取って、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだろうと考えました」と書き、志賀直哉は日記に「馬鹿な奴だ」としるし、大正十年に芥川龍之介は『将軍』で一青年の口に託して、「僕は将軍の自殺した気持は幾分かわかるような気がします。しかし、（自殺する前に）写真をとったのはわかりません。まさか死後その写真が、何処の店頭にも飾られることを――」と、書いた。

豊田佐吉（一八六七――一九三〇）

静岡の一大工から、明治二十三年、二十四歳で自動織機を発明して紡績業を大企業化し、後年のトヨタ自動車の基を作った豊田佐吉は、幼時から病気らしい病気も知らない、ただ仕事一途の頑健な男であったが、中年のころ好調な織機会社「豊田商会」が不本意に三井物産の系列に組みこまれ、しかもそれから業績不振におちいるや辞職を要求されるという事件以来、ひとから酒癖が悪いといわれるほどの大酒豪となった。その影響か昭和二年四月、六十歳で脳溢血を起し、言語と歩行に障害を起した。

その後いちどは軽快したが、翌三年十二月にまた発作を起し、以後慢性化し約二年ヨイヨイ生活を送ったのち、昭和五年十月急性肺炎を併発し、十月三十日午前十一時四十分に死去した。

巌谷小波（一八七〇――一九三三）

巌谷小波は青春時代、芝の料亭紅葉館の女中須磨と浮名をたてられる仲となったが、そのころ大雑誌社「博文館」の社長の息子大橋新太郎に須磨を奪われた。小波の師匠尾崎紅葉はこれに憤慨して、『金色夜叉』の物語を書いた。

しかし間貫一ならぬ現実の小波は、童話の大家として、また少年雑誌の編集長として、それ以前もそれ以後も、博文館の有力作家であった。

しかるに昭和二年、小波がアルス社から出した『日本お伽噺』の版権が博文館にあったため、社長の大橋新太郎から謝罪と賠償を要求され、小波は屈服のやむなきに至った。彼は憤激のあまり大橋の私生活を暴露した『金色夜叉の真相』と題する本を書き下ろし、それが千部出版されると同時に、睡眠薬自殺を計った。しかし自殺は未遂に終り、本は大半大橋に買い占められ、廃棄された。小波が五十七歳のときの事件である。

以後、彼は気力体力ともに衰えた。

晩年小波はお伽噺の口演旅行で生計をたてたが、昭和八年六月、広島県西条で腸閉塞を起し、手術されて脇腹に人工肛門をつけられて八月帰京した。このとき彼は直腸ガンにかかっていることが明らかになった。

帰京して一週間目に、人工肛門のふたがはじけて、糞が天井めがけて噴出した。

八月二十日、入院したが急速に衰弱し、脳も犯され、九月三日からは昏睡状態におちいった。四日の夜からシャックリをはじめ、夜を通してその声がぶきみにひびきつづけた。

五日朝八時二十四分、彼は息をひきとった。

子供たちへ、「財産はなし。ただ名のみを残すべし」と書いた遺書があった。

野口雨情（のぐちうじょう）（一八八二――一九四五）

昭和十九年一月、雨情は、軽い脳溢血で倒れたあとの病みあがりの身で、妻と八人の子供をかかえて、東京吉祥寺から栃木県河内郡姿川村鶴田に疎開した。

彼は茨城県磯原の生まれだが、すでに故郷を捨てていた。「おれは河原の枯れすすき……」「磯の鵜の鳥ゃ日暮れにゃかえる……」「紅屋の娘のいうことにゃ……」あるいは「十五夜お月さん雲のかげ……」「烏なぜ啼くの……」「赤い靴はいてた女の子……」「青い眼をしたお人形は……」「黄金虫は金持だ……」「しゃぼん玉とんだ……」「あの町この町日が暮れる……」「証　証　証城寺、証城寺の庭は……」「ソソラ　ソラ　ソラ、兎（うさぎ）のダンス……」など、多くの哀調をおびた歌や天真爛漫な童謡を生み出して満天下に愛唱された詩人も、印税制度の確立していない時代の上に、戦中無用な疎開者を白眼視する田舎での生活はみじめなものであった。

二十燭光の制限の家に四十燭光をつけているのをとがめに来た電気会社の係員が、一家が顔のうつるような雑炊をすすっているのを見て、気の毒さのあまり黙って帰っていったこともあったという。

雨情は、鶴田に来てからも脳軟化症のようになって寝たり起きたりしていた。ある日座敷にぼんやり坐っている夫に、風邪をひかないように夫人がうしろから羽織を着せようとしたところ、雨情は「死んでゆくのに羽織はいらない」といった。（長久保片雲『野口雨情の生涯』）

翌年の一月二十七日、彼はひっそりと寂しくこの世を去った。B29が日本全土に焼夷弾をまいてゆく空の下に、棺桶は荷車で火葬場に運ばれた。

ルーズヴェルト（一八八二――一九四五）

一九四五年二月、大戦終結後の東西勢力の範囲を決めるヤルタ会談に臨んだフランクリン・ルーズヴェルトを見た会談レセプション委員長ノリス・ホートン大尉はのちに記す。

「私が強烈な印象を受けたのは、大統領の顔つきであった。やつれ果て、しわのよったその顔は、はげしい疲労を反映していた。皮膚は灰色で血の気がなかった」

ルーズヴェルトの動脈硬化はすすんでおり、頭脳の働きはにぶり、ために彼はこのヤルタ会談において外交的にスターリンにまんまとしてやられたといわれる。すなわち、東欧をソ連の鉄のカーテンとする端緒をひらき、またそれまでの太平洋戦争の経過から日本との戦闘はなお一年半つづき、米軍の犠牲は少くとも百万を要すると判断して、ソ連軍の至急の参戦を請うという借りを作ったのである。

二カ月後の四月、ドイツは潰滅に瀕し、日本もまたB29の爆弾の雨下にあった。

十二日、ルーズヴェルトはジョージア州ウォーム・スプリングスにある「リトル・ホワイトハウス」と呼ばれるコテージで昼食後、従妹のミス・サックリーやミス・デラーノたちに囲まれて、革張りの肘掛椅子に坐って探偵小説を読んでいたが「きょうはあまり気分がよくない」と、いった。

その日彼は、ダーク・グレイのスーツ、チョッキ、赤いハーバード風の結びネクタイという服装だった。彼はチョッキも、結びネクタイもきらいだったのだが、この日は画家のシャウマノフ夫人に肖像画をかいてもらうのでこの服装をしていたのだ。彼女は部屋の一隅で描きつづけていた。

午後一時にルーズヴェルトは時計を見て、「あと十五分ある」とつぶやいた。

ミス・サックリーは編物をつづけ、ミス・デラーノが花瓶に水をさしている間に、彼は煙草に火をつけた。突然、左手でこめかみのあたりをおさえたが、その手がダランと垂れ下がった。

「何か落しましたか？」と、ミス・サックリーが尋ねた。

ルーズヴェルトは眼をとじたまま、小さな声で「ひどく頭が痛い」とつぶやき、がっくりと頽（くずお）れた。午後一時十五分であった。

すぐに大統領専属軍医ブルーエン中佐が駈けつけ、脳溢血の診断を下した。ルーズヴェルトは荒い呼吸をし、脈搏は百四もあり、血圧も三百を超えていた。

やがてアトランタに住む前アメリカ医師会長ジェームズ・ポーリン博士が呼ばれた。ルーズヴェルトは冷汗をながし、顔面蒼白で、呼吸困難のようすであった。ポーリン博士はアドレナリンを注射した。心臓は二、三度鼓動を打ったが、すぐに永遠に停止した。午後三時三十五分であった。

ルーズヴェルトの死がベルリンに伝わったのは、ドイツでは四月十三日の夜だった。宣伝省の防空壕にいたゲッベルスは、狂喜してヒトラーに電話した。「総統閣下、おめでとうございます！　ルーズヴェルトが死にました。例の占星図には、四月に転機が訪れるとありましたが、今日は

四月十三日の金曜日です。運命の女神が総統の敵を打ちくだいたのです！」
　しかし彼もヒトラーも、その四月の終りには死ぬことになる。

藤原審爾（ふじわらしんじ）（一九二一——一九八四）

　作家藤原審爾は死の六年前の昭和五十三年秋に、『人生哀歓あり』と題して、次のような文章を書いた。
「肺疾をはじめの病いで、十二年ばかりも寝て暮し、いまは肝硬変、糖尿病、心臓肥大、腎臓も一つこわれているので、五年ばかり前に医師からあまり先のことは望めませんよと言われたりしたが、まだどうにか生き、新たな年を迎えられそうである」
　娘は女優藤真利子として世に出たばかりであった。
「もともとわたしは、女優などという職業が好きでないゆえ、こまったことだと当惑していたのだが（中略）わたしの躯（からだ）がこんな具合なので、わたしが死ねば大変だぞ、生きている間に自活出来るようになれと、よく言うのである。それはただのはげましなのだが、その薬がききすぎ、わたしの子は必死なのである。テレビを見ていて、親は泣いたのである」
　六年後も彼の心情は同様であったろう。彼をたおしたのは、結局肝臓ガンであった。昭和五十九年入院してからの彼の姿を、娘の真利子は記す。
　ある夜。「父の唸り声で目を覚（さ）ます。痛くて、痛くて、午前一時には、腹水が溜って大きくなったお腹を抱えながら起き上がる。父は、腫れたお腹を、妊婦が生まれてくる我が子を見るように、いとおしく見つめていた」
　またある夜。「電気を消すと、父の低い唸り声が、部屋中の物を震動させる。父のベッドから始まって、私の補助ベッド、電気スタンドや、応接用のテーブルや椅子、台所にあるお鍋まで、カタカタ鳴ってる気がした。私は悲しくて眠れない」
　十一月にはいると、藤原は病院食も受けつけず、果物かシャーベットくらいしか食べなくなり、十二月二十日午前四時十三分に息をひきとった。
　真利子はいう。
「偉大なる御父上様、あなたの可愛い末娘をこの世で一番苦しめたのは、あなたと、あなたの病気だということを御存じでしたでしょうか」
　友人の俳優垂水悟郎は書く。

「病院から遺体を家の広間に収め、その棺の中の黄青色の顔色に、私はなくなる前の数日のすさまじい死との闘いに思いを廻（めぐ）らした。——いけない、この顔は、三十数年おつき合いした藤原審爾の顔色ではない。……（中略）私は家内に電話して、すぐ、私のドーラン化粧を持ってくるように命じた。
　あの前日、私の掌の中で悶絶していた藤原さんとは別人の如く安らかな顔に、ドーランパレットを手にした私は、叮嚀（ていねい）に薬指と人指し指で化粧をほどこした」

六十四歳で死んだ人々

> 昔の死は、人が、死にゆく人物を演技する喜劇的な悲劇であった。今日の死は、人が、自分の死ぬのを知らない人物を演技する悲劇的な喜劇である。
>
> ——フィリップ・アリエス——

小林一茶（こばやしいっさ）（一七六三——一八二七）

　十五歳で江戸に奉公に出され、四十九歳で故郷信州柏原（かしわばら）に帰って来た一茶は、俳句の世界から外に出れば、金銭的にも性欲にも、エゴイズムと強欲の化身（けしん）であった。

　　古郷（ふるさと）やよるもさはるも茨（ばら）の花

と詠（よ）みながら、三十五年間彼が故郷を捨てていたあいだ働きつづけた腹ちがいの弟の財産を半分とりあげ、文化十

一年、五十二ではじめて妻を迎えると、常人には彼の露悪癖の現われではないかと疑われるような記録を残す。

その文化十三年一月の日記。

「十五（日）晴。三交。
十六　晴。三交。
十七　晴。夜三交。
十八　晴。夜三交。
十九　晴。三交。
廿　晴。三交。
廿一　晴。四交」

半生の苦労のために彼は四十歳で白髪になり、五十歳までに歯はすべて抜け落ち、結婚後も、癰、瘧、疝気、疥癬などを相ついで患いながらこの獅子奮迅ぶりである。雀の子そこのけそこのけ一茶が通る。

あかん坊は次々に生まれたが、次々に死んだ。

長男発育不良二十八日、長女痘瘡一年二カ月、次男母親の背で窒息死九十六日、三男栄養失調一年九カ月。そして妻は疲労困憊のためか、癪と精神神経症を起して三十七歳で死んだ。一茶は六十歳になっていた。

すでに彼は五十七歳の秋、千曲川沿いの雪道でころび、そのひょうしに中風を発していちじ半身不随、言語障害を起している。

　夜の雪しんしん耳は蟬の声

高血圧のために、彼は耳鳴り症状に悩まされていたのである。

それなのに彼は六十二歳で再婚し、離婚し、そのあと善光寺の門人の家でまた中風を起した。

彼みずから書く。

「ふと舌廻らぬやまいの起りて、みな手まねして湯水を乞いつつ、さながら唖のありさまなり」

にもかかわらず、彼は六十三で三度目の妻を迎える。

翌文政十年九月、不自由の身体を駕籠に託してあちこち菊見に出かけ、十一月八日に帰宅したが、十九日から気分が悪くなり、その日の午後五時ごろに亡くなった。三度目の発作を起したのである。

そのとき妻は懐胎中で、一茶としては五人目の子供は、彼の死後に生まれた。大変な中風人間である。

柏原の野山にはすでに雪が深かったろう。

　これがまあつひの栖か雪五尺

ペルリ（一七九四——一八五八）

ペルリ提督は一八五八年三月四日、心臓リューマチで死んだ。黒船で日本をおどしてから四年目であった。

幕末にもっとも日本をおどしたのは、アメリカのペルリとイギリスのパークスだが、どちらも心臓リューマチで死んだのは一奇である。

ペルリが死んでから二年後の万延元年、日本の遣米使節一行がポーハタン号でアメリカを訪れたが、ニューヨークで一行はペルリ未亡人のところへ挨拶にいった。

副使村垣淡路守の日記を現代文で書けば——

「六月二十六日　曇（華氏）八十二度。

午後二時からペルリの聟ベルモントのところへゆく約束だったが、その前にペルリの後家を訪ねたらとのことで、そちらに立ち寄ってみると、美しい四階建ての家である。当主はペルリの息子だが、海軍軍人なのでいま航海中で留守だという。後家は温和で上品な老婆である。ねんごろにもてなしてくれ、娘や孫など出て来て挨拶した。家には、日本に来たとき幕府から頂戴したものや買って来たものなどが飾ってある。ペルリは日本の鎖国を開いて条約を結んだ大功があるので重く賞されたが、三年前に死んだという。このたび日本使節が来たのもペルリの功によるものだと、このごろまたペルリの名がもてはやされるようになったそうだ。今度はからずもこの国に来て、もし提督が生きておいでになったらといったところ、老婆は涙ぐんで言葉も出ないようすであった」

まるで日本がペルリに何か恩恵を施してやったかのような書き方が可笑しい。

——ペルリの来航は、要するにアメリカの中国貿易と捕鯨の基地として日本の港を欲したからであったが、百余年後、アングロサクソンは、日本人による捕鯨反対のリーダーとなった。彼らの必要性、不必要性が、その時の世界の掟となる。もっとも、ペルリはユダヤ人であった。

ブラームス（一八三三——一八九七）

ブラームスは「音楽史上まれにみる友情」を捧げていたシューマン未亡人クララが、一八九六年五月二十日、脳溢血で危篤におちいったと聞いて駈けつけたが、動顛して汽車をまちがえ、クララの臨終に間に合わなかった。

その悲しみのためか彼は急速に衰え、十カ月後の三月二

十六日からベッドを離れることが出来なくなった。そして四月三日午前九時少し前に死んだ。病名は肺ガンであった。

ベルツ（一八四九——一九一三）

明治九年、二十七歳で来朝して、東京医学校（後の東京帝国大学医学部）で教え、皇室の侍医となり、日本医学をドイツ医学一辺倒とする基を作ったエルウイン・フォン・ベルツは、一九〇六年（明治三十九年）ドイツに帰国した。

一九一二年（明治四十五年）明治天皇の病気と死を知ったとき、ベルツ自身、当時は不治の動脈瘤に冒されていた。彼はみずからその予後について記した。

「処置——遺憾ながらほとんど徒労である」

翌一九一三年（大正二年）八月三十日夕刻、彼は窓辺によりかかって、もう秋を思わせる故郷スツットガルトの風景を見たのち、自分のレントゲン写真を持って来るように命じ、その写真を眺めて息子のトクに微笑していった。

「これで死ぬときは、たいていは非常に苦しんで、しかも吐血を伴うものだ。もっとも、急に来ることもある。しかし私は今まであまり運がよすぎたから、いまさら苦しまないで死ぬことまで望むのは虫がよ過ぎるだろう」

トクは、ベルツの日本人妻花との間に生まれた長男であった。

その夜発作で眼をさまし、注射でそれを鎮めてから、先日書いた『明治天皇をしのぶ』という文章の末尾を口述筆記させた。

「……そして彼（明治天皇）の生涯が珍らしい幸運に恵まれていたように、彼の治世は、その国家にとって稀に見る幸運の時代であった。後世の日本人は、おそらく彼の姿に後光を描くことであろうが、とにかく日本が近世の世界史に仲間入りしたこの新しい時代は明治天皇の名前と結びつけられているのである」

そのあと彼は眠りについたが、翌三十一日、日曜日の朝。

——妻の花は日本の知人への手紙に書く。

「……日曜日の朝は常に皆々緩りと致すが常故鳥渡心をゆるせし内に、八時十七分前に至りハッと致して見しに様子が変にて、二タ声許り呼びしが返事なく、悴を呼びて三声目に水を口に入れしに其時は最早脈も切れ居候。（中略）当人も常々申し候には最早生命は無き者と致し居れど、腹中にて腫物破れしなれば、其時の苦患いかばかりか今より思われると、一日一時其をのみ苦に致居候いしが、終焉の日は当人反って満足の事と存候」

ベルツの生涯は、日本の明治とともに終ったのである。

与謝野晶子（一八七八——一九四二）

「妻をめとらば才たけて
顔うるはしく情けある……」

と、夫鉄幹が歌った通りの与謝野晶子であったが、その鉄幹との間に彼女は十一人もの子を生んだ。

「堺の街のあきびとの、旧家をほこる」家から走って身を投げこんだ鉄幹との結婚生活の間、洗うような貧乏のし通しであった彼女は、昭和十年に夫を肺炎で失ってから後も、たくさんの息子や娘たちを結婚させるのに心労のし通しであった。

その間も、晶子はおびただしい歌を作り、いわゆる与謝野源氏その他の著作を書き、若き日、鷗外がたたえた「晶子曼陀羅」の盛名を落さなかった。

人は貧しくとも絢爛たる生涯を持つことのできる見本である。

が、このたおやかで偉大な女性も、それゆえに世の常の女性よりも燃えつきる日が早く来た。昭和十五年五月六日、杉並区荻窪の自宅の風呂場で脳溢血を起してたおれたのが、六十二歳のときである。

以来彼女は左半身不随となり、静養につとめたが病状はとみには回復しなかった。

そして昭和十七年の新年早々狭心症の症状も現われ、全身の機能衰え、五月十八日尿毒症を併発して意識不明となり、同月二十九日午後四時三十分息をひきとった。

明治三十七年、晶子が二十六歳のとき「君死にたまふことなかれ、旅順の城はほろぶとも、ほろびずとても、何事ぞ」と歌ったときから四十年近く……彼女が死んだ日は、ミッドウエーに向って日本の主力艦隊が出撃した日であった。

死せる晶子は美しく化粧され、彼女の好んだ紫の裾模様を着せられて棺に横たえられた。葬儀に参列した詩人堀口大学は挽歌を捧げた。

紫のゆかりの色の衣かつぎ
ねむりておはす少女のやうに

東条英機（一八八四——一九四八）

敗戦直後の昭和二十年九月十一日、自決をはかって失敗した東条は、東京裁判にかけられるや検事キーナンの訊問

に一歩もゆずらず反論した。その弁明で、自分が天皇の御意見にそむくことなど絶対にあり得ないことを力説すれば天皇に責任が及ぶことになるが、それを鋼線の刃渡りのようなきわどい芸当で彼は切りぬけた。死刑は最初から決定していた。

彼は、昭和二十年八月十五日までの「日本の論理」を述べたのだが、連合国側の裁判官はもちろん、八月十六日以降突然変異を起したすべての日本人がその論理を認めなかった。

二十三年十一月十二日、ウェッブ裁判長から「デス・バイ・ハンギング」(絞首刑)と宣告を受けたとき、彼はニコリと口角を崩して微笑し、イヤホーンをはずした。そして傍聴席の家族や旧部下にちらっと眼をむけると、法廷のドアから姿を消した。

彼はそのあと、同じく巣鴨拘置所に収容されていた部下佐藤賢了中将に、「自分は国民から八つ裂きにされても然るべきところ」と語り、また、「自分は永遠に歴史の上で罵りの鞭を受けるだろう」と語った。

しかし太平洋戦争の最大の責任者は彼ではない。彼以下でない責任者はほかに幾人もいる。

十二月二十三日午前零時、巣鴨拘置所で刑が執行された。

東条はかねてから獄中で「一杯やりたいですな」と冗談をいっていたので、処刑の直前コップ一杯ずつの葡萄酒を飲ませられて大変なごきげんであった。そして松井石根大将に音頭をとらせて、「大日本帝国万歳」を三唱した。

その声の余韻が消えないうちに、刑場へのドアがひらかれた。

東京裁判で、ただ一人、東条は勝ったのではあるまいか。

ところで、当時の巣鴨拘置所所長アーサー・ベル大佐が戦後妻フロレンスに語ったところによれば、東条は処刑前日、トイレットペーパーをコヨリにしたひもで、独房の中で縊死しようとしたのを発見され、このまま死なせてくれといって男泣きしたという。「彼は処刑される前に、武士らしく自決したかったようだ」と大佐は語ったという。
(昭和五十八年七月十三日「朝日新聞」)

なお東条が逮捕されたときの米軍の記録カードによれば、身長五フィート四インチ、体重百三十ポンドとある。

すなわち約百六十三センチ、五十九キロで意外に小柄な人物であった。

尾上菊五郎・六代目(一八八五——一九四九)

名優六代目菊五郎は青年期以後病気を知らない健康を誇っていたが、さすがに戦争中の生活によって衰えを示し、昭和十九年ごろから血圧は時に二〇〇近くあがることがあった。しかしべつに身体をいたわることもなく舞台をつとめた。

昭和二十二年三月、名古屋の中京劇場の楽屋で、鏡がでこぼこだとかんしゃくを起したのが視力に異変のあった最初で、診察の結果、腎臓病から来た高血圧であることが判明した。それで一ト月休んだが、それ以後も、時に血圧が二二〇に達したり、踊りを踊っているとき足が上らないのを自覚したりしながら、依然として出演をつづけた。

昭和二十四年三月三十日、菊五郎は芸術院会員として皇居に招かれ、天皇との陪食の席に列した。他に中村吉右衛門、坂東三津五郎、喜多村緑郎、宮城道雄、谷崎潤一郎らも同席した。この日、白羽二重の襦袢の襟もあざやかに宮内庁の玄関に現われた菊五郎の颯爽たる姿を、安藤鶴夫は記者として、「輝くほどの美男である。あの日の六代目の日本一の男前は、生涯忘れることが出来ない」と書いている。

それから六日目の四月五日から菊吉合同で、東京劇場初日がはじまり、菊五郎は「寺子屋」の松王丸、「加賀鳶」の梅吉と道玄を演じた。六日が二日目で、偶然その日を観た劇評家戸板康二は、いちじの菊五郎より潑剌としているように見えた、といっているが、これが菊五郎の最後の舞台となった。

その夜、夜中に頭痛を訴え、朝になって医者を呼ぶと、血圧が二四〇あり、眼底に出血があったらしく、視力が悪化していた。

爾来、療養中も、医者の顔を見れば、「先生、いつ舞台に立てるんですか」と訊くのが癖であった。「寺島幸三(本名)で生きていたってしょうがねえ」とも、つぶやいた。

七月三日から食欲を失い、四日いちど意識を失った。尿毒症を併発したのであった。

七日に元支配人が来て枕もとで泣くと、菊五郎は薄目をあけて、「まだ早いよ」といった。

舟橋聖一の『尾上菊五郎』によると、九日、菊五郎は、突然桃屋の花らっきょうが食いたい、といい出した。東京劇場の斎藤支配人は銀座へ飛び出して探しまわったが、当

時のことと容易に見つからず、やむなくべつのびん詰らっきょうを買って来て、皿にのせて出した。菊五郎は一口食って、「これは桃屋のじゃあねえ」といった、という。

十日午前十時ごろ千代夫人が泣くと、「お前は覚悟が悪い。いくら泣いたって咆えたって、おれの寿命はきまってしまったよ。ゆくところへゆくんだから、お前たちはワサワサしちゃいけないよ」といい、「静かにしなければ駄目だ。いいかい、いいね」といったのが、最後の言葉だった。

そのまま彼は大きないびきをかきはじめ、何の苦しみもなく、十二時三十六分息をひきとった。

戒名は彼がみずからえらんだ「芸術院六代尾上菊五郎居士」という人を喰ったものであった。死後に文化勲章が贈られた。（戸板康二『尾上菊五郎』より）

岸田国士（一八九〇――一九五四）

一般には『暖流』で知られる岸田国士は、昭和二十七年三月、脳動脈硬化症状を起して入院し、五月に退院し、以後静養の結果、外見では快癒したように見えた。

二十九年二月にはいって、彼は文学座の「どん底」の舞台稽古を神田一ツ橋講堂ではじめた。

それは一日平均八時間にも及ぶ烈しいもので、その上、彼は文学座近くの上野池之端の宿に帰っても深夜まで執筆する生活をつづけた。

初日を翌日にひかえた三月四日午後二時過ぎ、昼食のサンドイッチとコーヒーをとっている途中、彼はむせこみ、気分が悪いといって、自分が稽古の指揮をとっていた客席に横になった。脳溢血を起したのだ。

医者が呼ばれ、岸田の背広の袖を鋏で切って血圧を計りながら、「頭が痛みますか」と訊いたが、岸田が返事をしなかったので、娘の今日子が同じ問いを繰り返すと、

「死ぬ前にはこうなるものさ。ルカのせりふにもあるじゃないか、死ぬ前にはこうなるものさ」

と、軽い調子で答えた。

文学座の俳優たちは、かつらをかぶり、衣裳をつけ、ドーランを塗ったまま、担架で岸田を救急車に運んだ。文学のほうの弟子の古山高麗雄もいっしょに乗りこんだ。

「君はだれ？」

と、岸田は訊き、古山が手を握って名乗ると、

「古山君か、そうか」

と、いっているうちに、嘔吐しはじめた。古山はそれを両掌で受けた。

東大病院に着いたのは午後四時ごろであったが、嘔吐はつづき、五時半ごろショック状態を起し、以後病状は刻々に悪化し、雪ふりしきる一夜が明けた五日午前六時三十二分、息をひきとった。（古山高麗雄『岸田国士と私』より）

大河内伝次郎（一八九八――一九六二）

「シェイは丹下、名はシャゼン」で一世を風靡した剣劇俳優大河内伝次郎は、その莫大なギャラを、一生かかって京都小倉山の山荘に投入する以外、これといった道楽もなく、実生活はきわめてまじめな仏教信者であったが、昭和三十七年一月ごろから体調が悪くなり、七月十八日午前九時十五分、右の山荘で死去した。病名は胃ガンであった。

昭和期の時代劇のいわゆる「御大」たちは、ふしぎなことに惜しい俳優順に死んでいった。

三好達治（一九〇〇――一九六四）

「この、酒で死んだといってもいいような詩人の場合にも、その酒がうまいから飲むのではなかった。うまいと思って飲んだことはない、とも言っていた」

と、友人の俳人石原八束は語る。

三好達治は低血圧症と狭心症の持病があって、酒がはいると元気になれ、かつ安らかに眠りにつけるからであった。

昭和三十九年四月三日午後三時ごろ、三好は外出先から帰ると不快を訴えて書斎にひきこもったが、夕方、紅茶にウイスキーをいれて飲み、倒れた。医者が呼ばれて手当をした結果、夜中の一時ごろには平静に戻った。

翌日も、目覚めたときも気分はよさそうであったが、九時ごろになって、突如また強度の狭心症発作を起し、午後病院へ運ばれた。途中パトカーに逢い、パトカーに先導してもらって、田園調布中央病院へ急送された。

車の中で、蒲団にくるまれたままグッタリしていた三好は、病院で酸素吸入その他の手当を受けて意識をとり戻すと、苦痛のため高い声をあげ、あらあらしく手足を動かしはじめた。

以下は石原八束の記録による。

「（午後）十時。詩人が突然荒々しいうなり声を発してのけぞる。ケイレンである。つかまえた詩人の胸がガタガタふるえている。呼吸が止まっている。顔や首のあたりが青白く変ってゆく。医師が飛びこんでくる。院長もくる。口を閉じてしまわないようにガーゼを巻いた開口器を急いで

歯にかませる。間もなく――間もなくではない、時間にして一分位だろうか、同じようなうなり声をたてて息をふきかえす。詩人を抱いた自分の腕までガタガタふるえている。詩人は息をふきかえしたのに、このふるえは中々直らない。息をふきかえした詩人は素人の目にも様子が一変している。医師に場所をゆずって後へ下る。とり囲まれた詩人の顔の一部、耳など仮死の色がさしている。二度目の脈搏の結滞はそれから二十分くらいして起る。危機は深まるばかりだ。十一時までそれからまた一度。五十秒くらいかからないと息をふきかえさない。口を食いしばり、顔面が青く変ってきても五十秒は長い。右手で喉の下の襟首を持上げるようにし、左手で横隔膜のところをおさえると息をふき返す要領を家内が教えてくれる。詩人は脳軟化症を起したのではないかと思われるようないびきをたてて、こんこんと眠りはじめる」

「十二時、詩人はこんこんと眠る。顔その他の血色もよくなる。三十分に一度くらい鼓動が止る。詩人の鼓動に無意識にあわせているこちらの鼓動までがぎくりとして、ベッドに近より息のふき返すのを待つ。そのことの繰返しが一時半ごろまで続く」

「やがて東の窓を紫に染めて夜が明けて来た。その紫色の窓ガラスに写った詩人の顔は、次第に死色を濃くしつつ、外の明るさの中に消えていった。消えた窓の向うに、満開の桜の花が浮びあがるようにあざやかに咲き盛っていた」

死亡は四月五日午前八時であった。

春の岬旅のをはりの鴎どり
浮きつゝ遠くなりにけるかも

山本周五郎（一九〇三――一九六七）

山本周五郎は、元来自分でも「踏み殺しても死なないだろう」と笑うほど頑健な身体を持ち、その上うるさいほど健康には一家言を持っている人であったが、六十一歳のとき、昭和三十九年の暮に、横浜本牧町の仕事場にしている間門園から外出しようとして石段を踏みはずして転がり、肋骨を二本折って入院するという出来事があって以来、急速に衰弱した。

「晩年は、体のぐあいは、とにかくよくなかったのです」

と、きん夫人は語る。

「亡くなるすこしまえ――といっても『ながい坂』を書いているときのことですから、昭和四十年でしたか四十一年の初めごろのことでした。

『ぼくは、かあさんと結婚するときに、日本一の作家になってみせると約束したが、どうも、とうとう日本一になりそこなったらしい』

そんな心細いこと、なんと思ったか語りかけるんです」

そのころ周五郎は雑誌社から送ってきた十万円の小切手を「かあさん、これは大事な金だ。これを必ず貯金しておきなさい」と、ものものしく渡した。一晩に料亭で何十万円も浪費する周五郎がである。夫人はいう。「そういうふうに、お金に対する感覚も、いよいよ亡くなる前の一時期には、ズレてきていました」

「そういう、なにもかも最悪の状態で『おごそかな渇き』にかかったのでした。

そのころは、もうすっかり痩せてしまっていて、ひところは二十貫もあった体が、腰のまわりも、すっかり可哀そうみたいに肉がおちてしまっておりました。……帯をしめても、腰の肉がおちちゃってますから、ずり落ちてしまう。それをまた、自分でも気がつかない、というふうになっていました。……顔もすっかりおじいさんの顔になって、老衰みたいな感じです」

『おごそかな渇き』は、昭和四十二年一月から「朝日新聞」に連載がはじまっていた。彼はこの作品を、「現代の聖書を書くつもりだ」といった。

しかし周五郎は右のごとき体調で、そのためいくどか、どうか休載させてくれないかと訴えはじめた。担当の記者門馬義久は、これを励まし励まし書かせた。

二月十三日午前十時ごろ、おりからの大雪の中を門馬記者が原稿をとりにゆくと、山本は、「原稿は出来ていない。かんべんしてくれ。ここ二、三日眠れない。腹はへってるんだが食欲がないんだ」と、泣きそうな表情でいった。顔はむくみ、眼は真っ赤だった。そして、「人間は機械じゃない、生きものだ。小説は生きものがやっている仕事だ」と、いいわけのようにつぶやき、水割りのウイスキーをなめ、窓外の雪を眺めて、「これがおれの雪の見納めかも知れん」と、いった。

しばらくして、疲れたから失敬させてもらうよ、と隣のベッドのある三帖の部屋にゆこうとし、門馬記者たちに抱きかかえられるようにしてベッドに倒れこんだ。

夫人は語る

「そして門馬さんたちが帰られたあとで、自分で立ってトイレに行く、と言うんです。とても大儀そうな様子なので、ついて行こうとしますと、『それだけは、かあさんの世話になりたくない』と言って頑張りました。そしてトイレに

はいったのですが、あまり長く出てきませんでしたので、様子を見にゆきますと、トイレの中でたおれていました」
　そして翌十四日午前二時過ぎ、夫人に呼吸が困難になったことを告げ、うわごとのように「山へ……」といった。それはいま書いている小説の取材として飛驒あたりの山へゆかなければならない、と言っていたことが頭をかすめたのか、あるいはふだんから山本は、死ぬならひとり、どこか雪をかぶった山で死にたい、ともらしていたというその望みからであったか。
　午前四時ごろ、かかりつけの女医が来診し、すぐに強心剤を射とうとした。山本は「注射？　無駄だよ」といった。
　朝になって、雪晴れの光の中に、七時十分、彼はのどを、ごっくん、と一つ鳴らしただけで息をひきとった。その遺骸に夫人は、万年筆をのせてやった。病名は肝炎と心臓衰弱であった。
　曲軒という異名を持つ夫によく仕えた夫人は、キッパリという。
「わたくしとすれば、心残りは全然ないんです。もう、主人に言われるとおりに、永いことやってきましたでしょう。だから、ああもしてやりたかった、こうもしてあげたかった、という後悔はありません」（清水きん『夫　山本周五郎』、木村久邇典『人間山本周五郎』より要約）

伊藤　整（一九〇五――一九六九）

　伊藤整は昭和四十四年二月ごろから、自動車に乗ると吐いたり、便秘や血便の症状があったが、彼はその重大性に気がつかなかった。
　しかし四月二十八日ついに倒れて床についてから、その憔悴ぶりが甚だしいので、妻が、いやがる彼を説得して神田の同和病院に入院させ、診断の後、五月十一日、開腹手術を受けた。手術後、医者は「非常に残念なことを申しあげます」といい、多分胃に発生したガンがいまや肝臓、直腸をはじめ腹腔一杯にひろがっていて、もう手のほどこしようもないことを家族に告げた。
　家族はこのことを整に秘した。
「手術後、一週間くらい父は苦しんだ。ベッドから転げ落ちるほどの苦痛に耐えた」
　と、次男の礼は書く。
「父の苦しみが極まり、強く折檻された犬が最後に悲鳴もあげ得なくなったときのように、父がただ顔を歪めるだけになったとき、今まで若々しいと思っていた父が、一瞬にして老境におちこみ、苦しみをこらえる力も意地も失くし、ただ芋虫のようにベッドでのたうちまわっているように見えてきた。（中略）
　そのうちに私は、そうやって苦しんでいながら、父がじつはものすごく腹をたてているのだということに気がついた。鼻孔に酸素吸入のゴム管を押しこまれ、そのゴム管を頰に絆創膏で貼りつけられ、唇をからからに干からびさせ、腸のなかにもビニール管をさしこまれ、その先端からは四六時中じとじとと便がながれ出す。そのようなありさままさに芋虫のように身動きもできずに横たわった人が、ものすごく腹をたてているのだ。それは書斎から無理やりに引き離してしまった病に対する怒りだった」
　しかし六月になると、整はようやく体力を回復し、蝙蝠傘とステッキを家からとりよせて、少しずつ早朝の神田の町を散歩するようになった。しかし彼は妻や看護婦の同行を拒否し、時には道端にしゃがみこんだりしながら、ただ一人で歩いた。おだやかな相貌の下に、伊藤整は強い意志を持つ人間であった。
　七月にはときどき帰宅を許され、八月には退院した。しかし九月にはいると、また吐気と食欲減退に悩まされるようになった。
　十月十八日、彼は、明後日癌研附属病院に入院する決心がついたことを家族に伝え、
「おれは今度の病気では死なない。死なないが、癌かも知れない。そうだったらしかたないが、おれは癌ではないと信じている」
　と、いった。しかし、その夜彼は日記に書いた。
「貞子（妻）たち、決して癌でないというが、私は最悪を考えて、涙流れる。『年々の花』ひとつでもまとめたし。『発掘』『三人のキリスト者』それぞれ一週間必要、文壇史の三章（明治四十五年）書き足し、全篇の訂正は大事業にて、私がいま死んだら……」
　それは未完の長篇や、なかんずく十八年間書きつづけて来たライフ・ワークの『日本文壇史』への妄執であった。
　人は死に臨んで、多くはおのれの「事業」を一片でもあとに残そうとあがく。それがあとに残る保証はまったくないのに。――これを業という。
　十月二十日、整は癌研病院に入院した。
　十一月十三日まで、彼はトイレに一人でいった。病み衰えた顔に眼を大きく見ひらき、宙をにらみすえるようにして歩いた。
　しかし、その夕方から高熱と悪寒を発し、医者はひそか

に臨終の近づいたことを告げた。十四日、妻はあちこちに電話をかけ、見舞客が続々と駈けつけたが、整はだれにも会いたくないといった。

その日は苦しみぬくと、十分ばかりウトウト眠り、それがさめると二十分くらい苦しむという状態をくりかえしたが、夕方、主治医に、

「先生、もう死ンしてくンさい」

と、もつれた舌の北海道弁でいった。医者が聞きとれず聞き返したが、整は笑っただけで答えなかった。しかし、九時ごろになると、

「死にたくないなア」

といい、九時半ごろ、もういちど、

「死にたくないなア」

と、いった。

苦しみと眠りは十分おきになり、十五日の朝が来た。整はふいに眼をあけて、「いやな夢を見た」といった。死に瀕しても、人間の脳はなお悪夢を夢みる！

「昼ごろからのどに痰のからむような様子を見せはじめたので、私たちが綿棒や吸引器で取ってやろうとすると、上手に取れるように父が協力してくれるのが分った。三時四十分、父は昏睡におちた。そして、呼吸が止んだのは四時五十分だった」

と、礼は記す。

「父が亡くなったとき、スモッグのかかった東京の空に太陽がぼんやりとした赤い火の玉になって沈んでゆくのが見えた。（中略）『よく我慢して下さった』と、いつも無口だった主治医がいった」

高橋(たかはし)鉄(てつ)（一九〇七―一九七一）

日本性科学の悲壮なるパイオニア高橋鉄は、昭和二十九年、歌麿の浮世絵「願いの糸口」を覆刻して告発され、三十三年には病身を八王子の医療刑務所に拘禁されたが、屈せず最高裁まで争った。

が、十余年にわたる法廷闘争もむなしく、昭和四十五年には最高裁から罰金刑の判決を受け、その直後の四月、直腸ガンで北里病院に入院する羽目になった。

病院の医師河村栄二はいう。

「本人は、怖くないから本当のことを教えてくれといっていましたが、ガンとは教えませんでした」

高橋自身が書く。

「重篤なるポリープの由。精密検査の結果、診断発見され、手術台へ運ばれたり。〝飢えたソクラテス〟のごとく。われ全裸のまま横たわり全身麻酔、その心理過程を客観視せんものとは思いながらも昏睡状態に陥りぬ。『先生の抵抗(レジスタンス)もダメでしたね』と、のちに諸博士からかいけり。（中略）己がベッドに帰還し、『自由万才！』と叫びたりと。噫(ああ)、真の自由いずくぞや」

おしまいの言葉は、日本に性科学の自由のなかったことへの歎声でもあったろう。

彼は娘の郷子(きょうこ)に、「中にネオンのまたたくガラスの墓が欲しいな」などいい、昭和四十六年五月三十一日に息をひきとった。

河村医師はいう。

「頭は最後までしっかりしていて、亡くなる前の晩も話をしたんですが、『僕は異端といわれようが、これが一生の仕事なんだ。まだまだすることが残っている。もう一度生かしてくれ』と、くり返しいっておりました」

彼は日本性科学の殉教者であった。

高橋鉄が蒐集した厖大な性書の文献は、そのめぼしいものは死後、借金のかたとして散逸、残ったものも家が放火されて焼失してしまった。

檀(だん)一雄(かずお)（一九一二―一九七六）

「――私が破滅型と云う類型に入れられることは光栄だが、諸君はやがて、八十歳の破滅型を見るだろう」

と書いた作家檀一雄は、このように生来頑健を誇る上に、東京石神井(しゃくじい)の自宅には、サウナ風呂、ベルトマッサージャー、超音波浴中気泡マッサージ器、その他おびただしい健康器具を備えつけるほど健康に気をつかう人物であった。

彼は昭和四十九年七月に、九州博多沖の能古島(のこのしま)に家を買って暮していたが、身体の変調をおぼえ、精密検査を受けたところ肝硬変と診断された。

「能古島での父は、好きな酒も断ち、食餌療法と、肝臓に良いと思われることは、すべて心掛けた。五十肩とか、神経病とか、肝臓から来たものと言われた背中の痛みは、湿布して耐えていた」

と、長女の檀ふみは書く。

「それでも病状は一向にはかばかしくならず、背中の痛みは父を絞めあげ、とうとう自分から『病院へゆく』と言い出すまでになったのである。

その時、夏蜜柑大の癌が、父の右肺に巣食っていたとい

う」
昭和五十年夏のことで、彼は九大病院に入院した。
入院後、ベッドの上で、最後の作品『火宅の人』を口述し、完成した。
入浴も不可能となった彼のために、ヨソ子夫人がタオルで全身を拭いてやったが、パンツの内側に少しでもタオルがはいると怒った。
「歴戦の勇士だから大事にしなくっちゃ」と夫人が冗談にまぎらそうとしても拭かせず、立っているのがやっとという状態で、自分でシャワーを浴びようとし、「誰か来ないか、廊下で見張っていなさい」といって妻を追い出し、ひっくり返って、妻が介抱しようとしても「さわらないでくれ」と、さけんだ。（澤地久枝『檀ヨソ子』）
檀一雄は自分で破滅型と称するように、家庭を捨てて痴情の世界に耽溺し妻や子を苦しめるくせに、その妻や子に、異常に品のいいきれいな言葉で応答する人であったらしい。
十二月に入って、下半身が麻痺した。肺ガンが脊髄に転移したのである。
「危篤状態になってから、父は私達に手をさすらせた。私は初めて父の手に触れることが出来た。大きな暖かい手だった。静脈の上を心臓に向ってさする。スーッと走る私の指の後ろを、グイと盛り上がった血管が追いかけて来る。そういった生きている証しが、無性に嬉しかった」
と、当時二十一歳のふみは記す。
「妹と二人で、父の手をさすっている時、担当医が、病室を覗いた。父はかすれた聞き取り難い声で懸命に何か言おうとする。
『ええと、私のオヤジが九十四で、オフクロが……八十三……かな……ですから、私ももう少し頑張ってみます』」
三日後の昭和五十一年一月一日の夜が二日にはいったころ、ふみたちに「父は、とっても眠いんだから、もう寝たいんです」「とても苦しいです。とても眠いんだから、もう寝させて」といい、酸素吸入のマスクを力のない手で払いのけようとし、永遠の眠りにはいった。

武田泰淳（一九一二——一九七六）

武田泰淳は、昭和四十六年十一月、野間宏の『青年の環』の谷崎賞受賞パーティの席上で、脳溢血の発作を起して倒れ、静養したが、それ以後身体はもとより特に足が弱り出した。そして昭和五十一年九月二十一日、ついに自分一人では立つことが出来なくなった。

翌二十二日、彼は慈恵会医大病院に入院した。
それから十日目の十月二日、病院に見舞いにいった友人埴谷雄高に、武田夫人の百合子が低い声でいった。
「埴谷さん、誰にもいわない？……武田は癌なの。……」
それは肝臓ガンであった。埴谷は、入院前の武田のほとんど骨と皮ばかりの痩せかたを改めて思い出し、ショックを受けた。彼はむろん百合子夫人も、武田の病気を脳溢血の後遺症とばかり思っていたからであった。
そして百合子は、武田が、看病は妻と娘だけですること、埴谷、竹内好以外だれにも病気のことを知らせないこと、死んだら死顔はだれにも見せないこと、と命じたことをいった。
十月五日午前一時半、武田は酸素テントの中で、何の苦痛もなく息をひきとった。外にははげしい秋の雨がふり出していた。
その日午前、解剖の結果、ガンが原発したのは胃で、それが肝臓に転移したものと判明した。

書物の性質上、とりあげた人物の臨終に実際に立ち合われた方々の文章を多く引用ないし参考にせざるを得ませんでした。それらの諸著書諸文章に対して深く謝意を表するものです。

著者

人名索引

人間臨終図巻 上巻

一九八六年九月三〇日 第一刷
一九八八年二月二九日 第八刷

著　者　山田風太郎
発行者　荒井　修
発行所　徳間書店
　　　　東京都港区新橋四―一〇―一
　　　　郵便番号一〇五
　　　　電話　東京四三三―六二三一（代表）
　　　　振替　東京四―四四三九二
印刷所　本文・株式会社清水印刷所
　　　　カバー・真生印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社
定　価　二四〇〇円

〈編集担当　松岡妙子〉

© Fûtaro Yamada, Printed in Japan. 1986
乱丁・落丁本は本社またはお買求めの
書店にてお取替えいたします。

ISBN4-19-123320-3

人名索引

あ

愛新覚羅慧生　6
アイヒマン　292
青木繁　30
赤木圭一郎　8
明石元二郎　278
秋山真之　215
芥川龍之介　68
明智光秀　284
浅沼稲次郎　392
浅野内匠頭長矩　60
足利尊氏　245
足利義政　259
足利義満　210
安達二十三　304
阿南惟幾　314
姉小路公知　10
アベベ　134
甘粕正彦　270
天草四郎　3
荒木又右衛門　80
アラビアのロレンス　185
有島武郎　166
アリストテレス　381
有馬頼義　397
有吉佐和子　257
アレキサンダー大王　55
安藤広重　367
アンネ　2

い

井伊直弼　163
飯沼正明　33
池大雅　245
石川五右衛門　71
石川啄木　17
石田吉蔵　131
石田三成　110
石原莞爾　354
伊丹万作　178
市川団十郎・十一世　293
市川団十郎・初代　153
市川雷蔵　97
伊藤左千夫　201
伊藤整　420
伊藤整一　281
伊藤野枝　24
井原西鶴　221
今川義元　123
岩倉具視　310
岩崎弥太郎　224
巌本真理　255
巌谷小波　405

う

ヴァレンチノ　47
ヴィヴィアン・リー　273
ウェーバー　111
上杉謙信　189
上田敏　140
植村直己　150
ヴェルレーヌ　236
内田魯庵　370
梅川昭美　49
梅崎春生　219
梅原北明　169

え

江藤新平　113
エミリー・ブロンテ　38
江利チエミ　172

お

お市の方　71
大石内蔵助　152
大石誠之助　158
大石主税　1
大川橋蔵　283
大久保清　135
大久保利通　192
大河内伝次郎　417
大塩平八郎　153
大杉栄　96
太田道灌　258
大西滝治郎　269
大村益次郎　163
大山信子　6
岡倉天心　225
緒方洪庵　246
尾形光琳　309
岡本かの子　219
沖田総司　10
荻生徂徠　385
小栗上野介　123
小栗虫太郎　168
尾崎紅葉　74
尾崎放哉　126
小山内薫　184
織田作之助　61
織田信長　190
小津安二郎　356
尾上菊五郎・六代目　415
小原保　98

か

ガガーリン　63
葛西善蔵　129
梶山季之　171
和の宮　45
加藤清正　198
狩野芳崖　343
カフカ　125
カポネ　193
カミュ　188
蒲生氏郷　101
鴨長明　362
河合栄治郎　249
河井継之助　124
川上音二郎　183
川上宗薫　379
川路利良　143

川島芳子 133
管野すが 38

き

菊池寛 353
岸田国士 416
岸田劉生 97
木曾義仲 35
北一輝 267
喜多川歌麿 245
北原白秋 300
北村透谷 16
木戸孝允 154
木下杢太郎 352
木村艸太 376
キャプテン・キッド 222
清河八郎 57
吉良義央 364
キリスト 52

く

空海 362
九条武子 128
楠木正成 137
楠木正行 8
国枝史郎 280
国木田独歩 84
国定忠治 113
雲井竜雄 15
クラーク博士 342
栗林忠道 268
グレース・ケリー 256
クレオパトラ 101
黒岩涙香 312
黒田清隆 343
黒田如水 309
クロムウエル 321

け

ゲーリー・クーパー 356
ゲーリング 251
ケネディ 180
玄奘三蔵 382

こ

幸徳秋水 114
孝明天皇 66
ゴーギャン 275
ゴーゴリ 141
越路吹雪 295
後醍醐天皇 221
小平義雄 160
児玉源太郎 263
児玉隆也 100
ゴッホ 81
近衛文麿 271
小林一茶 409
小林多喜二 40
五味康祐 335
小村寿太郎 287
コルベ神父 187
コロンブス 337

コント 324
近藤勇 60

さ

西郷隆盛 213
西東三鬼 393
斎藤道三 382
斎藤緑雨 83
ザヴィエル 173
佐伯祐三 39
坂口安吾 208
坂本九 161
坂本竜馬 52
相楽総三 28
佐久間象山 246
佐久間勉 46
笹川繁蔵 80
佐々木只三郎 66
真田幸村 190
沢田正二郎 88
沢村栄治 22
サン=テグジュペリ 159
山東京伝 274
三遊亭円朝 369
三遊亭歌笑 49

し

シーザー 306
椎名麟三 395
ジェームス・ディーン 12
シェクスピア 232
ジェラール・フィリップ 91
司馬遷 320
柴田勝家 363
柴田錬三郎 377
ジプシー・ローズ 53
島木赤彦 216
島田虎之助 95
島津斉彬 199
下山定則 195
シャーロット・ブロンテ 104
ジャンヌ・ダルク 5
シューベルト 44
シューマン 176
俊寛 79
ジョイス 330
正田昭 116
聖徳太子 189
諸葛孔明 243
ショパン 103
ジョン・レノン 120
ジンギスカン 336
秦の始皇帝 198

す

菅原道真 307
スコット 158
鈴木三重吉 265
スタンダール 322
スティヴンソン 154
ストリンドベリ 403
スメタナ 341

せ

関屋敏子 90

そ

園井恵子 47
ゾラ 386
ゾルゲ 205
孫文 327

た

大正天皇 184
大塔宮護良親王 21
大松博文 305
平清盛 398
高杉晋作 22
高野長英 175
高橋お伝 29
高橋和巳 118
高橋鉄 422
高見沢遠治 86
高見順 317
高山右近 399
高山樗牛 45
高山彦九郎 175
滝田樗陰 145
滝廉太郎 12
武田信玄 231
武田泰淳 424
竹久夢二 217
太宰治 106
田中新兵衛 7
谷内六郎 358
種田山頭火 313
田宮二郎 149
為永春水 246
田山花袋 329
檀一雄 423
ダンテ 284
ダントン 65

ち

チエホフ 156
千葉周作 367
チャイコフスキー 247
張作霖 279

つ

ツヴァイク 373
塚越賢爾 148
辻潤 351
辻政信 334
円谷幸吉 25

て

デカルト 259
寺田寅彦 298
寺山修司 196
天一坊 37

と

ドヴォルザーク 402
道元 244
東条英機 413
唐人お吉 200
桃中軒雲右衛門 144
戸川猪佐武 359
徳川綱吉 401
徳田球一 333
徳冨蘆花 328
ドストエフスキー 341
ドビュッシー 288
杜甫 307
豊田佐吉 404
豊臣秀次 21
豊臣秀吉 383
豊臣秀頼 8
トロツキー 372

な

直木三十五 147
中江兆民 260
中江藤樹 111
中川一郎 319
中里介山 331
永田鉄山 229
長塚節 76
永野一男 58
中野正剛 302
中原中也 42
中谷宇吉郎 394
中山忠光 6
南雲忠一 303
夏目漱石 202
夏目雅子 26
ナポレオン 233
難波大助 14

に

新島襄 183
ニーチェ 286
ニコライ二世 214
西竹一 148
日蓮 337

ね

鼠小僧次郎吉 65
ネルソン 182
ネロ 43

の

ノーベル 401
乃木希典 403
野口雨情 406
野口英世 238

は

パークス 298
ハイネ 324
バイロン 73

萩原朔太郎 289
橋本左内 13
芭蕉 211
パスカル 102
花井お梅 248
浜口雄幸 371
林子平 274
林芙美子 195
速水御舟 130
原田甲斐 233
原民喜 179
バルザック 223
阪東妻三郎 242

ひ

樋口一葉 11
久生十蘭 282
土方歳三 61
菱田春草 85
ビゼー 81
ヒトラー 291
火野葦平 254
平賀源内 223
広瀬武夫 75

ふ

フィヒテ 233
プーシュキン 94
フーディニ 238
フェノロサ 277
フェルミ 253
溥儀 377
福永武彦 378
藤田小四郎 9
藤田東湖 199
藤村操 3
藤原審爾 408
藤原道長 362
二葉亭四迷 164
双葉山 294
フットレル 85
ブラームス 411
プルースト 227
プレスリー 140
フローベール 325

へ

ヘーゲル 365
ベートーヴェン 296
ベーブ・ルース 252
ヘミングウエイ 393
ベルツ 412
ペルリ 411

ほ

北条高時 37
北条時宗 56
ポー 112
ボードレール 177
朴正熙 396
星亨 225
細川ガラシヤ 72

堀辰雄 207
本間雅晴 332

ま

マーガレット・ミッチェル 206
牧逸馬 70
マキノ省三 228
マキャヴェリ 308
正岡子規 67
マジェラン 122
マゾッホ 326
マタ・ハリ 125
松井須磨子 57
マックス・ウェーバー 288
マネ 224
マホメット 360
マラー 212
マリー・アントアネット 93
マリリン・モンロー 77

み

三浦按針 285
三浦環 390
三木清 193
三島由紀夫 169
水野忠邦 297
溝口健二 315
水戸斉昭 338
源実朝 20
源為朝 44
源義経 36
源頼朝 230
蓑田胸喜 240
宮城道雄 391
宮崎滔天 227
宮沢賢治 88
宮本武蔵 364
宮本百合子 241
三好達治 417
ミレー 368

む

向田邦子 242
ムソリーニ 388
陸奥宗光 247
村山槐多 9

め

明治天皇 344
メンデル 385
メンデルスゾーン 95

も

モーツァルト 64
モーパッサン 143
モディリアニ 76
森有礼 138
森鷗外 347
森恒夫 34
森雅之 396
森蘭丸 2

モンテーニュ 320

や

八百屋お七 1
柳生十兵衛 141
柳沢吉保 285
山岡鉄舟 236
山口二矢 4
山口良忠 63
山崎晃嗣 20
山下清 209
山下奉文 374
山田長政 174
山中貞雄 31
山本五十六 330
山本周五郎 418
山本宣治 115

ゆ

由比正雪 174
夢野久作 186

よ

夜嵐お絹 24
楊貴妃 78
横井小楠 339
横川省三 105
与謝野晶子 413
吉田松陰 27
吉田東伍 263
吉田満 294
淀君 190
ヨハン・シュトラウス・父 162

ら

頼山陽 235
ラヴェル 387
ラスプーチン 165
ラファエロ 80
ラフカディオ・ハーン 262

り

リヴィングストン 339
力道山 109
李白 361
柳亭種彦 323
リルケ 228
リンカーン 286

る

ルイ十六世 102
ルーズヴェルト 406
ルーベンス 399

れ

レーニン 264
レンブラント 400

ろ

ロートレック 82
ローレンス 167
魯迅 279
ロベスピエール 72
ロンメル 250

わ

ワイルド 155
若松善紀 54
若山牧水 145
渡辺崋山 191